

飯田市

ONIGAMA

鬼釜遺跡

KAZAHARI

風張遺跡

KANNOMINE

神之峯城跡

一般国道 474 号飯喬道路埋蔵文化財発掘調査報告書 6

—飯田市内その6—

2016. 3

国土交通省中部地方整備局
長野県埋蔵文化財センター



鬼釜遺跡 全景



鬼釜遺跡出土 縄文土器



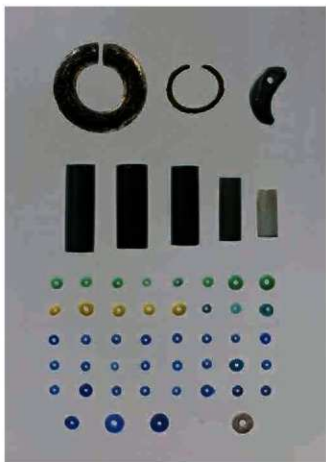
神之峯城跡 遠景



神之峯城跡出土 古瀬戸製品・大甕製品



鬼冨古墳 全景



鬼冨古墳出土 玉類



鬼冨古墳 馬の理券土坑出土 馬具

はじめに

長野県の最南端に位置する飯田市は、古くは東山道、近世以降は三州街道や遠州街道などの陸運や天竜川の水運に恵まれた交通の要衝です。そこには、古代東国の起点となる史跡恒川官衙遺跡や重要無形文化財霜月祭りをはじめとする民俗芸能など、三河・遠江地方と信濃との人や物の動きの歴史を考える上で大切な文化財が数多く残されてきました。

今般、長野・静岡・愛知の県境を越えて整備を進めている三遠南信自動車道は、地域間の交流によって新たな連携を促進し、広域的な経済・文化圏を形成することが期待されています。

長野県埋蔵文化財センターは、三遠南信自動車道の一部である飯喬道路の建設に先立ち事業用地内の埋蔵文化財を保護するため、平成11年度から発掘調査を行ってまいりました。本書は平成21・23～25年度に発掘作業を実施した飯田市上久堅地区の鬼釜遺跡、風張遺跡、神之峯城跡の成果を報告するものです。

調査内容の詳細につきましては本書をご覧くださいと思いますが、竜東地区初見の鬼釜古墳殉葬馬墓、神之峯城跡の中腹や風張遺跡に点在する建物跡と城跡との関係など、今回の調査によって得られた資料と情報が、今後、多方面で十分に活用されることを願ってやみません。

飯喬道路の建設に伴う発掘調査は本報告をもって完了となります。最後になりましたが、発掘から整理作業、本報告書の刊行に至るまで、深いご理解とご協力をいただきました国土交通省中部地方整備局の方々、長野県教育委員会や長野県立歴史館、飯田市、飯田市教育委員会、地権者や区長をはじめとする地元住民の皆様、そして発掘作業・整理作業に従事協力いただいた多くの方々に、心から敬意と感謝の意を表する次第であります。

例 言

- 1 本書は、長野県飯田市上久堅に所在する鬼釜遺跡、風張遺跡、神之峯城跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は国道474号（飯喬道路）建設工事に伴う記録保存調査として、国土交通省中部地方整備局からの委託事業として一般財団法人長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センターが実施した。委託契約等については第1章を参照願いたい。
- 3 遺跡の概要は、長野県埋蔵文化財センター刊行の『長野県埋蔵文化財センター年報』28～31並びに雑誌『伊那』（河西2012、2013*）で紹介しているが、本書の記述をもって本報告とする。
- 4 本書で使用した地図は、国土地理院発行の地形図（「時又」1：50,000、「時又」「上久堅」1：25,000）、飯田市都市計画図（1：2,500、承認番号27飯地計第417号）、国土交通省中部地方整備局飯田国道事務所作成計画平面図（1：1,000）をもとに作成した。また、第5図地質図は（社）中部建設協会発行『天竜川上流域地質図（1：50,000）』をもとに作成した。
- 5 本書で扱っている国土座標は、国土地理院の定める平面直角座標系第Ⅷ系の原点を基準点としている。座標値は日本測地系（旧測地系）を用いている。
- 6 発掘調査にあたっては、以下の機関・諸氏に業務委託もしくは協力を得た。（敬称略）
測量・空中写真撮影：（株）みずず総合コンサルタント、（有）M2クリエイション
自然科学分析：バリノサーヴェイ（株）、（株）古環境研究所
放射性炭素年代測定：（株）加速器分析研究所、バリノサーヴェイ（株）、（株）パレオ・ラボ
土器付着物成分分析（赤外分光分析、炭素・窒素同位体分析）：（株）古環境研究所
土器実測：（有）アルケリサーチ
金属製品保存処理：（株）文化財ユニオン、長野県立歴史館
古墳時代土器指導：長野県文化財保護審議会 史跡考古部会 笹澤 浩
中世土器・陶磁器指導：愛知学院大学教授 藤澤良祐
石器・石材鑑定：信州大学教授 原山 智
馬具指導：朝日新聞社 宮代栄一
城郭遺跡調査指導：滋賀県立大学教授 中井 均
東京都豊島区郷土博物館学芸員 橋口定志
飯田市上郷考古博物館前館長 岡田正彦
地形・地質指導：伊那谷自然友の会理事 松島信幸
建物跡指導：飯田市歴史研究所元客員研究員 金澤雄記
人骨・獣骨鑑定：京都大学名誉教授 茂原信生、総合研究大学院大学准教授 本郷一美
獨協医科大学技術職員 櫻井秀雄
遺物写真撮影：信毎書籍印刷（株）
- 7 発掘調査及び報告書刊行にあたり、下記の方々・機関にご指導、ご協力をいただいた。お名前を記して感謝の意を表す。（50音順敬称略）
市澤英利 伊坪達郎 風間栄一 小池茂彦 小林正春 坂井勇雄 笹本正治 澁谷恵美子 下平博之
田中正治郎 田畑重弘 寺内隆夫 時枝 務 中澤克昭 中野晴久 中村由克 羽生俊郎 馬場保之
原 董 松井 章 松井一明 溝口彰啓 守矢昌文 山下誠一 山本智子 吉川金利 吉川 豊
長野県遺跡指導委員（小野 昭 会田 進 工業善通 笹澤 浩 丸山敏一郎）

長野県文化財審議委員 史跡考古部会（小野 昭 会田 進 笹澤 浩）
長野県立歴史館 飯田市上郷考古博物館 飯田市教育委員会 飯田市美術博物館
飯田市上久堅自治振興センター 飯田市下久堅自治振興センター 飯田市龍江自治振興センター
飯田市立上久堅小学校

- 8 神之峯城跡出土人骨については、京都大学名誉教授茂原信生氏から玉稿を賜った（第5章第6節）
- 9 発掘作業の担当者、発掘作業員、整理作業員は第1章第2節に記載した。
- 10 本書の執筆分担は下記のとおりであり、調査部長平林 彰、調査第2課長岡村秀雄が校閲した。
河西克造 第1章、第2章、第3章第1・2・5節、第3節2～4、第6節1・3、第4章第1～
3・5・6節、第4節1、第5章第1～4・7・8節、第5節1、第6章
水澤教子 第3章第3節1、第3節2～4の草稿と「出土遺物」部分、第4節1～5、第6節2、
第4章第4節2～4、第5章第5節2～5
- 11 本書に添付したDVDには、以下の内容を収録した。
科学分析報告書、遺構一覧表、遺構番号対比表、遺物観察表、中世土器・陶磁器組成表

※第3章の「引用・参考文献」参照。

凡 例

- 1 本書では、遺跡別に第3章～第5章を起こし、遺跡の概要、遺構と遺物、各遺跡の総括を小結とした。個別遺構図と遺物図ならびに表は章中に掲載し、遺構の一部と遺物観察表(別表)、写真図版(P-L)は巻末に一括して掲載した。
- 2 本書に掲載した実測図及び遺物写真の縮尺は、原則として下記のとおりである。他についても当該箇所のスケールの上に表示している。

(1) 全体図関係

・縮尺

遺跡位置図 1:50,000 基準線設定図 1:4,000 1:6,000 地質図 1:60,000

遺跡分布図 1:30,000 遺跡範囲図 1:4,000 1:8,000

調査範囲図・地形区分図 1:2,000

地区設定図 1:3,000 基本土層図 1:60

遺構全体図 1:100 1:200 1:500 1:800 トレンチ配置図 1:500

(2) 個別遺構図関係

・縮尺

竪穴建物跡 1:40 1:60 1:80 土坑 1:30 1:40 1:60 掘立柱建物跡 1:80

周溝 1:80 炉等竪穴建物内施設 1:30 1:40 溝跡 1:60 1:80

遺物包含層分布図 1:100

遺物出土状況図 1:20 1:30 1:40 1:60

・スクリーントーン

下記のとおり使用した。これ以外の場合は、該当箇所て説明してある。

焼土・被熱部分  火床  炭・灰分布  地山 

(3) 遺物実測図

・縮尺

土器・陶磁器 1:4 土器拓影・土器破片実測 1:3 土偶・土製品 1:3

石鏃・石匙・石錐・搔器・削器等小形石器 2:3 剥片 2:3 1:2



打製石斧・磨製石斧・横刃形石器・凹石・敲石・刃器・磨石・石錘 1:2

礫石器 1:3 硯 1:2 籠状垂飾 2:3 玉類 1:1

金属製品 1:2 青銅製品 1:1 1:2 銭貨 1:1 木製品 1:6

・スクリーントーン








下記のとおり使用した。これ以外の場合は、該当箇所で説明してある。

①土器 黒色処理  軸  須恵器断面  陶磁器断面 

土器片加工品の磨面は矢印で記載。

②石器 摩耗  研磨面  自然面  節理面 
線状痕  敲打痕  発掘調査による傷（ガジリ） 

- 基本土層及び遺構埋土等の色調は、『新版 標準土色帖2005年版』による。
- 竪穴建物跡、掘立柱建物跡、土坑等遺構の面積はプランメーターで測定した。
- SK一覧表等で用いた断面分類名は以下の通りである。

a1種		底部は平坦で、壁はほぼ直立気味に立ち上がり、深さは比較的浅い。
a2種		底部は平坦で、壁はほぼ直立気味に立ち上がる。
b1種		底部は湾曲し、壁がなだらかに立ち上がり、深さは比較的浅い。
b2種		底部は湾曲し、壁がなだらかに立ち上がる。
b3種		底部は湾曲し、壁がほぼ直立気味に立ち上がる。
c種		底部は狭く、断面が「V」字状になる。
d種		底部は狭く、中間にテラスを持つもの。

- 遺物の報告番号は、遺物実測図・遺物写真図版とも共通する。なお、図化せず写真図版に掲載した遺物は、管理番号を用いた。
- 土器の時期
出土遺物のうち縄文時代に属するものの時期区分は2013一般社団法人日本考古学協会2013年度長野大会『研究発表資料集 文化の十字路信州』に準拠する。中世陶磁器（古瀬戸製品、大窯製品）の小期名と時期は、藤澤良祐2002『瀬戸・美濃大窯編年の再検討』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10輯、藤澤良祐2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院、を基準とする。
- 遺物写真

原則としては遺物図とおおよそ同一縮尺であるが、任意縮尺にしているものもある。ただし鬼釜遺跡の古墳時代以前の土器破片は原則1/4とした。なお、写真図版では土器・石器・木製品といった種別でまとめて掲載した。

目次

巻頭図版

はじめに

例言

凡例

目次

挿図目次

挿表目次

別表目次

写真図版目次

第1章 調査の経緯と方法	1
第1節 発掘調査に至る経緯	1
1 三遠南信自動車道の建設計画	1
2 埋蔵文化財の保護協議と長野県教育委員会による分布調査	1
3 発掘届と発掘の指示	1
4 埋文センターによる発掘調査と受委託契約	1
第2節 発掘調査・整理作業の体制と方法	4
1 体制	4
2 発掘調査における記録の方法	4
(1) 遺跡の名称と遺跡記号 (2) 調査区(グリッド)の設定と略号	
(3) 遺構名称と遺跡記号 (4) 測量と写真撮影	
(5) 遺跡の公開	
3 整理作業の経過	7
(1) 基礎整理作業 (2) 本格整理作業	
(3) 報告書の作成 (4) 埋蔵文化財包蔵地の変更への対応	
第2章 遺跡周辺の環境	9
第1節 遺跡の位置と遺跡周辺の地理的環境	9
第2節 遺跡周辺の歴史的環境	11
1 旧石器時代	11
2 縄文時代	11
3 弥生時代	11
4 古墳時代	12
5 奈良・平安時代	12
6 中世	13
7 近世(織豊期以降の竜東)	13
第3章 鬼釜遺跡	19
第1節 遺跡と調査の概要	19
1 遺跡の概観	19

	(1) 遺跡範囲と地形 (2) 過去の調査	
2	調査の概要	19
	(1) 確認調査 (2) 調査の課題 (3) 調査の方法	
3	調査経過	25
第2節	基本土層	29
第3節	遺構	38
1	縄文時代	38
	(1) 概要 (2) 竪穴建物跡 (3) 土坑 (4) 遺物包含層での遺物出土状況	
2	弥生時代	49
	(1) 概要 (2) 竪穴建物跡	
3	古墳時代	50
	(1) 概要 (2) 古墳 (3) 土坑	
4	平安時代以降	63
	(1) 概要 (2) 竪穴建物跡 (3) 掘立柱建物跡 (4) 土坑 (5) 溝跡	
第4節	遺物	83
1	土器・陶磁器	83
	(1) 概要 (2) 縄文時代 (3) 弥生時代 (4) 古墳時代 (5) 古代・中世 (6) 近世以降	
2	土製品	90
	(1) 概要 (2) 縄文時代 (3) 古墳時代	
3	石器	107
	(1) 石器群の概要 (2) 石器の器種別概要	
4	石製品	113
	(1) 概要 (2) 縄文時代 (3) 古墳時代	
5	金属製品	130
	(1) 概要 (2) 古墳時代 (3) 古代 (4) 中近世	
第5節	科学分析	134
1	分析目的	134
2	分析試料・結果概要	134
	(1) 土壌分析について (2) 放射性炭素年代測定について	
第6節	小結	137
1	自然堤防と低地の土地利用について	137
2	縄文中期後葉の様相	137
3	鬼釜古墳について	141
	(1) 鬼釜古墳に関する既存資料と今回の発掘成果との関連 (2) 周溝内の土坑(SK174)について (3) 天竜川左岸における6世紀の古墳と馬の埋葬土坑の発見について	
第4章	風張遺跡	149
第1節	遺跡と調査の概要	149
1	遺跡の概観	149

	(1) 遺跡範囲と地形	
2	調査の概要	149
	(1) トレンチ調査(確認調査) (2) 本調査 (3) 報告書の記述について	
3	調査経過	151
第2節	基本土層	153
第3節	遺構	160
1	中世以降	160
	(1) 概要(2) 掘立柱建物跡(3) 竪穴建物跡(4) 土坑(5) 溝跡	
第4節	遺物	180
1	土器・陶磁器	180
2	土製品	180
3	石器・石製品	183
4	金属製品	183
5	木製品	184
6	自然遺物	184
第5節	科学分析	187
1	分析目的	187
2	分析試料・結果概要	187
	(1) 土壌分析について (2) 放射性炭素年代測定と樹種同定について	
	(3) 赤外分光分析と炭素・窒素安定同位体比分析について	
第6節	小結	190
第5章	神之峯城跡	193
第1節	遺跡と調査の概要	193
1	遺跡の概観	193
	(1) 遺跡範囲と地形 (2) 神之峯城跡についての記録、伝承	
	(3) 神之峯城跡の現状と過去の調査	
2	調査の概要	194
	(1) 調査区の設定と安全対策 (2) 遺跡踏査と平坦地の記録方法 (3) 遺構確認調査(トレンチ調査) (4) 調査課題の設定 (5) 平坦地の調査結果	
第2節	1区の遺構	199
1	概要	199
2	基本土層	199
3	遺構	210
	(1) 概要(2) 礎石建物跡(3) 掘立柱建物跡(4) 墓坑(5) 土坑(6) 溝跡	
	(7) 焼土跡(8) 石列(9) 柵列	
第3節	2区の遺構	235
1	概要	235
2	基本土層	235
3	遺構	235
	(1) 概要(2) 溝跡(3) 石組み遺構(4) 土坑	

第4節	3区の遺構	252
1	概要	252
2	基本土層	252
3	遺構	262
	(1) 概要 (2) 掘立柱建物跡 (3) 土坑 (4) 溝跡 (5) 土器集中 (6) 焼土跡	
第5節	遺物	275
1	土器・陶磁器	275
	(1) 概要 (2) 1区 (3) 2区 (4) 3区	
2	土製品	282
3	石器	282
4	石製品	282
5	金属製品	286
	(1) 概要 (2) 中世以降	
第6節	神之峯城跡 SK01出土の人骨について	289
第7節	科学分析	292
1	分析目的	292
2	分析試料・結果概要	292
	(1) 土壌分析について (2) 放射性炭素年代測定について (3) 赤外分光分析と炭素・窒素同位体分析について	
第8節	小結	296
1	調査対象地の土地利用と変遷	296
2	「知久十八ヶ寺」と建物跡	297
3	中腹の遺構群からみた神之峯城跡	297
第6章	総括	303

別表
写真図版
抄録
奥付

挿図目次

第1図	飯高道路と発掘調査遺跡の位置	2	第38図	SB02 炭化物・焼土分布図、SB03 遺構図	67
第2図	鬼釜遺跡 測量基準線設定図	5	第39図	SB05 遺構図	68
第3図	風張遺跡 測量基準線設定図	6	第40図	SB09 遺構図・カマド図	70
第4図	神之峯城跡 測量基準線設定図	7	第41図	SB10 遺構図・カマド図	71
第5図	地質図	10	第42図	SB11 遺構図	72
第6図	遺跡分布図	17	第43図	SB17 遺構図	73
第7図	鬼釜遺跡・風張遺跡 遺跡範囲図	20	第44図	ST01・03・04・08 遺構図	75
第8図	鬼釜遺跡 調査範囲図	21	第45図	ST02・09・11・12 遺構図	76
第9図	鬼釜遺跡 地形区分図	23	第46図	ST07・14 遺構図	77
第10図	基本土層図	31	第47図	ST13・15 遺構図	78
第11図	遺構全体図1	32	第48図	ST17 遺構図	79
第12図	遺構全体図2	33	第49図	ST1001、SB04 遺構図	80
第13図	遺構全体図3	34	第50図	SD01・02 遺構図	82
第14図	遺構全体図4	35	第51図	土器・陶磁器の種類別重量	83
第15図	遺構全体図5	36	第52図	出土総量に対する掲載率	83
第16図	遺構全体図6	37	第53図	土器実測図1	91
第17図	SB08 遺構図	39	第54図	土器実測図2	92
第18図	SB08 遺物出土状況図	40	第55図	土器実測図3	93
第19図	SB14 遺構図	41	第56図	土器実測図4	94
第20図	SB14 土器敷が 遺物出土状況図	42	第57図	土器実測図5	95
第21図	SB16 遺構図	44	第58図	土器実測図6	96
第22図	SK175・185・186・187・188 遺構図	45	第59図	土器実測図7	97
第23図	SK192 遺構図・遺物出土状況図	47	第60図	土器実測図8	98
第24図	鬼釜古墳 IV層分布図	48	第61図	土器実測図9	99
第25図	SB13 遺構図	50	第62図	土器実測図10	100
第26図	鬼釜古墳 III 1層分布図	51	第63図	土器実測図11	101
第27図	SM01 遺構図	53	第64図	土器実測図12	102
第28図	SM01 周溝 遺物出土状況図1	55	第65図	土器実測図13	103
第29図	SM01 周溝 遺物出土状況図2	56	第66図	土器実測図14	104
第30図	SM01 周溝 遺物出土状況図3	57	第67図	土器実測図15	105
第31図	SM01 周溝 遺物出土状況図4	58	第68図	土器実測図16・土製品実測図	106
第32図	SK174 遺構図・遺物出土状況図	60	第69図	剥片石器の器種別構成	110
第33図	SM01 近代以降の盛土 遺物出土状況図	61	第70図	縄文時代の遺構から出土した石器の比率	110
第34図	SX01～04 遺物出土状況図	62	第71図	横刃形石器の石材構成	110
第35図	SB01 遺構図	64	第72図	打製石斧の石材構成	110
第36図	SB02 遺構図	65	第73図	刃器の石材構成	110
第37図	SB02 カマド図	66			

第74図	磨製石斧の石材構成	110	第109図	ST06、SD04、SF06 遺構図	165
第75図	石器実測図1(石鏃・石錐・石匙)	114	第110図	ST07・12、SD21 遺構図	166
第76図	石器実測図2(搔器・削器・楔形石器・ 剥片)	115	第111図	ST08、SD14・17 遺構図	167
第77図	石器実測図3(打製石斧)	116	第112図	ST10・11、SD15・16・18・19 遺構図	169
第78図	石器実測図4(打製石斧)	117	第113図	ST1001・1002・1003 遺構図	171
第79図	石器実測図5(打製石斧・横刃形石器)	118	第114図	ST1004、SF02 遺構図	172
第80図	石器実測図6(横刃形石器)	119	第115図	SB01 遺構図	173
第81図	石器実測図7(横刃形石器)	120	第116図	SK388・392・393、SD22・23 遺構図1	176
第82図	石器実測図8(横刃形石器)	121	第117図	SK388・392・393、SD22・23 遺構図2	177
第83図	石器実測図9(横刃形石器)	122	第118図	SK02・03・17・28・46・49・50・180・ 187 遺構図	178
第84図	石器実測図10(横刃形石器)	123	第119図	SK177・181・182・183・184・265・ 266・1003・1004 遺構図	179
第85図	石器実測図11(挟入打製石包丁・刃器)	124	第120図	土器・陶磁器実測図	181
第86図	石器実測図12(磨製石斧)	125	第121図	土製品実測図(土玉)	182
第87図	石器実測図13(磨製石斧・敲石・剥片)	126	第122図	石器実測図(石鏃・打製石斧・礫石器)	182
第88図	石器実測図14(剥片・磨石・凹石)	127	第123図	金属製品実測図(煙管・銭貨)	183
第89図	石器実測図15(敲石・石錐)	128	第124図	木製品実測図1	185
第90図	石製品・玉類実測図(筒状垂飾・勾玉・ 管玉・ガラス小玉・白玉)	129	第125図	木製品実測図2	186
第91図	金属製品実測図1(雲珠・鞞金具・面繫 金具・鉄鏃・刀・刀子)	132	第126図	遺構配置図	191
第92図	金属製品実測図2(刀子・耳環・銭貨・ 煙管)	133	第127図	神之峯城跡 遺跡範囲図	194
第93図	SK174出土雲珠復元展開図	133	第128図	神之峯城跡 地区設定図	195
第94図	鬼釜遺跡 遺構変遷図	138	第129図	神之峯城跡 調査範囲図	197
第95図	鬼釜遺跡 縄文集落変遷図	140	第130図	1区平坦地認識図	200
第96図	鬼釜遺跡 縄文土器変遷図	140	第131図	1区現況測量図	201
第97図	上久堅小学校所蔵の鬼釜古墳出土遺物	142	第132図	1区トレンチ配置図1	202
第98図	馬具を伴う馬骨の検出状況と埋葬時の 復原案(桃崎1993)	144	第133図	1区トレンチ配置図2	203
第99図	風張遺跡 調査範囲図	150	第134図	1区基本土層図	204
第100図	基本土層図	154	第135図	1区1調査面・2調査面遺構全体図1	205
第101図	遺構全体図1	155	第136図	1区1調査面・2調査面遺構全体図2	206
第102図	遺構全体図2	156	第137図	1区1調査面・2調査面遺構全体図3	207
第103図	遺構全体図3	157	第138図	1区1調査面・2調査面遺構全体図4	208
第104図	遺構全体図4	158	第139図	1区3調査面・4調査面遺構全体図	209
第105図	遺構全体図5	159	第140図	ST02、SD05・10 遺構図1	211
第106図	ST01、SK128、SF01・02 遺構図	161	第141図	ST02、SD05・10 遺構図2	212
第107図	ST02・04、SD07 遺構図	162	第142図	1区V層・VI層遺物分布図	213
第108図	ST05・13、SF07 遺構図	164	第143図	ST01・03~06 遺構図	215
			第144図	SK01・02・84・85・87 遺構図	217

第145図	SK92・94・96～101・103～106	遺構図	218	第179図	3区基本土層図	255	
第146図	SK107～115	遺構図	219	第180図	3区1面・2面遺構全体図	256	
第147図	SK03～09・14	遺構図	220	第181図	3区1調査面遺構全体図1	257	
第148図	SK10～12	遺構図	221	第182図	3区1調査面遺構全体図2	258	
第149図	SK15～20	遺構図	222	第183図	3区1調査面遺構全体図3	259	
第150図	SK28・38・125	遺構図	223	第184図	3区2面遺構全体図1	260	
第151図	SK119・126・141・142・144	遺構図	224	第185図	3区2面遺構全体図2	261	
第152図	SD03・SH02	遺構図	225	第186図	ST301・303	遺構図	263
第153図	SD04・07	遺構図	226	第187図	ST302・304	遺構図	264
第154図	SD06	遺構図	227	第188図	ST305・306・310	遺構図	265
第155図	SD08・09・11	遺構図1	228	第189図	ST307・314	遺構図	267
第156図	SD08・09・11	遺構図2	229	第190図	SK301・307・316・318・393・394・474 ・475	遺構図	268
第157図	VII層下層トレンチ	遺構図	231	第191図	SK351・476・544	遺構図	269
第158図	SF01	遺構図	232	第192図	SK540	遺構図	270
第159図	SH01	遺構図	233	第193図	SK500・544・581・611	遺構図	271
第160図	SA01	遺構図	234	第194図	SD305	遺構図	272
第161図	2区現況測量図		236	第195図	SD1001・SH302	遺構図	273
第162図	2区平坦地認識図		236	第196図	土器・陶磁器実測図1		278
第163図	2区トレンチ配置図		237	第197図	土器・陶磁器実測図2		279
第164図	2区基本土層図		238	第198図	土器・陶磁器実測図3		280
第165図	2区遺構全体図1		239	第199図	土器・陶磁器実測図4		281
第166図	2区遺構全体図2		240	第200図	土製品実測図(瓦片加工円板)		282
第167図	2区遺構全体図3		241	第201図	石器実測図(石鏃・打製石斧)		282
第168図	SD201	遺構図1	243	第202図	石製品実測図1(硨・砥石)		284
第169図	SD201	遺構図2	244	第203図	石製品実測図2(砥石・こも扁石)		285
第170図	SD201	遺構図3	245	第204図	金属製品実測図1(釘・刀子・引手金具 ・簪・煙管)		287
第171図	SD201	遺構図4	246	第205図	金属製品実測図2(銭貨)		288
第172図	SD201	遺構図5	247	第206図	神之峯城跡 中世遺構 確認地点		299
第173図	SD201	遺構図6	248	第207図	神之峯城跡 中世遺構 発見地点と地籍図 の照合図		300
第174図	SD201	遺構図7	249	第208図	鬼釜遺跡・風張遺跡・神之峯城跡 中世遺構確認地点		304
第175図	SD201	遺構図8	250				
第176図	SH201・SK201	遺構図	251				
第177図	3区平坦地認識図		253				
第178図	3区トレンチ配置図		254				

挿表目次

第1表	文化財保護法の手続き	3	第14表	集落の時期	139
第2表	受委託契約一覧	3	第15表	科学分析一覧表	187
第3表	調査・整理体制一覧	4	第16表	科学分析結果表1	188
第4表	遺跡地名表	15	第17表	科学分析結果表2	188
第5表	鬼釜遺跡 土器・陶磁器等出土量	84	第18表	放射性炭素年代測定結果表	189
第6表	石器出土数(含石製品)	107	第19表	樹種同定結果表	189
第7表	遺構別各器種出土数	108	第20表	窒素・炭素安定同位体分析結果表	189
第8表	遺構別各石材出土数	108	第21表	平坦地の調査結果表	198
第9表	石材別各器種出土数	109	第22表	科学分析一覧	292
第10表	科学分析一覧表	134	第23表	科学分析結果表1	293
第11表	科学分析結果表1	135	第24表	科学分析結果表2	294
第12表	科学分析結果表2	136	第25表	炭素・窒素安定同位体分析結果	294
第13表	放射性炭素年代測定結果表	136			

別表目次

第1表	鬼釜遺跡 竪穴建物跡一覧	309	第12表	風張遺跡 土製品観察表	340
第2表	鬼釜遺跡 掘立柱建物跡一覧	310	第13表	風張遺跡 石器観察表	340
第3表	鬼釜遺跡 土器・陶磁器観察表	311	第14表	風張遺跡 金属製品観察表	340
第4表	鬼釜遺跡 土製品・土器片加工品観察表	330	第15表	風張遺跡 木製品観察表	341
第5表	鬼釜遺跡 石器観察表	331	第16表	神之峯城跡 掘立柱建物跡一覧	342
第6表	鬼釜遺跡 石製品観察表	333	第17表	神之峯城跡 土器・陶磁器観察表	342
第7表	鬼釜遺跡 玉類観察表	334	第18表	神之峯城跡 瓦製品観察表	352
第8表	鬼釜遺跡 金属製品観察表	335	第19表	神之峯城跡 石器観察表	352
第9表	風張遺跡 竪穴建物跡一覧	336	第20表	神之峯城跡 石製品観察表	352
第10表	風張遺跡 掘立柱建物跡一覧	336	第21表	神之峯城跡 金属製品観察表	353
第11表	風張遺跡 土器・陶磁器観察表	337			

写真図版目次

PL1	鬼釜遺跡 鬼釜遺跡遠景・調査前風景、SB08完掘・出土状況	出土状況、IV1層遺物包含層(西)出土状況、SB13全景・出土状況
PL2	鬼釜遺跡 SB08 ^h ・SB14完掘・土器敷 ^h ・埋裏	PL5 鬼釜遺跡 SM01全景・調査前風景・周溝全景・周溝セクション
PL3	鬼釜遺跡 SB14埋裏・SB16完掘・埋裏、SK156完掘、SK175完掘・セクション、SK187完掘	PL6 鬼釜遺跡 SM01周溝出土状況、SK174完掘・セクション、SK186・SK187完掘
PL4	鬼釜遺跡 SK192完掘・出土状況、SM01 IV層出土状況、IV1層遺物包含層(東)	PL7 鬼釜遺跡 SK174出土状況、SM01セクション・出土状況

PL 8	鬼釜遺跡	SM01出土状況、SX01～SX04完掘、SX03セクション、SX04出土状況	PL35	風張遺跡	出土土器（中近世土器・陶磁器）、出土土製品・石器・金属製品
PL 9	鬼釜遺跡	SB01完掘、SB02完掘・出土状況・カマド完掘、SB03完掘、SB05完掘、SB09完掘、SB10完掘	PL36	風張遺跡	出土木製品
PL10	鬼釜遺跡	SB04完掘・セクション、SB11完掘、SB17掘方、ST01完掘、ST03完掘、ST04完掘、ST07完掘	PL37	神之峯城跡	1区全景
PL11	鬼釜遺跡	ST08・09完掘、ST13・15完掘、ST14完掘、ST17完掘、SD01完掘、SD02完掘、5・16トレンチ セクション	PL38	神之峯城跡	1区全景、1区調査前風景
PL12～16	鬼釜遺跡	出土土器（縄文土器）	PL39	神之峯城跡	1区中世遺構全景、ST02全景・礎石掘方・出土状況
PL17	鬼釜遺跡	出土土器（縄文土器、弥生土器、古墳土器）	PL40	神之峯城跡	ST02完掘・セクション、SK01完掘・セクション・出土状況、SK112 出土状況、SK113出土状況
PL18	鬼釜遺跡	出土土器（古墳土器）	PL41	神之峯城跡	SK114出土状況、SD04・07完掘、SD05完掘、SD08完掘・セクション、SD09完掘、SD10完掘、SD11セクション・出土状況、SF01検出状況
PL19	鬼釜遺跡	出土土器（古墳土器、近世以降土器・陶磁器）	PL42	神之峯城跡	Ⅶ1層下層トレンチ セクション、1区近世遺構全景、ST01完掘、ST05完掘、SK05完掘、SK12完掘
PL20	鬼釜遺跡	出土土器（平安土器、中世・近世土器）、出土土製品・土偶・土器片加工品	PL43	神之峯城跡	SK12出土状況、SK15完掘、SD03完掘、SD06完掘・出土状況、SA01完掘、SH01出土状況、SH02石積み
PL21～24	鬼釜遺跡	出土土器	PL44	神之峯城跡	SD201遠景・調査前風景・屈曲部全景・東側全景
PL25	鬼釜遺跡	出土土器・石製品	PL45	神之峯城跡	SD201セクション
PL26	鬼釜遺跡	出土土器製品・金属製品	PL46	神之峯城跡	SH201セクション・出土状況、SK201完掘・セクション・出土状況、SD201セクション
PL27	鬼釜遺跡	出土金属製品	PL47	神之峯城跡	3区調査前風景、3区近世遺構全景
PL28	風張遺跡	風張遺跡遠景、2～4区遠景	PL48	神之峯城跡	新慶寺推定地調査前風景、SK351完掘・出土状況、SK540完掘・出土状況
PL29	風張遺跡	2・3区調査前風景、1区トレンチ全景、SB01完掘・出土状況、ST01全景	PL49	神之峯城跡	SK544出土状況、SK581完掘・セクション、SH301出土状況、SH302出土状況、ST301完掘、ST302完掘、ST303完掘
PL30	風張遺跡	SK127完掘、SK128（ST01炉）完掘・検出状況、ST02完掘、ST04完掘、ST05完掘、ST06完掘、SF07出土状況	PL50	神之峯城跡	ST304完掘、ST305完掘・礎板石、ST306完掘、ST307完掘、ST310完掘・礎板石、ST314完掘
PL31	風張遺跡	ST07完掘、ST08完掘・セクション・出土状況、ST10完掘、ST12完掘、ST13完掘、SK177・264完掘	PL51	神之峯城跡	SH301出土状況、谷部全景・セクション
PL32	風張遺跡	SK28完掘・壁面、SK180・187完掘、SK183完掘、SK184完掘、SD05完掘、SK46～48・SD06完掘、SD22～24完掘	PL52	神之峯城跡	出土土器（1区中世土器・陶磁器）
PL33	風張遺跡	SD22屈曲部、SK388完掘・木杭痕跡、SK392完掘・セクション・板材出土状況、6トレンチ セクション、8トレンチ セクション	PL53	神之峯城跡	出土土器（1・2区近世土器・陶磁器）
PL34	風張遺跡	出土土器（中世土器・陶磁器）			

PL54	神之峯城跡	出土土器(3区中世土器・陶磁器)	PL57	神之峯城跡	出土土製品・石製品・石器・金属
PL55	神之峯城跡	出土土器(3区中近世土器・陶磁器)			製品
PL56	神之峯城跡	出土土器(3区近世土器・陶磁器)	PL58	神之峯城跡	出土金属製品

第1章 調査の経緯と方法

第1節 発掘調査に至る経緯

1 三遠南信自動車道の建設計画

三河（愛知県）、遠江（静岡県）、南信州（長野県）の3地域を結ぶ三遠南信自動車道は、長野県飯田市の中央自動車道を起点として、静岡県浜松市北区引佐町の東名高速道路までを結ぶ延長約100kmの自動車専用道路である。長野県内は起点側から、飯喬道路、小川峠道路及び青崩峠道路の3区間に分かれている。飯喬道路は、中央自動車道から分岐する飯田市山本地籍の飯田山本インターチェンジ（以下「IC」という。）から天龍峡 IC を経て飯田市上久堅の（仮称）飯田東 IC に至る延長14.6km 区間として、平成2年（1990）11月1日に基本計画が決定され、平成4年度（1992）には事業化が決定した。平成9年（1997）2月25日には整備計画が決定となり、平成9年度から建設省中部地方建設局飯田国道工事事務所（現国土交通省中部地方整備局飯田国道事務所（以下「飯田国道」という）が用地取得を開始した。その後、平成16年度（2004）に（仮称）飯田東 IC ～（仮称）喬木 IC（喬木村氏乗）間が小川峠道路から編入され、飯喬道路の延長は22.1km となった。

2 埋蔵文化財の保護協議と長野県教育委員会による分布調査

飯喬道路建設事業用地にかかる埋蔵文化財の保護については、飯田国道と長野県教育委員会（以下「県教委」という）が平成5年（1993）から6年（1994）にかけて協議を重ねた。その結果、保護措置は記録保存とすること、そのための発掘調査は、飯田国道が財団法人長野県埋蔵文化財センター（現一般財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター。以下「埋文センター」という）に委託して実施することが確認された。

飯田国道による飯喬道路建設の工区は、飯田山本 IC ～天龍峡 IC までが1工区、天龍峡 IC ～（仮称）飯田東 IC までが2工区、（仮称）飯田東 IC から（仮称）喬木 IC までが3工区である。本書で報告する鬼釜遺跡、風張遺跡、神之峯城跡の3遺跡（第1図）が含まれる2工区の埋蔵文化財保護協議は、平成15年（2003）12月15日、飯田国道、県教委、飯田市教育委員会（以下「市教委」という）及び埋文センターの四者により行われた。これ以降、平成21年度まで調査開始に伴う事前の保護協議が行われた。

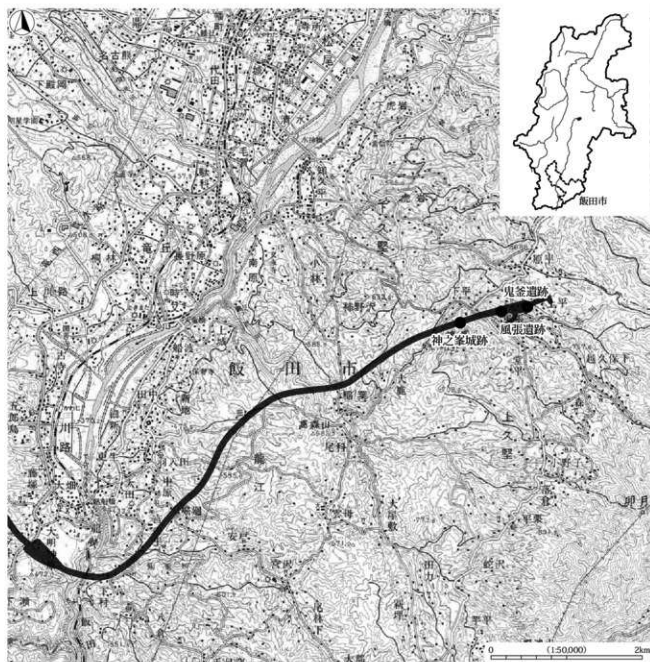
県教委は、平成6年（1994）7月21日の協議結果を受けて、飯喬道路事業用地内の遺跡を確認するため、同年11月14日に、市教委の協力を得て、飯田山本 IC から（仮称）飯田東 IC 間について現地踏査を中心とした詳細分布調査を実施した。その結果、竜東（天竜川左岸、以下「竜東」という）では7遺跡が調査対象とされた。

3 発掘届と発掘の指示

文化財保護法に基づく届け出等の手続きは第1表のとおりである。

4 埋文センターによる発掘調査と受委託契約

埋文センターによる飯喬道路事業地内の発掘調査の実施については、平成9年度（1997）から実現化への動きが強まり、飯田国道、県教委、埋文センターが実施に向けての調整協議を続けた。



第1図 飯橋道路と発掘調査遺跡の位置

飯橋道路事業用地内の発掘調査は、平成11年（1999）、飯田市川路地区の川路大明神原遺跡に始まり、次年度は飯田市山本地区諸遺跡の調査が開始された。

本報告書に関わる受委託契約は第2表のとおりである。

第1表 文化財保護法の手続き

鬼釜遺跡

土木工事通知（法94条）	県教委勧告（法94条）	発掘届（法92条）	県教委指示（法92条）	埋蔵物発見届	文化財認定
文書番号・日付	文書番号・日付	文書番号・日付	文書番号・日付	文書番号・日付	文書番号・日付
国部整版調設第207号 (H20.3.3)	19教文第18-259号 (H20.3.25)	21長埋第1-2号 (H21.7.15)	21教文第6-5号 (H21.8.10)	21長埋第2-15号 (H22.1.22)	21教文第20-123号 (H22.2.1)
国部整版調設第207号 (H20.3.3)	19教文第18-259号 (H20.3.25)	22長埋第1-13号 (H23.3.1)	23教文第6-1号 (H23.4.8)	23長埋第4-14号 (H23.12.21)	23教文第20-125号 (H24.1.6)

風張遺跡

国部整版調設第207号 (H20.3.3)	19教文第18-259号 (H20.3.25)	23長埋第3-10号 (H23.7.12)	23教文第6-4号 (H23.8.2)	23長埋第4-15号 (H23.12.21)	23教文第20-124号 (H24.1.6)
国部整版調設第207号 (H20.3.3)	19教文第18-259号 (H20.3.25)	23長埋第3-15号 (H24.3.2)	23長埋第6-20号 (H24.3.19)	24長埋第2-2号 (H24.8.20)	24教文第20-39号 (H24.8.27)

神之峯城跡

国部整版調設第207号 (H20.3.3)	19教文第18-259号 (H20.3.25)	24長埋第1-2号 (H24.6.1)	24教文第6-4号 (H24.6.12)	24長埋第2-11号 (H24.12.20)	24教文第20-88号 (H25.1.7)
国部整版調設第207号 (H20.3.3)	19教文第18-259号 (H20.3.25)	24長埋第1-9号 (H25.2.1)	24教文第6-16号 (H25.3.7)	25長埋第2-9号 (H25.12.17)	25教文第20-95号 (H26.1.16)

第2表 受委託契約一覧

年度	契約期間	契約額（円）	作業内容	発掘遺跡	整理遺跡
平成21	4月1日～3月31日	65,738,070	発掘作業、基礎整理作業	発掘遺跡	鬼釜遺跡
平成23	4月1日～3月31日	90,190,000	発掘作業、基礎整理作業	発掘遺跡 風張遺跡	鬼釜遺跡 風張遺跡
平成24	4月1日～3月31日	106,417,000	発掘作業、基礎整理作業	発掘遺跡	風張遺跡 神之峯城跡
平成25	4月1日～3月31日	126,819,000	発掘作業、基礎整理作業	発掘遺跡	神之峯城跡
平成26	4月1日～3月31日	9,471,800	本格整理作業		鬼釜遺跡 風張遺跡 神之峯城跡
平成27	4月1日～3月31日	33,294,610	本格整理作業、報告書刊行		鬼釜遺跡 風張遺跡 神之峯城跡

※平成22年度は、井戸端遺跡、下村遺跡（巖ヶ城跡）、戸ノ口遺跡と並行して鬼釜遺跡の本格整理を実施。

調査対象面積は鬼釜遺跡35,300㎡、風張遺跡15,300㎡、神之峯城跡29,243㎡である。

なお、飯田国道、県教委、埋文センターの三者は発掘調査についての覚書（「三遠南信自動車道建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する覚書」）を年度ごとに締結した上で契約を行った。

第2節 発掘調査・整理作業の体制と方法

1 体制

調査・整理体制は第3表のとおりである。

2 発掘調査における記録の方法

調査は県教委の「記録保存を目的とする発掘調査の標準および積算基準」と、埋文センター作成の「遺跡調査の方針と手順」に則って実施している。

(1) 遺跡の名称と遺跡記号

遺跡名称と遺跡記号は、鬼釜（OniGama）遺跡がIOG、風張（KazaHari）遺跡がIKH、神之峯（Kanno Mine）城跡がIKMである。

遺跡記号の1文字目の「I」は長野県内を9地区に分割した場合の飯田地区を示し、2文字目、3文字目は遺跡名のローマ字表記の一部から採ったものである。

第3表 調査・整理体制一覧

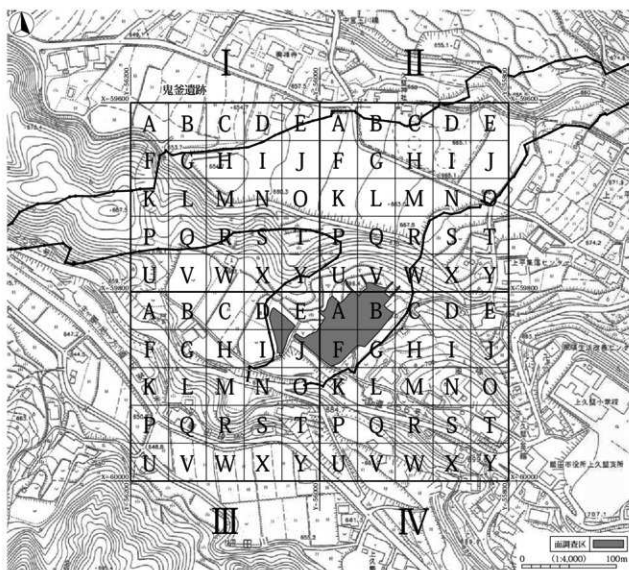
	平成21	平成23	平成24	平成25	平成26	平成27
所長	仁科松男	窪田久雄	窪田久雄	窪田久雄	会津敬男	会津敬男
副所長兼管理部長	阿部精一	阿部精一	会津敬男	会津敬男	多城 哲	多城 哲
管理部長補佐			佐藤国昭	佐藤国昭		
管理課長		窪田秀樹	窪田秀樹	村山清治	村山清治	山本希一
管理課長補佐					山本希一	望月英夫
管理係長	窪田秀樹	西澤宏明				
調査部長	平林 彰	大竹憲昭	大竹憲昭	大竹憲昭	大竹憲昭	平林 彰
担当課長	上田典男	上田典男	上田典男	上田典男	西山克己	岡村秀雄
担当調査研究員 (対象遺跡)	河西克造 鬼地隆元 (鬼釜)	河西克造 三木雅博 古賀弘一 (鬼釜、風張)	河西克造 三木雅博 古賀弘一 (風張、神之峯) 市川隆之 (神之峯)	河西克造 市川隆之 三木雅博 古賀弘一 大澤泰智 宮村誠二 (神之峯)	河西克造 水澤教子 (鬼釜、風張、神之峯)	河西克造 水澤教子 (鬼釜、風張、神之峯)
平成21、23～25年度発掘作業員 市瀬勝人、伊藤和恵、岩間健治、今牧千春、内山和一、大西千草、小木曾欣三、尾曾初枝、片桐正良、木下由紀子、熊谷晃、小嶋啓亮、後藤實、小林文敬、沢柳隆治、清水恒子、竹村訓一、竹村サダエ、竹村満利、遠山武幸、遠山佳宏、中野麻里子、中野充夫、長沼史子、長沼善則、西野英利、平沢一光、野田充夫、牧ノ内昭吉、松枝克子、松枝義雄、松沢キヌ子、巖島正三、宮沢吉博、宮下典彦、森本和宏						
平成21、23～27年度 整理作業員 岡村美喜子、小嶋幸則、中島裕子、永澤千春、増田千加代、三沢真由美、宮下正治(基礎整理作業) 石田多美子、市川ちづ子、窪田順、窪田瑠、塩野入奈菜美、清水栄子、下倉武、相馬麻織、塚田春美、鳥羽仁美、西村はるみ、藤井裕子、藤丸麗、松本美行、待井望、柳原澄子、山本和美、涌井智明、渡辺恵美子(本格整理作業)						

※平成22年度は、井戸城遺跡、下村遺跡(雙ヶ城跡)、芦ノ口遺跡と並行して鬼釜遺跡の本格整理を実施。

(2) 調査区(グリッド)の設定と略号(第2～4図)

国土地理院の平面直角座標系の原点(長野県はⅧ系、X=0.000、Y=0.000)を基点に200の倍数を選んで測量基準点を設け、調査対象地の全体をカバーするように調査グリッドを設定した。

大々地区は、200×200mの区画で、グリッド名は北西から南東へⅠ・Ⅱ・Ⅲ・・・のローマ数字で表記。



第3図 風張遺跡 測量基準線設定図

大地区は、大々地区内を40×40mの25区画に分割し、北西から南東へA～Yのアルファベットで表記。

中地区は、大地区内を8×8mの25区画に分割し、北西から南東へ1～25のアラビア数字で表記。

小地区は、中地区内を2×2mの16区画に分割し、北西から南東に1～16のアラビア数字で表記。

調査ではこの中地区を遺構測量の基準・単位とした。座標値は日本測地系である。

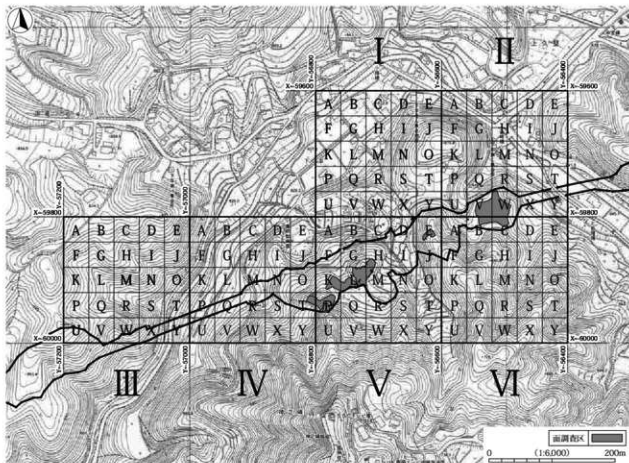
(3) 遺構名称と遺跡記号

埋文センターでは、検出した遺構について記録と遺物の注記等の便宜を図るために遺構記号を用いている。本書で用いた遺構記号は以下のとおりである。

SB：竪穴建物跡、竪穴状遺構 ST：掘立柱建物跡、礎石を使用した建物跡 SK：土坑
SD：溝跡 SM：古墳 SQ：土器集中 SA：柵列 SF：焼土跡 SH：集石

(4) 測量と写真撮影

遺構の測量は簡易通り方測量及び遺構実測支援システムにより、調査研究員及びその指導のもとに発掘作業員が行った。加えて業者委託による単点測量を併用した。縮尺は、個別遺構図と土層図が1：20、遺



第4図 神之峯城跡 測量基準線設定図

物分布図などは必要に応じて1:10とした。調査範囲、トレンチ掘削地点及び土層断面記録地点は、全体図や地形図とともに業者委託の単点測量で作成した。

発掘中の遺構等の撮影は、6×7判カメラ、35mm一眼レフカメラ、デジタル一眼レフカメラを併用して撮影した。フィルムカメラでは、モノクロフィルム（ネオパン100）とカラーリバーサル（フジクローム100F）を用いて調査研究員が撮影した。現像と焼き付けは業者委託とした。調査区全体の空中写真は業者委託のラジコンヘリコプターを用いて撮影した。

(5) 遺跡の公開

発掘作業中、各種団体の視察や見学会を実施するとともに、地域住民を対象にした現地説明会を開催した。また、調査成果は埋文センター速報展等で公開し、公開講座等で報告した。

3 整理作業の経過

(1) 基礎整理作業

発掘作業年度に、記録類や出土遺物の基礎整理作業として各種記録類の内容確認や修正を行い、台帳及び遺跡・遺構の調査所見を作成した。写真類は撮影内容等の点検、台帳作成の後、アルバムに収納した。出土遺物は洗浄・注記を行い、種類別に仮収納した。

(2) 本格整理作業

報告書の刊行に向けた整理作業を平成22・26・27年度に実施した。

遺構については、基礎整理で作成した台帳をもとに属性表を作成するとともに、個別に内容を検討して報告書掲載遺構を確定した。掲載遺構は、パソコンを用いたデジタルトレース（使用ソフトは Adobe Illustrator）をして、個別遺構図や遺物出土状況図などを作成した。遺構全体図や基本土層図等も同様である。なお、遺構全体図や測量基準線設定図、調査範囲図等は、委託業者が作成した図面を報告書掲載用に加筆・修正して用いた。遺構写真等については、報告書掲載写真を選択した後に仮図版組みを行った。

遺物のうち土器や陶磁器は全体像を把握した後に遺構単位に観察し、遺構の時期や性格を裏付けるために必要か否か、遺存率が高く図化できるかなどの観点で報告書に掲載する遺物とそれ以外に選別した。ただ、個数や重量は一部の非掲載遺物を含めて計測した。掲載遺物については、接合、復元、補強ののち通し番号（管理番号）を付け、遺物管理台帳を作成した。また、石器や金属器は観察後、遺存度が良好でかつ器種が判別可能なものを抽出して、図化した。実測図は1/1縮尺で作成している。

なお、遺構記号及び番号は、基本的に発掘作業時に認定したものを踏襲しているが、整理作業の過程で遺構として認定できないと判断したものや、新たに遺構記号・番号を付けたものもある。

新たに付けた遺構番号や遺構番号を変更したのものには、1001番以降の番号を付けた。また、新旧遺構番号がわかるように、掲載した個別遺構図には「ST01 P1 (SK01)」と新旧遺構名を併記し、遺構番号対比表をDVDに収録した。

(3) 報告書の作成

編集作業は平成27年度から着手した。遺構図・遺物図・挿図・挿表など報告書に掲載する各種の図・写真仮図版と原稿が出来上がった段階で業者へ委託して行った。遺物写真撮影は業者委託で行った。

(4) 埋蔵文化財包蔵地の変更への対応

鬼釜遺跡や風張遺跡、神之峯城跡の範囲は、整理作業中の平成27年3月に市教委により変更された。神之峯城跡は「神之峰城城跡」と「神之峰北中腹遺跡」に分けられたが、本報告では調査開始時点の遺跡名と範囲を踏襲している。



平成27年度 本格整理での記念写真

第2章 遺跡周辺の環境

第1節 遺跡の位置と遺跡周辺の地理的環境

神之峯城跡は、権現山・二本松山付近を水源とする玉川左岸の独立丘陵に立地する。風張遺跡は神之峯城跡の北東側、細田川を挟んだ対岸にある台地に所在する。この台地は尾根状を呈し、南東から北西方向に穏やかに傾斜する。この丘陵の北西側に鬼釜遺跡が立地する段丘が広がっている。(第1図)

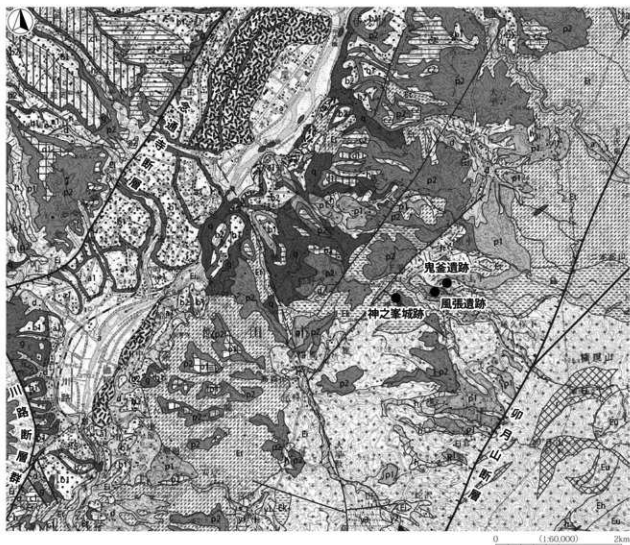
各遺跡が所在する飯田市上久堅地区は尾根と谷が入り組む山間地で、天竜川から伊那山地の中間地点に位置し、天竜川に向かって下がる階段状の段丘の上にある。3遺跡は隣接した位置関係で、天竜峡の東側、現在の飯田市街地(飯田城跡周辺)から約9km南東方向にある。飯田市は長野県の南部に位置し、市の中央には天竜川が縦断して、南部が風光明媚な名勝天竜峡となる。

長野県のほぼ中央には諏訪湖がある。天龍川はこの諏訪湖に源を発し、長野県南部を貫いて流れ、静岡県を経由して太平洋に注ぐ。この天竜川は木曾山脈と伊那山地に挟まれた盆地に流れ、この地域を伊那谷(伊那盆地)と言う。伊那谷は、上伊那郡辰野町から飯島町までが上伊那地域、それ以南が下伊那地域と呼ばれる。飯田市を含む下伊那地域は、伊那谷南半分の広い地域で、竜東(天竜川左岸、以下竜東)と竜西(天竜川右岸、以下竜西)とともに、扇状地と扇状地を間析した中小河川が形成した複雑な地形がみられる。竜東には竜東段丘と呼ばれる段丘地形が分布し、段丘より山地側は丘陵地帯となる。天竜川両岸には河岸段丘が発達し、その背後に山地が連なる。天竜川の西側が木曾山脈、東側が伊那山地と呼ばれる。

伊那谷の地質は花崗岩(第5図)や変成岩などから成り立つ領家帯に属している。伊那谷の中央には糸魚川-静岡構造線が走り、構造線から東側が千枚岩や結晶片岩から成る三波川帯と中生層や古生層から成る秩父帯、四万十帯から成っている。



飯田市上久堅地区遠景



a	氾濫面	Eu	苦鉄質～超苦鉄質岩類
a1	低位段丘面Ⅱ	g	段丘堆積層、扇状地堆積層
a2	低位段丘面Ⅱ'	h	低地
b1	(低位段丘面Ⅰ 新期段丘地) 上位	o1	(高位段丘面 古期段丘地) 上位
b2	(低位段丘面Ⅰ 新期段丘地) 下位	o2	(高位段丘面 古期段丘地) 下位
c1	(中位段丘面 中期段丘地) 上位	p1	下部伊那層、久米・新田礫層など
c2	(中位段丘面 中期段丘地) 下位	p2	柳沢礫層、上部伊那層
d	岸崖面	q	変輝緑岩
Eu	滝沢花崗岩	r	珪線石帯
Ei	生田花崗岩 (A)	y1	大部層
Ek	上久堅花崗岩	y2	千代層
Et	天竜峡花崗岩	y3	田力層

第5図 地質図

第2節 遺跡周辺の歴史的環境

鬼釜遺跡、風張遺跡、神之峯城跡の発掘調査では、縄文時代～古墳時代、平安時代と平安時代以降、中世の遺構と遺物を発見した。本節では、上記3遺跡が所在する竜東の遺跡の分布状況を中心に概観する。第6図1が鬼釜遺跡、2が風張遺跡、3が神之峯城跡である。

なお、平成27年度、市教委によって埋蔵文化財包蔵地地図が改訂された。その結果、神之峯城跡は、城郭遺構が明瞭に残る山頂部とそこから北側に派生する尾根を含む範囲が「神之峯城跡」、北西側の中腹は「神之峯北中腹遺跡」となった(市教委2015)。調査対象地の1区と3区が「神之峯北中腹遺跡」、2区は両遺跡にまたがっている。本報告では、発掘作業開始時点の遺跡名「神之峯城跡」を使用して記述する。

1 旧石器時代

飯田市域における旧石器時代遺跡の分布は大半が竜西にあり、竜東では確認されていない。

2 縄文時代

草創期は下久堅地区の大原遺跡(図外)から出土した有舌尖頭器のみで、様相は不明である。

早期は上久堅地区の北田遺跡(8)があり、竪穴建物跡1軒と小竪穴1基が確認された。竪穴建物跡からは立野式の押型土器と横刃形石器、石鏃、剥片石器などが出土した。

前期は、龍江地区の龍江大平遺跡(102)で中葉の竪穴建物跡2軒と土坑4基が確認されている。龍江大平遺跡は天竜川を臨む河岸段丘上に立地する遺跡である。また、龍江大平遺跡より一段低い天竜川氾濫原に立地する龍江田中下遺跡(70)で集石や遺物包含層、上久堅地区の北田遺跡では土坑が1基確認されている。龍江大平遺跡が立地する段丘上と田中下遺跡が立地する氾濫原には集落が展開している可能性が高い。

中期は遺跡数が爆発的に増大する。現在までに、第6図の遺跡ほぼ全てが当該期の遺跡として登録されている。これらの遺跡は、天竜川兩岸の河岸段丘上(低位段丘面)と天竜川の氾濫原を中心に分布するが、遺跡は天竜川よりやや離れた段丘上(中位段丘面、高位段丘面)にまで拡大している。また、天竜川より奥まった場所である上久堅地区に分布する遺跡は、大半が河川の浸食で形成された尾根状(段丘状)地形や扇状地に立地し、その全てから当該期の資料が得られている。

発掘資料としては、龍江城遺跡(66)から中期後半の遺物、細新遺跡(86)から中期の遺物が確認されている程度で、竜東では資料がほとんど得られていない。その一方で、天竜川からかなり奥まった上久堅地区に立地する北田遺跡では、竪穴建物跡が50軒確認され、その大半が中期後半に属する。また、中期初頭の土坑12基が発見され、いずれの土坑にも土器を埋納し、なかには土偶や横刃形石器、黒曜石製の剥片を伴う土坑もある。北田遺跡の調査事例からすると、竜東においては複数の竪穴建物跡で構成される集落跡が中期後半に形成されている。

後期・晩期に属する遺跡は確認されておらず、龍江城遺跡からは後期～晩期後葉の遺物、細新遺跡からは後期の遺物が確認されているに過ぎない。

3 弥生時代

前期は竜東で当該期の遺跡が確認されていない。

中期は竜東では当該期の遺跡や当該期の発掘資料は確認されていない。

後期は遺跡が増大する。遺跡の分布は大きくふたつに分かれて分布する傾向を示す。第一は、天竜川氾濫原と天竜川を臨む河岸段丘上（低位段丘）に分布する遺跡である。特に龍江地区と下久堅地区で遺跡が集中する。天竜川対岸の川路地区と竜丘地区でも遺跡が密集していることから、当該期の遺跡は天竜川沿いの低地に進出したものと推定される。第二は天竜川より奥まった上久堅地区である。発掘資料では、天竜川氾濫原に立地する田中下遺跡で集落と方形周溝墓、細新遺跡で竪穴建物跡3軒、上久堅地区に所在する北田遺跡で竪穴建物跡が5軒確認されている。

4 古墳時代

古墳時代の遺跡は、弥生時代後期とほぼ同様な分布状態を示しており、天竜川沿いの低地を中心に展開している。前期の遺跡は、竜東では龍江大平遺跡（102）、鬼釜遺跡（1）、竜丘地区では蒜田遺跡（48）、小池遺跡（46）、地家子遺跡（44）に過ぎず、遺跡数は少ない。

後期になると遺跡数は飛躍的に増大する。竜丘地区の開善寺境内遺跡（60）と川路地区の留々女遺跡（78）から集落がみつまっていることから、低地への進出・定着が顕著になることがうかがえる。一方上久堅地区では、弥生後期の集落が確認された遺跡で当該期の遺構・遺物が確認されていることから、弥生後期に集落が形成された場所が当該期でも利用されていることがうかがえる。発掘資料では、天竜川氾濫原の細新遺跡で竪穴建物跡69軒、竜東の河岸段丘（低位段丘）に立地する下村遺跡（106）から後期（6世紀）の竪穴建物跡1軒、龍江大平遺跡から中期（5世紀）の竪穴建物跡2軒と古墳時代の掘立柱建物跡1棟が確認されている。また、上久堅地区の北田遺跡では、後期の竪穴建物跡が17軒、掘立柱建物跡が24棟確認されており、竪穴建物跡と掘立柱建物跡とで構成された集落の様相をうかがうことができる。竜東における当該期の集落様相が把握された貴重な資料となる。北田遺跡の古墳時代集落は、6世紀後半～7世紀初頭（岡田ほか1992）に比定されるもので、鬼釜古墳の追葬と同じ時期である。鬼釜古墳と北田遺跡は近接することから、北田遺跡の集落構成員と鬼釜古墳の追葬者との関連性がうかがえる。

竜東では、後期古墳が分布する。古墳は天竜川を臨む河岸段丘（低位段丘）から上久堅地区まで散在的に分布するが、消滅した古墳も多い。龍江地区で現存する古墳は、ハンバ古墳、石原古墳、羽入古墳の3基に過ぎず、消滅した古墳のなかには芦ノ口遺跡のなかに存在した芦ノ口古墳と中原古墳がある。発掘資料では、鬼釜古墳の北西方向にある塚穴1号・2号古墳などがある。

今回、鬼釜古墳では6世紀の馬の埋葬土坑が発見された。従来、馬の埋葬例は下伊那地域では30例（飯田市内28例、高森町2例）確認されている（市教委2007）。遺構の時期は、飯田市内30例は5世紀、高森町2例は7世紀である（小林ほか2007）。新井原・高岡古墳群4号土坑に代表される飯田市内28例は、全て竜西から発見されている。今回、竜東に馬の埋葬土坑を伴う6世紀の古墳が存在することが判明した。これは、飯田市を含む下伊那の古墳文化を考える上で重要な資料となる。

5 奈良・平安時代

竜東では、奈良時代の遺跡は確認されていない。第6図の遺跡のなかでは、天竜川対岸の竜丘地区の開善寺境内遺跡（60）から遺物が確認されているに過ぎず、当該期における遺構・遺物の様相は不明である。

平安時代になると、天竜川氾濫原に立地する龍江城遺跡（66）、下久堅地区の坂下遺跡（22）、馬出し遺跡（20）、内御堂遺跡（図外）、小林宮の前遺跡（24）、向新道地遺跡（19）で遺物が確認されている。また、龍江地区の細新遺跡（86）では竪穴建物跡21軒と掘立柱建物跡5棟が確認されている。遺構・遺物が少なく、当該期の様相は不明な点が多い。しかし、これら遺物が確認された遺跡の立地と、細新遺跡で確認された遺構からすると、当該期は天竜川の氾濫原や河岸段丘（低位段丘）に集落が展開していたものと推定

される。

6 中世

竜東に分布する中世の遺跡は、天竜川を臨む河岸段丘（下久堅地区、龍江地区、千代地区）と、天竜川より奥まった山間地（上久堅地区）とに分布する。今回の飯橋道路建設に伴う調査以前、発掘調査で確認された遺構としては、北田遺跡の掘立柱建物跡と龍江大平遺跡の集石墓に過ぎず、ほかは遺物が確認されているに過ぎない状況であった。井戸端遺跡（108）の掘立柱建物跡・土坑等は、当該期の考古学的な様相を捉える上で貴重な資料となる。

下伊那には天文年間に武田信玄が侵攻する。武田氏侵攻以前の下伊那は、竜西を小笠原氏、竜東を知久氏が支配した。天竜川が小笠原氏と知久氏の支配境界線を意味していた。

市村成人氏の先行研究（市村1970）から、知久氏の動向を概観する。

知久氏の第1代は知久信貞で、上伊那郡路原庄に居住した。しかし、承久3年（1221）5月の承久の乱の軍功によって、同氏は下伊那郡伴野庄へ移ったとされている。この知久氏は知久郷（上久堅・下久堅）を本拠とするが、知久氏の支配領域は、応仁～文明年間（1467～1486年）に竜東の河野郷・伴野郷・阿嶋郷・小川郷・伊久郷・知久郷・今田郷・南山郷のほか、竜西の飯沼郷・黒田・南條・座光寺（上野）まで及んでいたとされている。知久氏第1代信貞もしくは第2代敦幸が文永寺を創建している。天文2年（1533）5月には、この文永寺に京都醍醐寺理性院の嚴助僧正が滞留し、結縁灌頂を執行している。同年6月、嚴助僧正は文永寺から知久頼元がいる神之峯城に足を運び、輿に乗って登城している（「信州下向記」信濃史料刊行会1974）。文永寺と神之峯城、さらに街道の位置からすると、嚴助僧正一行は下久堅から上久堅に向かう近世の「秋葉みち」を通して神之峯城へ向かったと推定される。知久頼元は文永寺と神之峯城で連歌会を行うなど、嚴助僧正の接待をしている。なお、「信州下向記」には、「神峯」の記載が多々認められる。

知久郷に含まれる上久堅地区には、知久氏が本拠とした神之峯城跡（3）がある。神之峯城跡の北方にある北田遺跡では、長辺6間（14.8m）、短辺3間（6.0m）を測る掘立柱建物跡が確認されている。

竜東における城郭分布は、神之峯城跡のほか、下久堅地区の知久平城城跡（21）、龍江地区の坵城城跡（61）、上久堅地区の小野子城城跡（15）、千代地区の鶯ヶ城城跡（107）がある。神之峯城跡と小笠原領域との境界である天竜川との間（下久堅地区、龍江地区、千代地区）は、城郭分布が散漫である。また、神之峯城周辺に砦跡や狼煙台跡が確認されないことから、知久氏は神之峯城跡を中核としたネットワークを形成していない可能性が高いと推測される。従来、知久領に分布する城郭調査・研究が進んでいなかったため、今回の発掘調査を機会に、今後、高梨氏、井上氏、村上氏、諏訪氏など信濃各地を支配した国人領主の本拠の城郭様相と比較して明らかにする必要がある。なお、城郭の発掘調査は、知久平城城跡と鶯ヶ城城跡で行われている。知久平城城跡の調査では、土塁・堀・土橋が確認され、掘立柱建物跡と推定される柱穴列と配石列がみつまっている。鶯ヶ城城跡は、地元（飯田市千代地区）に神之峯城の出城との伝承が残る遺跡である。遺跡が立地する尾根のほぼ全域が調査され、15世紀後半～16世紀後半の平場、切岸、堀切、城内道などの城郭遺構と、その下層から中世の墓坑がみつまっている。

7 近世（織豊期以降の竜東）

天正10年（1582）2月、甲斐武田氏討伐のため織田信忠が信濃（伊那郡）と甲斐に侵入する。上久堅地区の興禅寺には、織田信忠が同寺に与えた禁制が残っている（「興禅寺文書」信濃史料刊行会1969）。同年3月、甲斐武田氏滅亡後の甲斐と信濃は織田氏の支配領域となる。甲斐と信濃は織田氏家臣が分割して

支配（分割統治）し、伊那郡に毛利秀頼が入部して飯田城を本拠として同郡を支配した。近年、平山優氏は、同年5月に諏訪大社上社権祝矢嶋氏に宛てた矢嶋弁瓢書状（「矢嶋文書」信濃史料刊行会1969）から、武田氏滅亡直後に知久頼氏が知久領に復歸したこと、知久頼氏の復歸を支援したのは織田氏と指摘した（平山2011）。同年6月、本能寺の変で織田氏の分割支配は崩れて、信濃は越後の上杉景勝、三河の徳川家康、相模の北条氏直の争奪を繰り広げる場となった。知久頼氏は同年7月に家康から知久郷を安堵されている（「知久文書」信濃史料刊行会1969）。支配領域は、竜東と飯沼、黒田、座光寺にまで及んだ。

上久堅地区には、江戸時代に盛んとなった秋葉山（静岡県）への参詣の道（国道256号線）が通っている。秋葉信仰は火防の信仰（庶民信仰）として、全国的に広まったという。この秋葉山への参詣道は江戸時代中期には「秋葉みち」、近代になって「秋葉街道」と呼ばれるようになった。その道のひとつが飯田の八幡宿から上久堅、小川路峠を越えて、和田宿（南信濃村）、遠州（静岡県）へとつながる道で、物資の移動、人の往来のある、重要な道となっている。中世以前のこのルートについては、上述した「信州下向記」の記述から、少なくとも飯田市下久堅地区（天竜川を臨む低位段丘）から神之峯城のある上久堅地区までは通じていたと考えられる。ただし、静岡県側へ繋がる道があったかは不明である。



神之峯城跡 主郭部から竜西を臨む

第4表 遺跡地名表

遺跡 番号	遺跡名	地区	ふりがな	国	道	種別	存在	古墳	奈良	平安	中世	近世	種別	備考
1	465	滝釜遺跡	上久堅	おにかまいせき			○	○	○	○			集落跡	今田、発掘調査実施
2	466	高塚遺跡	上久堅	かざはりいせき			○	○	○	○			集落跡	今田、発掘調査実施
3	上久25	神之堂遺跡	上久堅	かのみねじょうせき							●		雑跡	今田、発掘調査実施
4	1060	鬼釜古墳	上久堅	おにかまごふん				○					古墳	今田、発掘調査実施
5	1058	樺穴1号古墳	上久堅	つかなな1ごうこふん									古墳	
6	1059	樺穴2号古墳	上久堅	つかなな2ごうこふん									古墳	
7	461	原の平遺跡	上久堅	はらのたいらいせき			○						散布地	
8	462	北田遺跡	上久堅	きたたいせき			○	○	○				集落跡	一部発掘調査済
9	463	明賢塚遺跡	上久堅	みょうがつがいせき									散布地	
10	464	中宮原遺跡	上久堅	なかみやはらいせき			○						散布地	
11	1150	龍源寺跡	上久堅	りゅうげんじあと							●		寺跡	
12	473	望平遺跡	上久堅	どうたいらいせき			○						散布地	
13	471	北ノ入遺跡	上久堅	きたのいらいせき			○						散布地	
14	472	惣三坂遺跡	上久堅	そうさんざがいせき			○						散布地	
15	1109	小野子城跡	上久堅	おのこじょうじょうあと							●		雑跡	
16	475	小野子上遺跡	上久堅	おのこうえいせき			○						散布地	
17	476	落倉遺跡	上久堅	おとしくらいせき			○						散布地	
18	477	能天遺跡	上久堅	へびさわいせき			○						散布地	
19	452	高新道地遺跡	下久堅	わかいしんどうちいせき			○		○				散布地	
20	449	高出遺跡	下久堅	うまだしいせき			○		○	○			散布地	
21	1107	知久平城跡	下久堅	ちくだらじょうじょうあと							●		雑跡	一部発掘調査済
22	450	坂下遺跡	下久堅	さかたたいせき			○	○	○	○			散布地	
23	454	小林塚城跡	下久堅	こばやしほりたたいせき			○		○	○			散布地	
24	453	小林家の前遺跡	下久堅	こばやしやのまえいせき			○		○	○			散布地	
25	458	下久堅奥原遺跡	下久堅	しもぎさかみなみばらいせき			○						散布地	
26	455	五輪原遺跡	下久堅	ごりんばらいせき			○		○	○			散布地	
27	457	和乎遺跡	下久堅	わだいらいせき			○			○			散布地	
28	1106	小林城跡	下久堅	こばやしじょうじょうあと							●		雑跡	
29	460	藤原中平遺跡	下久堅	ふなみづななかたらいせき			○			○	○		散布地	
30	456	小松原遺跡	下久堅	こまつばらいせき			○			○			散布地	
31	459	下の平遺跡	下久堅	しものたいらいせき			○			○	○		散布地	遺跡内に下の平古墳あり。
32	480	織江原遺跡	龍江	たつきつづつがいせき			○			○	○		散布地	
33	207	雑跡	竜丘	じょうろういせき			○	○	○	○	○		集落跡	遺跡内に丸塚古墳
34	206	大鳥遺跡	竜丘	おおしまいせき			○	○	○	○	○		集落跡	一部発掘調査済。遺跡内に善住寺古墳・丸塚町古墳・ヒエ田古墳あり。
35	204	駄科権現堂遺跡	竜丘	だしなごんげんどういせき			○	○	○	○	○		集落跡	一部発掘調査済。遺跡内に安宅3号古墳、権現堂1-2号古墳、井ノエ1-2号古墳、ツカノコ古墳、神送寺古墳、御殿塚古墳あり。
36	205	安宅下遺跡	竜丘	あたかたたいせき			○	○	○	○	○		散布地	
37	221	久保民遺跡	竜丘	くぼじりいせき			○	○	○	○	○		集落跡	一部発掘調査済。遺跡内に北沼場1-2-3号古墳・久保在家1-2号古墳・田中古墳・公文所古墳・久保保1-2号古墳・久保保神社古墳あり。
38	219	内山遺跡	竜丘	うちやまいせき			○	○	○	○	○		集落跡	一部発掘調査済
39	218	古瀬原遺跡	竜丘	こせばらいせき			○	○	○	○	○		散布地	
40	222	新の原遺跡	竜丘	まゐのはらいせき			○	○	○	○	○		集落跡	一部発掘調査済。遺跡内に中井1-2号古墳・高見古墳・新ノ原1-6号古墳・中塚古墳・尾ノ塚1-2号墳・尾坂古墳・栲ま新田2号墳あり。
41	220	宮下原遺跡	竜丘	みやしたばらいせき			○	○	○	○	○		散布地	遺跡内に柳林大塚古墳・柳林山古墳・柳坂外古墳・宝下古墳・鎌倉塚古墳・念仏塚古墳あり。
42	223	駒河川北遺跡	竜丘	こまぼわがわたいせき			○	○	○	○	○		散布地	
43	208	長野原遺跡	竜丘	ながのはらいせき			○	○	○	○	○		散布地	遺跡内に原古墳、中井田西古墳、ゲンチャクナギ1-2号墳・中井田1-2号墳・西沼場古墳・福宮1-2号墳・西沼古墳・長野原2-3号墳1-2号墳・猫塚塚古墳・藤原1-2号墳あり。
44	209	地家子遺跡	竜丘	じけいしいせき			○	○	○	○	○		散布地	遺跡内に持田古墳あり。
45	225	安城原外遺跡	竜丘	あんじょうがわいせき			○	○	○	○	○		散布地	遺跡内に安城原外古墳あり。
46	224	小池遺跡	竜丘	こいけいせき			○	○	○	○	○		集落跡	一部発掘調査済。遺跡内に塚古墳あり。
47	229	駒河川南遺跡	竜丘	こまぼわがわみなみいせき			○	○	○	○	○		散布地	
48	230	窪田遺跡	竜丘	くぼたたいせき			○	○	○	○	○		その他	一部発掘調査済。遺跡内に窪田古墳あり。
49	231	塚原遺跡	竜丘	つかはらいせき			○	○	○	○	○		集落跡	遺跡内に塚原2-3-4-9-11-12号古墳・内山塚古墳・籠塚古墳・籠塚古墳・念仏塚古墳・善住寺古墳・塚原黄金塚古墳あり。
50	227	大塚遺跡	竜丘	たいざいせき			○	○	○	○	○		集落跡	一部発掘調査済。遺跡内に大塚1号古墳あり。
51	226	観音外遺跡	竜丘	かのんがわいせき			○	○	○	○	○		散布地	遺跡内に観音外1-3号古墳あり。
52	228	小池下遺跡	竜丘	こいけしたいせき			○	○	○	○	○		散布地	
53	232	カンドウ洞遺跡	竜丘	かんどうほらいせき			○	○	○	○	○		集落跡	一部発掘調査済。遺跡内に塚原14-16号古墳あり。
54	233	角遺跡	竜丘	かみいせき			○	○	○	○	○		散布地	
55	234	富山遺跡	竜丘	かみやまいせき			○	○	○	○	○		散布地	遺跡内に金山2-3号古墳・かりん塚古墳・金山2子塚古墳あり。



第6図 遺跡分布図

引用・参考文献

- 飯田市教育委員会1986『塚穴1号・2号古墳—昭和61年度特殊改良第一種事業—一般県道手塚原米川飯田線飯田市中宮敷地区内における埋蔵文化財発掘調査報告書—』
- 飯田市教育委員会1998『飯田の道跡—市内道跡詳細分布調査報告書—』
- 飯田市教育委員会2015『飯田市埋蔵文化財包蔵地図（市内道跡詳細分布調査報告書）』
- 市川包雄2002「近世信州における秋葉信仰のひろがり」『長野県立歴史館 研究紀要』第8号
- 市村成人ほか1970『下伊那史』第6巻室町時代 下伊那誌編纂会
- 太田藤四郎1925「巖助大僧正記」『続群書類従』第30集 上 続群書類従完成会
- 岡田正彦ほか1992『上久堅村誌』上久堅村誌編纂委員会
- 岡安光彦1984「いわゆる「素環の轡について—環状鏡板付轡の型式学的分析と編年—」『日本古代文化研究』創刊号
- 河西克造ほか2012『国道474号（飯商道路）埋蔵文化財発掘調査報告書5—飯田市内その5—井戸端道跡・下村道跡（鶯ヶ城跡）・芦ノ口道跡』長野県埋蔵文化財センター
- 小林正春ほか2007『飯田における古墳の出現と展開』飯田市教育委員会
- 近藤圭造1902「巖助往年記」『改定史籍集覧』第25冊別記類 近藤出版部
- 信濃史料刊行会1969『信濃史料』第15巻
- 信濃史料刊行会1974『信州下向記』『新編信濃史料叢書』第10巻
- 下久堅村誌刊行会1973『下久堅村誌』
- 長野県立歴史館2000「歴史の宝庫 秋葉みち—信濃古道をたどる—」文化財保護法50周年記念秋季企画展図録
- 平山 優2011『天正壬午の乱—本能寺の変と東国戦国史—』学研パブリッシング
- 山内尚巳ほか1984『歴史の道調査報告書Ⅶ—秋葉街道—』長野県教育委員会

第3章 鬼釜遺跡

第1節 遺跡と調査の概要

1 遺跡の概観

(1) 遺跡範囲と地形

鬼釜遺跡は天竜川左岸の飯田市上久堅地区に所在する。上久堅地区は尾根と谷が入り組む山間地である。鬼釜遺跡は権現山・二本松山付近を水源とする玉川によって形成された段丘に立地する。調査に着手した平成21年度の遺跡範囲（市教委1998a）は、北限が玉川で浸食された段丘崖の縁辺、南限が風張遺跡の立地する台地の裾、西限が玉川の屈曲する地点、東限が鬼釜遺跡の立地する段丘東側の尾根裾で、南北約250m、東西約900mに及ぶ。

鬼釜遺跡が立地する段丘は、玉川に沿う自然堤防とその背後の低地とに区分される（第9図）。自然堤防は幅約20mで、東西方向に延びる。低地には東から西に向かい流下する複数の流路の存在が調査によって明らかとなった。なお、平成27年3月、市教委より飯田市区域に分布する遺跡範囲の見直しがなされ、鬼釜遺跡の範囲は、自然堤防と低地の一部に変更された（第7図、市教委2015）。

(2) 過去の調査

調査対象範囲には久堅神社の境内が含まれた。『下伊那史』（下伊那誌編纂会1955）によると、「玉川左岸の同じ台地緑字宮ノ原の久堅神社境内右横手にあった石室の内墳、明治25年頃に発掘して数多の遺物を得た」とある。直刀・管玉・金環・轡・土師器（埴・高坏）・須臾器（坏・甌・埴瓶）が出土し、上久堅小中学校に所蔵されたと記載されている。この古墳は鬼釜古墳と命名され、発掘調査開始時点では、久堅神社境内にこの鬼釜古墳の石室と伝わる石（天井石等）が祀られていた。

平成9・11年度、鬼釜遺跡周辺の農地保全型基盤整備事業（以下、農地整備）に伴う市教委による試掘調査がなされたが、遺構・遺物は確認されなかった（第8図、市教委1998、2000）。

平成10年度には、今後の道路建設と埋蔵文化財保護の調整資料とすることを目的に、遺跡の範囲や内容を確認するための試掘調査が県教委により実施された（第8図、県教委2000）。トレンチ調査の結果、自然堤防（県教委報告書では「尾根部」と呼称）と低地（県教委報告書では「谷部」と呼称）が認められた。自然堤防上ではピットなどが検出され、中世集落が存在すると推測された。低地では遺構が確認されなかった。

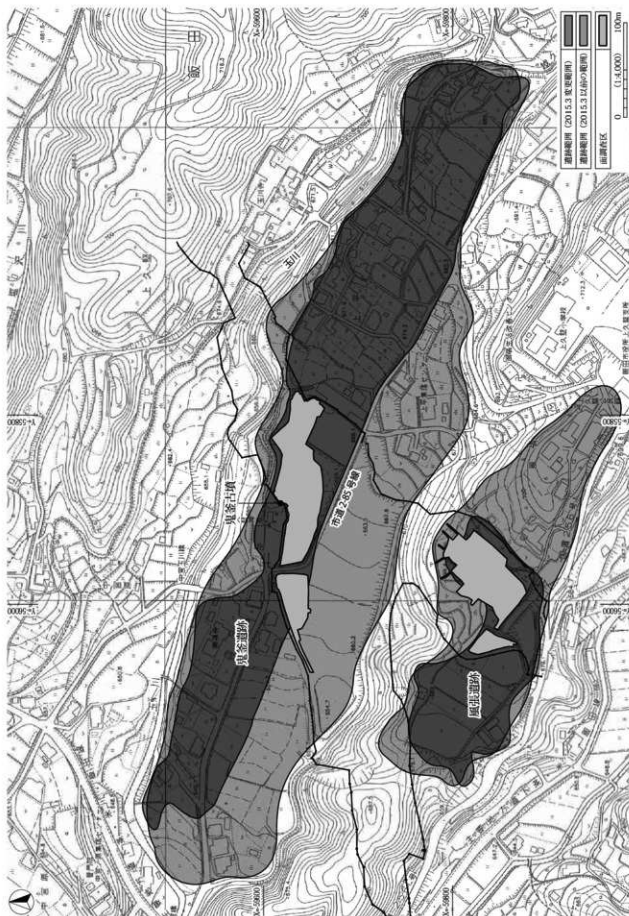
2 調査の概要

試掘調査結果から、県教委は鬼釜遺跡の保護措置として、自然堤防上での本発掘調査、低地でのトレンチによる水田遺構の有無の確認調査が必要と判断した。

(1) 確認調査

平成21年9月10日～平成22年1月15日、調査対象地内（35,300m²）における確認調査を実施した（第8図）。調査にあたっては、調査区をほぼ東西に縦断する市道2-85号線を境に北側を1区、南側を2区とした。

1区に23本、2区に8本のトレンチを掘削し、土層断面観察と遺構検出を実施した。その結果、調査区



第7図 鬼釜遺跡・風張遺跡 遺跡範囲図



第8図 鬼釜遺跡 調査範囲図

の北側を流れる玉川の縁辺部に沿って東西方向に自然堤防が延び、背後に低地が広がっていることが判明した(第9図)。さらに、自然堤防上では、Ⅰ層もしくはⅡ層を剥いだⅤⅠ層上面で縄文時代の竪穴建物跡、縄文時代と推定される土坑、平安時代の竪穴建物跡、土坑等を確認した。

また、ⅤⅠ層上面より下層では遺構が確認できなかった。低地で3条の流路跡を確認し、自然堤防側の流路(流路跡1)に堆積したⅣ層から縄文時代中期の土器と石器が多数出土した。なお、低地の土層断面観察で、畦畔等の水田遺構は確認できないものの、水田土壌と考えられる層をとらえることができた。この土壌を科学分析(珪藻、花粉、プラント・オパール分析)した結果、低地に堆積するⅡ層(中世)とⅢⅠ層(平安時代)から植物珪酸体が検出され、水田稲作が行われていた可能性が高いとの報告を得ている。

以上から、自然堤防上と流路跡1を対象として面調査を実施した。流路跡2・3はトレンチ調査に留めた。

(2) 調査の課題

飯田市上久堅地区の広範囲に及ぶ発掘調査としては北田遺跡が著名である。この北田遺跡では縄文時代早・中期、弥生時代後期、古墳時代後期の竪穴建物跡が多数確認されている。遺跡の位置は玉川を挟んで鬼釜遺跡の対岸にあたるため、両遺跡の自然堤防上における遺構分布や集落変遷を検討することを課題とした。

鬼釜古墳は、正確な所在地が不明であり、鬼釜古墳の存否を確認することを課題とした。

低地では、流路跡1のⅣⅠ層から出土した縄文時代中期の遺物包含層調査を課題とした。

なお、平成21年度、飯田市上久堅小学校所蔵遺物の資料調査を行い、同校に直刀(3本)、鉄製馬具(槽1点)、須恵器の埴瓶1点が所蔵されていることを確認した(第97図)。

(3) 調査の方法

①調査区の設定

調査対象地は広いため、便宜上の調査区を設定した。調査対象地は農地整備後の水田もしくは畑となり、明確な地形変換点が認められない。なお、Ⅰ区は、確認調査の結果から自然堤防部分を①区、低地部分を②区と分けた。

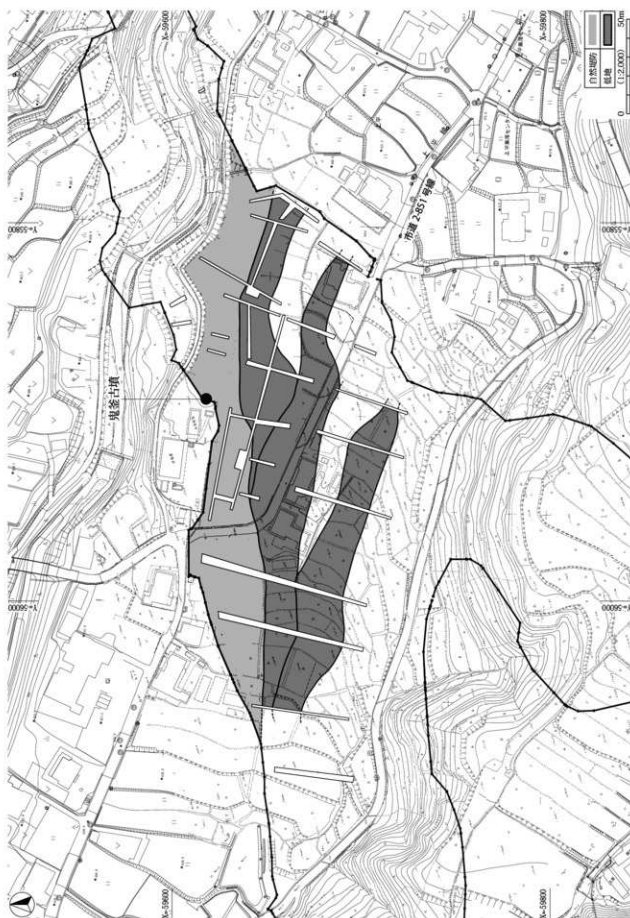
②自然堤防での調査

久堅神社境内を除くⅠ-①区は農地整備による造成がなされ、ⅤⅠ層上面を検出面として調査を実施した。その結果、縄文時代中期の竪穴建物跡と土坑、平安時代の竪穴建物跡と土坑、古墳時代の古墳(鬼釜古墳)と土坑、平安時代以降の掘立柱建物跡と土坑、中世の掘立柱建物跡などを確認した。これらの遺構は自然堤防のほぼ全域に分布していた。

発見した鬼釜古墳の直下には弥生時代の遺物包含層(基本土層、鬼釜古墳Ⅲ層)が遺存したが、それ以外の場所で確認された遺構の遺存状況は悪く、特に縄文時代の竪穴建物跡(SB14・16)は埋土がすでに現在の耕作(ⅠⅠ層)で削平され、畑とビートを検出するにとどまった。

③鬼釜古墳の発見

久堅神社境内には、鬼釜古墳の石室に利用されたと伝承されている石が残っていた。この石は、横穴式石室の側壁石、天井石と推測した。市教委の遺跡分布図をみると、鬼釜古墳の位置は鬼釜遺跡内にある自然堤防上とされている(市教委1998)。しかしながら、鬼釜古墳の正確な位置は、墳丘が遺存しないこと



第9図 鬼釜遺跡 地形区分図

や境内にある石室の石が原位置を留めている可能性が低く、地表面観察だけで推定することは困難な状況にあった。

今回の調査地点は石室の石の隣接地にあたる。調査では、まず、石室の石の東側で半円形にめぐる溝跡を検出した。溝跡は調査区外まで延び、この溝跡が円形に巡っていたと仮定すると、溝跡の直上付近に、現在の石室の石が位置するため、石は動かされたと判断できた。また、溝跡からは古墳時代後期の土器が出土し、飯田市上久堅小学校所蔵の埴瓶の時期（6世紀前半）と同時期であった。よって、溝跡は鬼釜古墳の周溝と推測し、調査を進めることとした。

周溝に囲まれた内部（以下、盛土部分）は、墳丘が削られて無く、石室の推定場所には近代以降の掘削が及んでいた。なお、この掘削された穴（SX01～03）から古墳の奥壁もしくは側壁石と考えられる石が出土し、穴は石室の石の抜き取り痕跡と考えた。

④低地での調査

低地の流路跡1では、縄文時代中期の遺物包含層（IV1層）上面を調査面とした。遺構を確認できなかったが、ほぼ全域から縄文時代中期の土器と石器が出土した。遺物の分布は自然堤防側に多く、鬼釜古墳と縄文時代中期の竪穴建物跡（SB14・16）付近に集中していた。任意ではあるが、土器がより集中するとみえる箇所をIV1層上面からIV1層下面まで掘り下げを実施した。

なお、発掘作業時の出土遺物の記録は、一定のまとまりがみられた範囲を任意にSQ01～03として取り上げたが、本報告に際して、これらをIV1層遺物包含層として扱うこととした。



久堅神社境内に残る鬼釜古墳と伝わる石室の石

3 調査経過

平成21年度（発掘作業）

- 4月1日 受委託契約締結
 8月21日 事前現地協議（飯田国道、埋文センター）。主として鬼釜遺跡の確認調査を行うことを確認
 9月10日 重機稼働開始。ダンプトラックによる排土運搬開始
 9月18日 1-①区1トレンチで平安時代の竪穴建物跡（SB05）を検出
 9月25日 1-①区2トレンチで県教委の試掘トレンチと3・4トレンチで、県教委試掘調査報告書記載の「谷部」を確認
 9月28日 発掘作業開始式
 10月1日 1-①区1トレンチⅢ1層から須恵器出土
 10月5日 1-①区10トレンチⅣ1層から縄文時代中期土器出土
 10月9日 2区の防草シートを業者委託で除去
 10月21日 1-②区21トレンチで流路跡2を検出
 10月22日 1-②区16トレンチⅢ層から縄文時代中期の土器と打製石斧出土
 10月27日 1-①区16トレンチⅤ1層から縄文時代早期の押型文土器出土。2区23トレンチで平安時代の竪穴建物跡（SB01）確認。埋土から灰釉陶器出土
 11月9日 飯田市立上郷考古博物館「月よう会」遺跡見学
 11月26日 現地説明会（見学者22名）
 11月27日 現地説明会（見学者12名）
 12月4日 1-①区2トレンチで科学分析用土壌採取。
 12月7日 埋め戻し作業開始（～1月15日）



発掘作業開始式



平安時代竪穴建物跡の検出

平成21年度（基礎整理作業）

- 1月5日 基礎整理作業開始
 2月10日 飯田市立上久堅小学校学校開放講座で調査成果を報告
 3月31日 基礎整理終了



平安時代の竪穴建物跡炭化物・焼土の調査

平成22年度（整理作業）

- 4月1日 受委託契約締結
 本格整理作業開始（整理作業は、井戸端遺跡、下村遺跡（鶯ヶ城跡）、芦ノ口遺跡と並行して実施）。図面修正開始
 4月13日 台帳・測量の整理開始
 12月6日 トレンチ成果の整理開始
 2月8日 遺物（注記）台帳作成開始
 3月31日 本格整理作業終了

平成23年度（発掘作業）

- 4月1日 受委託契約締結
 4月14日 事前現地協議（飯田国道・埋文センター）。重機稼働開始
 4月18日 発掘作業開始式
 4月28日 2-①区で平安時代の竪穴建物跡（SB02）検出
 6月7日 2-①区自然堤防上の久堅神社隣接地から、半円形にめぐり、調査対象地外に延びる溝跡を検出



ラジコンヘリによる空中写真撮影

第3章 鬼釜遺跡

- 6月9日 同溝跡埋土から古墳時代須恵器が出土。この段階で、鬼釜古墳の周溝と推測した。
- 6月15日 2-①区、ラジコンヘリによる空中写真撮影
- 6月16日 排土の場外搬出開始
- 6月22日 1-①区、IV1層上面で縄文時代土器・石器が多数出土
- 7月6日 1-①区、自然堤防上の遺構検出で掘立柱建物跡の柱穴を多数確認
- 7月7日 飯田市立上久堅小学校での資料調査で、過去に鬼釜古墳発掘（明治25年頃）で出土したと伝わる直刀・馬具・須恵器埴坂の所蔵を確認
- 7月13日 2-①区、発掘作業終了
- 7月15日 1-①区、鬼釜古墳周溝内（以下、盛土部分）のトレンチ調査開始
- 7月21日 同トレンチ土層断面観察で、暗褐色土の盛土を確認。盛土から古墳時代の管玉と勾玉が出土
- 7月22日 同盛土から江戸時代～明治時代の陶磁器出土。鬼釜古墳墳丘は近代以降に削平され、盛土（以下、近代以降の盛土）されたと判断
- 7月25日 同トレンチで、石室の奥壁石と推定される石を検出
- 8月3日 同トレンチから古墳時代の鉄鏝が出土
- 8月4日 近代以降の盛土の掘り下げを開始。掘削土は篩にかけて微細遺物を取り出すこととする
- 8月10日 近代以降の盛土の下には、弥生時代の遺物含有層、（基本土層、鬼釜古墳Ⅲ1層・Ⅲ2層）が残っていることが分かる
- 8月11日 1-①区、自然堤防上で、縄文時代の竪穴建物跡（SB14）検出。埋土は現在の耕作で削平されているとわかる。
- 8月22日 1-①区、縄文時代の竪穴建物跡（SB08）で石組が検出
- 8月28日 現地説明会（見学者116名）
- 9月2日 飯田市立上久堅小学校6年生の発掘体験を実施（鬼釜古墳周溝の埋土掘り下げ）
- 9月7日 鬼釜古墳の盛土部分から耳環出土
- 9月28日 鬼釜古墳の石室推定地点SX01～04を確認。出土遺物からSX01～04は近代以降に掘削されたと判断。飯田市立上久堅公民館主催の遺跡見学
- 9月29日 鬼釜古墳周溝埋土から、須恵器農を中心とする土器集中を確認
- 10月11日 盛土部分掘削土の篩作業開始。ガラス小玉を発見
- 10月13日 SX04出土の奥壁石・側壁石を取り上げる。
- 10月14日 飯田市立上久堅小学校同窓会の遺跡見学
- 10月20日 1-①区、ラジコンヘリによる空中写真撮影
- 10月24日 1-①区、自然堤防上で縄文時代の陥し穴（SK175）検出
- 10月25日 鬼釜古墳下の弥生時代含有層の精査開始
- 10月26日 長野県遺跡調査指導委員会（当時）による調査指導
- 11月2日 1-①区、重機による自然堤防から低地のトレンチ調査開始
- 11月9日 SK174底部付近から3点の鉄製品出土。内1点は馬具と推定。他の調査事例と比較・検討し、SK174を馬の



現場での遺物洗浄



鬼釜古墳周溝の検出



現地説明会



IV1層遺物包含層調査

- 埋葬土坑と考える
- 11月10日 SK174出土鉄製品の取り上げ（遺物周囲の土ごと取り上げたものあり）弥生時代遺物含有層の下に堆積する縄文時代遺物包含層（基本土層、鬼釜古墳IV層）から縄文土器片出土
- 11月15日 飯田市教育委員会渋谷恵美子主宰による鬼釜古墳の視察。教示を受ける
- 11月18日 馬の埋葬土坑（SK174）の報道公開
- 11月19日 長野県立歴史館でSK174出土鉄製品のX線写真撮影。鉄製品は3点とも馬具と判明（鞍金具2点、雲珠1点）
- 11月22日 伊那谷自然友の会理事松島信幸氏による鬼釜遺跡の地形・地質指導
- 11月23日 現地説明会（参加者84名）
- 12月7日 鬼釜古墳の縄文時代遺物包含層の掘り下げ開始
- 12月9日 発掘作業終了式。引き渡し現地協議（飯田国道・埋文センター）
- 12月12日 SK192を検出。重機による調査区内の埋め戻し開始
- 12月15日 SK192完掘
- 12月19日 埋め戻し終了。発掘作業終了

平成23年度（基礎整理作業）

- 12月20日 基礎整理作業開始。センターで記録類の整理
- 1月5日 原因の記載内容確認開始
- 1月16日 遺物（注記）台帳作成開始
- 1月24日 図面台帳作成開始
- 1月26日 写真整理開始
- 2月2日 図面修正開始
- 2月6日 遺物注記開始
- 2月7日 長野県遺跡調査指導委員会（当時）笹澤 浩委員による鬼釜古墳出土遺物の調査指導
- 3月6日 京都大学名誉教授浅原信生氏による馬の埋葬土坑（SK174）出土骨の鑑定
- 3月31日 基礎整理作業終了

平成26年度（整理作業）

- 4月1日 受委託契約締結
- 4月7日 整理作業員の作業開始
- 4月14日 遺物注記開始
- 4月23日 遺構図、全体図修正作成開始
- 6月9日 土器接合開始
- 6月13日 アルコールを用いた鉄製品のクリーニング。遺構のデジタルトレース開始
- 7月15・16日 長野県立歴史館で金属製品のX線撮影
- 9月1日 復元、土器実測、トレース、拓本開始
- 10月7日 石器実測・トレース開始
- 10月20日 (株)文化財ユニオンに応急的保存処理業務委託の締結
- 11月26日 飯田市立上久堅小学校から(伝)鬼釜古墳出土須恵器提瓶借用。埋文センターで実測、写真撮影を行う
- 12月11日 信州大学理学部教授原山智氏による石器・石製品の石材指導



上久堅小学校6年生 発掘体験



縄文時代竪穴建物跡 9号の調査



馬の埋葬土坑 報道公開



上久堅公民館主催の遺跡見学会

第3章 鬼釜遺跡

- 1月6日 遺構計測開始と遺構計測表作成開始
- 1月20日 国交省飯田国道事務所建設監督官高橋寿氏、整理状況の視察
- 2月10日 愛知学院大学教授藤澤良祐氏による中世土器・陶磁器の指導
- 2月13日 信毎書籍印刷（株）と遺物写真撮影業務委託の締結
- 3月2日 信毎書籍印刷（株）による遺物写真撮影開始
- 3月3日 馬具研究者宮代栄一氏による鬼釜遺跡SM01（鬼釜古墳）出土馬具の指導
- 3月18・19日 飯田市教育委員会へ鬼釜遺跡出土縄文土器の資料調査
- 3月23日 作業員作業終了
- 3月31日 整理作業終了

平成27年度（整理作業）

- 4月1日 受委託契約締結
- 4月6日 整理作業員開始
- 5月11日 遺構図版作成開始
- 5月18日 土器観察表作成開始
- 7月16日 原稿作成開始
- 7月22日 鉄製品の実測開始
- 7月31日 土器図版レイアウト開始。以後、石器等遺物図版レイアウトを進める。
- 11月17日 遺物写真撮影委託業務開始（株式会社信毎書籍印刷）
- 12月18日 印刷業者決定（鬼灯書籍株式会社）
- 1月5日 入稿開始
- 3月18日 整理作業員終了
- 3月28日 報告書納品



長野県遺跡調査指導委員会 整理係委員による調査指導



図面整理

第2節 基本土層

基本土層序は、鬼釜遺跡と鬼釜古墳のそれを分けて設定した（第10図）。

鬼釜遺跡の基本土層序は、平成21年度の確認調査におけるトレンチ土層断面観察で共通して確認される土層を鍵層と捉え、Ⅰ～Ⅴ層に分けた。各層は低地と自然堤防上で堆積状況が異なり、自然堤防上では現在の水田層（Ⅰ層）直下がⅤ層となる。後世の水田等の造成によりⅡ～Ⅳ層が削平を受けたと考えられる。

鬼釜古墳の基本土層序は、近世以降の盛土の下層に弥生時代の遺物包含層、その下から縄文時代遺物包含層が確認され、鬼釜古墳Ⅰ～Ⅴ層に分けた。鬼釜古墳は調査前まで久堅神社境内であったため、水田造成等の影響を受けなかったと考えられる。

なお、本報告で提示する鬼釜古墳の基本土層は、発掘作業時の呼称Ⅰ層をⅠ層、2～15層をⅡ層、16層（上）をⅢ1層、16層（下）をⅢ2層、17層をⅣ層、18層をⅤ層とする。以下、各々の土層堆積状況を記す。

鬼釜遺跡基本土層

Ⅰ層：農業基盤整備事業による造成土を基調とする現在の水田層。鬼釜古墳を除く調査対象地のほぼ全域に堆積する。土質・色調・酸化鉄集積状況の差から、2分層した。

Ⅰ1層：10YR 3/1 黒褐色。シルト。水田層。

暗灰色化（グライ化）し、酸化鉄が集積する。

Ⅰ2層：10YR 4/1 褐灰色。シルト。Ⅰ層以前の水田層。

低地（流路跡1～3）に堆積する。暗灰色化（グライ化）し、下部に酸化鉄が集積する。

Ⅱ層：10YR 3/1 低地（流路跡1）に堆積する黒褐色シルト。中世の水田層。

Ⅰ層の耕作でⅡ層が削平された可能性が高く、流路跡2・3では確認できない。暗灰色化（グライ化）し、黄褐色ブロックが混入する。

古瀬戸後期の緑釉小皿1点と青磁碗が1点出土している。

Ⅱ層の上層は、Ⅰ2層の耕作で削られたと考えられるため、畦畔等の水田遺構は確認できない。

土壌のプラント・オパール分析を実施し、イネ珪酸体が5,400個/g 検出され、水田稲作が行われたと考えられる。

Ⅲ層：低地（流路跡1）に堆積する黒色土で、色調とシルト質の差によって2分層した。

Ⅲ1層：10YR 2/1 黒色。シルト。平安時代の水田層。

Ⅲ2層が水田土壌化したものと考えられる。

Ⅲ1層の上層は、Ⅱ層の耕作で削られたと考えられる。土壌のプラント・オパール分析を実施し、イネ珪酸体が3,000個/g 検出され、水田稲作が行われたと推定される。

平安時代と推定される須恵器が1点出土している。

Ⅲ2層：10YR1.7/1 黒色。シルト。

著しく黒色化し、湿地等により形成された層と推定される。

土壌のプラント・オパール分析を実施し、イネ珪酸体が2,400個/g 検出され、水田稲作が行われたか、Ⅲ1層の混入が明瞭でない。

Ⅳ層：低地（流路跡1）に堆積し、色調と土質の差によって3分層した。

Ⅳ1層：10YR 4/3 にぶい黄褐色。シルト。縄文時代中期の遺物包含層。

東から西に緩やかに傾斜している。遺物はⅣ1層上～中位で出土量が多い。

IV 2層：10YR 4/2 灰黄褐色。シルト。

IV 3層：10YR 4/1 褐灰色。シルト。低地（流路跡1）の自然堤防側に分布する。

IV 2層の堆積により削平された可能性が高い。砂質を帯び、特に下部は砂質が強い。

V層：自然堤防堆積層で、土質と色調から2分層できる。

V 1層：10YR 3/2 黒褐色。シルト。上位は黒色分が強く、花崗岩風化層と花崗岩粒が混入する。縄文時代～中世の遺構検出面。縄文時代の遺物包含層。縄文時代早・中・後期、弥生土器、土師器が出土した。このうち弥生時代以降の遺物は上層からの混入と考えられる。

V 2層：10YR 4/6 褐色。シルト。砂質を帯び、花崗岩粒を礫が多量混入する。

V 1層の母材層と考えられる。遺構と遺物は確認できない。

鬼釜古墳基本土層

I層：表土。現代の水田耕作が及ばなかった盛土部分のみに堆積する。

II層：盛土部分に堆積する近代以降の盛土と盛土の下層で確認した近代以降の穴（SX01～04）の埋土を一括した。調査時、盛土を2～8・9・14・15層、この埋土を10～13層と呼称した。19世紀～20世紀の陶磁器が出土。

III層：色調と土質の違いから、2分層できる。

III 1層：10YR 1.7/1 黒色。シルト。黒色化し、IV層ブロックが混入する。調査では16層（上）と呼称した。弥生時代遺物包含層。

盛土部分のなかで近代以降の削平が及ばなかった場所で確認された。

縄文時代中期土器と弥生時代最終末土器、古墳時代後期土器が出土している。

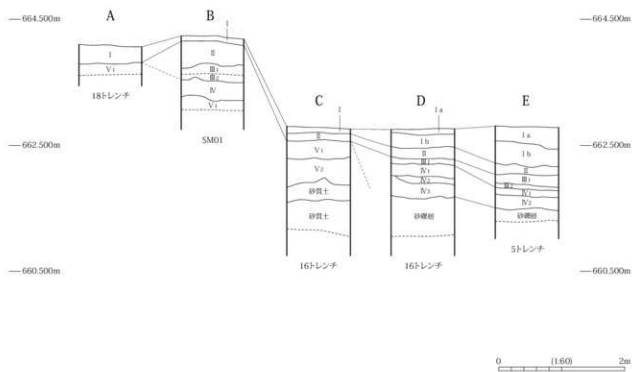
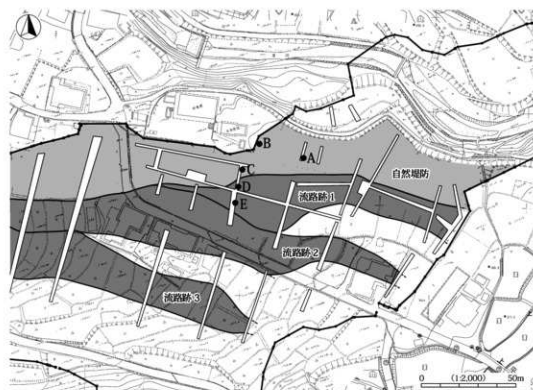
III 2層：10YR 3/3 暗褐色。シルト。弥生時代遺物包含層。調査では16層（下）と呼称した。

III 1層との境界は不明瞭で、境界線は細かな凹凸がある。盛土部分の西側に分布する。弥生時代最終末の土器が出土している。

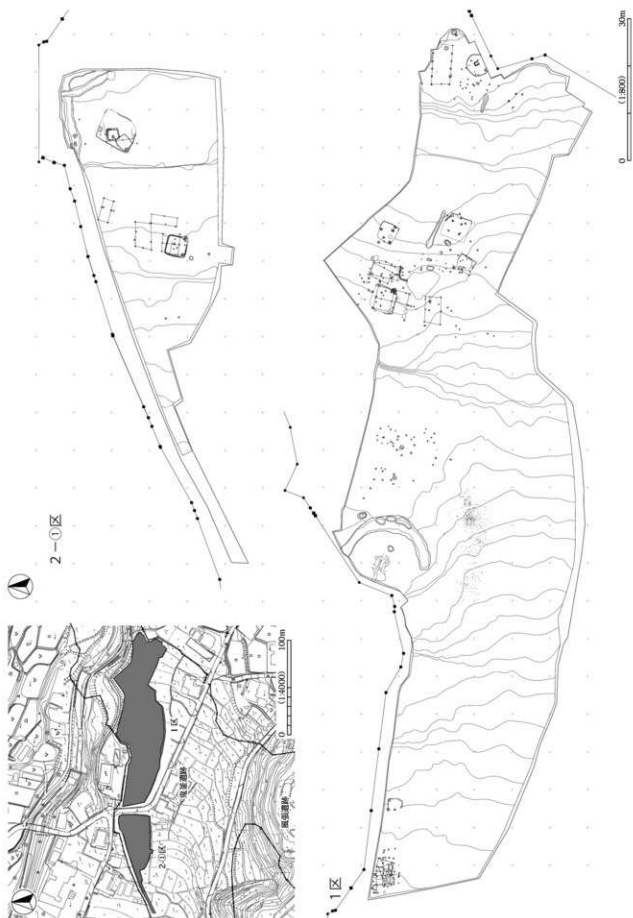
IV層：10YR 4/3 にぶい黄褐色。シルト。炭化物を少量混入し、砂質を帯びる。縄文時代の遺物包含層。縄文時代土坑（SK192）の検出面。調査では17層と呼称した。

IV層は鬼釜古墳の盛土部分において、III層の下で確認された層である。盛土部分のなかで近世以降の削平が及ばなかった場所で確認された。縄文時代早・中期土器、甕状垂飾が出土している。出土遺物と土質、土層堆積状況から、鬼釜遺跡V 1層に対比できる可能性が高い。

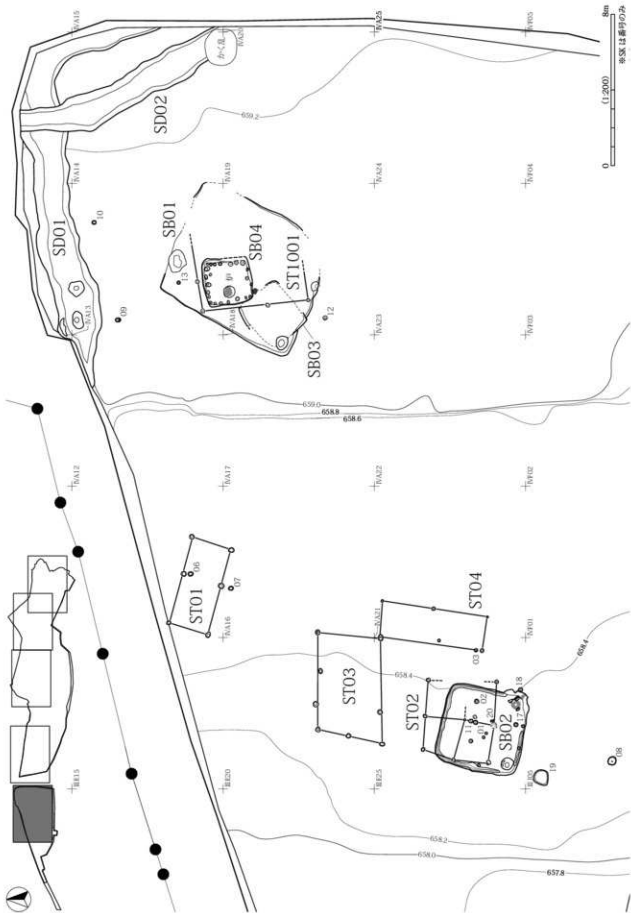
V層：10YR 5/6 黄褐色。シルト。かなり砂質を帯び、花崗岩粒を多量に含む。調査では18層と呼称した。盛土部分～周溝の範囲に分布する。土質及び土層堆積状況から、鬼釜遺跡V 2層に対比できる可能性が高い。



第10図 基本土層図



第11図 遺構全体図1



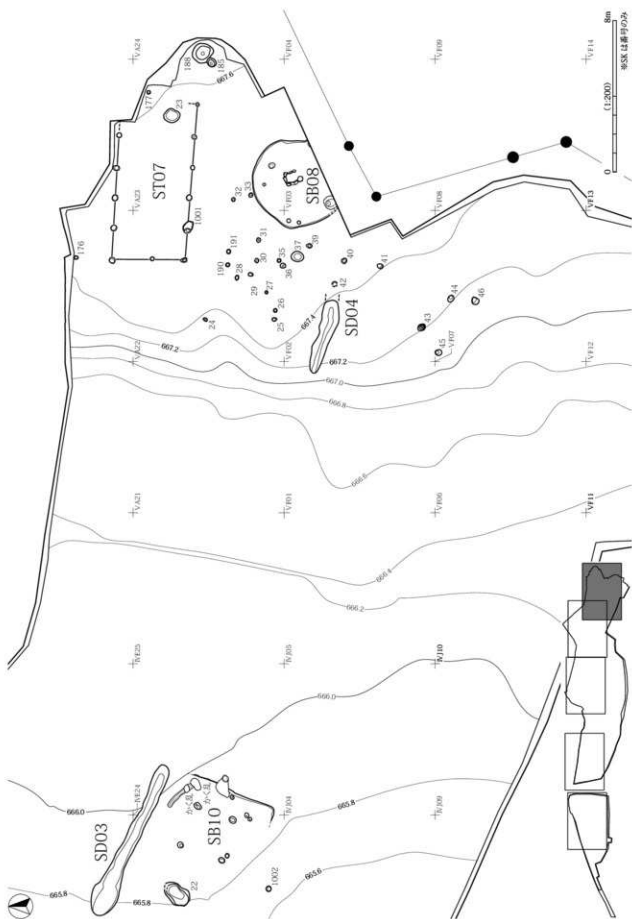
第12図 遺構全体図2



第13图 遺構全体図3



第15図 遺構全体図5



第16图 遺構全体图6

第3節 遺構

1 縄文時代

(1) 概要

縄文時代の遺構は、自然堤防上のV1層上面で検出した。竪穴建物跡3軒、土坑23基で、自然堤防の中央部と東側に分布する。

一方、自然堤防南側の低地にはIV層が堆積し、うちIV1層が遺物包含層である。IV1層からは、縄文時代中期後半を中心とした土器と石器が出土している。調査は、IV1層上面で遺構・遺物の検出を行った。遺物が集中していた箇所をSQ01～03と呼称し、IV2層上面まで掘り下げた。

本報告ではIV1層出土遺物を遺物包含層出土遺物として扱い、必要に応じて、()内に西・中・東の分布のまとまりを記載している。遺物の表記は、図版番号とした。

なお、第4節で触れるが、土器の時期については、「長野県における縄文時代中期土器の編年と動態」(宮崎・綿田2013)(以下「協会」とする)の編年を採用した。

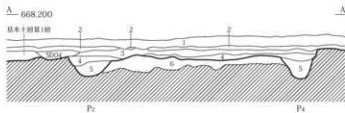
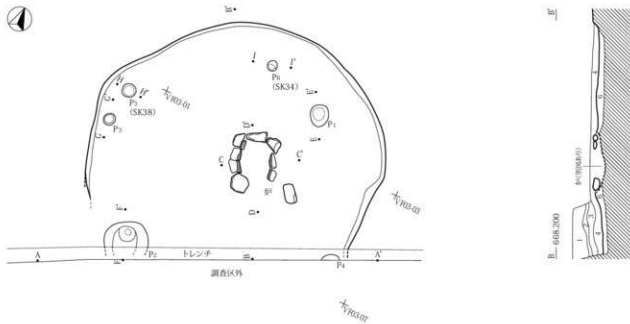
(2) 竪穴建物跡

SB08 [遺構：第17・18図 PL1・2、土器：第53図、石器：第77・79・80・86図]

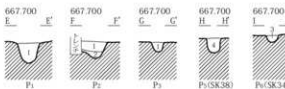
位置：1-①区、VA22・23、VF02・03グリッド。南側が調査区外となる。 検出・調査状況：V1層で検出した。V層と埋土が類似し、検出は難しく、土質の違いと東壁のわずかな立ち上がりを手がかりに住居跡の輪郭を確定した。 重複関係：なし。 埋土：2層に分層され、掘方をもつ。5層は4層がピットに落ち込んだ土壌で、P1～3に共通する。 規模・形状・構造：推定値であるが長辺4.8m、短辺4.59m、深さ20cmを測る。西側に入口を有する隅丸五角形を想定した。主軸はN23°Wである。床面は硬くなく、明瞭な貼床とはいえない。 柱穴：P1～6が柱穴と推測する。P2は底に柱痕跡と考えられる窪みがある。 炉：長方形石囲炉。炉石は20～30cmの角礫9点からなり、内側が被熱している。飯田市域の炉が、奥壁寄りでも奥壁に対して横に長い形態が多い点から類推すると、本遺構は西側が入口、東側が奥壁となる可能性がある。炉内からは炭化物を微量に検出したが、焼土はなかった。 出土遺物：P1から1(第53図)が出土した。炉の南側からは深鉢形土器3・5・7・8・9・10・13・14と横刃形石器56が出土している。炉の西側からは磨製石斧89、横刃形石器51が出土している。東壁際からは、打製石斧32、横刃形石器52・55・60、磨製石斧92が出土している。以上の遺物は4層出土で、出土した標高をみるとほぼ床面にあたり、一括資料として把握できる。深鉢形土器9はほぼ完形である。 時期：中期後葉 協会9～10期。

SB14 [遺構：第19・20図 PL2・3、土器：第54・55図、石器：第81図]

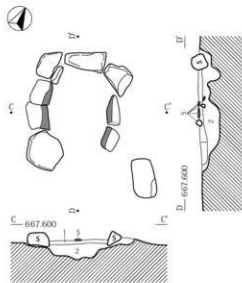
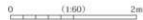
位置：1-①区、IVD12・13・17・18グリッド。 検出・調査状況：V1層で検出した。埋土と炉が確認されたため、竪穴建物跡を想定して調査を進めた。 重複関係：掘込みが確認できず、不明である。推測ではSB16と重複する可能性が高い。 埋土：柱穴を除き、後世の削平により確認できない。 規模・形状・構造：不明。主軸は埋土、炉、P1を結ぶ線を軸とすると、N41°Wである。北寄りに土器敷炉を有する。貼床はない。 柱穴：P1・3・4・6～9の7基である。埋土は黄褐色および褐色のシルトである。埋土：炉の南東側に2基がある。炉に近い方から、埋土1(19)、埋土2(20)とした。埋土1は破片であったが、埋土2は縄文地文の深鉢で割れることなく胴部中央から底までが残存し、ほぼ垂直に埋設されていた。埋土2の脇から深鉢30が出土している。柱穴と埋土の位置関係から柄鏡形敷石住居の祖型とな



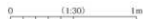
A-A'・B-B'		
1	10YR4/2 灰黄褐色土	しまりあり 粘性なし 靱餅作土 (基本土層1層)
2	10YR4/6 褐色土	しまりあり 粘性なし 靱餅作土 (基本土層1層)
3	10YR5/6 黄褐色土	しまりあり 粘性なし
4	10YR4/3 に近い黄褐色土	しまりあり 粘性なし
5	10YR4/3 に近い黄褐色土	しまりの中あり 粘性なし (P2層に相当)
6	10YR5/2 灰黄褐色土	しまりあり 粘性なし 廻方



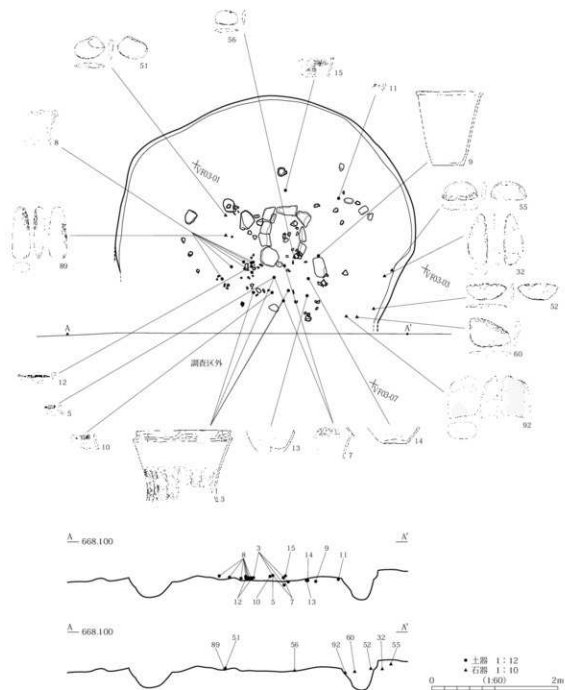
P1・P2・P3・P4・P5		
1	10YR4/3 に近い黄褐色土	しまり 粘性強い
2	10YR3/4 暗褐色土	しまり 粘性強い
3	10YR4/2 灰黄褐色土	しまりあり 粘性なし 炭化物混入
4	10YR2/2 黒褐色土	しまりあり 粘性なし



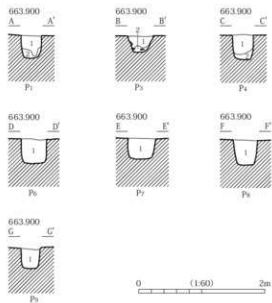
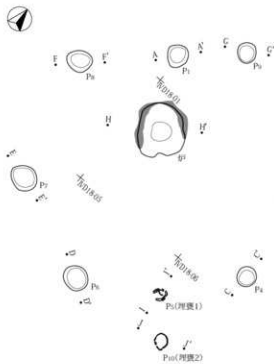
D1		
1	10YR4/2 灰黄褐色土	しまりあり 粘性なし 炭化物混入
2	10YR4/3 に近い黄褐色土	しまりあり 粘性なし 炭化物微量混入



第17図 SB08 遺構図

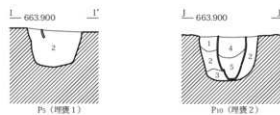
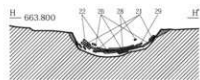
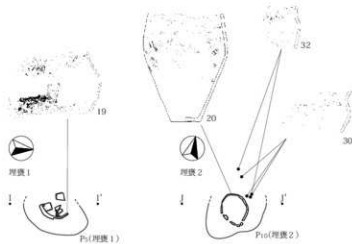
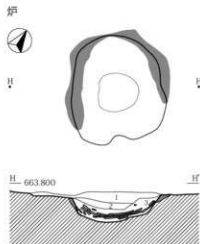


第18圖 SB08 遺物出土状況圖



Pi・Pi・Pi
 1 10YR4/6 褐色土 しまりあり 粘性弱い 砂を少量含むシルト層
 2 10YR5/8 黄褐色土 しまりあり 粘性弱い 砂を少量含むシルト層

Ps・Ps・Ps・Ps
 1 10YR4/6 褐色土 しまりあり 粘性弱い φ2mm炭化物混入

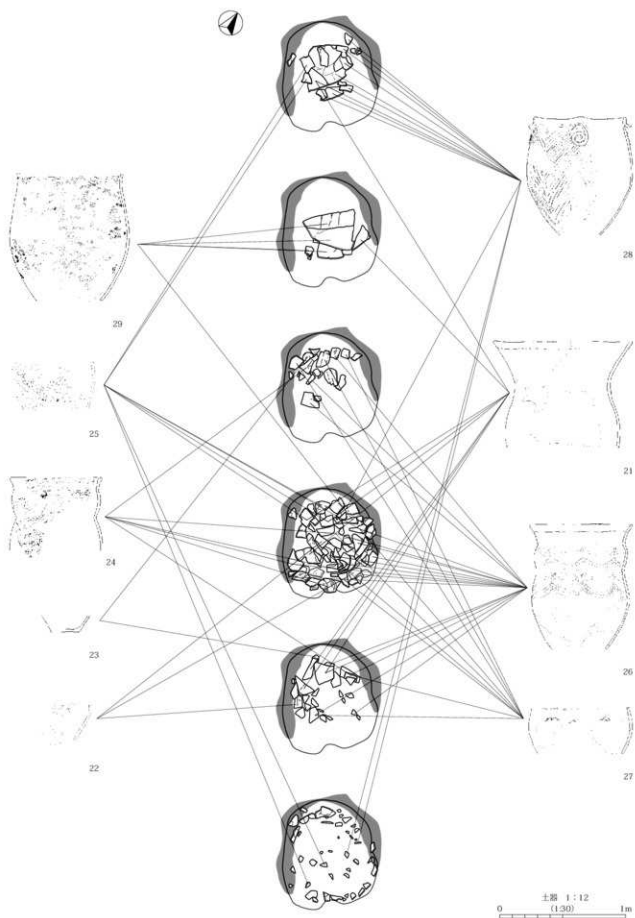


H'
 1 10YR4/6 褐色土 しまりあり 粘性弱い 砂を少量含むシルト層
 2 10YR3/3 暗褐色土 しまりあり 粘性強い 砂を少量含むシルト層
 3 — 黒褐色土 炭化物混入 焼熟した黒褐色土少量混入

Pi (埋設1)・Pi (埋設2)
 1 10YR5/6 黄褐色土 しまり 粘性強い 砂を含むシルト質
 2 10YR4/4 褐色土 しまり 粘性強い 砂を含むシルト質
 3 — 炭化物混入
 4 10YR4/4 褐色土 しまり強い
 5 — 褐色土

土層 1:12
 0 (1:30) 1m

第19図 SB14 遺構図



第20図 SB14 土器散佈 遺物出土状況図

る潮見台型（本橋1998）の可能性が高いが、円形で柱穴が五角形に巡る岡谷市長塚3号住例なども含め、茅野・諏訪地域の唐草文系土器を有する竪穴建物跡に共通する形態の可能性もある。 炉：側面は被熱し、炉底部から側面にかけて土器片が割れ敷かれ、5重に敷設されていた。 出土遺物：遺物は埋甕とその周辺及び炉とピットからの出土に限られる。炉の敷設土器は9個体の土器に分けられ、特に1個体の半分以上の破片が4点みられた。上からほぼ深鉢25・28・29・21・24・23・26・27・22の順に重なる（第20図）。28は、全体が著しく被熱を受け灰褐色に変色し、きわめて脆く劣化していた。2番目以下の土器は若干の被熱に止まる。これらの土器は、沈線文を地文とする下伊那AタイプV類28、縄文を地文とする下伊那Aタイプ29、無文の在来系粗製土器21、条線地文の下伊那AタイプII類の24、下伊那AタイプII類26で、地文が全て異なる土器が敷かれていた。P7からは横刃形石器61、埋甕2の下から黒曜石の剥片が出土した。 時期：中期後葉 協会11期。

SB16 [遺構：第21図 PL3、土器：第56図]

位置：1-①区、IVD13グリッド。 検出・調査状況：V1層で検出した。埋甕と、炉と推測した焼土を含む黒褐色土が検出され、竪穴建物跡を想定して調査を進めた。 重複関係：推測ではSB14と重複する可能性が高い。 埋土：柱穴を除き、後世の削平により確認できない。 規模・形状・構造：不明。主軸は埋甕、炉、P2を結ぶ線とすると、N11°Eである。床面、掘方の詳細は削平によって不明である。 柱穴：柱穴と推測したピットはP1～10の10基で比較的規模が揃っている。 埋甕：埋甕33は胴部最大径以下で欠いた状態で、逆位で埋設されていた。 炉：中央やや北よりに被熱硬化した黒色土が確認されたため、地床炉と推測した。 出土遺物：埋甕33以外に出土遺物は無い。埋甕は下伊那AタイプIII類である。 時期：中期後葉 協会10期。

(3) 土坑 [遺構：第12～16図]

V1層で検出された土坑は、213基である。土器が出土している土坑はSK08・22・78・96・97・141・164・174・185・192の10基で、縄文土器のみが出土している土坑はSK22・185・192、石器のみがSK186とSK187である。重複関係から確実に縄文時代に比定できる土坑はSK188がある。

ここでは、縄文時代に比定した土坑について個別に記述するが、SK175を陥し穴と推測しているため、これを含め報告する。

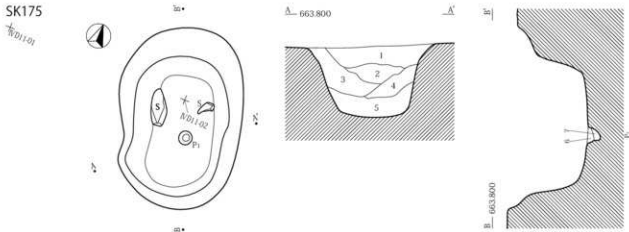
なお、以下、本報告での断面分類名は以下にする（凡例参照）。

- a1類 底部は平坦で、壁はほぼ直立気味に立ち上がり、深さは比較的浅い。
- a2類 底部は平坦で、壁はほぼ直立気味に立ち上がる。
- b1類 底部は湾曲し、壁がなだらかに立ち上がり、深さは比較的浅い。
- b2類 底部は湾曲し、壁がなだらかに立ち上がる。
- b3類 底部は湾曲し、壁がほぼ直立気味に立ち上がる。
- c類 底部は狭く、断面が「V」字状になる。
- d類 底部は狭く、中間にテラスをもつもの。

SK175 [遺構：第22図 PL3]

位置：1-①区、IVD06・11グリッド。 構造：長辺1.93m、短辺1.28m、深さ7cmを測る。楕円形で、断面形はb3、底面に逆茂木と推定される坑底ピットがある。 出土遺物：なし。 時期：不明。

SK175

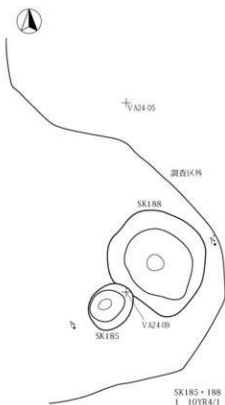


SK175

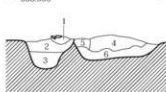
- 1 10YR2/1 黒色土 しまりあり 粘性なし ϕ 2~4mm礫・炭化物混入 黒色化銅屑 暗褐色土がブロック状に混入
 2 10YR3/2 黒褐色土 しまりあり 粘性なし ϕ 2~3mm白色粒子・炭化物混入 黒色土がブロック状に混入
 3 10YR3/3 暗褐色土 しまりあり 粘性なし ϕ 4~5mm礫・炭化物混入 暗褐色土と褐色土混入層
 4 10YR2/2 黒褐色土 しまり強い 粘性なし ϕ 2~4mm白色粒子混入 褐色土ブロックと黒色土ブロック混入層
 5 10YR4/3 に近い黄褐色土 しまりあり 粘性なし 黒色土ブロックと褐色土ブロック混入
 6 10YR4/6 褐色土 しまり 粘性あり
 7 10YR4/4 褐色土 しまり 粘性あり

0 (1:40) 1m

SK185・188

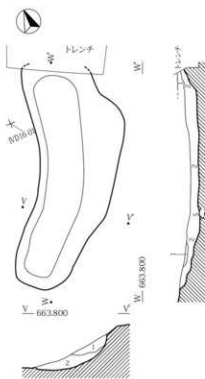


A-668.000



0 (1:40) 1m

SK186



- SK185・188
 1 10YR4/1 暗褐色土 しまり 粘性あり ϕ 5mm礫混入
 2 10YR3/3 暗褐色土 しまりあり 粘性なし 炭化物・ ϕ 5mm礫混入
 3 10YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性なし ϕ 5mm礫・炭化物混入
 4 10YR2/2 暗褐色土 しまりあり 粘性なし ϕ 5mm礫・炭化物混入
 5 10YR3/3 暗褐色土 しまりあり 粘性なし ϕ 10mm礫・ ϕ 5mm礫・炭化物混入
 6 10YR4/3 に近い黄褐色土 しまりあり 粘性なし ϕ 5mm礫・炭化物・黄褐色土混入

SK186

- 1 10YR4/6 褐色土 しまりあり 粘性なし 褐色土(基本土層、鬼室古墳遺層)主体層 やや締まる 黒色土ブロック混入
 2 10YR4/4 褐色土 しまりあり 褐色土(基本土層、鬼室古墳遺層)主体層 やや締まる 黒色土・暗褐色土ブロック混入

SK187

- 1 10YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性弱い 褐色土(基本土層、鬼室古墳遺層)主体層 若干砂質
 2 10YR3/4 暗褐色土 しまり強い 粘性なし 褐色土(基本土層、鬼室古墳遺層)主体層 黒色土ブロック混入 若干砂質
 3 10YR4/3 に近い黄褐色土 しまり強い 粘性なし 褐色土(基本土層、鬼室古墳遺層)主体層 土質は2層に類似 花崗岩粒多量混入 若干砂質
 4 10YR4/4 褐色土 しまり強い 粘性なし 褐色土(基本土層、鬼室古墳遺層)主体層 3層より色調は明るく花崗岩粒少量混入

第22図 SK175・185・186・187・188 遺構図

SK188 [遺構：第22図]

位置・検出：1-①区、VA24グリッド。SK185と重複し、本土坑が切られる。構造：長辺1.30m、短辺0.92m、深さ25cm。楕円形、断面形はb1。出土遺物：なし。

SK192 [遺構：第23図 PL4、土器：第56図、石器：第80・85・88・89図]

位置：1-①区、IVC15グリッド。調査状況：鬼釜古墳調査時のトレンチにより北西側を失ったが、出土した横刃形石器等はその時点で位置を記録している。埋土：黄褐色土ブロックが混入し、埋め戻されたと考える。構造：長辺1.30m、短辺1.08m、深さ54cmを測る。不正円形で断面形はb1。

出土遺物：深鉢36口縁部直下～底部付近の土器片が、埋土1層上面で出土した。外面を上、径16cm程度の小礫を支えとして水平に置かれていた。36は唐草文系Ⅱ期新段階で、直下に下伊那AタイプⅣ類の深鉢37口縁部と、敲石113が伴う。土坑北側で刃器85、横刃形石器58、剥片103・104、西側から横刃形石器54、南側で横刃形石器59・剥片106、東側から剥片105・横刃形石器53が出土している。時期：中期後葉 協会11期。

(4) 遺物包含層での遺物出土状況

① 鬼釜古墳の下層 [遺構：第24図]

前項で述べたように、本遺跡では、基本的に縄文時代の包含層であるV1層の上部は1層によって削平されていたが、鬼釜古墳の盛土部分の直下ではV1層に対応する可能性がある土層（鬼釜古墳Ⅳ層）が遺存していた。

鬼釜古墳Ⅳ層のSX02北側からは縄文時代早期の土器底部202と胴部203（第63図）が出土している。同南側からは縄文中期後葉深鉢205と中期前葉とみられる篋状垂飾1（第90図）が出土している。このことから、鬼釜古墳Ⅳ層は幅があるものの、縄文時代早期まで遡る可能性がある。

② 鬼釜古墳以外の自然堤防上

自然堤防上には基本土層V層が堆積する。縄文時代中期後葉の土器は、そのうちSB08周辺とSB14・16周辺から出土している。SB08の周辺には中期前葉の土器38（第57図）とⅢ1層の211（第63図）の一部が、西に25mほど離れたIVE24グリッドからは縦型の石匙16（第75図）が出土した。

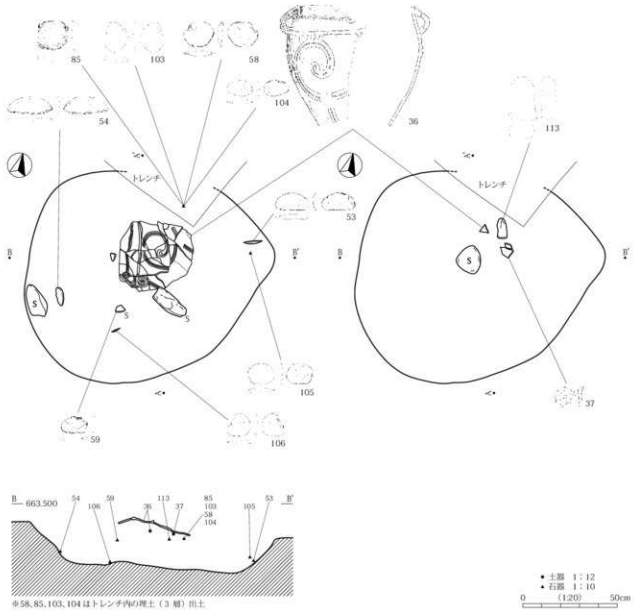
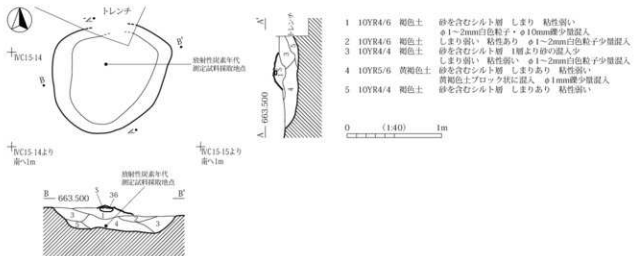
1区の最も西側端で掘立柱建物跡が密集しているIVB12グリッドからは、堀之内2式土器41（第57図）が出土した。このことから、V層遺物包含層は縄文時代早期・中期前葉・中期後葉・後期の時間幅で捉えられる。V層出土土器は縄文土器だけで4201.5gである。

③ 低地の状況

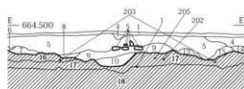
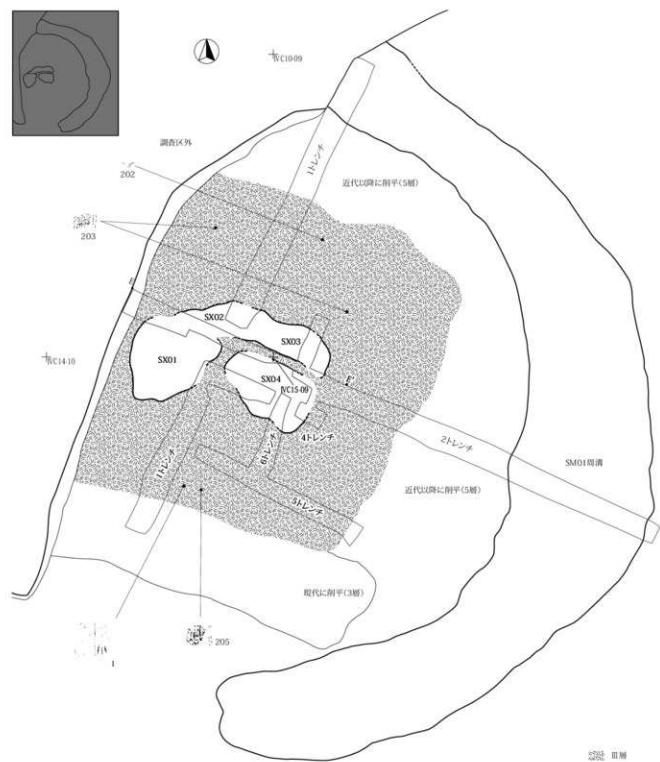
調査対象地内の低地（流路跡1）のほぼ全域に堆積するIV1層内出土遺物の一部について、出土土器の一括性を三次元的に捉えるために試験的にドット取り上げを行った。ここではそのまとまりを東から便宜的に東・中央・西として記載する。

IV1層遺物包含層（東）[遺構：第14図 PL4、土器：第57～61図、石器：第68・75・77～79・81・82・84・86～89図]

東西9.30m、南北9.60mの楕円形の区域を指す。この区域から24942.9kg出土した土器のうち7133点のNo取り上げを行った。出土土器は中期後葉中富式系99・101・104・105他と下伊那Aタイプ45・54・55他が主体で、在地系粗製土器深鉢72・73等が伴う。また、唐草文系Ⅱ期新段階の深鉢83や釣手土器137・138もみられる。土製品には土偶顔面1、腕3・4、土器片加工品としては7がみられる。石器は打製石斧33～35・39・40・45・47～49、石匙15、横刃形石器63・65・66～69・72・78・79・80、磨製石斧90・91・



第23図 SK192 遺構図・遺物出土状況



※土層注記は第27図参照

第24図 鬼釜古墳 IV層分布図

93・94、磨石108、敲石114と磨製石斧を転用した敲石96・97がみられる。その他の時期としては8～9期の焼町土器140、水Ⅱ式とみられる深鉢142が混入しているが、土器の主体は中期後葉 協会10～12期である。

IV1層遺物包含層（西）〔遺構：第14図 PL4、土器：第61図、石器：第77・78・82・83・85図〕

東西8.20m、南北5.10mの楕円形の区域を指す。この区域から7201.4kg 出土した土器のうち160点のNa 取り上げを行った。土器には下伊那 A タイプの深鉢143・146他、中富式系深鉢156・157他、唐草文系深鉢153がみられ、特に中富式系深鉢155は16m 離れた破片が接合した。石器は打製石斧44・38、刃器87・88、横刃形石器71・73・74・75他が出土している。この区域の土器の時期は中期後葉 協会10～12期である。

IV1層遺物包含層（中央）〔遺構：第14図、土器：第62図、石器：第78・79・82～84図〕

東西7.10m、南北8.00mの円形の区域を指す。この区域から8270.7kg 出土した土器のうち172点のNa 取り上げを行った。土器は下伊那 A タイプの深鉢166・169・171・172他、中富式系深鉢177・181・183・184他、在地系粗製深鉢173、石器は打製石斧43・46、横刃形石器70・76・77が出土している。この区域の土器の時期は中期後葉 協会10～12期である。

その他の地点

SB08の南西側で自然堤防から低地部へ落ち込む部分の本層からは、中期後葉の土器や土偶胴部2等の他に、縄文中期前葉の五領ヶ台Ⅱ式併行期の土器破片199・200（第63図）が出土し、同じ地点のⅢ層からも同時期の207・208・209・210（第63図）がまとまって出土している。石器はSQ03に近いIVH05グリッドからは黒曜石製石鎌12（第75図）が、SB14の南のIVD22グリッドからは打欠石錘116（第89図）が出土し、Ⅲ層でもSB08に近いVF02グリッドから黒曜石製石鎌10（第75図）がみられる。

2 弥生時代

(1) 概要

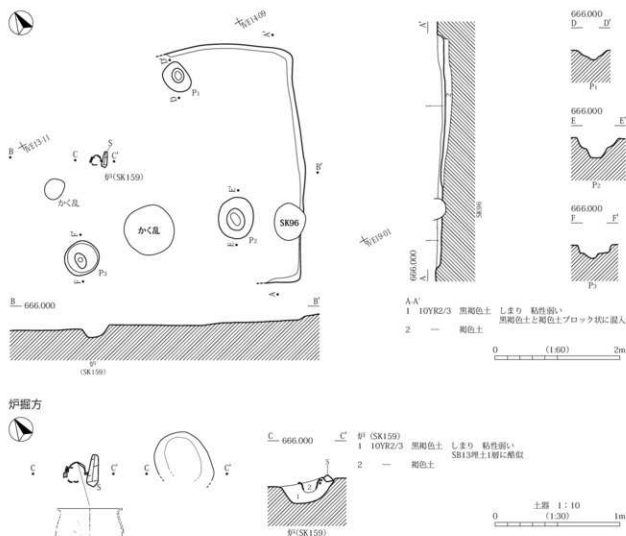
検出された当該期の遺構は、I区自然堤防頂部で確認された竪穴建物跡1軒である。自然堤防上は、現耕作土（I層）が縄文時代の遺物包含層（V層）まで及んでいるが、耕作が及んでいない鬼釜古墳の盛土部分では弥生時代の遺物包含層（鬼釜古墳Ⅲ1層・Ⅲ2層）が残っていた（第26図）。この竪穴建物跡構築時には、自然堤防上に弥生時代の遺物包含層が堆積していた可能性が考えられる。なお、低地では当該期の堆積層は確認されていない。当該期における低地での水田稲作の存否は不明である。

(2) 竪穴建物跡

SB13 〔遺構：第25図 PL4、土器：第64図〕

位置：1-①区、IV E13・14・18グリッド。 検出：V層上面。 重複関係：古墳時代以降の土坑であるSK96と重複し、本遺構が切られている。西側は現在の耕作で削平されていた。 埋土：1層で、10YR 2/3 黒褐色のシルト層である。2層は掘方である。 規模・形状・構造：平面形は方形と推測した。推定した主軸方向は、N63° W。柱穴は3基あり、P1から土師器と縄文土器が出土している。 炉：本遺構の中央やや西側にある。炉には甕227（炉体土器）が正位の状態で埋設されている。炉体土器の内外面に被熱痕跡はなく、土器内に焼土は堆積しない。また、約27cmの長方形の石が炉体土器の南東側に設置されている。 出土遺物：炉体土器のほか、埋土から土師器破片が少数出土した。 時期：炉体土器227から、弥生時代最終末に比定した。

第3章 鬼釜遺跡



第25図 SB13 遺構図

3 古墳時代

(1) 概要

検出された当該期の遺構は、自然堤防の頂部で確認された古墳（鬼釜古墳）1基で、周溝内から馬の埋葬土坑が確認されている。鬼釜遺跡にはこの古墳築造に係る集団の居住域が存在した可能性は低いと考えられる。

(2) 古墳

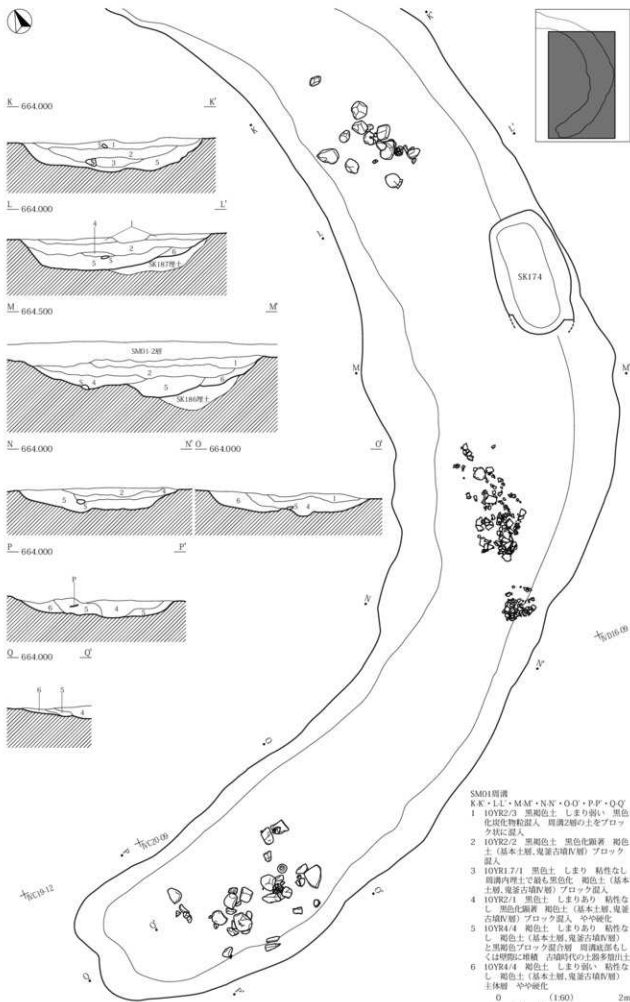
SM01（鬼釜古墳）〔遺構：第27～31・33・34図 PLA～8、土器：第64～67図、土製品：第68図、石器：第85図、石製品：第90図、金属製品：第91・92図〕

位置：1-①区、IVC10・14・15・19・20、IVD11・16グリッド。 調査前の状況：久堅神社の境内には鬼釜古墳のものとして伝承されている石室の石がある。その東側は高まっており、調査対象地内までのびている。この石室の石には天井石と推定できる石があり、東側の高まりが墳丘の残存とも考えられたため、現況測量図を作成した。 調査時の状況：踏査で確認された高まりの性格と、その周囲における周溝の存在

を確認することを調査の最優先課題とした。高まりの中央部を中心に十字にトレンチ(1・2トレンチ)を掘削し、土層断面観察と精査を行った結果、高まりは近代以降の盛土であることがわかった。また、調査区内では半円形に巡る溝跡を検出し、調査区外(久堅神社の境内)に延びて円形にめぐっていると推測できた。結果的に近代以降の盛土を囲むかのように周溝が確認されたことになり、周溝のみ遺存する古墳の可能性に留意して調査を進めた。なお、周溝内からは馬の埋葬土坑(SK174)を検出した。検出: V層上面で周溝を検出した。盛土部分の状況: 近代以降の盛土により、墳丘は残っていない。盛土の中央やや西側では不整形の落ち込み(SX01~04)を検出した(第33図)。SX04からは古墳の石室の奥壁と考えられる石が倒れた状態で出土し、SX01・02から古墳時代の高坏、坏が出土した(第34図)。しかしながら、SX01から近代以降(19世紀~20世紀)の陶磁器も出土している。高まりは近代以降(19世紀~20世紀)の盛土(5・6・14・15層)で、SX01~04は近代以降に掘削され、さらに5層堆積後にはかく乱(3・4層)が及んでいる。盛土部分の周囲が現代にかなりかく押されていることがわかった。なお、5層からは拳大の礫が並べられたような状態で確認され、礫上面から高坏286が出土した。規模・構造: SM01は、周溝から推定直径16m(周溝内側で計測)の円形と考えられる。周溝の北側と東側には途切れた場所がないため、前庭は南側か西側に存在したと推定される。石室: 遺存しない。石室が存在したと推定される場所にはSX01~04がある。周溝: 断面形は逆台形で、立ち上がりは墳丘側がやや急で、外側は緩やかに立ちあがる傾向がある。埋土は6層に分層できる。底面には基本土層V層を基調とした褐色土(周溝5・6層)もしくは黒色土(周溝4層)が堆積する。底面やや直上から出土した遺物は、周溝4層もしくは周溝5層に含まれる遺物である。周溝4層~6層が堆積した後に周溝2層が堆積する。周溝2層は黒色化が著しい土層で、古墳時代の土器を多量に含む。同層からは拳大~人頭大の礫が出土し、周溝の中央北側と南側の2箇所にまとまる状態で分布していた。周溝内遺構: 底面の精査で、土坑(SK174)が確認された。詳細は後述する。出土遺物: 5層が近代以降の盛土で、5層の下には近現代に掘削された穴(SX)がある。近現代の盛土からは、高坏286と坏285が出土した。また金銅製の耳環33と青銅製の耳環34、面繫金具4、刀17、刀子18・19・21・22・23・24、鉄鏃6・7・9・10・11・13・14、勾玉2、管玉3・4・5・6・7も出土した(第33図)。篩による検出の結果、近代以降の盛土からガラス小玉44点と白玉52が確認できた。

第27図 SM01 遺構図 土層注記

A・A'・B・B'・C・C'・D・D'・E・E'・F・F'				
基本土層、鬼釜古墳I層	1	10YR2/2	黒褐色土	赤土 木棺・草木多量混入
耕作土(近代)	2	10YR3/2	黒褐色土	しまり 粘性なし クラウ化 現耕作土(赤土層)
(鬼釜南側1層)	3	10YR3/3	黒褐色土	2層(赤土層)と褐色土(基本土層、鬼釜古墳I層)混合層 現耕作土(赤土層)
				木棺・草木多量混入
耕作土(近代以降の盛土)	4	10YR3/4	暗褐色土	しまり 粘性なし 色調は暗褐色土 炭化物混入 木棺・草木多量混入 近代以降の陶磁器出土
	5	10YR4/3	にぶい黄褐色土	砂質を帯びる 褐色土(基本土層、鬼釜古墳IV層)ブロック混入 近代以降の陶磁器出土
耕作土(近代以降に掘られた穴に埋まる土)	5-2	10YR3/3	暗褐色土	しまりなし 砂質 5層より暗褐色土多量混入
(基本土層、鬼釜古墳I層)	5-3	10YR3/4	暗褐色土	しまりなし 5-2層に類似 黄褐色土・黒色土ブロック混入
	5-4	10YR4/3	にぶい黄褐色土	しまりなし 褐色土(基本土層、鬼釜古墳IV層)ブロック混入
	5-5	10YR2/3	黒褐色土	しまり強い 砂質 土質は5-3層に類似
	5-6	10YR3/4	暗褐色土	しまりなし 砂質 小礫混入。本層は基本的に5層と同じ
耕作土(近代以降の盛土)	6	10YR4/3	にぶい黄褐色土	砂質 褐色土(基本土層、鬼釜古墳IV層)混入
(基本土層、鬼釜古墳I層)	7	10YR2/3	黒褐色土	土質は8層に類似 褐色土(基本土層、鬼釜古墳IV層)ブロック混入
	8	10YR2/3	黒褐色土	しまりなし 色調はやや黒色化を帯びる 黄褐色土と黒色土混合層
	14	10YR2/1	黒色土	しまり強い 粘性なし 粘性なし 褐色土 黒色土と褐色土(基本土層、鬼釜古墳IV層)ブロック混合層 炭化部分あり
SX01埋土	11	10YR3/4	暗褐色土	しまり 粘性なし
(基本土層、鬼釜古墳I層)	12	10YR3/1	黒褐色土	しまりあり 褐色土・黒色土ブロック混入
SX02埋土	9	10YR3/3	暗褐色土	しまりなし
(基本土層、鬼釜古墳I層)	10	10YR2/2	黒褐色土	しまりなし 褐色土(基本土層、鬼釜古墳IV層)ブロック混入
SX03埋土	13	10YR3/3	暗褐色土	14層と褐色土(基本土層、鬼釜古墳IV層)混入
(基本土層、鬼釜古墳I層)	15	10YR2/3	黒褐色土	しまり 粘性なし 黒色化 12層より黒色化は薄い 褐色土(基本土層、鬼釜古墳IV層)ブロック混入
基本土層、鬼釜古墳II層	16	10YR7/1	黒色土	しまり 粘性なし 黒色化顕著 層上部が最も黒褐色 褐色土(基本土層、鬼釜古墳IV層)ブロック混入 (弥生時代の遺物混入)
基本土層、鬼釜古墳IV層	17	10YR4/3	にぶい黄褐色土	しまりあり 砂質 炭化物・花崗岩混入。縄文時代中期の土器出土
基本土層、鬼釜古墳V層	18	10YR5/6	黄褐色土	しまりあり 砂質 層上部がややシルト化 炭質粘砂多量混入



SM01周溝

K-K'・L-L'・M-M'・N-N'・O-O'・P-P'・Q-Q'

1 10YR2/3 黒褐色土 しまり弱い 黒色
 炭化物粒混入 周溝2層の土をブロック
 状に混入

2 10YR2/2 黒褐色土 黒色化顕著 褐色土
 (基本土層、鬼釜古墳IV層) ブロック
 混入

3 10YR1.7/1 黒色土 しまり 粘性なし
 周溝内埋土で最も黒色化 褐色土 (基本
 土層、鬼釜古墳IV層) ブロック混入

4 10YR2/1 黒色土 しまりあり 粘性なし
 黒色化顕著 褐色土 (基本土層、鬼釜
 古墳IV層) ブロック混入 中今破化

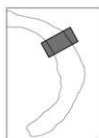
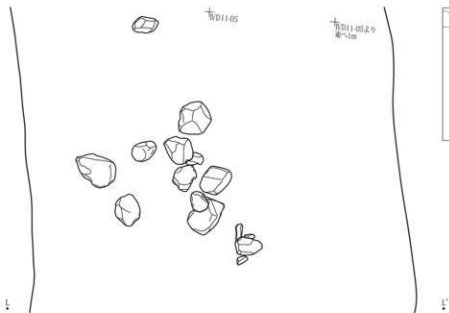
5 10YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性なし
 褐色土 (基本土層、鬼釜古墳IV層)
 と黒褐色ブロック混合層 周溝底部もし
 くは壁面に連続 古墳時代の土器多数出土

6 10YR4/4 褐色土 しまり弱い 粘性なし
 褐色土 (基本土層、鬼釜古墳IV層)
 主体層 中今破化

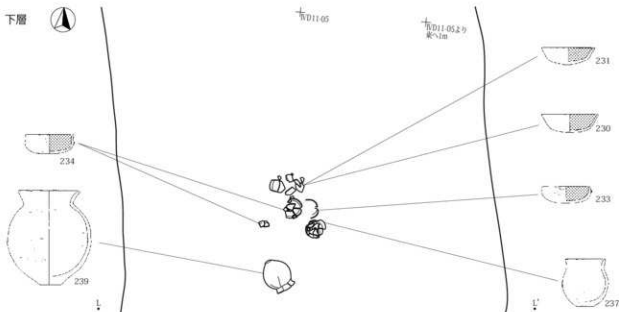
第28図 SM01 周溝 遺物出土状況図1

第3章 鬼釜遺跡

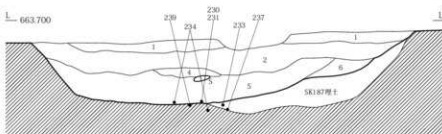
上層



下層



L. 663.700

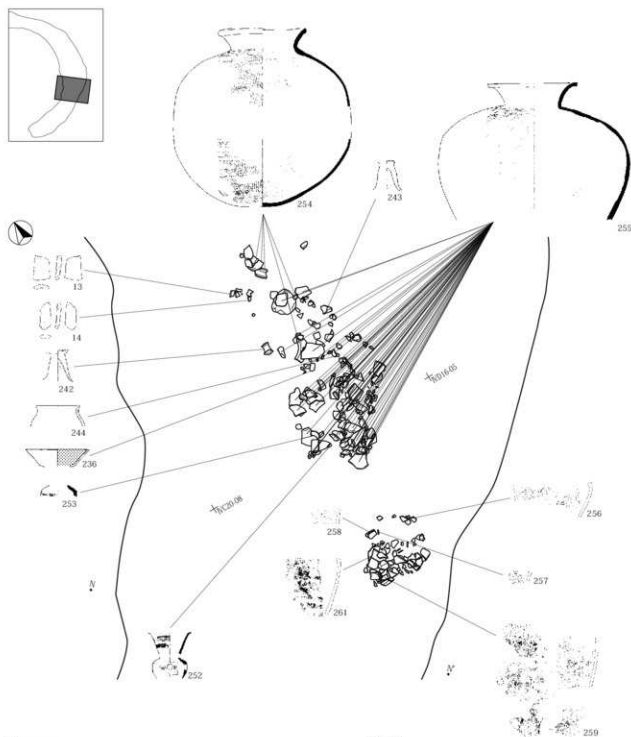


1' L' L'

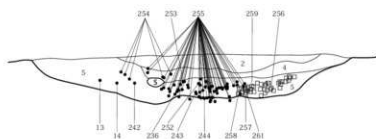
- 1 IOVR2/3 栗褐色土
しまり強い、黒色炭化物粘混入 周溝2層の土をブロック状に混入
- 2 IOVR2/2 黒褐色土
栗色化顕著 褐色土（基本土層、鬼釜古墳IV層）ブロック混入
- 3 周溝の埋込面に堆積
- 4 IOVR2/1 黒色土
しまりあり 粘性なし 栗色化顕著 褐色土（基本土層、鬼釜古墳IV層）ブロック混入 やや硬化
- 5 IOVR4/4 褐色土
しまりあり 粘性なし 褐色土（基本土層、鬼釜古墳IV層）と黒褐色ブロック混入 周溝底面もしくは埋込面に堆積 古墳時代の土路多量出土
- 6 IOVR4/4 褐色土
しまり強い 粘性なし 褐色土（基本土層、鬼釜古墳IV層）主体層 やや硬化

土層 1:10
0 (1.30) 1m

第29図 SM01 周溝 遺物出土状況図2



N. 664.000

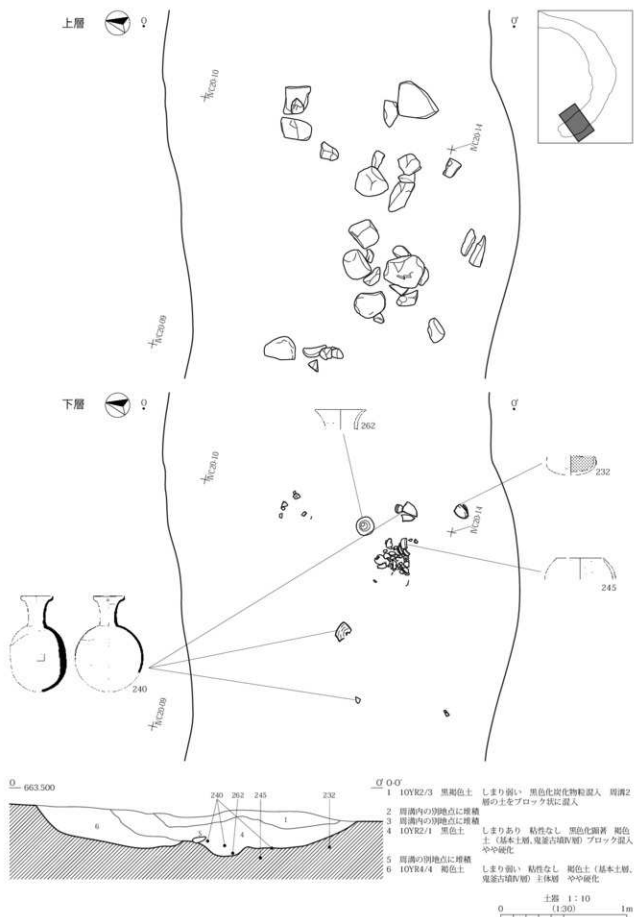


N NN

- 1 周溝内の別地点に埋積
1 10YR2/2 黒褐色土 黒色化顕著 褐色土（基本土層、甕蓋古墳IV層）ブロック混入
- 2 周溝内の別地点に埋積
4 10YR2/1 黒色土 しまりあり 粘性なし 黒色化顕著 褐色土（基本土層、甕蓋古墳IV層）ブロック混入、やや硬化
- 3 周溝内の別地点に埋積
5 10YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性なし 褐色土（基本土層、甕蓋古墳IV層）と黒褐色ブロック混入層 周溝底部もしくは早期に埋積 古墳時代の土多量混入土
- 4 10YR4/4 褐色土 しまり強い 粘性なし 褐色土（基本土層、甕蓋古墳IV層）主体層 やや硬化

□ 縄文土層
土層 1:10, 1:12
(1:30)
0 1m

第30図 SM01 周溝 遺物出土状況図3



第31図 SM01 周溝 遺物出土状況図4

一方SXの埋土では、SX01の3層から甕287、SX03の5層から環288、内黒環289・須恵器環290が出土した。このうち環288はSX01の3層出土土器と接合している。SX04の6層から弥生時代最終末期中島式の甕291、周溝からも同期の土器破片が出土している。なお、SX01から挾入打製石包丁83が出土した。いずれも原位置を留めていない。

周溝内では2層（以下、周溝2層と表記）の礫直下から古墳時代を中心とする土器が出土した。出土土器の総重量は約27.4kgを測る。土器は中央北側、中央部、南側の3箇所にとまると（第28～31図）。

中央北側では主に周溝5層（第29図L-L'）から小甕237、環233、壺239、環230・231・234、が出土した。何れも6世紀前半にあたる。

中央部では主に周溝5層（第30図N-N'）から、須恵器甕254・甕252、高環243が出土した。須恵器甕254は内外面の片面もしくは両面が剥離した破片が多量に出土した。同様の破片は周溝2層からも多量に出土した。さらに、土器片加工品13・14、高環242、環236、甕253が出土している。なお、須恵器甕254・255出土地点から約50cm離れた周溝5層では、縄文時代中期後葉（協会12期）の土器256・257・258・259・261が出土している。このうち256は下伊那Bタイプである。

南側では、主に周溝4層から提瓶240と鉢245、環232、弥生時代最終末期中島式の壺262等が出土している。

笹澤浩氏からは、上記3つのブロックに分かれて出土した須恵器甕は、色調と胎土から美濃須衛産、猿投産、大粒の花崗岩を含む地元産の3種類に分かれる可能性があるとの指摘を受けた。

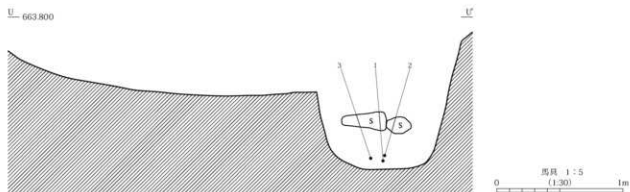
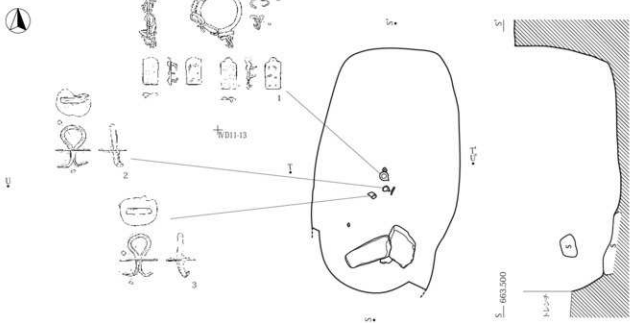
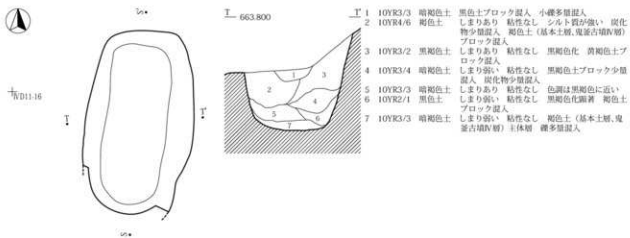
近代以降の盛土下層に堆積する弥生時代の遺物包含層の16層（鬼釜古墳Ⅲ1層）からは、6世紀の環（管理番号419、PL19）、弥生時代最終末期中島式の甕265・266・268・269・270・291が出土した。また、縄文土器272（在地系粗製土器）・271（加曾利E式系）・273（細線文土器）が出土している。時期：周溝出土遺物には、北側の5層から出土した環230・231・234等6世紀前半に比定されるものと、中央部の5層から出土した甕252・253や南側周溝4層から出土した提瓶240等6世紀末～7世紀初頭に比定されるものとに分かれることから、SM01には2段階存在すると推定する。

(3) 土坑

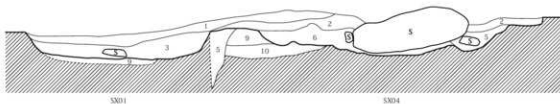
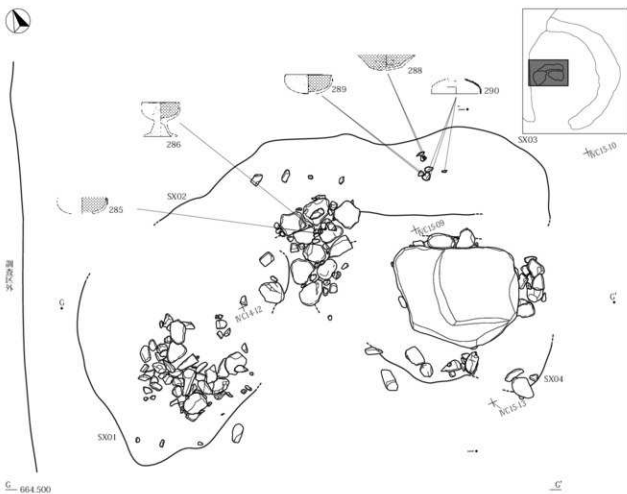
SK174 [遺構：第32図 PL6・7、金属製品：第91図]

位置：1-①区、IVD11グリッド。SM01の周溝内にある。検出：SM01周溝の底面精査で確認された。周溝埋土の掘り下り時には、本遺構の存在を確認できない。埋土：7層に分層した。埋土は底面の7層を除いて各層にはブロック土が混入する。3・5・6層は黒褐色土もしくは黒色土で、鬼釜古墳Ⅲ1層（16層）に由来する層を主体とする。重複関係：検出状況から、本遺構はSM01周溝掘削時に構築されていたと考えた。規模・構造：長辺推定2.04m、短辺1.25m、深さ103cmを測る。平面形は長方形。しかし、長辺方向の上端中央が外側にやや張り出すため楕円形に近い形状である。長辺方向は周溝と平行する。壁の傾斜は、長辺方向と短辺方向ともほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、中央がわずかに窪む。出土遺物：鉄製の馬具3点と土師器5点が出土した。鉄製の馬具は雲珠1、鞍金具2・3である。これら馬具と土師器1点は底面のほぼ中央部でまともに出土した。また、骨片が1片（約3mm四方）出土している。京都大学名誉教授茂原信生氏の鑑定によると、部位は不明とのことである。時期：宮代栄一氏からは、出土した雲珠と鞍金具は6世紀前半に比定できるとの指摘を受けている。性格：竜西（天竜川右岸）の飯田市域においては、馬骨と馬具が出た土坑が周溝内から数多く調査されており（註1）、これらは馬の埋葬土坑と理解されている。周溝内における土坑の位置と馬具の出土が共通していることから、本遺構は馬の埋葬土坑と推定した。

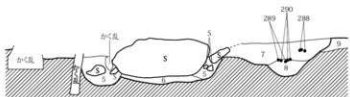
第3章 鬼釜遺跡



第32図 SK174 遺構図・遺物出土状況



1:664500



※285・286の垂直分布図は第33図にあり

G・G'・I-I'

- 1 10YR3/4 暗褐色土 しまり 粘性なし 砂質 褐色土と黒色土混合
褐色土は基本土層、鬼釜古墳IV層に極めて似る (SMO1 9層に對比)
- 2 10YR3/2 黒褐色土 しまり 粘性なし 砂質 褐色土 (基本土層、鬼釜
古墳IV層) 混入 (SMO1 15層に對比)
- 3 10YR3/4 暗褐色土 しまり 粘性なし 砂質 近代以降の陶磁器出土
基本土層、鬼釜古墳IV層混入 SX01埋土 (SMO1 11層に對比)
- 4 周溝内の別地帯に堆積
- 5 10YR3/2 黒褐色土 しまり 粘性なし 1層に似る 石室の割罫の石
の下部に埋まる土
- 6 10YR4/4 褐色土 しまり面 粘性なし 褐色土 (基本土層、鬼釜古墳IV
層) ブロックと暗褐色土ブロック混入 石室の割罫の石の下部に埋まる土
- 7 10YR2/3 黒褐色土 しまり 粘性なし 褐色土 (基本土層、鬼釜古墳IV
層) ブロック混入 SX03埋土 (SMO1 15層に對比)
- 8 10YR3/1 黒褐色土 しまりなし 砂質黒色ブロックと褐色土ブロック
混合層 褐色土ブロックは弥生時代遺物混入層 (SMO1 16層に對比)
- 9 10YR1.7/1 黒色土 しまり 粘性なし 黒色化陶器 層上部が最も黒
色化 褐色土 (基本土層、鬼釜古墳IV層) ブロック混入 古墳時代の土源
出土 基本土層、鬼釜古墳IV層 (弥生時代の遺物混入層) (SMO1 16層に
對比)
- 10 10YR4/3 に近い黄褐色土 しまりあり やや砂質 炭化物・花崗岩粒
混入 縄文時代中期の土源出土 褐色土 (基本土層、鬼釜古墳IV層)
(SMO1 17層に對比)

第34図 SX01～04 遺物出土状況図

註

1) 市教委2007では、「土塚」と表記。本報告では「土坑」を使用。

4 平安時代以降

(1) 概要

検出された遺構は、竪穴建物跡が7棟、掘立柱建物跡14棟、土坑182基、溝跡4条である。遺構は自然堤防上のほぼ全域に分布し、竪穴建物跡では同一地点で重複もしくは近接する状況も確認できる。遺構から出土した遺物は僅少で、遺構の帰属時期が特定できないものが多い。なお、掘立柱建物跡、土坑について、全てを記述していないため、遺構一覧表を参照されたい（DVDに収録）。

(2) 竪穴建物跡

SB01 [遺構：第35図 PL9、土器：第68図]

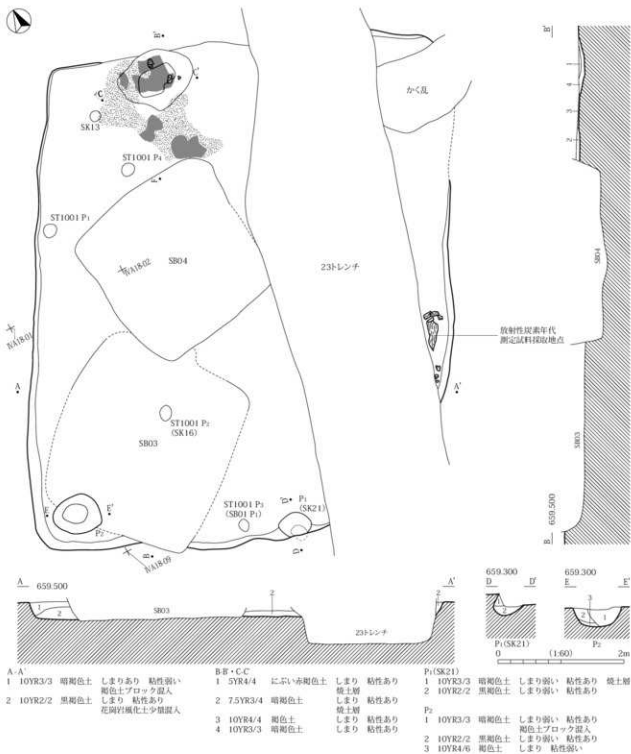
位置：2-①区、IVA13・14・17・18グリッド。 検出：平成21年度の試掘調査で本遺構の存在が確認され、平成23年度に本調査を実施した。基本土層V層を掘り込む。重複関係：SB03・SB04・ST1001P1~4・SK13と重複し、本遺構が古い。埋土：2分層した。形状・規模・構造：長辺8m、短辺は残存部で6.03m、深さは29cmを測る。平面形は長方形。主軸方向はN28°E。壁は斜めに立ち上がる。南西壁際のP2が柱穴の一つと推測した。カマド：北側西壁よりにカマドの残骸が確認されている。出土遺物：1層から光ヶ丘1号窯式とみられる灰釉陶器の碗293と土師器破片46.2gが出土した。また東側の床面上2層からは板状の炭化材が出土している。そのうち1点の年代は778calAD-903calAD（2σ68.6%）であった。時期：1層出土土器と炭化物の放射性炭素年代から平安時代に比定した。

SB02 [遺構：第36~38図 PL9、土器：第68図]

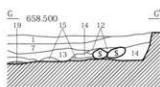
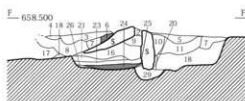
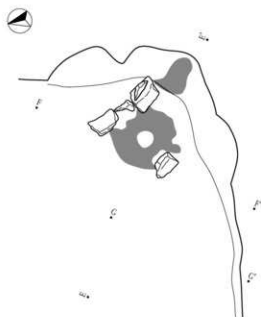
位置：2-①区、ⅢE25グリッド。 検出：V層上面。重複関係：ST02（P5・6・7・8）、SK01・11・20と重なり、本遺構が古い。埋土：埋土は11層で、床下は12層と13層の2層に分けた。11層は焼土と建築部材と推定した炭化材を含む炭化物層である。炭化材は本遺構の長辺方向に平行もしくは直交する状態で分布する。炭化材は本遺構の上屋が倒れたものと推定した。形状・規模・構造：長辺4.32m、短辺4.38m、深さ37cmを測る。平面形は方形。主軸方向はN104°E。壁はほぼ垂直に立ち上がる。柱穴は南西隅のP5をはじめ壁際のP1・7・10が該当するとみられるが、その他のピットは性格不明である。周溝は南西隅を除いて全周している。カマド：南東壁にあり、29層に分層され、そのうち7、13~15層は竪穴建物跡の埋土と、掘方が住居跡の掘方12・13層と共通する。左右両側に袖石が配され、その他の石が周辺に散乱している。袖石間に火床がみられ、強く被熱している。出土遺物：埋土1層から須恵器環296、埋土2層と3層から土師器の破片、炭化物層の直上層である8層から土師器（皿か盤）口縁部295と弥生時代最終末（中島式）の壺297が出土した。炭化物層である11層からは虎浜山〜丸石2号窯式とみられる灰釉陶器碗294が出土した。11層出土炭化物は、放射性炭素年代測定によって較正暦年代994calAD-1025calADと判明した。時期：11層出土土器と炭化物の放射性炭素年代から11世紀前半に比定した。

SB03 [遺構：第38図 PL9、土器：第68図 PL20]

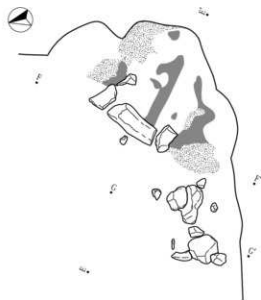
位置：2-①区、IVA17・18グリッド。 検出：SB01掘り下げ中に焼土を発見し、別遺構の可能性を考え、トレンチ断面観察で壁の立ち上がりを確認するなどして、本遺構の存在を確認した。プランは推定部分が多い。重複関係：SB01より新しく、SB04・ST1001より古い。埋土：埋土は3層に分層され、床面直



第35図 SB01 遺構図

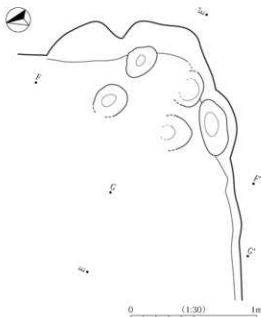


カマド焼土・炭化物分布



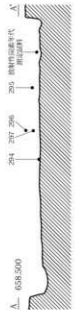
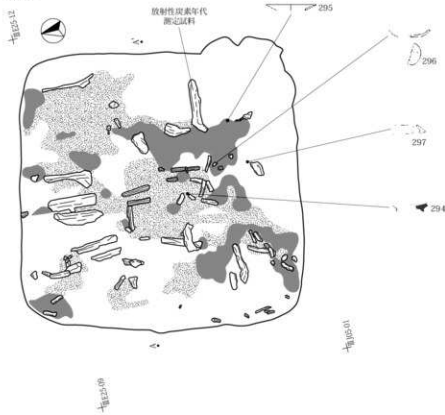
1	10YR4/2	灰黄褐色土	しまりあり 粘性なし φ10~20mm炭化物混入
2	10YR4/2	灰黄褐色土	しまりあり 粘性なし
3	10YR4/4	褐色土	しまりあり 粘性なし 赤褐色粘土混入
4	10YR4/2	灰黄褐色土	しまりあり 粘性なし
5	2.5YR4/4	にぶい赤褐色土	しまりあり 粘性なし
6	2.5YR5/8	明赤褐色土	しまりあり 粘性なし 焼土層
7	10YR4/4	褐色土	しまりあり 粘性なし 炭化物混入 赤褐色粘土少量混入 (A・A'-B-F 2層に対比)
8	10YR4/3	にぶい黄褐色土	しまりあり 粘性なし
9	10YR3/3	暗褐色土	しまりあり 粘性なし
10	10YR5/6	黄褐色土	しまりあり 粘性なし 赤褐色粘土混入
11	10YR4/2	灰黄褐色土	しまりあり 粘性なし
12	2.5YR4/8	赤褐色土	しまりあり 粘性なし
13	10YR4/3	にぶい黄褐色土	しまりあり 粘性なし 焼土層・炭化物アロックス混入 (A・A'-B-F 9・10層に対比)
14	10YR5/4	にぶい黄褐色土	しまりあり 粘性なし
15	10YR4/2	灰黄褐色土	しまり 粘性あり 炭化物混入 (A・A'-B-F 9・10層に対比)
16	10YR3/4	暗褐色土	しまりあり 粘性なし 赤褐色土アロックス混入
17	10YR4/1	褐色土	しまり 粘性あり 炭化物混入
18	10YR6/6	明黄褐色土	しまりあり 粘性なし
19	10YR2/1	黒色土	しまりあり 粘性なし 炭化物層
20	10YR5/1	暗灰色土	しまり 粘性あり 粘土質
21	10YR3/3	暗褐色土	しまり 粘性あり 炭化物混入
22	10YR4/3	にぶい黄褐色土	しまりあり 粘性なし 赤褐色土混入
23	10YR2/1	黒色土	しまりあり 粘性なし
24	2.5YR4/8	赤褐色土	しまりあり 粘性なし 火床
25	10YR4/1	褐色土	しまりあり 粘性なし 黒色土・赤褐色土混入
26	10YR5/6	黄褐色土	しまりあり 粘性なし
27	10YR3/4	暗褐色土	しまりあり 粘性なし
28	10YR5/3	にぶい黄褐色土	しまりあり 粘性なし
29	10YR3/3	暗褐色土	しまりあり 粘性なし
30	10YR4/6	褐色土	しまりあり 粘性なし SB02層方 (A・A'-B-F 11・12層に対比)

カマド掘方

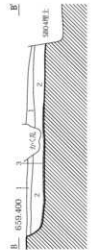
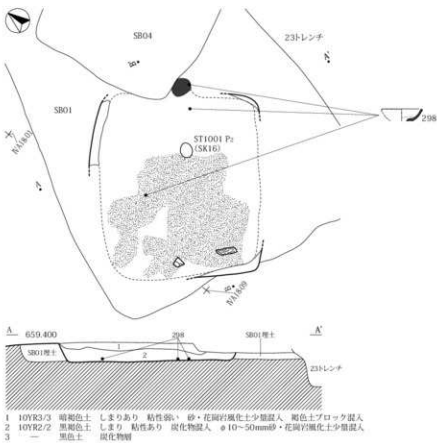


第37図 SB02 カマド図

SB02

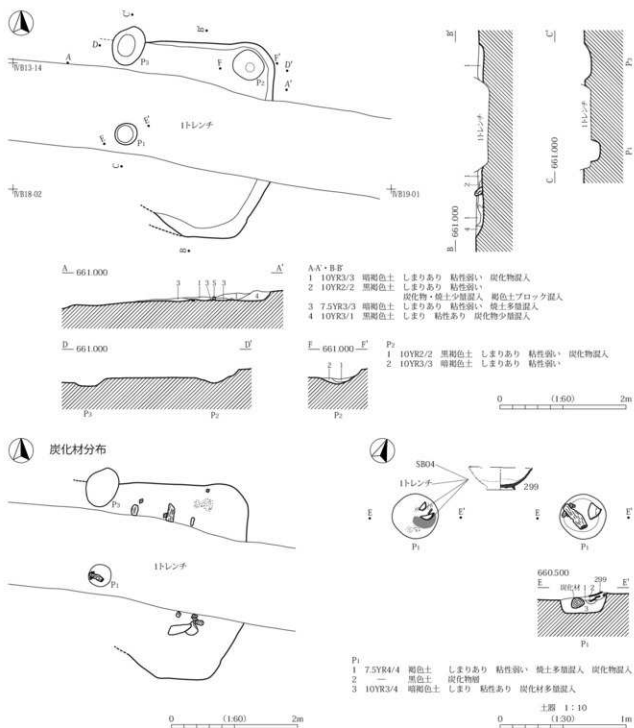


SB03



第38図 SB02 炭化物・焼土分布図、SB03 遺構図

第3章 鬼釜遺跡



第39図 SB05 遺構図

上に炭化物（3層）が分布している。形状・規模・構造：長辺推定2.9m、短辺推定2.56m、深さは31cmを測る。床面、掘方は不明。カマド：東壁のほぼ中央に焼土がおおよそ32cm×32cmの範囲に集中している。出土遺物：2層～床面レベルに灰軸陶器の玉縁小碗298、2層から丸石2号窯式とみられる灰軸陶器深碗（管理番号8）が出土し、SB01のピット出土の破片と接合した。2層から黒曜石製石鏃の小片が出土している。時期：出土土器から11世紀前半に比定した。

SB05 [遺構：第39図 PL9、土器：第68図]

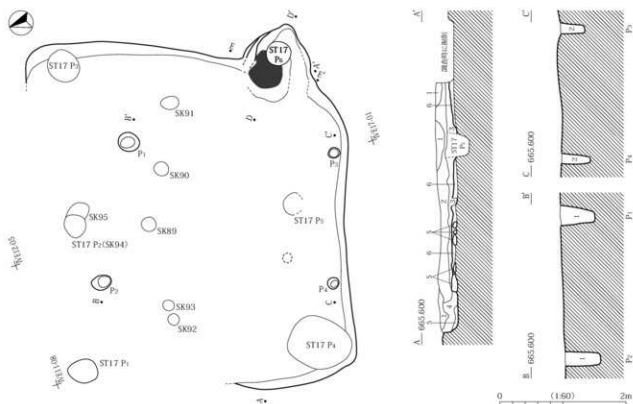
位置：1-①区、IVB13・18グリッド。 検出：V層上面で検出したが、中央部をトレンチで失われた。トレンチ内でピットを検出し、その位置から本遺構に伴うものと判断した。 重複関係：なし。 埋土：4層に分層した。 形状・規模・構造：長辺：2.85m、短辺推定2.63m、深さ16cm。主軸方向はN2°E。柱穴は3基で、P1埋土からは焼土と丸木材を含む炭化材が出土した。炭化材はP2、P3でもみられた。掘方は不明である。 カマド：なし。 出土遺物：P1から灰釉陶器の碗299が出土した。 時期：出土土器から11世紀前半～中頃に比定した。

SB09 [遺構：第40図 PL9、石器：第75図]

位置：1-①区、IVE11・12グリッド。 検出：V層上面。重機でI層現耕作土をはぎ、検出面を拡張している際に確認した。V層上面に暗褐色土の広がりが見られたため竪穴建物跡と認定したが、壁の確実な立ち上がりの確認は難しく、埋土・床の残り具合は北側が特に悪かった。 重複関係：ST17のP1～P6、SK89～93、SK95に切られる。 埋土：5層に分層され、6層を掘方とする。1・2層は現耕作土が埋没していた。 形状・規模・構造：長辺推定5.13m、短辺推定5.12m、深さ34cm、N116°E。柱穴はP1～P4の4基で直径18～36cm程度、深さは約48～54cmを測る。床面は黄褐色シルト質土壌であるが、硬化面はみられない。 カマド：南東部に1基みられるが、袖石は無く、破壊されていた。厚さ10cm程度の堅く焼けた火床がみられ、その上部に炭化物や焼土が混入した土層が堆積している。 出土遺物：埋土と掘方から24.2gの縄文土器と石鏃4・5が出土している。 時期：出土遺物からは時期決定ができないが、カマドが住居のコーナー付近にあることから、平安時代に比定した。

SB10 [遺構：第41図 PL9、土器：第68図 PL20]

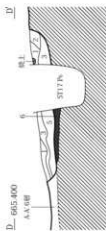
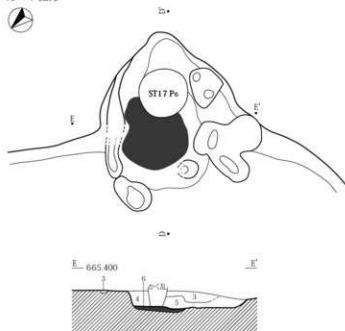
位置：1-①区、IVE23・24グリッド。 検出：V層上面。埋土は完全に削平され、掘方のみ遺存する。 重複関係：なし。 形状・規模・構造：長辺推定5.50m、短辺推定5.28m。ピットは8基で、そのうち主柱穴の可能性の高いピットはP1～4とP8である。これらの直径は35～42cm、深さは30～36cmで、何れも柱痕が確認されている。 カマド：主体部は既に削平されており、燃焼部は残存していない。中央に支脚痕跡と見られる窪みが1箇所、その両側に直径約24cmと約12cmのピットがみられ、深さは何れも約6cm程度であった。 出土遺物：掘方出土遺物のうち、最も多いものは縄文土器で651.9g混入し、中期後葉の土器の突起300と打製石斧、横刃形石器などがみられる。その他は弥生時代中島式（管理番号55）の甕が出土している。 時期：カマドがあることから古墳時代以降に比定した。



A-A	1 10YR4/2 灰黄褐色土	しまりあり	粘性なし	炭化物混入	凝結土（水田層）
	2 10YR4/3 にぶい黄褐色土	しまりあり	粘性なし	炭化物混入	凝結土
	3 10YR3/3 暗褐色土	しまりあり	粘性なし		
	4 10YR5/6 黄褐色土	しまりあり	粘性なし		
	5 10YR4/3 にぶい黄褐色土	しまりあり	粘性なし		
	6 10YR5/8 黄褐色土	しまりあり	粘性なし		掘方

P1・P2・P3・P4	1 10YR4/2 灰黄褐色土	しまりあり	粘性なし	炭化物混入	
	2 10YR3/2 黒褐色土	しまりあり	粘性なし	炭化物混入	

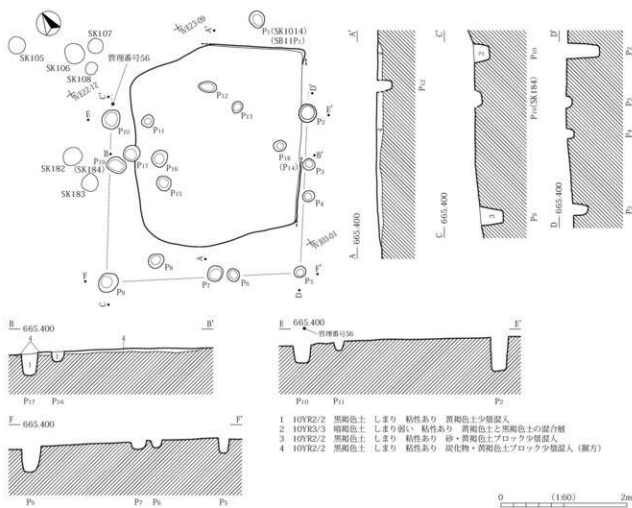
カマド掘方



1 10YR3/3 暗褐色土	しまりあり	粘性なし	炭化物混入	
2 10YR5/4 にぶい黄褐色土	しまりあり	粘性なし		
3 10YR3/3 暗褐色土	しまりあり	粘性なし	炭化物混入	
4 10YR3/3 暗褐色土	しまりあり	粘性なし	赤褐色土混入	
5 10YR2/3 黒褐色土	しまりあり	粘性なし	炭化物混入	
6 2.5YR5/8 赤褐色土	しまりあり	粘性なし		土床

0 (1:30) 1m

第40図 SB09 遺構図・カマド図



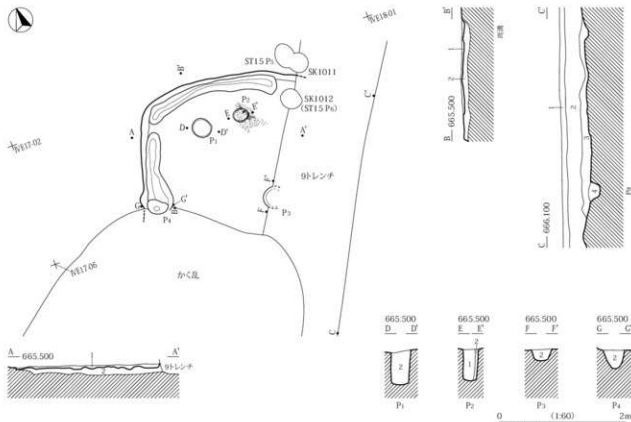
第42図 SB11 遺構図

SB11 [遺構：第42図 PL10、土器：PL20、石器：第89図]

位置：1-①区、IVE22・23グリッド。 検出：IV層～V層での検出作業中に発見した。現代の耕作により、上部の大部分が削平されているが、中世の土器を含む方形の落ち込みが確認されたため、当該期の竪穴建物跡と認識して調査した。 重複関係：ピットはP1～10・17・19の12基あり、本遺構に伴うと判断した。 形状・規模・構造：長辺推定3.4m、短辺推定2.8m、深さ12cm。N31°E。平面形は不明である。北東側のみに掘方が残る。ピットはP2・5・9・10で方形を組むものの、その他のピットの性格は不明である。 出土遺物：4層(掘方)から白磁碗胴部、竪穴建物跡北西隅P10の脇から青磁碗(管理番号56)が出土し、北東部掘方内から敲石112が出土している。その他に縄文土器797gと打製石斧等も出土した。 時期：11世紀後半～13世紀の可能性がある。

SB17 [遺構：第43図 PL10、土器：第68図 PL20]

位置：1-①区、IVE12・17グリッド。 検出：V層上面を重機で検出している時点で床面の広がりが見られ、竪穴建物跡とした。重複関係：南側はかく乱で削られ、さらに推定中央部を平成21年度確認調査で掘削されている。本遺構の全体像は不明。SK1012に切られる。 埋土：1層の下部と掘方のみ。ただし、9トレンチの東壁では本遺構の埋土が確認されている。 形状・規模・構造：長辺残存長3.78m、短辺残存長3.47m、深さ15cm。平面形は隅丸方形と推測した。主軸方向はN28°E。ピットは4基、直径約30～



A-A'・B-B'

- 1 10YR2/3 黒褐色土 しまりあり 粘性なし 炭化物混入
 2 10YR3/3 暗褐色土 しまりあり 粘性なし 炭化物混入(東方)

C-C'

- 1 10YR3/1 黒褐色土 グライ化 酸化鉄集積 根跡伴上(水田層)
 2 10YR4/1 暗灰色土 グライ化 酸化鉄集積 (自前以前の水田層)
 3 10YR3/2 黒褐色土 やや砂質 黄褐色土ブロック混入 SB17埋土
 4 10YR3/2 黒褐色土 やや砂質 3層より白色粒子多量混入

P1・P2・P3・P4

- 1 10YR3/3 暗褐色土 しまりあり 粘性なし 炭化物混入
 2 10YR5/4 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性なし

第43図 SB17 遺構図

35cmで、深さがP1は51cm、P2は48cmであり、P3は18cm、P4は30cm程度で規模が異なる。P2の上部の床面からは焼土と炭化物を検出した。本遺構の北壁と西壁に沿って幅約18cmの周溝が巡るが、上部を削平されているため、深さは3cmとかなり浅い。出土遺物：1層からかわらけ302と土師器環(管理番号63)、弥生土器の壺頸部305が出土した。2層(掘方)から山茶碗こね鉢(口縁部から胴部)303が出土した。時期：出土土器から13世紀に比定した。

(3) 掘立柱建物跡

ST01 [遺構：第44図 PL10]

位置：2-①区、VA11・16グリッド。重複関係：なし。規模・構造：6基のピットで構成した整然とした2間×1間の建物跡。主軸はN74°W。長辺4.70m、短辺：2.11mである。ピットの直径は幅24～33cm、深さはP1・5・6が深く平均約20cmであるが、P2～4は浅く平均8.4cmである。出土遺物：なし。時期：平安時代以降に推定した。

ST02 [遺構：第45図]

位置：2-①区、Ⅲ E25グリッド。重複関係：SB02を切る。SK01・02・11・20と切り合い関係は不明だが重複する。規模・構造：8基のピットで構成され、2間×2間の建物跡の可能性が高い。主軸はN10°

E. 長辺4.26m、短辺3.68mである。P3のみ柱痕跡が確認した。出土遺物：なし。時期：11世紀前半以降。

ST03 [遺構：第44図 PL10]

位置：2-①区、ⅢE20・25、ⅣA16グリッド。重複関係：ST03のP5がST04のP1に切られる。規模・構造：8基のピットで構成され、3間×2間の可能性が高い。北側のP2・3と南側のP6が軸からずれ、深さかなりばらつきがある。主軸はN90°W、長辺5.29m、短辺3.34mである。出土遺物：なし。

ST04 [遺構：第44図 PL10]

位置：2-①区、ⅢE25、ⅣA21グリッド。重複関係：ST04のP1がST03のP5を切る。規模・構造：6基のピットで構成され、2間×1間の可能性があるが、西側中央のピットが検出できていない。ピットの直径は15~20cmで深さは30~50cmで比較的揃っているが、P6のみ軸線から外れる。主軸はN8°E、長辺5.54m、短辺1.87mである。出土遺物：なし。

ST07 [遺構：第46図 PL10]

位置：1-①区、ⅤA17・18・22・23グリッド。重複関係：SK1001を切る。規模・構造：調査区内で確認された5間×2間で、12基のピットで構成した。ピットの北列P1・9・10・11・12は深さがほぼ一定しているが、南列はP3が特に深く、P4・5・6・7・8にかけて次第に浅くなる。最も浅いP8はP3よりも40cmも浅くなっている。P4の底には礎石の可能性ある礎が見られた。主軸はN86°W。長辺推定8.40m、短辺3.97mである。出土遺物：なし。

ST13 [遺構：第47図 PL11]

位置：1-①区、ⅣE12グリッド。重複関係：ST15のP2に切られる。規模・構造：6基のピットで構成したが、P3のみ軸線から外れる。P2が他より10cm程度深い、深さはほぼ揃っている。2間×1間の建物跡の可能性ある。主軸はN26°E。長辺：4.51m、短辺2.63mである。出土遺物：なし。

ST14 [遺構：第46図 PL11]

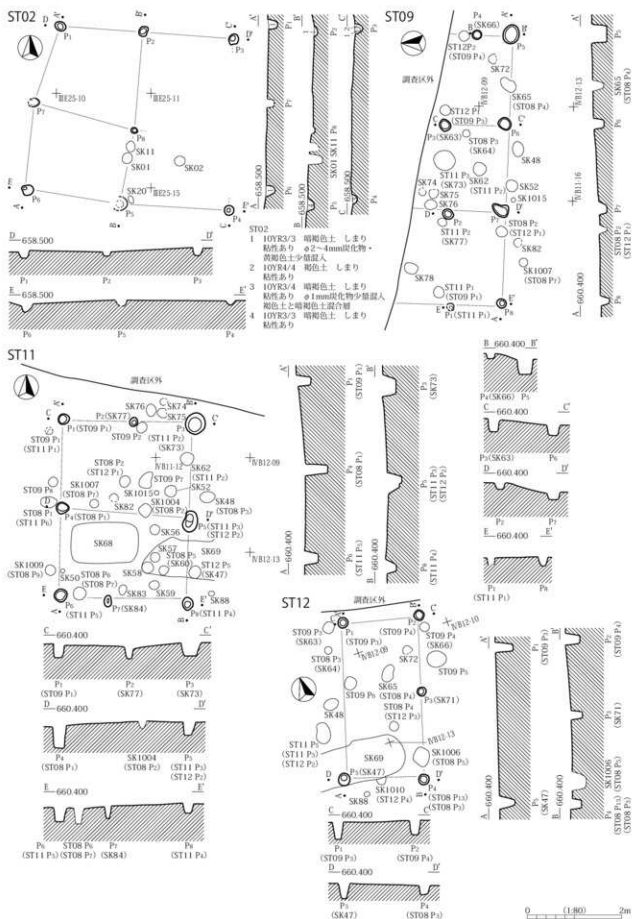
位置：1-①区、ⅣE16・17・21・22グリッド。重複関係：なし。規模・構造：2間×1間で、7基のピットで構成した。南側列は深さが揃っているが、北側列は西から東にピットが浅くなる。主軸はN85°W。長辺推定5.53m、短辺3.32mである。出土遺物：なし。

ST15 [遺構：第47図 PL11]

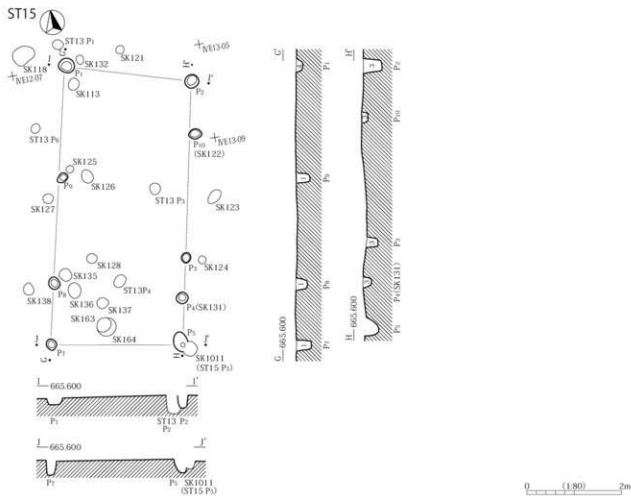
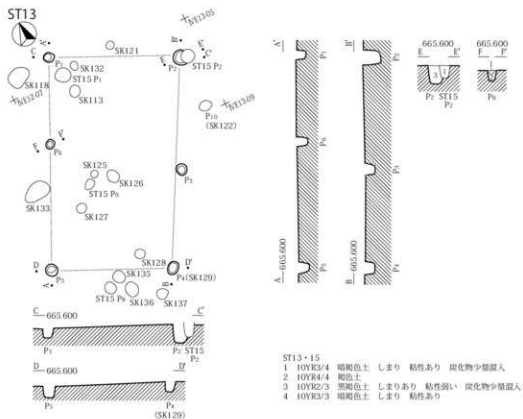
位置：1-①区、ⅣE12グリッド。重複関係：ST13のP2を切る。規模・構造：3間×1間で、9基のピットで構成したがP9とP10が軸から外れる。3間を構成するP7・5・2は深く、その間を支えるP8・9・4・3・10は深さが不揃いで浅い。主軸はN13°E。長辺推定5.72m、短辺2.75mである。出土遺物：なし。

ST17 [遺構：第48図 PL11]

位置：1-①区、ⅣE11・12・16・17グリッド。P1~P6、P8・9で構成した。検出：V層上面。SB09のカマド調査中に、本遺構のP6がカマドを切っていることを確認した。柱の並びが整然としていて深さが揃っていることから、プランを確定した。ただし南西隅の柱穴は現代のかく乱によって検出できなかった。

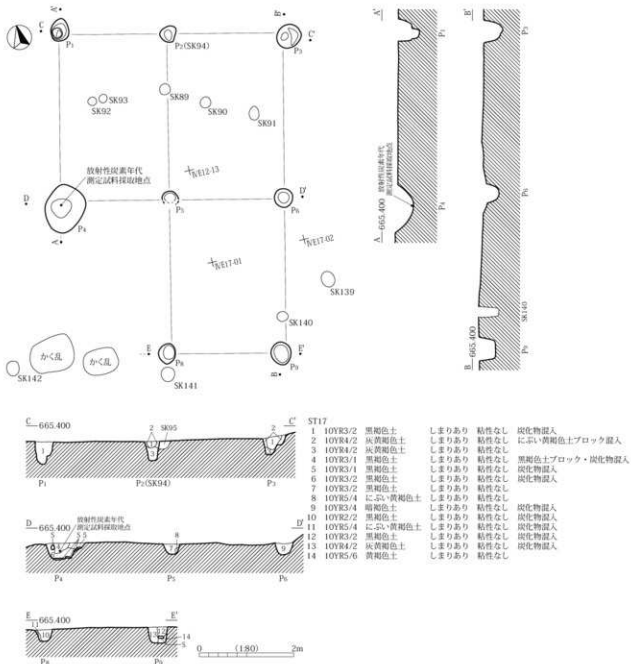


第45図 ST02・09・11・12 遺構図



第47図 ST13・15 遺構図

0 (1:80) 2m

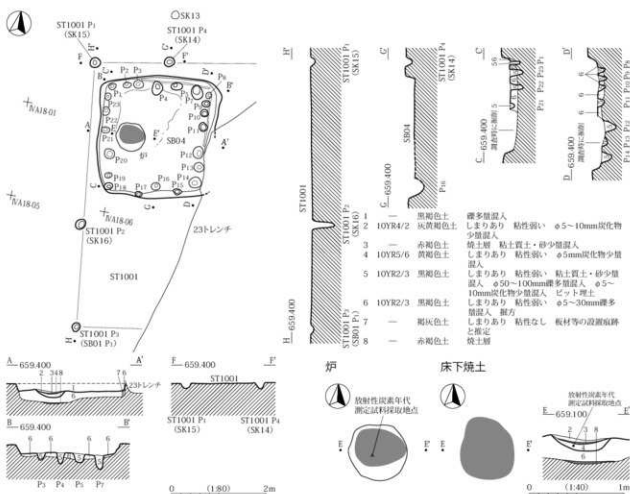


第48図 ST17 遺構図

た。重複関係：SB09とSK95を切る。SK89～93、140との前後関係は判断できなかった。形状：長辺2間で6.78m、短辺2間で4.74mを測る。規模・構造：主軸方向はN14°E。埋土：P4において柱痕跡とみられる4層中の炭化物を用いてC14年代測定を行い、結果は1,045～1,161calADとなった。出土遺物：なし。時期：平安時代以降に比定した。

ST1001-SB04 [遺構：第49図PL10、土器：PL20]

位置：2-①区、IVA13・18グリッド。検出：V層上面。調査時にはSK番号を付けて記録したビットについて、整理時に配置を検討した結果、P1 (SK15)、P2 (SK16)、P3 (SB01P1)、P4 (SK14)で構成した掘立柱建物跡と認定した。なお、本遺構の東側はトレンチで破壊されているため、短辺の長さは不明である。ST1001のビットとSB04は重複しないことと、両者の主軸が極めて酷似することから、両者は一



第49図 ST1001、SB04 遺構図

体の遺構と判断した。重複関係：ST1001・SB04ともSB01とSB03を切る。規模・構造：長辺5.3m、短辺は推定3.2mで、東西方向に長辺方向をもつ掘立柱建物跡。柱間は、長辺方向が2.1~3.4m、短辺方向が1.6mを測る。長辺方向は、P1とP2の間がほぼ2間分の距離があることから、この場所にビットが存在した可能性が高いと考え、本遺構は長辺方向3間、短辺方向2間と推定した。本遺構の北西隅に竪穴(SB04)がある。埋土：人頭大の礫が多量に混入する。6層は掘方である。規模・構造：長辺2.38m、短辺は2.33m、深さは20cmを測る。壁際には22基のビットがめぐる。調査の関係で掘方(6層下面)精査時に検出したP12~14・16・18~20も、6層上面から掘り込まれていたと推定した。北・西・東壁際のビットは、20~50cm間隔で密集して配置し、南壁は中央部(P16)にはビットが1基ある。南壁には、P16を中心として左右に対峙するようにP15・17がある。ビットが希薄であることから、P15・17は出入口ビットの可能性が高いことから、本遺構は南側に出入口があったと判断した。SB04の北側と東側では、ビットと壁の立上りの間に溝状の落込みがあり、この溝状の落込みは壁の下端に平行して延びる。ビット(P4・5・7・8・9・10・11)には、溝状の落込みには重複するものがあり、ビットが切る。溝状の落込みには、シルト質の褐色土色が堆積しており、壁に板壁などを設置するために掘削した痕跡と推定した。炉：中央部よりやや西壁側に地床炉が1基ある。炉は直径56cmの掘方を持ち、埋土は3層に分層できた。6層は掘方で、粘土質で砂が混入する。3層は焼土層で、被熱により形成された層である。2層は埋土の一部である。床：炉から北側には、褐色の砂が混入する粘土質土が分布する。この粘土質土は厚さ約5cmを測り、上面が若干硬化する。なお、この粘質土は炉の南側にも分布したと推定したが、

炉の南側は調査時に地山上面まで掘削したことから、分布範囲は不明。床下：床面を除去した地山上面で確認された焼土層がある。焼土層は、地山が被熱したものではなく、地山上面の窪みに焼土層が堆積するものである。地山上面は凹凸が著しく、随所に地山礫が露出する状況であることから、掘方を埋める際に意図的に焼土を埋めたものと推測した。出土遺物：1層から天目茶碗（管理番号9）とすり鉢（管理番号10）が出土している。また、縄文時代の打製石斧が出土した。炉の4層に含まれていた炭化物の放射性炭素年代測定を行い、1,455～1,617calADの結果を得た。ピット内からの出土遺物なし。時期：出土土器と炉出土炭化物の放射性炭素年代から、15世紀末～16世紀前半に比定した。性格：SB04には炉があることから、半地下式の作業空間を伴う建物と推測した。

(4) 土坑

土器が出土した土坑は、SK08・22・78・96・97・141・164である。

(5) 溝跡

SD01 [遺構：第50図 PL11、土器：第68図、石器：第75・79図]

位置：2-①区、IV A7・8・9・12・13・14・15グリッド。重複関係：SD02に切られる。埋土：1・2層が現代の耕作土、3・4層がSD02の埋土である。規模・構造：東側は調査区に沿って約90度に曲がっている。長さ23.21m、最大幅1.64m、深さ67cm。出土遺物：2層から志野焼の丸皿307と瀬戸美濃系丸碗308、青磁輪花皿309が出土した。4層から灰釉陶器碗310と弥生土器の壺311並びに土器小破片123.1gが出土している。12層からチャート製石鏃6、16層から縄文土器が1点と打製石斧50が出土している。時期：重複関係から近世以前に比定した。

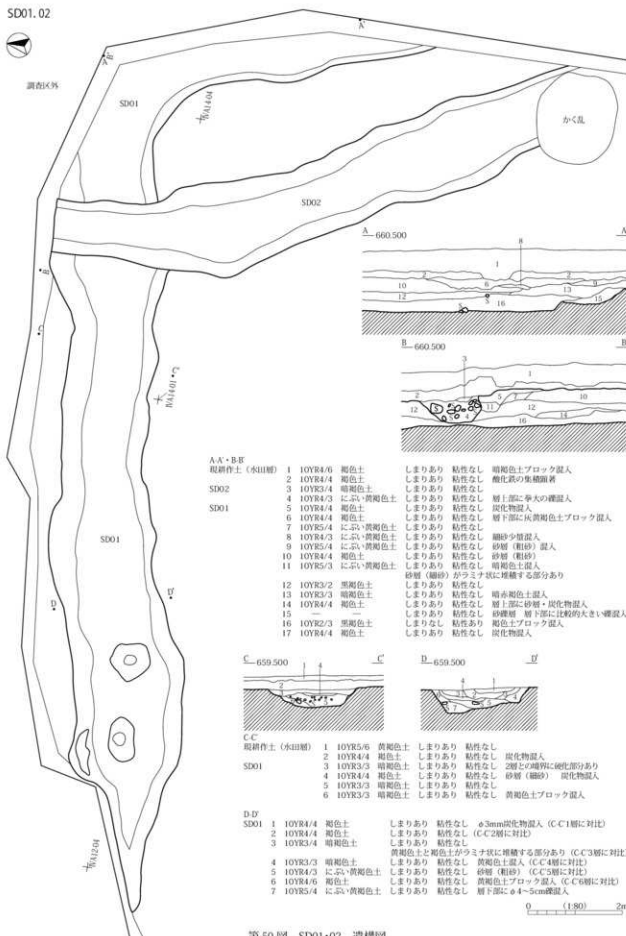
SD02 [遺構：第50図 PL11、土器：第68図 PL20]

位置：2-①区、IV A9・14・15・19・20グリッド。重複関係：SD01を切る。埋土：3層と4層で、そのうち4層に拳大の礫が混入する。規模・構造：ほぼ直線的に延びる。調査区内で確認された本遺構の規模は、長さ10.73m、最大幅1.48m、深さ50cmを測る。出土遺物：4層から青磁碗（管理番号17）、すり鉢（管理番号18）、瀬戸美濃系天目茶碗314、瀬戸美濃系皿312、天目茶碗（管理番号22）、打製石斧3点、砂岩や黒曜石の剥片が出土している。時期：出土遺物から近世に比定した。

SD01.02



調査区外



第50図 SD01.02 遺構図

第4節 遺物

1 土器・陶磁器

(1) 概要

本遺跡からは約151kgの土器・陶磁器等の焼き物が出土し、そのうちほぼ半数の約72kgは遺構から出土したものである（第5表）。土器・陶磁器全体の約74%は縄文土器であるが（第51図）、次の2つの理由からその多くは原位置から動き、所属時期以外の遺構から出土している。まず第1に縄文時代の遺構面が大幅に削平され、古代以降の水田層になったこと。第2に縄文時代中期の包含層V層を掘り込んで古墳時代以降の遺構が構築されたため、それらが埋没する過程で多くの縄文土器が流れ込んだことである。一方低地に堆積したIV1層から出土した中期後葉の縄文土器は、殆どが破片であったが、3カ所ほど地点的なまとまりが捉えられている。よって土器図版（第53～68図）では、遺構時期の降順に、各遺構の時期決定資料となるものをまず掲載するが、他時期ではあるが資料の性格上重要であるもの（主に縄文土器）を補足的に加えた。掲載した個体の重量は約63.9kgであり、出土総量に対する掲載率は重量比で約42%である（第52図）。掲載資料の情報は観察表（別表第3表）を基本とし、出土位置、時期、法量、色調、付着物、胎土（註1）を記載した。胎土は肉眼と20倍程度の顕微鏡で観察した（註2）。また各資料の出土状況詳細は第2節で既に報告しているため、本項では時代順にその概要のみまとめる。

(2) 縄文時代

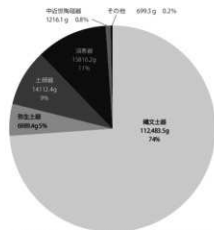
①草創期・早期

本遺跡最古の土器は草創期後半の絡条体丘痕文土器の破片（第63図204）でSM01 17層（IV層）から出土した。横方向に4段の押圧が認められる。早期前半の土器は1区IV1層より底部（第61図139）、SM01 17層（IV層）と16トレンチより胴部（第63図203・第64図218）が出土し、いずれも山形押印文が施されており、立野式に相当する。玉川を挟んで北西700mに立地する北田遺跡では立野式期の竪穴建物跡2棟と土坑がみられ、ここからは山形押印文の他、格子目文や楕円文も報告されている（岡田1992）。その他、SM01 17層（IV層）からは尖底土器の底部（第63図202）、1-①区からは層位・地点不明ではあるが早期段階の表裏縄文土器（第64図226）が出土している。

②中期前葉

中期前葉の土器は1区包含層VF02・06のV層（第57図38・39）、IV1層（第63図199・200）、Ⅲ1層（第63図207～210）並びに10トレンチ4層（第64図219・220）、同11層（第64図221）から一定量出土している。このうち199は頸部の隆帯上に半截竹管による押引文、胴部には格子目文を有し、209は口縁部に縄文、頸部に縦方向の半截竹管文が間隔を開けて施される。これらは五領ヶ台Ⅱ式並行期でも古い様相を持ち、下伊那2期（坂井2013）にあたる。

一方219・220・221は、頸部直下に施される横位の沈線文や頸部の集合沈線文の様相から、五領ヶ台Ⅱ式でも新しい段階で、平出Ⅲ類A土器の祖型である倉平土器（長崎1997）に相当するものとみられる。これらの胎土は例外なく大形の花崗岩片を多く含むⅠ類（註3）にあたる。中南信に広く分布する平出Ⅲ類A土器には大形



第51図 土器・陶磁器の種類別重量



第52図 出土総量に対する掲載率

第5表 鬼釜遺跡 土器・陶磁器等出土量

遺跡名	縄文土器		弥生土器(Ⅰ期)		土師器		須恵器		灰陶器		中世前期		中世中期		中世後期		不明		土製品・加工品		合計(片)	
	A(g)	B(g)	A(g)	B(g)	A(g)	B(g)	A(g)	B(g)	A(g)	B(g)	A(g)	B(g)	A(g)	B(g)	A(g)	B(g)	A(g)	B(g)	A(g)	B(g)		
5801	0	2.2	0	0	46.2	0	0	0	29.6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	78
5802	0	0	19.6	0	6.5	34.8	35.9	7.1	29.3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	131.2
5803	0	0	0	0	7.2	0	0	0	87.8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	95
5804	0	0	0	0	0	2.5	0	0	15.1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	17.6
5805	0	4	0	0	0	0	0	0	25.1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	29.1
5808	3818.7	3048	0	0	4.9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6871.6
5809	0	24.2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	24.2
5810	84.1	866.9	0	0	8.7	0.9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	881.6
5811	0	797.9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	800.7
5813	0	19.5	0	0	325	50.1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	394.6
5814	18202.7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	18202.7
5816	2546.4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2546.4
5817	113.1	0	21.7	16.2	123.1	0	0	0	6.4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	300.3
5801	0	4	0	0	9.5	0	0	0	14.8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	200.8
5802	0	0	0	0	18.5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	402.6
5803	191.9	1905.1	0	0	0	0	0	4.9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2171.7
5804	0	138.3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	138.3
5822	0	87.5	0	0	4.2	4.2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	96.4
5878	0	0	7.8	0	46.4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	54.2
5808	44.7	0	15.2	0	25.8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	85.7
5807	0	30.3	0	0	17.6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	47.9
58141	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
58164	0	0	0	0	9.2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9.2
58174	0	0	0	0	50.9	8.6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	59.5
58185	150.3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	150.3
58186	2698.9	0	0	0	14.4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2698.9
58192	1166.8	1729.5	265.9	830.2	2222.6	6344.3	13689.1	1078.3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	26766.6
5801(6期)	236.1	2780.9	194.7	1341	413.5	1689.2	51.8	60.3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9250.3
小計	29187.7	10312.2	505.9	4331.7	3072	8409.4	13776.8	1150.6	176.2	0	0	471.9	471.3	38.6	3.9	9.2	25.5	0	0	0	0	72017.3
5801-64	26.3	168.6	133.1	664.8	338.8	93.1	71.5	0	0	0	0	11.6	2.3	0	0	0	0	0	0	0	0	1133.1
縄文土器(Ⅰ期)	97.6	865.9	0	0	29.6	0	0	160.2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1351.3
弥生土器(Ⅰ期)	231.9	6932.8	0	0	681.5	0	0	140.7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10382.2
土師器(Ⅰ期)	448.9	12190.3	0	0	228.6	0	0	49.2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	13380.5
(Ⅳ)須恵器(Ⅰ期)	14652.8	24705.3	0	7.2	424.7	0	195.8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	40038.5
中世前期	178.7	4022.8	0	294.9	0	233.2	0	43.7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4865.5
中世中期	91.3	32.4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	121.7
中世後期	269	5493	0	537	0	332	0	227.5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7229
ト・器・漆・灰(Ⅱ)	15986.5	56994.1	133.1	1018.3	338.8	2292.3	71.5	617.8	0	8.5	11.6	37.1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	79298.8
小計	61777.2	67206.3	639.0	6350.0	3410.8	10701.7	13864.8	1966.4	176.2	8.5	433.5	762.4	38.6	3.9	9.2	25.5	0.0	23.7	2.3	218.1	0.0	151317.1
合計																						

注1 A:須恵器片、B:非須恵器片、注2 一部土師器を含む、注3 トレンチ・製作土・灰土・灰土

白色の砂が含まれていることが多く、「伊那谷中部に土器生産圏が存在し、周辺に移出」された可能性が指摘されている（林1985）。本遺跡では平出Ⅲ類A土器そのものは出土していないが、鬼釜遺跡の胎土観察から本地域の土器胎土が極めて特徴的であることが判明した。今後、各地で出土する平出Ⅲ類A土器の胎土を伊那谷の花崗岩地帯の土器の胎土と比較し、林氏の仮説を検証する取組みが期待される。

下伊那地域以外の特徴を示すものは、細い隆帯が同心円状に添付される39が北陸系、蒲鉾形隆帯上に半截竹管による連続爪形文が施された207は東海系の北裏C式とみられる。

③中期中葉

中期中葉の土器は1区IV1層とSM01 14層（Ⅱ層）から出土した（第61図140・第67図276）。このうち140は口唇部に刻みが施され、276は隆帯脇に細沈線が沿うことから焼町土器の最終形態とみられる。

④中期後葉

・概観

中期後葉土器は本遺跡において縄文時代の主体を占める。確認できた器種は、浅鉢（第61図135・136）、釣手土器（第61図137・138）の他は全て深鉢であった。深鉢には数種類の土器型式等（註4）がみられ出土量も多い。そのうち主体となるのが、「下伊那タイプ」（末木1978）、「下伊那系土器」（増子1982）、唐草文系土器の「下伊那型」（米田1980）、「下伊那唐草文系土器」（吉川2008）、「下伊那唐草文系土器」（吉川2005・坂井2013）などと呼ばれる一群であり、唐草文系土器のⅡ期に並行する下伊那の土器である。これは本遺跡の所在する下伊那地域の土器組成の一般的なあり方と一致する。

唐草文系土器（註5）は設定当時から、「諏訪・上伊那地方」と「下伊那地方」（米田1980）もしくは中信地域と伊那谷南半地域（三上2002）に大きな地域差があると認識されており、「伊那谷独自の編年」（八木1976）の必要性が指摘されてきた。地域差の背景には下伊那地域と東海地域とのより密接な関係（米田1980）があげられ、複雑な様相が紹介されているが（吉川2003・坂井2013）、型式学的な距離関係の解釈によっては「下伊那タイプ」は唐草文系土器から括り出して捉えられている（野村1988・小口1998・神村2003）。本稿でも、これらの土器群を、上伊那を含む中信地域の唐草文系土器とは区別した上で、先学の地域区分と呼称を援用しつつ記述を進める。また、編年の枠組みは、これらの対応関係を検討した上での最新の編年案であることから日本考古学協会長野大会編年の9～12期を用いる（以下「協会9期」等）。

・分類

下伊那タイプ（下伊那Aタイプ）（註6）

下伊那タイプはSB14（第54図24、第55図26・28・30）、SB16（第56図33）、SK192（第56図37）、1区IV1層遺物包含層（東・中央・西）（第57図45・48・49、第58図52、第61図143・144・146）他、多量に出土している。本遺跡で主体を占める在地土器であるため、ここでは器形と文様構成・要素をもとにⅠ～Ⅴ類に分類して以下に説明を加え、米田（1980）・吉川（2003）による名称を付記した。時期は協会10・11期（唐草文系Ⅱ期古段階）にあたる。下伊那タイプの胎土の主体を占めるのはⅠ類であり、特に大形の花崗岩が含まれるものが多い。在地粘土を採取し、土器作りが行われたことを示唆するものとみられる。個々の岩石鉱物の偏光顕微鏡での観察を将来の課題としたい。

Ⅰ類：キャリバー器形で口唇部が外反し、把手が付く類（143・144）で、吉川の「Ⅰ型式」、米田の「下伊那B型式」に相当する。本遺跡ではごく少ない。

Ⅱ類：先端が折り返されて肥厚する無文の口縁部が外半もしくは外傾し、頸部が膨らみ、胴部が再び膨らむ類で、本遺跡の下伊那タイプ中、最も多く見られる。頸部の膨らみ部や胴部との境には、蕨手文の連続状構成（45）、交互刺突（24）などが施され、入組文と連続文が交互に配されるもの（26）もみられる。地文には糸線文（26・45）が多用される。吉川の「Ⅱ型式」、米田の「A型式」に相当する。

Ⅲ類：口縁部が外傾もしくは外反し、頸部でくびれ、胴部が大きく張り出す類で、頸部に沈線による横入組文が配され、口縁部と胴部は無文のものと口縁部に縦方向の刺突文、胴部に縦方向の箴手文等を有するもの(33・146)、沈線による横方向の入組文(52)を有するもの等がみられる。地文は縄文(33・52)、条線文(30、146)があり、吉川の「Ⅲ型式」、米田の「E型式」にあたる。

Ⅳ類：口縁部が外傾し、横方向の沈線と箴手文が口唇部までせりあがるもの(37)。

Ⅴ類：胴部が膨らむ樽形の器形で、口縁部に袋状の貼り付けを有するもの(28)。袋状貼り付けの上に押し引き文を有するもの(48・49)も同類とみられる。このような土器は増田遺跡13号住出土土器(上郷町教育委員会1989)に類例がみられるが、下伊那地域でも多くはない。

唐草文系土器

唐草文系土器はSK192(第56図36)、1区Ⅳ1層(第59図83・84・87・93、第61図153)、トレンチ(第64図224)から出土した。このうち36は樽形で、X字状の把手を持つ。地文は口縁部・胴部ともに櫛歯状工具による条線文で、頸部に交互刺突、胴部に2本一対の隆帯による大柄渦巻文が展開する。83、153は胴部にやや湾曲した沈線地文をもち、大柄渦巻文を構成する沈線が1本もしくは間隔が開く2本から構成される。何れも唐草文系Ⅱ期の新しい段階にあたる。細い条線文を地文とする87は腕骨文風の隆帯が残ることから、Ⅱ期古段階に遡るとみる。93・224は主文様、地文ともに沈線、84は地文に沈線と縄文が併用されている。これらは唐草文系Ⅲ期に下る。

中富式系

中富式系土器は1区Ⅳ1層(第59図98・99、第60図103・105・106・107、第62図177、182～184)等から多数出土していて、口縁部が鋭く内弯し、頸部でくびれる特徴を持つ。これらには口縁端部に沿って列点もしくは刻目が施されその下に沈線による渦巻文が描かれる103・106・107、182～184、口縁端部に沿って沈線が巡り、その下に沈線による入り組み文が描かれる98・99、口縁端部に沿って沈線が巡りその下に巻きの弱い箴手文が描かれる177等がみられる。中富式は東海地方(愛知～岐阜)に広く分布する中期後葉の土器型式(増子1978、細瀬・高橋2008)である。本遺跡の土器群はその殆どが口縁部破片のみで、全体の判別が難しいものの、中富Ⅲ式(増子1978)(2期古(細瀬・高橋2008))に併行するものと考えられるが、東海地方の土器との詳細な比較検討が必要である。

従来下伊那地域の中富式の場合、本来の分布圏のものが変容を遂げている可能性が高いとされているが、本遺跡での土器胎土の観察によると、中富式系25点のうち1類の胎土に分類できるものは全体の約半数で、その他は3種類の異なる胎土であった。中には砂が極めて少ない特徴的な胎土の個体もあるため(第60図105)、詳細な薄片観察等によって、特徴的な胎土の土器が搬入品であるかどうか判断できよう。ここでは可能性のみ指摘し、その検証は今後の課題としたい。

曾利式系

曾利式系土器はSK185(第56図34)、1区Ⅳ1層(第61図158)等から出土している。このうち34は無文の口縁部が内弯し、胴部に縄文が施され、158は頸部に横方向の押し引き文が施されている。曾利Ⅱ式に相当する。

加曾利E式・大木式系

加曾利E式・大木式系土器はSB08(第53図3・5・6・7・8)、1区Ⅳ1層(第60図118)、1区1層(第63図217)等から出土している。このうちキャリバー器形で口唇部のみ外反し、口縁部に隆帯によるクランク文が施される3・5・6は、加曾利E1式・大木8b式最古相に並行する在地土器である。うち3は胴部にも縄文が施され、2本一対の沈線による懸垂文と波状沈線文が描かれる。口縁部に定着性の弱い隆帯による箴手文が添付される7と、口縁部に隆帯が添付され、胴部に2本一対の沈線文が描かれる8もほぼ

同時期とみる。その他加曾利E・大木式系には口縁部の渦巻文を構成する隆帯が尖り、区画を有する加曾利EⅡ式新相並行の118などもみられる。

結節縄文土器

SM01 17層(Ⅳ層)(第63図205)から区画の中に結節縄文が施される土器が出土している。これは天竜川流域に一定の分布を示す(神村1978)もので、協会14～15期(唐草文系Ⅳ期)にあたる。

その他

隆帯の脇に沈線地文を有する土器がSB08から少数出土している(第53図4)。これは人体文を有する大門原遺跡Ⅲ群a類(下平1999)とみられ、中期後葉初頭、協会9期に位置づけられる。

本遺跡には口縁部が外側に折り返され、胴部に文様が施されないものが多く、これらを「在地系粗製土器」と仮称する。SB08(第53図9)、SB14(第54図21)、1区Ⅳ1層(第58図72・73)他にみられる。このうち胴部にくびれが無く、口縁部が直立する9をA類、同じく口縁部が外反し胴部にくびれを有する21をB類とする。これらには何れも地文が施されていない。周辺では北田遺跡24号住(岡田1992)にA類がみられる他は形が分かるものが殆ど無く、破片も含めてその広がりやの検討が課題である。口縁部の折り返しは下伊那タイプⅡ類にもみられるため、同様に口縁部が折り返されている土器(第58図)で、細い条線文が施される71・79、縄文が施される74等については類例を蓄積した上で類別を行いたい。これらは協会10～11期にあたる。

・所見

さて、鬼釜遺跡に集落が営まれ始める協会9期(唐草文系Ⅰ期)は、東日本の縄文世界に大きな変革が起こる時期にあたる。中南信では大枠、唐草文系Ⅰ期の土器や井戸尻式からの伝統を保持した地元の細線文土器等に、大木8b式やそれが北信から越後で変容生成した桶倉式系、甲府盆地側から流入すると想像される曾利式土器や、東信地域、甲府盆地あるいは東海地域から流入する加曾利E式が伴う。上伊那でも大木8b式そのものが飯島町丸山遺跡1号住から出土しており(藤原2003)、下伊那タイプの祖型となる口縁部が折り返されて肥厚する縄文地文の小形深鉢と共存している。丸山遺跡の大木8b式が、加曾利E式と共通するキャリパー形ではなく、樽型に把手を有する東北北部の大木式固有の形態であったことは、その後のⅡ期以降の同様な器形の唐草文系土器の生成に繋がる可能性があり、注目される。今後、主文様が隆帯による大柄渦巻から構成される大木8b式類例の、中南信での増加を待ちたい。このような事例から、加曾利E式や大木式の情報はこの時期、繰り返しもたらされていた可能性があり、クランク文を有する3(第53図)や定着性の弱い隆帯渦巻文が口縁部に添付される7(同図)のような下伊那独特の土器は、それらからの影響によって生成された可能性がある。

鬼釜遺跡全体で土器の量が最も多いのは、続く協会10～11期(唐草文系Ⅱ期)にあたる時期である。その主体は下伊那Aタイプであるが、Ⅰ類は比較的少なく、口縁が外反するⅡ類が目立つ。本遺跡の土器で全体の形の分かるものが少ないことや天竜川の東側の遺跡がまだ少ないため、これが下伊那タイプの中の地域差になるのかどうかは今後の課題である。

本遺跡では中富式そのものの中富式と下伊那タイプが折衷したとみられる土器群も一定量出土し、曾利式も少数みられる。多系統の土器が共存するのは当地域の特色であるものの、これらの中に搬入品があるかどうかを判断する際に、型式学的な特徴の比較に加え、胎土の観察が必要である。鬼釜遺跡出土縄文土器のうち、図版に掲載された232点を肉眼観察によって分類したところ、大粒の花崗岩やその造岩鉱物を多く含んでいるⅠ類が全体の半数以上を占めることが分かった。遺跡の基盤層が生田花崗岩、玉川の上流が上久堅花崗岩であることから、これが本遺跡の在地胎土と考える。通時的な観察の結果、このような花崗岩を含む胎土は縄文時代中期の土偶をはじめ、古墳時代の土師器や須恵器の一部、さらに周辺の遺跡の

埴輪等にもみられる。これほど大粒の砂が通時的に胎土に混入している例は、日本列島の他地域の土器群と比較しても稀であり、在地外胎土と弁別する際の明確な基準となりうる。中富式系をはじめ、土器の搬入品と模倣品を検討するには非常に良好な素材といえる。

今後天竜川西側の遺跡も含め、剥片を用いた胎土分析が実現し、肉眼鑑定と顕微鏡下で厳密に鑑定した鉱物の対比表が完備できれば、肉眼観察のみでもこれらの同定が可能となり、中期中葉期も含めて中南信に広く分布する花崗岩を含む土器の由来を検討する素材となろう。胎土1類以外の土器胎土が逆に、元もとの在地の素地土から大形の砂を除去したのか、異なる素地土採取内に由来するののかの検討が今後必要である。

⑤後期前葉

後期前葉の土器はSM015層(Ⅱ層)から、良好な磨きが施され、沈線により蕨手文が描かれた口縁部突起(第67図284)が出土している。称名寺式とみられる。

⑥後期中葉

後期中葉の土器はIVB12区のV層から深鉢(第57図41)が出土している。頸部には頂部に刻みを有する隆帯が巡り、丸みを帯びる胴部には一条の垂下沈線に対し左右対象に下から上に向かう鉤の手状の区画文が展開する。文様部分の下端には1条の沈線が沿う。県内の該期の資料(綿田2002)では、安曇野市北村遺跡SB102の埴(平林1993)、長野市村東山手遺跡SB08埋土(鶴田1999)より、文様構成が類似した土器が出土している。堀之内2式とみられる。

⑦晩期終末

晩期終末の土器は、1区IV1層(第61図142)、SM015層(Ⅱ層)(第67図283)・SX04(同図292)から、口唇部に長楕円の刻みを有するものが出土している。米Ⅱ式とみられる。

(3) 弥生時代

弥生時代の土器はSB13(第64図227)と弥生時代以降の遺構の埋土、SM01周辺を中心に、壺(第67図263・264・267・268・274・282、第68図297・305・306・311)、甕(第64図227、第67図266・275・291)が出土している。そのうち壺274・282・297・306・311の口縁部は、強く張り出して内側に鋭く屈曲し、並行した太い沈線が引かれている。壺の頸部には、櫛描波状文が横方向に展開している(263・264・267・305)。これらは典型的な中島式である。一方甕227・266・275・291には、外面が縦、内面が横の非常に良好な磨きが施され、磨きは底部外面まで連続している。同じく中島式である。

(4) 古墳時代

古墳時代の土器は、そのほとんどがSM01周溝とその周辺(第64図230~240、第65図241~254、第66図255、第67図277~281・285~290)から出土している。埴277・278・281など内面黒色で外面の底部付近まで非常に良好な磨きが施されるものは6世紀でも古手の特徴をもつ。周溝中央北側5層からは内面に黒色処理が行われた埴230~234と口縁部が直立し底部に削りをもつ小甕237、口縁部が大きく外反する甕239がまとめて出土している。このうち埴には、須恵器を模倣して口縁部下に屈曲をもち底部を削った234、さらに屈曲部が下がった230・231、そして碗形を呈する233がみられることから6世紀前半に比定する。

一方周溝中央部からは須恵器甕252・253、高埴242・243他が出土している。このうち甕252は頸部径に対して口縁部がかなり開く特徴をもつ。また、周溝南側の4層からは須恵器埴247・248と提振240が出土している。埴247・248は南側の2層から出土した埴246とともに口縁部の立ち上り方、外上方に延びる受け部、扁平化が進んだ器形からTK217とみる。同じく周溝の南側から蓋249・250も出土していて、何れも

器高が高く頂部に向かって大きく立ち上がる。このうち蓋249には篋記号が書かれている。以上の特徴から、これらを6世紀末～7世紀初頭に比定する。

(5) 古代・中世

古代の土器は竪穴建物跡SB01(第68図293、PL20管理番号1)、SB02(同図294～296)、SB03(同図298、PL20管理番号8)等から出土しているが、全体に非常に少ない。このうち293は灰釉陶器の碗で、器面が薄く削られ釉薬がハケで塗られており、光ヶ丘1号窯式と推定される。管理番号8は灰釉陶器の深碗で器形と釉が非常に薄いことから、丸石2号窯式と推定される。294は碗で高台が三角系を呈して大きく広がらないこと、釉を漬け掛けしているものの、残存部位が少ないことから虎溪山～丸石2号窯式と考える。296は底部に刻書(カマジルシ)のある須恵器の坏である。焼きが堅硬で糸切り底、底径がやや小形化している。9世紀の前半とみられる。

中世の土器・陶磁器としては中国産磁器、国内産陶器等がみられ、SB04(PL20管理番号9・10)、SB11(PL20管理番号56・392)、SB17(第68図302)、SD01(同図309)、SD02(PL20管理番号17・18・22)、SD03(同図315)等から出土している。このうち管理番号56と管理番号17の青磁碗には鎗蓮弁文がみられる。315は同じく青磁碗で、高台が削り出されている。309は青磁の輪花皿で口縁部が大きく外反している。管理番号392は白磁碗でやや黄色味かった素地と釉薬が特徴的である。国内産陶器では管理番号9と管理番号22が天目茶碗で独特の茶褐色の鉄釉が施されている。管理番号10と管理番号18はすり鉢で銷輪が施され、櫛目の摩耗は少ない。また302は非口口のワワラケで、やや粗雑な作りである。

(6) 近世以降

近世の陶磁器はSD01(第68図307・308)、SD02(同図312・313)とSM01(PL19管理番号384～388、390・391)から出土している。このうち307は志野焼の丸皿である。308は灰釉陶器の丸碗で、淡緑色の細かな貫入のある釉薬が施され、口縁部が垂直に立ち上がり胴部が屈曲する器形である。312は灰釉陶器の皿で梅の模様が摺られ、高台以外には釉がみられない。また、SM015層(Ⅱ層)から出土した管理番号384～387、同14層(Ⅱ層)から出土した388、同13層(Ⅱ層)から出土した390、同9層(Ⅱ層)から出土した391は、SM01がかく乱を受けた時期を決める際の根拠となる基準資料(第6節参照)であるが、いずれも瀬戸美濃産の磁器である。特に管理番号388は型紙摺で文様を付けていることから明治25年以降に時期が絞り込める。

註

- 1) 観察のうち胎土はあくまでも簡易的な観察であり、土器の部位や表面と内面で異なる可能性は否めない。
- 2) うち1類は、0.5～4mm大の砂を多量に含むものを指す。1類中の花崗岩片は平均1～3mm程度、斜長石、石英、黒雲母は0.5～1mm程度でやや多く、角閃石は0.5mm程度で少数含む。2～11類は1類より砂が少なく、多少の組成の違いで分類している。凡例は別表第3表の末尾に示した。
- 3) 註2の1類の説明に同じ。
- 4) 本時期の土器群は折衷変容が予想され、本来の分布圏の個体との型式間距離の比較検討が不十分である土器型式に関しては「系」を付記した。今後、型式学的検討と胎土の観察によって搬入が確認できれば、系を外すことがぞましい。ただし、「唐草文系土器」には成立の際の学史上の経緯があり、この限りではない。
- 5) 唐草文系土器は「胴部の前面に展開する大柄渦巻文、その間隙を篋描沈線による綾杉文とその変形文で充たす文様構成は、唐草文系と総称して呼ぶ最大の特徴」(長崎他1979)、「曾利式とは別の土器群として分離された一群」(米田

1980)として設定された。その时期的な範囲や系統関係において、まだ一致した見解が出されていないもの(小口1998・神村2003・三上2002)、井戸尻式の伝統に、榎倉式等の強い影響が加わって成立したものと理解され、中野市千田遺跡の資料(綿田2013)によりその点がさらに明確化した。

- 6) 本稿では「下伊那タイプ」を土器型式に準ずるものと理解した。

2 土製品

(1) 概要

本遺跡からは土偶4点、土製品2点、土器片加工品が8点出土している(第68図1~14)。

(2) 縄文時代

土偶は4点出土している。全て破片で、1は頭部、2は胴部で1区IV1層遺物包含層から、3・4は腕部で3点とも1区IV1層遺物包含層(東)から、出土している。1は顔面全体の2/3程度の破片で、押し引きによる目と刺突による鼻の表現がみられる。また、耳は三角形の、髪は細い粘土紐の貼り付けである。2の腹面中央には降帯が垂下し、左右から延びた沈線文の先端が残っている。背中には、くの字状に押し引きがなされている。断面を上からみると3箇所、下から見ると2箇所、串を刺したとみられる穴が残る。胎土は何れも1類(註1)で大粒の花崗岩や斜長石の破片がみられる。3は胴部との接合部で離れた左腕で、胴部と接合するための串が通されていた穴が残り、接合面に沿って沈線が引かれている。腕の先端はかかると反り、4箇所の浅い刻みがあって指を表現したと推測される。文様は腕の前面のみにあり、小箬手文を2~3重に沈線が包み込み、外側にも沈線が沿っている。中期後葉の土偶の文様にはしばしばこのような箬手文を沈線が包み込む構成がとられる。4も腕の先端には4つの刻みが設けられ、指の表現が明確である。

土器片加工品は4点出土し、何れも1区IV1層遺物包含層(東)から出土した。7は縦の条線文の上から横波状に8本の条線が展開する土器の破片を不整形に打ち欠いたもので、全面がかかる研磨加工されているものとみられる。9・11はともに無文の土器の胴部を楕円形に打ち欠いたもので、後者には付着物がみられる。12は無文の土器片を切り出して長方形に整えたものとみられる。

(3) 古墳時代

土製品5は直径1.6cm程度の円筒形で片方の端面が凹状、もう片方の端面が凸状を呈し、SM01周溝2層から出土している。

土器片加工品は4点出土し、そのうち土器片加工円板8と10はどちらもSM01の5層(Ⅱ層)から出土している。8は内面が黒色の土師器の杯の胴部を円形に打ち割って研磨加工したものである。10も打ち欠いた面全体が丁寧に研磨加工されている。13と14は何れもSM01周溝から出土し、高環の脚部を長方形に切り出してそのほぼ全周が研磨されたものとみられる。12よりも破断面が平滑に研磨されているものの、製品の形を整えるための加工というよりも、何かの対象物を土器片で研磨したものと推測される。

註

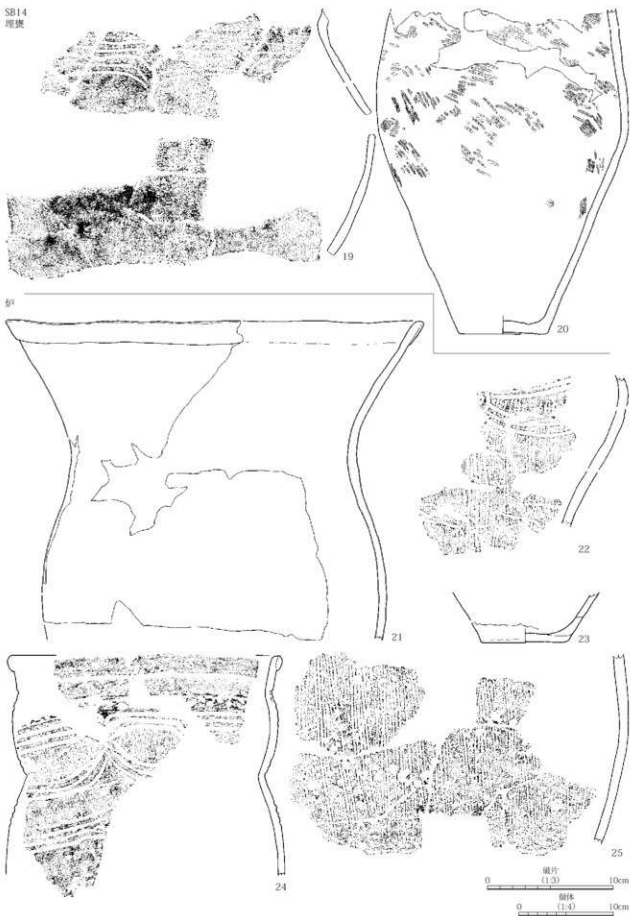
- 1) 本節1土器・陶磁器の註1に同じ。

縄文時代
SB08
ピット1



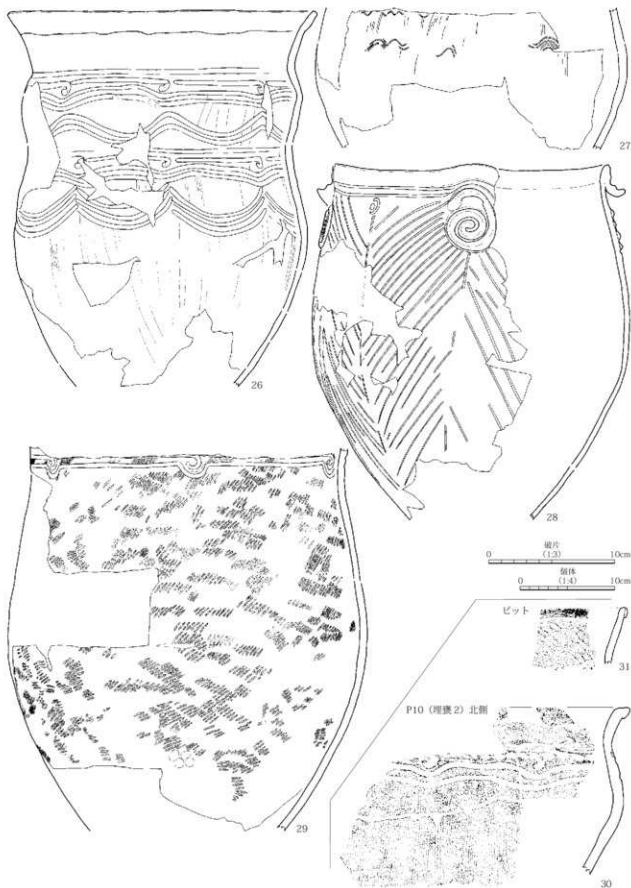
第53図 土器実測図1

SB14
埋裏



第54図 土器実測図2

SB14
07

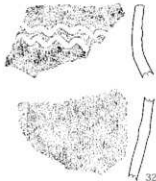


第55図 土器実測図3

第3章 鬼釜遺跡

SB14

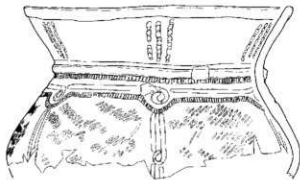
P10 (埋藏2) 北側



32

SB16

埋藏



33

SK185



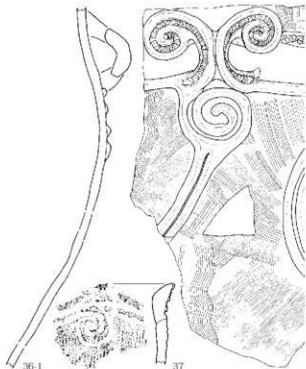
34



35

SK192

1層



36-1

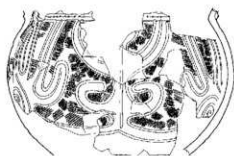
37

36-2

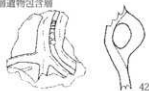


第56図 土器実測図4

グリッド
V層

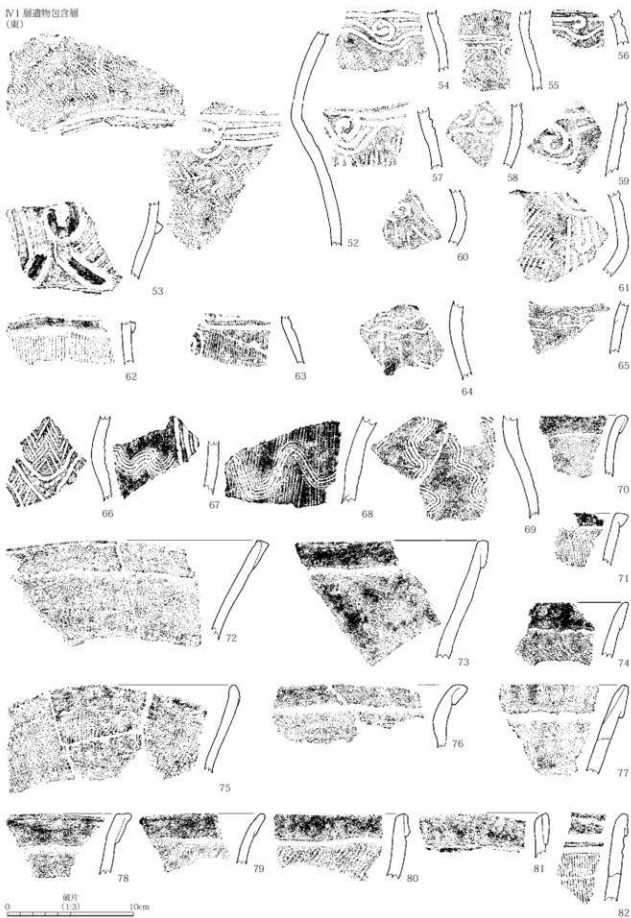


IV1 層遺物包含層
(OR)



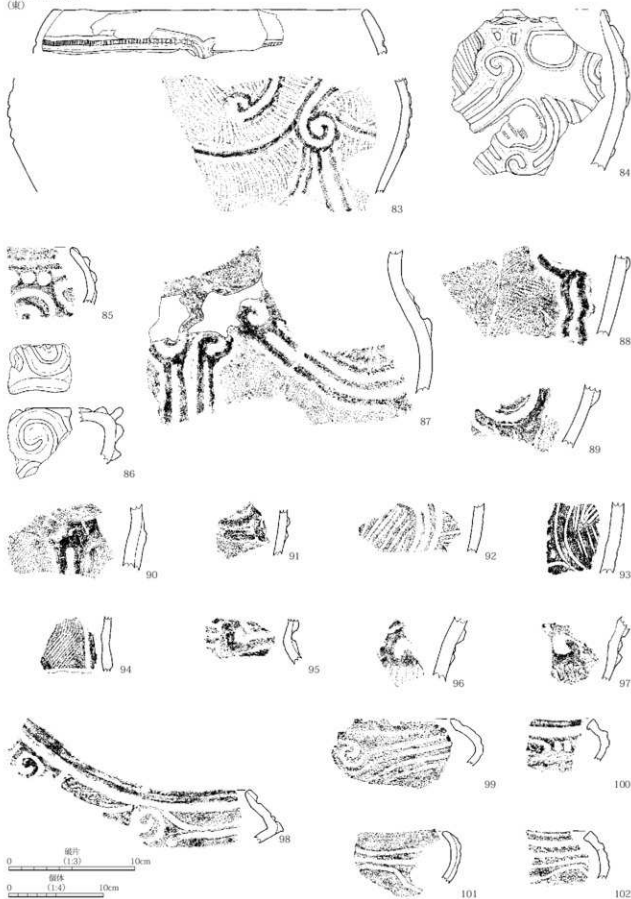
第57図 土器実測図5

IV1層遺物包含層
(M)



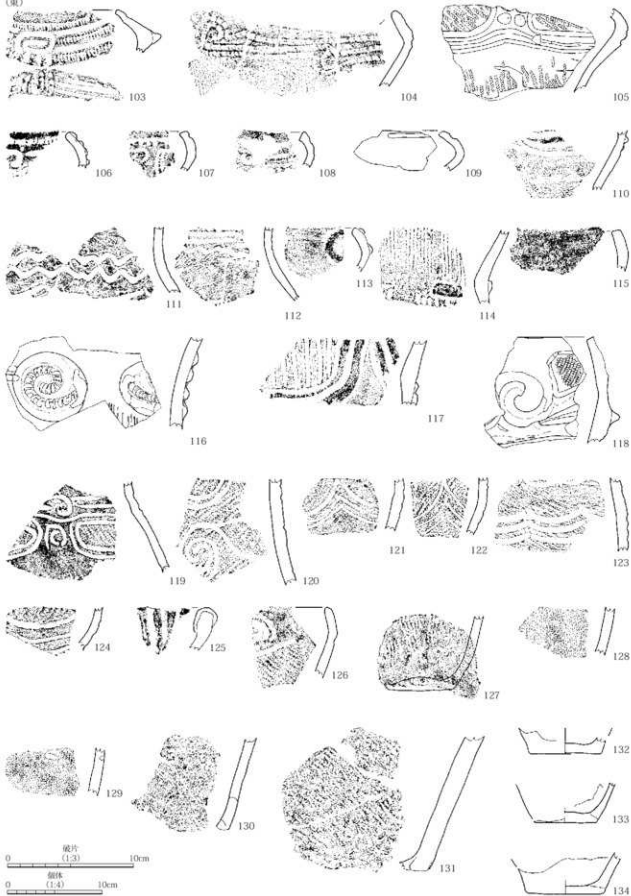
第58図 土器実測図6

IV1 層遺物包含層
(北)

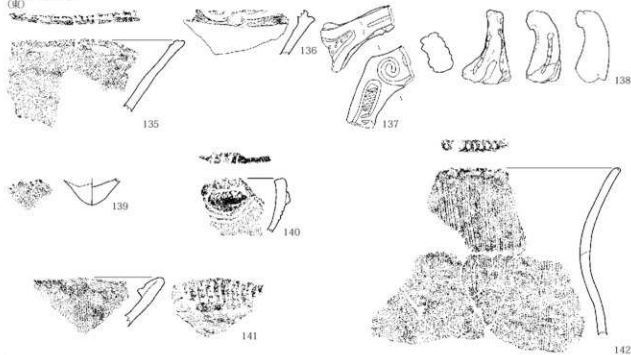


第59圖 土器実測図7

IV1 層遺物包含層
(3C)



第60图 土器実測图8

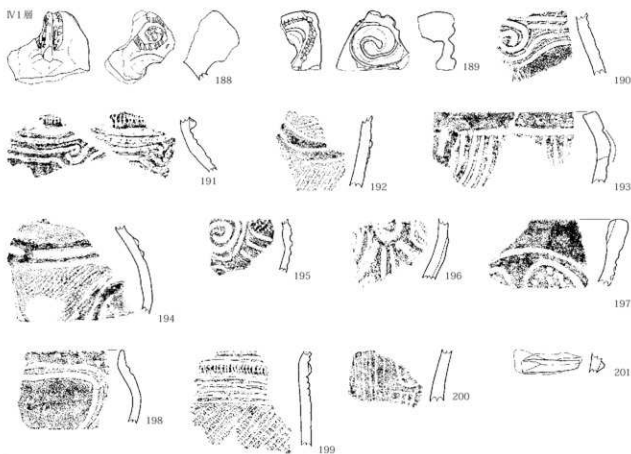
IV1 層遺物包含層
(東)IV1 層遺物包含層
(西)

第61图 土器実測図9

N1 層遺物包含層
(中央)



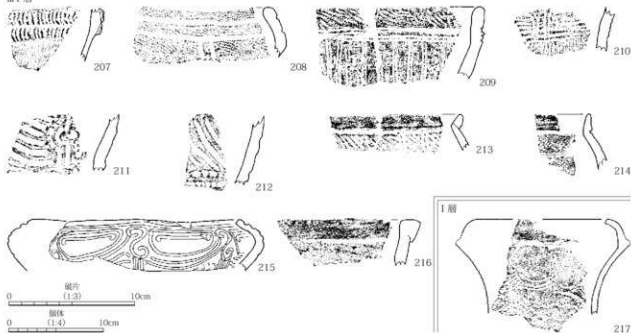
第62図 土器実測図10



SMO1 IV層 (17層)



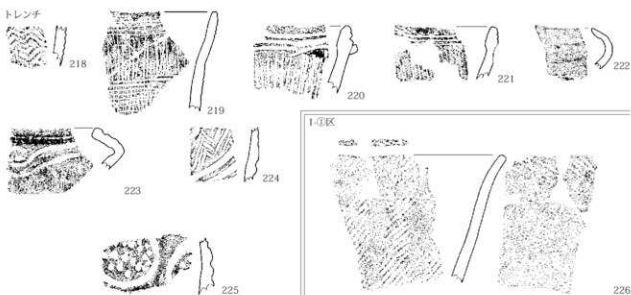
III1層



第63图 土器実測図11

第3章 鬼釜遺跡

トレンチ



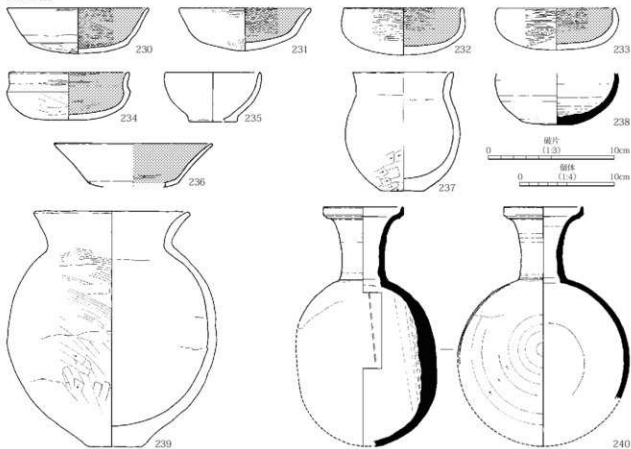
弥生時代
SB13



SK96

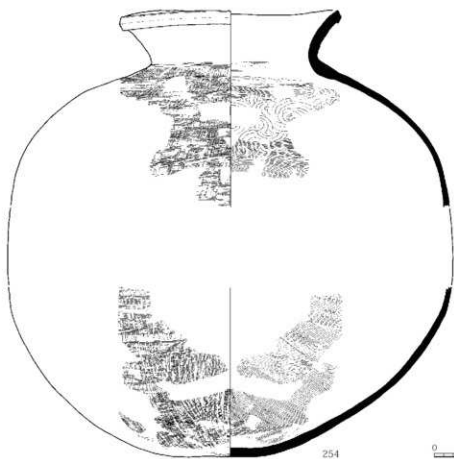
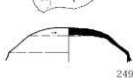
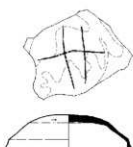


古墳時代
SMO1 四溝

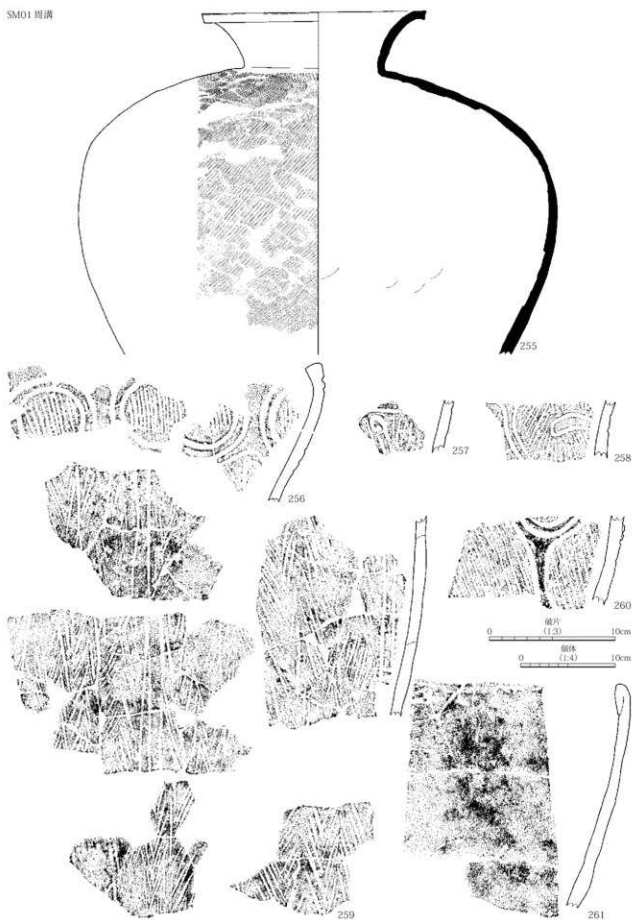


第64図 土器実測図12

SM01周溝

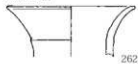


第65圖 土器実測図13



第66図 土器実測図14

SM01 周溝



SM01 III層 (16上層)



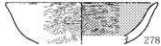
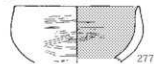
SM01 III層 (16下層)



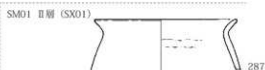
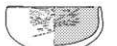
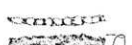
SM01 II層 (14層)



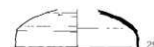
SM01 II層 (13層)



SM01 II層 (5層)



SM01 II層 (SX03)



SM01 II層 (SX04)



第67圖 土器実測図15

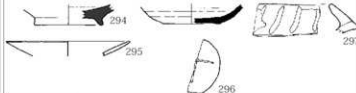
第3章 鬼釜遺跡

平安時代

SB01



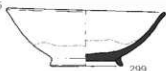
SB02



SB03



SB05



SB10



SK08



中世

SB17



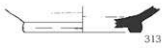
SK07



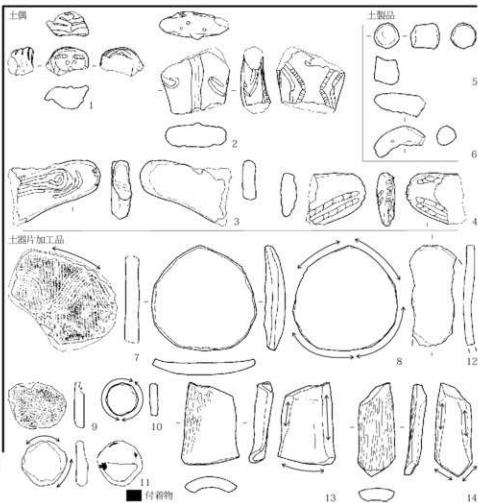
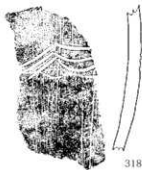
SD01



SD02



SD03



破片、土器、土製品、土器片加工品
 0 10cm
 縮尺 (1:3)
 0 10cm
 縮尺 (1:4)

第68図 土器実測図16・土製品実測図

3 石器

(1) 石器群の概要

鬼釜遺跡で出土した石製遺物の総合計は1,584点で、剥片石器12種類、礫石器6種類、剥片石器の素材・残滓4種類がみられる(第6表)。剥片石器の中では横刃形石器が最も多く224点42.7%、打製石斧が137点26%、石鏃は39点7.5%を占める(第69図)。礫石器は全体に少なく、石皿や蜂の巣石はみられない。その他加工痕跡や使用痕跡は認められないもの、人為的に遺跡に持ち込まれたとみられる礫等がある。

石器のうち縄文時代中期後葉の竪穴建物跡や土坑から出土し、土器が確実に伴っているものは時期が判別できる。また、包含層で出土した石器も中期後葉の土器が多く出土していることから、概ねその時期とみられる。ただ、SM01とその周辺のSX01～04には縄文早期、弥生後期～古墳前期の土器が混在しているため、中期後葉にそれらの時期の石器が混入している可能性がある。地点ごとの確実な土器との共存関係が検証できなかったこと、形態のみからは時期が判別できなかったことに課題が残る。

第7表に、遺構別の各器種出土数を示した。出土石器のうち縄文時代の遺構(SB08・14、SK22・185・186・187・192)から出土したものは108点、縄文時代以外の遺構から出土したものが386点、遺構外(第7表右側参照)からの出土が1089点であった。縄文時代の遺構から出土した石器108点の比率は剥片が61点56.0%、横刃形石器が26点23.9%であり(第7図)、縄文時代の竪穴建物跡であるSB08でも剥片以外では横刃形石器の比率が高く17点出土している(第7表)。第8表に遺構別の各石材出土数を、第9表に石材別の各器種出土数を示した。本遺跡では石器石材として32種類以上が認められる。石材の細分名称の中には一部粒径による分類と組成による分類が並列されているが、認定できた最も詳細な細分名称を使用した。両表への記載順序は火成岩(火山岩・深成岩の順に酸性岩から塩基性岩へ)、堆積岩(碎屑堆積岩・火山碎屑岩・化学的堆積岩の順)、変成岩(接触変成岩、広域変成岩の順)とした(黒田・諏訪1968)。石器と石材の関係として次の点を指摘する。

- A 石鏃、石錐、搔器、不定形石器、楔形石器等小形石器には黒曜石が使われる比率が高く、チャート、湯ヶ峯流紋岩(下呂石)(註1)も認められる。
- B 横刃形石器の87.2%(第71図)、打製石斧の54.1%(第72図)刃器の79.1%(第73図)は砂岩(註2)が使われる。
- C 磨製石斧の63.1%(第74図)と打製石斧の36.6%(第72図)は緑色を呈する凝灰岩(註3)が使われる。
- D 磨石・敲石など礫石器には花崗岩や安山岩が使われる。
- E 剥片で大形のもの砂岩、小形のもの黒曜石が多い。

第6表 石器出土数(含石製品)

大分類	記載順	器種	点数
剥片石器	1	石鏃	39
	2	石錐	5
	3	石匙	6
	4	搔器	12
	5	削器	10
	6	不定形石器	4
	7	楔形石器	34
	8	打製石斧	137
	9	横刃形石器	224
	10	挟入打製石包丁	6
	11	刃器	24
	12	磨製石斧	21
素材・残滓	13	石核	8
	14	剥片	908
	15	砕片	99
	16	原石	2
	17	磨石	6
礫石器	18	凹石	2
	19	敲石	28
	20	石錘	3
	21	砥石	1
	22	礫器	4
	23	重状垂飾(石製品)	1
器具	23	重状垂飾(石製品)	1
合計			1584

第7表 遺構別各器種出土数

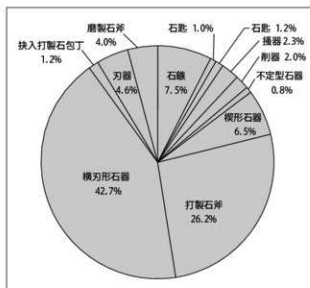
遺構名(点)	遺器類																	合計	点別
	石皿	石層	石碗	甕	甕	甕	木製貯器類	木製貯器類	打石貯器類	打石貯器類	打石貯器類	快打貯器類	快打貯器類	快打貯器類	快打貯器類	快打貯器類	快打貯器類		
S801	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
S802	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	
S803	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
S804	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
S805	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	
S806	2	0	0	0	0	0	0	1	17	0	0	2	0	43	6	0	1	24	
S809	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	
S810	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	6	0	0	0	8	
S811	0	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	3	0	0	0	7	
S814	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	7	1	0	0	9	
S817	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
SK06	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	
SK22	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
SK39	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
SK174	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	
SK185	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	
SK186	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	4	
SK187	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	2	0	0	0	0	4	
SK192	0	0	0	0	0	0	0	6	0	1	0	0	6	0	0	0	0	14	
S002	1	1	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	
S003	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	2	0	0	0	0	5	
S003	0	1	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1	5	0	1	0	0	11	
S801	8	0	5	5	0	10	7	34	2	3	2	239	17	2	2	1	6	336	
SK01	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	15	2	0	0	0	20	
SK02	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2	
SK03	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
SK04	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	2	0	0	0	9	
IV1層遺物包含層(東)	4	0	1	0	1	0	2	22	54	0	4	9	2	110	17	0	3	0	233
IV1層遺物包含層(西)	0	0	0	0	0	0	0	5	19	0	6	0	0	31	0	0	0	0	63
IV1層遺物包含層(中央)	1	0	0	0	0	0	0	4	10	1	2	0	0	30	11	0	1	0	61
遺構外	11	0	5	2	2	1	9	55	66	2	3	6	1	282	17	0	1	4	470
H-P	0	0	0	0	0	0	1	12	4	0	0	0	1	23	2	0	0	0	43
表土・耕作土・跡土	5	2	0	3	2	3	9	17	20	0	4	1	1	86	23	0	0	2	186
合計	39	5	6	12	10	4	34	137	224	6	24	21	8	906	99	2	6	2	1584

* 縄文時代の遺構に絞る

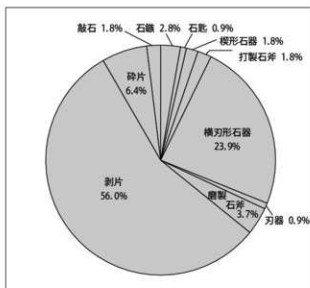
第8表 遺構別各石材出土数

遺構名(点)	遺器類																	合計	点別	
	黒曜石	燧石	燧石	燧石	燧石	燧石	燧石	燧石	燧石	燧石	燧石	燧石	燧石	燧石	燧石	燧石	燧石			
S801	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
S802	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	
S803	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
S804	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	
S806	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	
S808	16	0	0	0	0	0	39	1	1	3	1	2	0	0	0	0	0	0	74	
S809	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	
S810	2	0	0	0	0	0	3	0	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	13	
S811	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2	
S814	4	1	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9	
S817	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
SK06	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
SK22	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
SK39	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
SK174	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
SK185	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2	
SK186	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	
SK187	3	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	
SK192	0	0	0	0	0	10	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	14	
S001	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	3	1	0	0	0	7	
S002	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	5	
S003	7	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	13	
S801	118	27	11	0	1	1	136	0	2	10	0	9	1	0	27	23	7	0	336	
(S801)	11	2	0	0	0	3	0	0	0	0	0	1	0	1	1	0	0	0	20	
(S802)	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	
(S803)	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
(SK04)	4	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	2	0	0	0	0	9	
IV1層遺物包含層(東)	52	2	0	0	0	136	7	8	1	0	0	1	0	17	1	1	0	0	233	
IV1層遺物包含層(西)	0	0	2	0	0	50	0	1	1	0	0	0	0	2	1	0	0	0	63	
IV1層遺物包含層(中央)	19	0	0	1	0	0	33	0	3	0	0	0	0	3	1	0	0	0	61	
遺構外	718	4	0	1	0	1	243	0	10	0	0	1	1	2	60	21	2	0	1	470
トレンチ	17	2	1	0	0	0	12	0	0	0	0	0	0	8	3	0	0	0	44	
表土・耕作土・跡土	77	6	1	0	0	0	87	0	4	0	0	0	1	0	0	0	0	0	186	
合計	468	43	4	5	1	2	715	1	12	42	2	13	1	3	3	1	3	14	1584	

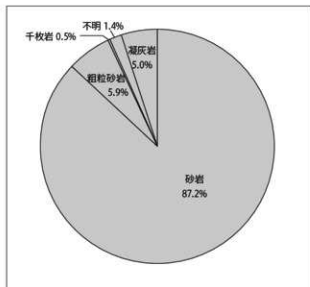
* 縄文時代の遺構に絞る。ホルンフェルスには片状ホルンフェスを含む。黒曜石花崗岩には細粒黒曜石花崗岩を含む。



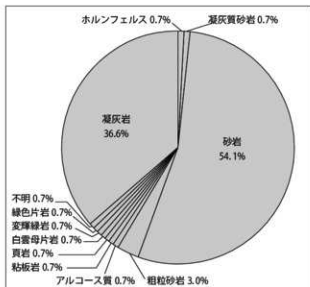
第69図 剥片石器の器種別構成



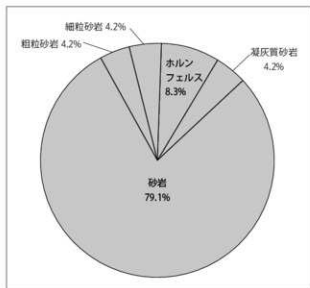
第70図 縄文時代の遺構から出土した石器の比率



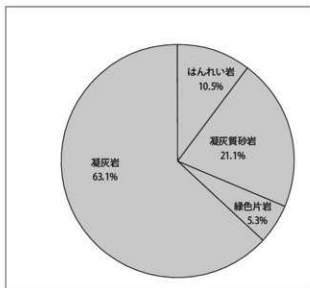
第71図 横刃形石器の石材構成



第72図 打製石斧の石材構成



第73図 刃器の石材構成



第74図 磨製石斧の石材構成

(2) 石器の器種別概要

第6表の器種順に若干の所見を記載する。観察の視点は川路大明神原遺跡(鶴田・貫田2010)に準拠し、器種や石材ごとの点数は各表に示しているため、ここではくり返さない。また、個別資料の石材は第75図～第89図に付記している。

①石鏃(第75図1～12)

小形剥片の両面に押し剥離を施したもので、先端が尖り三角形状を呈する。全て無茎で、基部には抉り込みをもつが、抉り込みの度合いに差がある。縁辺部の形態は丸みを帯びるもの、直線的なものと、抉りが見られるものがある。石材は黒曜石、チャートの他に湯ヶ峯流紋岩(下呂石)製の8がある。湯ヶ峯流紋岩(下呂石)は剥片も出土していることから、搬入品ではなく、現地製作であろう。SB08出土資料のうち側縁部に抉りがみられる2は形態から中期後葉とみられるが、5層出土の3は基部の深いU字形の抉り込みの形態から早期に遡る可能性がある。

②石錐(第75図13・14)

小形剥片を素材としその一端を両面から加工して錐部を作り出しているものを指す。13は側縁全体を加工して棒状に作り出しているが、14は素材に尖鋭な先端部のみを付けている。

③石匙(第75図15～17)

剥片を素材として縁辺部に加工を施し、抉りを入れて摘み部を作出したものを指す。

摘み部を通る軸線に対し直交方向に刃部が作出されるいわゆる槌型の15と、並行方向の刃部を有する篋型の16・17が見られる。特に16の石材は非常に良質である(註4)。

④掻器(第76図18～24)

剥片を素材として長軸に対し直交方向に急角度の刃部を作出しているものを指す。いずれも片面からのみの加工で片刃の刃部を有する。縄文の遺構に伴うものは無いが、素材に槌状の剥離を有する21等、押型文に伴う石器を含む可能性がある。22は両面に比較的平坦な剥離がなされる篋状の石器であるが、本器種に含めた。片刃を基本とするが腹背両側から剥離がなされ、両刃の刃部が形成される例もある(22・23)。

⑤削器(第76図25～27)

剥片を素材として長軸に対し並行方向の縁辺部に連続的な二次加工を施し急角度の刃部を作出しているものを指す。さらに長軸に直交方向の縁辺部にも刃部が形成されるもの(25)、直交方向にはやや粗い剥片剥離が施されるもの(27)も含める。

⑥楔形石器(第76図28～30)

両極打法による剥離が対峙する2面にみられるものを指す。

⑦打製石斧(第77図32～第79図50)

大形剥片に対し器面の両側に剥離を施しながら長方形に整える、もしくは長方形の礫素材の片面を剥離することによって長方形に整え、縁辺部に特徴的な平坦剥離を連続的に行っているものを指す。平面形状からは短冊形(32～45)、撥形(48～50)、嘴形(46・47)に分類される。刃部先端の形態は、平坦な直刃(33～38)、円刃(40～45)がみられる。方向性のわかる擦痕が認められるものは細線(41・47・48)で示し、解らないものは灰色のスクリーンで示した(40・42～44)。摩耗痕は刃部に見られるものが多いが石器の中央部に認められるものもあり(42・44)、着柄に由来する可能性がある。

⑧横刃形石器(第79図51～第84図80)

厚さ1.5cm程度の剥片の縁辺部に二次加工を施し、刃部を作り出しているもの(51～55・64～68)と鋭利な側縁部に使用時の微細剥離痕が確認できたもの(56～63・69～79)を指す。抉りを入れているものもみられる(78・79)。背面に自然面が残るものが多い。砂岩の礫素材を分割することによって鋭利な剥

片を採取し、そのまま使用できるものは使用し、できないものは刃部に加工を施して更に鋭利な部分を出して使用したと考えられる。また刃部がかなり摩耗しているもの(65)があり、使用痕観察が課題である。

㊦ 抉入打製石包丁 (第85図81~84)

砂岩製の剥片素材の左右に抉りがみられるものを指す。背面には自然面が残し、刃部には微細剥離痕がみられる。81・82がともに出土したSM01 5層(Ⅱ層)は弥生時代後期終末中島式が出土したSM01 16層(Ⅲ層)の直上にあたるため、出土層位と形態を根拠に弥生時代後期に比定されるものと推測したい。

㊧ 刃器 (第85図85~88)

厚手の剥片や分割した礫を素材とし、2cm以上の剥片を連続的に剥離しているものを一括した。形状は定型的ではない。

㊨ 磨製石斧 (第86図89~第87図95)

全体を台形状に敲打しながら整え、部分的に磨いて仕上げたもの。敲打部分が残っていても未製品ではない。全体に肉厚のもの(89・90・92・94・95)と断面形状が扁平で小形(93)のものがみられる。刃部の平面形は直刃(89・91)と円刃(94・95)がみられる。

㊩ 剥片 (第76図31・第87図98~第88図107)

石器を製作する際もしくは刃部を再生する際に出る破片で、便宜的に1cm未満を破片(チップ)、1cm以上を剥片(フレイク)とした。小形剥片には黒曜石、チャート、湯ヶ峰流紋岩、大形剥片には砂岩、凝灰岩が多用される。砂岩の剥片素材の中には微細剥離を持たないものの、横刃形石器と類似した形状のもの(100・103~107)が多く認められ、横刃形石器として使用される以前の状態と推察される。

㊪ 磨石 (第88図108・109)

108は安山岩製で表裏に、109はかなり脆い黒雲母花崗岩で表裏と側面に、それぞれ磨面がみられる。

㊫ 門石 (第88図110)

110は表裏面に敲打による窪みがみられる。

㊬ 敲石 (第89図111~115)

棒状の礫を素材とし、長軸先端部に敲打痕が認められるもの(111・112)と、塊状の礫を素材とし側面を中心に敲打痕がみられるもの(113・115)、卵形の礫の先端部に敲打痕がみられるもの(114)がある。

㊭ 石錘 (第89図116)

礫の両端を打ち欠いて抉りを入れている、いわゆる打欠石錘である。

註

- 1) 縁辺部に透明感のある黒色の剥片は兩信では一般的な石材であり、一般に下呂石と呼ばれている。これらは湯ヶ峰デイトサイト(原山1988b)の可能性がある。同岩は、全岩化学分析(中村2007)によって流紋岩とされている。
- 2) 大形の剥片石器で多く使われる石材であり、天竜川周辺の在地石材である。
- 3) 原山智氏より緑色を呈し、三波川変成岩よりも弱いが、変成が認められるもののご教示をいただいている。川路大明神原遺跡の報告では「緑色の凝灰岩」と呼ばれている(鶴田・費田2010)が、中村由克氏より「緑色岩」、「緑色片岩」に分類することが可能とのご教示をいただいている。
- 4) 原山智氏より「凝灰岩」、中村由克氏より周辺遺跡との比較からは「第三紀の頁岩」とみられるというご教示をいただいている。凝灰岩は堆積岩のうち火山から噴出した岩石・鉱物に由来する火山砕屑岩であり、頁岩は堆積岩のうち既に存在している岩石が風化を受けて分解しもとの岩体より分離された粒子(砕屑部物)のうちシルト(1/16~1/256mm)や粘土(1/256mm未満)のサイズのもものが集積して形成されたグループで特に剥離性の強いものを指す。なお、川路大明神原遺跡で本器種に最も多い石材は「珪質凝灰岩」(鶴田・費田2010)で、本石材と類似している。

4 石製品

(1) 概要

本遺跡からは籠状垂飾1点(第90図1)と勾玉1点(同図2)、管玉5点(同図3~7)、ガラス小玉44点(同図8~51)、白玉1点(同図52)が出土している。何れもSM01からの出土で、籠状垂飾はSM01の17層(Ⅳ層)、管玉はSM01 5~9層(Ⅱ層)レベル、ガラス小玉は主に、SM01 5層(Ⅱ層)から出土している。

(2) 縄文時代

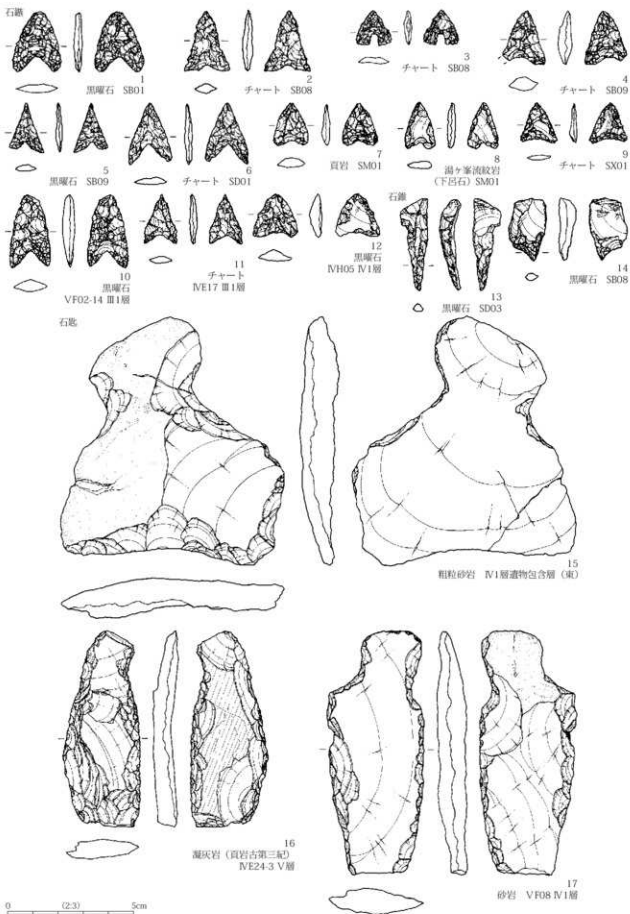
籠状垂飾1は下部が広がる逆三角形で、下端は直線状を呈し、頂部に直径5mm程度の孔がやや斜めに穿孔されている。側面は緩く湾曲し刃部は付けられていない。表裏面には、横斜め方向に規則的な擦痕がみられる。石材は透閃石岩か(註1)。このような垂飾は縄文早期(川崎1996)から中期前葉の時間幅で捉えられるため、本製品はその下限となる。遺跡からは五領ヶ台Ⅱ式の土器が出土しているため、その時期として矛盾はない。

(3) 古墳時代

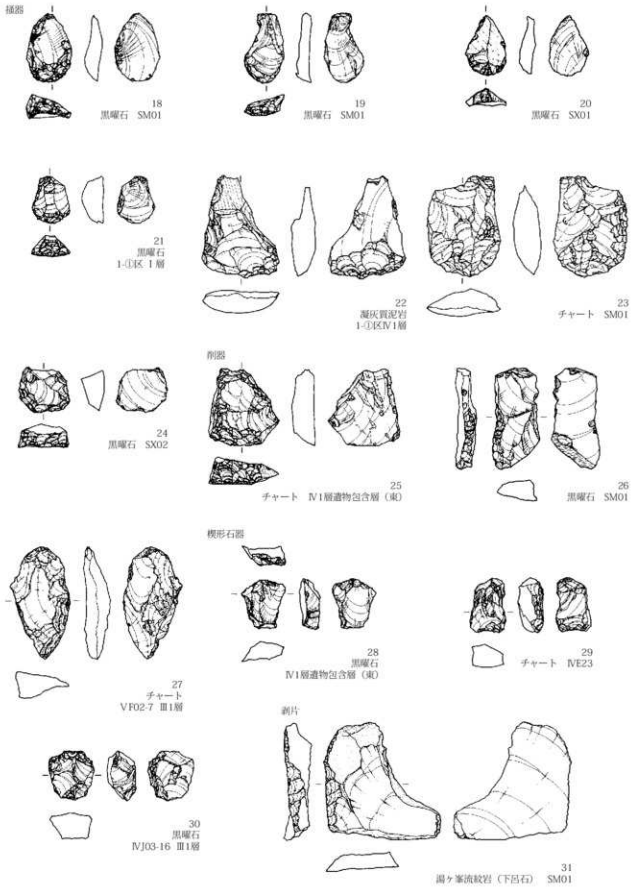
勾玉2は濃緑色の碧玉製で、全体に丁寧に研磨され、光沢を帯びている。表面は節理面にあたるのか、凹凸が激しく、裏面の孔付近が平坦に研磨されている。孔はやや斜めに一か所開けられ、片面穿孔である。管玉は淡緑色の碧玉製で、全体に丁寧に研磨されている。孔の直径は一方が約2mm、反対側が約1~1.5mmであり、その位置は、穿孔の起点と推測される上部は面のほぼ中央であるが、穿孔具が抜ける反対側ではやや端に偏る。上下の孔径の差異は3・4・5で顕著であり、孔の位置の偏りは6で顕著である。穿孔に不慣れた工人の製作によるものか。ガラス玉は緑色(8~15)、黄色(16~20)淡緑色(21~23)、濃紺色(24~50)、透明(51)がみられる。直径は3~7mmを測る。古墳時代のガラスにはカリガラス、ソーダ石灰ガラス、鉛ガラス、鉛バリウムガラス等があるが本資料の化学組成は測定していない。白玉52は滑石製品で1点だけ出土している。

註

1) 中村由克氏のご教示による。

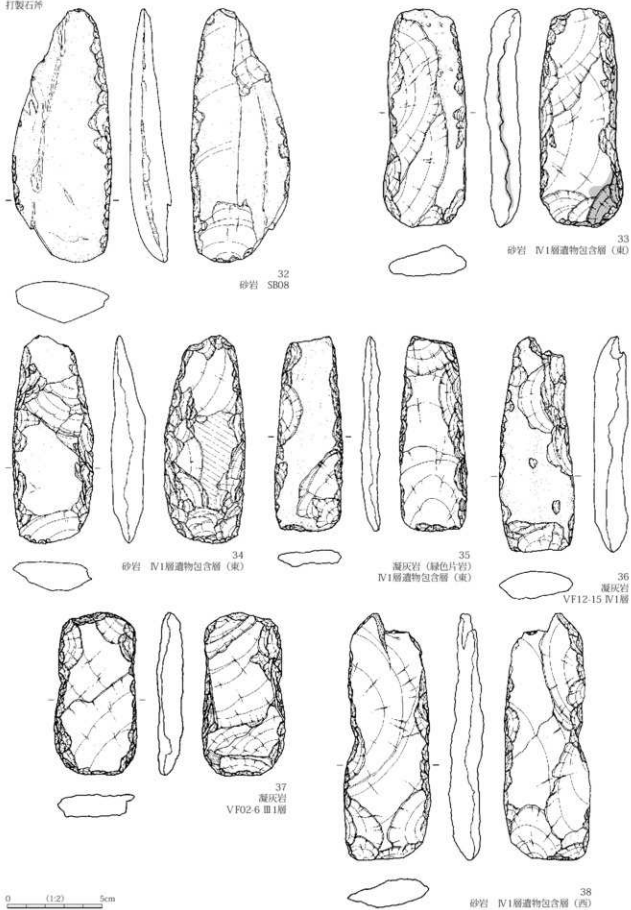


第75図 石器実測図1 (石鏃・石鏝・石匙)



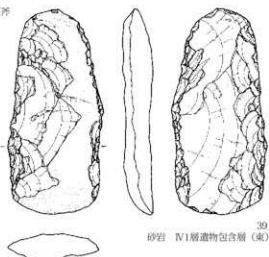
第76図 石器実測図2 (搦器・削器・楔形石器・剥片)

打製石斧

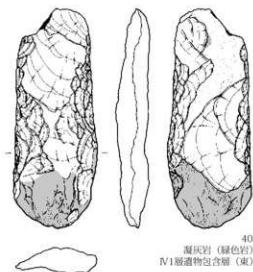


第77圖 石器実測図3 (打製石斧)

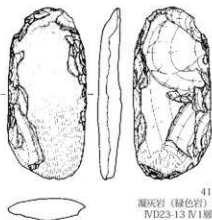
打製石斧



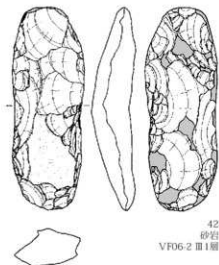
39
砂岩 N1層遺物包含層 (東)



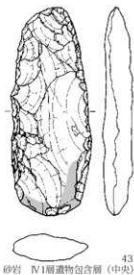
40
凝灰岩 (綠色岩)
N1層遺物包含層 (東)



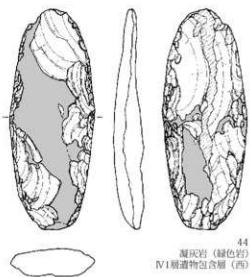
41
凝灰岩 (綠色岩)
ND23-13 N1層



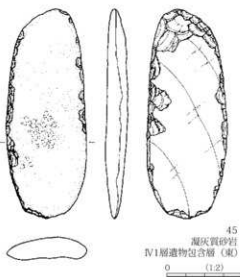
42
砂岩
VF06-2 III1層



43
砂岩 N1層遺物包含層 (中央)



44
凝灰岩 (綠色岩)
N1層遺物包含層 (西)

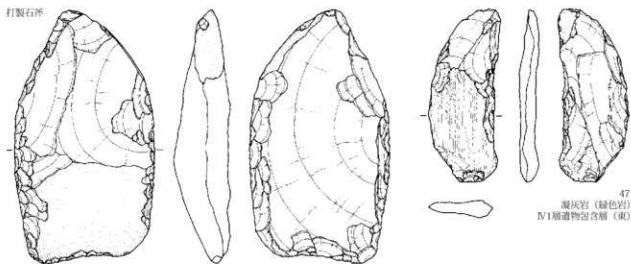


45
凝灰質砂岩
N1層遺物包含層 (東)

0 (1:2) 5cm

第78圖 石器実測圖4 (打製石斧)

打製石斧



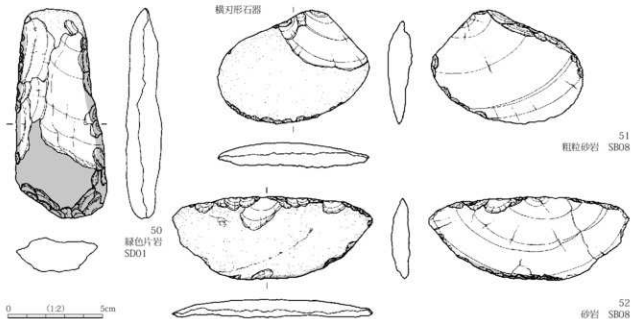
46
砂岩 N1層遺物包含層(中央)

47
凝灰岩(綠色岩)
N1層遺物包含層(東)



48
凝灰質砂岩(綠色岩)
N1層遺物包含層(東)

49
砂岩 N1層遺物包含層(東)



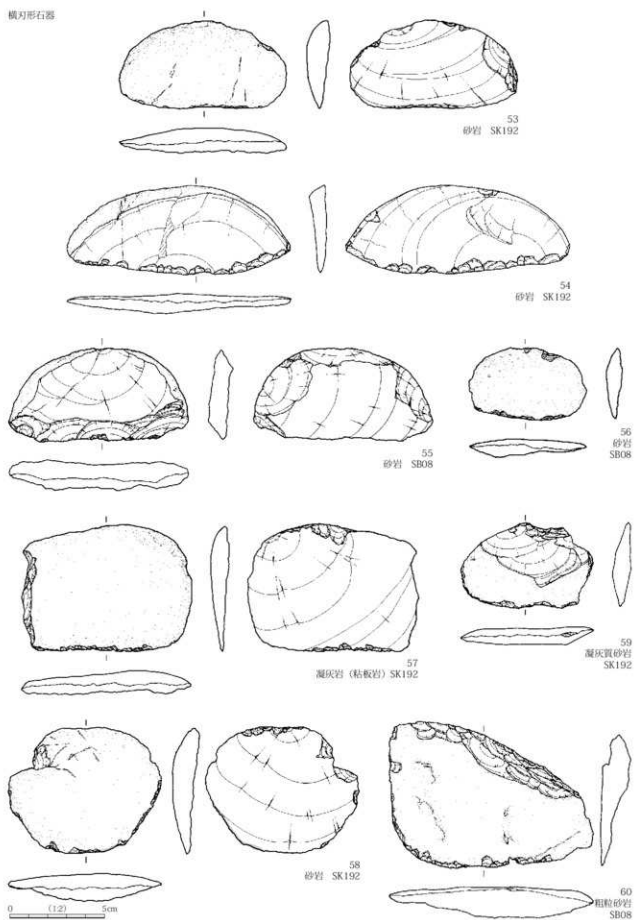
50
綠色片岩
SD01

51
粗粒砂岩
SB08

52
砂岩
SB08

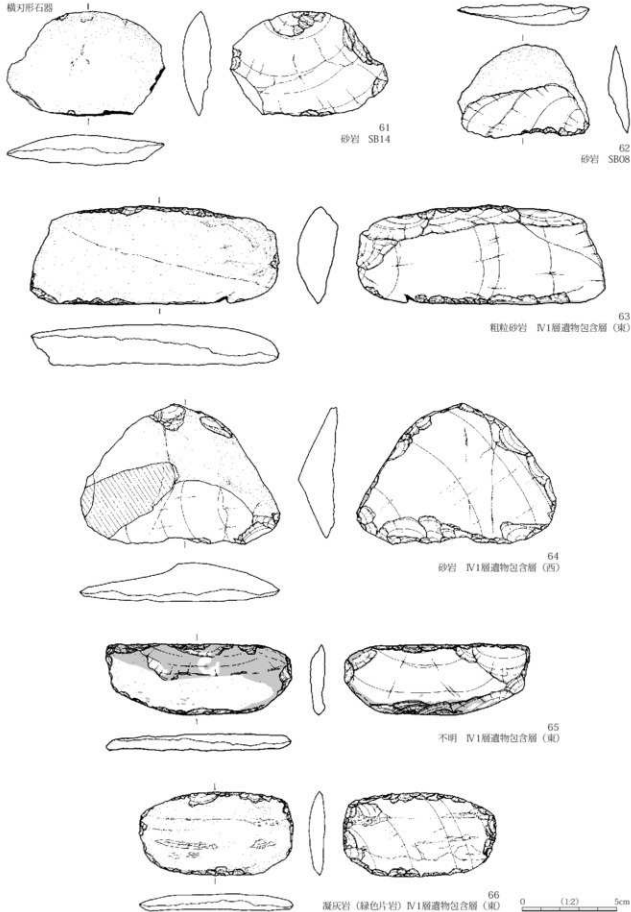
第79圖 石器実測図5(打製石斧・横刃形石器)

横刃形石器



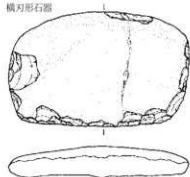
第80图 石器実測図6(横刃形石器)

横刃形石器

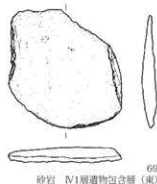
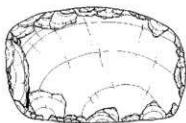


第81圖 石器実測図7 (横刃形石器)

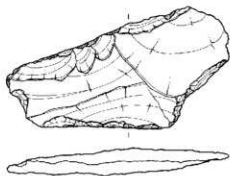
横刃形石器



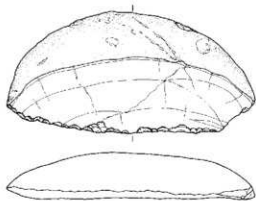
67
砂岩 N1層遺物包含層 (東)



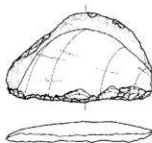
69
砂岩 N1層遺物包含層 (東)



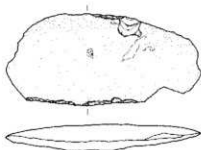
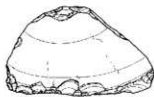
68
砂岩 N1層遺物包含層 (東)



70
砂岩 N1層遺物包含層 (中央)



71
砂岩 N1層遺物包含層 (西)

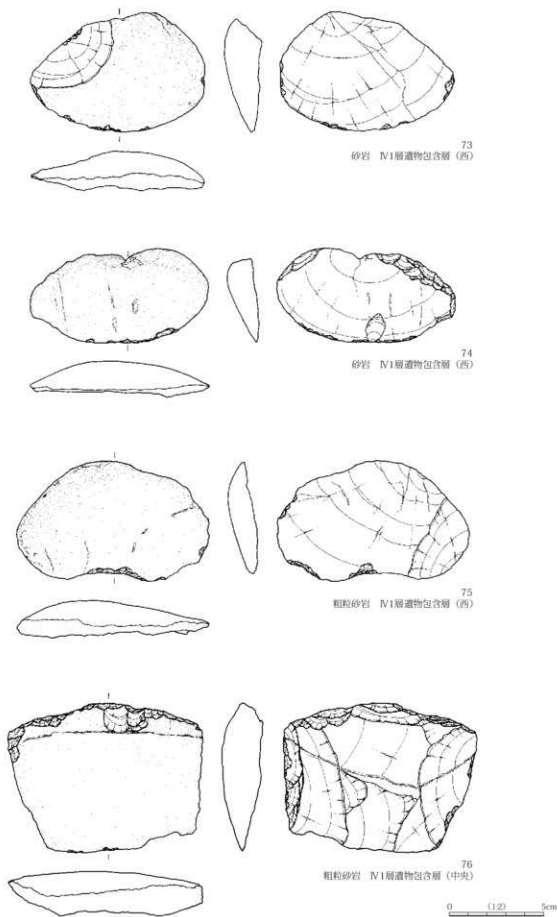


72
砂岩 N1層遺物包含層 (東)



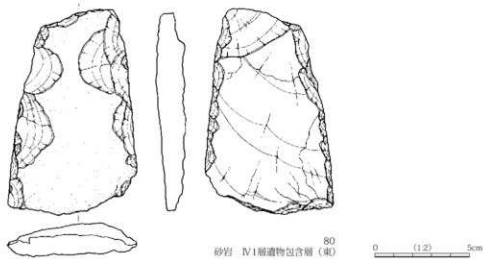
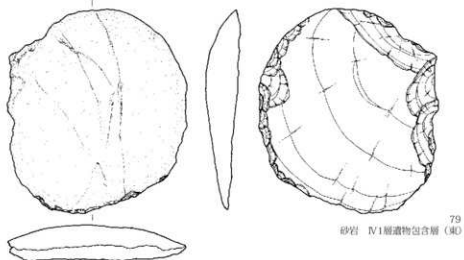
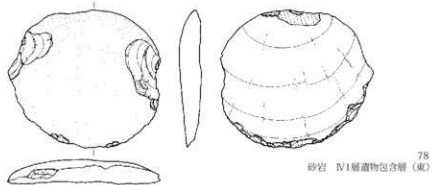
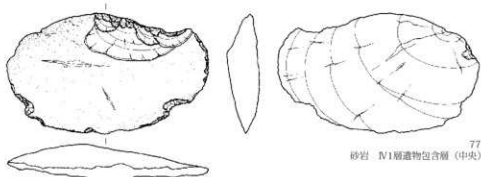
0 (1:2) 5cm

第82図 石器実測図8 (横刃形石器)



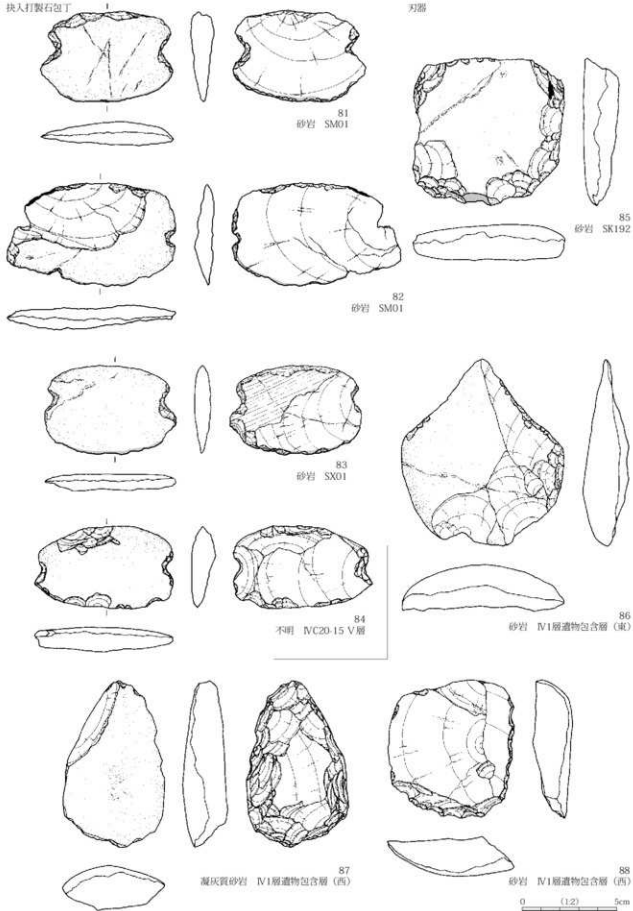
第83圖 石器実測図9 (横刃形石器)

横刃形石器



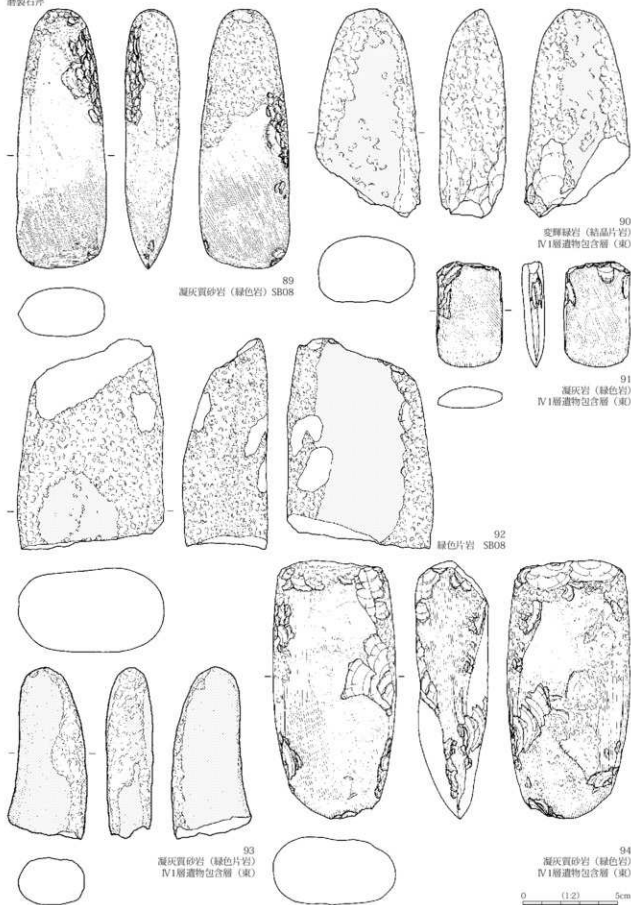
第84圖 石器実測図10 (横刃形石器)

扶人打製石包丁



第85圖 石器実測図11 (扶人打製石包丁・刃器)

磨製石斧



89
凝灰質砂岩 (綠色岩) SB08

90
變輝綠岩 (結晶片岩)
IV 1層遺物包含層 (東)

91
凝灰岩 (綠色岩)
IV 1層遺物包含層 (東)

92
綠色片岩 SB08

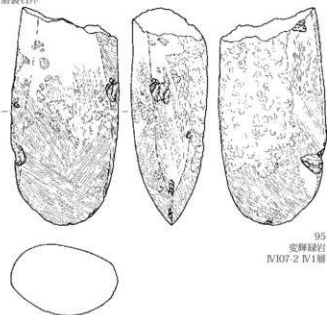
93
凝灰質砂岩 (綠色片岩)
IV 1層遺物包含層 (東)

94
凝灰質砂岩 (綠色岩)
IV 1層遺物包含層 (東)

0 1.2 5cm

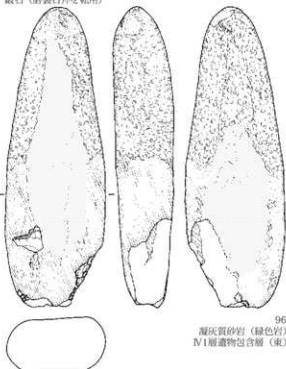
第86圖 石器実測圖12 (磨製石斧)

磨製石斧



95
変輝緑岩
IV107-2 IV1層

敲石 (磨製石斧を転用)



96
凝灰質砂岩 (緑色岩)
IV1層遺物包含層 (北)

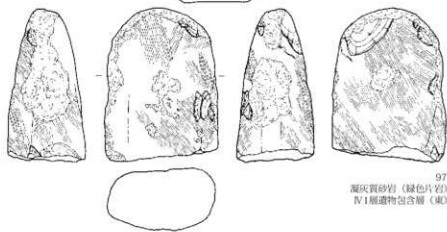
剥片



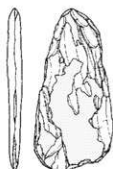
98
細粒砂岩 SB08



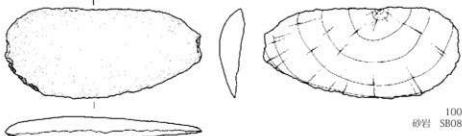
99
黒曜石 SB14



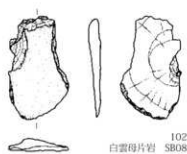
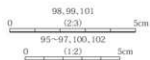
97
凝灰質砂岩 (緑色片岩)
IV1層遺物包含層 (北)



101
片状ホルンフェルス
SM01

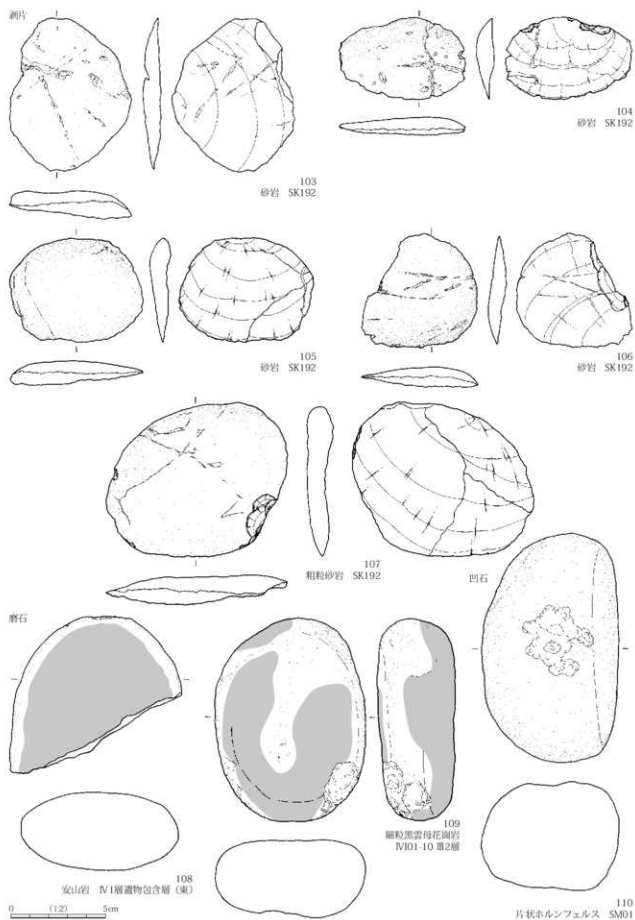


100
砂岩 SB08

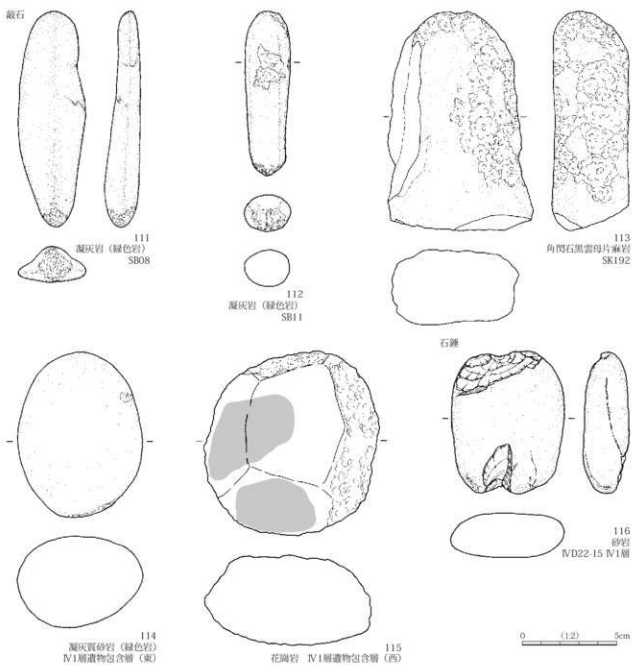


102
白雲母片岩
SB08

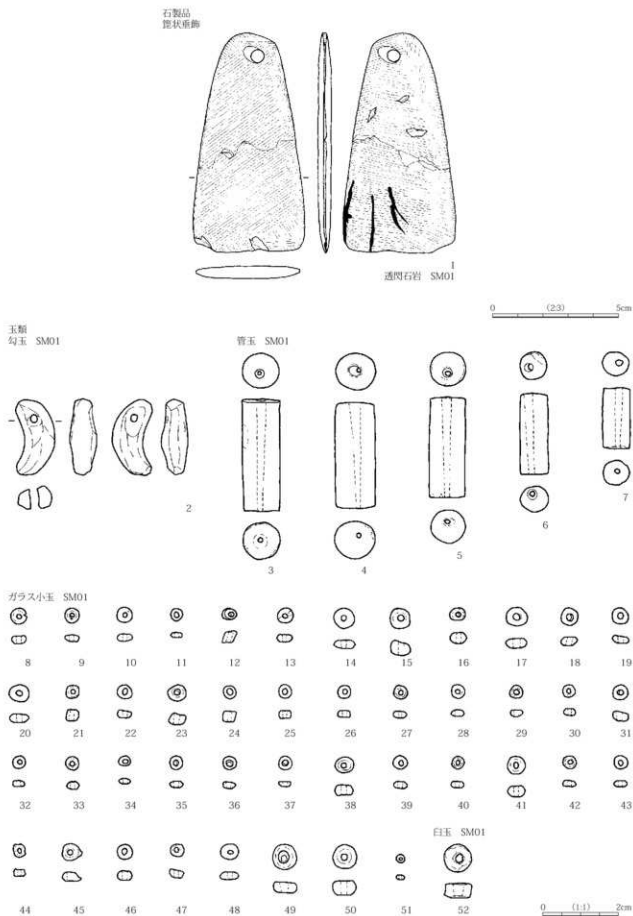
第87図 石器実測図13 (磨製石斧・敲石・剥片)



第88図 石器実測図14 (剥片・磨石・凹石)



第89圖 石器実測圖15 (敲石・石鏟)



第90図 石製品・玉類実測図（籠状垂飾・勾玉・管玉・ガラス小玉・白玉）

5 金属製品

(1) 概要

本遺跡からは鉄製品が42点、金銅製品が1点、青銅製品が3点出土した(別表第8表)。全ての金属製品について長野県立歴史館でX線透過撮影(電圧62~78kvp、電流5mA、撮影時間60秒、距離840mm)を実施し、その結果に基づいて19点(第91図1~6・9~14・17・20、第92図22・23・32~34)(註1)を選択して応急的な保存処理を実施した。また保存処理を実施した資料以外に17点をX線画像から実測図を作成して掲載した。よって掲載点数は鉄製品と青銅製品を含めて36点(第91図1~21、第92図22~36)とする。資料の状態は全体に良くない。応急的な保存処理を施した資料を含め、今後、錆による剥離が進行するものと予測される。

(2) 古墳時代

①鉄製品

馬具はSK174から雲珠1点(第91図1)と鞍金具2点(同図2・3)、SM01から面繫金具が1点(同図4)出土している(註2)。1~3は現場での検出時に既にかかなり脆弱であることが予想されたため、資料の周囲も含めて直径20cm×30cm程度を土ごと切り出して取り上げ、2年間乾燥材を入れたタッパーに保管し、その後室内で慎重に表出して保存処理を実施したため、劣化を最小限に食い止めることができた(PL26・27の土中に埋まった状態のX線透過撮影写真参照)。

1は環状雲珠であり、脚部は1点の環状部分と革紐を固定する6点の貴金具、紐を打ち付ける鉤のついた鉤(こう)金具3点から構成されている。環状部分は幅6mm、厚さ2mm程度の正円形である。貴金具は無文で環状を呈し、それぞれの幅は1.5cmから2.2cmまでの間で一定しない。6点の貴金具同士の幅は革紐の幅に対応するとみられるが、それが一定しないことは紐の幅と関係するのだろうか。また、そのうち1点(1の右端)は三角形形状を呈することから綴じ方が他とは異なる。鉤金具3点のうち1点は本体(1-1)に止まっているが2点(1-2・1-3)は離れた状態である。何れも6つの鉤が打ち込まれている。うち2点(1-1・1-3)の先端は凸状であるため、その先に杵葉が取り付けられていたと推測されるが、1点(1-2)は先端が丸く削られて加工されている。1-1と1-3の裏面には布のような痕跡が残っていた。

宮代栄一氏の復元展開図(第93図)によると環状部分から推定8方向へ放射状に革紐が伸び、それぞれに貴金具が付き、そのうち3方向に鉤金具が表現されている。

鞍金具2・3は、2点の法量と形態が非常に近似しているため当初は同一の鞍に装着されていた一対のものであったとみられる。直径5mm程度の棒を環状に折り曲げ、先端部を環金とし、厚さ0.5mmの楕円形の座金具に差し込み、先端を2本の脚としてそれぞれ外側に折り曲げている。通常環金具と脚が一体化する資料には刺金(さすが)がみられる筈だが、本資料にはみられないことが特筆される。座金具の裏(脚側)と脚には何れも木質が残存していて鞍に打ち込んだ際の痕跡とみられる。脚の折れ曲がり方が使用時のままと推測されることを考慮すると、鞍に金具が打ち込まれたまま土坑に埋納されたものと推測される。

これらSK174出土馬具の製作時期は、2つの観点から次のように推測される。第1に環状雲珠に装着される貴金具のうち、無文のものはMT15(6世紀前半)かそれ以前(宮代1993)、もしくはTK43以降(6世紀後半)の時間幅に限定される。第2に環金具と脚が一体化するような鞍金具はTK47からMT15に限定される(宮代1996)。よって仮に雲珠と鞍金具がセットであったとすると、本馬具の年代もMT15以前に位置付けられよう。

SM01の主体部付近のSM01 9層(Ⅱ層)に相当するレベルから出土した4は面繫を構成する金具の一部である小形鉸具である。太さ4mm程度の輪金を折り曲げて横棒を作出し、先端部をソケット状に差し込む形態である。飯田市宮垣外遺跡SK64に類例がみられる(澁谷・小林・片山2000)。周溝から出土した5(第91図)は厚さ1mm程度の本体にジョイント状の鉸が打ちこまれたまま出土しており、馬具を含めた可能性を検討したい。

馬具以外の金属製品として鉄刀と鉄鎌、刀子が出土している。鉄刀(第91図17)はSM01 9層(Ⅱ層)のレベルから出土し、破片であるものの1.2cmの厚さの茎とみられる。鉄鎌(第91図6~16)は全てSM01からの出土である。刀子ないし刀子の可能性のある鉄製品はSM01出土の18~31(第91・92図)である。うち20・27~30には部分的に木質が残存している。

②銅製品

銅製品としてはSM01から直径30~32mm、厚さ10mmの金環が出土している(第92図33)。金箔は全体の1/4程度が残存している。中空で、器壁は非常に薄い。SM01からは青銅製で直径16~19mm、厚さ1mmの小形の耳環(同図34)も出土している。

(3) 古代

平安時代の竪穴建物跡であるSB01から刀子の柄(第92図32)が出土している。

(4) 中近世

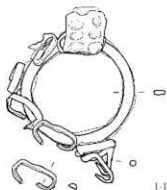
SM01の西側トレンチから寛永通寶(第92図35)が出土している。現耕作土から青銅製の煙管(キセル)の雁首部(同図36)が出土した。

註

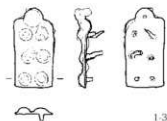
- 1) そのうち、1~4・6・10~14・20・33・34は株式会社文化財ユニオン、5・9・17・22・23・32は長野県立歴史館に委託した。
- 2) 馬具の鑑定並びに時期比定に関しては宮代栄一氏からご教示いただいた。また雲珠の復元展開図(第93図)は、宮代氏作成の原因をもとにトレースしたものである。

鉄製品
SK174

雲珠



1-2



1-3

靱金具



2

3

SM01

面繫金具



4



5

刀



17

鉄鏃



6



7



8



9



14



15



10



11



12



13

刀子



18



19



20

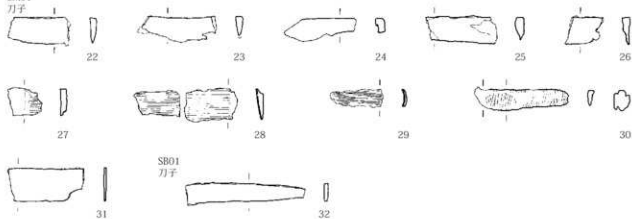


21

0 (12) 5cm

第91図 金属製品実測図1 (雲珠・靱金具・面繫金具・鉄鏃・刀・刀子)

鉄製品
SM01
刀子



青銅製品
SM01
耳環



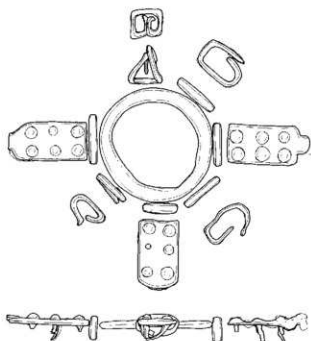
1層
煙管



0 (1:1) 2cm

0 (1:2) 5cm

第92圖 金屬製品実測図2 (刀子・耳環・銭貨・煙管)



0 (1:2) 5cm

第93圖 SK174 出土雲珠復元展開圖

第5節 科学分析

1 分析目的

遺跡周辺の環境や、遺跡内での植物利用の様相を明らかにするため、土壌に関する分析として、花粉分析、プラントオパール分析、珪藻分析を行った。また、本遺跡では遺構埋土の遺存状況が悪く、出土遺物が僅少で、遺構の時期決定が困難な状況であった。各遺構の存続期間、埋没年代の数値年代データを得て、遺跡検討の資料とするため、出土した炭化材・炭化物の放射性炭素年代測定を実施した。

2 分析試料・結果概要

分析試料は10表のとおりである。分析結果の詳細は本報告書添付のDVDに収録した。ここでは、概要のみ記述する。

第10表 科学分析一覧表

実施年度	分析対象資料	分析項目	委託先
23	低地堆積層（鬼釜遺跡Ⅱ～Ⅳ2層）	プラントオパール分析 花粉分析 珪藻分析（一部）	国古環境研究所
	自然堤防堆積層（鬼釜古墳Ⅲ1～Ⅴ層、鬼釜遺跡Ⅴ層）		
	遺構出土の炭化物（SB01-02-04, ST17, SK192）	放射性炭素年代測定法	国加速器分析研究所

(1) 土壌分析について

分析結果の概要を第11・12表にまとめた。

分析結果から推測される環境は次のとおりである。

花粉分析ではコナラ亜属の花粉化石が卓越して出現していることから、Ⅳ1層（縄文時代中期）～Ⅱ層（中世）までは遺跡内に落葉広葉樹林が分布していたことが推定される。自然堤防堆積層であるⅤ1層と鬼釜古墳直下に遺存した縄文時代の包含層（鬼釜古墳Ⅳ層）、弥生時代の包含層（鬼釜古墳Ⅲ1層、Ⅲ2層）は、比較的乾燥した堆積環境が推測されるとの結果を得た。

プラントオパール分析では低地堆積層のⅢ1・Ⅲ2層でプラントオパールの検出量が多く、調査所見を合わせるとⅢ1層が水田土壌であった可能性が高い。低地を利用した水田稲作が行われていたと理解できる。

珪藻分析では、Ⅱ層からは水田に多い珪藻化石が検出され、真・好流水性種であることから、灌漑水の引水と湛水状態を示すとのことである。Ⅲ1層からはイネ珪酸体と水田雑草が検出されており、水田の存在を肯定する所見が得られた。

(2) 放射性炭素年代測定について

各遺構から出土した炭化物の同位体効果による補正を行った測定結果（補正年代）および暦年較正結果を第13表にまとめた。

分析結果から若干の所見を記す。

SB01の試料は床面より5～10cm上から出土したものである。2σ暦年較正值は778calAD-903calAD（68.6%）である。出土遺物から10世紀～11世紀に比定されることから、平安時代の範疇に入るものの、

測定値とは開きがある。

SB02は焼失した堅穴建物の可能性が高い遺構で、炭化物層に含まれていた炭化材を試料とした。20 曆年較正値は974calAD-1,044calAD (92.0%) である。本遺構は出土遺物から10世紀後半～11世紀に比定されることから、約半世紀の開きはあるものの、平安時代の範疇に収まる。

SB04は掘立柱建物跡に伴う堅穴で、炉の掘方に含まれていた炭化物を試料とした。20 曆年較正値は1,448calAD-1,524calAD(60.7%)で、15・16世紀を示す。SB04埋土からは瀬戸大窯の丸皿が出土している。遺物の詳細な型式がわからないが、SB04の時期を中世に比定できよう。

ST17は出土遺物がなく、時期不明であり、試料は柱穴の柱痕に残る炭化物とした。20 曆年較正値は1,032calAD-1,185calAD (95.4%) で、11・12世紀を示す。

SK192は鬼釜古墳の直下から発見された土坑で、縄文中期後葉の深鉢が伏せた状態で出土した。試料は深鉢直下に堆積する埋土4層に含まれる炭化物を使用した。20 曆年較正値は2,761calBC-2,575calBC (71.5%) であった。

第11表 科学分析結果表1

地形区分	発掘調査基本土層	トレンチ名	層	プラント オパール検出量	花粉分析結果	珪藻分析結果	
II層			2T	5	5400個/g	草本花粉が約45～55%、シダ植物孢子が約15～25%を占める。草本花粉では、イネ科(イネ属型を含む)、カヤツリグサ科、ヨモギ属が優勢し、タンポポ属科、オモダカ属が出現する。樹木花粉では、コナラ属コナラ属を主に、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノ科、マツ属樺木属系属、シイ属などが出現する。	真・好止水性種の占める割合がわずかに増加し、中一異性種が消失する。真・好止水性種の泥沢湿地付着環境指標種数と好止水性種の増加する。
			2B1	2	1200個/g	花粉密度は極めて低く、花粉化石ほとんど検出されない。	珪藻密度は極めて低く、ほとんど検出されないが、流水不定性種と泥沢湿地付着環境指標種群、中一異性種がわずかに出現する。
			2T	6	3000個/g	草本花粉が約45～55%、シダ植物孢子が約15～25%を占める。草本花粉では、イネ科(イネ属型を含む)、カヤツリグサ科、ヨモギ属が優勢し、タンポポ属科、オモダカ属が出現する。ソバ属がわずかに出現する。樹木花粉では、コナラ属コナラ属を主に、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノ科、マツ属樺木属系属、シイ属などが出現する。	流水不定性種の約70%を占める。他に真・好止水性種と真・好止水性種などの約10%を占める。
			5-16T		1200個/g	花粉密度は極めて低く、花粉化石ほとんど検出されない。樹木花粉ではマツ属樺木属系属、コナラ属-コナラ属、ヒノ科、カバノ科、クマシダ属-アザダ、クマシダ属-アザダ、コレシロ-ケナキが出現する。草本花粉では、ワウリ科-イヌガヤ科、(ハコ科、草本花粉では、イネ科、カヤツリグサ科、セリ属科、タンポポ属科、キク属科、ヨモギ属科)がわずかに出現する。	
			5-16T		1200個/g	草本花粉が約60%を占める。樹木花粉では、コナラ属-コナラ属を主に、イチイ科-イヌガヤ科、ヒノ科、マツ属樺木属系属、スギ、クリ、ハンノ科、クマシダ属-アザダ、コレシロ-ケナキが出現する。草本花粉では、イネ属型を含むイネ科が優勢し、ヨモギ属、カヤツリグサ科、タンポポ属科が伴う。オモダカ属も出現する。	
III層			11T		600個/g	草本花粉が約12%、樹木花粉が約3.5%と、花粉の占める割合が低く、シダ植物孢子が約55%と高い割合を占める。樹木花粉では、クリ、コナラ属-コナラ属系属、ツバキ属、マツ属樺木属系属、ハンノ科、トチノキが検出される。草本花粉では、ヨモギ属、イネ科が優勢し、タンポポ属科、カヤツリグサ科が伴う。	
			9T	5	4800個/g	草本花粉が約35%、シダ植物孢子は約30～55%を占める。草本花粉では、ヨモギ属が優勢で出現し、次にイネ科が多い。カヤツリグサ科、タンポポ属科が伴う。アブラナ科が出現する。樹木花粉では、コナラ属コナラ属を主に、クリ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノ科、マツ属樺木属系属などが低率で出現する。	珪藻密度は極めて低く、ほとんど検出されないが、流水不定性種などがわずかに出現する。
			17T	3	4200個/g	草本花粉が約45%、シダ植物孢子は約40%を占める。草本花粉では、イネ科、ヨモギ属が優勢し、カヤツリグサ科、タンポポ属科が伴う。ソバ属がわずかに出現する。樹木花粉では、コナラ属コナラ属を主に、クリ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノ科、マツ属樺木属系属などが低率で出現する。	流水不定性種の約55～65%を占めるが、全体的には珪藻密度は低い。流水不定性種や泥沢湿地付着環境指標種数などが出現する。陸生珪藻と好止水性種などが出現する。中一異性種も出現する。
			2B1	3	0個/g	花粉密度は極めて低く、花粉化石ほとんど検出されない。	珪藻密度は極めて低く、ほとんど検出されないが、流水不定性種と泥沢湿地付着環境指標種群、中一異性種がわずかに出現する。
III層			2T	7	2400個/g	草本花粉が約45～55%、シダ植物孢子が約15～25%を占める。草本花粉では、イネ科(イネ属型を含む)、カヤツリグサ科、ヨモギ属が優勢し、タンポポ属科、オモダカ属が出現する。樹木花粉では、コナラ属コナラ属を主に、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノ科、マツ属樺木属系属、シイ属などが出現する。	流水不定性種の約70%を占める。他に真・好止水性種と真・好止水性種などの約10%を占める。
			5-16T		600個/g	樹木花粉が約25%、草本花粉が約30%と花粉の占める割合がやや低く、シダ植物孢子は約45%を占める。草本花粉では、ヨモギ属が優勢で出現し、次にイネ科が多い。タンポポ属科、カヤツリグサ科、アブラナ科が出現する。樹木花粉では、コナラ属コナラ属と高率に出現し、クリ、ツバキ属、ハンノ科、マツ属樺木属系属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノ科が伴う。草本花粉では、イネ科、ヨモギ属が優勢し、タンポポ属科、キク属科、カヤツリグサ科が低率で出現する。	

低地	III層	91	6	2400個/g	草本花粉が約35%、シダ植物孢子は約50-55%を占める。草本花粉では、ヨモギ属が高率で出現し、次にイネ科が多い。タンポポ属、カヤツリグサ科、アブラナ科が出現する。樹木花粉では、コナラ属コナラ属を主に、クリ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、マツ属樺木属などが高率で出現する。	珪藻密度は極めて低く、ほとんど検出されないが、流水不定性種などがわずかに出現する。
		111		0個/g	樹木花粉が約25%、草本花粉が約30%と花粉の占める割合がやや低く、シダ植物孢子が約4%と多い。樹木花粉では、コナラ属-コナラ属が高率に出現し、クリ、ツガ属、ハンノキ属、マツ属樺木属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科が伴う。草本花粉では、イネ科、ヨモギ属が優占し、タンポポ属、カヤツリグサ科、キク属科が低率で出現する。	
		117	4	600個/g	草本花粉が約45%、シダ植物孢子は約40%を占める。草本花粉では、イネ科、ヨモギ属が優占し、カヤツリグサ科、タンポポ属が伴う。ソノ属がわずかに出現する。樹木花粉では、コナラ属コナラ属を主に、クリ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、マツ属樺木属などが高率で出現する。	
		287	4	0個/g	シダ植物孢子が約50%を占め、樹木花粉の占める割合は中程度である。	珪藻密度は極めて低く、ほとんど検出されない。
		21	8	0個/g	花粉密度は極めて低く、花粉化石ほとんど検出されない。	珪藻密度は極めて低く、ほとんど検出されない。
	IV層	5-161		0個/g	樹木花粉が約30%、草本花粉が約52%を占める。樹木花粉では、スギ、コナラ属-コナラ属、マツ属樺木属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、クリが出現する。草本花粉では、イネ科が高率で出現し、ヨモギ属、カヤツリグサ科、タンポポ属、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、キク属科が伴う。	
		91	7	1200個/g	花粉密度は極めて低く、花粉化石ほとんど検出されない。	珪藻密度は極めて低く、ほとんど検出されないが、流水不定性種などがわずかに出現する。
		111		0個/g	花粉密度は極めて低く、花粉化石ほとんど検出されない。	
		117	5	1200個/g	花粉密度は極めて低く、花粉化石ほとんど検出されない。	珪藻密度は極めて低く、ほとんど検出されない。
		287	5	600個/g	樹木花粉が約50%、シダ植物孢子が約25%を占める。樹木花粉では、コナラ属コナラ属、ハンノキ属、ニレ属-ケヤキ科、クマシラ属-アサギ、トネリコなどが出現する。草本花粉では、イネ科、ヨモギ属、樹木-草本花粉のクワ科-イラクサ科などが出現する。樹木花粉では、コナラ属コナラ属が高率で出現し、ツガ属、マツ属樺木属、ハンノキ属などが伴う。草本花粉では、ヨモギ属、イネ科を主に、タンポポ属などが出現する。	珪藻密度は極めて低く、ほとんど検出されないが、流水不定性種と近況地付着生環境指標群、甲-貝類種がわずかに出現する。
自然埋防	IV2層	5-161		0個/g	花粉密度は極めて低く、花粉化石ほとんど検出されない。	
	V1層	5-161		0個/g	花粉密度は極めて低く、花粉化石ほとんど検出されない。樹木花粉のコナラ属-コナラ属、スギ、草本花粉のタンポポ属、キク属科がわずかに出現する。	
	IV2層	111		0個/g	花粉密度は極めて低く、花粉化石ほとんど検出されない。	

鬼釜遺跡研究所分析報告を編集

第12表 科学分析結果表 2

地層区分	鬼釜古墳 基本土層	試料採取 遺構	層名 (現場呼称)	プラントオーバー 検出量	花粉分析結果
自然埋防	III層	鬼釜古墳 (SM01)	16(上部)	0/個g	草本花粉の占める割合が約30%と高く、花粉密度は低い。樹木花粉では、コナラ属-コナラ属属が比較的高率で検出され、クリ、ハンノキ属、トネリコ、ニレ属-ケヤキ科、ツガ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科が低率で伴う。草本花粉では、イネ科、ヨモギ属が優占し、カヤツリグサ科、タンポポ属などが出現する。
			16(下部)	0/個g	
			17	0/個g	花粉密度が低く、ほとんど検出されない。
			18	0/個g	
			V層		

鬼釜遺跡研究所分析報告を編集

第13表 放射性炭素年代測定結果表

番号	採取場所	層名	試料形態 (yBP)	補正年代 (yBP)	補正年代 (暦年校正用) (yBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲	測定番号
1	S801	2	炭化物	1,160±30	1,159±26	782calAD-799calAD(3.4%)	778calAD-903calAD(68.0%)	IAA-112283
						813calAD-845calAD(17.8%)	915calAD-969calAD(26.8%)	
						857calAD-898calAD(30.6%)		
2	S802	16	炭化材	1,020±30	1,016±26	994calAD-1,025calAD(68.2%)	974calAD-1,044calAD(92.0%)	IAA-112284
						1,100calAD-1,119calAD(2.9%)	1,143calAD-1,147calAD(0.5%)	
						1,600calAD-1,617calAD(15.7%)		
3	S804 納内(Na3)	-	炭化物	370±30	375±25	1,455calAD-1,524calAD(52.5%)	1,448calAD-1,524calAD(60.7%)	IAA-112285
						1,600calAD-1,617calAD(15.7%)	1,558calAD-1,631calAD(34.7%)	
						1,200calAD-1,141calAD(30.6%)		
4	ST1777	1	炭化物	910±30	914±26	1,045calAD-1,095calAD(17.8%)	1,032calAD-1,185calAD(95.4%)	IAA-112286
						1,120calAD-1,141calAD(30.6%)		
						1,148calAD-1,161calAD(16.4%)		
5	SK192	4	炭化物	4,030±30	4,110±29	2,850calBC-2,813calBC(18.4%)	2,865calBC-2,805calBC(23.9%)	IAA-112287
						2,742calBC-2,728calBC(5.8%)	2,767calBC-2,575calBC(71.5%)	
						2,695calBC-2,685calBC(3.9%)		
						2,680calBC-2,699calBC(33.0%)		
						2,608calBC-2,599calBC(3.6%)		
						2,594calBC-2,583calBC(3.8%)		

鬼釜遺跡研究所分析報告を編集

第6節 小 結

1 自然堤防と低地の土地利用について

鬼釜遺跡の調査では、調査区内にある自然堤防上から縄文時代、弥生時代、古墳時代、平安時代以降、中世の遺構、自然堤防の南側に広がる低地の堆積層から縄文時代、平安時代、中世の遺物を確認した。鬼釜遺跡は、複数の時期にわたり人々が営んでいたことが明らかとなった。従来、上久堅地区では唯一、北田遺跡の調査例があるに過ぎなかった。北田遺跡は、縄文時代～中世の集落で、遺構が密集する様相を示す。今回、この北田遺跡の南西側に近接する鬼釜遺跡で、幅約20mと狭小な自然堤防上に遺構が散在的に分布する集落が発見されたことは、上久堅地区における縄文時代以降の土地利用を明らかにする上で重要視される。

本項では、これら考古資料から、各時期の土地利用をうかがうこととする。

鬼釜遺跡内に最初に居住域が形成された時期は、縄文中期後半である。当該期の遺構は、縄文時代中期後半の竪穴建物跡と土坑があるが、これらは自然堤防の中央部と東側の2箇所にまとまる。自然堤防の全域に散在的に分布するのではなく、遺構がブロック的に密集する様相を示す。低地には、当該期の遺物包含層（IV1層）が形成されており、IV1層からは縄文時代中期後半の土器が多量に出土している。この土器は、分布からすると、自然堤防上に営まれた集落の廃棄場か、土器出土地点より上方の東側から流れ込んだものとみられる。

弥生時代は、自然堤防の中央東側に竪穴建物跡、古墳時代は、自然堤防中央部に古墳と土坑が構築されている。古墳時代については、調査区内では古墳構築者の居住域は確認していないが、古墳の西側調査区外（久堅神社以西）に存在する可能性が想定される。なお、低地には、縄文時代遺物包含層（IV1層）と平安時代の水田層（Ⅲ1層）の間に、顕著に黒色化するⅢ2層が堆積する。Ⅲ2層の時期は不明で推測の域を脱しないが、弥生時代～古墳時代の間、低地は湿地化した時期があったと考えられる。

平安時代の遺構は、自然堤防の西側と中央西側、中央東側の3箇所に分布し、自然堤防の西側と東側では、2軒の竪穴建物跡が近接して分布する。平安時代の遺構分布がそれ以前の遺構分布と大きく異なる点は、自然堤防上ほぼ全域に散在的に分布することである。

ブラント・オパール分析の結果、低地に堆積する黒色土（Ⅲ1層）では水田が営まれていた可能性が高いことが判明した。鬼釜遺跡が所在する上久堅地区は山間地で、天竜川を臨む段丘上と比較して水田域を確保する場所が少ない。従来の調査において、水田遺構もしくは科学分析により水田域の存在が明らかにされていないが、鬼釜遺跡の調査において、集落に近接した場所に水田が営まれていたことが判明したことは、山間地における集落と水田の立地を捉える上で重要視できる。

平安時代以降として第94図に示した遺構は、平安時代の竪穴建物跡を切る掘立柱建物跡と中世と推測する竪穴建物跡、溝跡である。当該期の遺構は、平安時代の遺構分布域と重複する。また、ブラント・オパール分析の結果、低地に堆積する土層（Ⅱ層）で水田稲作が営まれていた可能性が高いことが判明した。

当該期、集落と水田は、平安時代の様相を踏襲して形成されていたと考えることができ、中世遺構から出土した古瀬戸製品からすると、15世紀は鬼釜遺跡と風張遺跡に集落が形成されていたと考えられる。

2 縄文中期後葉の様相

南信地域は長野県下で最も縄文中期の遺跡数が多く、全県で3,158のうち半数の1,727が所在（縮田

繩文時代



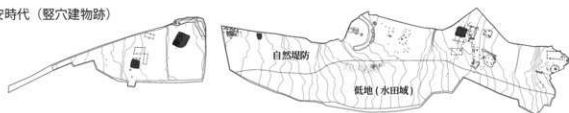
弥生時代



古墳時代



平安時代 (竪穴建物跡)



平安時代以降 (掘立柱建物跡等)



0 (1:2,000) 50m

第94図 鬼釜遺跡 遺構変遷図

2012) する。特に下伊那の縄文時代中期集落は78軒の住居跡が調査された高森町増野新切遺跡をはじめ、飯田市大門原遺跡、黒田大明神原遺跡、三尋石遺跡、川路大明神原遺跡、増田遺跡、箕瀬遺跡など住居跡10軒以上の集落が、天竜川右岸の扇状地や段丘に大規模に展開している(坂井2013)。天竜川左岸では豊丘村野原遺跡、喬木村楠牛原遺跡、伊久間原遺跡に住居跡50軒以上の集落が営まれるが、飯田市区に入るとうしがちとなり遺跡がほとんど見られないため、玉川沿いに住居跡50軒を有する環状集落が展開する北田遺跡はかなり特異な存在であった。同遺跡では縄文中期後半から終末を中心とした極めて珍しい掘立柱建物跡も検出されている。鬼釜遺跡は北田遺跡の南東約600mに位置し、今回の調査で北田遺跡とほぼ並行した時期の土器が出土している。鬼釜遺跡は玉川とその後背湿地に挟まれた最大幅60m程度の細い自然堤防上に立地するため、地形的な制約から大集落を形成することができなかつたと見られる。

鬼釜遺跡の集落は大枠で4時期に区分される(第14表・第96図)。台地上の土坑等のいくつか、このうち何れかの時期に相当する可能性もあるが、遺物の出土が殆ど無く、詳細を明らかにできなかった。「協会編年」(宮崎・綿田2013・坂井2013)を時期区分の指標として、以下に解説を行う。

第14表 集落の時期

協会	中世地域	果史	下伊那地域の土器	鬼釜遺跡の遺構	北田遺跡
9期～10期	唐草文系Ⅰ	後葉1期	細線紋土器・加曾利E・大木式系	SB08	
10期	唐草文系Ⅱ古	後葉2期	下伊那タイプ(A)・中富式系・加曾利E式系・唐草文系他	SB16、SK185	竪穴住居跡5軒
11期	唐草文系Ⅱ新			SB14、SK192	
12期	唐草文系Ⅲ古	後葉3期	下伊那タイプ(B)・神明式系・加曾利E式系		岡34軒

協会9期～10期段階：調査区の東の端に円形の竪穴住居跡SB08が営まれる。時期決定資料は3で、大門原遺跡SB12(下平1999)(大門原遺跡報告書59図1)、増田遺跡7号住(上郷町教育委員会1989)(増田遺跡報告書第12図5)に類似がある。前者は口縁部の地文が沈線であるが、後者は鬼釜遺跡と同様に縄文で、大木8b式土器や細線紋土器を作っていて、やや古い可能性がある。本住居跡の石囲炉は南北に長い長方形を呈する。下伊那地域の住居跡の石囲炉は、方形が多いものの、入口に対して横に長い長方形、五角形など多様である。

協会10期段階：炉が奥壁側に寄る楕円形の住居跡とみられるSB16と、調査区の最も東側のSK185他が該当する。前者の埋甕33は、下伊那AタイプⅢ類ではあるが、胴部に腕背文に類似した沈線文が描かれ、唐草文系Ⅱ期古段階に相当する。類似する土器は的場遺跡13住から出土し、下伊那AタイプⅠ類などが組成している。北田遺跡には中期後葉期に奥壁側に炉が偏る楕円形の住居跡が複数検出されているため、本住居跡は埋土が全て削平されているものの、本来類似した楕円形態であった可能性がある。

協会11期段階：SB14とSK192他が該当する。7基の柱穴がほぼ五角形に並び、南東側にやや突出した入口には2基の埋甕が敷設されている。埋甕の位置から、炉が奥壁よりに偏り、突出した手前側に埋甕をもつ潮見台型(本橋1988)とみられる。潮見台型は柄鏡式敷石住居の祖形のひとつと考えられ、多摩丘陵・丹沢山麓から伊那谷を含む中部高地に分布している。

炉は土器10個体がほぼ5重に敷設されている土器敷炉である。沈線地文の唐草文系土器、縄文地文と条線地文の下伊那タイプ、無文の在在系粗製土器という、異なる系統の土器群を用いている点、並びに最上部の土器が被熱によって極めて脆く劣化していることによって土器を敷いたまま使用したことが分かる点で好例である。伊那谷の土器敷炉は15遺跡32例で確認されている(坂井2010)が、不明の1件を除けば全て石囲炉である。SB14が地床炉であったとすればかなり特異であり、かつ土器を複数個体敷設する例も

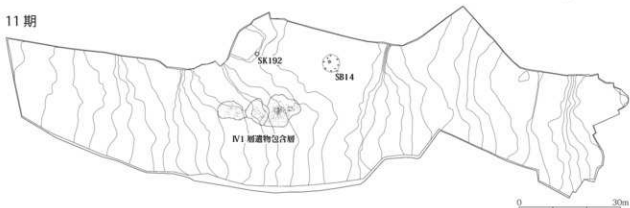
第3章 鬼釜遺跡

1区

9～10期



11期



第95図 鬼釜遺跡 縄文集落変遷図

	下伊那タイプ	曲草文系	在地系粗製	加曾利Ⅰ式(大木式形)	/中富式系	曾利式系
後葉1期 編合9期 曲草文系Ⅰ期						
後葉2期 編合10期 曲草文系Ⅱ期占	23 SB16	87 SQ01	9 SB08	3 SB08	7 SB08, 8 SB08, 104 SQ01	34 SK185, 158 SQ02
後葉2期 編合11期 曲草文系Ⅱ期占	25 SB14		36 SK192		21 SB14, 98 SQ01, 99 SQ01, 105 SQ01	
後葉3期 編合12期 曲草文系Ⅲ期占	256 SM01					84 SQ01, 28 SB14

第96図 鬼釜遺跡 縄文土器変遷図

北田遺跡で3～5重に敷かれた例がある他は多くない。

一般的に土器敷の土器は、摩耗によって判別できないものも含めると被熱痕跡が見られないものが多い。そのため土器が敷かれる理由は、実際に土器を敷いて使用したという説に加え、土器敷行為が炉を廃絶する際の儀礼であるという説があるが、本遺跡の場合、炉の最上部に敷かれていた土器ほど被熱が激しいため、機能が炉の使用に絞られたことは成果の一つといえよう。SK192は鬼釜古墳の周溝の内側で検出された土坑で、頸部に把手をもち2本一対の大柄渦巻文を有する唐草文系Ⅱ期新段階に相当する深鉢が、埋土1層の上面に据えられていた。その下層4層の炭化物の炭素年代で2,865-2,575calBC(2σ)が出ており、この年代はこの土器の時期(藤森2012)に合致している。

協会12期段階：遺構は特定できていないが、SM01の周溝の中にこの時期の土器がまともまっている。

3 鬼釜古墳について

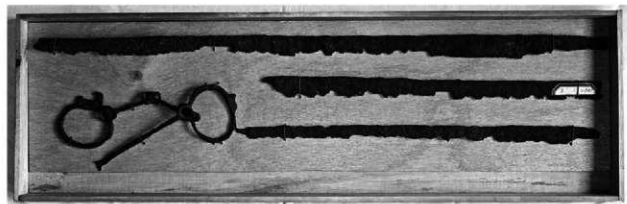
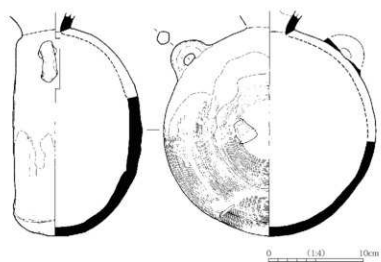
(1) 鬼釜古墳に関する既存資料と今回の発掘成果との関連

市教委が作成した遺跡地図(市教委1998a)には、鬼釜遺跡の遺跡範囲内に「鬼釜古墳」が記載されている。確認調査を行った平成21年度時点で、鬼釜遺跡の遺跡範囲内もしくは遺跡隣接地で「古墳」の存在を示す記録として、以下のものが存在した。

- ① 『下伊那史』第3巻(市村ほか1952)には、上久堅地区の宮ノ原地籍に「鬼釜」と呼称される円墳があり、その古墳は明治25年頃に発掘されて数多くの遺物が得られたと記載されている。同書には、発掘時すでに石室の石が露出していたとの地元在住者の談話も記載されている。さらに、同書には、「古墳のあった木立の中に大きい天井石二つを並べ、その上に一つの大石をのせてかまど形のを造り小祠をのせてある。上につけている石は長さ1.6m、幅1m、厚さ0.2mである。この大石によつて石室の規模も相当大きいものであったと想像される。土地の人がここを鬼釜と呼ぶのはこの窟形をした石積み起因するのであることは申すまでもない。」と記載されている。
- ② 『下伊那史』第3巻(市村ほか1952)には、鬼釜古墳の発掘時で出土した以下の遺物が記載されている。
 - ・出土遺物一覧：直刀4・同残欠、刀子1、管玉2、金環1、轡1、金属具1、土師器(埴)2・同破片1・同高环脚部1・同破片20余、須恵器(坏)1・(甗)1・(埴瓶)2
 - ・実測図：直刀
 - ・写真図版：直刀、轡、須恵器(坏)・(甗)
 同書には、出土遺物は上久堅小中学校に所蔵されていると記載されている。
- ③ 『上久堅村誌』(岡田ほか1992)には、鬼釜古墳は「宮ノ前古墳(鬼釜古墳)」として記載されており、『下伊那史』第3巻に記載されていることを再録し、執筆者の岡田正彦氏は、轡が板状立素環鏡板付轡で6世紀第4四半期、須恵器の甗と埴瓶は陶邑編年Ⅱ型式3段階で、6世紀中葉～後半に位置づけられると指摘している。また、同書には直刀3、轡1の実測図と写真が掲載されている。

『下伊那史』の記載からすると、久堅神社の境内に残る石室と伝わる石の近くに古墳があり、明治25年頃にそこを発掘した結果、数多くの遺物が得られたと理解することができる。今回の調査では、周溝の内側にある盛土下から近代以降の掘削痕跡(SX01～04)を確認した。SX01～04は石室の石を抜き取るために掘削した痕跡と判断される所見が得られた。この痕跡を明治25年頃の発掘痕跡と理解できると思われる。

平成21年、上久堅小中学校で鬼釜遺跡、風張遺跡、神之峯城跡に係する資料の有無と状態を把握する目的で、資料調査を行った。その結果、直刀3、轡1、須恵器(埴瓶)1が所蔵されていることが



第97図 上久堅小学校所蔵の鬼釜古墳出土遺物

判明した。その写真が第97図である。埴瓶は、中村陶邑編年Ⅱ型式3段階に比定され、実年代は6世紀後半となる(中村1995)。また、轡は、大形矩形立開環状鏡板付轡(註1)と推定でき、岡安光彦氏の編年と照合すると、第Ⅲ段階(6世紀第3四半期～第4四半期)と推定できる(註2)。

一方、周溝から出土した土器は、6世紀前半と6世紀末～7世紀初頭とに分かれる。古墳の墳丘と石室が遺存していないため推測の域を脱しないが、6世紀前半が初葬、6世紀末～7世紀初頭は追葬の時期を示すのではなからうか。したがって、上久堅小学校所蔵の埴瓶と轡は追葬に伴うものと考えられよう。

(2) 周溝内の土坑(SK174)について

鬼釜古墳(SM01)の周溝内から土坑(SK174)が確認された。この土坑を「馬の埋葬土坑」と判断した根拠は、以下の通りである。

- ① SK174は周溝の底面精査で確認されたことから、周溝掘削時もしくは掘削直後に掘削された土坑と判断できること。
- ② 飯田市域を含む下伊那地域では、30例(飯田市内28例、高森町2例)の馬の墓が発見されており、これらの出土場所は、単独土坑、周溝内土坑、周溝内(周溝内埋葬)の3種類に分けられる(註3、小林ほか2007)。周溝土坑に該当する下伊那郡高森町北林5号墳は、周溝の縁に沿って掘削されており、SK174と酷似すること。
- ③ 飯田市域とその周辺で発見された馬の埋葬土坑の規模をみると、長辺1.6m～2.5m、短辺0.9m～2.0mのものが大半を占め、SK174の規模はこの規模のなかに入ること。
- ④ SK174から馬具(雲珠1点、轡2点)が出土していること。

SK174の時期は、宮代栄一氏により、環状雲珠と轡の特徴から6世紀前半に比定できるとの指摘を受けた(註4)。したがって、SK174は鬼釜古墳の初葬時に掘削されたことになる。これはSK174が周溝底面で確認された調査所見と符合する。

馬具の埋葬方法について桃崎祐輔氏は、馬骨と馬具の出土状態から、新井原・高岡古墳群4号土坑における埋葬時の復原案を提示した(第98図、桃崎1993)。SK174において、桃崎氏の復原案のように馬が埋葬されていたと仮定すると、埋葬馬の胸部付近に置かれた可能性が考えられる。

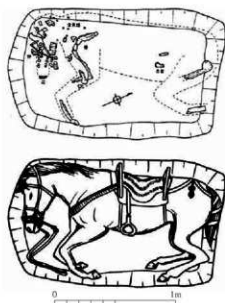
(3) 天竜川左岸における6世紀の古墳と馬の埋葬土坑の発見について

馬の埋葬土坑を伴う6世紀の古墳発見について、先行研究(小林ほか2007・渋谷ほか2012a)から触れることとする。

竜西には、5世紀中頃～後半にかけて古墳群(飯田古墳群)が展開する。市教委が座光寺単位群、上郷単位群、松尾単位群、竜丘単位群、川路単位群と呼称したものである。従来、飯田市内で確認された馬の埋葬土坑28例は、飯田古墳群から発見されている。埋葬土坑の編年時期は5世紀で6世紀には馬匹生産地が竜東にも拡大した可能性が推測されていた。

一方、竜東における古墳と集落の様相をみると、集落は天竜川を眼下に臨む低位段丘に5世紀後半～6世紀の細新遺跡、5世紀後半を中心とする龍江大平遺跡、天竜川から離れた山間地(上久堅地区)に6世紀後半～7世紀の北田遺跡がある。また、古墳では、龍江地区10基、千代地区1基、下久堅地区14基、上久堅地区4基の円墳が確認されている。上久堅地区の鬼釜古墳は6世紀で、塚穴古墳は7世紀前半に比定されている。

竜東では、5世紀後半になると低位段丘に集落が形成されるが、天竜川から離れた地域(上久堅地区を含む)は6世紀段階になりようやく形成されることを示している。飯田古墳群を中核とした古墳文化が次



長野県新井原12号墳4号土壙

第98図 馬具を伴う馬骨の検出状況と埋葬時の復原案(桃崎1993)

第に周辺地域に拡大したことを示している。鬼釜古墳で、発見された馬の埋葬土坑は澁谷恵美子氏が指摘するように、6世紀以降に馬匹生産地が竜東に拡大した可能性を示すものと考えている(渋谷ほか2012a)。

註

- 1) 轡の名称は、宮代栄一氏の教示による。
- 2) 轡の時期は、上久堅小学校で撮影した写真から岡安1984をもとに推定した。
- 3) 市教委2007では、「土壙」表記。本文中では「土坑」を使用。
- 4) 平成27年3月3日、埋蔵文化財センターで指導を賜った宮代栄一氏からの指摘。

引用・参考文献

飯田市教育委員会1986『塚穴1号・2号古墳-昭和61年度特殊改良第一種事業一般県道手塚原米川飯田線飯田市中宮敷地区内における埋蔵文化財発掘調査報告書-』
飯田市教育委員会1998a『飯田の遺跡-市内遺跡詳細分布調査報告書-』
飯田市教育委員会1998b『溝口の塚古墳 恒川遺跡群倉垣外遺跡 市内遺跡-平成9年度市内遺跡緊急調査概報』
飯田市教育委員会2000『恒川遺跡群他市内遺跡-平成11年度市内遺跡緊急調査概要報告書』
飯田市教育委員会2003『北本城々跡 北本城古墳』
飯田市教育委員会2015『飯田市埋蔵文化財包蔵地地図(市内遺跡詳細分布調査報告書)』
市澤英利1986『飯田下伊那地方の座光寺原・中島式土器の変遷過程』『長野県考古学会誌』第51号
市澤英利2008『天竜川水系のムラとクニ』『赤い土器のクニ』の考古学』雄山閣
市村成人ほか1952『下伊那史』第3巻原史時代 下 下伊那誌編纂会
岡田正彦ほか1992『上久堅村誌』上久堅村誌編纂委員会

- 岡安光彦1984『いわゆる「素環の嚮について—環状鏡板付嚮の型式学的分析と編年—』『日本古代文化研究』創刊号
- 小口英一郎1998『唐草文系土器』の再検討『信濃』第50巻第7号
- 河西克造2012『飯田市鬼釜遺跡・鬼釜古墳の発掘調査概報』『伊那』通巻第1007号 第60巻第4号
- 河西克造2013『飯田市神之峯城跡・風張遺跡の発掘調査概報』『伊那』通巻第1019号 第61巻第4号
- 上郷町教育委員会1989『ツルサン遺跡・ミカド遺跡・増田遺跡・垣外遺跡』
- 上郷町教育委員会1993『丹保遺跡』
- 神村 透1978『結節縄文をつけた一群の土器』『中部高地の考古学 長野県考古学会15周年記念論文集』長野県考古学会
- 神村 透1993『私の姓は唐草文、名は無し』『長野県考古学会誌』第90号
- 神村 透2003『下伊那系（タイプ）土器は唐草文系土器ではない—地域差ではなく独自のもの—』『長野県考古学会誌』第101号
- 川崎 保1996『の』字状石製品と倉輪・松原型装身具セットについて』『長野県の考古学』（財）長野県埋蔵文化財センター
- 川崎 保1997『縄文時代の鹿状垂飾について—福井県板井群金津町桑野遺跡出土資料を中心として—』『信濃』第49巻第4号
- 黒田吉益・諏訪兼位1968『偏光顕微鏡と岩石鉱物』共立出版株式会社
- 嶺 茂・高橋健太郎2008『中富式・神明式土器』『総覧 縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会編
- 小林公明1991『新石器時代の石器の製作技術』『季刊考古学』第35号 雄山閣出版
- 小林正春1980『新井原遺跡発見の飾られた馬』『伊那』第28巻第3号
- 小林正春1991『石器の終わる時』『季刊考古学』第35号 雄山閣出版
- 小林正春2000『馬生産に関する伊那谷古墳時代の集団』『考古学ジャーナル』No.459
- 小林正春2014『飯田古墳群と馬匹関連遺跡について』『考古学ジャーナル』No.658
- 小林正春ほか2007『飯田における古墳の出現と展開』飯田市教育委員会
- 駒ヶ根市教育委員会1995『平成5年度・平成6年度農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業及び市道丸山線改良工事事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査 的場・門前遺跡』本文編
- 齊藤孝正・後藤健一1995『須恵器集成図録』第3巻東日本編 1 雄山閣出版
- 坂井勇雄2006『第3章 調査結果』『栗屋元遺跡』飯田市教育委員会
- 坂井勇雄2010『第5章第4節 住居跡06・24にみられる戸内への土器散行為について』『箕瀬遺跡』飯田市教育委員会
- 坂井勇雄2013『下伊那地域における縄文時代中期土器の様相』『一般社団法人日本考古学協会2013年度長野大会研究発表資料集 文化の十字路信州』大会実行委員会編
- 坂井勇雄・福澤好児2001『黒田垣外遺跡・ミカド遺跡・増田遺跡・見城垣外遺跡』飯田市教育委員会
- 坂本美夫1985『馬具』考古学ライブラリー34 ニューサイエンス社
- 渡谷恵美子2009『馬駆ける伊那谷—古墳出現の背景を探る—』『飯田市歴史研究所年報』7
- 渡谷恵美子・小林正春・片山祐介2000『一般国道153号飯田バイパス（3工区）建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書 宮垣外遺跡・高屋遺跡』飯田市教育委員会
- 渡谷恵美子ほか2012 a『飯田古墳群』飯田市教育委員会
- 渡谷恵美子ほか2012 b『飯田古墳群—論考編—』飯田市教育委員会
- 下平博行1999『第IV章総括2 第III群 a 類土器について』『大門原遺跡』飯田市教育委員会
- 末木 健1978『伊那谷中部縄文中期後半の土器群とその性格—予察—』『信濃』第30巻第4号
- 鶴田典昭1999『第2章第2節 縄文時代の遺構と遺物』『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書8—長野市内その6—村東山手遺跡』（財）長野県埋蔵文化財センター
- 鶴田典昭・費田 明2010『第4章第3節 石器』『国道474号（飯高道路）埋蔵文化財発掘調査報告書4 川路大明神原遺跡』長野県埋蔵文化財センター
- 長崎元廣1997『中部地方の縄文前期末・中期初期頭における土器型式編年論の系譜と展望（1）』『長野県考古学会誌』第83

号

長崎元廣他1979『中部高地縄文土器集成』第1集

長野県教育委員会2000『大規模開発事業地内遺跡—遺跡詳細分布調査2—』

長野県中央道遺跡調査会1972『4 増野新切遺跡』『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—下伊那郡高森町地内その2—』長野県教育委員会

長野県埋蔵文化財センター2011『長野県埋蔵文化財センター年報』28

長野県埋蔵文化財センター2014『長野県埋蔵文化財センター年報』31

中野晴久ほか2012『愛知県史』別編 窯業3中世・近世 常滑系 愛知県史編纂委員会編

中村 浩1981『和泉陶器窯の研究』柏書房

中村 浩1995『須恵器集成図録』第1巻近畿編1 雄山閣出版

中村由克2007『下呂石の供給』『縄文時代の考古学6 ものづくり』同成社

奈良文化財研究所 埋蔵文化財センター 保存修復科学研究所2011『古代の玉—最新の保存科学的研究の動向—』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所

西山克己1999『下伊那の古墳時代における新来文化の受容』『伊那』通巻第851号 第47巻第4号

野村一寿1988『中期後葉土器』『長野県史 考古資料編』全1巻（4）遺構・遺物 社団法人長野県史刊行会

馬場保之1998『第1章 美女遺跡の土器について』『美女遺跡—遺物編—』飯田市教育委員会

林 茂樹1985『縄文中期土器「平出Ⅲ類A」の系譜再論』『信濃』第37巻第11号

原山 智1988a『第2章2.6（1） 筒家花こう岩類』『日本の地質』4中部地方Ⅰ 共立出版株式会社

原山 智1988b『湯ヶ峯デザイサイト』『日本の地質』5中部地方Ⅱ 共立出版株式会社

平林 彰1993『第9章第1節4 IV—VI期の土器について』『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11—明科町内—北村遺跡』（財）長野県埋蔵文化財センター

藤澤良祐2002『瀬戸・美濃大窯編年の再検討』『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10号

藤澤良祐2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院

藤森英二2012『土器研究は文化の繁栄に迫れるか』『長野県考古学会誌』第143・144合併号

藤原直人2003『第3章 11号竪穴住居跡』『農林漁業用揮発税財源身替農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—飯島町内—丸山遺跡』長野県埋蔵文化財センター

増子康真1978『縄文中期後半土器の編年』『古代人』34

増子康真1982『長野県伊那中南部地域の縄文中期後半土器の変遷』『古代人』39

松井 章2003『動物祭祀』『神々のいる風景』岩波書店

三上徹也2002『所謂「唐草土器」の構造・変遷と型式名に関する考察』『長野県考古学会誌』第98号

水沢教子1996『大木8b式の変容（上）』『長野県の考古学』（財）長野県埋蔵文化財センター

水沢教子2014『縄文社会における土器の移動と交流』雄山閣

宮崎朝雄・細田弘実2013『長野県における縄文時代中期土器の編年と動態』『一般社団法人日本考古学協会2013年度長野大会研究発表資料集 文化の十字路信州』大会実行委員会編

宮代栄一1993『5・6世紀における馬具の「セット」について』『九州考古学』第68号

宮代栄一1993『中央に鉢を持つ雲珠・辻金具について』『埼玉考古』第30号

宮代栄一1996『古墳時代の金属装鞍の研究—鉄地金銅装鞍を中心に—』『日本考古学』第3号

本橋恵美子1988『縄文時代における柄鏡形敷石住居址の研究』（1）・（2）『信濃』第40巻8・9号

桃崎祐輔1993『古墳に伴う牛馬供犠の検討—日本列島・朝鮮半島・中国東北地方の事例を比較して—』『古文化談叢』第31集

八木光則1976『縄文中期集落の素描（1）—信濃伊那谷における集落共同体をめぐって—』『長野県考古学会誌』第25号

- 山下誠一1989「4 垣外遺跡」「ツルサシ・ミカド・増田・垣外遺跡」上野町教育委員会
- 山下誠一1992「飯田・下伊那の後期弥生土器」『長野県考古学会誌』第65・66号
- 山下誠一2001「上伊那南部の後期弥生土器」『長野県考古学会誌』第93・94号
- 山下誠一2004「飯田盆地における古墳時代後期集落の様相—発掘調査された竪穴住居址を基として」『飯田市美術博物館研究紀要』第14号
- 山下誠一2005「飯田盆地における弥生時代石器」『飯田市美術博物館研究紀要』第15号
- 山田直利・柴田 賢・佃 栄吉他1992「阿寺断層周辺地域の火成岩類の放射年代と断層活動の時期」『地質調査所月報』第43巻第12号
- 吉川金利2003「下伊那縄文中期後葉に於ける土器様相と編年」『長野県考古学会誌』第102号
- 吉川金利2005「平成17年度秋季展示 下伊那唐草文土器」飯田市上郷考古博物館
- 吉川金利2008「唐草文系土器」『総覧 縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会編
- 米田明訓1980「南信天竜川沿岸における縄文時代中期後半の土器編年」『甲斐考古』17-1
- 若林 卓2010「第4章第2節 縄文時代の遺構」『国道474号（飯橋道路）埋蔵文化財発掘調査報告書4 川路大明神原遺跡』長野県埋蔵文化財センター
- 縮田弘実2002「長野県の縄文後期前葉土器群Ⅱ」『第15回縄文セミナー「後期前半の再検討」』縄文セミナーの会
- 縮田弘実2012「北信地域縄文中期遺跡の推移と特徴」『長野県考古学会誌』143・144合併号
- 縮田弘実2013「第3章第2節 縄文時代」『千曲川替佐・柳沢築堤事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書—中野市内その1—千田遺跡』長野県埋蔵文化財センター



平成21年度 鬼釜遺跡の調査前風景

第4章 風張遺跡

第1節 遺跡と調査の概要

1 遺跡の概観

(1) 遺跡範囲と地形

風張遺跡は鬼釜遺跡の南側、東から西方に緩やかに傾斜する台地上に立地する。調査前は圃場整備事業により階段状の水田が広がっていた。遺跡範囲（市教委1998）は、北限（鬼釜遺跡側）と南限（神之峯城跡側）が台地の縁辺部、西限は台地の先端部よりやや下方、東限は台地幅が狭まる場所（上久堅自治振興センター付近）で、東西約460m、南北約140mを測る。調査対象地は遺跡範囲のほぼ中央部である（第99図）。

調査にあたり、便宜上本線部分を1区、国道256号に取り付く道路部分を2～4区と呼称した。地形を微細に見ると、路線内の中央部に北西－南東方向に延びる谷状地形が入り込み、谷状地形を境界として台地は2分される。この谷状地形内の市道を境界として北東側を2区、南西側を3・4区とに分けて調査を進めた。

2 調査の概要

(1) トレンチ調査（確認調査）

1区は平成23年9月～10月に実施した。台地縁辺部の一角を対象とした結果、遺構・遺物が確認されなかったため、面調査の必要はないと判断した。

2区～4区は平成23年10月～12月に実施した。トレンチは、地形傾斜と平行して掘削し、土層断面観察と精査を行った。その結果、圃場整備による水田造成土の下から、近世水田層、中世の造成土を確認し、基本土層IV層（地山、花崗岩風化層）上面で、掘立柱建物跡の柱穴と考えられる落込みを確認した。

(2) 本調査

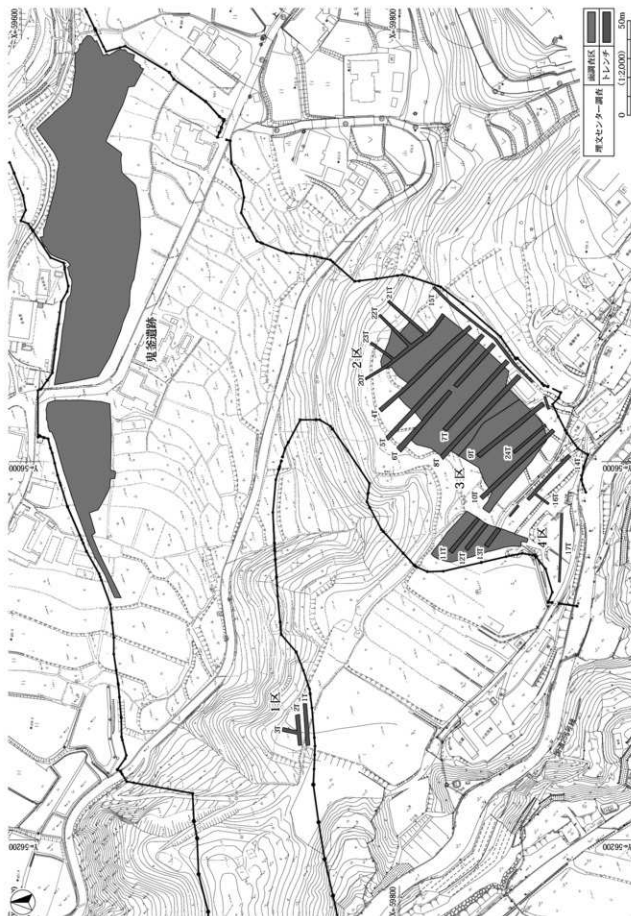
平成24年4月～8月に2区～4区の本調査を実施した。東側では圃場整備による造成土の下に近世水田層（Ⅱ層）と地山（Ⅳ層、花崗岩風化層）が堆積し、西側ではⅡ層の下に中世の盛土が認められた。

遺構検出はⅡ層下面で実施した。Ⅳ層（地山、花崗岩風化層）上面を検出面とした東側では比較的容易に遺構を把握することができた。一方、Ⅲ層上面を検出面とした西側では、遺構を確認するのは容易ではなかったため、Ⅲ層を除去してⅣ層上面で再度検出を行った。

検出した主な遺構は、掘立柱建物跡と土坑、溝跡、焼土跡で、粗密があるものの調査対象地のほぼ全域に分布していた。

(3) 報告書の記述について

整理時に検出された小土坑（ピット）を再検討し、調査時に建物の柱穴と認定したピットを変更した遺構もある。これらについては本報告に掲載した個別遺構図に（ ）付で記載した。



第99図 風張遺跡 調査範囲図

3 調査経過

調査日誌抄

平成23年度（発掘作業）

- 4月1日 受委託契約締結
 9月27日 1区、重機によるトレンチ掘削開始
 10月4日 トレンチ掘削状況写真撮影。記録作業終了
 10月28日 5トレンチで円形のピットを確認
 11月9日 11～13トレンチで溝状の落込みを確認
 11月11日 7・8トレンチで中世以降と思われる掘立柱建物跡の柱穴を確認
 11月29日 遺構確認地点を除き、重機でトレンチの埋戻し開始
 12月9日 埋戻し等現地協議（飯田国道・埋文センター）
 12月19日 調査終了



1区トレンチ掘削

平成23年度（基礎整理作業）

- 12月20日 基礎整理作業開始
 1月6日 記載内容確認開始
 1月27日 台帳作成開始
 3月14日 図面修正開始
 3月31日 基礎整理作業終了



上層断面記録作成

平成24年度（発掘作業）

- 4月1日 受委託契約締結
 4月10日 2区、重機によるトレンチ掘削開始
 4月12日 トレンチの精査で掘立柱建物跡の柱穴を確認
 4月13日 2区、重機による表土剥ぎ開始
 4月16日 発掘調査開始式
 4月18日 遺構検出で掘立柱建物跡の柱穴を多数確認
 4月25日 4区、重機による表土剥ぎ開始
 5月7日 重機で2区と3区の境界に残る市道のアスファルトの撤去
 5月8日 3区、重機による表土剥ぎ開始
 5月14日 SK1020より煙管（キセル）出土
 5月29日 3区南側の遺構検出で、掘立柱建物跡の柱穴を多数確認
 5月30日 4区、方形の竪穴建物跡（SB01）を検出
 6月14日 飯田市歴史研究所客員研究員金澤雄記氏による現地指導
 7月9日 ST08の柱穴より、ほぼ完形のかわらけ出土
 7月26日 県教委平林 彰主任指導主事の現地視察
 7月29日 現地説明会。見学者29名
 7月30日 2・3区、重機で深掘りトレンチ掘削
 7月31日 2～4区、引き渡し協議（飯田国道・埋文センター）
 8月2日 2・3区、重機で埋め戻し開始
 8月10日 発掘作業終了



ラジコンヘリによる空中写真撮影

平成24年度（基礎整理作業）

- 12月25日 基礎整理作業開始
 1月8日 記載内容確認開始
 1月11日 台帳作成類の作成開始



遺構検出作業

第4章 風張遺跡

- 1月28日 理文センターでパリノ・サーヴェイ社によるSK392出土板材・木杭の放射性炭素年代測定試料採取
- 2月8日 遺物注記開始
- 2月14日 写真整理開始
- 3月4日 図面修正開始
- 3月31日 基礎整理作業終了

平成26年度（整理作業）

- 4月1日 受委託契約締結
- 4月7日 作業員による本格整理の作業開始
- 6月13日 アルコールを用いた鉄製品のクリーニング
- 7月15・16日 長野県立歴史館で金属製品のX線撮影
- 9月1日 遺構図面修正・第2原因作成開始。土器接合開始
- 10月16日 遺構のデジタルトレース開始
- 12月11日 信州大学理学部教授原山智氏による石器・石製品の石材指導
- 1月20日 国土交通省飯田国道事務所建設監督官高橋寿氏、整理状況の視察
- 2月10日 愛知学院大学教授藤澤良祐氏による中世土器・陶磁器の指導
- 3月31日 本格整理作業終了

平成27年度（整理作業）

- 4月1日 受委託契約締結
- 4月6日 作業員による本格整理開始
- 4月7日 全体図のデジタルトレース開始
- 6月11日 土器実測開始
- 8月11日 木器実測開始
- 8月17日 土器図版レイアウト作成開始
- 10月16日 遺構デジタルトレース開始
- 10月21日 遺物トレース開始
- 11月19日 原稿執筆開始
- 11月20日 遺物版組開始
- 11月27日 遺構版組開始
- 1月5日 入稿開始
- 3月18日 作業員による本格整理開始終了
- 3月28日 報告書納品
- 3月31日 本格整理作業終了



完成した掘立柱建物跡



現地説明会の実施



土杭（SK392）底部に設置された板材の精査



報告書の校正

第2節 基本土層

各地区の土層堆積状況は、1区が現耕作土（I1層）の下層に花崗岩風化層（IV1層）が堆積し、2～4区はI層の下層に近世の水田層・盛土（II1層～II5層）、中世の盛土（III1層・III2層）、花崗岩風化層（IV1層・IV2層）が堆積する。基本土層図（第100図）は、8トレンチ土層断面図を用いて作成した。

基本土層

I層：圃場整備事業による造成土を基調とする現在の水田層。1～4区のほぼ全域に堆積する。色調と酸化鉄の集積状況の差から、I1層とI2層に2分層した。

I1層：10YR 3/1 黒褐。シルト。色調は暗灰色化（グライ化）し、酸化鉄が集積する。

I2層：10YR 4/2 黒褐。シルト。I1層以前の水田層と水田層形成に伴い水田の縁辺に堆積する盛土。I層より多く酸化鉄が集積し、色調は暗い。酸化鉄はI1層の酸化鉄が混在している。

II層：近世に形成された層。2～4区で確認した。土質と色調から、5分層した。II1層～II3層は標高の高い水田で、II4層・II5層は標高の低い水田で確認される。

II1層：10YR 3/3 暗褐。シルト。粘性が極めて強い。II2層・III1層・IV1層のブロックで構成される。I層水田の縁辺部に残り、近世以降の水田造成土である。

II2層：10YR 4/1 褐灰。シルト。暗灰色化（グライ化）し、粘性が強い水田層。

II3層：10YR 3/4 暗褐。シルト。暗灰色化（グライ化）し、層全体に酸化鉄が集積する水田層。

II4層：10YR 3/3 暗褐。シルト。粘性が強い。暗灰色化（グライ化）し、層の下部を中心に酸化鉄が集積する。

II5層：10YR 3/4 暗褐。シルト。暗灰色化（グライ化）した水田層で、炭化物が混入する。

III層：2～4区西側においてII層直下に堆積する。2区～4区の中央の谷状地形では、黒色化する。黒色化の度合いと硬化の有無で2分層した。

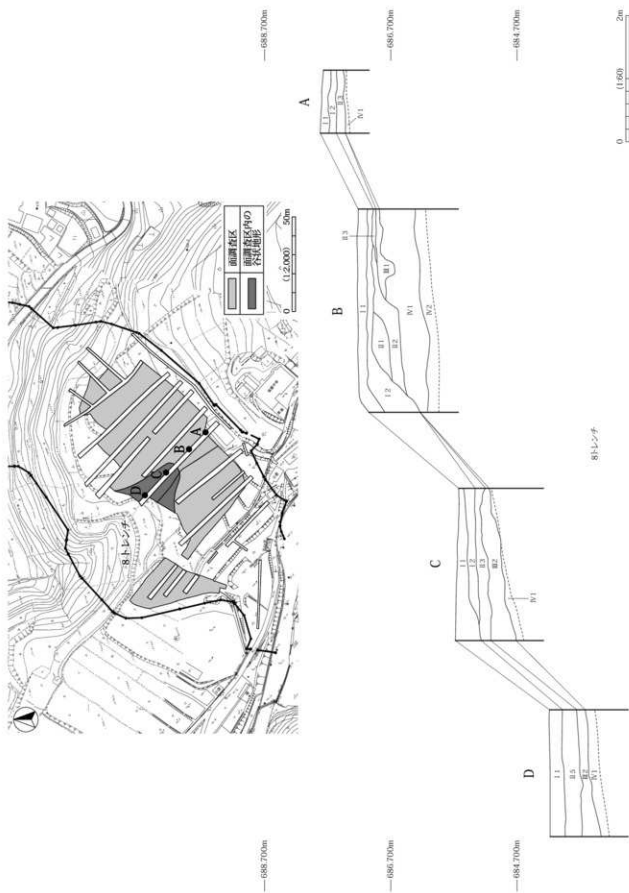
III1層：10YR 2/2 黒褐。シルト。

III2層：10YR 2/3 黒褐。シルト。

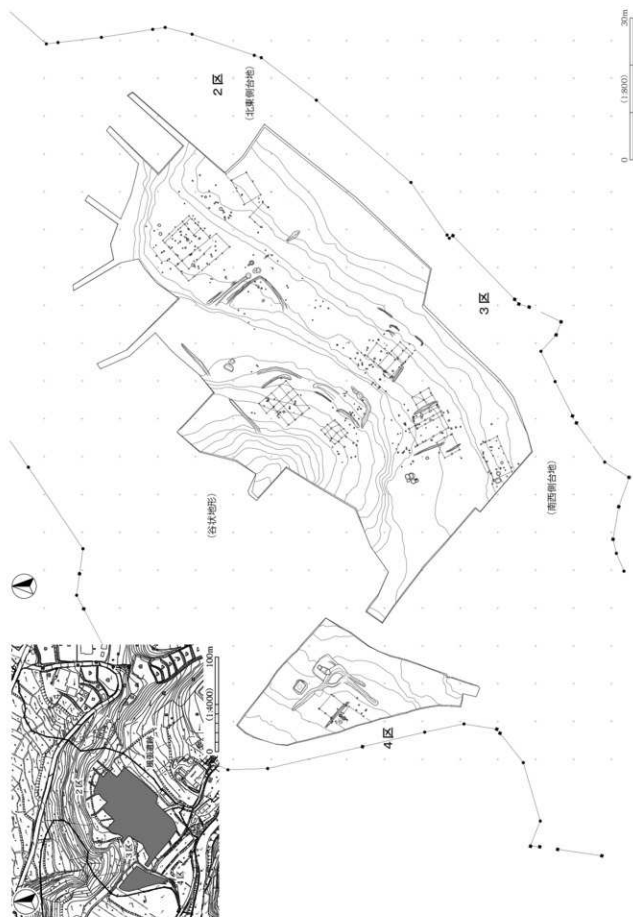
IV層：地山。花崗岩風化層。

IV1層：10YR 4/4 褐。シルト。粘性が強い。

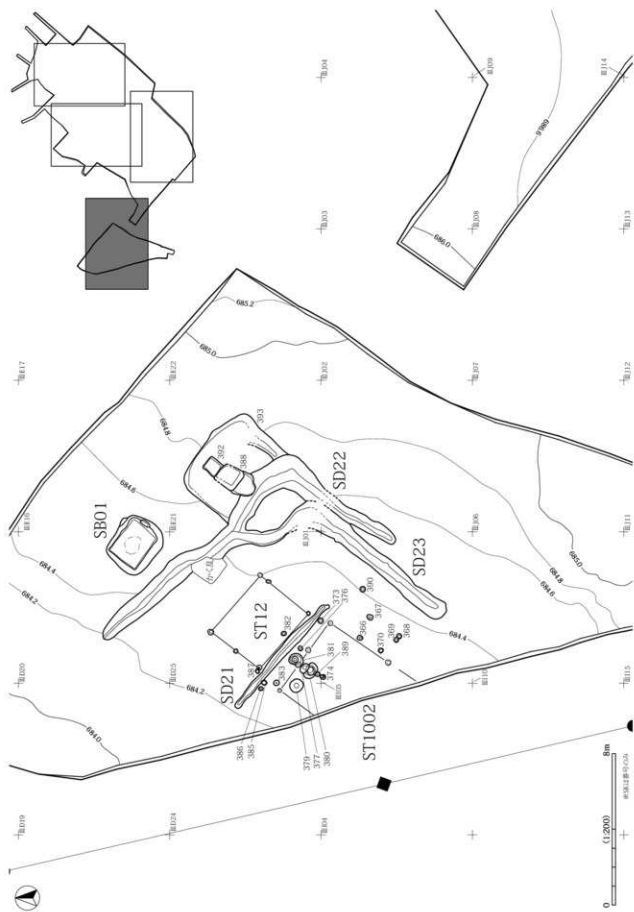
IV2層：10YR 5/8 黄褐。シルト～砂土。砂質を帯び、層の下部は砂である。



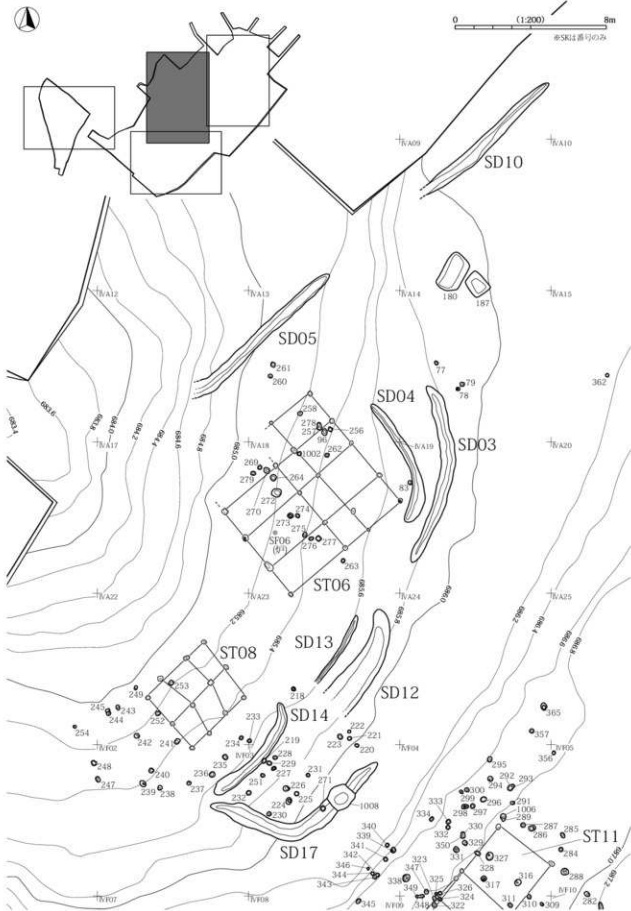
第100図 基本土層図



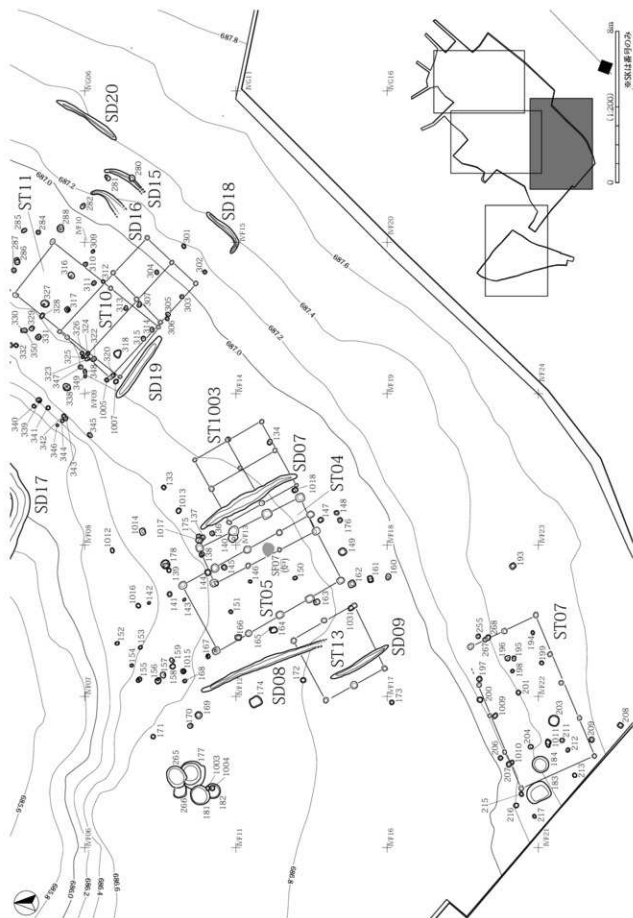
第101図 遺構全体図1



第102図 遺構全体図 2



第103図 遺構全体図 3



第104図 遺構全体図4

第3節 遺構

1 中世以降

(1) 概要

風張遺跡では台地上の2～4区で、掘立柱建物跡、竪穴建物跡、土坑、焼土跡、溝跡を確認した。調査区内は谷状地形と台地状地形に分かれるが、調査区内ほぼ全域に遺構が分布する（第101図）。

掘立柱建物跡は形状と規模から、4間四方を超える掘立柱建物跡と1間か2間の掘立柱建物跡に分かれる。前者は北東側台地と谷状地形内、後者は南西側台地に分布する傾向がある。掘立柱建物跡は焼土跡を伴う例もある。掘立柱建物跡の主軸は地形傾斜に即したと考えられる。建物重複関係があり、時期差がある。しかし、風張遺跡では古代以前の土器が出土していないため、今回確認した遺構は中世以降のものとする。

溝跡には、傾斜に平行もしくは直交する直線的な溝跡と、掘立柱建物跡に近接するL字状もしくは湾曲する溝跡の2種類がある（第101図）。前者（SD02・10等）は掘立柱建物跡（屋敷地）の境界を示すため、後者（SD01・07・14等）は斜面上方から流入する水を排水するために掘削されたものと推測した。このため、本報告では掘立柱建物跡に伴う溝跡や焼土跡を併せて報告する。また、掘立柱建物構築に伴う平場の造成痕跡を谷状地形内に立地するST06とその周辺で確認した（第100図）。

なお、今回の調査では、古代以前の土器が出土していないため、確認した遺構は中世以降のものとする。また、遺構番号には、「土坑」のほかに遺構として認定できなかった落込みも含まれている。

(2) 掘立柱建物跡

ST01 [遺構：第106図、PL29]

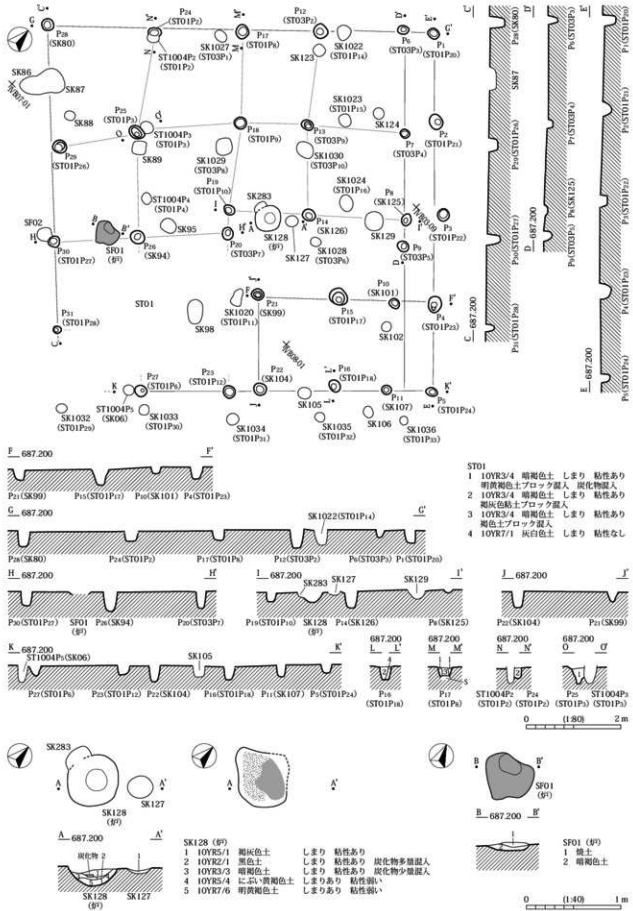
位置：2区、IV B01・02・03・07・08グリッド。北東側台地にある（第101図）。検出：IV層上面で、径10～30cmの円形の暗褐色土の落ち込みを多数確認し、掘立柱建物跡が複数存在すると推定した。各ピットは埋土や形状によるめだつた差異がなく、掘立柱建物跡の柱穴の組み合わせはピットの通りを検討し、柱穴を認定した。重複関係：P24とST1004P2とで重複するが、新旧関係は不明である。P25がST1004P3を、P30がSF02（ST1004F）を切る。埋土：P16・17は2分層した。P17の底には、礫があり、3層を柱痕と判断した。構造：4間×4間で柱穴はP1～31である。長辺8.0m、短辺7.6mを測り、主軸はN45°Eである。北東側にあるP1～5は庇と考えられる。本遺構の中央部にあるSK128及びSF01は炉である。出土遺物：なし。

ST02 [遺構：第107図、PL30]

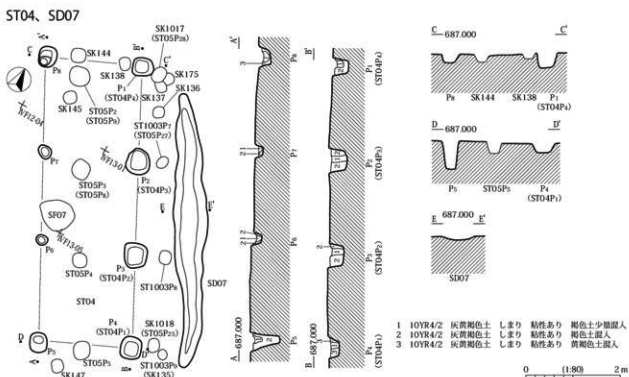
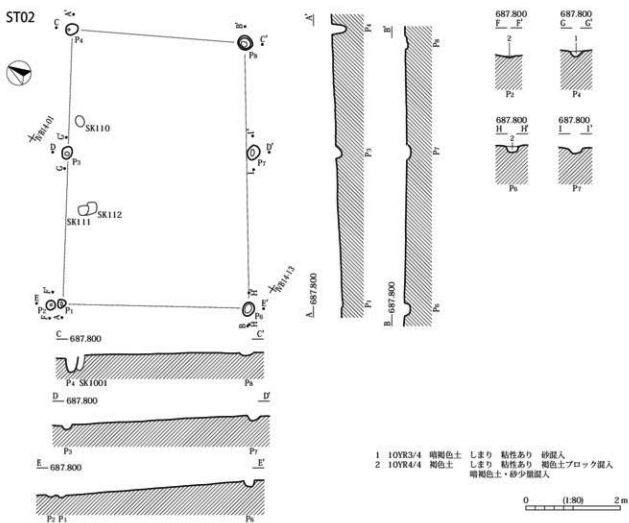
位置：2区、IV B09・13・14グリッド。北東側台地にある（第101図）。検出：IV層上面で、径17～34cmの円形の落ち込みを複数確認し、その配置から掘立柱建物跡と認定した。重複関係：P4がSK1001を切る。本遺構内にSK110・111・112があるが、新旧関係は不明である。構造：2間×1間で、柱穴はP1～4・6～8と考えた。長辺5.7m、短辺3.8mを測る。主軸はN27°Eで、地形の傾斜に直交する。出土遺物：なし。

ST04、SD07 [遺構：第107図、PL30]

位置：3区、IV F07・08・12・13グリッド。南西側台地にある（第101図）。検出：IV層上面で、径10～30cmの円形の落ち込みを多数確認し、掘立柱建物跡が複数存在すると推定した。整理作業でピットの配



第106図 ST01、SK128、SF01・02 遺構図



第107図 ST02・04、SD07 遺構図

置を再検討して最終的な組み合わせを決定した。重複関係：本遺構内にST05、SK138・144・145があるが、新旧関係は不明である。埋土：全ての柱穴に柱痕跡がある。構造：3間×1間で、柱穴はP1～8と考えた。長辺6.0m、短辺2.0mを測る。主軸はN27°Wで、地形の傾斜に平行する。柱穴掘方の形状・規模は、長辺の西側と東側で異なる。東側の柱穴は大きく平面方形、西側は円形である。本遺構の東側には、長辺方向に沿ってSD07が並走する。長さ5.81m、最大幅70cm、深さ7cmを測る。斜面上方から流入する水を排水するために掘削されたST04に伴う排水溝と推測する。出土遺物：なし。

ST05、SF07 [遺構：第108図、PL30、土器：第120図]

位置：3区、IVF07・12・13グリッド。南西側台地にある(第101図)。検出：IV層上面で、径10～30cmの円形の落込みを多数確認し、掘立柱建物跡が複数存在すると推定した。整理作業でピットの配置を再検討して最終的な組み合わせを決定した。重複関係：ST04とSK145・146・150・151とは重複するが、新旧関係は不明である。埋土：P5～10は2分層し、P5～7・9・10で柱痕跡を確認した。構造：4間×1間で、柱穴はP1～10と考えた。長辺7.6m、短辺3.9mを測る。主軸はN29°Wで、地形の傾斜に平行する。中央南東側に不整形の落ち込みがあり(SF07)、掘立柱建物跡に伴う戸であろう。出土遺物：P8から古瀬戸後期のすり鉢(9)が出土した。時期：P8出土遺物から中世と推測する。

ST06、SD04・SF06 [遺構：第109図、PL30]

位置：2区、IVA13・17・18・19・23グリッド。2～4区の谷状地形に位置する(第101図)。検出：IV層上面で、径10～30cmの円形の落込みと南東側で屈曲する溝跡(SD04)を確認した。調査時には、ピットの配置から2棟の掘立柱建物跡が重複しているものと判断してST06・09と遺構番号を付けたが、整理作業で1棟の掘立柱建物跡に修正し、ST09は欠番とした。重複関係：ST06内にSK96・256～258・262～264・269・270・272～279・1002があるが、新旧関係は不明である。埋土：P4・14・16～18は2分層した。いずれも柱痕跡が残る。P1・5の底面には礎盤と考えられる礫が設置されていた。構造：4間×3間で、柱穴はP1～18と考えた。西側のピットは確認できていない。本遺構の西側は圃場整備による掘削が地山(IV層)まで及んでいるため、西側のピットは破壊されたと推測している。平面形は正方形で、地形の傾斜と平行する北西-南東方向が7.5m、直交する北東-南西方向が7.5mを測る。主軸はN49°Eで、地形の傾斜に直交方向に主軸をもつ。中央南西側で確認したSF06は本遺構に伴う戸と推測した。ST06の斜面上方(南東側)には屈曲した溝跡(SD04)がある。長さ6.96m、最大幅0.78m、深さ8cmを測る。斜面上方から流入する水を排水するために掘削されたST06に伴う排水溝と推測する。出土遺物：なし。

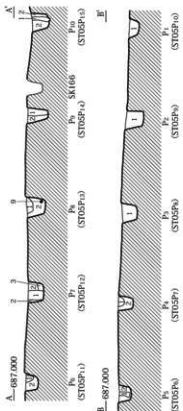
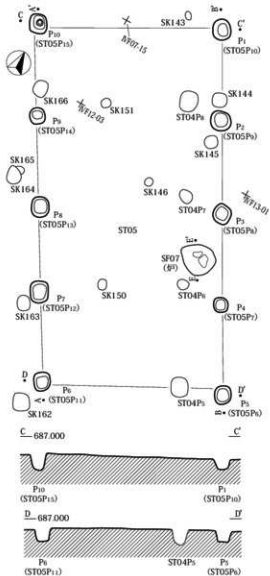
ST07 [遺構：第110図、PL31]

位置：3区、IVF16・17・21・22グリッド。南西側台地にある(第101図)。検出：IV層上面で、径20～30cmの方形の落込みを確認し、ピットの配置から掘立柱建物跡と認定した。整理作業でピットの配置を再検討して最終的な組み合わせを決定した。重複関係：本遺構内にSK184、194～201、203、204、207、209、211、212、255、267、268、1009～1011があるが、新旧関係は不明である。埋土：P1・3・8は2分層した。いずれも柱痕跡が残る。構造：4間×2間で、柱穴はP1～5・7・8・11～14と考えた。長辺8.0m、短辺4.2mを測る。主軸はN49°Eで、地形の傾斜に直交する。出土遺物：なし。

ST08、SD14・17 [遺構：第111図、PL31、土器：第120図]

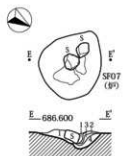
位置：3区、IVA22グリッド。2～4区の谷状地形にあり、ST06と近接する(第101図)。検出：IV層上

ST05、SF07



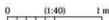
ST05

- 1 10YR4/2 灰黄褐色土 しまり 粘性あり 褐色土少混入
P10には炭化物混入
- 2 10YR4/2 灰黄褐色土 しまり 粘性あり 褐色土少混入
- 3 10YR4/3 にふい黄褐色土 しまり 粘性なし

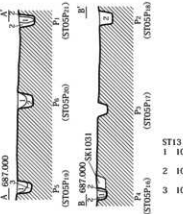
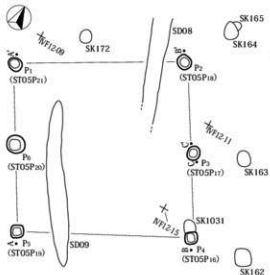


SF07 (P9)

- 1 10YR2/3 暗褐色土 しまり 粘性あり 焼土粒・褐色土混入
- 2 10YR4/3 にふい黄褐色土 しまり 粘性あり 暗褐色土少混入
- 3 10YR5/4 にふい黄褐色土 しまり 粘性あり 褐色土少混入
- 4 10YR5/3 にふい黄褐色土 しまり 粘性あり 暗褐色土少混入



ST13

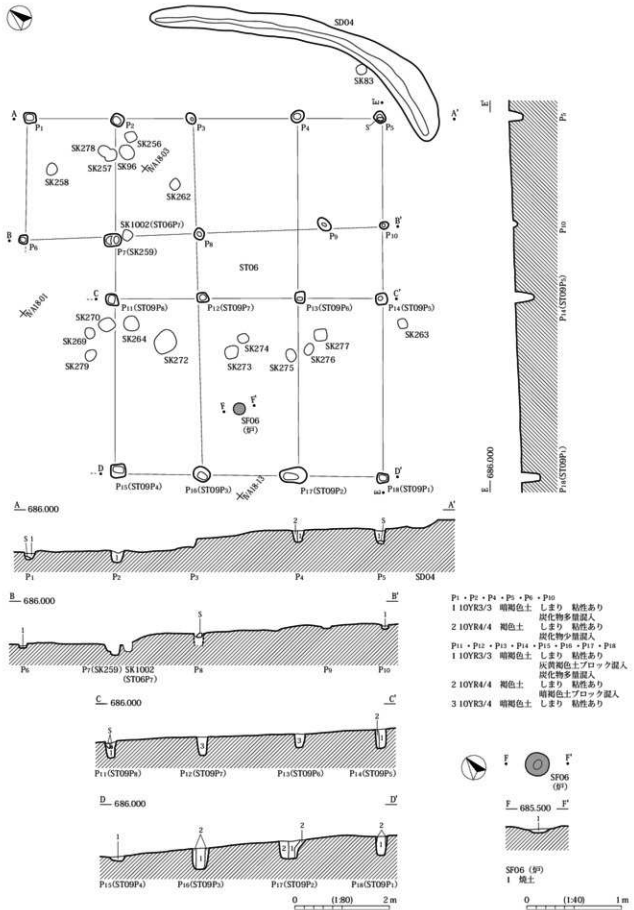


ST13

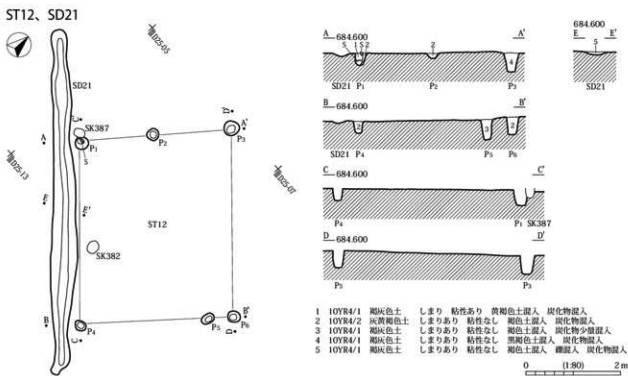
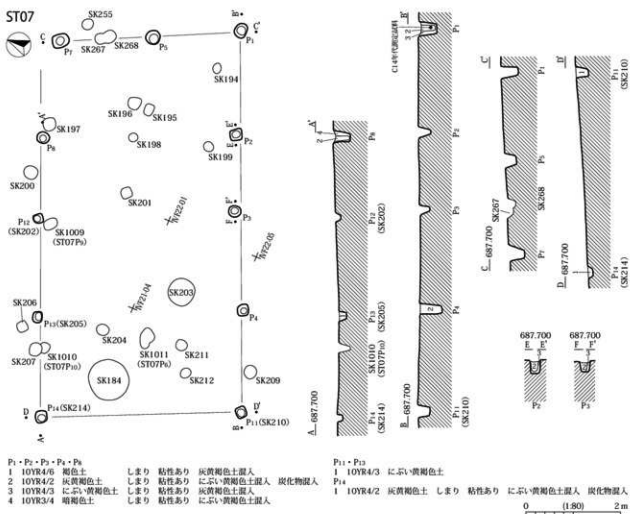
- 1 10YR4/2 灰黄褐色土 しまり 粘性あり 褐色土少混入
- 2 10YR4/2 灰黄褐色土 しまり 粘性あり にふい黄褐色土混入
- 3 10YR4/3 にふい黄褐色土 しまり 粘性なし



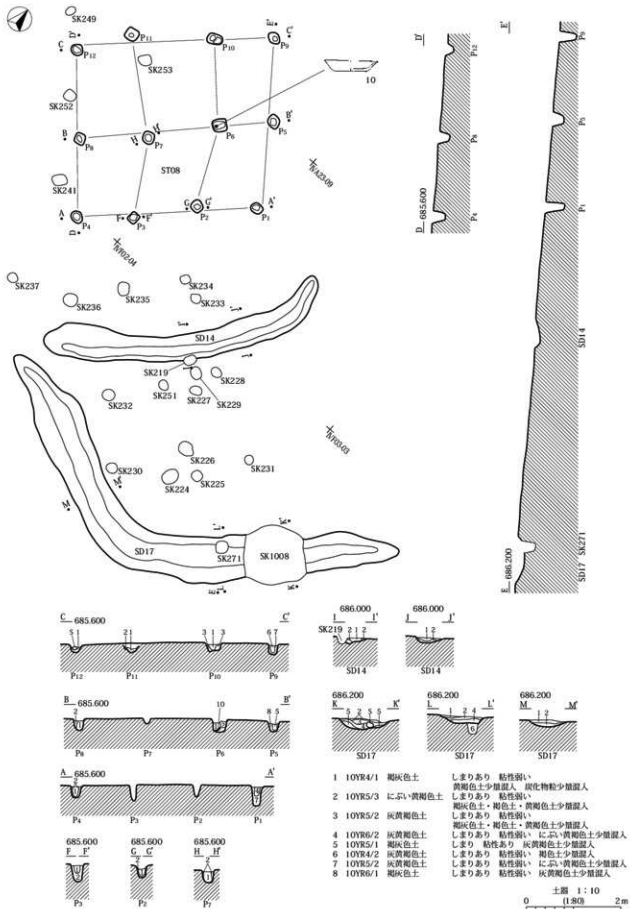
第108図 ST05・13、SF07 遺構図



第109図 ST06、SD04、SF06 遺構図



第110図 ST07・12、SD21 遺構図



第111図 ST08、SD14・17 遺構図

面で、径20～30cmのピットを確認し、その配置から掘立柱建物跡として認定した。本遺構の南西側と南東側にも多数のピットがある。別の掘立柱建物跡の存在や建て替えなどの可能性を考えたが、建物跡として認定できなかった。重複関係：本遺構内にSK253があるが、新旧関係は不明である。埋土：P1～11は2分層し、いずれも柱痕跡を確認した。構造：地形の傾斜に直交する北東-南西方向に3間、平行する北西-南東方向に2間を測る総柱の建物跡と認定した。柱穴はP1～12である。主軸はN48°Eで、地形の傾斜に直交する。長辺4.0m、短辺3.6mを測る。柱穴の掘方には円形と方形がある。ST08の斜面上方（南東側）に2条の溝跡（SD14・17）がある。出土遺物：P6の柱痕跡（1層）の底部から15世紀後半～16世紀初頭のかわらけ（10）が出土した。時期：P6出土遺物から中世と考える。

ST10・11、SD15・16・18・19 [遺構：第112図、PL31、土器：第120図、PL34]

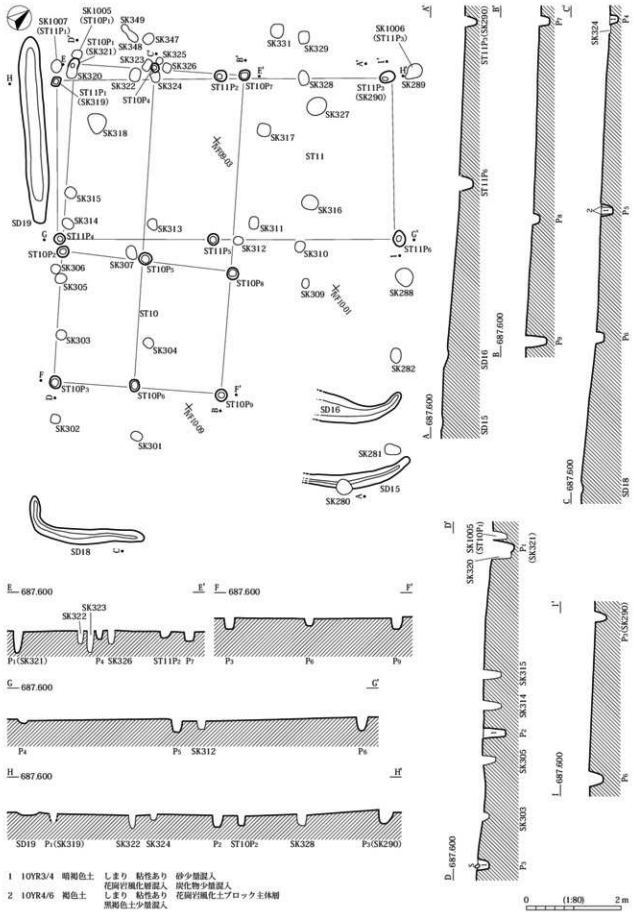
位置：3区、IV F04・05・08・09・10・14・15グリッド。南東側台地にある（第101図）。検出：IV層上面で、円形もしくは楕円形のピットを確認した。ピットの配置から2棟の掘立柱建物跡が重複していることは推測したが、ピットが密集しており一直線に配置するピットを抽出することが比較的困難な状況であった。現場で組み合わせたピットを本格整理で検討し、最終的な組み合わせを決定した。重複関係：ST10と11は重複するが、ピットが直接重複していないため新旧関係は不明である。構造：ST10は2間×2間、柱穴がP1～9で、長辺6.7m、短辺3.6mの総柱建物跡である。主軸はN47°Wで、地形の傾斜に平行する。ST11は2間×2間、柱穴がP1～6で、長辺6.9m、短辺3.4mである。主軸はN41°Eで、地形の傾斜に直交する。ST10・11の北西側と南東側（斜面上方）に溝跡がある。SD19は直線的に延び、SD15・16・18はL字状を呈する。なお、これらの溝がST10とST11のどちらに伴うかは特定できなかった。出土遺物：SD19より古瀬戸の桶（管理番号18）と大窯の皿（29）が出土した。時期：SD19は出土遺物から中世と考える。

ST12、SD21 [遺構：第110図、PL31、土器：第120図]

位置：4区、III D25グリッド。南西側台地にある（第101図）。検出：IV層上面での検出で、径20～30cmで円形を呈する落ち込みを確認し、ピットの配置から掘立柱建物跡として認定した。ST12の南西側には並走するSD21を挟んでST1002が近接する。重複関係：P1がSK387に切られる。埋土：ST12には炭化物が混入する。構造：2間×1間で柱穴はP1～6である。P6に近接してP5がある。P5はST12の南東側にあることから、ST12に伴うピットと認定した。長辺3.9m、短辺3.2mを測り、主軸はN49°W。地形の傾斜に平行方向に主軸をもつ。P1の底面には礎石と考えられる礎が設置されている。SD21はST12の北西側に並走する溝跡で、両者は10cmと近接する。SD21の北西側にはST1002がある。出土遺物：P4から古瀬戸のすり鉢（11）が出土した。時期：出土遺物から15世紀と推定する。

ST13 [遺構：第108図、PL31]

位置：3区、IV F11・12グリッド。南西側台地にある（第101図）。検出：IV層上面で、径20～30cmの落ち込みを確認した。ピットの配置から掘立柱建物跡と認定した。重複関係：P4がSK1031を切る。SD08・09と重複するが、新旧関係は不明である。埋土：P1・4～6は2分層し、P1・4には柱痕跡が残る。構造：2間×1間で、柱穴はP1～6と考えた。長辺3.9m、短辺3.2mを測り、主軸はN49°Wである。地形の傾斜に平行方向に主軸を持つ。北東側にはST05とST1003があり、建物の間隔は1m程と近接し、主軸がほぼ同じである。これら建物が単位を構成していた可能性も考えられる。ピット掘方は、P2～6が方形もしくは方形を志向するもので、ほかは円形である。出土遺物：なし。



第112図 ST10・11、SD15・16・18・19 遺構図

ST1001 [遺構：第113図]

位置：2区、IVB13グリッド。北東側台地にある（第101図）。 検出：IV層上面での検出で、ST02の南西側で径20～30cmを測る円形と方形の落ち込みを確認した。ST02のピットと同規模であったため、掘立柱建物跡の存在を予想してピットの組み合わせを検討したが、認定できなかった。本格整理でピットの配置を再検討し、掘立柱建物跡として認定した。 重複関係：なし。 構造：2間×1間で、柱穴はP1～5である。長辺4.1m、短辺3.2mを測る。主軸はN47°Wで、地形の傾斜に平行すると考えた。 出土遺物：なし。

ST1002 [遺構：第113図]

位置：4区、ⅢD24・25、I04・05グリッド。南西側台地にある（第101図）。 検出：IV層上面で、円形もしくは方形の落ち込みを確認した。ST1002の北東側に隣接するST12のピットと規模・形状が似たものがあり、掘立柱建物跡の存在を予想したが、組み合わせることができなかった。整理作業で配置を再検討し、南西側の調査区外に伸びる掘立柱建物跡と考えた。 重複関係：P2がSK381を切る。 構造：現状で北東-南方向が5.7m、北西-南東方向が4.5mを測る。推測ではあるが、主軸はN35°Eで、地形の傾斜に直交する。 出土遺物：なし。

ST1003 [遺構：第113図]

位置：3区、IVF08・13グリッド。南西側台地にある（第101図）。 検出：IV層上面で、IVF07・08・12・13グリッドで径10～30cmの円形もしくは方形の落ち込みを多数確認し、掘立柱建物跡が複数存在すると推定した。調査では2棟の掘立柱建物跡を認定し、ST04とST05の遺構番号を付けたが、整理作業で再検討し、異なる2間×2間の掘立柱建物跡を推定し、最終的なピットの組み合わせを決定した。 重複関係：SD07と重複するが、新旧関係は不明である。 構造：2間×2間で、柱穴はP1～9である。総柱の建物跡である。長辺4.0m、短辺3.8mを測り、主軸はN30°Wで、地形の傾斜に平行する。 出土遺物：なし。

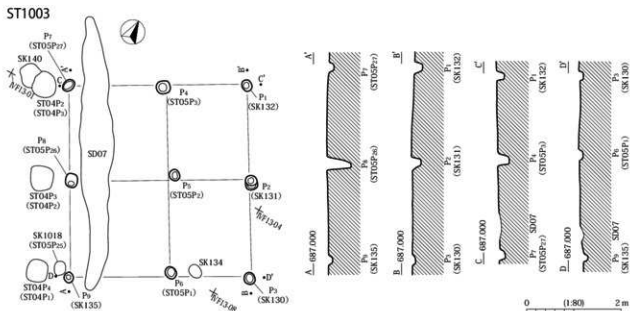
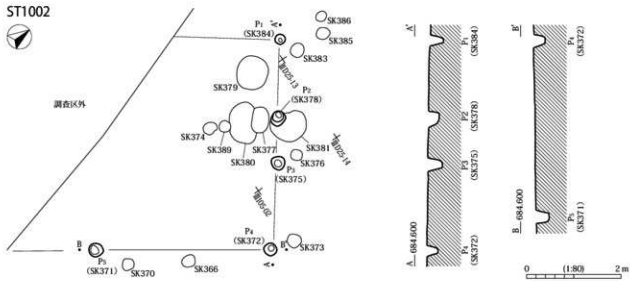
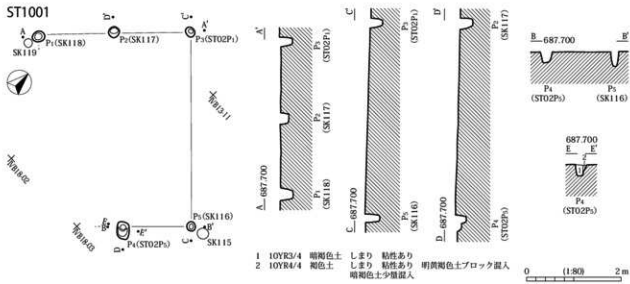
ST1004、SF02 [遺構：第114図]

位置：2区、IVB01・02・06・07グリッド。北東側台地にある（第101図）。 検出：IV層上面で、円形もしくは方形に近い落ち込みを多数確認した。落ち込みは、その形状と規模から掘立柱建物跡のピットと推測したが、ピットの数と重複があったことから掘立柱建物跡の認定が困難であった。整理作業で再検討し、遺構の認定を修正した。 重複関係：本遺構内に、ST01、SK84～88・90～93・109・1026、SF01がある。P2はST01P24、P3はST01P25、SF02はST01P30に切られるが、ほかの遺構との新旧関係は不明である。 埋土：P5・11を2分層し、P5は柱痕跡が残る。 構造：6間×2間で柱穴はP1～13である。南西側P6・7間の中央ではピットを確認していない。長辺11.1m、短辺4.1mを測り、主軸はN39°Wで、地形の傾斜に平行する。本遺構の特徴は、他の建物跡と比べて、長辺の規模が大きいことである。中央部で確認したSF02は検出面（IV層）が被熱を受け赤褐色化し、本遺構に伴う炉と推測する。 出土遺物：なし。

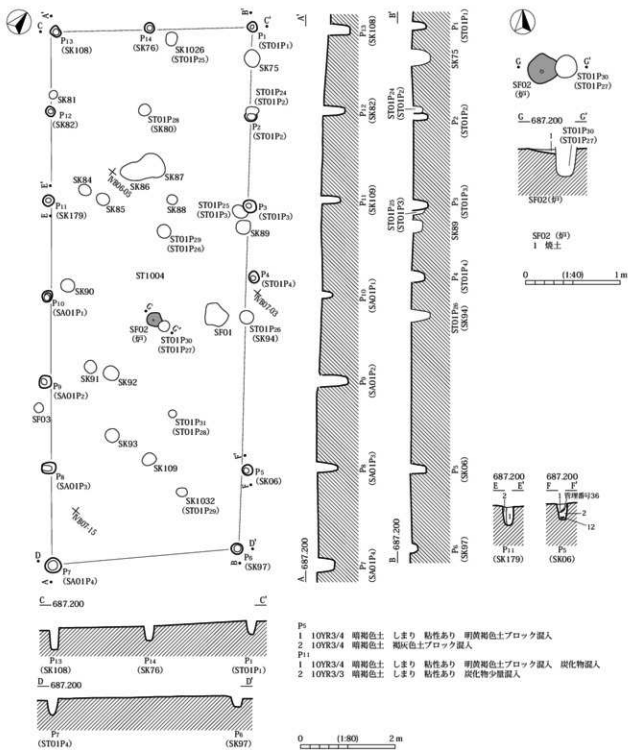
(3) 竪穴建物跡

SB01（第115図、PL29）

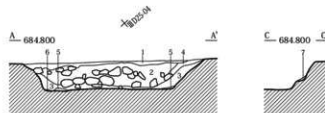
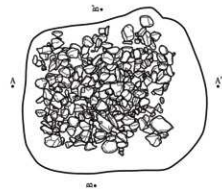
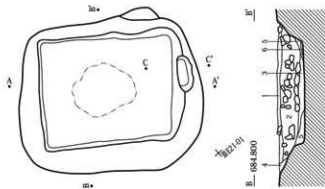
位置：4区、ⅢD20・21グリッド南西側台地にある（第101図）。 検出：IV層上面。 重複関係：なし。 埋土：7分層し、2層には拳大の礫が多量に混入する。 構造：長軸2.87m、短軸2.40m、深さは43cmを



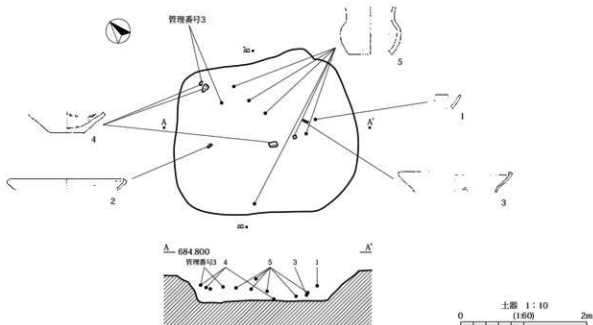
第113図 ST1001・1002・1003 遺構図



第114図 ST1004、SF02 遺構図



- | | | | | | |
|---|---------|-------|---------------------|------|----------|
| 1 | 10YR4/2 | 灰黄褐色土 | しまり | 粘性あり | |
| 2 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | しまりあり | 粘性なし | 褐色土混入 |
| 3 | 10YR5/2 | 灰黄褐色土 | 1層との境界に灰化物が混入する場所あり | | |
| 4 | 10YR5/6 | 黄褐色土 | しまりあり | 粘性なし | 黄褐色土混入 |
| 5 | 10YR5/6 | 黄褐色土 | しまりあり | 粘性なし | 4層に類似 |
| 6 | 10YR5/2 | 灰黄褐色土 | 明黄褐色土をブロック状に混入 | | |
| 7 | 10YR6/6 | 明黄褐色土 | しまり | 粘性あり | 出入り口部に堆積 |



第115図 SB01 遺構図

潤る。平面形は方形で、北東側には壁面を掘り込んだステップ状の場所がある。出入り口部と考えた。床面は平坦で、中央部は硬化する。出土遺物：2層から古瀬戸後期のすり鉢(2・4)・花盆(5)・平碗(1)、土師質の茶釜(管理番号3)が出土した。これらの遺物は2層に混入する礫の直上と直下から出土した。時期：15～16世紀と考える。

(4) 土坑

SK388 [第116・117図、PL33]

位置：4区、ⅢE21グリッド南西側台地にある(第101図)。 検出：平成23年度に掘削したトレンチ(第

116図C-C'で本遺構の存在を確認し、SK393埋土(14層)上面で検出した。重複関係:SK392とSK393を切る。埋土:2分層(第117図の3・4層)した。粘性が強いシルトで、地下水位が高い関係で部分的に暗灰色化する。構造:方形で、長辺1.24m、短辺1.16m、深さは30cmを測る。主軸はN32°Eである。底面は平坦でほぼ垂直に立ちあがる。四隅で径5~10cmの円形を呈するピットを確認した。北東側で切り合うSK392底面では、木杭が確認されていることから、木杭を打設した痕跡と推測している。南西側に突出部があり、SD22に接続する。SD22に流れる水を突出部から、引水したと考えられる。なお、本遺構とSK392は、形状と杭の打設などの共通点があり、両者は同じ機能を持っていることから、SK392が土砂により埋没した後につくり直された可能性もある。出土遺物:なし。時期:中世と推定する。

SK392 (第116・117図、PL33)

位置:4区、ⅢE21グリッド南西側台地にある(第101図)。検出:断面をSK388北東壁のトレンチで、平面をSK393埋土(14層)上面で確認した。重複関係:SK388に切られ、SK393を切る。埋土:2分層(第117図C-C'、D-D' 6・7層)した。6層は粘性が非常に強いシルトで礫が混入する。SK388と同様に地下水位が高い関係で部分的に暗灰色化する。構造:長辺0.8m(現存)、短辺0.78m、深さは検出面から底面まで51cmを測る。底面は平坦で、ほぼ垂直に立ちあがる。主軸はN40°Eで、北西-南東方向に主軸を持つ。SK388とはわずかに主軸が異なる。本遺構の四面には板材が設置されていた。北西側と南東側に設置されている板材は、各々2個の木杭で固定されていた。北西側と南東側の板材の前には木杭が残っていたが、他の場所では円形のピットを確認している。掘方上端と板材の間の隙間には裏込め土(褐色土)が充填されていた。板材の下には掘方が確認できなかった。なお、バリノ・サーヴェイ社に委託して板材(2点)と木杭(1点)の放射性炭素年代測定と樹種同定を実施した。放射性炭素年代測定(第18表)による2σ暦年代較正值のうち最も古い値は板材(2)で1,297calAD、最も新しい値は1,399calAD、同じく板材(1)で1,285calADと1,392calAD、同じく板材(3)で1,283calADと1,390calAD、木杭は同じく最も古い値が1,440calAD、最も新しい値が1,615calADであった。板材は14世紀代、木杭は15世紀中頃~後半に相当し、板材はサワラ、木杭はモミ属と樹種同定された(詳細は第4節参照)。板材に付着した土壌(埋土)を試料として珪藻分析を実施した。その結果、微化石の遺存状態は不良であった。出土遺物:なし。時期:中世と考える。

SK393 (第116・117図)

位置:4区、ⅢE21グリッド。南西側台地にある(第101図)。検出:平成23年度のトレンチで、本遺構の存在を確認した。検出面はIV層上面である。重複関係:SK388・392に切られる。埋土:2分層した。8層と9層が埋土、14層(第117図C-C')は掘方と考える。構造:北西-南東方向3.0m、北東-南西方向2.8m(現存)、検出面から底面まで31cmを測る。長辺方向はN51°Wで、主軸は本遺構の南西側がSD22で切られているため不明。出土遺物:なし。時期:中世と推定する。

SK28 (第118図、PL32)

位置:2区、IVB08グリッド。北東側台地にある(第101図)。検出:IV層上面。重複関係:なし。埋土:3分層した。1層は酸化鉄が集積する。2・3層は基本土層IV層のブロックと粗砂が混入する。構造:長辺98cm、短辺96cmを測る円形の土坑。検出面から底面まで深さは49cmを測る。中位に段が設けられていた。段と底面の壁は垂直で、底面が盤状に平坦である。本遺構には木質の容器などを設置した可能性を考えたが、痕跡は得られていない。形状から、トイレ的な遺構を推測し、壁面に付着した埋土

(3層)を試料として、古環境研究所に科学分析を委託した。その結果、寄生虫卵及び明らかな消化残渣は検出しなかった(詳細は第5節参照)。出土遺物:なし。

(5) 溝跡

SD01・11 [遺構:第105図、土器PL34]

位置:2区、IVA20、B06・11・16グリッド北東側台地にある(第101図)。検出:IV層上面。重複関係:SD11がSD01を切る。埋土:SD01・11とも単層。構造:SD01は長さ16.92m、最大幅0.8m、検出面から底面までの深さ10cmを測る。主軸はN51°E・N38Wで、平面形はL字状である。溝跡は東側で直角に屈曲し、北西と南西側が圃場整備で削平を受けていることから、本遺構は一边約10mで四角する溝跡であった可能性も考えられる。SD11はSD01の南側にあり、長さ4.28m、最大幅0.6m、検出面から底面までの深さ6cmを測る。主軸はN48°E・N38°Wである。北西側は圃場整備で削平されている。出土遺物:SD01より古瀬戸後期のすり鉢(管理番号7)が出土した。時期:中世と推定する。

SD02 [遺構:第105図]

位置:2区、IVB06・11・12・17グリッド。北東側台地にある(第101図)。検出:IV層上面で、北西-南東方向に延びる溝状の落ち込みを数箇所確認した。ほぼ直線的に並ぶことから構築時は連続する溝跡であったと推定した。重複関係:なし。構造:直線的に延びていたと推定し、長さは24.8m(推定)、最大幅は1.02m、検出面から底面までの深さ11cmを測る。主軸はN38°Wで、地形の傾斜に平行する。本遺構の北東側のST01・1004とほぼ同じ主軸である。本遺構の南西側には掘立柱建物跡を確認していないことから、居住域の境界を示す溝と考えた。出土遺物:なし。

SD06 [遺構:第105図、PL32、土器PL34]

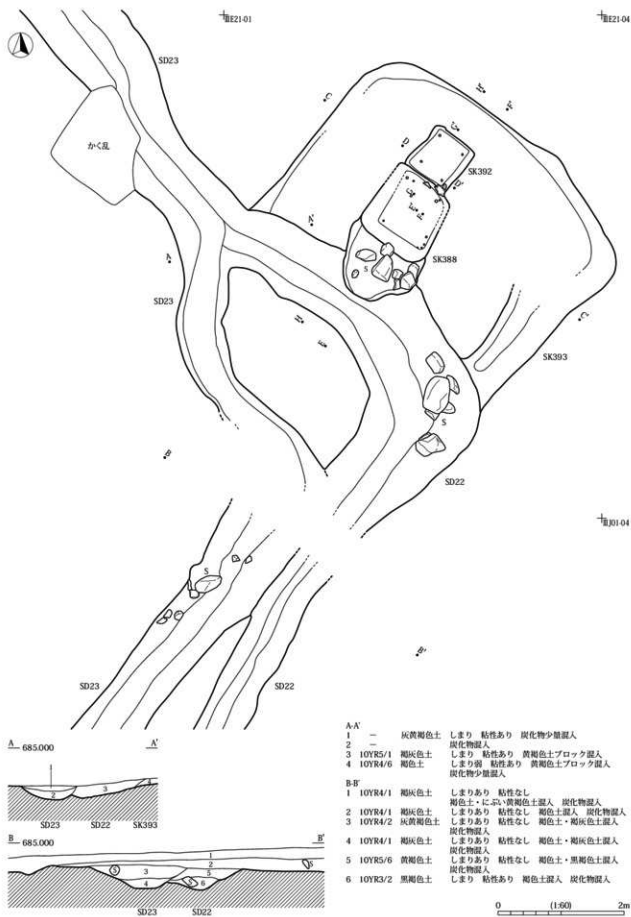
位置:2区、IVB06・11グリッド北東側台地にある(第101図)。検出:IV層上面。重複関係:なし。埋土:単層。構造:SD01とSD02の間にあり、両溝跡と併走する。長さ8.72m(現存)、最大幅0.98m、検出面から底面までの深さ12cmを測る。主軸はN40°Wで、地形の傾斜に平行する。SK46は本遺構に伴う施設と推定したが、性格は不明である。出土遺物:古瀬戸後期か大濠のすり鉢(管理番号9)、13世紀の壺(管理番号10)が出土した。時期:中世と推定する。

SD22・23 [遺構:第116・117図、PL32・33、土器第120図]

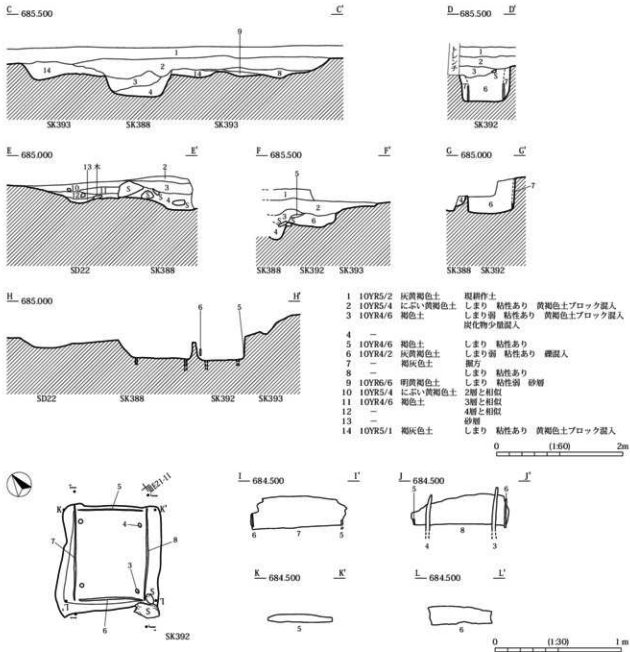
位置:4区、ⅢD20・25、E21、I05、J01グリッド。南西側台地にある(第101図)。検出:IV層上面で重複する2条の溝跡を確認した。重複関係:SD23がSD22を切る。埋土:SD22・23とも2分層した。構造:SD22は長さ10.78m、最大幅1.21m、検出面から底面までの深さ34cmを測る。主軸はN32°E・N56°Wである。平面形はL字状を呈し、断面形は弓状で、底面に細かな凹凸があり、全体的に南西から北西に傾斜する。ほぼ直角に屈曲する地点でSK393と接する。

SK393の中央部にある方形の土坑(SK388)から南西側に突出部があり、この突出部は本遺構の底面より一段低く、本遺構内を流れる水がSK388に入る構造となっている。本遺構は底面の傾斜からすると、南西側調査区外からの水をSK388に入れるための溝跡と推測する。

SD23は長さ22.23m、最大幅1.51m、検出面からの深さ37cmを測る。主軸はN37°E・N38°Wである。SD23も平面形はL字状を呈し、2箇所でもSD22を切る。本遺構はSD22と併走する場所もあることから、SD22埋没後につくり替えられた溝跡と推測した。底面はSD22と同様、南西から北西に傾斜することか



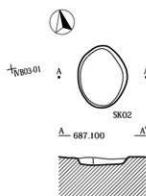
第116図 SK388・392・393、SD22・23 遺構図1



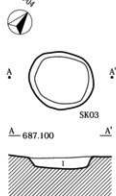
第117図 SK388・392・393、SD22・23 遺構図2

ら、南西側調査区外から引水するための溝跡と推測した。出土遺物：SD22の5層より古瀬戸後期の緑軸小皿(27)、埋土から古瀬戸後期の壺もしくは瓶(28)、SD23より古瀬戸後期の平碗(31)が出土した。時期：本遺構がSK388・393と一体となって機能したことから中世と推定する。

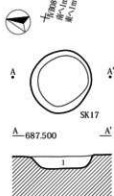
SK02



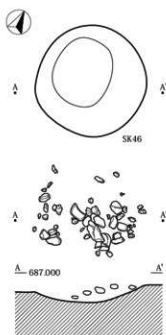
SK03



SK17

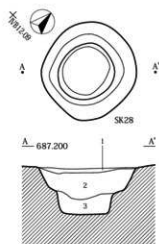


SK46

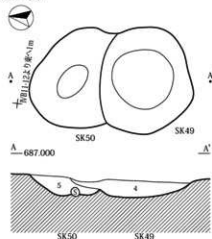


SK02・03
1 10YR3/4 暗褐色土 しまり弱 粘性あり 褐色土ブロック多量混入 砂混入

SK28

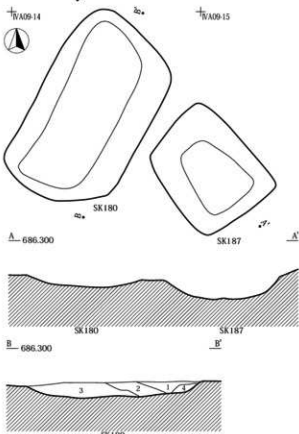


SK49・50



SK28・49・50
1 10YR3/4 暗褐色土 しまり弱 粘性あり 明黄褐色土ブロック少量混入 礫化鉄集積
2 10YR4/4 褐色土 しまり弱 粘性あり 明黄褐色土ブロック多量混入 暗褐色土少量混入
3 10YR4/2 灰黄褐色土 しまり弱 粘性あり 粗砂混 暗灰色土ブロック・灰黄褐色土ブロック混入
4 10YR3/4 暗褐色土 しまり弱 粘性あり 1層と類似 礫混入
5 10YR4/4 褐色土 しまり弱 粘性あり 2層と類似 礫混入

SK180・187



SK180・187
1 10YR4/4 褐色土 砂混入 黄褐色土混入
2 10YR3/4 暗褐色土 砂混入 黄褐色土ブロック・白色土ブロック少量混入
3 10YR3/3 暗褐色土 砂混入 白色土ブロック少量混入
4 10YR5/6 黄褐色土 黄褐色土ブロック主珠

0 (1:40) 1m

第118図 SK02・03・17・28・46・49・50・180・187 遺構図

第4節 遺物

1 土器・陶磁器

第120図の1～32は遺構内出土遺物である。1～5は竪穴建物跡（SB01）出土遺物である。2～4は古瀬戸後期のすり鉢で、4はかなり使用されているため、すり面の窪みがわずかに残る。内面は黒色化し、断面に黒色付着物が残る。黒色付着物は接着剤の可能性が高いと推測し、成分分析を行った結果、アスファルトの可能性が高いとの結果を得ている。5は古瀬戸後期の花盆である。

6～12は掘立柱建物跡出土遺物である。6～8はST01出土遺物で、うち6・7は古瀬戸後期の筒形香炉で、同一個体の可能性もある。8は大窯の小壺である。9はST05出土遺物で古瀬戸後期のすり鉢、10はST08出土の15世紀後半～16世紀初頭のかわらけで、平底で器高が短く口縁は外反する。花崗岩粒と粗粒砂の混入が目立ち器面はざらつく。11はST12から出土した古瀬戸後期のすり鉢である。

13～23は土坑出土遺物である。このうち12・13は15世紀後半～16世紀初頭のかわらけで、12は平底で器高が短く、花崗岩粒と粗粒砂が多く混入する。風張遺跡から出土したほかのかわらけと胎土が異なる。14はSK51から出土した古瀬戸後期の天目茶碗である。15はSK71、16はSK90から出土した古瀬戸後期のすり鉢である。17はSK95から出土した13世紀の中津川の壺である。18はSK109から出土した古瀬戸後期の天目茶碗、19はSK180から出土した古瀬戸後期のすり鉢、20はSK184から出土した古瀬戸後期の天目茶碗である。21はSK1020出土の古瀬戸後期の天目茶碗、22はSK1028出土の、古瀬戸後期の天目茶碗である。

24～32は溝跡出土遺物である。24はSD08から出土した古瀬戸後期の腰折皿である。25・26はSD17出土遺物で、25は古瀬戸後期の瓶類、26は古瀬戸後期の平碗である。29はSD19から出土した内面に菊花が施された大窯の皿である。27・28はSD22出土遺物で、27は古瀬戸後期の緑釉小皿、28は古瀬戸後期の壺もしくは瓶である。30～32はSD23出土遺物で、30は古瀬戸後期の緑釉小皿で、釉薬は多くが剥落する。31は古瀬戸後期の平碗、32は15世紀後半～16世紀初頭のかわらけである。32は緻密な胎土で、器高が短く口縁は外反する。特に内面が黒色化することから、灯明皿として使用されたもの。

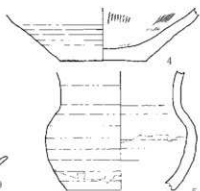
33～47は遺構外出土遺物である。33・34は2区の遺構検出時に出土した遺物で、33は古瀬戸後期の天目茶碗、34は古瀬戸後期の壺である。35・36は6トレンチ出土遺物で、35は大窯の端反皿もしくは丸皿、36は15世紀～16世紀の内耳鍋である。37は8トレンチ出土の15世紀後半～16世紀初頭のかわらけである。平底で器高が短い。内外面に黒色付着物があり、土器の色調は褐色～赤褐色化する。38～42は3区出土遺物で、38は古瀬戸後期の緑釉小皿、39は古瀬戸後期の甕、40は大窯の丸皿、41は遺構検出時に出土した古瀬戸後期の天目茶碗で、42は内耳鍋の底部である。43～45は4区の遺構検出時に出土した遺物である。43は15世紀後半の青磁碗、44は古瀬戸前期の御皿、45は青磁碗である。46・47は近世陶磁器である。46は近世後半の丸碗、47は3区の遺構検出時に出土した近世後半のすり鉢である。

2 土製品

SD22から土玉1（第121図）が出土している。長さ46mm、幅38mmのやや細長い形状で、表面は平滑に整形されている。胎土には斜長石、石英と微細な黒雲母がみられるため地元の素地土を用いているとみられるが、鬼釜遺跡の胎土1類（別表第3表）よりも砂のサイズが小さい。出土遺物の時期から、中世とみられる。

中世土器・陶磁器

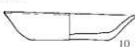
SB01



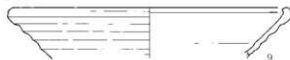
ST01



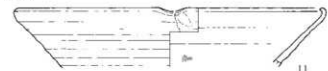
ST08



ST05



ST12



ST1004



SK03



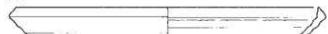
SK51



SK71



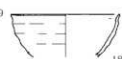
SK90



SK95



SK109



SK180



SK184



SK1020



SK1028



SK1028



SD08



SD17



SD17



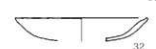
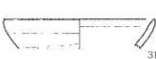
SD22



SD19



SD23



遺構外 2区



3区



4区



近世陶磁器

4区



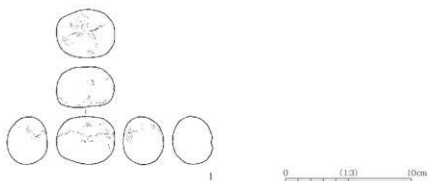
3区



0 (1/4) 10cm

第120図 土器・陶磁器実測図

土製品
土玉
SD22

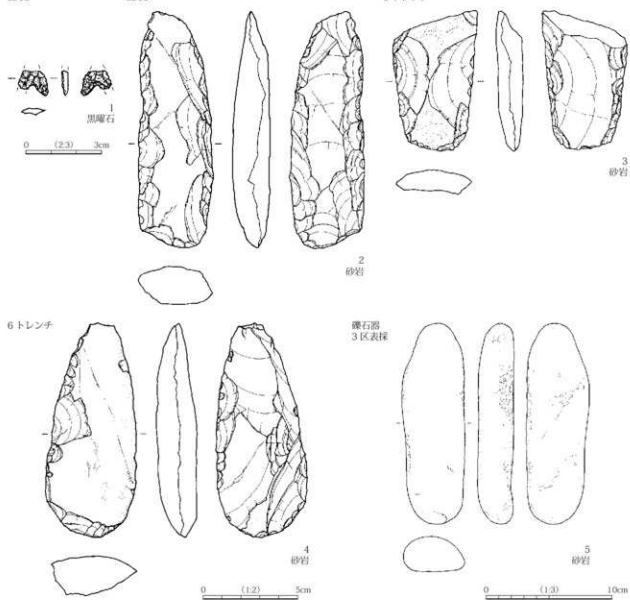


第121図 土製品実測図(土玉)

石鏃
SD03

打製石斧
SD05

5トレンチ



第122図 石器実測図(石鏃・打製石斧・礫石器)

3 石器・石製品

本遺跡からは石鏃1点と打製石斧4点、礫石器1点が出土している（第122図1～5他）。石鏃はSD03から出土した1で、黒曜石製である。小形剥片の両面に押圧剝離を施した無茎石鏃で、先端は欠損している。

打製石斧は砂岩製である。SD05から出土した2、5トレンチから出土した3ともに短冊形で、大形剥片に対し器面の両側に剝離を施しながら長方形に整えている。形状から縄文時代に属するとみられる。6トレンチから出土した4は礫素材の片面に剝離することによって上端を細い短冊形に整えている。刃部には使用による摩耗が認められる。この他SK46からは長方形の礫素材の片面に剝離がなされて、先端には微細剝離が認められる打製石斧が1点出土している。

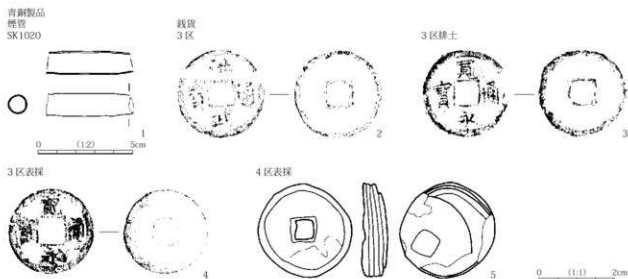
礫石器5は3区表採品で、砂岩製の礫であり、かまぼこ形の断面形状を呈する。形状から、こも編み石と推測される。上端部に弱い敲打痕がみられ、表面が摩耗しているため、敲き等を伴う作業にも使われた可能性がある。

4 金属製品

本遺跡からは青銅製品が9点出土した（第123図1～5）。鉄製品は出土していない。すべて長野県立歴史館でX線透過撮影（電圧62～78kvp、電流5mA、撮影時間60秒、距離840mm）を実施し、その結果に基づき、応急的な保存処理を実施した。

SK1020から煙管（キセル）1が出土している。煙管部のみで両端の雁首部と吸口部は残存していない。

銭は8点出土している。うち5枚は相互に付着している。3区から出土した2は洪武通寶、3区から出土した3と3区で表採された4は寛永通寶である。4は「寛」と「寶」の字体から寛文8年（1668）初鋳の「新寛永」以降に属し、裏面に文字や図柄はみられない。4区で表採された5は5枚の銭同土が付着して出土したため、剥がしを含めた保存処理を試みたが、それによって原形が失われる可能性が高いため断念した。両外側の2枚とも腐食のため、文字内容は不明である。



第123図 金属製品実測図（煙管・銭貨）

5 木製品

本遺跡からは板材、杭などの木製品が12点出土し、8点を図化して報告した(第124図1~6、第125図7・8)。そのほかに若干の自然木も出土した。

SK388からは2点の木製品が出土している。1は厚手の板材の片側に3箇所の抉りを入れた製品で、正面右下には抉りによって突起部が作出されている。何らかの建築部材を転用している可能性もある。2は棒状品で上下が鋭角に削られている。

SK392からは大形の木枠の部材が6点出土した。北西側から時計回りに7・5・8・6の順に方形に設置されている(第117図)。設置方向は5・6・7・8ともに、面取り加工がなされた側面(何れも実測図表面の下側)を下にして埋め込まれていた。厚さの違いがあるが、4点とも板目の板材で、中央部から反対側面(実測図表面の上側)にかけて削ぎ落とされている。また7は片側(実測図左側)に直径1cm程度の孔が2箇所貫通し、8にも片側(実測図左側)に直径6mmの孔が開く。何らかの建築部材を木枠に転用した可能性が考えられるが、本来の器種と用途は不明である。3と4は木枠8を支える杭である。丸心持材で片側に刃物による削りが施され、鋭く尖らせている。樹種同定は3・7・8のみ行い、3はモミ属、7・8はサワラであった。放射性炭素年代測定は3、6~8を行い6~8はおおよそ14世紀代、3は15世紀中頃~後半の年代が出されている(第5節参照)。

6 自然遺物

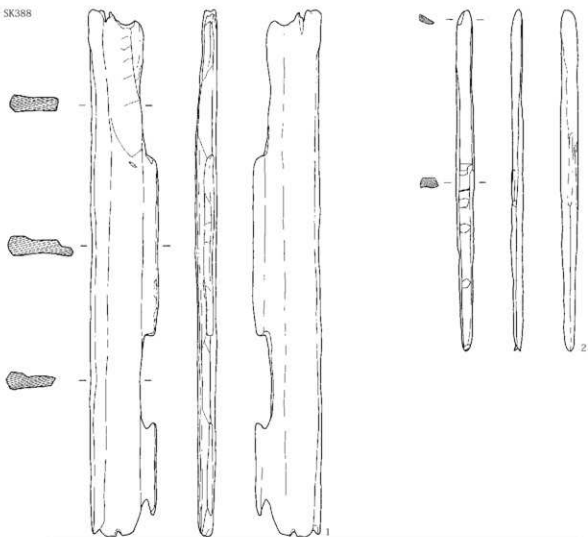
風張遺跡SD22から出土した骨1点の鑑定を、京都大学名誉教授茂原信生氏に依頼し、次の所見を得た。

出土した骨は、トリの左中足骨近位端(長さ約13mm、幅約10mm)の小片で、焼かれている。種は不明である。大きさは、焼かれてやや収縮していることも考えると、キジとほぼ同じ大きさである。

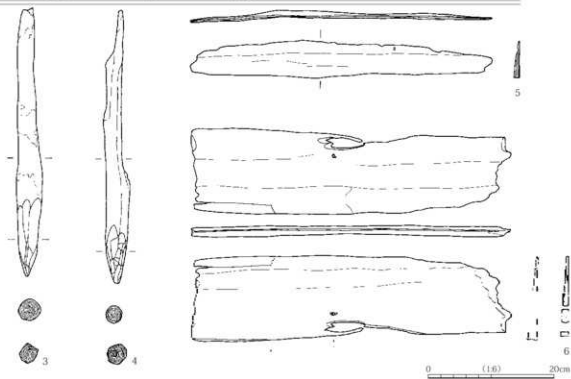


平成24年度 風張遺跡 発掘作業記念写真

SK388

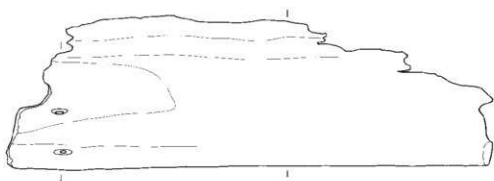
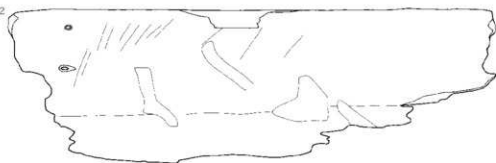


SK392

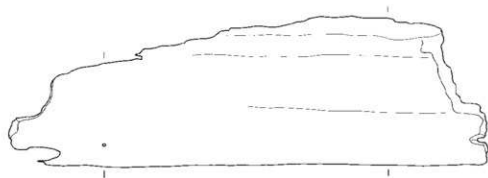


第124圖 木製品実測図 1

SK392



7



8

0 (1:6) 20cm

第125図 木製品実測図2

第5節 科学分析

1 分析目的

遺跡周辺の環境や、遺跡内での植物利用の様相を明らかにするため、土壤に関する分析として、花粉分析、珪藻分析、寄生虫卵分析、種実同定を行った。また、SK392出土の木製品を対象に樹種同定、放射性炭素年代測定を実施し、遺跡検討の資料とした。なお、陶磁器の接着剤と推測したSB01出土のすり鉢片の断面付着物について赤外分光分析と窒素・炭素安定同位体比分析を実施し、成分を探った。

2 分析試料・結果概要

分析試料は第15表のとおりである。分析結果の詳細は本報告書添付のDVDに収録した。ここでは、概要のみ記述する。

第15表 科学分析一覧

実施年度	分析対象試料	分析項目	委託先
24	SK392木製品付着土壌	花粉分析・珪藻分析	パリン・サーヴェイ團
	SK392木製品	放射性炭素年代測定、樹種同定	
	ST01P24ST01P23、SK1021 ST01P13、10225T01P14、 ST06P1-2-5	放射性炭素年代測定	
	SK28-181-184埋土	寄生虫卵分析、種実同定	
27	SB01出土すり鉢	赤外分光分析、窒素・炭素安定同位体比分析	徳古環境研究所

(1) 土壤分析について

分析結果の概要を第16・17表にまとめた。内容は古環境復元と遺構の性格を探るものである。

まず、分析結果から推測される古環境は次のとおりである。花粉分析において木本類ではマツ属が優占し、溪谷や河畦などの適湿地に生育する種の生育も伺えた。また、人里を好む草本類の分類群が検出され、周辺は草地植生の様相を示す。一方、遺跡周辺にコナラ属コナラ亜属を主要な構成要素とする落葉広葉樹と針葉樹の森林があったことが推定された。

次に、掘立柱建物跡もしくは溝跡に隣接する円形土坑の性格を推測するため、SK28・177・181・182・183・184の埋土を試料として実施した。分析の結果、寄生虫卵が検出された試料は1点で、消化残渣は検出されなかった。分析では遺構の性格を判断することができなかった。今後、飯田市域を含めた下伊那地域における事例と検討しつつ、今回分析対象とした遺構の性格を明らかにする必要がある。

(2) 放射性炭素年代測定と樹種同定について

各遺構から出土した炭化物の同位体効果による補正を行った測定結果（補正年代）および暦年較正結果を第18表にまとめた。分析結果から若干の所見を記す。

SK392は方形の土坑で、壁面4面に板材が設置されていた。板材3点（1～3）と板材を固定するために打設された木杭1点（4）を分析対象試料とした。2σ暦年較正値は、板材が1,348calAD-1,392calAD（57.3%）（1）、1,297calAD-1,374calAD（79.0%）（2）、1,351calAD-1,390calAD（55.0%）（3）である。木杭の2σ暦年較正値は、1,440calAD-1,503calAD（91.7%）である。本遺跡からは古瀬戸製品（後Ⅲ期・後Ⅳ期）と大窯製品（大窯1・2段階）が出土し、遺物の年代（生産年代）は15世紀前半～16世紀中頃とされる（藤澤2002、2008）。遺物の年代観と木杭の測定値は近似しているといえよう。なお、板材は木杭よ

り約1世紀古い年代を示すことから、設置する以前に伐採されていた木材を再利用したなどの推測もできる。

なお、利用された板材および木杭について樹種同定を行い、板材はサワラ、木杭はモミ属との同定結果であった。サワラは耐水性の高い木材として利用され、中部山地に分布する樹木で、入手しやすい木材として使われたと考えられる(第19表)。

ST01 P24 (ST01P2)・SK1021 (同 P13)・SK1022 (同 P14)、ST06 P1・2・5は、柱痕跡から出土した炭化物を試料とした(5~10)。2σ 暦年較正值は、ST01が¹1,447calAD-1,522calAD (72.8%) (5)、1,279calAD-1,313calAD (54.3%) (6)、1,443calAD-1,521calAD (81.7%) (7)である。ST06の2σ 暦年較正值は、1,413calAD-1,445calAD (100%) (8)、1,554calAD-1,633calAD (50.1%) (9)、1,354calAD-1,389calAD (51.0%) (10)である。ST01・06とも暦年代にばらつきが認められ、その時代幅は13~17世紀となる。対象試料の採取方法や後世の汚染、さらに柱穴との判断に誤りがあった可能性も考えられ、課題として残された。

(3) 赤外分光分析と炭素・窒素安定同位体比分析について

出土したすり鉢に付着した黒色物を試料とした。赤外分光分析の結果は、アスファルトと同定された。炭素・窒素安定同位体比分析(第20表)では、概ねC3植物由来と判断された。

第16表 科学分析結果表1

	試料形態	花粉分析結果	珪藻分析結果
SK392	木枠 (No6) 付着土壌	マツ属が最も多産。次いでツグ属。その他ではモミ属、トウヒ属、スギ属、カバノキ属、コナラ属コナラ属などを作る。基本花粉ではイネ科が優先し、カヤツリグサ科、ソウ属、アカガク科、ナデシコ科、ミモキ属、キク属科、タンポポ科などが伴う。多産したイネ科の中には、栽培種であるイネ属に類する形態を示すものも含まれていたが、割合は少ない。	淡水生種のみ、発生地帯の <i>Hantzschia amphioxys</i> , <i>Luticola muica</i> , <i>Pinnularia borealis</i> , <i>Pinnularia subcapitata</i> などがわずかに検出された。
SK392	木枠 (No7) 付着土壌		淡水生種のみ、発生地帯の <i>Caloneis acrophila</i> , <i>Hantzschia amphioxys</i> , <i>Pinnularia borealis</i> などがわずかに検出された。

(株) パリノ・サーヴェイ (株) 報告書を編集

第17表 科学分析結果表2

番号	試料採取遺構	試料形態	分析数	着生虫分析結果
1	SK26	埋土	1	着生虫および明らかな消化残渣は検出されない。
2	SK177	埋土	3	1点からわずかに虫卵が検出。明らかな消化残渣は検出されない。
3	SK181	埋土	1	着生虫および明らかな消化残渣は検出されない。
4	SK182	埋土	1	着生虫および明らかな消化残渣は検出されない。
5	SK183	埋土	1	着生虫および明らかな消化残渣は検出されない。
6	SK184	埋土	2	着生虫および明らかな消化残渣は検出されない。

(株) 古環境研究所報告書を編集

第18表 放射性炭素年代測定結果表

番号	採取場所	層名	試料形態	補正年代 (yr BP)	補正年代 (暦年助正用) (yr BP)	1σ 暦年年代範囲	2σ 暦年年代範囲	測定番号
1	SK392	-	板材 (No.4)	640 ± 20	644 ± 22	1,293calAD-1,399calAD(37.0%) 1,361calAD-1,386calAD(63.0%)	1,285calAD-1,322calAD(42.7%) 1,348calAD-1,392calAD(57.3%)	IAAA-123411
2	SK392	-	板材 (No.6)	610 ± 20	613 ± 22	1,302calAD-1,325calAD(48.0%) 1,344calAD-1,366calAD(40.1%) 1,383calAD-1,394calAD(19.3%)	1,297calAD-1,374calAD(79.0%) 1,375calAD-1,399calAD(21.0%)	IAAA-123412
3	SK392	-	板材 (No.7)	650 ± 20	651 ± 22	1,290calAD-1,306calAD(40.1%) 1,363calAD-1,385calAD(59.9%)	1,283calAD-1,319calAD(45.0%) 1,353calAD-1,390calAD(55.0%)	IAAA-123413
4	SK392	-	木杭 (No.2)	400 ± 20	403 ± 21	1,446calAD-1,478calAD(100.0%)	1,440calAD-1,503calAD(91.7%) 1,506calAD-1,511calAD(1.0%) 1,602calAD-1,615calAD(7.2%)	IAAA-123414
5	ST01P24 (ST01P2)	2	炭化材	380 ± 20	379 ± 22	1,453calAD-1,496calAD(74.8%) 1,507calAD-1,511calAD(3.4%) 1,601calAD-1,615calAD(21.8%)	1,447calAD-1,522calAD(72.8%) 1,574calAD-1,625calAD(27.2%)	IAAA-123415
6	SK1021 (ST01P13)	2	炭化材	670 ± 20	666 ± 21	1,285calAD-1,301calAD(55.7%) 1,367calAD-1,382calAD(44.3%)	1,279calAD-1,313calAD(54.3%) 1,353calAD-1,388calAD(45.7%)	IAAA-123416
7	SK1022 (ST01P14)	2	炭化材	390 ± 20	388 ± 22	1,449calAD-1,491calAD(87.7%) 1,603calAD-1,610calAD(12.3%)	1,443calAD-1,521calAD(81.7%) 1,578calAD-1,581calAD(0.3%) 1,591calAD-1,620calAD(18.0%)	IAAA-123417
8	ST06P1	1	炭化材	490 ± 20	485 ± 23	1,422calAD-1,439calAD(100.0%)	1,413calAD-1,445calAD(100.0%)	IAAA-123418
9	ST06P2	1	炭化材	360 ± 20	356 ± 22	1,472calAD-1,521calAD(58.2%) 1,591calAD-1,621calAD(4.4%) 1,422calAD-1,442calAD(37.4%)	1,455calAD-1,527calAD(49.9%) 1,554calAD-1,633calAD(50.1%)	IAAA-123419
10	ST06P5	1	炭化材	660 ± 20	659 ± 22	1,287calAD-1,303calAD(48.0%) 1,365calAD-1,383calAD(52.0%)	1,281calAD-1,316calAD(49.0%) 1,354calAD-1,389calAD(51.0%)	IAAA-123420

◎採取場所 () 内は現場呼称

パリン・サーヴェイ (株) 報告書を編集

第19表 樹種同定結果表

採取場所	試料形態	木取	種類 (分類群)
SK392	板材 (No.4)	板目	サクラ
SK392	板材 (No.6)	板目	サクラ
SK392	木杭 (No.2)	芯持丸木	モミ属

パリン・サーヴェイ (株) 報告書を編集

第20表 窒素・炭素安定同位体分析結果表

番号	遺物種類	遺物時期	出土遺構	取り上げ番号	分析対象試料	$\delta^{13}\text{C}_{\text{org}}$ (‰)	$\delta^{15}\text{N}$ (‰)	炭素含有量 (%)	窒素含有量 (%)	C/N 比
1	古瀬戸 すり鉢	15世紀	S801	No.4-10,12	断面の黒色付着物	-28.1	8.67	66.4	1.3	59.6

(株) 古環境研究所報告書を編集

第6節 小 結

風張遺跡の調査では、東から西方に緩やかに傾斜する台地上に、掘立柱建物跡を中心とした集落が形成されていることが明らかとなった。調査では、平安時代以前の土器が出土していないことから、中世以降に形成された集落と推測する。また、遺構内から出土した土器・陶磁器は、古瀬戸製品と大窯製品が大半を占め、遺物の小期（藤澤2002、2008）は古瀬戸後IV期～大窯1段階もしくは2段階であることと、煙管が出土した土坑（SK1020）があることから、1440年～1560年（古瀬戸後IV（古）の開始時期～大窯3段階の開始時期、年代観は藤澤2002、2008）を主体として近世まで存続した可能性があると推測する。

以下、今回確認した遺構から、台地上の土地利用について考えることとする。

今回確認した掘立柱建物跡には、総柱の建物跡と側柱の建物跡がある。また、各建物跡には主軸のずれがある。建物の構造と主軸から、大きく3種類に分けることができる（第126図）。

第1グループは、平面形が正方形もしくは長方形で、ST02・04・05・13・1003が該当する。主軸が若干北に振れるST02以外は、地形の傾斜に直交もしくは平行する。特に、ST04・05・13・1003は、建物跡の南東側短辺が直線的に揃うことから、構築時に一定の規則性が存在したと推測できる。なお、ST04と05は重複していることから、第1グループの建物には時期差が存在する。

第2グループは、平面形が正方形もしくは長方形で、側柱の建物跡である。ST10～12・1001・1002・1004が該当する。第2グループの掘立柱建物跡は、主軸が若干北に振れるST1004以外は、地形の傾斜に直交もしくは平行する。ST10と11は重複することから、第2グループの建物に時期差が存在する。

第3グループは、平面形が正方形で、総柱の建物跡である。4間×4間のST01・06、3間×2間のST08が該当する。主軸方向は、ST01・08は地形の傾斜と直交もしくは平行するが、ST06谷状地形の傾斜方向より若干北側に振れる。

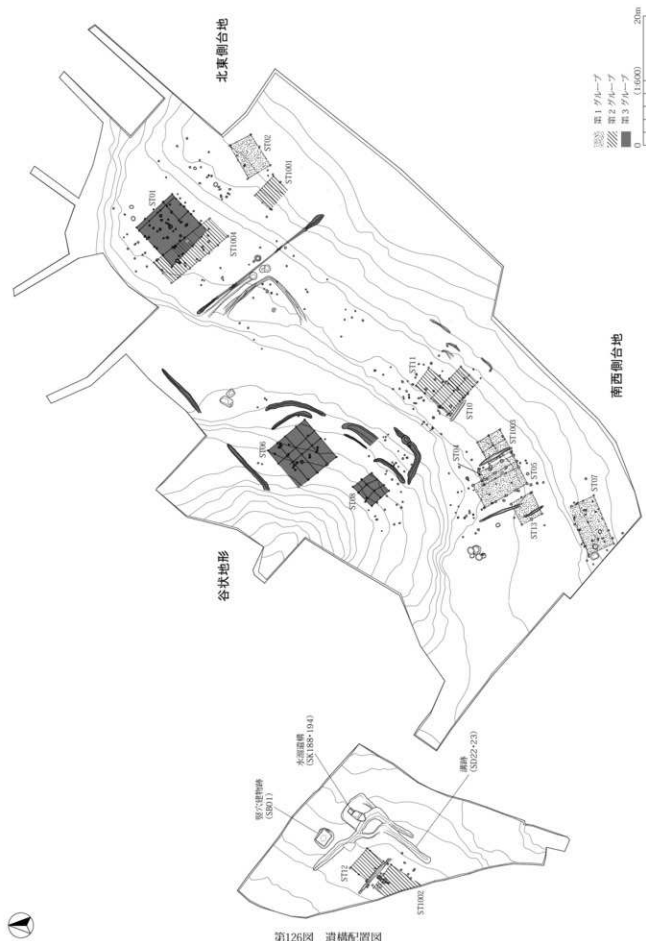
次に、上記した3グループの分布状況について触れる。

今回確認した遺構が①北東側台地、②南西側台地、③谷状地形、3箇所にまとまることを前記（第4章第1節）したが、北東側台地に第1グループ（ST02）と第2グループ（ST1001・1004）、第3グループ（ST01）、南西側台地に第1グループ（ST04・05・07・12・1002・1003）と第2グループ（ST10・11）、谷状地形に第3グループ（ST06・08）が立地する。

グループ間の新旧関係について触れると、第1グループと第3グループには重複があり、ST01がST1004を切る。第2グループの建物跡は、第1グループもしくは第3グループの建物跡と重複しない。これら重複から、風張遺跡の集落は、第3グループのST01が最も新しいものといえよう。

風張遺跡のST06・08・10・11には、建物の背後（斜面上方）にL字状の溝跡が掘削されている。中世の城郭遺跡や集落遺跡では、傾斜地に建物跡を構築する際に、地山を掘削して平地地をつくり出しており、そこに構築した建物の背後には排水用の溝跡が掘削されている（大河内ほか1994）。竜東では、このような事例が16世紀の集落である井戸端遺跡から確認されている（河西ほか2012）。風張遺跡では、現在の耕作土（基本土層Ⅰ層）や近世の水田層（基本土層Ⅱ層）の影響により、建物構築に伴う平地は遺存しないが、中世以降、傾斜地に建物を構築する際には、平地地と建物背後の溝跡がセットになって構築されたと推測される。

掘立柱建物跡以外の遺構では、竪穴建物跡（SB01）と溝跡（SD22・23）・水溜施設（SK188・192）が注視されるが、これらは近接する掘立柱建物跡との関係から、第2グループに属するものと推測される。



引用・参考文献

- 飯田市教育委員会1998『飯田の遺跡-市内遺跡詳細分布調査報告書-』
- 飯田市教育委員会2015『飯田市埋蔵文化財包蔵地地図（市内遺跡詳細分布調査報告書）』
- 大河内勉ほか1994『神奈川県・鎌倉市 玉縄城跡発掘調査報告書-植木字相模陣374他香地-』玉縄城跡発掘調査班
- 岡田正彦ほか1992『上久堅村誌』上久堅村誌編纂委員会
- 岡本直久ほか2015『古瀬戸後期の様相-古瀬戸系施釉陶器窯の成立と展開-』平成26年度公益財団法人瀬戸市文化振興財団 企画展図録
- 河西克造2012『飯田市鬼釜遺跡・鬼釜古墳の発掘調査概報』『伊那』通巻第1007号 第60巻第4号
- 河西克造2013『飯田市神之峯城跡・風張遺跡の発掘調査概報』『伊那』通巻第1019号 第61巻第4号
- 河西克造ほか2012『国道474号（飯高道路）埋蔵文化財発掘調査報告書 5-飯田市内その5-井戸端遺跡・下村遺跡（鶯ヶ城跡）・芦ノ口遺跡』長野県埋蔵文化財センター
- 金子健一2015『戦国時代の瀬戸窯-古瀬戸から大窯へ-』平成27年度公益財団法人瀬戸市文化振興財団 企画展図録
- 長野県埋蔵文化財センター2012『長野県埋蔵文化財センター年報』29
- 中野晴久ほか2012『愛知県史』別編 窯業 3 中世・近世 常滑系 愛知県史編纂委員会編
- 藤澤良祐2002『瀬戸・美濃大窯編年の再検討』『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10号
- 藤澤良祐2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院

第5章 神之峯城跡

第1節 遺跡と調査の概要

1 遺跡の概観

(1) 遺跡範囲と地形

神之峯城跡は天竜川左岸の飯田市上久堅地区に所在する。上久堅地区は、尾根と谷が入り組む山間地で、城跡は上久堅地区の中の北側にある標高771mの独立丘陵に立地する。独立丘陵の北西側山麓には玉川、北東側には細田川が流れており、細田川の対岸には風張遺跡と龍源寺跡がある。

神之峯城跡の山頂部には本丸・二の丸、堀切などの城郭遺構が明瞭に残るが、埋蔵文化財包蔵地の範囲は山頂部だけではなく、独立丘陵のほぼ全域に及んでいる（市教委1998、第127図）。今回の調査対象地は独立丘陵の北から北西側にあたる。そこは、山頂部から山麓に向かう尾根と谷とが複雑に入り組む地形であった。

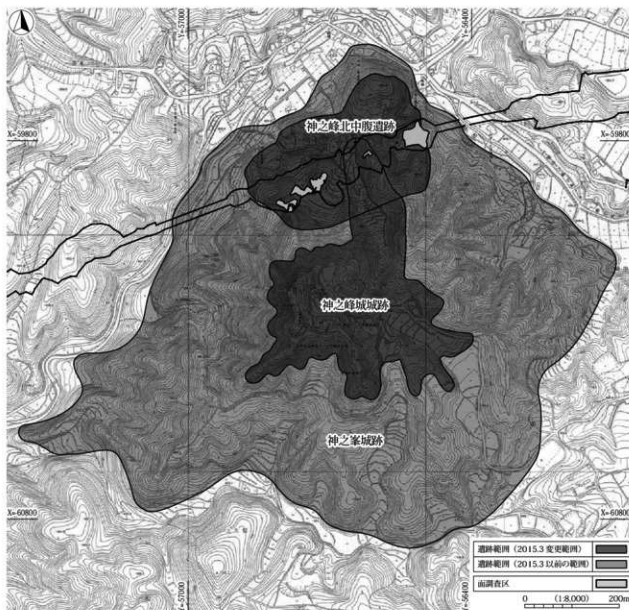
平成27年度3月、市教委によって埋蔵文化財包蔵地地図が改訂された。その結果、城郭遺構が明瞭に残る山頂部とそこから北側に派生する尾根を含む範囲が「神之峰城跡」、北西側の中腹は「神之峰北中腹遺跡」となった（市教委2015）。調査対象地の1区と3区が「神之峰北中腹遺跡」、2区は両遺跡にまたがっている。本報告では、発掘作業開始時点の遺跡名「神之峯城跡」を使用して記述する。

(2) 神之峯城跡についての記録、伝承

神之峯城は、伊那谷の天竜川左岸を中心とした国人領主知久氏の本城に比定される（信濃史料刊行会1974）。知久氏は諏訪氏の分流で、上伊那郡路原庄にある上ノ平（現上伊那郡箕輪町東箕輪）に居を構えていた（市村成人氏は上ノ平城跡に比定）が、承久の乱の軍功により下伊那郡伴野庄へ移り知久平（現飯田市下久堅）に居住したとされている（市村ほか1970）。その後、本拠を知久平から神之峯城に移したが、入城時期を示す文献史料は確認されていない。

天文2年(1553)、京都醍醐寺理性院の厳助僧正が結縁灌頂の大盛儀を行う目的で文永寺(飯田市下久堅)へ下向したときの記録（『信州下向記』、信濃史料刊行会1958）によると、厳助僧正は輿に乗って神之峯城へ登り、知久頼元の手厚い待遇を受けている。天文23年(1554)には、武田信玄が知久郷に攻め入り、知久頼元等を甲斐に流している（『勝山記』信濃史料叢書刊行会1958）。その際、武田軍は知久郷を悉く放火した（『厳助往年記』信濃史料叢書刊行会1958）。従来、この事象は武田信玄が神之峯城を攻城し、落成したと理解されている（岡田ほか1992等）。また、武田氏滅亡後の天正10年(1582)、信濃を支配した織田信長が諏訪大社上社権祝矢嶋氏にあてた書状に、知久氏が神之峯城へ復帰したことが記載されている（『矢嶋文書』、信濃史料刊行会1969）。したがって、少なくとも1533年から1582年の間は神之峯城が存続していたことがわかる。

神之峯城跡の山頂部、現在久堅神社が鎮座する場所の小字は「神峯」で、山頂部より一段下がった平坦地には「北小ヤ」、「寺ヤシキ」、北西中腹に「法新院」、「新慶」などの小字が残る（第207図）。市村成人氏はこれら小字と地形を根拠として、18箇所の寺院が存在したことを推定し、「知久十八ヶ寺」と呼称した（市村1925）。今回の調査対象地には、「法心院」と「新慶寺」の推定地がある。



第127図 神之峯城跡 遺跡範囲図

(3) 神之峯城跡の現状と過去の調査

神之峯城跡の本丸や二の丸など主要な城郭遺構は独立丘陵の山頂部に遺存し、飯田市史跡に指定されている。曲輪内には各社の放送施設や久堅神社があるものの、これまで本格的な発掘調査が行われた記録はない。また、山頂部から一段下がった場所（北小ヤ）に広大な平坦地があり、岡田正彦氏は知久氏が居住した場所と推定している（註1）。

一方、山頂部から麓にかけては主として森林や水田である上に、これまで考古学的な調査が行われていないため、城郭遺構の有無については不明な点が多い。ただ、事前の踏査（地表面観察）では各所で平坦地を確認した。

2 調査の概要

(1) 調査区の設定と安全対策

調査対象地内には山頂部から麓に派生する3本の尾根がある。西側の尾根を1区、中央を2区、東側を3区と呼称した。各地区内は平坦地の有無や地形的な差異を基準に、1-1区、1-2区、1-3区と細分地



第128図 神之峯城跡 地区設定図

区を設定した(第128図)。この地区名は、現場で記録した図面・写真には全て記載した。

調査対象地は傾斜地であったため、安全対策施設として転落防止柵、土砂流出防止柵を設置するとともに、現場保全や作業効率を考え蛇腹管やコンクリートシューターを設けた。蛇腹管は現場内の雨水を場外へ流出させるために、コンクリートシューターは平坦地で発生した排土を斜面下方に処理するために有効であった。

(2) 遺跡踏査と平坦地の記録方法

調査対象地は、既存の縄張り図(郷道1980、宮坂1999)で平坦地が数箇所描かれているのみであったが、発掘調査前の踏査(地表面観察)により自然の地形傾斜から逸脱した数多くの平坦地を確認することができた。その様態は、1区においては階段状、2区では堀状の窪みと平坦地、3区では広大な平坦地と階段状の平坦地に分けられる。現況は森林(雑草地)もしくは田畑に利用されているが、城郭遺跡内にあるため曲輪の可能性を想定し、これらに番号を付けて以後の調査対象とした。

踏査の結果は、平坦地の略図を作成するとともに写真でも記録した。また、森林等の伐採後、1区と2区では空中写真から現況測量図を作成した。図面の縮尺は1:500、等高線は20cm間隔である。平坦地の略図と現況測量図を元に平坦地認識図を作成し、調査時に使用した。

(3) 遺構確認調査(トレンチ調査)

平坦地が人工的に形成されたものか、また、平坦面に遺構・遺物があるかを確認するため、まず遺構確認調査を行った(第129図)。その結果、1区は27箇所中9箇所、2区は8箇所中2箇所、3区は5箇所中3箇所の平坦地を面調査の対象とした。なお、斜面は全て自然地形であり遺構も確認できなかったため、面調査範囲から除外した。

遺構確認調査では、トレンチの位置と土層断面を記録した。

(4) 調査課題の設定

神之峯城跡の調査対象地は、山頂部の主要な曲輪群から直線距離にして約500m離れた中腹部にあり、山麓の城下町でもない。したがって、調査対象地にある平坦地で確認できる遺構・遺物を通じて帰属時期と性格を判断し、国人領主が本拠とする城郭が立地する独立丘陵中腹がどのように利用されていたかを捉えることを調査課題とした。

(5) 平坦地の調査結果

平坦地で面調査を実施した結果を第21表に示した。詳細は第21表を参照願いたい、平坦地の多くに近世以降の耕作土が堆積しており、その下層から近世遺構もしくは中世遺構が確認された平坦地がある。尾根に位置する平坦地6は、尾根を削平して平坦地を形成した後に、掘立柱建物跡などの近世遺構を構築している。谷状地形では、平坦地7のように、谷状地形を埋めて平坦地を形成した後に中世遺構を構築し、その上層には近世遺構を構築していた。また、平坦地301では、中世遺構が谷状地形のなかに構築されており、ほぼ谷状地形が埋まった後に近世遺構を構築している。

神之峯城跡の調査では、中世には谷状地形、近世には尾根と一部谷状地形が利用されており、利用に際しては地山を削平するなど改変されていたことが明らかとなった。

註

1) 調査時に岡田正彦氏から教示された。なお、河西も同様に解釈している。



第129図 神之峯城跡 調査範囲図

第21表 平坦地の調査結果表

地区	平坦地名	調査年度	確認した主な遺構 (-)は遺構未確認	現代の土地 利用	平坦地が 位置する地形	出土遺構と土層堆積状況からの調査所見
1区	平坦地1	平成24年度	(-)	原野か	尾根	
	平坦地2(西)	平成24年度	中世以降：溝跡	畑	尾根	溝跡発露後、近世以降は耕作地
	平坦地2(東)	平成24年度	中世：墓坑 中世以降：溝跡	畑	尾根	墓坑と溝跡発露後、近世以降は耕作地
	平坦地3	平成24年度	(-)	原野か	尾根	
	平坦地4	平成24年度	(-)	畑	尾根	近世以降は耕作地
	平坦地5	平成24年度	(-)	畑	尾根	
	平坦地6	平成24年度	近世：竪立柱建物跡、櫓 列、土坑、溝跡	畑	尾根	近世に尾根を削平して平坦地を形成。遺構を構築
	平坦地7	平成24年度	中世：礎石建物跡、土坑、 溝跡 近世：溝跡、石列	畑	谷状地形	谷状地形を埋めて中世遺構を構築。近世には、中世遺構の上層に近世の屋敷地を形成。その上層は耕作地
	平坦地13	平成24年度	近世以降：溝跡	畑	尾根	近世に傾斜地を削平。盛土で平坦地を形成
	平坦地14	平成24年度	(-)	畑	尾根	傾斜地を削平し平坦地を形成。時期は近世以降と推定
	平坦地15	平成24年度	(-)	畑	尾根	傾斜地を削平し平坦地を形成。時期は近世以降と推定
	平坦地16	平成24年度	(-)	畑	尾根	
	平坦地18	平成24年度	(-)	原野か	尾根	
	平坦地23	平成24年度	(-)	畑	尾根	
平坦地24	平成24年度	(-)	畑	尾根		
平坦地27	平成25年度	近世：竪立柱建物跡、土 坑、溝跡	畑	尾根	近世に屋敷地を形成。その上層に耕作地。近代に宅地	
2区	平坦地201	平成25年度	近世以前：堀、近世：石垣 み遺構、土坑	原野・墓地	原野・墓地	尾根筋の堀切を掘削。堀切発露後、石垣み遺構と土坑を構築
	平坦地203	平成25年度	(-)	畑	尾根	
	平坦地206	平成25年度	(-)		尾根	
	平坦地207	平成25年度	(-)	畑か	尾根	
3区	平坦地301	平成25年度	中世：土坑、溝跡 近世以降：竪立柱建物跡、土 坑、溝跡	畑・墓地	尾根 (谷状地形分 あり)	谷状地形的に平坦化し、土坑を構築。水田耕作も行う。近世 には谷状地形的表面を削平し、削平土が谷状地形に埋まる。 屋敷地を形成
	平坦地302	平成25年度	(-)	畑	谷状地形	
	平坦地303	平成25年度	(-)	畑	谷状地形	

第2節 1区の遺構

1 概要

1区は、神之峯城跡の調査対象地内の西側にあたり、神之峯城跡が立地する独立丘陵の山頂部から裾に延びる尾根と、東西の谷状地形を含む。調査の便宜上、この中を7小地区に細分した(第128図)。

平成24年度、調査前に1区内の踏査(地表面観察)を行ったところ、上記した尾根と尾根両側の谷状地形で数多くの平坦地を確認した。その平坦地を示したものが第130図である。尾根のなかで最も標高が高い場所では、階段状に平坦地が展開する状況を確認し、人為的につくり出した平坦地であると考えた(平坦地1~27)。調査前に記録した現況測量図が第131図である。

発掘作業は、トレンチ調査から着手した。上記した平坦地が人為的につくられたものか否かをトレンチ調査で推定し、その平坦地について面調査を実施した(第132~133図)。なお、1~3区と呼称した谷状地形には、斜面上方から下方に流れる河川がある。河川近接地にトレンチを掘削した結果、砂層が重層的に堆積する河道跡が確認された。河道跡の時期は不明である。

2 基本土層(第134図)

調査対象地内は、尾根と谷状地形が複雑に入り組む地形である。土地利用が各所で異なっていたため、遺構の確認状況や遺物の出土状況、さらには土層堆積状態に違いが見られた。したがって、調査時に基本土層を確定することが困難であった。そこで、整理作業時に1区内に堆積する土層や確認された遺構・遺物から再検討して基本土層を作成した。基本土層は、1区のなかで標高が高い平坦地4と、中世遺構と近世遺構が確認された平坦地2(東)と平坦地7(谷状地形)、近世遺構が確認された平坦地6で記録した土層断面図を用いて作成した。なお、Ⅱ層~Ⅶ層は平坦地7にのみ堆積する層、Ⅷ層が1区全域に堆積する。基本土層と調査面との関係であるが、平坦地7は谷状地形のため1面調査面~4面調査面があるが、それ以外の平坦地は1面(Ⅷ層上面)である。

神之峯城跡1区基本土層

I層：I層は、近世以降に堆積し、現在まで使用されていた耕作土である。踏査(地表面観察)で確認された平坦地の大半に堆積する。I層は、色調と土質の違いから、I1層とI2層に分層される。

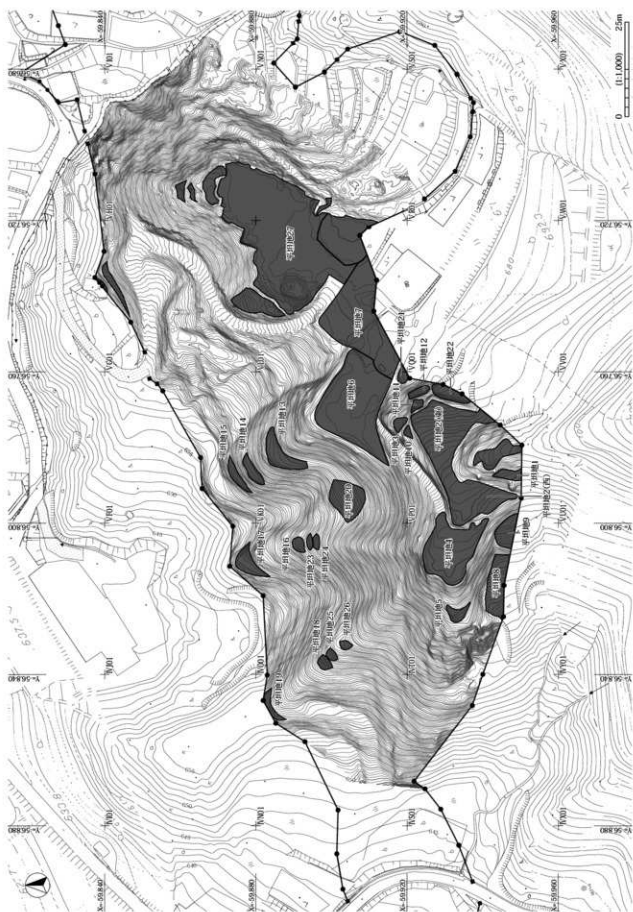
I1層：10YR 5/4 にぶい黄褐色。砂質で、花崗岩粒が混入する。踏査(地表面観察)で確認された耕作土(畑)。

I2層：10YR 5/3 にぶい黄褐色。花崗岩風化層のブロックと花崗岩粒が混入する。I1層耕作に伴う耕作痕跡に埋まる層。

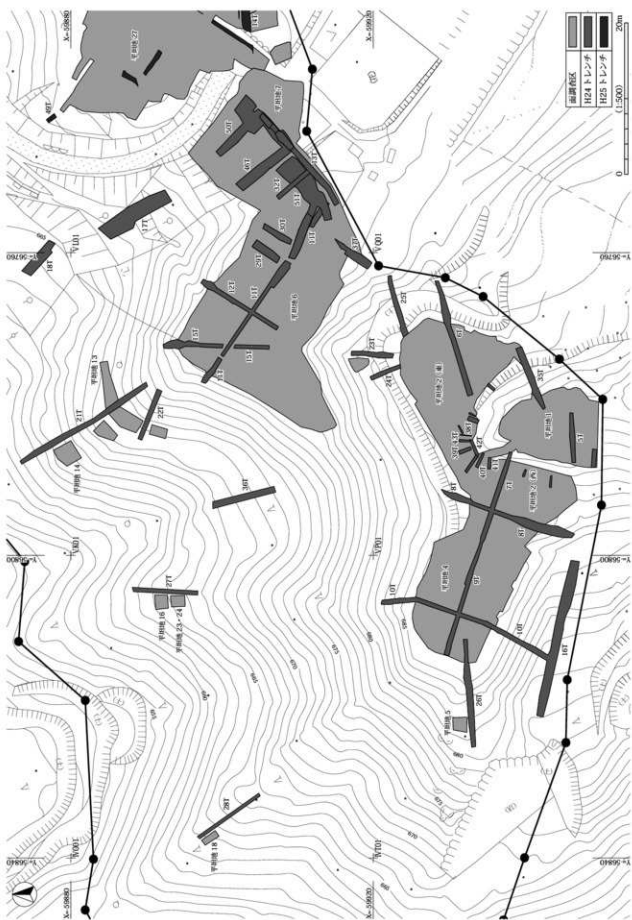
Ⅱ層：2.5Y 5/2 暗黄褐色。平坦地7に堆積する層。花崗岩風化層と考えられるにぶい黄褐色土ブロックが混入。グライ化し、粘性があり、若干しまりあり。土質から水田層と推測される。

Ⅲ層：10YR 5/2 灰黄褐色。平坦地7に堆積する層で、古瀬戸製品等の中世陶磁器と18世紀末~19世紀初頭の陶磁器が出土していることから、本層上面で確認した遺構は近世以降と推定できる。花崗岩粒と黄褐色ブロックが多く混入することから造成土と推定した。平坦地7における近世遺構検出層(平坦地7の1調査面)。本層上面を下げた検出面が2調査面。

Ⅳ層：10YR 5/2 灰黄褐色。平坦地7に堆積する層で、大窯の丸皿(非揚載)が出土した。花崗岩粒と黄褐色ブロックが混入。砂が多量に混入することから、人為的に盛られた層と推測した。



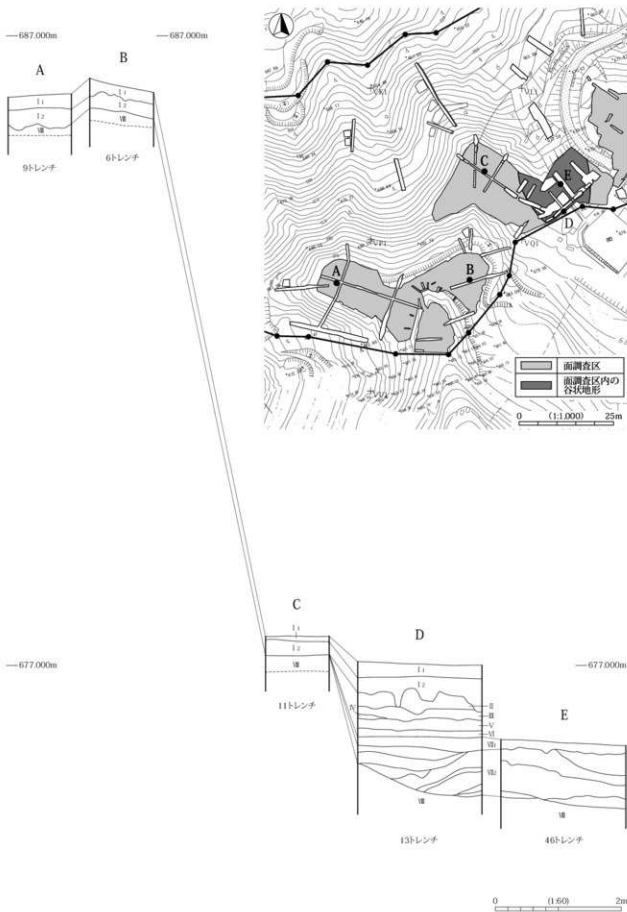
第130图 1区平坦地認識図



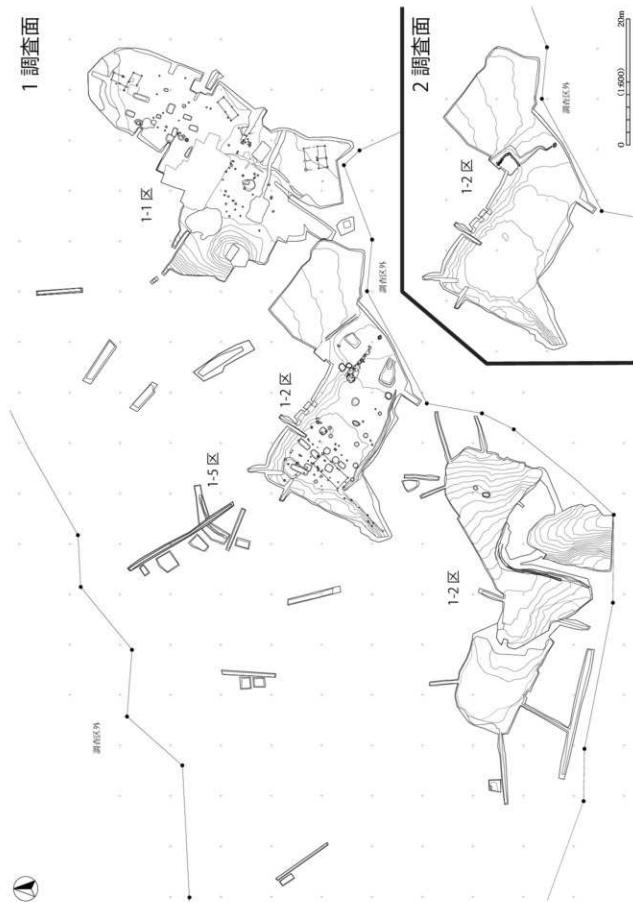
第132図 1区トレンチ配置図1



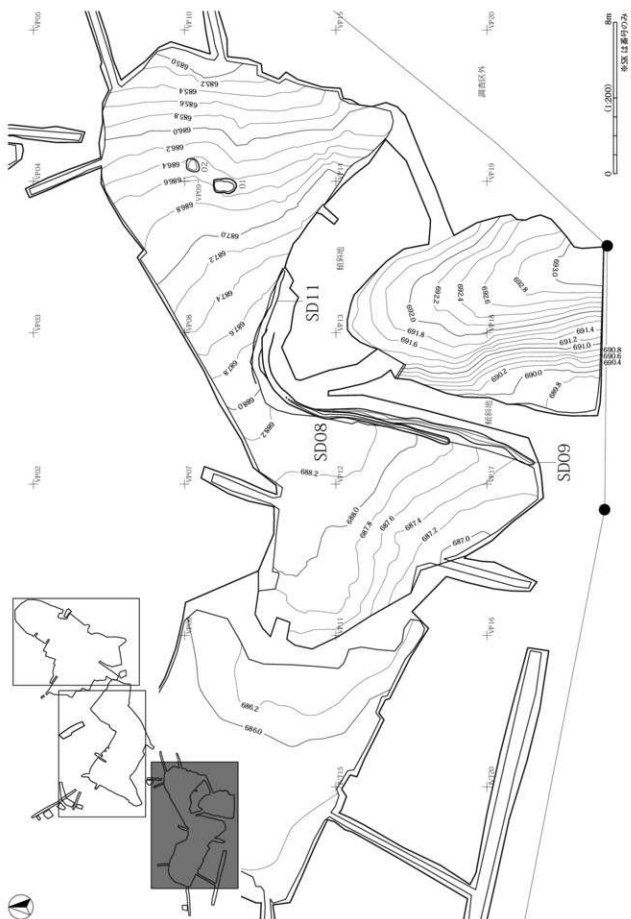
第133図 1区トレンチ配置図2



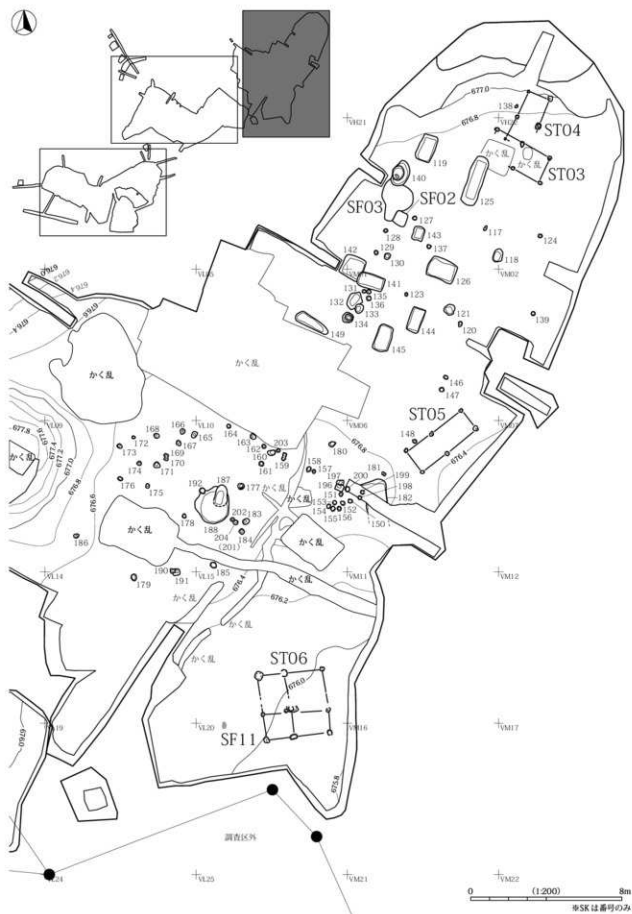
第134図 I区基本土層図



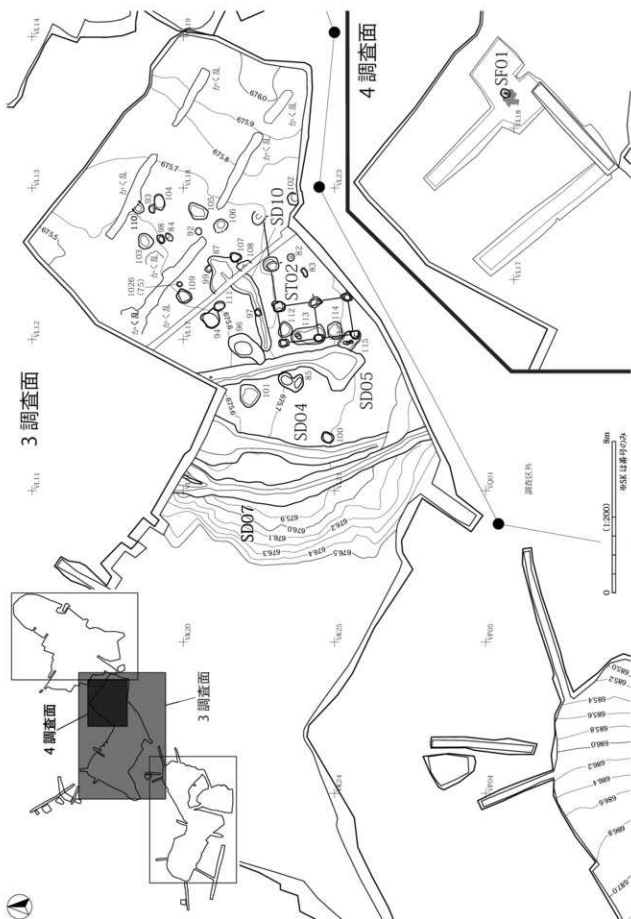
第135図 1区1調査面・2調査面遺構全体図1



第136図 1区1調査面・2調査面遺構全体図2



第138図 1区1調査面・2調査面遺構全体図4



第139図 1区3調査面・4調査面遺構全体図

V層：10YR 5/2 灰黄褐色。平坦地7に堆積する層。花崗岩粒と褐色土ブロックが混入する。粒子は細かく、しまりあり。古瀬戸製品等の中世遺物出土層。自然堆積層。

VI層：10YR 4/2 灰黄褐色。平坦地7に堆積する層。花崗岩粒と砂質土ブロックが混入する。礎石建物跡（ST02）の直上に堆積し、礎石建物跡廃絶後に堆積したと推測される。炭化物が混入し、本層下部（礎石建物跡検出面直上）から炭化材が出土した。古瀬戸製品、大窯製品等の中世遺物が出土した。

VII層：平坦地7に堆積する層。複数の造成土を総称した層で、層厚は平坦地7の北西側（斜面側）では約2mに及ぶ。土質と色調、土の性格からVII1層とVII2層に分層した。

VII1層：2.5Y4/2 灰黄褐色。谷状地形を埋めた後、礎石建物跡（ST02）等中世遺構を構築するために平場を形成した層。本層上面が中世遺構検出面（平坦地7の3調査面）。花崗岩粒が混入し、中世の茶壺が出土した。

VII2層：VII1層による造成を行う以前、谷状地形は複数の造成土によって埋められている。本層はこれら造成土を一括した層である。

VIII層：10YR 7/6 明黄褐色。花崗岩風化層。本層上面で焼土跡（SF01）を検出している（平坦地7の4調査面）。

3 遺構

(1) 概要

1区で確認した遺構は、礎石建物跡、掘立柱建物跡、墓坑、土坑、溝跡、焼土跡、石列、柵列である。1区では古代までの遺物が出土していないことから、検出遺構は中世以降と判断できる。しかし、遺構内出土遺物が少なく、埋土の特徴でも識別し難く時期を確定できない遺構が多い。そのなかで、15世紀～16世紀の礎石建物跡（ST02）とそれに伴う溝跡（SD05・10等）、15世紀前半以降の墓坑（SK01）は特筆される。本報告では、主要な遺構について記述し、そのほかは遺構一覧表（DVD収録）を参照。

検出面と確認した遺構についてであるが、谷状地形にある平坦地7は複数の調査面があるが、ほかの平坦地は1面（VIII層上面）である。平坦地7の1・2調査面で近世以降の遺構、3・4調査面で中世の遺構を確認した。

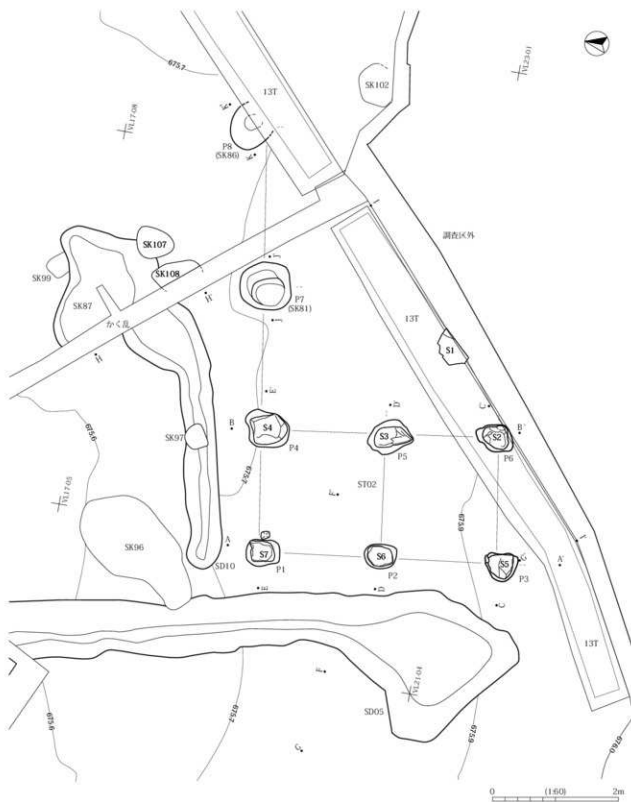
1面調査面で確認した遺構の時期であるが、平坦地6は、尾根を削って平坦化した後に遺構が構築されている。平坦地6の縁辺部外側には、平坦化するための層（造成土）が平坦地6の縁辺部外側に遺存しており、そこから近世後半の陶磁器が出土した。平坦地6で確認した遺構埋土は、この造成土が基調となっている。また、平坦地27では、SK119や125で18世紀～19世紀の陶磁器が出土した。ほかの遺構は、遺構内出土遺物が少なく、時期が特定しがたいが、SK119・125と埋土が似ることから、近世以降と推測する。

なお、検出遺構の記述のなかに「畝跡」とあるが、これは近世以降の耕作（I層）に伴うものである。

(2) 礎石建物跡

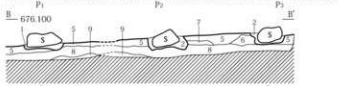
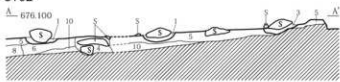
ST02 [遺構：第140・141・142図、PL39・40、遺物：第196図、PL52]

位置：VL16・17・22グリッド。 検出：平坦地7のVII1層上面（3調査面）で検出した。重複関係：P2（S6掘方）がSK113を、P3（S5掘方）がSK115を切る。掘方埋土：ビットによって埋土は異なるが、各ビットとも単層である。栗石はない。構造：本遺構は南東側外に延びており、完存しないため全容は不明である。調査で確認された礎石は6個（S2～7）で掘方を伴う。礎石が抜き取られて掘方が遺存するビット（P7・8）が2基ある。両者を合わせると、調査区内では3間×2間の礎石建物跡が確認されたこ

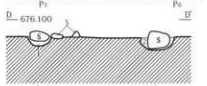
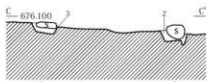


第140図 ST02、SD05・10 遺構図1

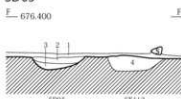
ST02



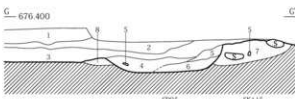
- 1 10YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性強い φ1~2mm 花崗岩粒・炭化物少量混入
- 2 10YR4/1 褐色土 しまりあり 粘性強い φ1~2mm 礫・炭化物少量混入
- 3 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性なし 褐色土基状に少量混入
- 4 10YR4/1 褐色土 しまりあり 粘性強い 黄褐色粒・炭化物少量混入
- 5 10YR5/4 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性強い φ2~3mm 花崗岩粒・炭化物少量混入
- 6 10YR4/2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性なし 花崗岩粒・黄褐色粒・褐色土・炭化物少量混入
- 7 10YR5/4 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性強い φ2~3mm 花崗岩粒・にぶい黄褐色土・炭化物少量混入
- 8 10YR4/2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性なし φ3~4mm 花崗岩粒・黄褐色粒・褐色土・炭化物少量混入
- 9 10YR4/3 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性なし φ3~4mm 花崗岩粒・黄褐色粒・灰黄褐色土・炭化物少量混入
- 10 10YR3/2 黒褐色土 しまりあり 粘性強い φ3~4mm 花崗岩粒・黄褐色粒・灰黄褐色土・炭化物少量混入



SD05

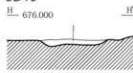


- 1 10YR5/1 褐色土 しまり強い 粘性あり φ1~5mm 花崗岩粒少量混入
- 2 10YR6/2 灰黄褐色土 φ10~30mm にぶい黄褐色土ブロック少量混入 φ1~5mm 花崗岩粒・多量黄褐色土少量混入
- 3 10YR4/4 褐色土 粗砂・マンガン浸透 流水による風化花崗岩粗結構層
- 4 10YR5/1 褐色土 砂質 φ10~30mm 黄褐色土ブロック少量混入



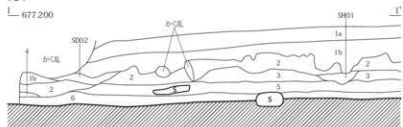
- 1 10YR5/2 灰黄褐色土 しまり強い φ10~20mm 褐色土ブロック少量混入 砂多量 φ1~5mm 花崗岩粒少量混入
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色土 しまりなし 粘性強い 粗砂多量 φ1~5mm 花崗岩粒少量混入
- 3 10YR4/2 灰黄褐色土 φ10~20mm にぶい黄褐色土ブロック少量混入 1~5mm 花崗岩粒少量混入
- 4 2.5YR/2 灰黄色土 にぶい黄褐色土ブロック少量混入 φ1~5mm 花崗岩粒少量混入
- 5 2.5YR/2 暗灰黄色土 しまりなし 粘性強い φ10~30mm 灰黄褐色土ブロック少量混入 砂多量 φ1~5mm 花崗岩粒少量混入
- 6 2.5YR/2 暗灰黄色土 φ10~20mm 灰黄褐色土ブロック φ10~20mm 花崗岩粒含にぶい黄褐色土ブロック少量混入
- 7 2YR/1 灰色土 しまり強い 粘性あり φ10~20mm 灰色粘質土ブロック少量混入 粗砂少量混入
- 8 2.5YR/2 暗灰黄色土 φ10~20mm にぶい黄褐色土ブロック少量混入

SD10



- 1 10YR4/4 褐色土 しまり強い 粘性なし 花崗岩粒・黄褐色土・炭化物少量混入

13T



- 1a 10YR4/1 褐色土 しまり強い 粘性あり φ1~5mm 花崗岩粒・炭化物少量混入
- 1b 10YR5/1 褐色土 しまり強い 粘性あり φ10~100mm にぶい黄褐色土ブロック少量混入 φ1~5mm 花崗岩粒少量混入
- 2 2.5YR/2 暗灰黄色土 しまり強い φ10~100mm にぶい褐色土ブロック少量混入 砂混入 φ1~5mm 花崗岩粒少量混入
- 3 10YR5/2 灰黄褐色土 しまり強い φ10~100mm 黄褐色砂質土ブロック少量混入 砂・花崗岩粒多量混入
- 4 10YR5/2 灰黄褐色土 しまり強い にぶい黄褐色土ブロック少量混入 砂多量・花崗岩粒少量混入
- 5 10YR4/2 灰黄褐色土 しまり強い 褐色土ブロック少量混入 φ1~5mm 花崗岩粒少量混入
- 6 10YR4/2 灰黄褐色土 しまり強い φ10~30mm 黄色砂質土ブロック少量混入 φ1~5mm 花崗岩粒・炭化物少量混入

ST02 P7(SK81)



- 1 10YR5/2 灰黄褐色土 φ1~5mm 花崗岩粒少量混入
- 2 10YR5/2 灰黄褐色土 φ10~30mm 灰白色花崗岩粒・砂質土ブロック少量混入

ST02 P8(SK86)



- 1 10YR5/1 褐色土
- 2 10YR5/2 灰黄褐色土 φ10~30mm 褐色土ブロック少量混入 炭化物少量混入



第141図 ST02、SD05・10 遺構図2

となる。調査で確認した礎石からすると、本遺構は総柱建物と判断できる。礎石には柱を設置した痕跡は確認されない。礎石間の平均値は南北方向が1.86m、東西方向が1.95mである。掘方は直径0.5～0.6mで、検出面からの深さは15～20cmを測る。全てのピットが盛土により平場が構築された後に掘り込まれている。遺物出土状況：Ⅶ1層から古瀬戸もしくは大窯の茶壺と考えられる遺物（管理番号204）が出土した。また、本遺構の直上に堆積するⅥ層からは、緑釉小皿(3)、天目茶碗(4・5)、すり鉢(6・7)、花瓶(8)、筒形容器(9・10)、筒形香炉(11)、祖母懐茶壺(12)、花盆(13)、白磁皿(14・15)、白磁碗(16)、染付皿(17)、火鉢(18)、風炉(19)が出土した(第142図下段)。Ⅵ層出土遺物の分布域は比較的狭く、本遺構の規模とほぼ一致する。また、Ⅴ層からは、端反皿(20・21)、卸皿(22)、天目茶碗(23・24)、平碗(25・26)、花瓶(27)、祖母懐茶壺(28・29・30)、祖母懐茶壺と考えられる遺物(31)、内耳鍋(32・33)、青磁碗(34)、染付碗(35・37)、染付皿(36)、青花碗(38)、片口鉢(39)、青磁梅瓶(管理番号25)が出土した。この遺物は、ST02の直上から東側に分布する(第142図上段)。徳利(40)、白磁皿(41)、染付碗(42)は、Ⅴ層出土遺物とⅥ層出土遺物が接合した遺物である。Ⅴ層出土遺物は、本遺構直上から東側に分布しており、Ⅵ層と同様に分布域は比較的狭い。Ⅴ層とⅥ層出土遺物は本遺構に伴うものと判断される。Ⅵ層には炭化物が多く混入しており、本遺構の検出面からは炭化材が出土した(第142図)。さらに、Ⅳ層からは白磁皿(15)や染付皿(17)など被熱した遺物が出土していることから、ST02は焼失した可能性が高い。炭化材の放射性炭素年代測定を行った結果、暦年代範囲(2σ)は、①が1,490calAD～1,603calAD、1,611calAD～1,641calAD、②が1,226calAD～1,285calAD、③が1,221calAD～1,276calADであった。時期：出土遺物から、古瀬戸後Ⅳ期(15世紀中頃)に構築され、大窯3段階後半(16世紀後半)に廃絶したと推測した。性格：本遺構は城郭が立地する独立丘陵の中腹にあり、造成により構築されていること。また、総柱の建物であることから高床の可能性が高いこと、出土遺物は壺類が多く、すり鉢が極めて少ない組成を示すことから、居住機能を主とした建物ではないと推測した。寺院もしくは倉庫的な建物と考えられよう(註1)。

(3) 掘立柱建物跡

ST01 [遺構：第143図、PL42]

位置：VK14・19グリッド。検出：平坦地6のⅧ層上面で検出した。重複：SK09・33～35・45・46・71～73・75、畝跡と重複する。SK09は畝跡を切る。この畝跡は本遺構を切る。SK33～35・45・46・71～73・75の新旧関係は不明である。埋土：3種類の埋土がある。構造：3間×1間で、長辺5.50m、短辺2.30mを測る。主軸はN44°Eである。出土遺物：なし。

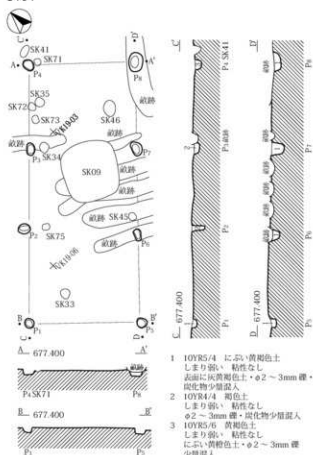
ST03 [遺構：第143図]

位置：VH21/22グリッド。検出：平坦地27のⅧ層上面で検出した。重複：ST04と重複するが、新旧関係は不明である。構造：2間×1間の掘立柱建物跡で、長辺3.22m、短辺1.42mを図る。北西隅のピットは、かく乱で破壊されていると推測される。主軸はN61°Wである。出土遺物：なし。

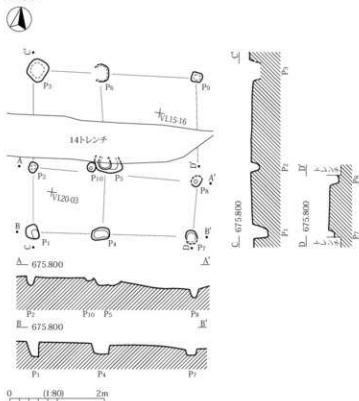
ST04 [遺構：第143図]

位置：VH17・22グリッド。検出：平坦地27のⅧ層上面で検出した。重複：ST03と重複するが、新旧関係は不明である。構造：2間×1間の掘立柱建物跡で、長辺2.86m、短辺1.23mを測る。南隅のピットは、かく乱で破壊されていると推測される。主軸はN25°Eである。出土遺物：なし。

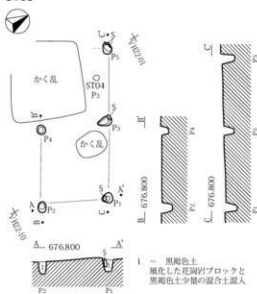
ST01



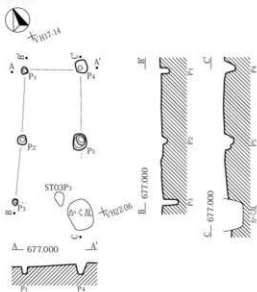
ST06



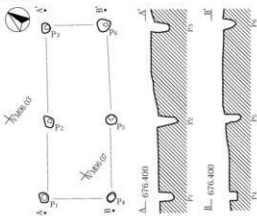
ST03



ST04



ST05



第143図 ST01・03～06 遺構図

ST05 [遺構：第143図、PL42]

位置：VM01・06グリッド。 検出：平坦地27のⅧ層上面で検出した。 重複：なし。 構造：2間×1間の掘立柱建物跡で、長辺3.67m、短辺1.33mを測る。主軸はN52°Eである。 出土遺物：なし。

ST06 [遺構：第143図、遺物：PL53]

位置：VL15・20グリッド。 検出：平坦地27の14トレンチ土層断面で本遺構のピット（P5）を確認し、近世以降の耕作土を剥いだ1面（Ⅷ層上面）で検出した。平坦地27の南側には、北から南方に開く谷状地形があり、本遺構はこの谷状地形が埋没した面で確認した。なお、谷状地形の埋没時期は不明である。 重複：なし。 構造：2間×2間で、建物の構造は総柱建物である。本遺構は正方位を向く。出土遺物：P1より常滑の甕か壺（管理番号80）が出土した。破片が小さいため図示していないが、P5より内耳鍋が出土した。 時期：出土遺物から中世以降と推測する。

(4) 墓坑

SK01 [遺構：第144図、PL40、遺物：PL53]

位置：VP08・09グリッド。 検出：平坦地2（東）のⅧ層上面で検出した。 重複関係：なし。 埋土：2分層したが、埋土の大半を現耕作土（基本土層1層）に削平されているため、遺存状況は悪い。1層は2層よりわずかに暗く、黄褐色粒が混入する。 構造：長辺1.18m、短辺0.67m、検出面から底面までの深さ12cmを測る。平面形は楕円形を呈するが、北側は方形に近い形状を示す。主軸はN1°Wである。底面には、細かな凹凸があり、南側がわずかに低くなっている。 出土遺物：2層より人骨が出土した。人骨は、本遺構の北西側にまとまって出土した。人骨は、大腿骨と脛骨、上腕骨が並び、その上に挽骨が直交する状態で出土した。これら人骨の下部より、胫骨と挽骨などが出土した。頭蓋骨は出土していない。この出土状況から、屈葬されたと考えられる。京都大学名誉教授茂原信生氏による鑑定では、成人に近い女性の可能性が高いとのことであった。人骨の放射性炭素年代測定を3点行った結果、2σ暦年代範囲は①（右大腿骨）が1,520calAD-1,593calAD、1,619calAD-1,650calAD、②（左大腿骨）が1,453calAD-1,523calAD、1,575calAD-1,625calAD、③（左上腕骨）が1,470 calAD-1,530calAD、1,540calAD-1,635calADであった。また、1層と2層から、銭貨9点（第205図1～9）が出土したが、出土レベルは検出面から人骨直上の間である。最も初鋳年が新しい銭貨は、永樂通寶である。 時期：鋳造年（1411年）を上限とすると15世紀前半以降である。

(5) 土坑

土坑は、平坦地2・6・27のⅧ層上面、平坦地7のⅢ層（1調査面）、Ⅶ1層上面（3調査面）で検出した。確認した土坑は192基である。規模・形状は遺構一覧表（DVD収録）に提示した。

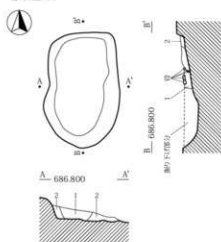
(6) 溝跡

SD03・SH02 [遺構：第152図、PL43]

位置：SD03はVL11・16・17・21・22グリッド、SH02はVL16グリッド。 検出：平坦地7のⅢ層上面を下げた段階（2調査面）で検出した。 重複：なし。 構造：SD03は平坦地7の南から北方に延び、長さは11.95m・最大幅0.61m、検出面からの深さ5mを測る。本遺構は南側と中央部でほぼ直角に屈曲し、南側から北側に向かい幅広となり、傾斜する。北西側には石積み（SH02）が施されている。石積み部分には掘方がある。石積みは場所によって積まれた石の数に違いがあるが、最も幅広の場所に数多くの平石

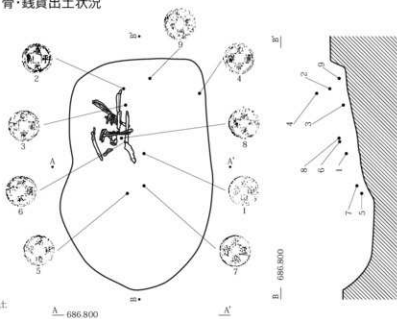
SK01

〒P0804より
深へ1m深へ1m



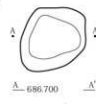
- 1 10YR4/6 褐色土 しまり弱い、粘性なし、 ϕ 1mm 礫少量混入、人骨、銭貨出土
2 10YR4/4 褐色土 しまり弱い、粘性なし、銭貨出土

骨・銭貨出土状況



SK02

〒P0901

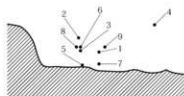


- 1 10YR4/3 にごい、黄褐色土 しまり弱い、粘性なし、 ϕ 1~2mm 礫混入、地山の花園層風化層少量混入

SK84

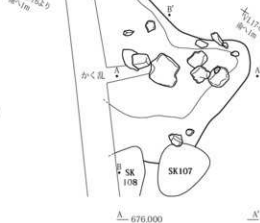


- 1 10YR5/4 褐色土 しまり弱い、粘性あり、花園層少量混入



SK87

〒L1162より
深へ1m



- 1 10YR4/2 灰黄褐色土 ϕ 1~5mm 花園層・灰土物粒少量混入
2 10YR5/2 灰黄褐色土 ϕ 10~30mm にごい、黄褐色土ブロック少量混入

SK85

〒L1162より
深へ1m



- 1 10YR5/2 灰黄褐色土 しまり弱い、粘性あり ϕ 1~5mm 花園層少量混入
2 10YR5/2 灰黄褐色土 ϕ 10~30mm 黄褐色土ブロック少量混入

縦 1:3
(1:20)

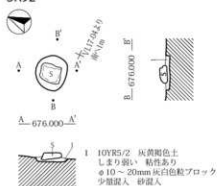
0 50cm

0 1m

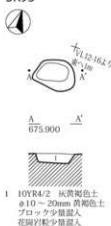
0 1m

第144図 SK01・02・84・85・87 遺構図

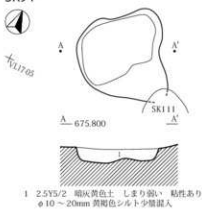
SK92



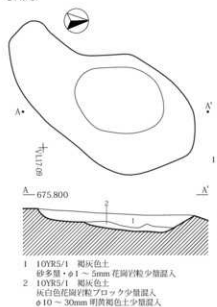
SK93



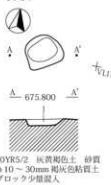
SK94



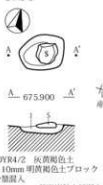
SK96



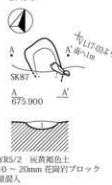
SK97



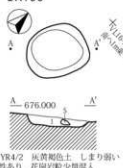
SK98



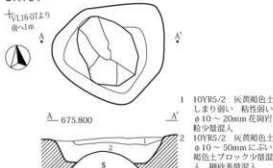
SK99



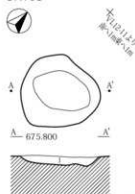
SK100



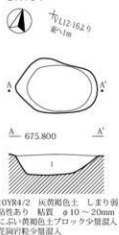
SK101



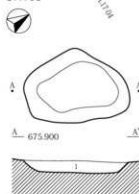
SK103



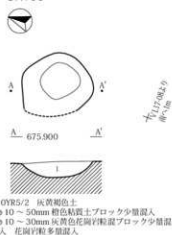
SK104



SK105

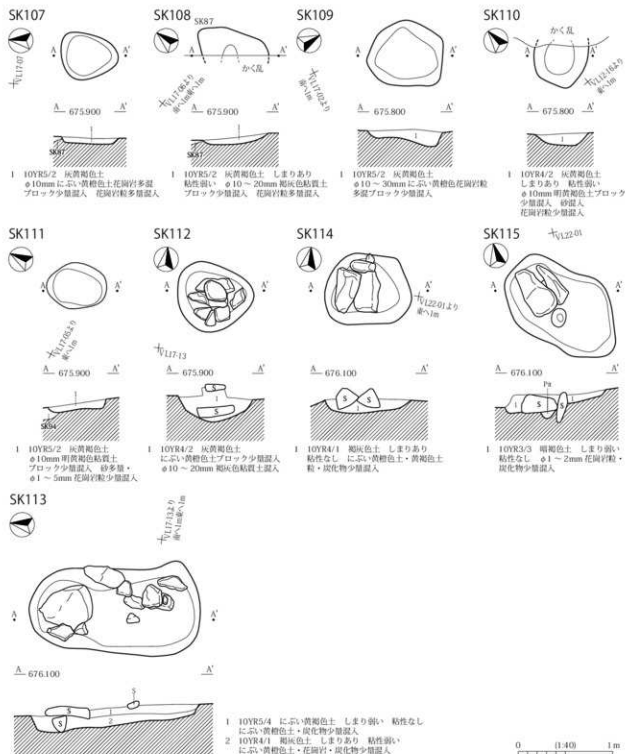


SK106



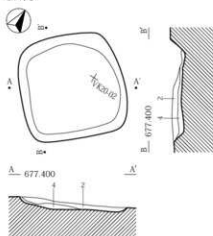
第145図 SK92～94・96～101・103～106 遺構図

0 (1:40) 1m

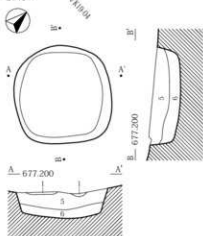


第146図 SK107~115 遺構図

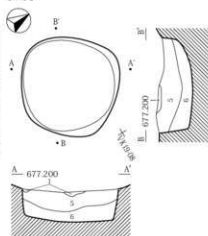
SK03



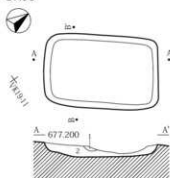
SK04



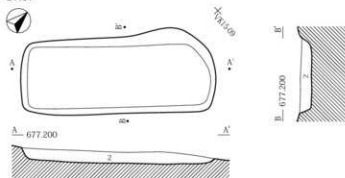
SK05



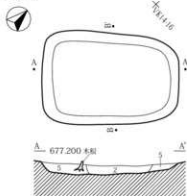
SK06



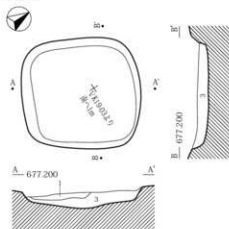
SK07



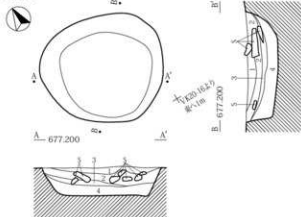
SK08



SK09



SK14



SK03 ~ SK09

- 1 10YR3/3 暗褐色土 しまり強い 粘性なし
φ1 ~ 2mm 礫 (Ochil)の礫)・炭化物少量混入
- 2 10YR3/3 暗褐色土 しまり強い 粘性なし
φ3 ~ 4mm 礫 (Ochil)の礫)・炭化物少量混入
- 3 10YR3/3 暗褐色土 しまり強い 粘性なし
φ3 ~ 4mm 礫 (Ochil)の礫)・炭化物少量混入
- 4 10YR4/3 にふい黄褐色土 しまり強い 粘性なし
φ1 ~ 2mm 礫・炭化物少量混入
- 5 10YR5/2 灰黄褐色土 しまり強い 粘性なし φ1 ~ 2mm 礫少量混入
- 6 10YR4/2 灰黄褐色土 しまり強い 粘性なし φ1 ~ 2mm 礫少量混入

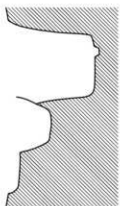
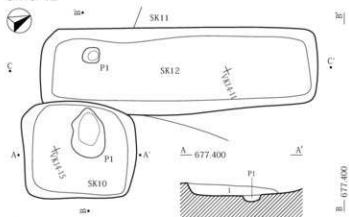
SK14

- 1 10YR6/1 褐色土 φ10 ~ 50mm 明褐色土ブロック少量混入
- 2 10YR6/1 褐色土 しまり強い 粘性あり
φ10 ~ 30mm 褐色土細砂ブロック少量混入 φ10 ~ 20mm 炭化物少量混入
- 3 10YR6/1 褐色土 しまり強い 粘性なし 細砂主体
- 4 10YR6/1 褐色土 しまり強い 粘性あり
φ10 ~ 30mm 褐色土細砂ブロック少量混入

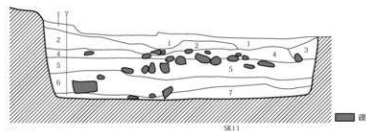
0 (1:40) 1m

第147図 SK03 ~ 09・14 遺構図

SK10-12



C-677.400

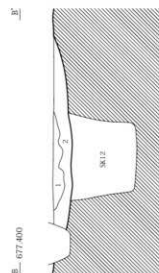
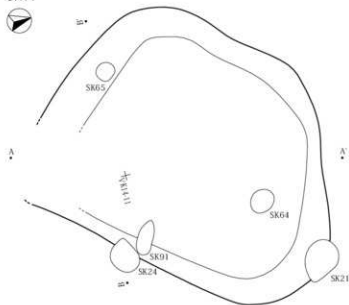


A-A'
1 10YR5/4 に近い暗褐色土 しまり強い 粘性なし
φ2~3mm 礫少量・暗褐色土が混入

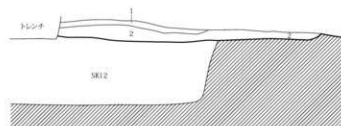
C-C'

- 1 10YR4/4 褐色土 しまり強い 粘性なし 明黄褐色土（風化花崗片）・褐色土（6号坑内まり）少量混入
2 10YR4/4 褐色土 しまり強い 粘性なし 風化砂岩内まり・風化花崗片少量混入
3 10YR4/4 褐色土 しまり強い 粘性なし 風化花崗片少量混入
4 10YR3/4 暗褐色土 しまり強い 粘性なし 風化花崗片少量混入
5 10YR4/3 に近い黄褐色土 しまり強い 粘性なし 風化砂岩・風化花崗片少量混入
6 10YR3/4 暗褐色土 しまり強い 粘性なし 砂 礫が混入したアロッサ少量混入
7 10YR4/6 褐色土 しまり弱い 粘性なし 明黄褐色土粒少量混入

SK11



A-677.400



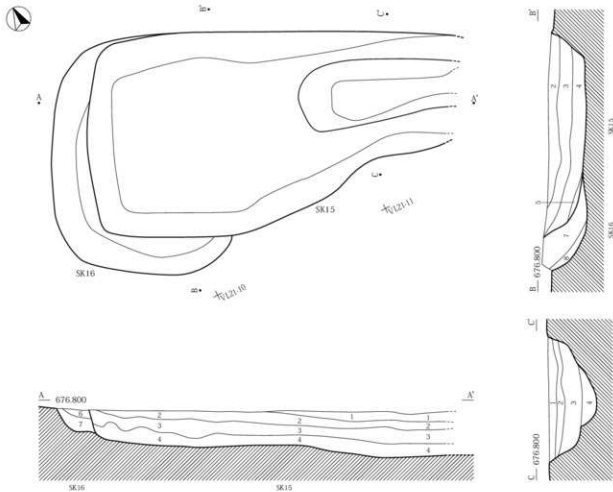
B-B'

- 1 10YR3/3 暗褐色土 しまり強い 粘性なし
φ2~3mm 礫・炭化物少量混入
2 10YR4/3 黄褐色土 しまり強い 粘性なし
φ2~3mm 礫・炭化物少量混入

0 (1:40) 1m

第148図 SK10~12 遺構図

SK15・16



- | | |
|--|--|
| 1 10YR4/1 褐色土 しまりあり 粘性強い 花崗岩粒多量混入 | 5 10YR6/2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性あり 花崗岩粒多量混入 |
| 2 10YR6/1 褐色土 しまり弱い 粘性強い 細化花崗岩粒多量混入 | 6 10YR5/2 灰黄褐色土 砂質 $\phi 10 \sim 20\text{mm}$ 褐色土・アロック少量混入 |
| 3 10YR5/1 褐色土 $\phi 10 \sim 20\text{mm}$ 褐色土粘質土少量混入 | 7 10YR6/1 褐色土 $\phi 10 \sim 50\text{mm}$ 明黄褐色土・アロック少量混入 |
| 4 10YR4/2 灰黄褐色土 $\phi 10 \sim 100\text{mm}$ 褐色粘質土・アロック少量混入
花崗岩粒多量混入 | 8 10YR4/1 褐色土 しまり弱い 粘性あり 花崗岩粒少量混入 |

SK17

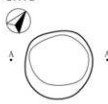


A—677.200 A'



- 1 10YR4/6 褐色土 しまり弱い 粘性なし $\phi 2 \sim 3\text{mm}$ 礫混入

SK18

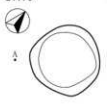


A—677.200 A'



- 1 10YR3/3 暗褐色土 しまり弱い 粘性なし $\phi 2 \sim 3\text{mm}$ 礫混入
2 10YR3/4 暗褐色土 しまり弱い 粘性なし $\phi 3 \sim 4\text{mm}$ 礫混入
3 10YR3/3 暗褐色土 しまり弱い 粘性なし $\phi 2\text{mm}$ 礫少量混入

SK19

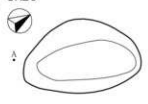


A—677.200 A'

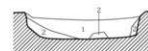


- 1 10YR3/3 暗褐色土 しまり弱い 粘性なし $\phi 2 \sim 3\text{mm}$ 礫混入
2 10YR3/4 暗褐色土 しまり弱い 粘性なし $\phi 3 \sim 4\text{mm}$ 礫混入

SK20



A—677.200 A'

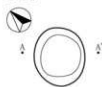


- 1 10YR4/2 灰黄褐色土 しまり弱い 粘性なし
2 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまり弱い 粘性なし $\phi 5 \sim 6\text{mm}$ 礫・シルト質土層が層状に少量混入

0 (1:40) 1m

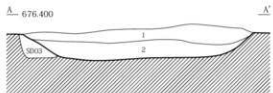
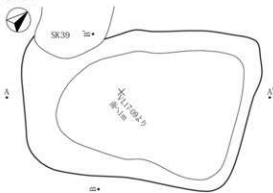
第149図 SK15～20 遺構図

SK28

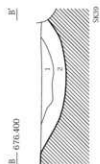


- 1 10YR4/3 に近い黒褐色土
しまり強い、粘性なし
- 2 10YR4/6 褐色土
しまりあり 粘性なし
炭化物少量混入
- 3 10YR3/3 暗褐色土
しまりあり 粘性なし
褐色土が底部に層状・
炭化物少量混入

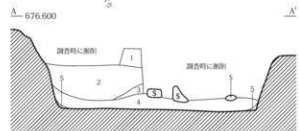
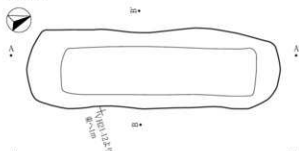
SK38



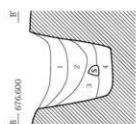
- 1 2.5Y5/2 暗灰黄色土 しまりあり 粘性あり
φ10～50mm 褐色土ブロック少量混入
砂多量混入
- 2 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性あり
φ10～50mm 褐色土ブロック少量混入
砂多量混入



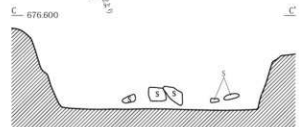
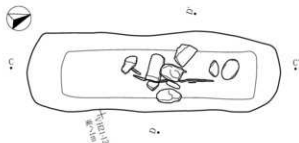
SK125



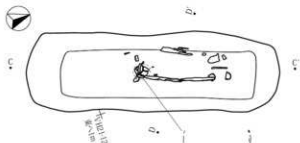
- 1 褐色土 しまり強い、粘性弱い 褐色土ブロック部分的に少量混入
風化花崗岩と黒褐色土の混合土混入
- 2 黒褐色土 黒褐色土ブロックと褐色土ブロック混合土
- 3 褐色土 褐色土ブロック混入
- 4 黒褐色土 炭化物ブロック混入
- 5 黒褐色土



礫出土状況



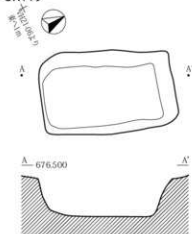
遺物出土状況 (礫の下層)



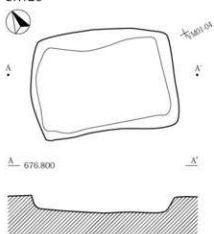
土層 1:10
0 (1:40) 1m

第150図 SK28・38・125 遺構図

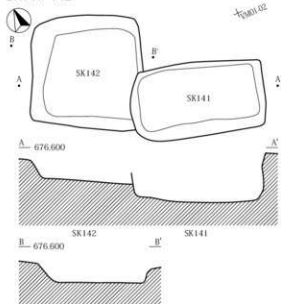
SK119



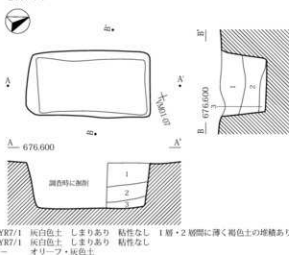
SK126



SK141・142

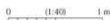


SK144



- 1 10YR7/1 灰白色土 しまりあり 粘性なし 1層・2層間に薄く褐色土の堆積あり
 2 10YR7/1 灰白色土 しまりあり 粘性なし
 3 オリーブ・灰白色土

第151図 SK119・126・141・142・144 遺構図



が小口積みされている。出土遺物：なし。時期：検出面から、近世以降と推定した。

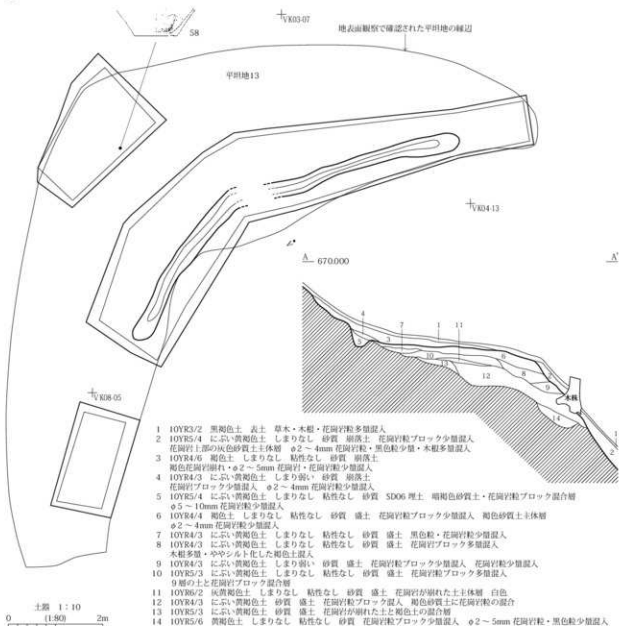
SD04・07 [遺構：第153図、PL41]

位置：SD04はVL16・21グリッド、SD07はVK15・20・L11・16・21グリッド。検出：平坦地7のⅦ1層上面(3調査面)で検出し、上端は随所で湾曲する。重複：なし。埋土：SD04には砂が多量に混入する。構造：SD04は長さ9.3m(現存)、最大幅0.88m、検出面からの深さ9cm、SD07は長さ13.75m(現存)、最大幅1.15m、検出面からの深さ17cmを測る。SD04・07は、平坦地7の西側にあり、0.2~0.4m間隔で並走する。平面形は東側に振る状態が弧状を呈し、底面は平坦で南から北方に傾斜する。出土遺物：なし。時期：検出面と本遺構の上部にⅥ層が堆積することから、中世と比定した。

SD05・10 [遺構：第140・140図、PL41]

位置：SD05はVL16・21グリッド、SD10はVL16・17グリッド。検出：平坦地7のⅦ1層上面(3調査面)で検出した。重複：SD05はSK96とSK115を切る。SD10は、SK97・SK108と重複すると推測されるが、かく乱が及んでおり新旧関係は不明である。構造：SD05は長さ9.01(現存)m、(最大)幅0.84m、検出

SD06



第154図 SD06 遺構図

のプランを確認した。重複：なし。構造：山裾に沿う状態で延び、長さ8.84m、最大幅0.41m、検出面からの深さ17cmを測る。土層断面から、本遺構は盛土（第154図6層）に伴う遺構と判断した。壁は南東側（山裾側）がほぼ直角に立ち上がり、北西側がやや緩やかに立ち上がる。構築時期は、盛土内から近世後半のすり鉢（71）が出土したことから、近世後半以降と推定される。出土遺物：遺構内からの遺物はないが、盛土（第154図6層）から近世後半のすり鉢（58）が出土した。時期：本遺構の掘込み面から、近世後半以降と推測する。

SD08・09 [遺構：第155・156図、PL41]

位置：SD08はVP07・12グリッド、SD09はVP07・12・17グリッド。検出：平坦地2（西）のトレンチ

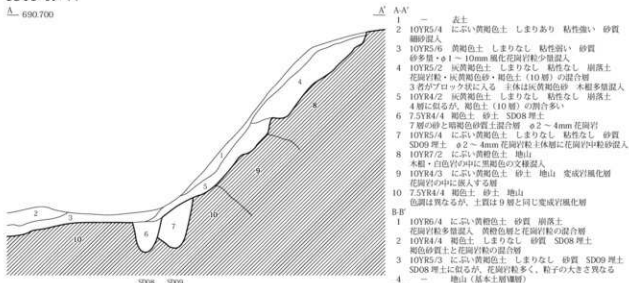
SD08・09・11



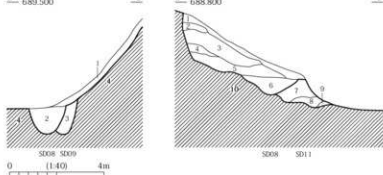
第 155 図 SD08・09・11 遺構図 1

SD08・09・11

A 690.700



B 680.500



第156図 SD08・09・11 遺構図2

土層断面で重複する2基の落込みを確認した。落込みの規模と形状を捉えるために面調査を行ったところ、2条の溝跡と判明した。検出面はⅧ層上面である。重複：SD08が09を切る。埋土：斜面上方からの崩落土(第156図A-A'5層)がSD08・09を覆う。構造：SD08は長さ11.96(現存)m、最大幅0.44m、検出面からの深さ42cmを測り、山裾に沿って延びる。本遺構の北側は、埋土の遺存状況が悪く、また検出面(Ⅷ層)と本遺構の埋土が酷似していた。本遺構は幅が狭い一方、検出面から底面まで深いことが特徴である。壁は斜面上方がほぼ垂直に立ち上がる。底面には凹凸がある。SD09は北側がSD08で切られており、現存する長さは11.21m、最大幅0.60m、検出面からの深さ57cmを測り、山裾に沿って延びる。出土遺物：SD08・09ともになし。時期：SD08はSD11を切ることから、16世紀後半以降と推測する。

SD11 [遺構：第155・156図、PL41、遺物：第196図]

位置：VP07・08グリッド。検出：平坦地2(東)の土層断面で溝状の落込みを確認し、面調査ではⅧ層上面で検出した。重複：SD08に切られる。構造：平坦地2(東)の南西側、山裾に沿って延びる溝跡である。調査で確認された部分は長さ5.67m(現在)、最大幅0.60m、検出面からの深さは30cmを測る。出土遺物：ほぼ完形に近い状態で大窯3段階(後半)の丸皿(2)が出土した。時期：出土遺物から16世紀後半以降と推測する。

(7) 焼土跡

SF01 [遺構：第158図、PL41]

位置：VL13・18グリッド。 検出：平坦地7で中世遺構調査後、谷状地形を埋める以前に遺構が存在したか否かを確認するためにトレンチを掘削した。本遺構は50トレンチの精査で確認した遺構である。トレンチでⅧ層上面（4調査面）を精査したところ、炭化物の広がりや円形の落込みを検出した。炭化物は、長辺1.91m、短辺0.78mを測る。しかし、両者の新旧関係が確認できなかったため、両者に同一遺構名を付けて調査を行った。 埋土：3層は炭化物層で、4層は焼土層である。4層は地山が被熱した部分である。 構造：長辺0.54m、短辺0.45m、検出面からの深さ10cmを測る。西側に分布する炭化物は、不整形を呈する。炭化物は、最も厚い場所で約10cmを測る。 出土遺物：なし。 時期：炭化物の放射性炭素年代測定を3点行った。その結果、暦年代範囲(2σ)は、①が1,285calAD-1,320calAD、1,350calAD-1,392calAD、②が1,328calAD-1,341calAD、1,395calAD-1,438calAD、③が1,286calAD-1,324calAD、1,346calAD-1,394calADであった。13世紀中頃～15世紀前半の値を示した。年代測定の結果とST02の構築時期から、13世紀中頃～15世紀前半と推測する。

(8) 石列

SH01 [遺構：第159図、PL43]

位置：VK20・L16グリッド。 検出：平坦地7のⅢ層上面（1調査面）で検出した。本遺構は、直線的に礫が並んでおり、礫上面のレベルは異なる。Ⅲ層上面で礫の上面を確認したものと、Ⅲ層上面を若干下げて確認した礫とがある。 重複：なし。 構造：北西-南東方向に10個の礫が並ぶ。石列の長さは9.03mを測る。各礫は北東側に面をそろえて設置されている。また、北西隅にある巨礫を除いて下面のレベルが一致する。 出土遺物：掘方より近世後半以降の陶磁器が出土した。6層・9層・10層（第159図B-B'）が掘方であるが、出土層位は特定できない。 時期：出土遺物と検出面とから、近世後半以降と推定する。

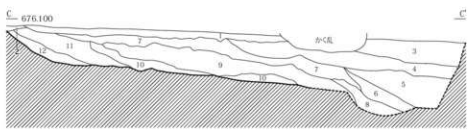
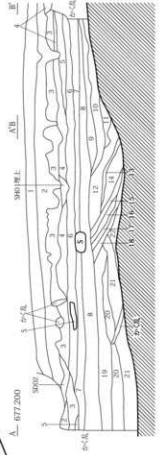
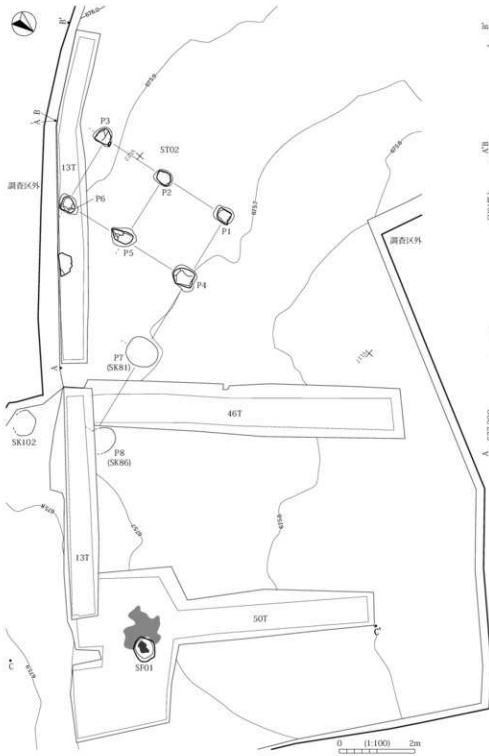
(9) 柵列

SA01 [遺構：第160図、PL43]

位置：VK18・23グリッド。 検出：平坦地6のⅧ層上面で検出した。本遺構は、平坦地6の縁辺部にある。 重複：なし。 構造：8基のピット（P1～8）で構成される。P1～6は1.2～2.1m間隔で北東-南西方向に直線的に並ぶ。ピット列の長さは8.26mを測る。しかし、P2とP5付近など折れが認められる。平坦地6は尾根部分を削平して形成されているため、縁辺部の平面形は細かく蛇行する。本遺構に折れがあることは、縁辺部に沿って構築されていることを示す。P6・7は1.22m間隔で、P1～7の列と並行する。 出土遺物：なし。 時期：埋土がST01と酷似することから、近世以降と推定する。

註

- 1) 第8節では、飯田市域とその周辺における中世城郭や中世遺跡の発掘成果などから、本遺構の性格について触れる。



第157図 VII 1下層トレンチ 遺構図

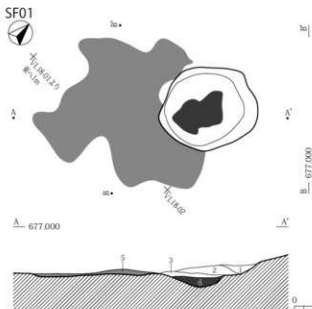
第157図 VII 1下層トレンチ 遺構図 土層注記

A・A'・B・B'

- 1 10YR4/1 灰黄色土 しまり強い 粘性あり
φ1~5mm 花崗岩粒・炭化物粒少量混入 (基本土層I1層)
- 2 10YR5/1 褐色土 しまり強い 粘性あり φ10~100mm 近い黄褐色ブロック少量混入 φ1~5mm 花崗岩粒少量混入 (基本土層I2層)
- 3 2.5Y5/2 暗灰黄色土 しまり強い φ10~100mm 近い褐色土ブロック少量混入 砂混入 φ1~5mm 花崗岩粒少量混入 (基本土層II層)
- 4 10YR5/2 灰黄褐色土 しまり強い φ10~100mm 黄褐色砂質土ブロック少量混入 砂・花崗岩粒少量混入 (基本土層III層)
- 5 10YR5/2 灰黄褐色土 しまり強い 近い黄褐色粘土ブロック少量混入 砂多量・花崗岩粒少量混入 (基本土層IV層)
- 6 10YR5/2 灰黄褐色土 しまり強い 褐色土ブロック少量混入 φ1~5mm 花崗岩粒少量混入 (基本土層V層)
- 7 10YR2/2 灰黄褐色土 しまり強い φ10~30mm 黄色砂質土ブロック少量混入 φ1~5mm 花崗岩粒・炭化物粒少量混入 (基本土層VI層)
- 8 10YR5/4 近い黄褐色土 しまり強い 粘性強い 灰黄褐色土・φ2~3mm 花崗岩・炭化物少量混入 (基本土層VII層)
- 9 10YR4/3 近い黄褐色土 φ10~20mm 花崗岩粒ブロック少量混入 砂混入 (基本土層VIII層)
- 10 10YR4/3 近い黄褐色土 砂混入 花崗岩粒少量混入 (基本土層VIII層)
- 11 10GY6/1 緑灰色土 φ10~100mm 灰色粘土ブロック少量混入 砂多量混入 (基本土層IX層)
- 12 10YR6/2 灰黄褐色土 φ10~50mm 黄灰色細砂ブロック少量混入 細砂多量・φ10~20mm 花崗岩粒少量混入 (基本土層IX層)
- 13 2.5Y5/1 黄灰色土 細砂 花崗岩粒多量混入 (基本土層IX層)
- 14 10YR6/2 灰黄褐色土 しまり強い 粘質 φ10~100mm 灰色粘土ブロック少量混入 砂・花崗岩粒多量混入 (基本土層IX層)
- 15 10Y5/1 灰色土 細砂質 花崗岩粒少量混入 (基本土層IX層)
- 16 10YR6/3 近い黄褐色土 φ1~5mm 花崗岩粒多量混入 (基本土層IX層)
- 17 2.5Y3/2 暗褐色土 細砂 φ10~20mm 明黄褐色粘土土ブロック多量混入 (基本土層IX層)
- 18 2.5Y6/4 近い黄褐色土 細砂質 (基本土層IX層)
- 19 10YR6/3 近い黄褐色土 φ10~100mm 灰黄褐色土・褐色砂質土・近い黄褐色土ブロック少量混入 (基本土層IX層)
- 20 10YR6/2 灰黄褐色土 φ10~100mm 褐色砂質土・φ10~50mm 近い黄褐色土ブロック少量混入 (基本土層IX層)
- 21 10YR6/3 近い黄褐色土 φ10~20mm オリーブ灰色細質土ブロック少量混入 酸化鉄集積あり (基本土層IX層)
- 22 地山 (基本土層IX層)

C・C'

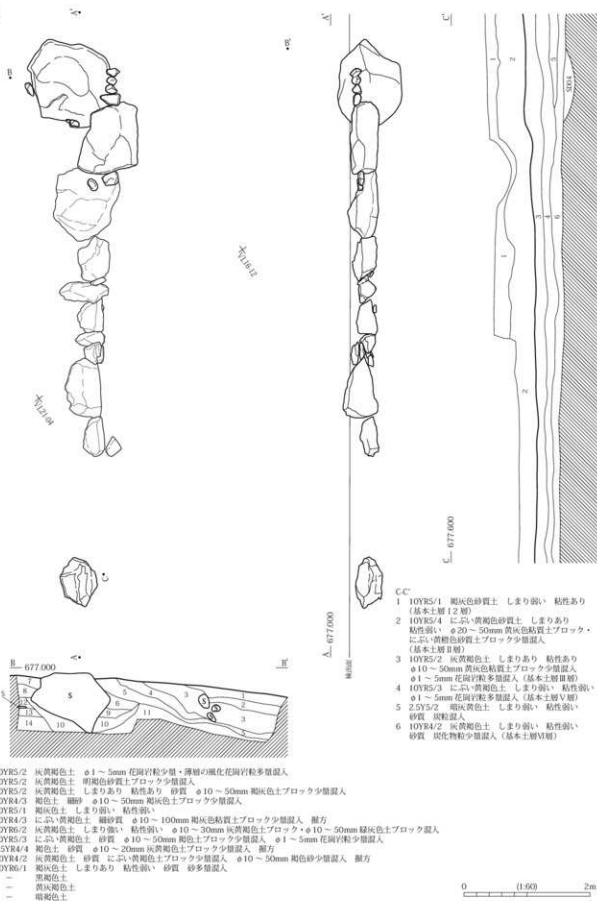
- 1 10YR4/2 灰黄褐色土 しまり強い 粘性強い 砂混入 (基本土層VII層)
- 2 10YR5/2 灰黄褐色土 しまり強い 粘性あり φ10~100mm 黄褐色土ブロック少量混入
- 3 10YR5/2 灰黄褐色土 φ10~50mm 褐色土ブロック少量混入 砂混入
- 4 10YR5/2 灰黄褐色土 しまり強い 粘性強い φ10~50mm 褐色土ブロック少量混入 粗砂多量混入
- 5 10YR5/2 灰黄褐色土 しまり強い φ10~20mm 褐色土ブロック・明黄褐色土ブロック少量混入 砂多量混入
- 6 2.5Y5/2 暗灰黄色土 しまり強い 粘性強い φ10mm 褐色土ブロック・灰黄色花崗岩粒ブロック少量混入
- 7 10YR5/2 灰黄褐色土 しまり強い 砂質 褐色粘土質土ブロック少量混入 φ10~100mm 褐色土少量混入
- 8 2.5Y5/2 暗灰黄色土 砂質 φ10mm 近い黄褐色土ブロック少量混入 花崗岩粒多量混入
- 9 10YR4/2 灰黄褐色土 しまり強い 粘性あり φ10~200mm 褐色土ブロック多量混入 砂混入
- 10 10YR4/2 灰黄褐色土 しまり強い 粘性強い 砂主体 φ10~20mm 近い褐色土ブロック少量混入
- 11 10YR4/2 灰黄褐色土 しまり強い 粘性強い φ10~50mm 褐色土ブロック・近い褐色土ブロック少量混入
- 12 10YR5/2 灰黄褐色土 しまり強い 粘性あり φ10~100mm 黄褐色粘質土少量混入



第158図 SF01 遺構図

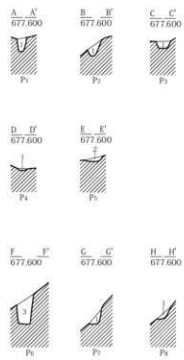
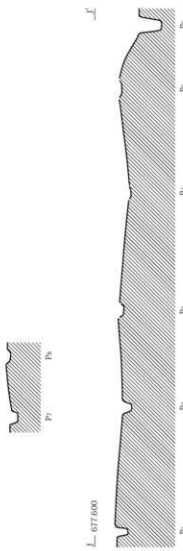
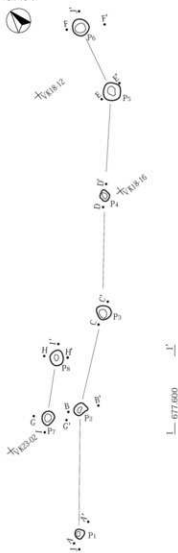
- 1 7.5YR5/3 近い褐色土 しまり強い 粘性強い 粘質 φ10~20mm 明赤褐色粘土土ブロック少量混入
- 2 10YR5/2 灰黄褐色土 φ10~50mm 明褐色粘質土ブロック・オリーブ灰色砂質土ブロック少量混入
- 3 10YR1.7/1 黒色土 炭化物細
- 4 2.5YR4/3 近い赤褐色土 しまり強い 粘土
- 5 10YR1.7/1 黒色土 炭化物混入 φ10mm 粘土土ブロック少量混入 (1.20) 50cm

SH01

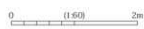


第159図 SH01 遺構図

SA01



- 1 10YR4/3 に近い黄褐色土
しまり強い、粘性なし
φ3~7mm 花崗岩の礫少量混入
- 2 10YR4/6 褐色土
しまり弱い、粘性なし
φ3~4mm 礫・炭化物少量混入
- 3 10YR4/2 灰黄褐色土
しまり強い、粘性なし
φ2~5mm 花崗岩の礫少量混入



第160図 SA01 遺構図

第3節 2区の遺構

1 概要

2区は調査対象地内の中央部、独立丘陵の尾根部分である(第128図)。

平成24年度の踏査(地表面観察)で、堀切と考えられる窪みや平坦地がみつかり、現況測量図を作成した(第161図)。平坦地は、尾根筋の東側や尾根の裾で確認した(第162図)。

発掘作業はトレンチ調査(第163図)から着手し、窪みは堀切か、平坦地は人為的なものか、尾根筋に遺構が存在するかを軸に検討した。その結果、この窪みは幅約3m、深さ約2m、断面形がV字形の落込みで、平坦地は人為的に構築したと考えられるものがあつた。尾根筋に遺構はないことが分かった。

2 基本土層(第164図)

尾根筋では表土直下が地山(灰色の花崗岩風化層)となる。尾根の両側斜面では表土下層に斜面からの堆積土、地山(褐色の花崗岩風化層)となる。この堆積土は地山との峻別が困難な場所もあつた。基本土層については、整理作業時に再検討して作成した。

神之峯城跡2区の基本土層

I層: 10YR4/1 褐色。φ1~5mm 花崗岩粒が10%混入。表土。尾根の全域に堆積する。

II層: 斜面に堆積し、土質や色調によって4分層した。

II 1層: 2.5Y5/6 黄褐色。全体に褐色化する砂質のシルトで、木根が多く入る。地山(花崗岩風化層、III 1層)を基調とするφ1~5mm 花崗岩粒が5%混入する。粘性が弱く、しまりがある。現地指導を受けた松島信幸氏からは、森林土壌と認識できるとの指摘を受けた。粘性があり、しまる。

II 2層: 2.5Y5/2 暗灰褐色。灰色の花崗岩風化層主体層で、斜面上方(尾根筋)の堆積する花崗岩風化層、III 2層)が風雨等により流されたものと推測される。φ1~5mm 花崗岩粒が40%混入する。粘性が弱く、しまりがある。

II 3層: 2.5Y5/2 暗灰色。全体に褐色化する砂質のシルトである。地山(花崗岩風化層、III 1層)を基調とする。φ1~10mm 花崗岩粒が10%混入する。粘性が弱く、しまりがある。

II 4層: 2.5Y5/1 暗灰褐色。砂質を帯びる。粘性が弱く、しまりが弱い。

III層: 地山(花崗岩風化層)で、土質と色調によって3分層した。

III 1層: 7.5YR4/9 褐色。全体に褐色化し、場所によっては赤褐色を示す。砂質のシルトである。尾根筋では確認されず、斜面で確認される。SD201埋土に多く混入する。

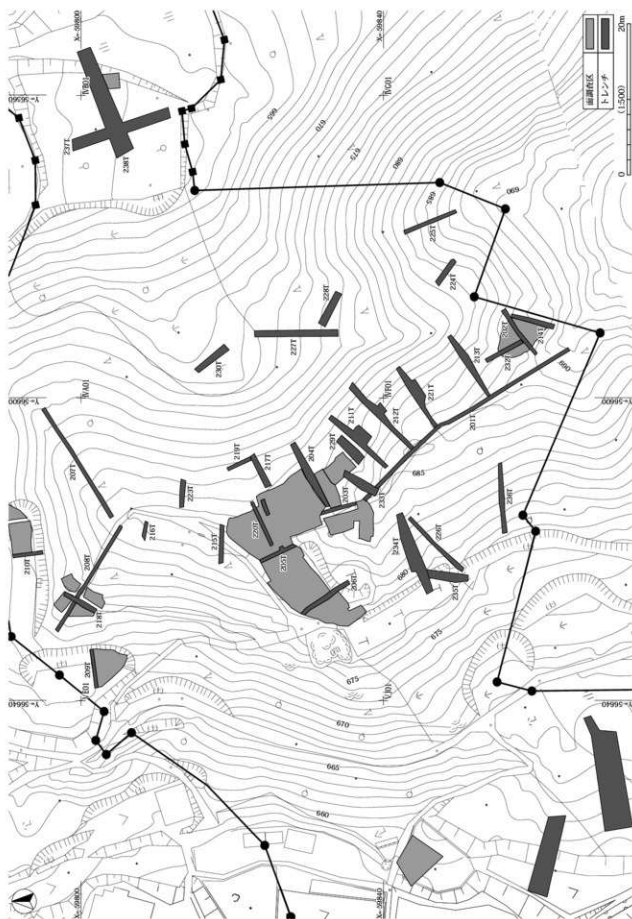
III 2層: 7.5YR4/1 褐色。基調は赤褐色に近く、砂質を強く帯びる。粒子は砂に近い。尾根筋のなかで、SD201の屈曲点南西側で確認される。

III 3層: 10YR7/6 明黄褐色。全体に灰色~白色化する。尾根筋で確認された層で、花崗岩の上層が風化によって柔らかくなったと推定される。SD201埋土に多く混入する。

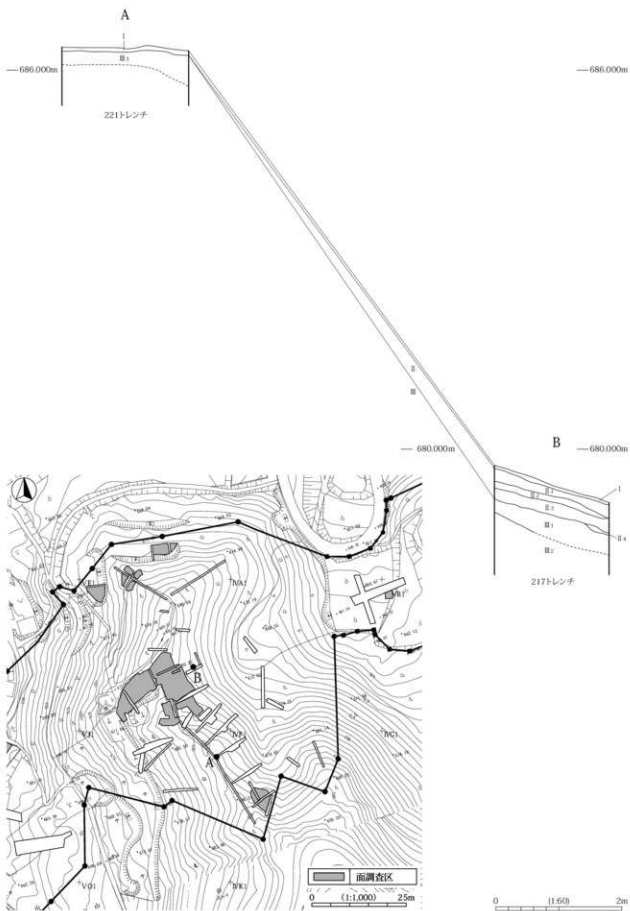
3 遺構

(1) 概要

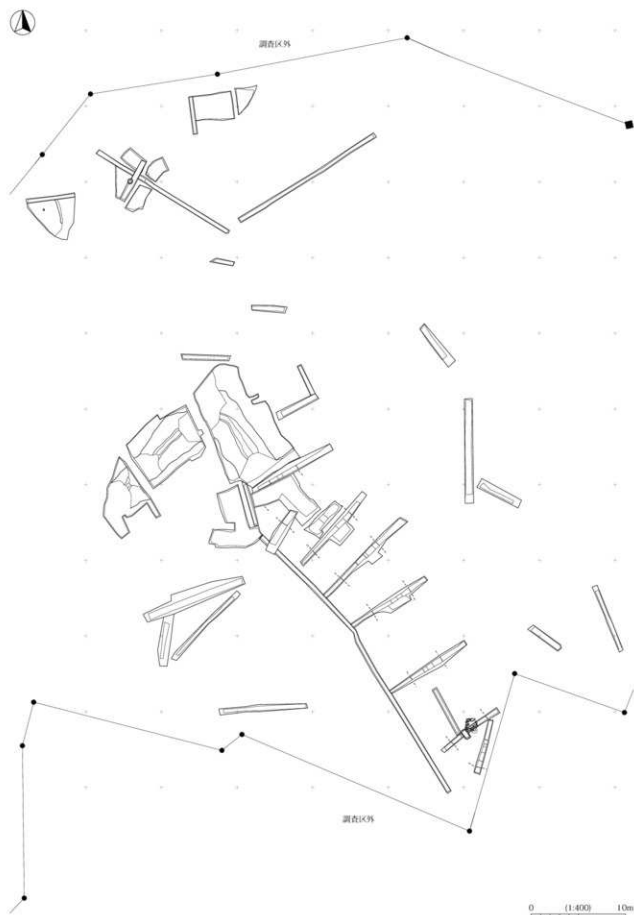
2区で検出された遺構は、溝跡1条、石組み遺構1基、土坑1基である(第165~167図)。以下、遺構ごとに記載する。



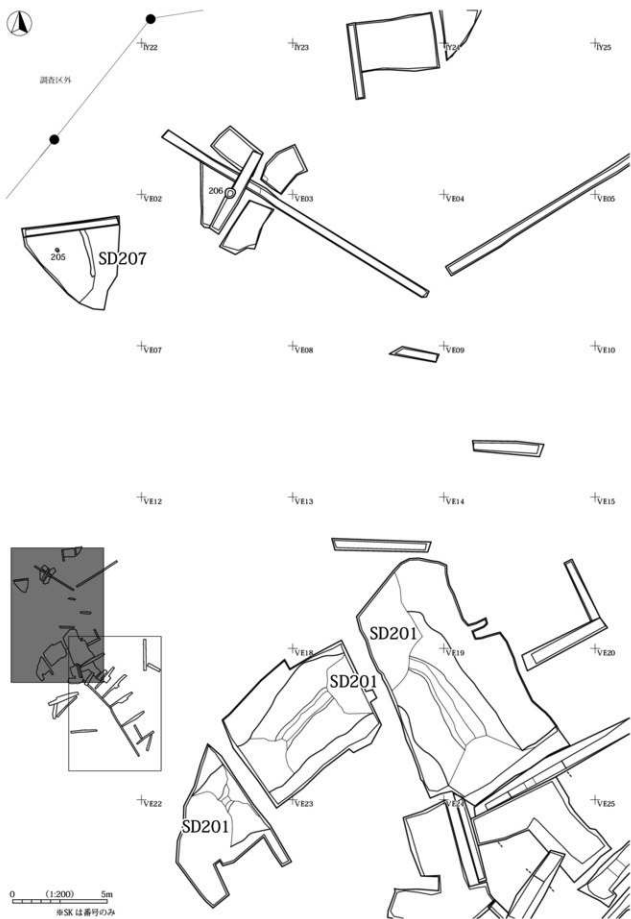
第163図 2区トレンチ配置図



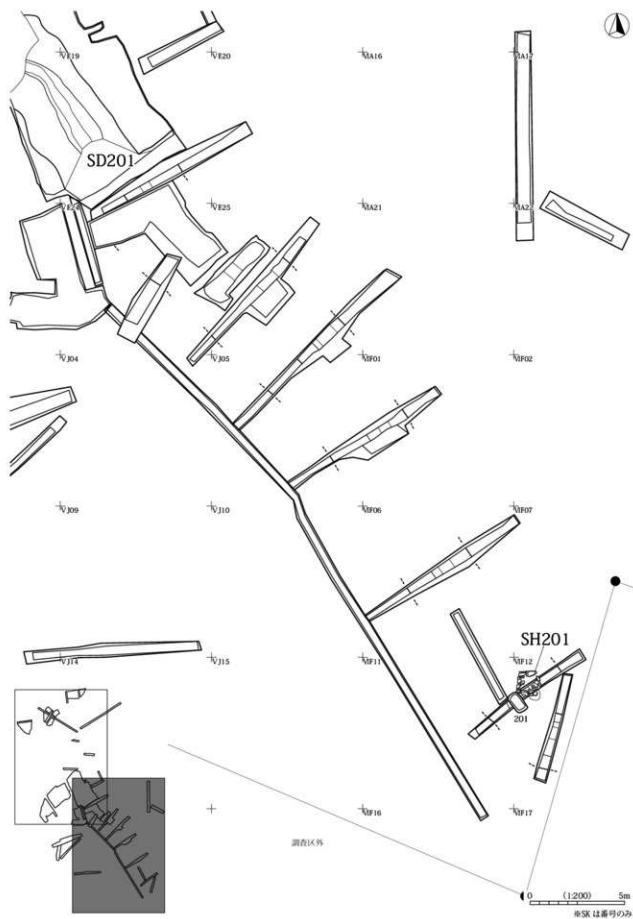
第164図 2区基本土層図



第165図 2区遺構全体図1



第166图 2区遺構全体図2



第167図 2区遺構全体図3

(2) 溝跡

SD201 [遺構：第168～175図 PL44～46]

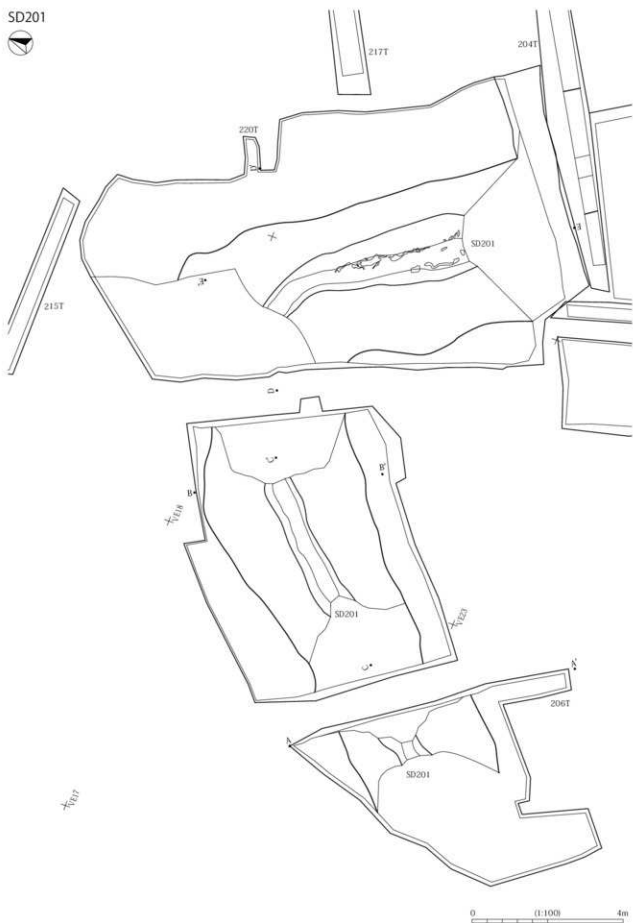
位置：VE13・14・17～19・22・24・J05・10・VI A21・VI F01・06・07・11・12・グリッド。 検出：トレンチ調査の結果を受け、尾根筋と直交方向に延びる落ち込みの存在を想定して、Ⅲ1層上面で面調査を行った。尾根の西側は急斜面で、安全面を考慮してトレンチ調査に留めた。重複：本遺構埋没後に、SH201とSK201が構築されている。埋土：本遺構には、薄い層がレンズ状に複数堆積する。場所によって堆積状況に異なりがあるが、基本土層Ⅲ1層を基調とする層、Ⅲ2層を基調とする層、Ⅲ3層を基調とする層に分けられる。構造：西側は斜面の裾まで垂下し、東側は尾根筋に沿って南東側に屈曲し、平面形は逆L字形を呈する。長さは48.39m(面調査部分：17.73m、トレンチ調査部分：30.66m)で、最大幅(検出面)4.0m、最大深度(検出面から底面まで)2.93mを測る。屈曲部を境界として、その西側と東側とでは、断面形状と深さに異なりがある。西側は、断面形状がV字形(A-A'、B-B')で、深さが2.0～2.5mを測るが、東側は上方が開口するU字形(G-G'、H-H')となる。尾根筋では、随所で地山の巨礫が露出しており、断崖絶壁の様相を呈する。屈曲部付近では、底面に窪みを確認した。また、底面の傾斜は、東側は南東から北西に、屈曲部から西側は南西方向に下がる。性格：考古学的視点から橋口定志氏、地形的視点から松島信幸氏に現地指導を得た。橋口氏はSD201が人為的に掘削した堀で、その性格は尾根もしくは谷を囲む本境堀と解釈できるとされた(橋口1990・1991)。松島氏は、SD201は尾根筋が折れた場所に位置しており、この折れは地殻変動(張力によるもの)により形成されたものと考えられるとされた。両氏の指導を受け、本遺構の底面に地割れが確認できないこと、本遺構の西側と東側とで重複がみられず、両者を一体として捉えられること、城郭遺跡が立地する独立丘陵から発見されたこと、以上の理由から「遺構」として判断した。性格は主郭部から遠い場所においても「堀切」が確認された発掘調査事例(三重県山神城跡)がある(大川ほか1992)ことから、尾根を断ち切る堀切と解釈した。出土遺物：なし。時期：埋土出土の炭化物の放射性炭素年代測定の結果は、1世紀～14世紀後半の年代を示し幅が広い。本遺構埋没後に構築したSH201とSK201は近世と推定したこと、城郭遺跡のなかに本遺構のような規模の断面形(V字形・U字形)を示す堀切が存在する場合、その時期は一般的に中世～近世に帰属することから、中世～近世と推測する(註1)。

(3) 石組み遺構

SH201 [遺構：第176図 PL46]

位置：VF12グリッド。 検出：SD201調査時に本遺構の存在を確認した。トレンチ土層断面を検討した結果、SD201が埋没した後に構築されたと判断した。202トレンチ10層上面で面調査を行い、石組みの配置を確認した。重複：SD201と重複し、本遺構が新しい。埋土：石組み上部には盛土が被さる。掘方は3分層した。構造：拳大～人頭大の礫が方形に配置され、石組みは一段である。規模は東西1.3m、南北1.3mを測る。礫は北面と西面で外側の面が揃っている。石組みの南東側に浅い円形の窪みがあるが、石組みと重複するか、石組みに伴うかは不明である。盛土の平面範囲を捉えることができなかった。なお、土層断面で確認された盛土は、最も厚い場所で15cmを測る。石組みの下層には、平面形が隅丸方形を呈する掘方がある。出土遺物：なし。時期：SK201より古い。性格：本遺構は尾根筋直下にあることと、盛土により小規模な塚状を呈していること、本遺構に伴うと推測したSK201から銭貨が出土していることから、境界を示す筋石と推測できよう。しかし、塚状の遺構にかかる石組みが必要な理由については、今後の調査事例との検討で明らかにする予定である。

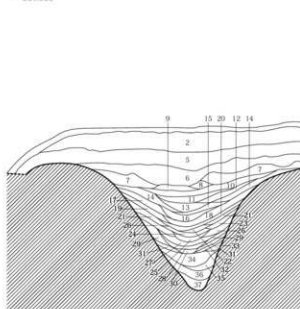
SD201



第169図 SD201 遺構図2

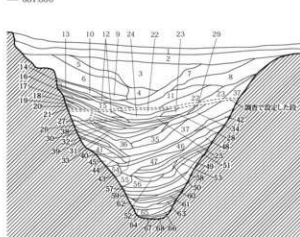
SD201断面図

A-681.000



- 9 IOYR5/3 にぶい黄褐色土 しまり弱い 粘性強い 砂質 砂多量
φ1~5mm 花崗片粒 10% 混入 SD201 埋土
- 10 IOYR5/3 にぶい黄褐色土 しまり弱い 粘性強い 砂質
φ1~10mm 花崗片粒 20% 混入 SD201 埋土
- 11 IOYR5/3 にぶい黄褐色土 しまり弱い 粘性強い 砂質 砂多量
φ1~5mm 花崗片粒 10% 混入 SD201 埋土
- 12 IOYR5/3 にぶい黄褐色土 しまり弱い 粘性強い 砂質
φ1~10mm 花崗片粒 10% 混入 SD201 埋土
- 13 IOYR5/2 灰黄褐色土 しまり弱い 粘性強い 砂質
φ1~5mm 花崗片粒 10% 混入 SD201 埋土
- 14 IOYR6/3 にぶい黄褐色土 砂質 砂多量 φ1~5mm 花崗片粒 30% 混入
SD201 埋土
- 15 IOYR5/3 にぶい黄褐色土 しまり弱い 粘性強い 砂質 粗砂多量
φ1~5mm 花崗片粒 20% 混入 SD201 埋土
- 16 IOYR5/2 灰黄褐色土 砂質 粗砂主体層 花崗片粒 1% SD201 埋土
- 17 IOYR6/3 にぶい黄褐色土 砂質 φ1~10mm 花崗片粒 40% 混入
SD201 埋土
- 18 IOYR5/3 にぶい黄褐色土 しまり弱い 粘性強い 砂質 粗砂多量
φ1~10mm 花崗片粒 20% 混入 SD201 埋土
- 19 IOYR5/3 にぶい黄褐色土 しまり弱い 粘性強い 粗砂多量
φ1~10mm 花崗片粒 30% 混入 SD201 埋土
- 20 IOYR5/2 灰黄褐色土 砂質 φ1~10mm 花崗片粒 10% 混入 SD201 埋土
- 21 IOYR5/2 灰黄褐色土 砂質 φ1~10mm 花崗片粒 40% 混入 SD201 埋土
- 22 IOYR5/3 にぶい黄褐色土 粗砂質 砂主体層
φ1~10mm 花崗片粒 10% 混入 SD201 埋土
- 23 IOYR5/3 にぶい黄褐色土 φ1~10mm 花崗片粒 30% 混入 SD201 埋土
- 24 IOYR5/2 灰黄褐色土 砂質 砂多量 φ1~5mm 花崗片粒 10% 混入
SD201 埋土

B-681.000



調査で露出した部

- 1 IOYR5/1 褐色土 しまりなし 粘性強い 砂質
砂多量 φ1~5mm 花崗片粒
5% 混入
- 2 IOYR5/2 灰黄褐色土 しまり弱い 粘性強い 砂質
φ1~5mm 花崗片粒 5%
混入
- 3 IOYR5/2 灰黄褐色土
粘性強い 砂質
φ1~5mm 花崗片粒 20%
混入
- 4 IOYR5/1 褐色土 しまり弱い 粘性強い 砂質
砂主体層 φ1~5mm 花崗
片粒 10% 混入
- 5 IOYR5/3 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性強い 砂質
φ1~5mm 花崗片粒 30%
混入
- 6 IOYR5/2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性強い 砂質
φ1~5mm 花崗片粒 20%
混入 近辺以降の瓦出し
SD201 埋土
- 7 IOYR6/3 にぶい黄褐色土 しまり弱い 粘性強い 砂質
砂多量 φ1~5mm 花崗片
粒 20% 混入 φ0.15mm
花崗片粒 5% 混入
SD201 埋土
- 8 IOYR5/3 にぶい黄褐色土
砂質 粗砂多量
φ1~5mm 花崗片粒 10%
混入 SD201 埋土
- 9 IOYR5/3 にぶい黄褐色土 砂質 φ1~10mm 花崗片粒 10% 混入
やや砂子粗い SD201 埋土
- 25 IOYR5/3 にぶい黄褐色土 砂質 φ1~10mm 花崗片粒 10% 混入
やや砂子粗い SD201 埋土
- 26 IOYR6/3 にぶい黄褐色土 砂質 φ1~10mm 花崗片粒 40% 混入
SD201 埋土
- 27 IOYR5/3 にぶい黄褐色土 砂質 砂多量 φ1~5mm 花崗片粒 5% 混入
SD201 埋土
- 28 IOYR5/3 にぶい黄褐色土 しまり弱い 粘性強い 砂質 粗砂多量
φ1~5mm 花崗片粒 10% 混入 SD201 埋土
- 29 IOYR6/3 にぶい黄褐色土 しまり弱い 粘性強い 砂質
φ1~10mm 花崗片粒 10% 混入 SD201 埋土
- 30 IOYR5/3 にぶい黄褐色土 砂質 砂主体層 φ1~5mm 花崗片粒 5% 混入
SD201 埋土
- 31 IOYR6/3 にぶい黄褐色土 しまり弱い 粘性強い 砂質
φ1~10mm 花崗片粒 40% 混入 SD201 埋土
- 32 IOYR5/2 灰黄褐色土 砂質 粗砂主体層 φ1~5mm 花崗片粒 5% 混入
SD201 埋土
- 33 IOYR5/3 にぶい黄褐色土 砂質 砂主体層 φ1~5mm 花崗片粒 30% 混入
SD201 埋土
- 34 IOYR4/3 にぶい黄褐色土 しまり弱い 粘性強い 砂質 砂主体層
φ1~5mm 花崗片粒 5% 混入 SD201 埋土
- 35 IOYR5/3 にぶい黄褐色土 砂質 砂主体層 花崗片粒 1% SD201 埋土
- 36 IOYR5/3 にぶい黄褐色土 砂質 φ1~10mm 花崗片粒 30% 混入
SD201 埋土
- 37 IOYR5/4 にぶい黄褐色土 砂質 砂主体層 φ1~5mm 花崗片粒 5% 混入
SD201 埋土

- 1 IOYR4/1 褐色土 粘子細かい φ1~5mm 細化花崗片粒 20% 混入 表土
- 2 IOYR6/3 にぶい黄褐色土 砂質 φ1~5mm 花崗片粒・粗砂 20% 混入
- 3 2.5Y/6 灰黄色土 しまり弱い 粘性強い 粗砂
φ1~3mm 花崗片粒 5% 混入 SD201 埋土
- 4 IOYR5/4 にぶい黄褐色土 しまり弱い 粘性強い 粘子細かい
φ1~5mm 花崗片粒 5% 混入 SD201 埋土
- 5 IOYR5/3 にぶい黄褐色土 砂質 φ1~5mm 花崗片粒 40% 混入
SD201 埋土
- 6 IOYR7/1 灰白色土 砂質 花崗片粒層 φ1~10mm 花崗片粒より成す
SD201 埋土
- 7 IOYR5/4 にぶい黄褐色土 粘性強い 粘子細かい 粗砂質
φ1~3mm 花崗片粒 10% 混入 SD201 埋土
- 8 IOYR5/1 褐色土 粘性強い 砂質 粘子細かい
φ1~3mm 花崗片粒 10% 混入 SD201 埋土
- 9 IOYR5/3 にぶい黄褐色土 粘子細かい φ1~5mm 花崗片粒 40% 混入
SD201 埋土
- 10 IOYR7/1 灰白色土 砂質 φ1~5mm 花崗片粒主体層
SD201 埋土
- 11 IOYR5/2 灰黄褐色土 しまり弱い 粘性強い 砂質 粗砂主体層
φ1~10mm 花崗片粒 20% 混入 SD201 埋土
- 12 IOYR4/3 にぶい黄褐色土 砂質 粘子細かい 粗砂質
φ1~5mm 花崗片粒 5% 混入 SD201 埋土
- 13 IOYR7/1 灰白色土 砂質 φ1~5mm 花崗片粒 50% 混入 SD201 埋土
- 14 IOYR4/3 にぶい黄褐色土 粘性強い 粘子細かい 花崗片粒 20% 混入
SD201 埋土
- 15 IOYR7/1 灰白色土 砂質 φ1~10mm 花崗片粒 50% 混入 SD201 埋土

0 1 (1:60) 2m

第170図 SD201 遺構図3

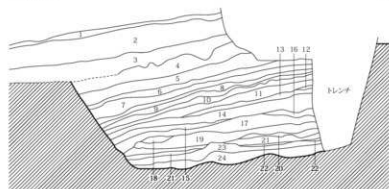
SD201断面図

備考 つぎ

- 16 10YR5/3 に近い黄褐色土 しまり強い 粘性弱い 粒子細かい
- 17 10YR7/1 灰白色土 砂質 $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ 花崗岩粒 20% 混入 SD201 埋土
- 18 10YR7/1 灰白色土 砂質 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ 花崗岩粒 50% 混入 SD201 埋土
- 19 10YR5/3 に近い黄褐色土 しまり強い 粘性弱い 粒子細かい
- 20 10YR7/1 灰白色土 砂質 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ 花崗岩粒 50% 混入 SD201 埋土
- 21 10YR5/3 に近い黄褐色土 しまり弱い 粘性弱い 粒子細かい
- 22 10YR5/4 に近い黄褐色土 しまり強い 粘性弱い 粒子細かい
- 23 10YR4/3 に近い黄褐色土 しまり強い 粘性弱い 粗砂混入
- 24 10YR4/2 灰黄褐色土 粘性弱い 粒子細かい 細砂少混
- 25 10YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性弱い 砂質 粗砂多混
- 26 10YR4/3 に近い黄褐色土 細砂混入 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ 花崗岩粒 20% 混入 SD201 埋土
- 27 10YR6/1 褐色土 しまり強い 粘性強い 砂質
- 28 10YR4/3 に近い黄褐色土 SD201 埋土
- 29 10YR6/1 褐色土 砂質 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ 花崗岩粒 40% 混入 SD201 埋土
- 30 10YR7/2 に近い黄褐色土 しまり強い 粘性強い 砂質
- 31 10YR6/1 褐色土 砂質 粗砂主体層 $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ 花崗岩粒 10% 混入 SD201 埋土
- 32 10YR4/3 に近い黄褐色土 細砂多混 $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ 花崗岩粒 5% 混入 SD201 埋土
- 33 10YR4/4 褐色土 しまり強い 粘性あり 粒子細かい
- 34 10YR4/4 褐色土 しまり強い 粘性あり 粒子細かい
- 35 10YR5/4 に近い黄褐色土 しまり強い 粘性強い 砂質
- 36 10YR7/1 灰白色土 しまりなし 粘性なし
- 37 10YR5/4 に近い黄褐色土 粗砂混入 $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ 花崗岩粒 20% 混入 SD201 埋土
- 38 10YR5/3 に近い黄褐色土 粒子細かい $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ 花崗岩粒 20% 混入 SD201 埋土
- 39 10YR7/1 灰白色土 しまりなし 粘性なし 砂質
- 40 10YR5/3 に近い黄褐色土 粒子細かい $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ 花崗岩粒 20% 混入 SD201 埋土

- 41 10YR7/1 灰白色土 砂質 $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ 花崗岩粒 50% 以上混入 SD201 埋土
- 42 10YR5/2 灰黄褐色土 砂質 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ 花崗岩粒 30% 混入 SD201 埋土
- 43 10YR5/2 灰黄褐色土 砂質 粗砂主体層 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ 花崗岩粒 10% 混入 SD201 埋土
- 44 10YR5/3 に近い黄褐色土 砂質 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ 花崗岩粒 40% 混入 SD201 埋土
- 45 10YR7/1 灰白色土 砂質 $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ 花崗岩粒 50% 混入 SD201 埋土
- 46 10YR4/4 褐色土 砂質 粗砂多混 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ 花崗岩粒 10% 混入 SD201 埋土
- 47 10YR5/2 灰黄褐色土 しまり強い 粘性弱い 粒子細かい 粗砂・粗砂混
- 48 10YR5/2 灰黄褐色土 粗砂 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ 花崗岩粒 40% 混入 SD201 埋土
- 49 10YR4/3 に近い黄褐色土 しまりあり 粘性あり $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ 粗砂 40% 混入 SD201 埋土
- 50 10YR4/4 褐色土 粒子細かい $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ 花崗岩粒 10% 混入 SD201 埋土
- 51 10YR5/1 褐色土 砂質 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ 花崗岩粒 40% 混入 SD201 埋土
- 52 10YR4/3 に近い黄褐色土 粗砂多混 SD201 埋土
- 53 10YR4/4 褐色土 粘性強い 粒子細かい $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ 花崗岩粒 10% 混入 SD201 埋土
- 54 10YR4/2 灰黄褐色土 粗砂多混 変形風化土のブロック
- 55 10YR4/3 に近い黄褐色土 砂質 変形風化土のブロック SD201 埋土
- 56 10YR6/2 灰黄褐色土 砂質 $\phi 10 \sim 20\text{mm}$ 褐色土ブロック 10% 混入
- 57 10YR4/3 褐色土 粗砂 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ 花崗岩粒 20% 混入 SD201 埋土
- 58 7.5YR5/4 に近い褐色土 しまり強い 粘性強い 砂質 粒子細かい
- 59 10YR6/1 褐色土 しまり強い 粘性強い 砂質 粗砂主体層
- 60 10YR6/1 褐色土 しまり強い 粘性強い 粗砂 粗砂少混 粗砂主体層 SD201 埋土
- 61 7.5YR5/6 明褐色土 粘性強い 粒子細かい $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ 花崗岩粒 10% 混入 SD201 埋土
- 62 10YR5/2 灰黄褐色土 しまり強い 粘性強い 粗砂混
- 63 10YR5/2 灰黄褐色土 粗砂 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ 花崗岩粒 10% 混入 SD201 埋土
- 64 10YR6/1 褐色土 しまりなし 粘性なし 粗砂主体層 SD201 埋土
- 65 10YR5/3 に近い黄褐色土 粘性強い 粒子細かい
- 66 2.5Y6/1 黄褐色土 粗砂 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ 花崗岩粒 10% 混入 (下部に多い) SD201 埋土
- 67 2.5Y4/2 灰黄褐色土 粘性弱い 粒子細かい $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ 花崗岩粒 10% 混入 SD201 埋土
- 68 2.5Y4/3 オリーブ褐色土 しまりなし 粘性なし 砂質 粗砂主体層 SD201 埋土

C 680.000



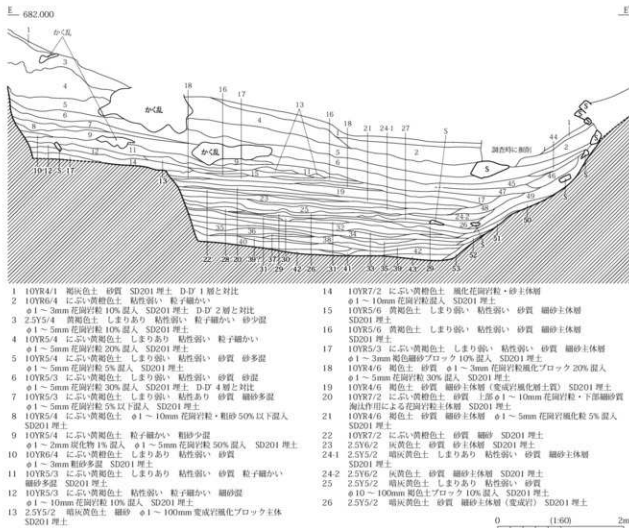
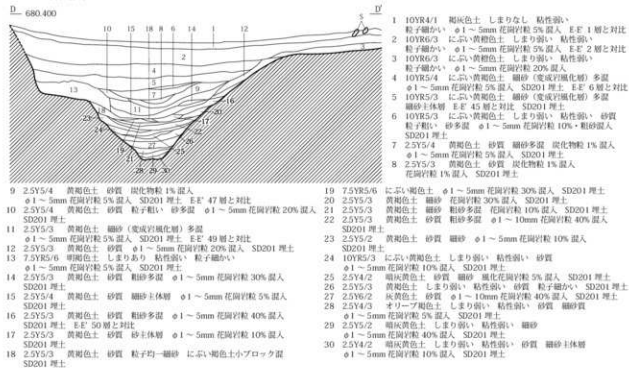
- 1 10YR4/1 褐色土 粒子細かい $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ 風化花崗岩粒 20% 混入 表土
- 2 10YR6/3 に近い黄褐色土 砂質 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ 花崗岩粒・粗砂 20% 混入
- 3 2.5YR6/2 灰黄褐色土 しまり強い 粘性強い 粗砂
- 4 $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ 花崗岩粒 5% 混入 変形風化土の乱石層
- 5 10YR5/4 に近い黄褐色土 しまり強い 粘性強い 砂質混 粗砂多混
- 6 10YR4/4 褐色土 しまり強い 粘性強い 砂質 粗砂
- 7 10YR4/4 褐色土 しまり強い 粘性強い 砂質 粗砂
- 8 10YR4/4 褐色土 しまり強い 粘性強い 砂質 粗砂
- 9 10YR4/4 褐色土 しまり強い 粘性強い 砂質
- 10 10YR5/1 褐色土 しまり強い 粘性強い 砂質
- 11 10YR5/1 褐色土 しまり強い 粘性強い 砂質
- 12 10YR5/3 に近い黄褐色土 しまりあり 粘性強い 砂質

- 13 10YR5/2 灰黄褐色土 砂質混 粗砂多混 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ 花崗岩粒 20% 混入 SD201 埋土
- 14 10YR5/3 に近い黄褐色土 砂質 下部粗砂多混
- 15 10YR5/3 に近い黄褐色土 粗砂 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ 花崗岩粒 30% 混入 SD201 埋土
- 16 10YR4/4 褐色土 しまり強い 粘性強い 砂質 粗砂少混 SD201 埋土
- 17 10YR4/4 褐色土 しまり強い 粘性強い 砂質 粗砂少混 SD201 埋土
- 18 10YR4/3 に近い黄褐色土 しまり強い 粘性強い 砂質 粗砂多混・粗砂少混
- 19 10YR4/3 に近い黄褐色土 粗砂 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ 花崗岩粒 5% 混入 SD201 埋土
- 20 10YR4/3 に近い黄褐色土 粗砂 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ 花崗岩粒 20% 混入 SD201 埋土
- 21 10YR5/3 に近い黄褐色土 粗砂 $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ 花崗岩粒 40% 混入 SD201 埋土
- 22 10YR5/3 に近い黄褐色土 粗砂 $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ 花崗岩粒 40% 混入 SD201 埋土
- 23 10YR5/2 灰黄褐色土 粗砂 $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ 花崗岩粒 40% 混入 SD201 埋土
- 24 10YR5/2 灰黄褐色土 粗砂 $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ 花崗岩粒 40% 混入 SD201 埋土

0 100.0 200.0

第171図 SD201 遺構断面図

SD201断面図



第172図 SD201 遺構図5

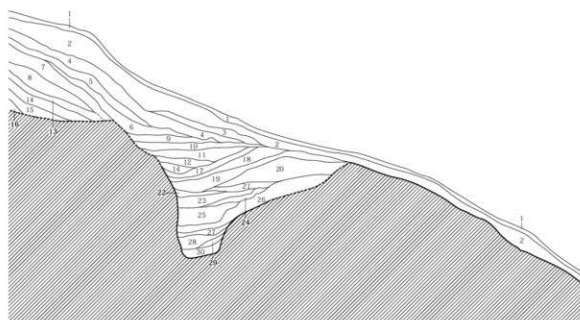
SD201断面図

E—F

- 27 2.5V5/2 暗灰黄色土 砂質 SD201埋土
- 28 2.5V4/3 オリーブ褐色土 砂質 変成岩風化層混入 SD201埋土
- 29 2.5V6/2 灰黄色土 砂質 細砂主体層 SD201埋土
- 30 2.5V4/3 オリーブ褐色土 砂質 $\phi 10 \sim 20\text{mm}$ 褐色土ブロック 10%混入 SD201埋土
- 31 2.5V6/2 灰黄色土 砂質 SD201埋土
- 32 2.5V4/3 オリーブ褐色土 砂質 細砂主体層 $\phi 10 \sim 30\text{mm}$ 褐色土ブロック 20%混入 SD201埋土
- 33 2.5V5/2 暗灰黄色土 砂質 粗砂混 細砂主体層 SD201埋土
- 34 2.5V5/2 暗灰黄色土 しまりあり 粘性強い 砂質 SD201埋土
- 35 2.5V4/3 オリーブ褐色土 しまり強い 粘性強い 砂質 細砂主体層 SD201埋土
- 36 2.5V5/2 暗灰黄色土 砂質 SD201埋土
- 37 2.5V4/2 暗灰黄色土 砂質 $\phi 10\text{mm}$ 褐色土ブロック 5%混入 SD201埋土
- 38 2.5V4/2 暗灰黄色土 しまり強い 粘性強い 砂質 細砂主体層 SD201埋土
- 39 2.5V4/2 暗灰黄色土 砂質 粗砂主体層 SD201埋土
- 40 2.5V4/2 暗灰黄色土 SD201埋土
- 41 2.5V6/2 灰黄色土 しまり強い 粘性強い 細砂 $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ 花崗岩粒 10%混入 SD201埋土

- 42 2.5V4/4 オリーブ褐色土 しまり強い 粘性強い 細砂 (変成岩由来) SD201埋土
- 43 10YR5/3 にふい黄色土 砂質 $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ 花崗岩粒 40%混入 SD201埋土
- 44 10YR5/2 灰黄色土 しまり強い 粘性あり 細砂主体 $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ 花崗岩粒 10%混入 SD201埋土
- 45 10YR5/3 にふい黄色土 粘性あり 細砂多量混入 SD201埋土 D-D' 5層と対比
- 46 10YR5/3 にふい黄色土 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ 花崗岩粒 30%混入 SD201埋土
- 47 10YR5/2 暗灰黄色土 しまり強い 粘性あり 砂質 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ 花崗岩粒 5%混入 SD201埋土 D-D' 9層と対比
- 48 10YR6/3 にふい褐色土 砂質 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ 花崗岩粒 5%混入 中や灰色帯びる SD201埋土
- 49 10YR5/3 にふい黄色土 しまり強い 粘性強い 砂質 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ 花崗岩粒 40%混入 SD201埋土 D-D' 11層と対比
- 50 10YR5/3 にふい黄色土 粘性あり 細砂多量混入 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ 花崗岩粒 20%混入 SD201埋土 D-D' 16層と対比
- 51 10YR5/2 灰黄色土 $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ 花崗岩粒 40%混入 SD201埋土
- 52 7.5YR5/4 にふい褐色土 粘性あり 粒子細かい $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ 花崗岩粒 20%混入 SD201埋土
- 53 2.5Y3/3 黄褐色土 しまり強い 粘性あり 砂質 細砂多量混入 $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ 花崗岩粒 20%混入 SD201埋土

E—683.000



- 1 10YR5/2 灰黄色土 しまり強い 粘性強い 砂多量混入 $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ 花崗岩粒 20%混入
- 2 2.5V6/4 にふい黄色土 粘性あり $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ 花崗岩粒 20%混入
- 3 2.5V6/4 にふい黄色土 粘性強い 砂質 粗砂少量混入 $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ 花崗岩粒 20%混入
- 4 2.5V6/4 にふい黄色土 砂質 細砂主体 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ 花崗岩粒 10%混入
- 5 10YR6/3 にふい黄色土 砂質 砂多量混入 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ 花崗岩粒 20%混入
- 6 10YR6/2 灰黄色土 砂質 粗砂少量混入 $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ 花崗岩粒 20%混入
- 7 10YR6/2 灰黄色土 しまり強い 粘性強い 細砂主体 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ 花崗岩粒 40%混入
- 8 10YR6/1 暗灰色土 砂質 細砂主体 $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ 花崗岩粒 30%混入
- 9 10YR6/2 灰黄色土 砂質 $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ 花崗岩粒 20%混入 SD201埋土
- 10 2.5V3/3 にふい褐色土 しまり強い 粘性強い 砂質 砂主体 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ 花崗岩粒 10%混入 SD201埋土
- 11 2.5V6/2 灰黄色土 砂質 粗砂多量混入 $\phi 3 \sim 5\text{mm}$ 花崗岩粒 30%混入 SD201埋土
- 12 2.5V6/2 灰黄色土 砂質 細砂主体 $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ 花崗岩粒 20%混入 SD201埋土
- 13 2.5V6/2 灰黄色土 砂質 細砂主体 $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ 花崗岩粒 20%混入 SD201埋土
- 14 10YR4/6 褐色土 砂質 細砂主体 $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ 花崗岩粒 10%混入 SD201埋土
- 15 2.5V5/1 黄灰色土 砂質 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ 花崗岩粒 30%混入 SD201埋土
- 16 2.5V5/1 黄灰色土 砂質 細砂主体 $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ 花崗岩粒 20%混入 SD201埋土

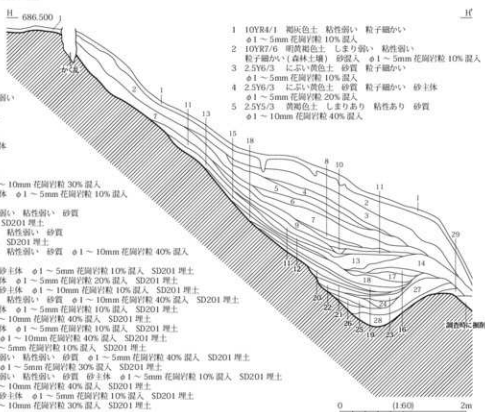
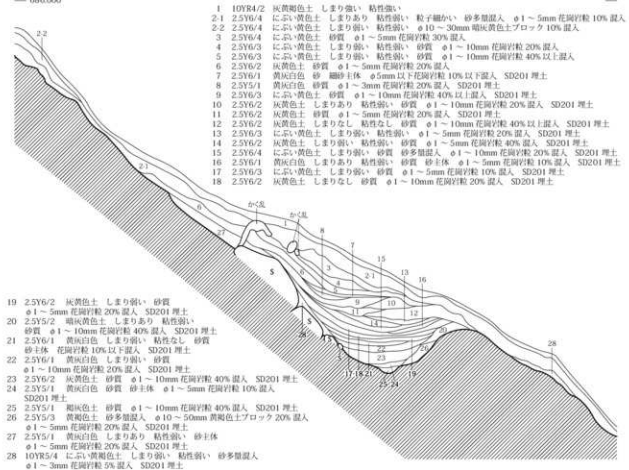
- 17 2.5V5/2 暗灰黄色土 砂質 細砂主体 $\phi 1\text{mm}$ 前後の粗砂 10%混入 SD201埋土
- 18 2.5V5/1 黄灰色土 しまりあり 粘性強い 粗砂 $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ 花崗岩粒 40%混入 SD201埋土
- 19 2.5V6/3 にふい黄色土 粘性強い 砂質 砂多量混入 $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ 花崗岩粒 30%混入 SD201埋土
- 20 2.5V6/2 灰黄色土 砂質 砂多量混入 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ 花崗岩粒 20%混入 SD201埋土
- 21 2.5V5/2 暗灰黄色土 しまり強い 粘性強い 細砂 粗砂混入 $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ 花崗岩粒 10%混入 SD201埋土
- 22 2.5V6/2 灰黄色土 砂質 細砂主体 $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ 花崗岩粒混入 SD201埋土
- 23 2.5V6/2 灰黄色土 しまり強い 粘性強い $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ 花崗岩粒 20%混入 SD201埋土
- 24 10G6/1 緑灰色土 細砂 $\phi 1\text{mm}$ 粗砂 30%混入 $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ 花崗岩粒混入 SD201埋土
- 25 2.5V5/2 暗灰黄色土 砂質 $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ 花崗岩粒 20%混入 にふい黄色土とラップ状に混入 SD201埋土
- 26 2.5V5/1 黄灰色土 砂質 粗砂主体 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ 花崗岩粒 20%混入 SD201埋土
- 27 2.5V6/2 灰黄色土 しまり強い 粘性強い 砂質 砂主体 $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ 花崗岩粒 20%混入 SD201埋土
- 28 2.5V5/2 暗灰黄色土 砂質 $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ 花崗岩粒 40%混入 SD201埋土
- 29 2.5V5/2 暗灰黄色土 しまり強い 粘性なし 細砂 SD201埋土
- 30 2.5V5/1 黄灰色土 しまり強い 粘性強い 砂質 粗砂混入 $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ 花崗岩粒 40%混入 SD201埋土

0 (1:60) 2m

第173図 SD201 遺構図6

SD201断面図

G 686.000

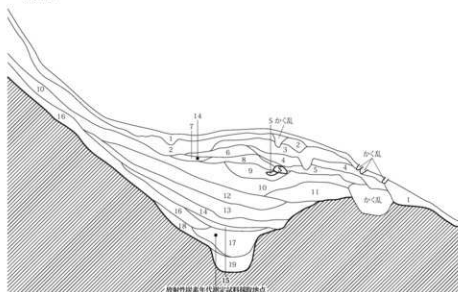


第174図 SD201 遺構図7

SD201断面図6

L 689.500

1'



- | | |
|--|--|
| 1 10YR3/2 黒褐色土 | 11 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまりなし 砂質 粘子粘い 花崗岩層主体 |
| 2 10YR5/4 にぶい黄褐色土 粘性強い 粘子細かい | 12 10YR5/4 にぶい黄褐色土 砂質 φ2～3mm 花崗岩粒多量混入 |
| 3 2.5Y6/4 にぶい黄褐色土 粘性強い 砂質 粘子細かい | 13 10YR5/4 にぶい黄褐色土 砂質 SD201埋土 |
| 4 2.5Y5/2 暗灰黄色土 砂質強い φ1～5mm 花崗岩粒 10% 混入 | 14 10YR6/3 にぶい黄褐色土 砂質 花崗岩層主体 |
| 5 2.5Y5/4 黄褐色土 粘性強い 細砂 粘子細かい 粗砂少量混入 | 15 10YR6/2 灰黄褐色土 砂質 粘子細かい 細粒砂混入 (成成岩風化層) |
| 6 2.5Y5/4 黄褐色土 粘子細かい φ1～5mm 花崗岩粒 10% 混入 | 16 10YR6/4 にぶい黄褐色土 花崗岩と砂質土の混合層 花崗岩ブロック混入 |
| 7 2.5Y4/1 黄灰色土 しまり強い 粘性強い 炭化物多量混入 | 17 10YR6/2 灰黄褐色土 しまりなし 砂質 花崗岩層主体 細粒砂多量混入 |
| 8 2.5Y5/4 黄褐色土 砂質 φ1～5mm 花崗岩粒 30% 混入 SH201埋土 | 18 10YR6/3 にぶい黄褐色土 砂質 φ1～2mm 花崗岩粒 40% 混入 |
| 9 10YR4/4 褐色土 しまり強い 砂質 粘子細かい | 19 10YR6/2 灰黄褐色土 しまり強い 砂質シルト |
| 10 10YR5/3 にぶい黄褐色土 花崗岩混入 | φ1～2mm 花崗岩粒 40% 混入 SD201埋土 |

第175図 SD201 遺構図8

(4) 土坑

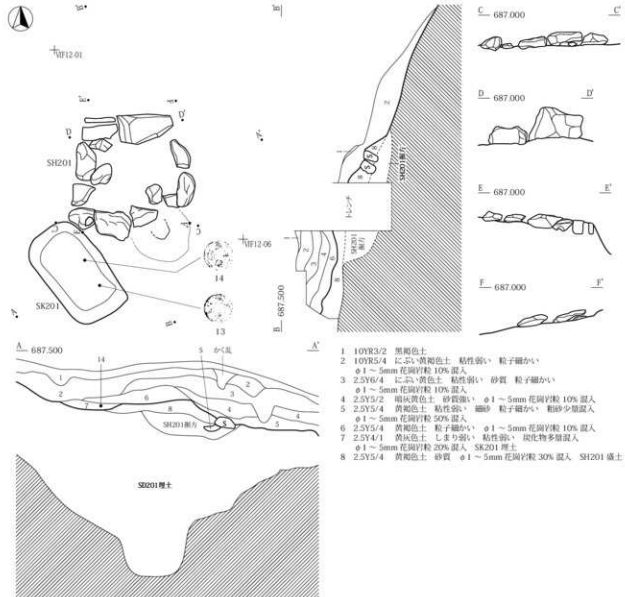
SK201 [遺構: 第176図 PL46、銭貨: 第205図]

位置: VF11・12グリッド。 検出: SH201周辺の土層断面観察で、SH201の盛土上面を掘り込む浅い落ち込みを確認した。プランはSH201の石組みと同じ検出面で検出した。 重複: SH201盛土が形成された後に構築されている。 埋土: 1層は炭化物層である。 構造: 長辺1.12m、短辺0.64m、検出面からの深さ10cmを測る。平面形は隅丸の長方形で、主軸は36°Wで、SH201の石組みの軸より西へ45°振れる。 出土遺物: 銭貨が2枚(第205図13・14)出土した。文字が判読できた銭貨は治平元貨(北宋1064)である。 時期: 埋土1層出土炭化物3点を放射性炭素年代測定した。その結果、16世紀前半～17世紀後半の時期を示した。出土銭貨は11世紀以降であるが、年代測定値から近世以降と考える。 性格: 本遺構はSH201盛土に接しており、深さが浅いことからSH201に伴う窪みと推測した。また、2枚重なって銭貨が出土していることから、銭貨の埋納行為があったものと推測する。

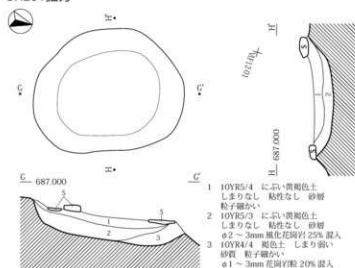
註

- 1) 福島県の阿津賀志山防塁に代表されるが、平安時代には尾根等を断ち切る堀切が存在する。しかし、曲輪、堀切など複数の城郭施設により構成され、居住もしくは仮居住機能をもつ「城郭」は、考古学的には中世以降に形成されるとの河西の認識に立脚したものである。

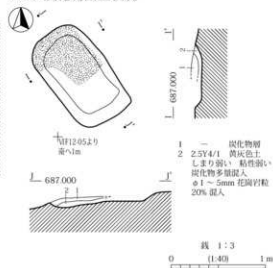
SH201・SK201



SH201掘方



SK201炭化物出土状況



第176図 SH201・SK201 遺構図

第4節 3区の遺構

1 概要

3区は神之峯城跡の調査対象地の東側にあたる尾根とした(第128図)。この尾根にある平坦な場所を3-1区、東側斜面を3-2区、東側斜面の裾から遺跡範囲までを3-3区、尾根の西側にある谷状地形を3-4区と細分した。平成24年度の踏査(地表面観察)では、3-1区で広大な平坦地(平坦地301~303)、3-2区で三日月形の平坦地(平坦地304、305)を確認した。調査で認識した平坦地を図示したものが第177図である。3区の平坦地301~303の面積は広大である。調査前は一面竹林で、竹林以前が畑として明治年間に耕作していたという。なお、調査の結果、3-1区には埋没谷(以下、谷状地形)が存在することが分かった。

発掘作業はトレンチ調査から着手し、平坦地が人為的に構築されたものか、その時期と平坦地に伴う遺構・遺物が存在するのかを軸に検討した。その結果、平坦地301ではピットと埋没した谷状地形が確認され、平坦地301~303で面調査を実施した。なお、平坦地304・305は、盛土から近世の陶磁器が出土したことから、近世以降に構築されたと判断し、トレンチ調査に留めた。

遺構検出は2面で実施した。1面は表土(Ⅰ層)・現耕作土(Ⅱ層)を剥いだ面で、谷状地形以外はⅤ4層、谷状地形においてはⅡ層上面またはⅢ層上面である。2面は谷状地形の堆積層を下げたⅤ4層(部分的にⅣ3層)である。

3区で確認した遺構の時期であるが、2面の遺構は、検出面と遺構内遺物から中世と推測した。1面の遺構は、谷状地形の埋没後に構築されている。遺構内遺物が少ないため、時期が特定しがたい。ただし、2面で確認した遺構出土遺物のなかで最も新しいものが大窯4段階(後半)であることから、少なくとも16世紀末以降と推測する(大窯の年代観は藤澤2002による)。本報告では、1面の遺構の時期を中世以降と記述する。

2 基本土層(第179図)

3区の基本土層は、平坦地301の南側にある尾根部と谷状地形に堆積する層をもとに作成した。なお、谷状地形内での古環境変遷と土地利用を捉えるため、花粉分析、珪藻分析、プラント・オパール分析を行い、Ⅳ3層からイネの植物珪酸体が3,000個/g検出され、同層で水田耕作が行われた可能性が高いとの結果が出ている。

神之峯城跡3区の基本土層

Ⅰ層：表土と現耕作土である。Ⅰ1層は平坦地301南側の尾根に、Ⅰ2層は平坦地301~303に堆積する。

Ⅰ1層：10YR2/1黒色。表土である。

Ⅰ2層：10YR3/1黒褐色。現耕作土である。

Ⅱ層：谷状地形に堆積する層である。Ⅱ層は谷状地形のなかの中央部から北西側に堆積する。色調はⅡ5層を除き、褐色~暗褐色土で、花崗岩風化層(Ⅴ4層)主体層である。Ⅱ層からは、古瀬戸製品(古瀬戸後Ⅲ~Ⅳ期)が出土した。土質や色調によってⅡ1層~Ⅱ9層に分けた。

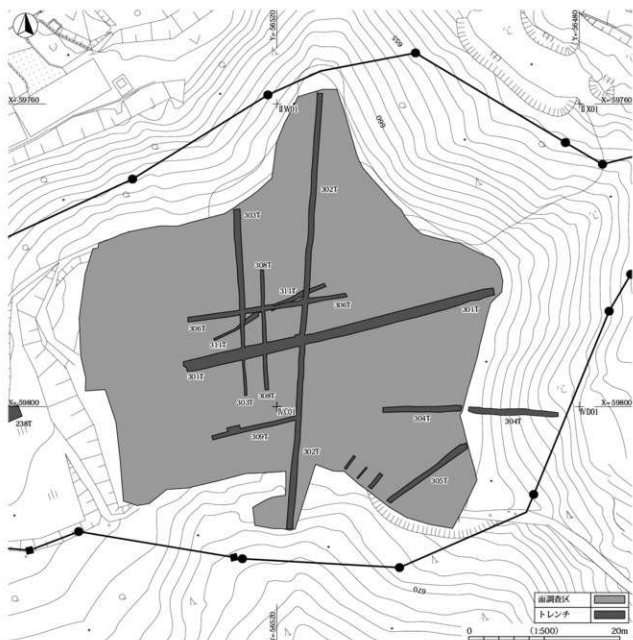
Ⅱ1層：10YR3/1黒褐色。色調は全体に暗灰色化する。本層下部にφ5~8cm礫が混入する。谷状地形を埋めたと推測した。天目茶碗、すり鉢(古瀬戸後Ⅲ~Ⅳ期)、青磁碗などが出土した。

Ⅱ2層：10YR3/4暗褐色。炭化物が混入する。谷状地形の中央部から斜面下方に堆積する。天目茶碗、すり鉢、平碗(古瀬戸後Ⅲ~Ⅳ期)などが出土した。



第177図 3区平地地認識図

- Ⅱ3層：10YR4/6褐色。黄褐色土ブロックが多量に混入し、SH301を被覆する。すり鉢（大窯1段階）が出土した。
- Ⅱ4層：10YR4/6褐色。しまりが強い土である。暗褐色土がブロック状に混入する。
- Ⅱ5層：10YR4/3にぶい黄褐色。黒色を帯び、色調は黒褐色に近い。暗褐色土ブロックが多量に混入し、しまりが強く、粘性がある土である。直縁大皿、平碗（古瀬戸後Ⅲ～Ⅳ期）などが出土した。
- Ⅱ6層：10YR4/4褐色。暗褐色土ブロックが混入し、しまりが強く、粘性がある。
- Ⅱ7層：10YR5/6黄褐色。黄褐色土ブロックと褐色土ブロックが混合する層である。しまりと粘性が強い。
- Ⅱ8層：10YR4/6褐色。土質はⅡ6層に酷似する。炭化物粒と多量の黄褐色土ブロックが混入する。しまりと粘性が強い。
- Ⅱ9層：10YR4/6褐色。しまりと粘性が強い。
- Ⅲ層：谷状地形の奥部（南東側）に堆積する。谷状地形がほぼ埋没した後に堆積した層で、土質と色調により、Ⅲ1層～Ⅲ3層に分けた。
- Ⅲ1層：10YR4/6褐色。しまりが強く、粘性がある。平碗（古瀬戸後Ⅱ期）が出土した。
- Ⅲ2層：10YR4/4褐色。土質はⅡ8層に酷似する。しまりと粘性が強い。茶壺（古瀬戸後期）、祖母懷茶壺（古瀬戸後Ⅲ期）、四耳壺（古瀬戸後Ⅲ～Ⅳ期）などが出土した。
- Ⅲ3層：10YR4/3にぶい黄褐色。炭化物粒とⅢ2層、多量の暗褐色土粒が混入する。しまりが強い。縁軸小皿（古瀬戸後Ⅲ期）、直縁大皿が出土した。
- Ⅳ層：谷状地形の底面やや上位に堆積する。Ⅳ層は谷状地形のほぼ全域に堆積し、硬化面があり色調が黒色化する点でⅡ層・Ⅲ層とは異なる。土質と色調によりⅣ層～Ⅳ3層に分けられる。
- Ⅳ1層：10YR4/1褐灰色。硬化面でⅣ2層上部を叩きしめた層と推測される。四耳壺（古瀬戸後



第178図 3区トレンチ配置図

Ⅲ期)、青磁碗が出土した。

Ⅳ2層：10YR4/4褐色。褐色土と黒色土の混合層。瓶子（古瀬戸後Ⅲ～Ⅳ期）が出土した。

Ⅳ3層：10YR3/2黒褐色。褐色土と黒色土の混合層。谷状地形のほぼ全域に堆積し、色調は全体に黒色化し、酸化鉄が集積する。303トレンチ（第179図C・D）では、層の上面が平坦化する。人為的に盛られ、平場を形成したと推測できる。筒形容器（古瀬戸後期）、天目茶碗（古瀬戸後Ⅲ期）、平碗（古瀬戸後Ⅳ期）、折縁深皿（古瀬戸後Ⅱ期）が出土した。

V層：谷状地形の底部付近に堆積する。土質と色調により、V1層～V4層に分けた。

V1層：10YR4/4褐色。V4層を主体とし、Ⅳ3層ブロックを混入する。しまりが強い。

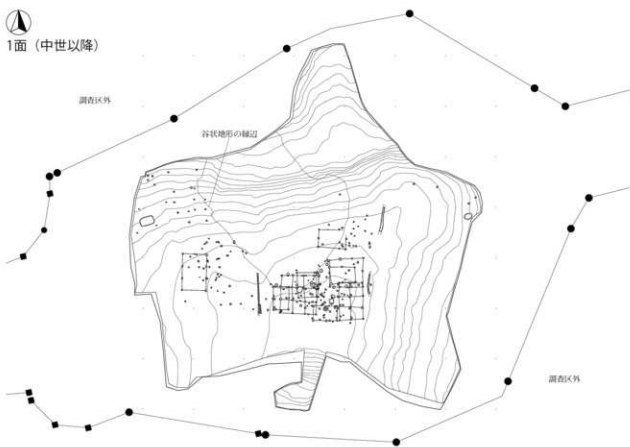
V2層：10YR4/4褐色。著しく黒色化する。Ⅲ3層ブロックと炭化物が混入する。しまりが強い。

折縁深皿（古瀬戸後Ⅱ期）が出土した。

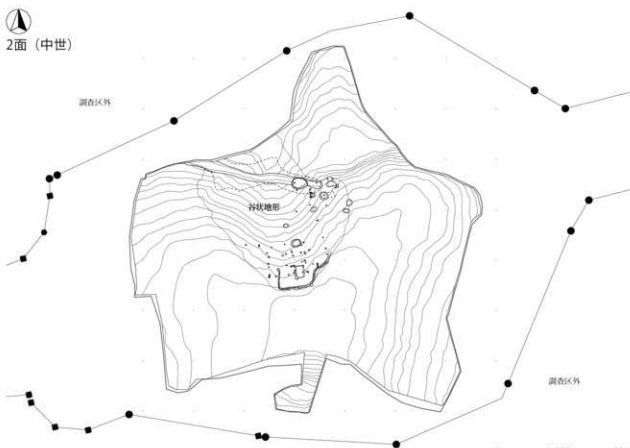
V3層：10YR4/4黄褐色。炭化物が混入する。



1面 (中世以降)

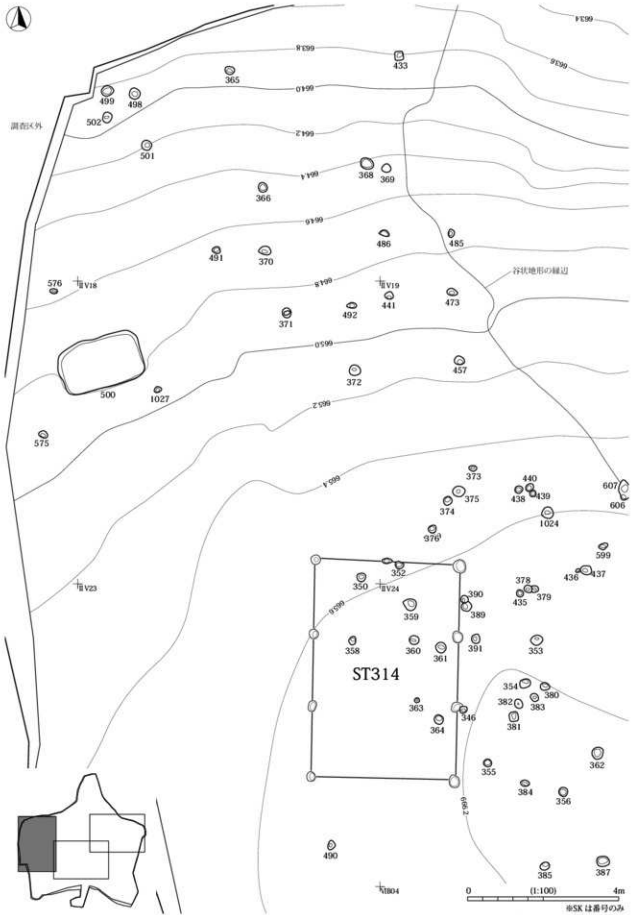


2面 (中世)

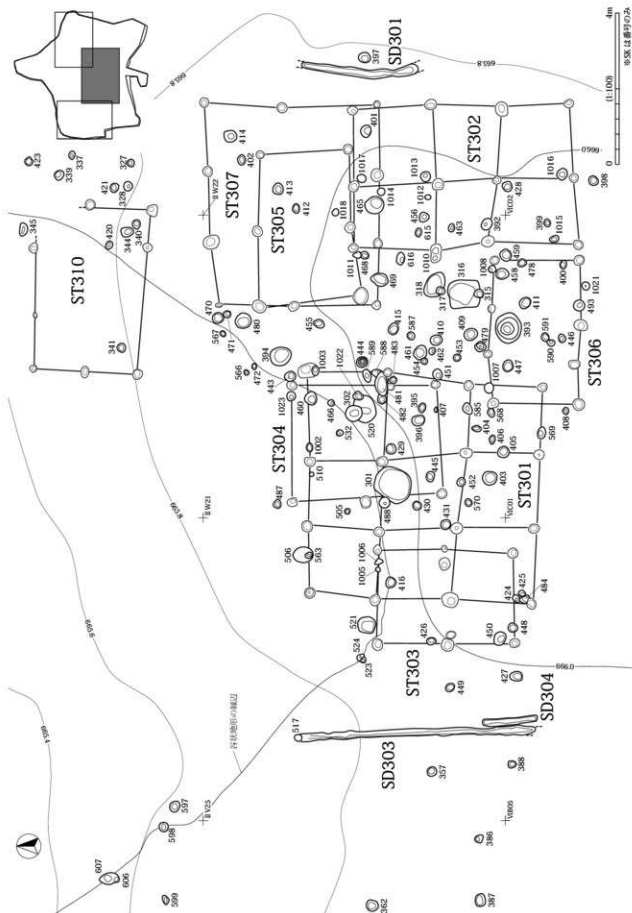


0 (1:500) 20m

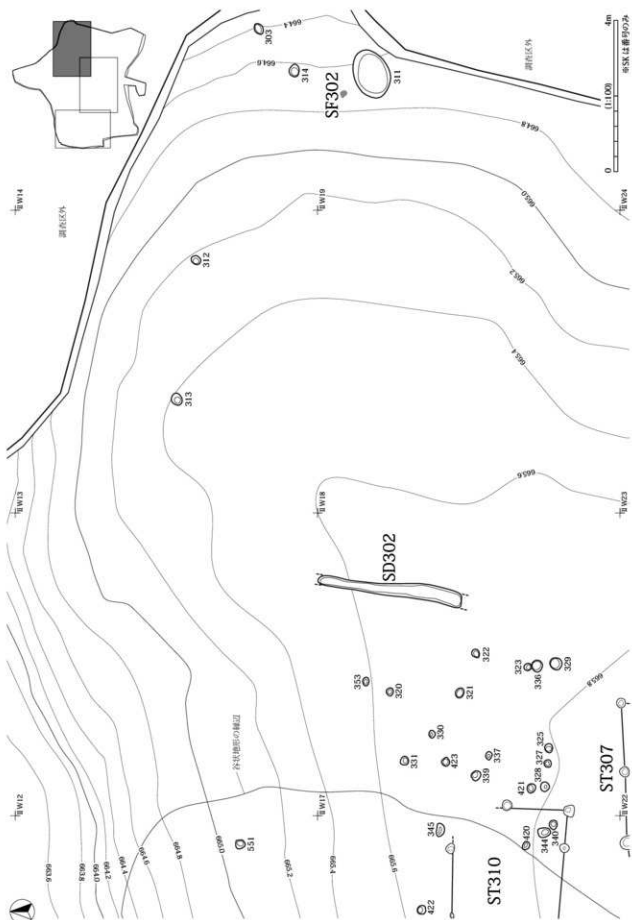
第180図 3区1面・2面遺構全体図



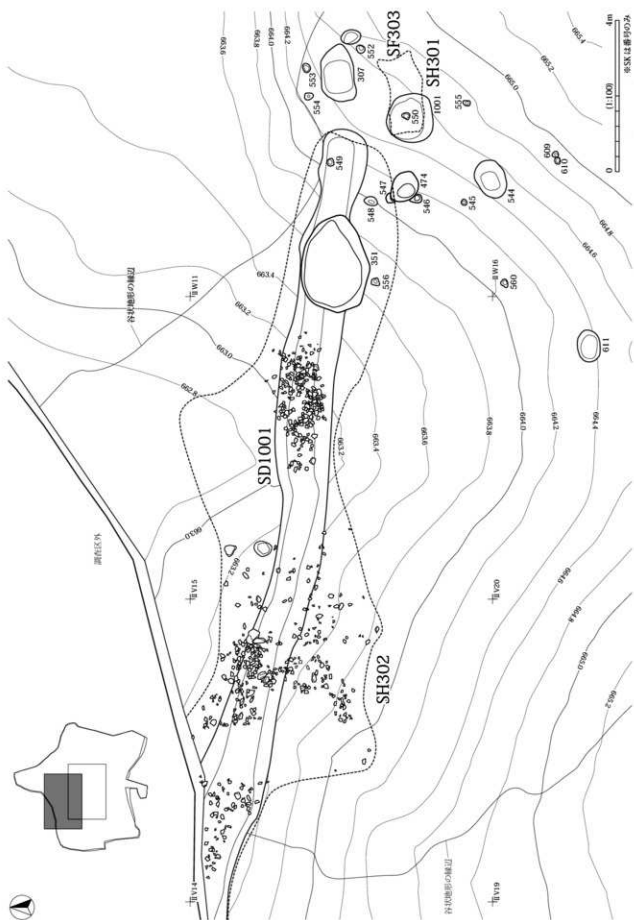
第181図 3区1調査面遺構全体図1



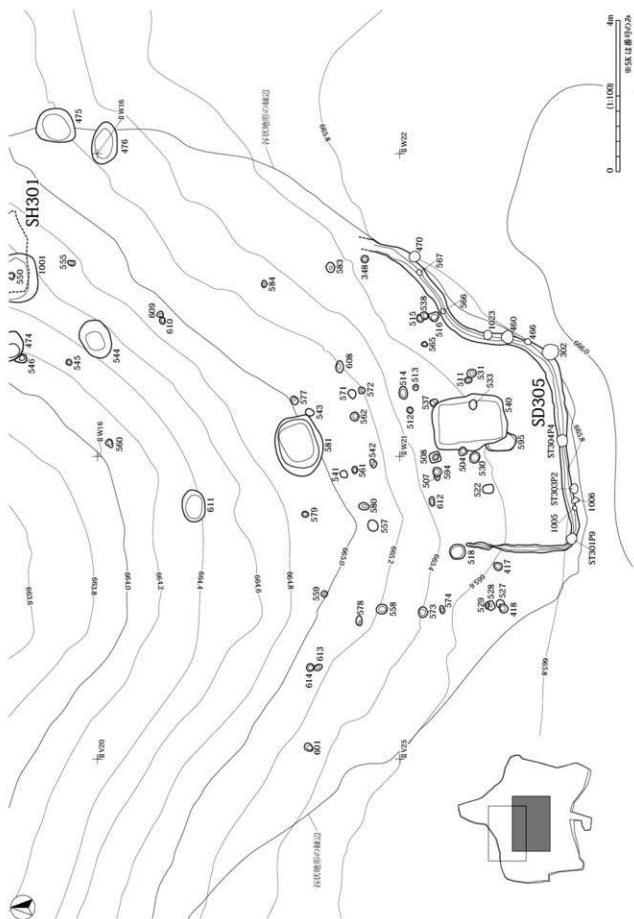
第182図 3区1調査面遺構全体図2



第183図 3区1 調査面遺構全体図3



第184図 3区2面遺構全体図1



第185図 3区2面遺構全体図2

V4層：10YR5/6黄褐色。地山（花崗岩風化層）。

3 遺構

(1) 概要

検出した遺構は、掘立柱建物跡、土坑、溝跡、土器集中、焼土跡がある。平坦地301では中央部に掘立柱建物跡が密集し、その東側と西側に溝跡がある。本報告では、主要な遺構について記述し、そのほかはDVDに収録した遺構一覧表を参照。

(2) 掘立柱建物跡

ST301 [遺構：第186図 PL49]

位置：II V25・W21、VI B05・C01。 検出：1面。 重複関係：SK481・484を切る。SK1003に切られる。本遺構のピットに囲まれたなかでは、SKが38基、ST303・304・306のピットが確認されているが、新旧関係は不明である。 埋土：P3・5・14・16では柱痕跡が確認された。 構造：3間×3間の総柱の掘立柱建物跡である。長辺6.08m、短辺5.81mを測る。主軸はN2°Eで、ほぼ正方位を向く。 出土遺物：なし。 時期：中世以降と推測する。

ST302 [遺構：第187図 PL49]

位置：II W21・22、VC01・C02グリッド。 検出：1面。 重複関係：P2がSK1010と重複するが、新旧関係は不明である。本遺構のピットに囲まれたなかでは、SKが13基、ST307・312のピットが確認されているが、新旧関係は不明である。 埋土：P1・9で2分層され、柱痕跡が確認された。 構造：3間×2間で、長辺5.82m、短辺3.70mを測る。主軸はN2°Eで、ほぼ正方位を向く。 出土遺物：なし。 時期：中世以降と推測する。

ST303 [遺構：第186図 PL49]

位置：II V25・VI B05グリッド。 検出：1面。 重複関係：本遺構のピットに囲まれたなかでは、SKが7基とST301のピットが確認されているが、新旧関係は不明である。 構造：2間×1間で、長辺3.64m、短辺2.46mを測る。主軸はN0°E。正方位を向く。 出土遺物：なし。 時期：近世以降と推測する。

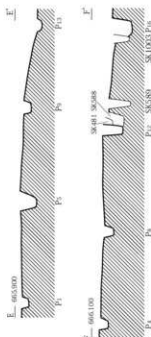
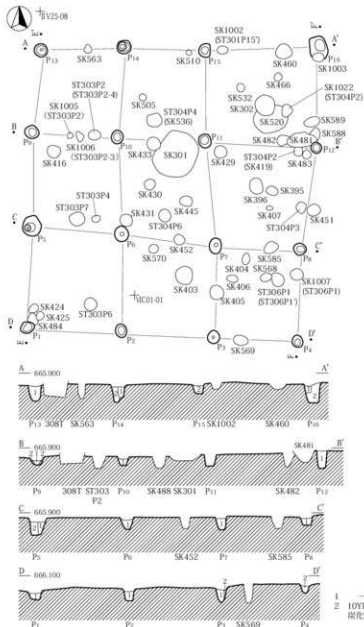
ST304 [遺構：第187図 PL50]

位置：II W21グリッド。 検出：1面。 重複関係：P1がSK443を、P2がSK481を切る。本遺構のピットに囲まれたなかでは、SKが17基とST301のピットが確認されているが、新旧関係は不明である。 構造：2間×1間で、長辺3.93m、短辺2.98mを測る。主軸はN1°Wで、ほぼ正方位を向く。 出土遺物：なし。 時期：中世以降と推測する。

ST305 [遺構：第188図 PL50]

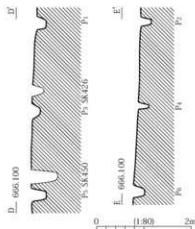
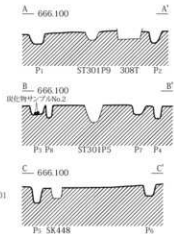
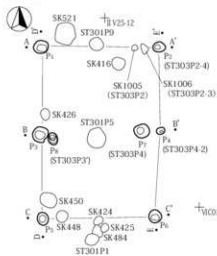
位置：II W21・22グリッド。 検出：1面。 重複関係：本遺構のピットに囲まれたなかでは、SKが4基、ST302・307のピットが確認されているが、新旧関係は不明である。 埋土：P5で2分層され、柱痕跡が確認された。 構造：2間×1間で、長辺3.95m、短辺2.55mを測る。P4の底部には礎盤石が設置されている。主軸はN88°Eで、ほぼ正方位を向く。 出土遺物：なし。 時期：中世以降と推測する。

ST301



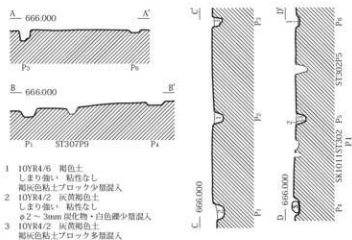
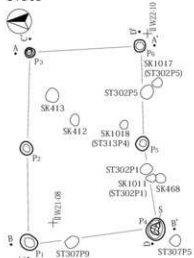
- 1 暗褐色土 しまりあり 粘性あり 炭化物多量混入
- 2 10YR4/4 黄褐色土 しまり強し 粘性弱し 部分的に暗褐色ブロック混入 炭化物少量混入

ST303

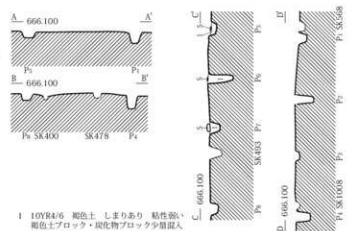
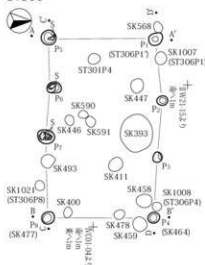


第186図 ST301・303 遺構図

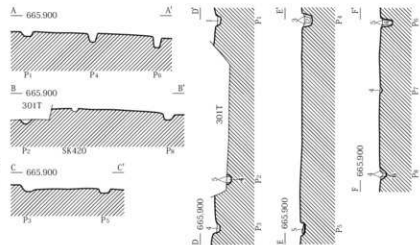
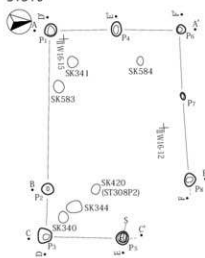
ST305



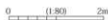
ST306



ST310



- 1 10YR4/4 褐色土 しまり強い 粘性強い 部分的に暗褐色ブロック混入 炭化物少量混入
- 2 10YR3/4 暗褐色土 しまり弱い 粘性強い 暗褐色土ブロックと褐色土ブロックの混入土少量混入 炭化物少量混入
- 3 10YR4/4 褐色土 しまり強い 粘性弱い 暗褐色土ブロック少量混入 炭化物少量混入
- 4 10YR3/3 暗褐色土 しまり強い 粘性強い φ1~10mm 炭化物ブロック多量混入
- 5 10YR3/3 暗褐色土 しまりあり 粘性強い φ1~11mm 炭化物ブロック多量混入
- 6 10YR4/6 褐色土 しまり強い 粘性あり φ1mm 花崗岩粒少量・磨の上位炭化物多量混入



第188図 ST305・306・310 遺構図

ST306 [遺構：第188図 PL50]

位置：IIW21、VIC01グリッド。 検出：1面。 重複関係：P1がSK568を切る。本遺構のピットに囲まれたなかでは、SKが13基とST301のピットが確認されているが、新旧関係は不明である。 構造：3間×1間で、長辺3.81m、短辺2.26mを測る。P5～7に礎盤石と推測される石が設置されている。主軸はN89°Eで、ほぼ正方位を向く。 出土遺物：なし。 時期：中世以降と推測する。

ST307 [遺構：第189図 PL50]

位置：IIW17・21・22グリッド。 検出：1面。 重複関係：本遺構のピットに囲まれたなかでは、SKが11基とST302・305のピットが確認されているが、新旧関係は不明である。 構造：3間×2間で、長辺5.36m、短辺4.38mを測る。主軸はN90°Wで、ほぼ正方位を向く。 出土遺物：なし。 時期：中世以降と推測する。

ST310 [遺構：第188図 PL50]

位置：IIW16・17グリッド。 検出：1面。 重複関係：本遺構のピットに囲まれたなかでは、SKが6基確認されているが、新旧関係は不明である。 埋土：P2・4・6・8で2分層され、柱痕跡が確認された。 構造：本遺構の北東隅にピットが確認されていないが、ピットが存在したとすると、3間×2間で、長辺4.38m、短辺2.94mを測る。 主軸はN88°Wで、ほぼ正方位を向く。P5には、底部に礎盤石が設置されている。 出土遺物：なし。 時期：中世以降と推測する。

ST314 [遺構：第189図 PL50]

位置：IIV18・19・23・24グリッド。 検出：1面。 重複関係：P8がSK346に切られる。本遺構のピットに囲まれたなかでは、SKが8基確認されているが、新旧関係は不明である。 埋土：P7～9には柱痕跡が確認された。 構造：3間×2間で、長辺5.74m、短辺3.82mを測る。主軸はN3°Eで、ほぼ正方位を向く。 出土遺物：なし。 時期：中世以降と推測する。

(3) 土坑

検出面が1面の土坑は掘立柱建物跡密集域で確認され、遺構一覧表（DVD収録）に記した。

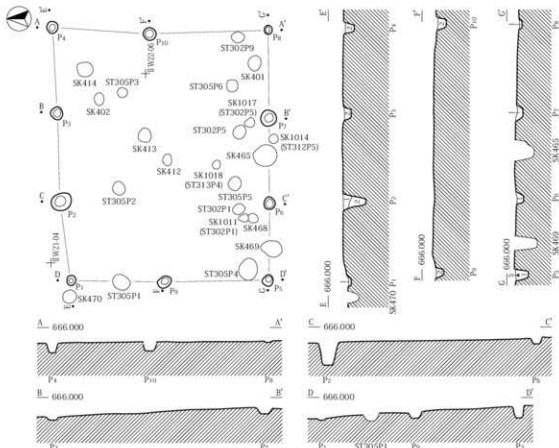
SK351 [遺構：第191図 PL48、土器：第198図]

位置：IIV15・W11グリッド。 検出：SH302検出時にプランを確認した。検出面は2面。 重複関係：SH302を切る。 埋土：1層には焼土ブロックと炭化物が混入する。 構造：長辺2.38m、短辺1.82m、検出面から底面までの深さ20cmを測る。平面形は楕円形を呈し、底面が下端から中央部に向かい緩やかに傾斜する。 出土遺物：底面の約5cm上に炭化物の広がりが分布し、その直上から常滑甕（87）が出土した。また、埋土1層から卸皿（84）、平碗（85）、すり鉢（86）が出土した。 時期：出土遺物から中世と考えられる。

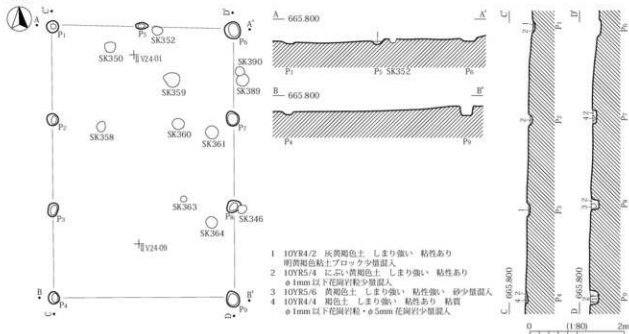
SK540 [遺構：第192図 PL48]

位置：IIW21グリッド。 検出：2面（V4層上面）。 重複関係：SK504・533に切れ、SK534・594を切る。 埋土：3・4層はIV3層を基調とする。3層には拳大～人頭大の礫が多量に含まれ、出土状況から、4層堆積後に投棄されたものと考えられる。 構造：長辺1.94m、短辺1.43m、検出面から底面までの深さ57cmを測る。平面形は長方形で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦で、壁際にはピットがめぐる。ピッ

ST307

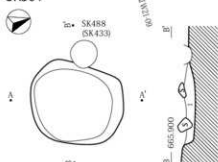


ST314

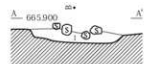


第189図 ST307・314 遺構図

SK301

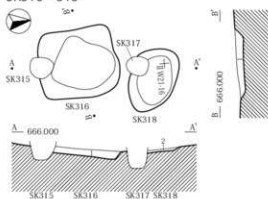


礫出土状況



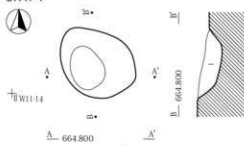
1 10YR4/4 褐色土
しまりあり 粘性あり

SK316・318



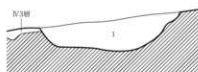
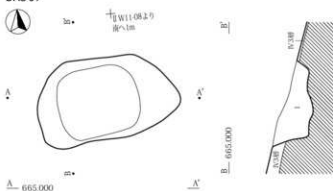
- 1 10YR4/4 褐色土 しまり強い 粘性弱い
φ3~20mm 焼土ブロック多量混入 炭化物2層より多量混入
- 2 10YR4/4 褐色土 しまり強い 粘性強い
黄褐色土ブロック・白色礫多量混入 砂・炭化物少量混入

SK474



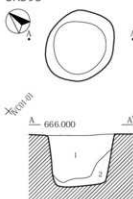
- 1 10YR4/1 褐色土 しまりあり 粘性なし
褐色土ブロック少量混入 下部に白色砕石多量混入

SK307



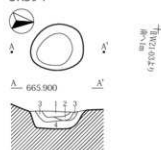
1 10YR5/4 に近い黄褐色土
しまり強い 粘性なし

SK393



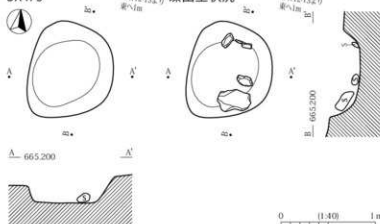
- 1 10YR4/6 褐色土 しまり強い 粘性あり
粘土・褐色土少量混入
- 2 10YR4/6 褐色土 しまりあり 粘性あり
砂・粘土・褐色土少量混入

SK394



- 1 10YR3/4 暗褐色土 しまりあり 粘性あり
粘土・地山ブロック少量混入
- 2 一 明黄褐色土 砂多量混入
- 3 10YR4/4 褐色土 しまり強い 粘性弱い
黄褐色土ブロック・白色礫多量混入
炭化物少量混入
- 4 暗褐色土ブロック・褐色土(地山)ブロック
の混合土

SK475

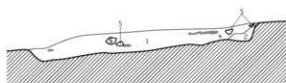
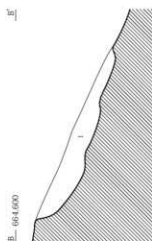
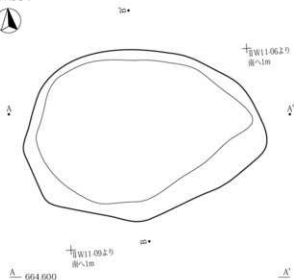


- 1 10YR4/1 褐色土 しまりあり 粘性なし
褐色土ブロック少量混入 下部に白色砕石多量混入



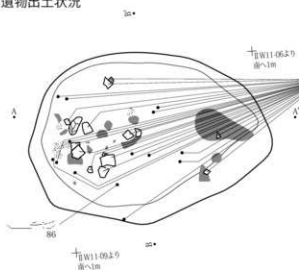
第190図 SK301・307・316・318・393・394・474・475 遺構図

SK351

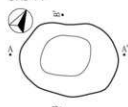


- 1 10YR3/2 黒褐色土 しまり強い、粘性あり
粘土ブロック少量混入 炭化物少量混入
- 2 10YR4/2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性なし

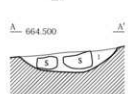
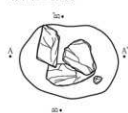
遺物出土状況



SK544

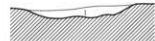
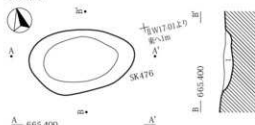


礎出土状況



- 1 10YR4/2 灰黄褐色土 しまり強い、粘性強い
黄褐色土ブロック少量混入
炭化物少量 礫300mm 礫多量混入
- 土層 1 : 10(B6), 1 : 12(B7)
0 (1:40) 1m
-

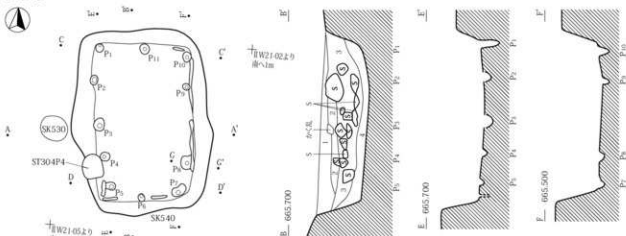
SK476



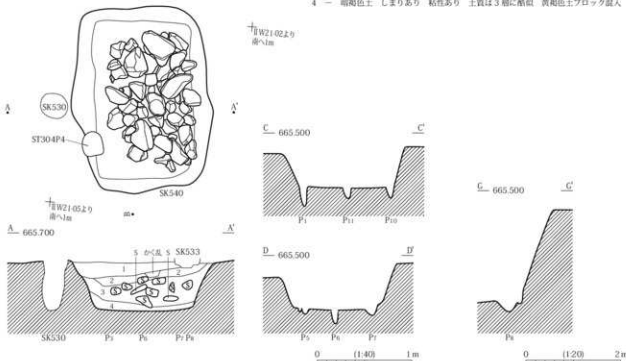
- 1 10YR3/3 暗褐色土 しまり弱い、粘性なし

第191図 SK351・476・544 遺構図

SK540



礫出土状況

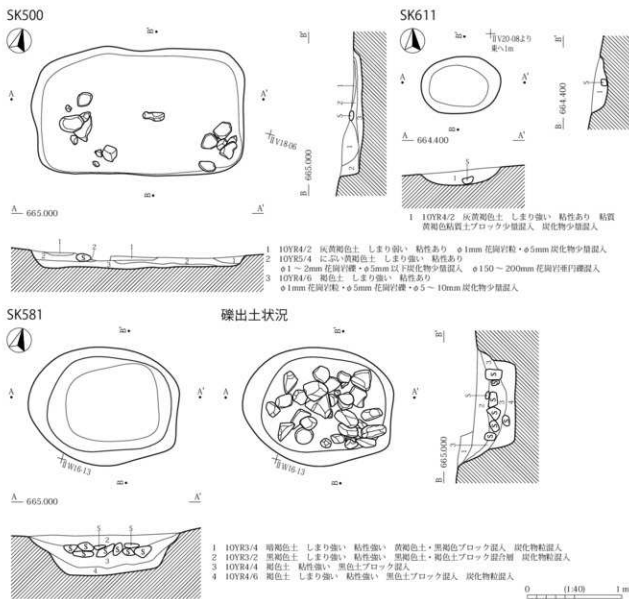


第192図 SK540 遺構図

トと壁際との間には、幅10cmの溝状の落込みがあり、ビットがこれを切る。板壁などの設置痕跡とも考えられる。主軸はN6°Wである。出土遺物：なし。時期：検出面から中世と推測する。

SK544 [遺構：第191図 PL49]

位置：IIW11・16グリッド。 検出：2面（V4層上面）。 重複関係：なし。 埋土：単層で、黒褐色土ブロックと黄褐色土ブロックが混合し、人頭大の礫が3個重なって出土した。礫は、その形状から礎石の可能性はあるが、その出土状況から原位置をとどめていないと推測した。出土状況から礎石を廃棄したものと推測した。 構造：長辺1.04m、短辺0.77m、検出面から底面までの深さ21cmを測る。底面はほぼ平坦である。主軸はN70°Eである。 出土遺物：なし。 時期：検出面から中世と推測する。



第193図 SK500・544・581・611 遺構図

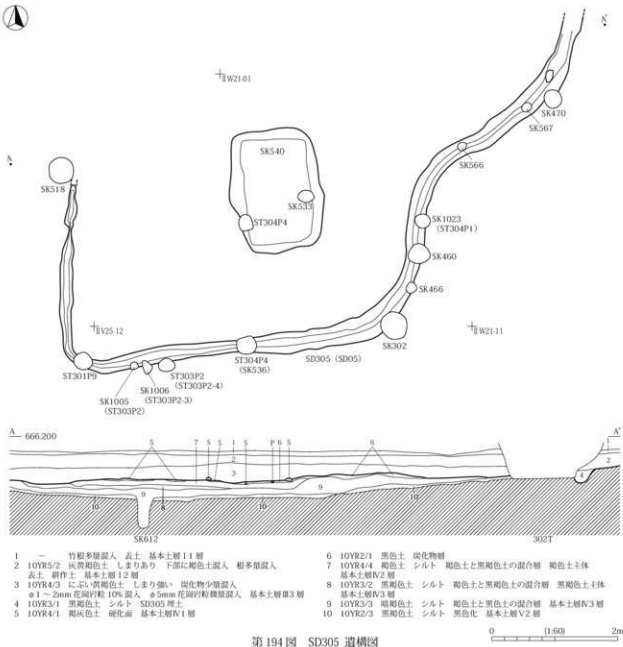
SK581 [遺構: 第193図 PL49]

位置: II V20・II W16グリッド。 検出: 2面 (V4層上面)。 重複関係: なし。 埋土: 1・2層には黄褐色土ブロックと黒褐色土ブロック、3層には黒色土ブロックが混入する。埋戻された層と考えられる。3層には拳大~人頭大の礫が多量に含まれる。 構造: 長辺1.59m、短辺1.25m、検出面から底面までの深さ51cmを測る。底面は平坦で、壁は底面付近がほぼ垂直に立ち上がるが、本遺構の中位上方は外側に開き気味になる。 出土遺物: 破片が小さいため図示していないが、2層から古瀬戸後期の平碗が出土した。 時期: 検出面から中世と推測する。

(4) 溝跡

確認した溝跡のなかで、SD301~304は1面で検出し、埋土はV3層を基調とした暗褐色土である。SD301・302は掘立柱建物跡密集域の東側、SD303・304は掘立柱建物跡密集域の西側にあり、主軸は北を向く。

SD305



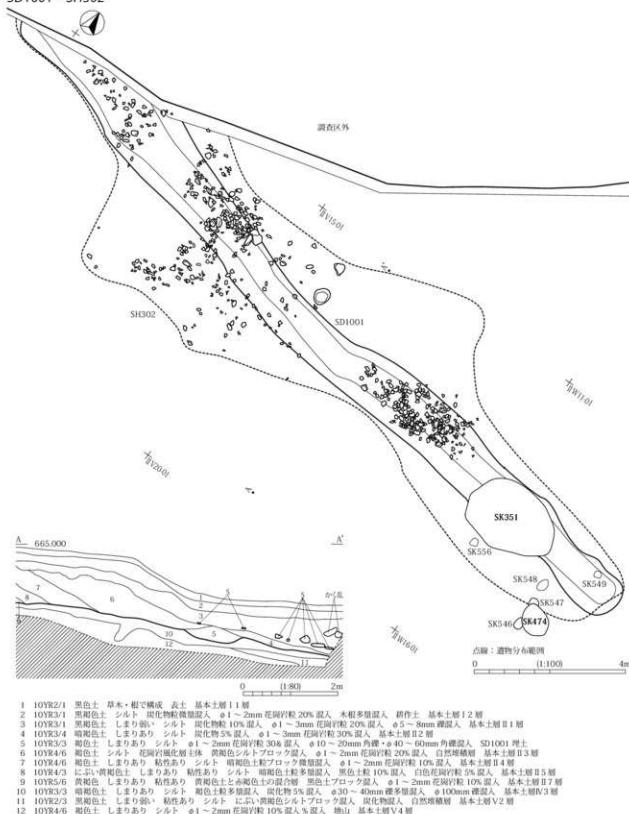
SD305 [遺構：第194図]

位置：II V25・W16・21グリッド。 検出：面調査に先行した掘削した301トレンチ土層断面で、Ⅲ3層上面から掘り込む本遺構の存在が確認された。1面の遺構調査後、Ⅲ3層を剥ぎV3層上面で検出した。本遺構は谷状地形の最奥部にある。本遺構の南側はSK540のまわりをコ字状に巡る。重複関係：ST301 P9、ST303 P2、ST304 P4、SK302・356・460・466・470・566・567・1005・1006・1023に切られる。埋土：Ⅳ3層を基調とした黒褐色土。構造：長さ14.05m、幅0.5m、検出面から底面までの深さ20cmを測る。出土遺物：なし。時期：近世以降と推測した遺構に切られていることから、近世以前と推測する。

SD1001 [遺構：第195図、遺物：第198図]

位置：II V13・14・15・W11グリッド。 検出：2面（V4層上面）。重複関係：SK351・549に切られ

SD1001・SH302



第195図 SD1001・SH302 遺構図

る。埋土：単層。色調は暗く、花崗岩粒と角礫が混入する。構造：長辺20.54m、短辺3.9m、検出面から底面までの深さ30cmを測る。主軸はN79°Wである。303トレンチ土層断面（A-A'）を見ると、溝跡はIV3層上面から掘り込んでおり、本遺構の上部にII2層とII3層が堆積していることが分かる。出土遺物：青磁碗（102）が出土した。時期：出土遺物と検出面から中世と推測する。

（5）土器集中

SH302 [遺構：第195図、PL49、遺物：第198図]

位置：II V13～15グリッド。検出：2面（IV3層上面）。重複関係：SK351・474・547～549・556に切られる。構造：長辺21.8m、短辺7.8mの範囲に中世陶磁器と礫が分布する。主軸はN76°Wである。出土遺物：丸皿（93）、卸皿（94～96）、天目茶碗（97・98・100）、平碗（99）、平碗と推測される遺物（101）、すり鉢（103・104）、火鉢と推測される遺物（105）が出土した。時期：出土遺物と本遺構の掘込み面から中世と推測する。

（6）焼土跡

焼土跡は2基確認された。遺構の属性は、DVDに収録した遺構一覧表を参照。

第5節 遺物

1 土器・陶磁器

(1) 概要

神之峯城跡からは、中・近世の土器・陶磁器が出土した（第196図～第199図）。

中世の遺物は1区と3区で出土した。出土点数が多い場所は、1区では礎石建物跡（ST02）を被覆する層（V層・VI層）、3区では谷状地形に堆積する層（II1層～V2層）である。出土遺物の大半を占めるものは古瀬戸製品（古瀬戸後Ⅲ～Ⅳ期）である（藤澤2008）。近世の遺物は、主に1区の近世遺構から出土した。

(2) 1区

①中世遺構・遺構外出土遺物

(7) 遺構内

SK87から出土した遺物は青白磁の梅瓶である（第196図1）。2はSD11から出土した遺物は丸皿（第196図2）で、底部内面と外面に軸の沈着がみられる。内外面に気泡が目立つ。被熱によるものと推測する。

(4) 遺構外

平坦地7のVI層から出土した遺物は、第196図3～19である。古瀬戸製品は、緑釉小皿（3）、天目茶碗（4・5）、すり鉢（6・7）、花瓶（8）、筒形容器（9・10）、筒形香炉（11）、祖母懐茶壺（12）、花盆（13）である。3は底部内外面が黒色化する。13の外面は気泡があり、被熱によるものと推測される。古瀬戸製品以外では、瓦質の風炉（19）、火鉢（18）、貿易陶磁では白磁皿（14・15）、白磁碗（16）、染付皿（17）がある。18は2条の突線を巡らせ、突線の間には文様を施す円形浅鉢Ⅲ類（水澤1999）に比定する。

平坦地7のV層から出土した遺物は、第196図20～39である。古瀬戸製品は、端反皿（20）、鉀皿（22）、天目茶碗（23・24）、平碗（25・26）、花瓶（27）、祖母懐茶壺（28・30）である。31は推定される器形と施釉状況から、祖母懐茶壺と推測される。瀬戸大窯製品は、端反皿（21）、祖母懐茶壺（29）である。常滑製品は、片口鉢（39）、貿易陶磁は青磁碗（34）、染付碗（35・37）、染付皿（36）、青花碗（38）、青磁梅瓶（PL52管理番号25）である。34には外面に印花文が施されている。32・33は内耳鍋である。

古瀬戸製品のなかで、小期（藤澤2008）が推定できるものは古瀬戸後Ⅲ期と後Ⅳ期で、瀬戸大窯製品は、大窯1段階後半（端反皿）と大窯3段階後半（祖母懐茶壺）である。瀬戸大窯製品の祖母懐茶壺（29）は初山窯で焼かれたものである。

V層遺物とVI層遺物が接合したものの（第196図）は、徳利（40）、白磁皿（41）、染付碗（42）である。42は内外面の軸に光沢がなく、器の色と文様の色との差に明瞭さを欠く。被熱によるものと推測する。VI層（ST02検出面）出土遺物は茶壺（PL52管理番号204）である。

平坦地7のIV層出土遺物は四耳壺（第197図43）である。

平坦地7のⅢ層から上層は近世以降の堆積層である。Ⅲ層上面出土遺物（第197図）は片口すり鉢（59）、Ⅲ層出土遺物（第197図）は、白磁碗（60）、平碗（61）、丸皿（62）、鉀皿（63）、茶壺（64）、すり鉢（65・67）、腰さび（66）である。

②近世遺構出土遺物（第197図）

近世の遺物には、灰釉の碗（50）、土瓶の蓋（51・54）、碗（52）、すり鉢（53・58）、土瓶（55）、近世遺構から出土した中世の遺物には、青磁輪花皿（56）、白磁碗（57）がある。

(3) 2区

①近世(197図)

SD201埋土上層出土遺物は、近世末の土鍋(82)である。平坦地206出土遺物は、近世末の瓦質土器(83)であるが、器種は不明である。

(4) 3区

①中近世

(7) 遺構内(198図)

SK351出土遺物は、古瀬戸製品では、鉦皿(84)、平碗(85)、すり鉢(86)、常滑製品では、甕(87)である。87には断面と内外面に黒色付着物があり、さらに胴部は内外面とも器の表面が剥落する特徴がある(註1)。口縁部の形状から、常滑9型式(中野ほか2012)と推測する。

SH301出土遺物は、丸皿(88)、天目茶碗(89)、龍泉窯系青磁碗(90・91)、盤類(92)で、88は内外面に施された釉の色調が暗褐色で、底部内面に印花文が施されている。器形の特徴から大窯4段階(前半)に比定される。90・91の内外面には気泡がある。被熱によるものと推測する。

SH302出土遺物は、丸皿(93)、鉦皿(94・95・96)、天目茶碗(97・98・100)、平碗(99)、平碗と推測できる遺物(101)、龍泉窯系蓮弁文青磁碗(102)、すり鉢(103・104)、火鉢と推測できる遺物(105)である。93は底部内面の印花文の形状から、大窯1段階もしくは2段階と推測する。

(f) 遺構外

谷状地形に堆積する土から出土した遺物を図示した。

I層出土遺物(199図)は、I1層出土の祖母懐茶壺(172)、天目茶碗(167・168)、すり鉢(169~171)である。173は器種が不明である。II層遺物と接合した遺物に青磁小瓶(174)がある。

II層出土遺物(199図)は、II1層出土の龍泉窯系蓮弁文青磁碗(162)、皿もしくは鉢(163・164)、II2層遺物と接合した折縁深皿(166)、II2層出土では、古瀬戸製品に、鉦皿(142)、天目茶碗(143~145)、平碗(146)、直縁大皿(147)、折縁深皿(148)、すり鉢(149~152・160)、筒形香炉(154)、袴腰形香炉(155)、樽式花瓶(159)がある。瀬戸大窯製品では、丸皿(141)、常滑製品では甕(161)がある。161は口縁部の形状から常滑8もしくは9型式(中野ほか2012)と推測する。貿易陶磁では、龍泉窯系青磁碗(156)、青磁香炉(157)、青磁瓶類(158)、鍋と推測される遺物(139)がある。また、内耳鍋(153)と近世の徳利(140)がある。II3層出土遺物は、すり鉢(138)、II5層出土遺物は、直縁大皿(137)、平碗(136)、II6層出土遺物は、縁軸小皿(133)、直縁大皿(134)である。135は器種が不明である。II1層出土遺物は、青磁碗(132)である。

III層出土遺物(198図)は、III1層出土の平碗(121)、四耳壺(122)、III2層出土の四耳壺(118)、祖母懐茶壺(119)、茶壺(120)、III3層出土の縁軸小皿(114・115)、直縁大皿(116・117)である。

IV層出土遺物(198図)は、IV1層出土の四耳壺(112)、青磁碗(113)、IV2層出土の瓶子(111)、IV3層出土の縁軸小皿(108)、天目茶碗(109)、平碗(110)、V2層出土の縁深皿(107)である。

3区から出土した遺物は、II2層から近世の徳利(140)が出土していることから、II2層より上位は、近世以降の堆積層と判断した。一方、II3層~IV3層は、古瀬戸後III期~後IV期の陶磁器が大半を占めている。

1区出土中世遺物と3区出土中世遺物を比較すると、共通点と相違点がある。

共通点は、両者とも古瀬戸後III期~後IV期の遺物が大半を占めることである。一方、相違点は、出土遺物のなかで最も新しい遺物が、3区は大窯4段階(前半)の丸皿で、1区は初山窯で焼かれた大窯3段階

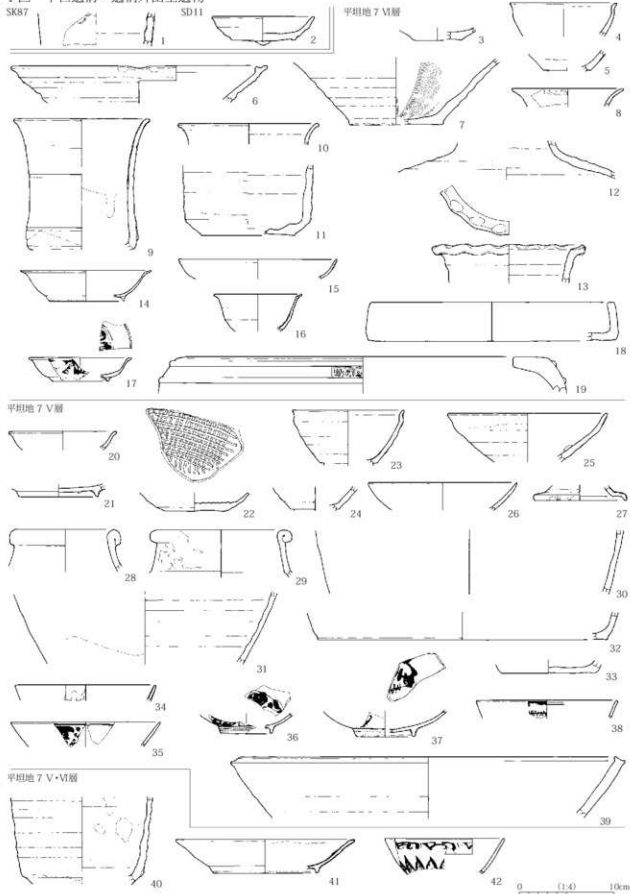
(後半)の祖母懷茶壺であることである。前者は16世紀末、後者は16世紀後半～末の年代を示す(年代観は藤澤2002による)。

出土遺物から、1区の遺構群と3区の遺構群は古瀬戸後Ⅲ期～後Ⅳ期には存在し、1区は16世紀後半～末、3区は16世紀末まで存続したと推測する。

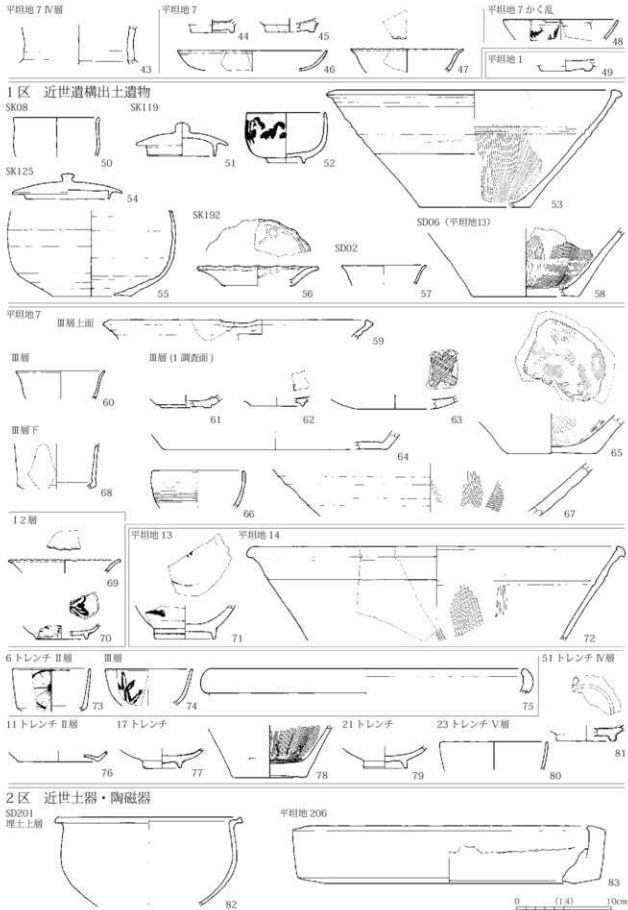
註

- 1) 遺物を実見した中野晴久氏によると、霜によるものとの指摘があった。

1区 中世遺構・遺構外出土遺物

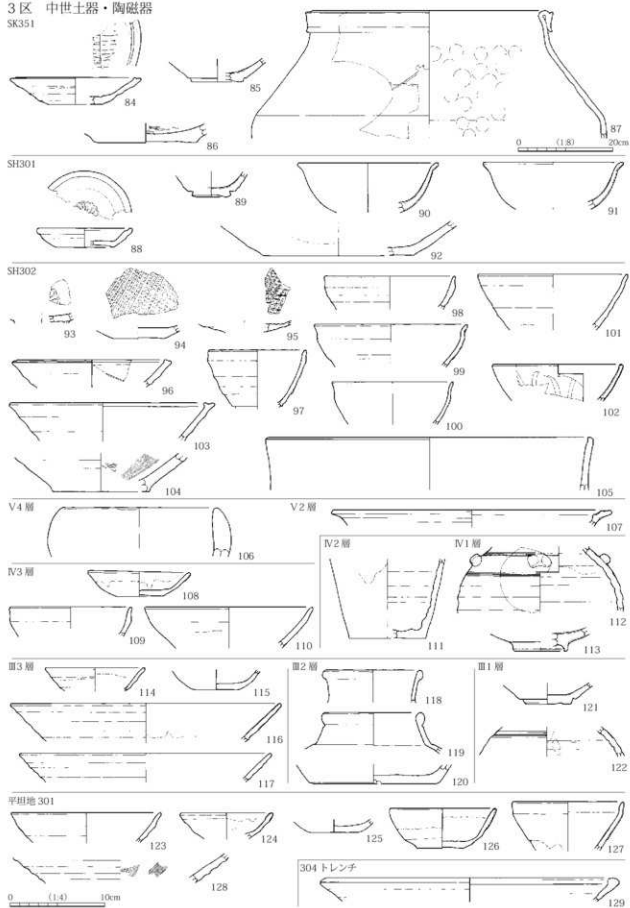


第196图 土器・陶磁器実測図1



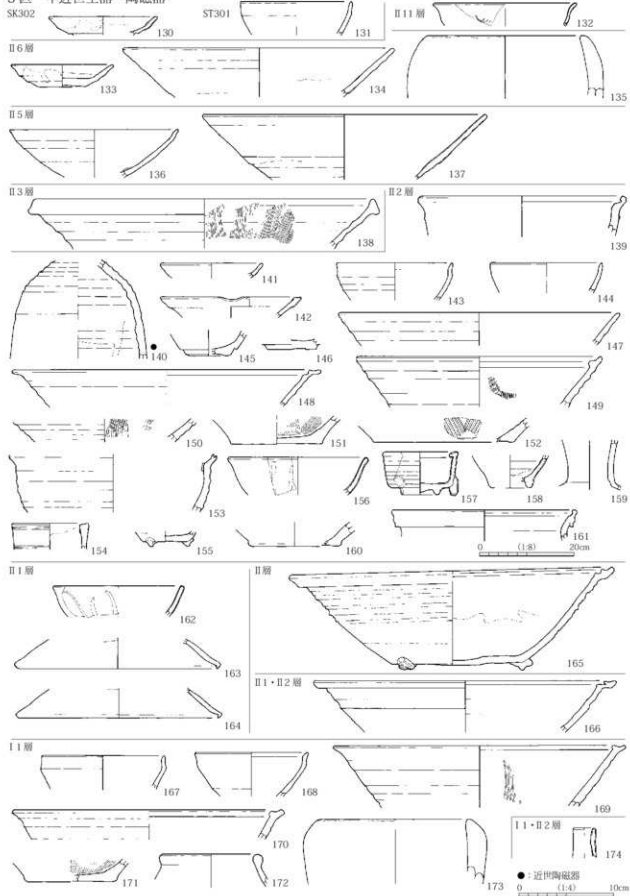
第197図 土器・陶磁器実測図2

3区 中世土器・陶磁器
SK351



第198図 土器・陶磁器実測図3

3区 中近世土器・陶磁器



第199図 土器・陶磁器実測図4

2 土製品

土器以外の土製遺物は瓦片の加工品で、平坦地 206 から 2 点出土している（第 200 図 1・2）。何れも厚さ 14mm 程度の瓦を割って縁辺を弧状に整え、研磨した「瓦片加工円板」である。胎土には斜長石や花崗岩が多く入っている。

3 石器

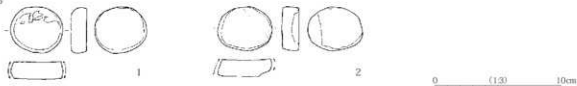
石器は、平坦地 301 から黒曜石製の無茎石鏃（第 201 図 1）、3-1 区から砂岩製の打製石斧（同図 2）が出土している。何れも縄文時代にあたとみられる。

4 石製品

本遺跡から出土した石製品は硯 4 点（第 202 図 1～4）、砥石 16 点（同図 5～18、第 203 図 19・20）、こも編み 2 点（第 203 図 21・22）である。硯のうち 1～3 は 1 区平坦地 7 の V・VI 層から、4 は 2 区平坦地 207 の I 層から出土している。また、砥石のうち 5～11 は SK119・125・126 から、12 は SF10 から、13・14 は平坦地 7 から、15 は平坦地 301 から、16 は 308 トレンチから、17 は 51 トレンチ 1 層（基本土層 VII 1 層）から、18・19 は 3-1 区から、20 は 1-1 区から出土している。また、こも編み石 21・22 は SK118・119 から出土している。

硯のうち 1 は全体の半分程度が残存し、平面形は長方形で、側面はやや上方に向かって窄まる。縁帯部は幅が広く隅は直角に切られている。裏面は剥離欠損しているため、平坦か挟りが入るかどうかな等は不明である。また、左右側面は縁帯上部から硯面までの段差が 2mm 程度であるが、下部 11mm 程度は縁帯部が解消されている。このことから、下部の縁帯部と硯面の段差は当初は存在したものの、使用によって消失したものと推測する。側面形や縁帯の幅に若干の相違があるが、全体の特徴からは長方硯 I Bc 類（水野 1985）の①に相当するものと考えられる。2 は全体の 1/4 程度が残り、平面形は長方形で、側面は垂直に立

瓦片加工円板
平坦地 206

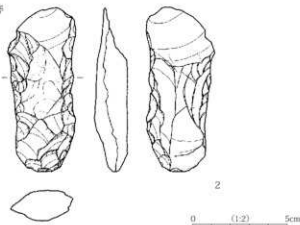


第 200 図 土製品実測図（瓦片加工円板）

石鏃
平坦地 301



打製石斧
3-1 区

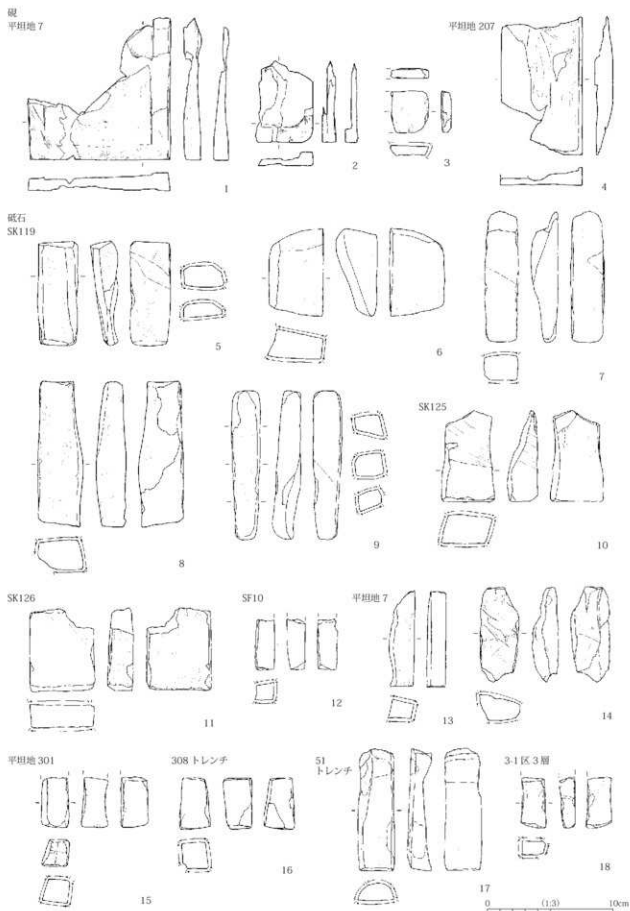


第 201 図 石器実測図（石鏃・打製石斧）

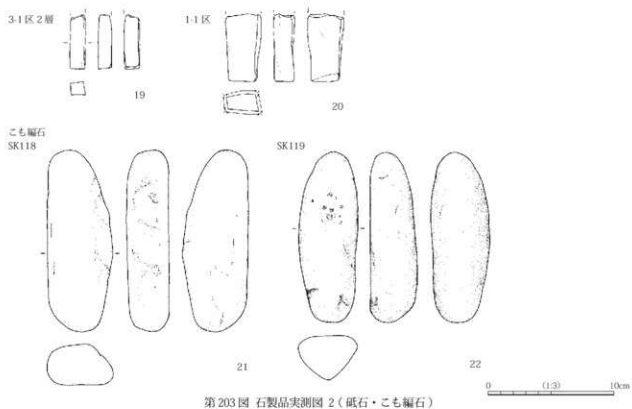
ち上がり、緑帯部は幅が広く隅丸に切られている。底部は剥離欠損している。4は全体の1/4程度が残存し、平面形は長方形、底部は平坦で側面はほぼ垂直に立ち上がる。緑帯部は2mmでかなり幅が狭い。硯面の中央に漏斗状の窪みが見られ、海部を形成している。長方硯1Bc類②にあたるものと考えられる(水野1985)。1Bc類の①は15世紀後半から16世紀後半、同②は16世紀中頃から17世紀にかけての遺跡で多く出土しているとされる(水野司)。本遺跡出土の硯は1、2、4が粘板岩製、3が凝灰質砂岩製である。

砥石は、断面が四角形(12・13・15・16・19)や長方形(11・18)で棒状のものと、表裏どちらかの中央に稜をもち断面三角形もしくは菱形を呈するいわゆる「鯉ぶし状」を呈するもの(5~10・14)の2形態がみられる。また17・20は後者と同形態の可能性はあるが、割れているため判別できない。何れも小形である。使用痕は、表面が極めて平滑であるタイプ(第1のタイプとする)と、方向がまちまちであるが先のとがった鋭利な加工物による痕跡がみられるタイプ(第2のタイプとする)、鋭利な痕跡が規則的に平行に並んでいるタイプ(第3のタイプとする)の3タイプがみられ、製品によってはそのうち1つもしくは2つのタイプの特徴が複合している。形態と使用痕の関係を概観すると、断面三角形もしくは菱形の「鯉ぶし状」の資料は、稜のある面には第1のタイプの使用痕がみられ、その他の面は第2のタイプの痕跡がみられる場合が多い。また、断面四角形で棒状の資料(12・13・15・16・19)では15の下面に第2のタイプがみられる以外は全て第1のタイプの使用痕がみられた。断面長方形で棒状の資料(11・18)では、11の表面は第1のタイプ、側面と裏面には第3のタイプの使用痕がみられ、18は全面とも第1のタイプであった。「鯉ぶし状」の砥石の相対する滑落面は、両刃の刃物(たとえば刀、槍など)を研ぐ際、砥石を持ち変えた場合に生じたものと考えられている(小山1991)。石材は13・19が片状ホルンフェルス、18が安山岩で、その他は14点ともに熱水変質した流紋岩であった。

こも編石21・22は2点とも砂岩製の棒状礫である。上下に敲打痕はみられない。



第202図 石製品実測図1(硯・砥石)



第203図 石製品実測図 2(砥石・こも編石)

5 金属製品

(1) 概要

本遺跡から出土した金属製品は119点で、このうち残存状態が比較的良好で資料的に重要と思われる資料を選択し、鉄製品33点、青銅製品2点と銭貨20点（接着している12を2点と数える）について掲載した（第204図1～35・第205図1～19）。掲載資料については長野県立歴史館でX線透過撮影（電圧62～78kvp、電流5mA、撮影時間60秒、距離840mm）を実施した。鉄製品はその画像を用いて実測図を作成している。また、銭貨12は2枚の銭同士が付着して出土したため、剥がしを含めた保存処理を委託したが、剥がすことによって原形が失われる可能性が高いとの理由で剥がすことができなかった。本遺跡で保存処理を行ったものはこの1点だけである。

(2) 中世以降

①鉄製品

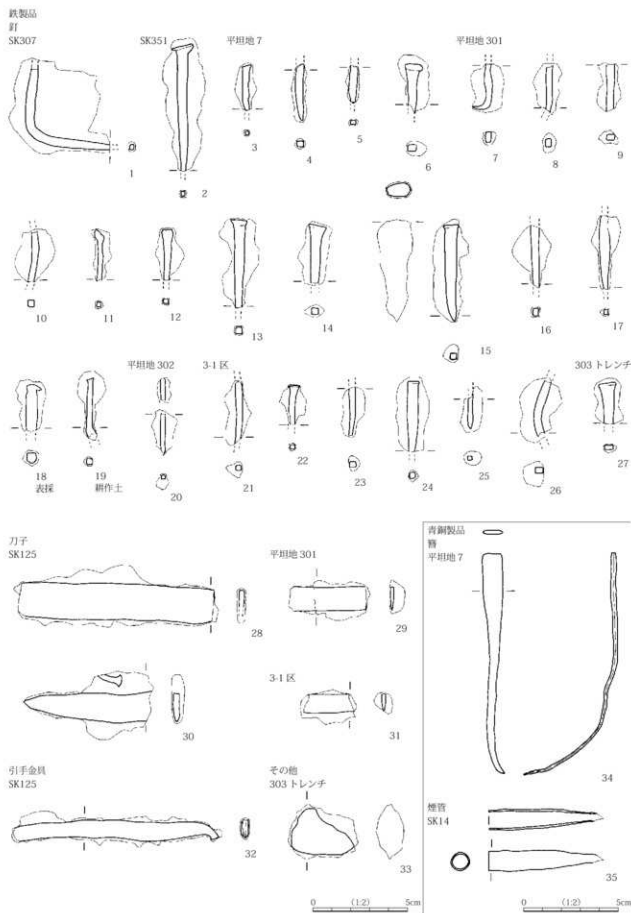
鉄製品では、まず鉄釘1～27がみられる。このうち1はSK307、2はSK351から、3～27は平坦地7・301・302・3-1区、303トレンチから出土している。本遺跡から出土した鉄釘全27点は、全て頭部もしくは基部が欠損しており、法量が計れるものはない。横断面の形は7～9がやや長方形を呈するが、それ以外は方形とみられ、何れも角釘に分類される。頭部の形状は、一方方向のX線画像からのみの判断であるため、あくまでも推測であるが、18は基部上端を叩き延ばし、その後単に折り曲げた一群（原1994）に相当する可能性がある。また、1と7は基部がほぼ直角に折れ曲がっている。塩崎城見山砦の事例を参考にすると、木材に打ち付けた後、例えば板などを押さえて補強するために意図的に折り曲げた可能性が考えられるかもしれない。

刀子は28～30（第204図）である。このうちSK125からは刀子28とともに引手金具の可能性のある32が出土している。29と30は平坦地301から出土し、このうち30にはX線撮影の結果、土中に釘らしき製品の先端部が写り込んでいるが、詳細は不明である。

②青銅製品

青銅製品のうち銭貨は1～19である。このうちSK01出土の1は「太平通寶」（北宋976年）、2は「咸平元寶」（北宋998年）、3と4は「皇宋通寶」（北宋1038年）、5は「元祐通寶」（北宋1086年）、6は「政和通寶」（北宋1111年）、7は「永樂通寶」（明1408年）で、8は「咸□元寶」と解説できる。また、SK37出土の10は「永樂通寶」（明1408年）、11・12が「開元通寶」である。SK201出土の13と14のうち、14は「治平元寶」（北宋1064年）である。平坦地6から15、平坦地301から16・17、平坦地21（北東側盛土）から18、1-1区1層（溝内）から19が出土している。これらのうち15～18は「寛永通寶」で何れも「寛」と「寶」の字体から「新寛永」が初鋳される寛文8年（1668）以降に属すると考える。ただ16のみは裏面に波紋がみられることから、1768年に鋳造されたものと推定する（永井1996）。

煙管（キセル）はSK14から35が出土しているが、煙管部のみで、雁首部と吸口部は残存していない。簪34は平坦地7から出土している。

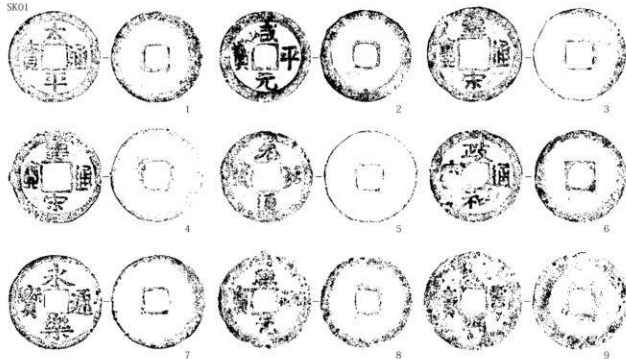


第 204 図 金属製品実測図 1(釘・刀子・引手金具・簪・煙管)

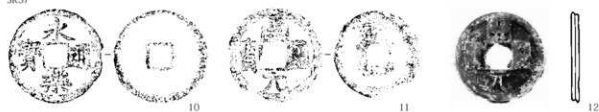
青銅製品

錢貨

SK01



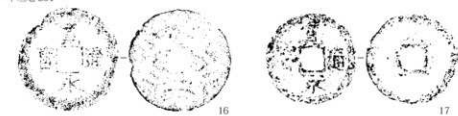
SK37



SK201



平坦地 301



平坦地 21



1-1区1層

0 (1:1) 2cm

第205図 金属製品尖湖園2(銭貨)

第6節 神之峯城跡 SK01出土の人骨について

京大名誉教授 茂原信生

はじめに

神之峯城跡は長野県飯田市にある遺跡で、平成24年度に長野県埋蔵文化財センターによって発掘調査され、その際、SK01から人骨が出土した。

SK01埋土から銭貨が9枚出土しており、初鋳年が最も新しい銭貨は永楽通寶である。放射性炭素年代測定では、15世紀中頃～17世紀初頭の年代が算出されており、人骨は中世に属するものと考えられている。

SK01人骨の特徴（写真1,2）

人骨の保存状態は非常に悪い。頭蓋骨はなく、歯もない。四肢骨のみが残っている。表面は荒れていて、四肢骨の骨端はほとんど失われている。手の指や肋骨、椎骨もない。詳細に観察できる部位は、下肢骨の一部（大腿骨近位部と足根骨）のみである。

人骨の出土状態を見ると、左脛骨は右脛骨の下から出土している。右大腿骨と右脛骨は膝を深く折り曲げて埋葬（屈葬）されていたものと思われる。大腿骨や足根骨よりも前腕の橈骨や尺骨が上にあり、埋葬姿勢は通常の屈葬ではなく、体幹をたてた坐葬のような状態であった可能性がある。ただし、頭蓋骨の状態が不明なのであくまで推測にすぎない。

上肢骨では、上腕骨の左右の遠位部、左右の橈骨尺骨の一部が出土している。橈骨や尺骨は左右の骨幹部だけが残っている（尺骨の骨体矢状径8.4mm、骨体横径12.4mm）。いずれも細い骨幹である。

下肢骨では、寛骨は部分的に出土している。左寛骨では、寛骨臼から仙骨との間接面である耳状面の前端までの部分が残っている。ここには妊娠痕と言われる耳状面前溝のようなものはない。大坐骨切痕の一部が残っているが、鈍角と思われ、女性的な特徴である。また、耳状面の前端から寛骨臼の前端までが破損しているものの76mmほどあり、さほど小さくないので幼児ではなく、成人に達していたと思われる。かなりきゃしゃな女性の可能性がある。また、大腿骨は非常に細い。後面の粗線は残存する上部ではほとんど発達していない。大腿骨頭は骨幹と癒合しているので、幼児ではなく少なくとも10代の後半には達していたと思われる。大腿骨骨体上横径よりやや下の横径は26.9mm、矢状径は21.6mmで、扁平示数は約80で扁平大腿骨である。他に、左右の脛骨遠位部と左右の距骨など足根骨の一部が残っている。右の脛骨遠位部と距骨が残っている（左脛骨骨幹遠位部周径56mm）。距骨には踵面がみられる。森本のC型で、F型のような頸結節に対応する脛骨の関節面も見られる。

まとめ

この個体は、重複する部分がないので1体分と考えられる。きゃしゃな四肢骨や寛骨（骨盤）の特徴から考えて若い個体、それも妊娠経験のない成人に近い若い女性である可能性が高い。

参考文献

馬場悠男1993「人骨計測法」『人類学講座 別巻1』、雄山閣Pp.359。

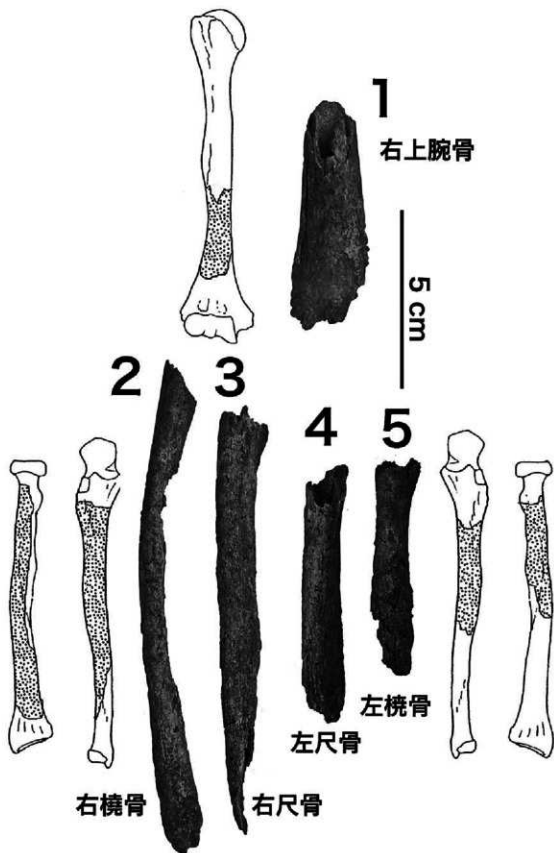


写真1：神之峯城跡出土人骨の四肢骨。図のシャドウ部は出土した部分を示している。1：右上腕骨遠位部、2：右橈骨骨幹部、3：右尺骨骨幹部、4：左尺骨近位骨幹部、5：左橈骨近位骨幹部

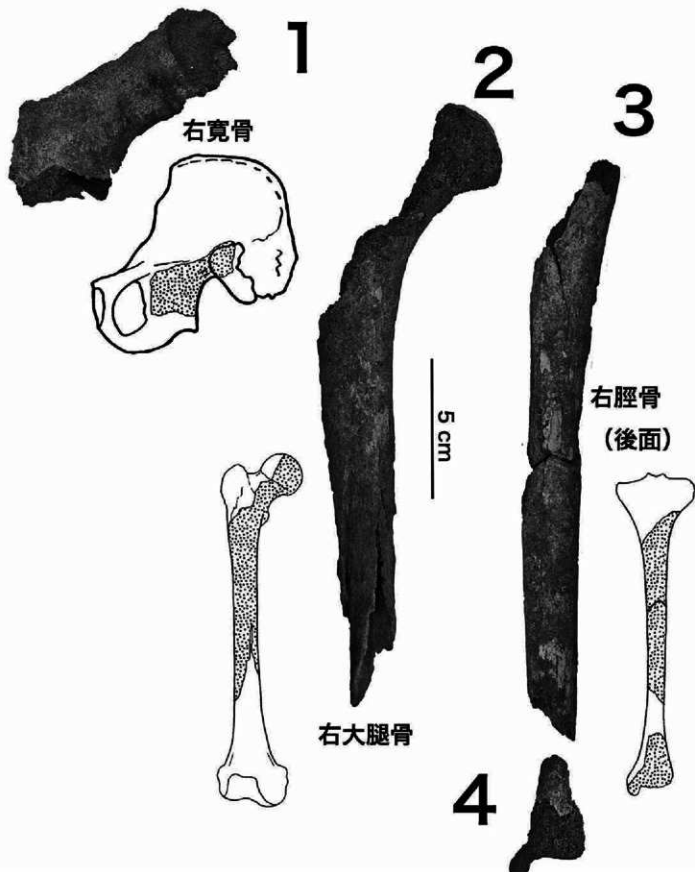


写真2：神之峯城跡出土人體の下肢骨。1：右寛骨の大坐骨切痕から耳状面部、2：右大腿骨近位部、3：右脛骨骨幹（後面）、4：右脛骨遠位部（後面）。

第7節 科学分析

1 分析目的

遺跡周辺の環境や遺跡内での植物利用の様相を明らかにするため、花粉分析、珪藻分析、プラント・オパール分析を行った。また、SK01出土の人骨及び遺構等から出土した炭化物・土壌を対象として放射性炭素年代測定を実施し、年代判定の参考とした。さらに、陶磁器の接着剤と推測したSK351出土の黒色の着色物について、赤外分光分析と窒素・炭素安定同位体比分析を実施した。

2 分析試料・結果概要

分析試料は第22表のとおりである。分析結果の詳細は本報告書添付のDVDに収録した。ここでは概要のみ記述する。

第22表 科学分析一覧

実施年度	分析対象試料	分析項目	委託先
24	炭化物 (SF01, VI層)	放射性炭素年代測定	(株) 加藤器分析研究所
	谷状地形堆積層 (3037)	花粉分析、珪藻分析、プラント・オパール分析	(株) 古環境研究所
25	意匠出土の人骨 (SK01)	放射性炭素年代測定	(株) パレオ・ラボ
	遺構出土の炭化物 (SD201, SK201)		(株) 加藤器分析研究所
	遺構出土の炭化物 (SD201, SK351, SK3011, SK1017, SF302, SF307, 2387・種子 (モモ) (SK351)・土壌 (Z277))		
	土器付着物 (SK351, SH302)		
27	土器付着物 (SK351, SH302)	赤外分光分析、炭素・窒素安定同位体分析	(株) 古環境研究所

(1) 土壌分析について

土壌分析試料はすべて3-1区の谷状地形に堆積する土層から採取している。分析結果の概要は第23表にまとめた。結果から推測される古環境は次のとおりである。

花粉分析は、化石の検出量が少なくなかつ痛んでいた。花粉化石などの有機質遺体が分解されない乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境か、堆積速度が速かったと推測された。また、周囲にはハンノキ属、カバノキ属、クリなどの落葉広葉樹林と、ツガ属、コウヤマキ、スギなど針葉樹林が分布していたとの推測を得た。

珪藻分析は珪藻化石の遺存状況が悪く、珪藻が生育できない乾燥した堆積環境が推測された。

プラント・オパール分析では、Ⅱ5層(7層)及びⅣ3層(15層)で検出量が多かった。Ⅱ5層は斜面に堆積しているため他所からの混入などが考えられ、水田であった可能性は低いと報告されている。一方、Ⅳ3層は水田耕作層であった可能性が高いとの結果となった。

(2) 放射性炭素年代測定について

年代測定結果は第24表にまとめた。結果から若干の所見を記す。

1区の礎石建物跡 (ST02) 直上に堆積するⅥ層を対象として年代測定をした。3点のサンプル(第24表1~3)の2σ暦年代較正值のうち最も古い値は1,221calAD(3)、最も新しい値は1,641calAD(1)で、13世紀前半~17世紀半ばと年代幅があった。試料の部位(古木効果)や古い年代の炭化物が混入した可能性も含めて、検討が必要と報告されている。同じく1区の造成土(Ⅶ2層)除去後の地山(Ⅷ層)上面で検出されたSF01出土の試料(4~6)のうち最も古い値は1,285calAD(4)、最も新しい値は1,438calAD(5)(以下すべて2σ暦年代較正值)で、13世紀末~15世紀前半の値が得られた。資料数が少ないこと

に加えて、得られた年代幅が広いこと確かなことは言えないが、SF01は15世紀前半までに埋め立てられ、その後構築されたST02は17世紀半ばまでには埋まっていたと推測される。1区の墓坑(SK01)出土土人骨(7～9)は形質鑑定により1体分との所見を得ており、副葬銭から1,411年以降に埋葬されたことは明らかだが、試料の年代測定結果は最も古い値が1,453calAD(8)、最も新しい値は1,650calAD(7)と時間幅が広い。

2区の尾根筋を分断する堀切と推測したSD201出土試料(13～16)は、最も古い値が1,387calBC(16)、最も新しい値1,278calAD(14)と時間幅が大き過ぎ、遺構時期の決め手にならない。しかし、尾根筋東側において溝跡(SD201)が埋没した後に構築された土坑(SK201)出土試料(13～16)は最も古い値が1,486calAD(12)最も新しい値が1,657calAD(10)で、15世紀末～17世紀中頃の範囲を示しているため、溝跡はこの時期までには埋没していることになる。

3-1区のV3層で検出した掘立柱建物跡ST302の柱穴から採取した試料(17～19)は最も古い値が1,432calAD最も新しい値が1,636calAD(17)で、13世紀末～17世紀前半を示す。また、ST307の試料(20～22)は659calAD(22)～1,432calAD(21)で、7世紀中頃～15世紀中頃と幅が広い。ST302と307から得た各3点の試料は、それぞれ土塊の表面にある薄い炭化物、土塊に含まれる炭化物、土塊の中から炭化物の小片であり、試料の由来によって分析結果に違いが出る点に注意を要するという報告がある。一方、IV3層上面で検出した土坑(SK351)から出土したモモの種子(23)と炭化物(24)の年代は、前者が1,406calAD～1,443calAD、後者は1,043calAD～1,217calADである。なお、試料の近くから15世紀の常滑甕が出土している。

以上、今回の分析では遺構や堆積層ごとの測定結果に年代差がみられ、対象試料の選別、試料採取などに課題が残された。

(3) 赤外分光分析と炭素・窒素同位体分析について

3区の土坑SK351出土の甕には表面と断面に黒色物が附着していた。接着剤の可能性を考え、その成分を探るため赤外分光分析を実施した結果、漆を特定するウルシオールの吸収は認められず、アスファルトと同定された。炭素・窒素同位体分析ではC3植物に由来する結果となった。

第23表 科学分析結果表1

地区区分	神之峯城跡 基本土層	トレンチ名	層名 (現場呼称)	プラント・オパール 検出量	花粉分析結果	珪藻分析結果
谷沢地区	303T (平塚地 301)		5	0個/g	花粉化石は検出されない。	珪藻化石は検出されない。
			6	0個/g	花粉化石は検出されない。	珪藻化石は検出されない。
			7	3,000個/g	コナラ属コナラ属属、クリ、モチノキ属、カエデ属、イネ科、シダ植物等炭素 酸分子がわずかに検出された。	真菌性種である <i>Heteroschia am phioxys</i> がわずかに検出された。
			8	0個/g	コナラ属コナラ属属、トチノキが検出された。	珪藻化石は検出されない。
			9	600個/g	花粉化石は検出されない。	珪藻化石は検出されない。
			10	0個/g	クリがわずかに検出された。	真菌性種である <i>Heteroschia am phioxys</i> , <i>Navicula musica</i> , <i>P inudaria microstauron</i> がわ ずかに検出された。
			11	600個/g	花粉化石は検出されない。	珪藻化石は検出されない。
			12	600個/g	マツ属産種管束炭素酸分子がわずかに検出された。	珪藻化石は検出されない。
			13	0個/g	トチノキが検出された。	珪藻化石は検出されない。
			14	0個/g	花粉化石は検出されない。	珪藻化石は検出されない。
			15	3,600個/g	クリ、トチノキ、カヤツリグサ科、シダ植物等炭素酸分子がわずかに検出された。	真菌性種である <i>Navicula mu sica</i> がわずかに検出された。
			16	0個/g	スズ、シイ属、コナラ属コナラ属属、イネ科、シダ植物等炭素酸分子、シダ植 物三葉炭素酸分子が検出された。	珪藻化石は検出されない。
			17	0個/g	コナラ属コナラ属属、ツグ属、クリ、カバノキ属、ハンノキ属、コウヤマキ、 ニレ属-ケヤキ、モチノキ属、クワ科-イラクサ科、バラ科、ウコギ科、イネ 科、ヨモギ属シダ植物等炭素酸分子がわずかに検出された。	珪藻化石は検出されない。
			18	0個/g	コナラ属コナラ属属、ツグ属、コウヤマキ、ハンノキ属、シイ属、トチノキ 属、イネ属、キク科、ヨモギ属、シダ植物等炭素酸分子、シダ植物三葉炭素酸分 子がわずかに検出された。	珪藻化石は検出されない。
			19	0個/g	花粉化石は検出されない。	珪藻化石は検出されない。

第24表 科学分析結果表2

番号	採取場所	層名	試料形態	補正年代 (yBP)	補正年代 (暦年較正前) (yBP)	1 σ 暦年範囲	2 σ 暦年範囲	測定番号
1	V層	—	炭化物	330±20	327±20	1,515calAD-1,529calAD(10.4%) 1,540calAD-1,600calAD(44.9%) 1,618calAD-1,634calAD(12.8%)	1,490calAD-1,603calAD(76.1%) 1,611calAD-1,641calAD(19.1%)	IAA-123050
2	V層	—	炭化物	750±20	749±21	1,260calAD-1,280calAD(68.9%)	1,226calAD-1,283calAD(95.4%)	IAAA-123051
3	V層	—	炭化物	780±20	776±21	1,225calAD-1,271calAD(68.2%)	1,221calAD-1,276calAD (95.4%)	IAAA-123052
4	SF01	—	炭化物	650±20	646±21	1,292calAD-1,309calAD(26.4%) 1,361calAD-1,387calAD(41.8%)	1,285calAD-1,320calAD(40.8%) 1,350calAD-1,392calAD(54.6%)	IAAA-123053
5	SF01	—	炭化物	530±20	526±22	1,405calAD-1,430calAD(68.2%)	1,328calAD-1,341calAD(60.9%) 1,395calAD-1,438calAD(89.4%)	IAAA-123054
6	SF01	—	炭化物	640±20	639±21	1,295calAD-1,311calAD(24.6%) 1,360calAD-1,387calAD(43.6%)	1,286calAD-1,324calAD(39.5%) 1,346calAD-1,394calAD(55.9%)	IAAA-123055
7	SK01	—	人骨 (No.2)	295±20	294±19	1,525calAD-1,557calAD(46.1%) 1,632calAD-1,646calAD(22.1%)	1,520calAD-1,593calAD(65.7%) 1,619calAD-1,650calAD(29.6%)	PLD-27546
8	SK01	—	人骨 (No.9)	365±15	367±17	1,467calAD-1,514calAD(48.5%) 1,600calAD-1,617calAD(19.7%)	1,453calAD-1,523calAD(62.2%) 1,575calAD-1,625calAD(33.2%)	PLD-27547
9	SK01	—	人骨 (No.6)	345±20	343±19	1,491calAD-1,523calAD(26.0%) 1,560calAD-1,562calAD(1.7%) 1,571calAD-1,603calAD(25.3%) 1,611calAD-1,631calAD(15.3%)	1,470calAD-1,530calAD(36.2%) 1,540calAD-1,635calAD(59.2%)	PLD-27548
10	SK201	2	炭化材	290±30	293±25	1,523calAD-1,303calAD(47.6%) 1,630calAD-1,649calAD(20.6%)	1,496calAD-1,505calAD(1.3%) 1,512calAD-1,603calAD (64.4%) 1,616calAD-1,657calAD (29.7%)	IAAA-130647
11	SK201	2	炭化物	300±30	299±25	1,522calAD-1,573calAD(49.7%) 1,628calAD-1,641calAD(18.5%)	1,495calAD-1,602calAD(69.3%) 1,616calAD-1,650calAD(26.1%)	IAAA-130648
12	SK201	4	炭化物	320±30	322±25	1,519calAD-1,594calAD(55.6%) 1,619calAD-1,636calAD(12.6%)	1,486calAD-1,644calAD(95.4%)	IAAA-130649
13	SK201	9	炭化物	1,260±30	1,255±25	691calAD-750calAD(5.1%) 763calAD-776calAD(1.2%)	674calAD-822calAD(92.6%) 842calAD-860calAD(2.8%)	IAAA-130650
14	SK201	9	炭化物	770±30	773±25	1,225calAD-1,273calAD(68.2%)	1,220calAD-1,278calAD(95.4%)	IAAA-130651
15	SK201	9	炭化物	1,830±30	1,827±25	138calAD-199calAD(5.4%) 205calAD-224calAD(1.8%)	94calAD-97calAD(0.4%) 125calAD-249calAD(95.0%)	IAAA-130652
16	SK201	10	炭化物	3,020±20	3,022±23	1,366calBC-1,363calBC(2.9%) 1,293calBC-1,223calBC(65.3%)	1,387calBC-1,339calBC(1.7%) 1,311calBC-1,207calBC(77.6%) 1,201calBC-1,196calBC(0.5%)	IAAA-133278
17	SK1011 (ST300P1)	1	炭化物	340±20	340±22	1,493calAD-1,524calAD(22.4%) 1,559calAD-1,602calAD(32.4%) 1,613calAD-1,631calAD(13.4%)	1,474calAD-1,532calAD(33.9%) 1,538calAD-1,630calAD(61.5%)	IAAA-133279
18	SK1017 (ST300P5)	1	炭化物	430±20	428±19	1,440calAD-1,458calAD(68.2%)	1,432calAD-1,477calAD(95.4%)	IAAA-133280
19	ST302 (P11)	1	炭化物	410±20	410±21	1,444calAD-1,472calAD(68.2%)	1,436calAD-1,496calAD(90.4%) 1,600calAD-1,615calAD(5.0%)	IAAA-133281
20	ST307 (P5)	1	炭化物	890±20	888±22	1,053calAD-1,080calAD(22.9%) 1,152calAD-1,192calAD(39.9%) 1,197calAD-1,205calAD(5.8%)	1,045calAD-1,095calAD(31.3%) 1,119calAD-1,216calAD(64.1%)	IAAA-133282
21	ST307 (P5)	1	炭化物	440±20	443±21	1,436calAD-1,452calAD(68.2%)	1,426calAD-1,468calAD(95.4%)	IAAA-133283
22	ST307 (P7)	1	炭化物	1,310±20	1,312±21	664calAD-690calAD(3.3%) 750calAD-761calAD(1.4%)	659calAD-716calAD(72.1%) 743calAD-766calAD(23.3%)	IAAA-133284
23	SK351	—	種子 (11)	500±20	502±23	1,415calAD-1,445calAD(68.2%)	1,406calAD-1,443calAD(95.4%)	IAAA-133285
24	SK351	1	炭化物	890±30	889±26	1,051calAD-1,082calAD(24.0%) 1,129calAD-1,132calAD(1.4%) 1,152calAD-1,206calAD(42.8%)	1,045calAD-1,102calAD(33.7%) 1,118calAD-1,217calAD (61.7%)	IAAA-133286
25	Z8T (O3T)	3	炭化物	340±20	338±21	1,495calAD-1,524calAD(21.7%) 1,558calAD-1,602calAD(33.9%) 1,625calAD-1,631calAD(12.6%)	1,477calAD-1,637calAD(95.4%)	IAAA-133287
26	Z8T (O3T)	3	炭化物	300±20	301±23	1,522calAD-1,575calAD(50.8%) 1,621calAD-1,645calAD(17.4%)	1,495calAD-1,507calAD(2.3%) 1,512calAD-1,602calAD(68.4%) 1,616calAD-1,650calAD(24.7%)	IAAA-133288
27	Z8T	3	炭化物	290±20	292±24	1,523calAD-1,571calAD(46.8%) 1,613calAD-1,649calAD(21.4%)	1,523calAD-1,600calAD(94.7%) 1,616calAD-1,651calAD(24.2%)	IAAA-133289
28	Z27T	7	土壌	1,260±30	1,257±25	692calAD-749calAD(5.4%) 763calAD-771calAD(8.8%)	672calAD-779calAD(99.1%) 791calAD-805calAD(2.0%) 813calAD-826calAD(1.4%) 840calAD-862calAD(2.8%)	IAAA-133290
29	Z27T	7	炭化物	2,040±20	2,040±24	89calBC-75calBC(10.9%) 58calBC-72calBC(57.3%)	157calBC-136calBC(3.5%) 114calBC-34calBC(0.9%)	IAAA-133291
30	Z27T	7	土壌	970±20	966±22	1,034calAD-1,046calAD(31.1%) 1,094calAD-1,120calAD(31.5%) 1,141calAD-1,147calAD(6.1%)	1,019calAD-1,055calAD(36.4%) 1,077calAD-1,154calAD (59.0%)	IAAA-133292

※採取場所 () 内は現場呼称

(株) 加藤分析研究所, (株) バレオ・ラボ報告書を編集

第25表 炭素・窒素安定同位体分析結果

番号	遺物種類	遺物時期	出土遺構	取り上げ番号	分析試料	$\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$	$\delta^{15}\text{N}(\text{‰})$	炭素含有率 (%)	窒素含有率 (%)	C / N比
1	炭燼	15世紀	SK351	No.1-43-45	表面の黒色付着物	-27.7	3.14	44.6	0.64	81.0
2	炭燼	15世紀	SK02	No.1	断面の黒色付着物	-27.3	4.37	49.9	0.94	61.7

(株) 古墳地研究所報告書を編集



神之峯城跡1区 安全対策施設を設置しての調査風景



平成24年度 神之峯城跡 発掘作業記念写真



平成25年度 神之峯城跡 発掘作業記念写真

第8節 小 結

1 調査対象地の土地利用と変遷

調査対象地は神之峯城跡が立地する独立丘陵の北西側中腹にあたり、1区及び3区の詳細な土層観察の結果、谷状地形を繰り返し埋め立てて平坦地を造り、その上に遺構群を構築した様子が明らかとなった。また、2区では尾根状地形を断ち切る堀切を確認することができた。

以下、時期を追って土地利用の変遷をたどってみたい。

第1段階 調査対象地内において最も古い遺構は、1区平坦地7で検出した焼土跡SF01である。厚さ約2mの造成土Ⅶ層にバックされた焼土跡に残された炭化物の年代は、13世紀中頃から15世紀前半の値を示している。なお、3区の谷状地形を埋め立てているⅣ3層やⅤ層には古瀬戸後Ⅱ期の遺物を含むため、居住施設を含む明確な遺構は確認できなかったが、14世紀代には神之峯中腹域への侵出が始まっていたことがわかる。

第2段階 1区平坦地7及び3区平坦地301で埋め立て造成が行われる。該当する造成土は1区がⅦ層、3区はⅣ3層である。1区のⅦ層は北西斜面側で厚さ約2mに及ぶ。造成土に包まれる遺物の時期は不明ながら、その上に建てられた溝跡SD05・10を伴う礎石建物跡ST02は、古瀬戸後Ⅳ期の陶磁器を伴うため、おそらく15世紀中頃までに造成が完了していたと考えられる。なお、ST02は次段階の16世紀後半まで存続し、焼失した。平坦地27の掘立柱建物跡ST06や平坦地2の墓坑SK01も、出土遺物からみて、この段階に造られたのであろう。3区Ⅳ3層は古瀬戸後Ⅳ期の陶磁器を含むことから、1区のⅦ層とほぼ同時期に埋め立て、その上に土坑SK351・540・544・581や溝跡SD305・1001を構築している。ところで3区Ⅳ3層は、3,600個/gのプラント・オパールが検出されたことに加え酸化鉄の集積も認められるため、水田経営の可能性を検討した。しかし、平坦地301の立地環境や同層が造成土であることなどを踏まえて、その結論は留保しておきたい。

第3段階 3区平坦地301で再び埋め立て造成が行われる。古瀬戸後Ⅲ期から大窩1段階の陶磁器が含まれる3区Ⅱ層ないしⅢ層の上には、南北方向に走る溝跡SD301と303・304とに挟まれて掘立柱建物跡ST301・302・304～307・310が建つ。これらの遺構群を構築するために行った造成と考えられる。上記建物跡と主軸方位を同じくするST303や314もほぼ同時期と考えてよさそう。

ところで、2区には延長約48m、幅4m、深さ約3mの断面V字ないしU字形の溝跡＝堀切SD201が掘削されている。こうした大量の労働力を必要とする地業は、大規模な造成が行われた本段階か第2段階に実施されたことが予想できる。本遺構の埋没後に構築された石組み遺構SH201やこれに伴う土坑SK201は、出土遺物や放射性炭素年代測定結果から16世紀後半以降と考えられるため、この堀切は本段階に掘削されたものと想定したい。

第4段階 1区平坦地7のⅢ層上面で石列SH01・02、溝跡SD03を検出した。Ⅲ層は18世紀末から19世紀初頭の遺物を含むため、これらの遺構は幕末以降に構築された可能性が高い。平坦地6の1・2調査面、平坦地27の1面で検出した掘立柱建物跡ST01・03～05や隅丸長方形の土坑もこの段階のものであろう。

以上をまとめると、神之峯城跡の北西中腹は14世紀代に早くも人跡が現れ〔第1段階〕、15世紀代には大規模な造成が行われ1区に礎石建物が3区に土坑と溝跡が造られた〔第2段階〕。3区は16世紀代にも造成が行われ溝跡を伴う掘立柱建物群が構築される。2区の堀切もおそらくこの段階に掘削されたものであろう〔第3段階〕。調査対象地では第3段階で一旦人跡は途絶えるものの、1区は平坦地2及び27を中心に幕末になって再び小集落が形成される〔第4段階〕。

2 「知久十八ヶ寺」と建物跡

大正14年、市村威人氏は上久堅地区において神之峯城存続期に18箇所の寺院が存在したと推測した(市村1925)。市村氏はこれら寺院を「知久十八ヶ寺」と呼称している。うち2箇所(興禪寺、玉川寺)は現存し、ほかは寺院推定地を示す看板が立っているのみである。

今回、小字名と寺院関連地名が残る範囲を確認するため、地籍図と土地台帳を照合した(註1)。その結果は以下の通りである。

ア 1区とその隣接地には「法新院」、「栗林」、「坂尾」、「城坂」、「小路」という小字があり、市村氏の言う「法心院」という小字は存在しない。

イ 「法新院」の範囲は1区のほぼ全域をカバーしており、平地地7はそのほぼ中心地にあたる(第207図)。

ウ 3区とその隣接地には「新慶」、「坂尾」、「オカマ」、「ヒカゲ」という小字がある。

エ 「新慶」は3区のほぼ全域をカバーしており、さらに南側へ大きく広がっている。

1区の平地地7には第2段階の礎石建物跡 ST02がある。本遺構は、柱配置や出土遺物から居住機能を主とした建物ではなく、寺院(註2)または倉庫的な建物と推定してきた。残念ながら出土品に遺構の性格を示すものはないが、その時期と小字名を照らせば、本遺構が「法新院」である可能性は高い。周囲に曲輪や塹壕など城郭を構成する遺構がないことから、独立丘陵全体が城郭化した中に寺院が存在したのではなく、山頂の城郭部分とは別な空間を形成していたと考えられる。

一方、3区の平地地301には第3段階の掘立柱建物群が並ぶ。ただ、これらは礎石建物跡 ST02のような特異性がない。したがって、小字「新慶」が寺跡を示す地名だとしても、廃寺跡は今回の調査範囲外をあたるとは考えられない。

3 中腹の遺構群からみた神之峯城跡

知久氏が上久堅地区へ入部した時期は文献史料が確認されていないため不明であるが、市村氏は文亀・永正年間(1501～1520)頃と推定している(市村ほか1970)。一方、土地利用の変遷でみたとおり、神之峯城跡の中腹にある谷状地形は15世紀段階で大規模な造成が行われ、寺院(ST02)が建てられ(1区)、土坑や溝跡が設けられている(3区)。なお、造成土に含まれる遺物をみれば、人びとがこの場所に関わりをもつ時期はさらに遡る。

1・3区で確認した地業には有力な国人領主が関わっていたと考えられるが、知久氏入部以前に上久堅地区を治めた国人領主の存在を示す文献史料は確認されていない。上久堅地区は知久氏が入部して開発されたものと考えられる(岡田ほか1992)。今回確認できた大規模な造成は、知久氏という後盾があってこそ具現化できたと推測され、このことから当地区への知久氏の入部は15世紀段階に遡る可能性がある。

一方、1・3区ともに16世紀後半段階で遺構は断絶するが、これは天正12(1584)年に知久頼氏が徳川家康の命により切腹させられた時期と軌を一にする(平山2011b)。

ところで、神之峯城の主郭部は後世の改変が及んでいるが、旧状を留めている曲輪、堀切及び切岸は以下に示すとおり構造が単純で、防御機能の多くを自然の地形に依拠していると解釈できる(註3)。

ア 曲輪や曲輪がない。

イ 主郭部を堀切に土塁を多用する状況がない。

ウ 土塁囲みの成する各曲輪を堀切で分断する様子がなく、堀切は城域の境界を示す場所にあるものの、その規模は小規模で斜面下方まで垂下する状況ではない。

エ 曲輪と堀切が城内道によって連携されない。

オ 虎口が明瞭に確認できない。

カ 斜面部に豎堀がない。

キ 曲輪や堀切などの城郭施設の構築範囲は独立丘陵の山頂に限られており、斜面部に曲輪や堀切が展開する様子が確認できない。

県内に分布する鴨ヶ岳城跡（高梨氏）、井上城跡（井上氏）、葛尾城跡（村上氏）、上原城跡（諏訪氏）などの国人領主の城郭や信濃守護の城郭である林大城（小笠原氏）など、16世紀の城郭は施設の形状・規模に違いはあるものの、土塁の存在、堀切の大規模化、豎堀の存在、切岸の発達など防御機能を強化している。飯田市域の西平城跡や南本条城跡なども土塁の多用、豎堀の存在、虎口の明瞭化がみられる。これら16世紀に築城もしくは改修した城郭と神之峯城跡を同一に捉えることは難しい。むしろ、15世紀段階に築城され16世紀後半に廃城するまで改修されなかった城郭と理解した方が自然である。

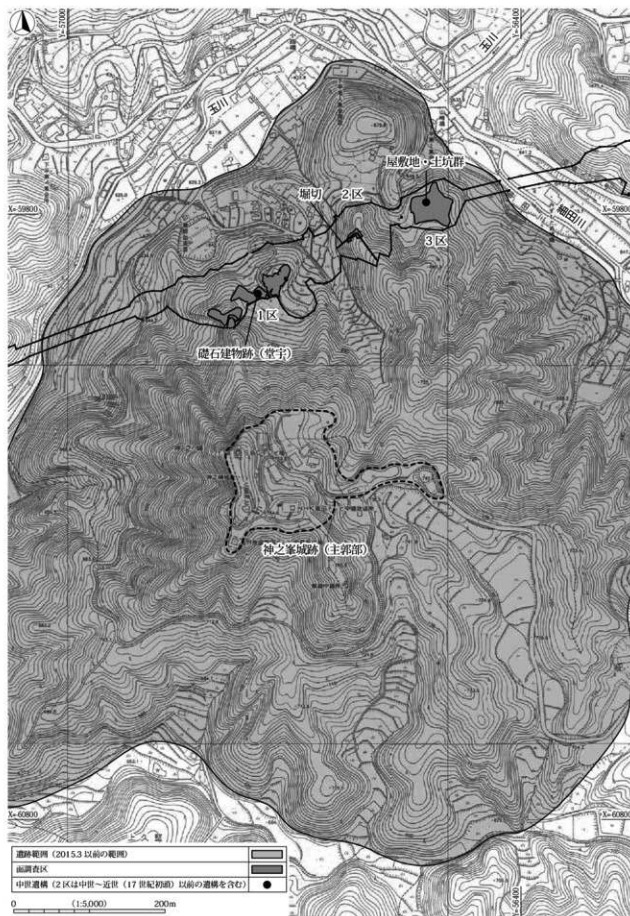
神之峯城跡中腹の開発時期と相まって、築城時期についても再検討が必要であろう。

註

- 1) 平成27年12月15日に飯田市歴史研究所において調査した。閲覧した資料は、明治20年代に作成した上久堅村役場作成の土地課税台帳と地籍図で、この資料から「法新院」、「新慶」の小字が残る地筆を確認した。
- 2) 本報告では一般的な名称として「寺院」の呼称を用いたが、厳密な意味では、古代以外での「山林寺院」の濫用は慎むべきとの時枝務氏の指摘（時枝ほか2012）からすると、1区の礎石建物跡は「山寺」の名称の方が適切になるうか。
- 3) 調査時と整理時に神之峯城跡の踏査（地表面観察）を実施した河西の所見。



神之峯城跡 主郭部の最高所に鎮座する久堅神社



第206図 神之峯城跡 中世遺構 確認地点

引用・参考文献

- 飯田市教育委員会1998『飯田の遺跡-市内遺跡詳細分布調査報告書-』
- 飯田市教育委員会2003『北本城々跡 北本城古墳』
- 飯田市教育委員会2009『鈴岡城址』
- 飯田市教育委員会2015『飯田市埋蔵文化財包蔵地地図（市内遺跡詳細分布調査報告書）』
- 市村成人1925『神之峯城址』『史蹟名勝天然記念物調査報告』第3集 1974長野県文化財保護協会復刻
- 市村成人ほか1970『下伊那史』第6巻室町時代 下伊那誌編纂会
- 大川勝宏ほか1992『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告-第2分冊-泉宮遺跡 山神城跡』三重県教育委員会
- 太田藤四朗1925『巖助大僧正記』『続群書類従』第30集 上 続群書類従完成会
- 岡田正彦ほか1992『上久堅村誌』上久堅村誌編纂委員会
- 岡本直久ほか2015『古瀬戸後期の様相-古瀬戸系施陶器窯の成立と展開-』平成26年度公益財団法人瀬戸市文化振興財団 企画展図録
- 河西克造2012『飯田市鬼釜遺跡・鬼釜古墳の発掘調査概報』『伊那』通巻第1007号 第60巻第4号
- 河西克造2013『飯田市神之峯城跡・風張遺跡の発掘調査概報』『伊那』通巻第1019号 第61巻第4号
- 河西克造ほか2012『国道474号（飯倉道路）埋蔵文化財発掘調査報告書5-飯田市内その5-井戸端遺跡・下村遺跡（鷲ヶケ跡）・芦ノ口遺跡』長野県埋蔵文化財センター
- 金子健一2015『戦国時代の瀬戸宮-古瀬戸から大瀬へ-』平成27年度公益財団法人瀬戸市文化振興財団 企画展図録
- 上久堅下平区1978『下平区誌』
- 関西近世考古学研究会2014『中近世都市の現状遺構について』『関西近世考古学研究』22
- 工業善通2008『土木考古学の推進』『季刊考古学』第102号雄山閣
- 郷道哲章1980『神之峰城』『日本城郭大系』第8巻長野・山梨 新人物往来社
- 小山岳夫1991『(2) 砥石』『佐久市埋蔵文化財調査報告書』第1集金井城跡 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター
- 近藤圭造1902『巖助往年記』『改定史籍集覧』第25冊別記類 近藤出版部
- 坂詰秀一1997『歴史考古学の構想と展開』雄山閣出版
- 笹生 衛2007『考古学から見た中世の寺院と堂』『中世寺院 暴力と景観』考古学と中世研究4 高志書院
- 信濃史料刊行会1958『勝山記』『巖助往年日記』『信濃史料』第12巻
- 信濃史料刊行会1969『矢嶋文書』『信濃史料』第15巻
- 信濃史料刊行会1974『信州下向記』『新編信濃史料叢書』第10巻
- 柴 秀毅ほか2001『上ノ平城跡-平成11・12年度上ノ平城跡発掘調査報告書』上伊那郡箕輪町教育委員会
- 下久堅村誌刊行会1973『下久堅村誌』
- 城館史科学会2009『特集 第1回城館史科学会シンポジウム『縄張りからみた戦国前期の城』』城館史科学 第7号
- 鈴木公雄1999『出土銭貨の研究』東京大学出版会
- 高森町教育委員会1995『松岡城跡公園整備に伴う試掘調査報告書 高森町埋蔵文化財発掘調査報告書第11集 松岡城跡』
- 時枝 務2011『山岳考古学』ニューサイエンス社
- 時枝 務ほか2012『山岳研究の課題』『季刊考古学』第121号 雄山閣
- 永井久美男1996『日本出土銭総覧』1996年版 兵庫埋蔵銭調査会
- 中井 均1988『中世城郭の堀について』『城』第126号

長野県埋蔵文化財センター2012『長野県埋蔵文化財センター年報』29

長野県埋蔵文化財センター2013『長野県埋蔵文化財センター年報』30

長野県埋蔵文化財センター2013『龍源寺跡 現地説明会資料』

長野県立歴史館2000『歴史の宝庫 秋葉みち-信濃古道をたどる-』文化財保護法50周年記念秋季企画展図録

長野県立歴史館2010『東の牛伏寺 西の若澤寺-古代に創建された松本平の二つの寺院-』平成22年度秋季企画展図録

中野晴久ほか2012『愛知県史』別編 室業3 中世・近世 常滑系 愛知県史編纂委員会編

萩原三雄2009『土木考古学とは何か』『季刊考古学』第108号 雄山閣

萩原三雄・中井 均2014『中世城館の考古学』高志書院

橋口定志1990『中世東国の居館とその周辺-南関東におけるいくつかの発掘調査事例から』『日本史研究』第330号

橋口定志1991『中世居館研究の現状と問題点』『考古学と中世史研究』帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集

波田町教育委員会2002『元寺場遺跡-元寺場遺跡発掘調査報告書-』

原 明芳1994『第7章塩崎城見山砦第4節3(2) 鉄釘』『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書13-更埴市内・長野市内その1-鳥林遺跡・小坂西遺跡・鶴萩七尋岩院遺跡・赤沢城跡・塩崎城見山砦遺跡・地之日遺跡・一丁田遺跡』(財)長野県埋蔵文化財センター

平山 優2011『天正壬午の乱-本能寺の変と東国戦国史-』学研パブリッシング

平山 優2011『武田遺領をめぐる動乱と秀吉の野望-天正壬午の乱から小田原合戦まで』戎光祥出版

藤澤典彦2002『墓中埋納銭貨の変容-六道銭の成立をめぐる-』『季刊考古学』第78号 雄山閣

藤澤良祐2002『瀬戸・美濃大窯編年の再検討』『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10号

藤澤良祐2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院

水野和雄1985『日本石硯考-出土品を中心として-』『考古学雑誌』第70号第4号

宮坂武男1999『図解山城探訪』第7集下伊那資料編 長野日報社

守矢昌文1993『干沢城下町遺跡-国道256号線改良事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書-』茅野市教育委員会



神之峯城跡 遠景(国土交通省中部地方整備局飯田国道事務所所提供)

第6章 総括

飯喬道路建設に伴う鬼釜遺跡、風張遺跡、神之峯城跡の調査では、縄文時代～中世以降に至る生活痕跡を確認した。従来、飯田市域においては、竜西（天竜川右岸）での調査例が圧倒的に多く、考古資料が蓄積されていた反面、上記3遺跡が所在する竜東（天竜川左岸）は調査事例が少なく、上久堅地区では鬼釜遺跡の北東方向にある北田遺跡と塚穴1号・2号古墳が調査されたに過ぎない。かかる状況の中、今回の調査は、考古資料により上久堅地区の歴史をより明らかにできるにとどまらず、竜西の調査例と合わせて飯田市域の歴史がより明らかにできる貴重な成果があがった。以下、特筆される調査成果を列記する。

縄文時代

下伊那では、10軒以上竪穴建物跡が確認された縄文中期後葉の集落が竜西の扇状地もしくは河岸段丘上に展開している。しかし、飯田市域の竜東では、ほとんど当該期の遺跡が確認されないなか、50軒以上竪穴建物跡で構成される北田遺跡は、特異な存在であった。今回、北田遺跡と近い鬼釜遺跡では、北田遺跡と並行する時期の竪穴建物跡が確認された。鬼釜遺跡の集落は、幅が狭小な自然堤防に立地するため、その地形的な制約から小規模な集落を形成するに留まったと推測される。上久堅地区は山間地であり、集落が大規模に展開できる広大な場所が少ない。今回の調査で、尾根や谷が入り組む山間地において、複雑な地形を利用して集落が形成されていたことが分かった。これが鬼釜遺跡の縄文集落発見の最大の成果で、伊那谷の縄文中期の集落を考える上で貴重な資料となろう。

古墳時代

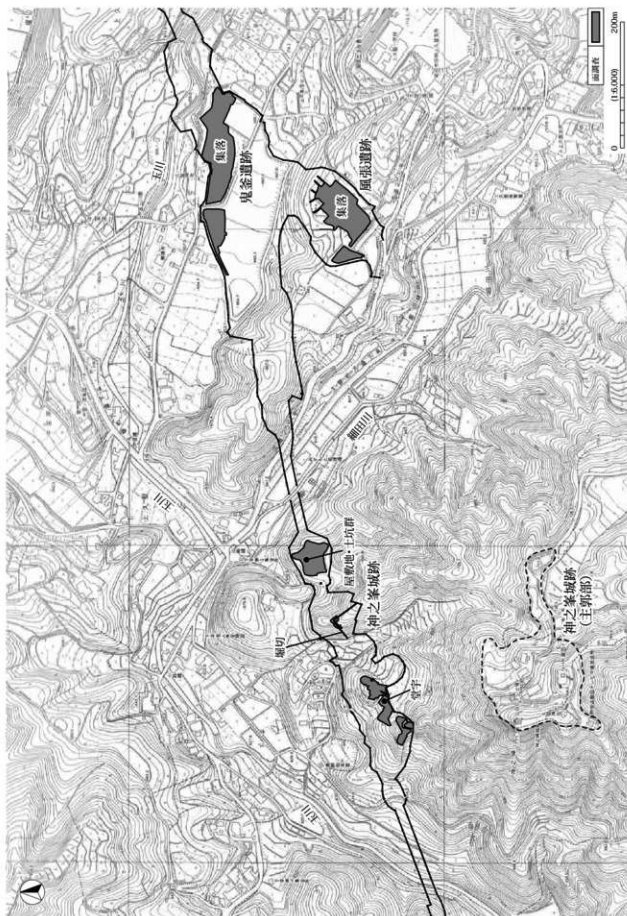
明治25年頃に発掘されて以降、位置が不明であった鬼釜古墳が実に120年ぶりに発見された。近代以降の削平で盛土は遺存しなかったが、主に周溝内出土土器から、6世紀前半に初葬、6世紀後半～7世紀初頭に追葬されていた可能性が高いことが分かった。周溝内から馬の埋葬土坑が1基発見され、土坑から出土した馬具（雲珠、鞍金具）は、初葬時に馬を埋葬していることが分かった。従来、5世紀の馬の埋葬土坑は天竜川右岸竜西の古墳（飯田古墳群）から数多く発見されている。5世紀、竜西に展開した古墳文化は、箕輪町松島王墓や下諏訪町青塚古墳の存在が示すように次第に周辺地域に拡大する。鬼釜古墳と馬の埋葬土坑の発見は、6世紀には周辺地域へ拡大したこと、馬を埋葬する風習が残っていたことを考古学的に示す稀有な事例となる。

中世

伊那谷の竜東は、知久氏の支配領域である。従来、考古学、文献史学研究分野とも、知久氏の調査・研究は、竜西を支配した小笠原氏に比べて遅れていた。かかる動向のなか、今回、知久氏の本拠（知久本郷）に分布する3遺跡が比較的広い面積調査され、そのなかに知久氏の本城（神之峯城跡）が含まれていたのである。知久氏の本拠の様相を考古学的に明らかにできる良好な資料が得られた（第208図）。

神之峯城跡は、今回が初めての発掘である。遺跡が立地する独立丘陵の山頂に主郭部があるが、曲輪や堀切等の城郭施設が構築されている範囲は、山頂と山頂よりやや下がった場所（「北小ヤ」の小字が残る一帯）に存在するに過ぎず、独立丘陵の中腹や山麓に城郭施設が展開しない。神之峯城跡は、山頂とその一帯が城域と考えることができ、本報告では構造から15世紀に存在した城郭の可能性が高いことを示唆した。

今回の調査でみつかった15世紀～16世紀の礎石建物跡は、礎石の配置と周辺の調査事例等から、寺院（堂宇）の可能性が高いことを示した。寺院と推定される礎石建物跡は、城郭が立地する独立丘陵から発見されたこと、主郭部の城郭構造が15世紀に遡る様相を示していることから、極端な事例であるが、安



第208図 鬼金遺跡・風張遺跡・神之峯城跡 中世遺構確認地点

土山(城跡)に建立された惣見寺のように、城郭と関連性をもって存続したとの見方も想像に難くない。しかし、主郭部は未発掘で、礎石建物跡と城郭との関連性を示す文献史料は確認されていない。神之峯城跡のような調査事例を待って、今後明らかにしなければならない課題である。

神之峯城跡と細田川を挟んで対峙する尾根に立地する風張遺跡から、中世以降の集落が発見されたことも注視される。調査では古瀬戸後IV期～大窠1段階もしくは2段階の遺物が出土していることから、集落の存続と神之峯城跡の礎石建物跡の時期には合致する時期がある。同時に存在した時期があったと推測される。なお、風張遺跡は、緩やかに傾斜する尾根上に立地するため、掘立柱建物跡などの遺構を構築時には、地面を削平し、平場を構築している。かかる事例は、平成19年度、飯橋道路建設に伴い埋文センターが調査した井戸端遺跡(飯田市千代)でも確認されている。風張遺跡の調査成果は、傾斜地に集落を形成する際に土木作業を行っていることを示す事例を補強したことになる。

風張遺跡の北側に広がる段丘に立地する鬼釜遺跡では、掘立柱建物跡と竪穴建物跡で構成された集落を発見した。出土遺物が少ないため、中世と特定できた遺構は少ない。出土遺物から15世紀末～16世紀前半に特定できた遺構には、方形の竪穴建物跡を伴う掘立柱建物跡がある。この竪穴建物跡は、壁際にピットがめぐり、壁とピットの間では板壁等を設置するために掘削したと思われる痕跡が確認された。この状況から、ピットは板壁等を固定するための壁柱穴と推定される。壁柱穴がめぐる竪穴建物跡は、県外では浪岡城跡や鎌倉の都市遺跡から多数確認されているが、県内において、明瞭な事例は佐久市金井城跡や下諏訪町四王前田遺跡など数少なく、伊那谷南部では初めての発見となる。竪穴建物跡の機能については諸説あり定まっていない。加えて鬼釜遺跡の竪穴建物跡は炬を伴っており、県内においてかかる事例は確認されていないのではないだろうか。本遺構の発見は、竪穴建物跡の機能を明らかにするうえで重要な資料である。

今回の調査で得られた成果は、調査例が少ない竜東にあって、重要な基礎資料となる。本書において、遺跡が本来具備する価値を本書が充分披歴できなかったことは、担当者の努力不足に起因するものである。この点においては、率直にお詫びしたい。鬼釜遺跡、風張遺跡、神之峯城跡の評価については、本書で報告する調査成果の検討・議論によって、より明確になるものと思われる。かかる吟味を経ることで、今回の調査で得られた資料が地域史説明の一助となれば、失われた遺跡への罪滅ぼしとなり、かつ遺跡を毎日直視して調査に従事した担当者として、この上ない幸せである。



鬼釜遺跡の現況



風張遺跡の現況



神之峯城跡の現況

別 表

鬼釜遺跡 第 1 表～第 8 表

風張遺跡 第 9 表～第 15 表

神之峯城跡 第 16 表～第 21 表

第1表 鬼釜遺跡 竪穴建物跡一覧

調査 番号	遺構 記号	番号	時期	調査 地区	大・中 地区	平面形	主軸方向 (°) 方位 不明	計測値 () は推定値			指定体積 積 (m ³) (下層で計 測)	ビツ ト数	埋土の 分層 状況	階位明 取(土層 の有無)	土器重量 (g)		石器点数		遺構関係	特記事項	
								長さ (m)	短辺 (m)	高さ (m)					誤入	誤入					
35	SB	01	平安	2-①	IV A13・ 14・ 17・ 18	長方形	N-28°E	8.0	(6.03)	0.29	(40.000)	2	2層	有	75.8 (29.6)	2.2	-	1	SB03・04、 ST1001P1 ～4、SK13 に切られる caAD	2期末面 炭化材 778～ 903 caAD	
36 37 38	SB	02	平安(11 世紀前半)	2-①	IV E25	方形	N-104°E	4.32	4.38	0.37	16.725	7	11層 (床下2 層)	有	113.6 (71.7)	24.8	-	2	ST02P5～ 8、SK01～ 11・20に 切られる	11期同化 物994～ 1025 caAD	
38	SB	03	平安(11 世紀前半)	2-①	IV A17・ 18	方形	N-54°E	(2.90)	(2.56)	0.31	(6.821)	1	3層	有	95.0 (87.8)	-	-	3	SB01を切 る SB04、 ST1001P2 に切られる	-	
49	SB	04	中世(15 世紀末～ 16世紀前 半)	2-①	IV A13・ 18	方形	N-8°W	2.38	(2.33)	0.27	(3.328)	22	単層	有	17.6 (15.1)	-	-	1	SB01・03 を切る	1455～ 1467 caAD	
39	SB	05	平安(11 世紀前半 ～中頃)	1-① 西	IV B13・ 18	方形	N-2°E	2.85	(2.63)	0.16	(60.672)	3	4層	無	25.1 (25.1)	4.0	-	-	-	ビツトか ら灰輪陶 器出土	
17 18	SB	08	縄文中期 後葉	1-① 東	V A22・ 23 V F02・ 03	円形	N-23°W	(4.82)	4.59	0.20	(17.237)	6	2層 (床下1 層)	有	6785.3 (3737.3)	4.9	73	-	-	協会 9～ 10期	
40	SB	09	平安	1-① 東	IV E11・ 12	方形	N-110°E	(5.13)	(5.12)	0.34	(24.192)	4	4層	有	-	24.2	-	2	ST17P1～ 6、SK89～ 93・95に 切られる	縄文土器・ 石器のみ	
41	SB	10	古墳以降	1-① 東	IV E23・ 24	方形	N-111°E	(5.50)	(5.28)	0.60	(28.709)	8	(床下1)	有	9.6 (8.7)	670.9	-	8	-	縄文土器・ 石器主体	
42	SB	11	平安～中 世(鎌倉) 後半～13 世紀)	1-① 東	IV E22・ 23	方形	N-31°E	(3.40)	(2.81)	0.12	(9.077)	12	(床下1)	有	18.8 (18.8)	797.9	7	-	-	P11～13・ 16・18に 切られる可 能性有	
25	SB	13	弥生(最 終末)	1-① 東	IV E13・ 14・ 18	方形	N-117°E	(3.86)	(3.80)	0.10	(13.621)	3	単層 (床下1)	無	375.1 (325)	19.5	-	-	-	SB06に切 られる	伊保土器 は中略式 の産
19 20	SB	14	縄文中期 後葉	1-① 中央	IV D12・ 13 IV D17・ 18	不明	N-41°W	-	-	-	-	7	-	有	18254.4 (18254.4)	-	5	-	-	埋土上重 積する	埋土、石 柱のみ、 協会11 期
21	SB	16	縄文中期 後葉	1-① 中央	IV D13	円形?	N-11°E	-	-	-	-	10	-	無	2546.4 (2546.4)	-	-	-	-	埋土、土 穴のみ、 協会10 期	
43	SB	17	中世(13 世紀)	1-① 東	IV E12・ 17	隅丸方 形	N-28°E	(3.78)	(3.47)	0.15	(11.979)	4	1層 (床下1)	有	199.6	109.7	-	-	-	SK1012に 切られる	1/4前後 残存

第2表 鬼釜遺跡 掘立柱建物跡一覽

国史 番号	遺跡 記号	時期	調査 地区	大・中 地区	主軸方向 () ± 方向不明	規模						平面形	基台 ピット 穴	土器重量 (g)		石器点数		重要 期間	特記 事項	
						長辺 方向 (m)	短辺 方向 (m)	柱間数 長辺× 短辺	柱間隔 (長辺方向) 最小～最大値 (m)	柱間隔 (短辺方向) 最小～最大値 (m)	庇 有無			面積 (m ²)	基台 時間	掘入	基台 時間			掘入
44	ST 01	—	2-①	Ⅱ A11・ 16	N-74°-W	4.70	2.11	2×1	1.98～2.72	2.11～2.13	—	10.165	長方形	P1-6	—	—	—	—	—	
45	ST 02	11世紀 前半以降	2-①	Ⅲ E25	N-10°-E	3.68	4.26	2×2	1.72～1.83	1.76～2.27	—	14.555	方形	P1-8	—	—	—	—	SB02を 切る	
44	ST 03	—	2-①	Ⅲ E20・ 25・ Ⅳ A16	N-90°-W	5.29	3.34	3×2	1.33～2.05	1.68～1.81	—	17.781	長方形	P1-8	—	—	—	—	ST04P1 に切られ る	
44	ST 04	—	2-①	Ⅲ E25・ Ⅳ A21	N-8°-E	5.54	1.87	2×1	2.32～3.15	1.82～1.90	—	10.272	長方形	P1-6	—	—	—	—	ST03P5 を切る	
46	ST 07	—	1-① 東	Ⅴ A17・ 18・ 22・ 23	N-86°-W	(8.40)	3.97	5×2	1.50～1.76	1.75～2.16	—	(33.099)	長方形	P1 12	—	—	—	—	SK1001 を切る	
44	ST 08	—	1-① 西	Ⅴ B11・ 12	N-72°-E	3.93	2.06	2×1	1.68～2.20	2.02～2.10	—	8.048	長方形	P1-6	—	—	—	—	—	
45	ST 09	—	1-① 西	Ⅴ B11・ 12	N-88°-W	5.76	(1.87)	3×1 掘存	1.82～1.99	0.72～1.07	—	10.336	長方形	P1-8	—	—	—	—	—	
45	ST 11	—	1-① 西	Ⅴ B11	N-2°-E	3.78	2.76	2×2	1.77～2.07	1.38～1.51	—	10.315	長方形	P1-8	—	—	—	—	—	
45	ST 12	—	1-① 東	Ⅴ B11・ 12	N-18°-E	3.39	1.66	2×1	1.60～1.88	1.64～1.72	—	5.579	長方形	P1-5	—	—	—	—	—	
47	ST 13	—	1-① 東	Ⅴ E12	N-26°-E	4.51	2.63	2×1	1.84～2.67	2.55～2.78	—	12.021	長方形	P1-6	—	—	—	—	ST15P2 に切られ る	
46	ST 14	—	1-① 東	Ⅴ E16・ 17・ 21・ 22	N-85°-W	5.53	3.32	2×1	0.52～2.93	3.22～3.42	—	18.571	長方形	P1-7	—	—	—	—	—	
47	ST 15	—	1-① 東	Ⅴ E12	N-13°-E	5.72	2.75	3×1	0.84～2.63	2.70～2.79	—	15.792	長方形	P1 5・7 ～10	—	—	—	—	—	ST13P2 を切る
48	ST 17	平安朝 代以降	1-① 東	Ⅴ E11・ 12・ 16・ 17	N-14°-E	6.78	4.74	2×2	3.29～3.74	2.30～2.53	—	31.648	長方形	P1 6・8・ 9	—	—	—	—	—	SD09・ SK05を 切る
49	ST 1001	中世 15世 紀末～ 16世紀 前半	2-①	Ⅴ A13・ 18	N-8°-W	(5.3)	(3.20)	2×7	2.18～3.42	1.58～7	—	(18.347)	長方形	P1-4	—	—	—	—	—	SB01・ 03を切 る

第3表 鬼釜遺跡 土器・陶磁器観察表

図録 番号	形状 番号	器種	地区	出土遺構 (遺構内の 位置)	注記事項 (採集場所、土器 の土層、土器 の出土位置、土器 の出土層、土器 の出土位置)	陶磁器 (土器の 種類)	群集 (土器の 種類)	土器基本情報		土器量情報		土器詳細情報		形状 番号	土器 種類
								時期・遺構	型式 (名称・式名)	器種・部位	時期	口径 (mm)	底径 (mm)		
53	1	26	1-0	S008 P1	—	—	—	縄文土器	下伊勢A 5才丁 深鉢 胴部	—	(3.1)	4.0	10YR6/4 10YR6/4 に 2.5YR6/3 2.5YR6/3 に 2.5YR6/3 2.5YR6/3 に	—	1類
53	12	41	1-0	S008	—	—	—	縄文土器	加管理E・大木 深鉢 口縁部	9-10期	(3.1)	8.5	10YR7/3 10YR7/3 に 7.5YR6/3 7.5YR6/3 に 7.5YR6/3 7.5YR6/3 に	—	1類
53	12	3	1-0	S008	—	—	—	縄文土器	加管理E・大木 深鉢 口縁部	9-10期	(22.7)	14.92	7.5YR6/3 7.5YR6/3 に 7.5YR6/3 7.5YR6/3 に 7.5YR6/3 7.5YR6/3 に	—	1類
53	12	4	1-0	S008	—	—	—	縄文土器	加管理E・大木 深鉢 胴部	9期	(6.3)	36.0	7.5YR6/4 10YR7/3 に 7.5YR6/4 10YR7/3 に 7.5YR6/4 10YR7/3 に	—	1類
53	12	5	1-0	S008	—	—	—	縄文土器	加管理E・大木 深鉢 口縁部	9-10期	(3.2)	14.1	7.5YR6/4 7.5YR6/4 に 7.5YR6/4 7.5YR6/4 に 7.5YR6/4 7.5YR6/4 に	—	3類
53	12	6	1-0	S008	—	—	—	縄文土器	加管理E・大木 深鉢 口縁部	9-10期	(3.2)	14.6	7.5YR6/4 7.5YR6/4 に 7.5YR6/4 7.5YR6/4 に 7.5YR6/4 7.5YR6/4 に	—	1類
53	12	7	1-0	S008	—	—	—	縄文土器	加管理E・大木 深鉢 口縁部	9-10期	(9.0)	98.1	10YR6/7 10YR6/4 に 10YR6/7 10YR6/4 に 10YR6/7 10YR6/4 に	—	2類
53	12	8	1-0	S008	—	—	—	縄文土器	加管理E・大木 深鉢 口縁部	9-10期	(11.5)	412.1	10YR3/1 10YR7/3 に 10YR3/1 10YR7/3 に 10YR3/1 10YR7/3 に	—	2類
53	12	9	1-0	S008	—	—	—	縄文土器	加管理E・大木 深鉢 口縁部	9-10期	<9.6>	23.3	10YR6/3 10YR7/2 に 10YR6/3 10YR7/2 に 10YR6/3 10YR7/2 に	—	1類
53	10	37	1-0	S008	—	—	—	縄文土器	加管理E・大木 深鉢 口縁部	9-10期	(4.0)	32.8	10YR6/6 10YR6/6 に 10YR6/6 10YR6/6 に 10YR6/6 10YR6/6 に	—	3類
53	11	36	1-0	S008	—	—	—	縄文土器	加管理E・大木 深鉢 口縁部	9-10期	(2.1)	6.8	7.5YR6/3 7.5YR6/3 に 7.5YR6/3 7.5YR6/3 に 7.5YR6/3 7.5YR6/3 に	—	3類
53	12	34	1-0	S008	—	—	—	縄文土器	加管理E・大木 深鉢 口縁部	9-10期	(2.7)	32.5	10YR3/1 10YR7/3 に 10YR3/1 10YR7/3 に 10YR3/1 10YR7/3 に	—	1類
53	13	39	1-0	S008	—	—	—	縄文土器	加管理E・大木 深鉢 胴部	9-10期	<8.3>	6.0	10YR7/3 10YR7/3 に 10YR7/3 10YR7/3 に 10YR7/3 10YR7/3 に	—	1類
53	12	14	1-0	S008	—	—	—	縄文土器	加管理E・大木 深鉢 胴部	9-10期	<7.3>	15.4	10YR6/6 10YR6/6 に 10YR6/6 10YR6/6 に 10YR6/6 10YR6/6 に	—	1類
53	12	15	1-0	S008	—	—	—	縄文土器	加管理E・大木 深鉢 胴部	9-10期	(6.0)	36.7	10YR3/1 10YR7/3 に 10YR3/1 10YR7/3 に 10YR3/1 10YR7/3 に	—	1類
53	16	43	1-0	S008	—	—	—	縄文土器	加管理E・大木 深鉢 胴部	9-10期	(2.8)	10.1	10YR6/6 10YR6/6 に 10YR6/6 10YR6/6 に 10YR6/6 10YR6/6 に	—	1類
53	17	44	1-0	S008	—	—	—	縄文土器	加管理E・大木 深鉢 胴部	11期	(2.7)	14.8	10YR7/3 10YR7/3 に 10YR7/3 10YR7/3 に 10YR7/3 10YR7/3 に	—	1類
53	18	303	1-0	S008	—	—	—	縄文土器	加管理E・大木 深鉢 胴部	9-10期	(10.5)	67.3	7.5YR6/3 7.5YR6/3 に 7.5YR6/3 7.5YR6/3 に 7.5YR6/3 7.5YR6/3 に	—	3類
54	12	19	1-0	S014	—	—	—	縄文土器	加管理E・大木 深鉢 胴部	10期	(8.4+ 9.6)	58.02	7.5YR6/3 7.5YR6/6 明灰 明灰	—	1類
54	12	20	1-0	S014	—	—	—	縄文土器	加管理E・大木 深鉢 胴部	9-10期	(9.0)	35.564	10YR6/7 10YR6/4 に 10YR6/7 10YR6/4 に 10YR6/7 10YR6/4 に	—	1類
54	12	21	1-0	S014	—	—	—	縄文土器	加管理E・大木 深鉢 胴部	11期	(33.5)	2386	10YR6/4 10YR6/4 に 10YR6/4 10YR6/4 に 10YR6/4 10YR6/4 に	—	1類
54	13	22	1-0	S014	—	—	—	縄文土器	加管理E・大木 深鉢 胴部	11期	(11.7)	148.5	7.5YR6/4 7.5YR6/4 に 7.5YR6/4 7.5YR6/4 に 7.5YR6/4 7.5YR6/4 に	—	4類
54	13	23	1-0	S014	—	—	—	縄文土器	加管理E・大木 深鉢 胴部	—	(5.3)	171.7	5YR7/6 5YR7/6 明灰	—	1類

別表 鬼釜遺跡

図面 番号	図式 番号	管理 番号	地区 番号	出土遺構 (遺構内の 位置関係 を示す クワット)	注目遺構 (注記欄に記述した もの以外、 もしくは図面に記載した名称)	遺構名 (注記欄に記述した もの以外)	位置関係 (遺構間の 位置関係)	時期/種類	土器形式 (注記欄に記述した もの以外)	器物・部位	土器基礎部				土器口縁部				土器 (注記欄に記述した もの以外)	
											口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	重量 (g)	外面色調	内面色調	赤褐色 ・ 黒 ・ 緑 ・ 黄	灰文 ・ 灰 ・ 黒		
58	58	140	1-0	SQ01	No. 28	IV 1 群 物忌合部 (58)	縄文中期後葉/土器	縄文中期後葉/土器	下伊勢A タイプ	深鉢 胴部	10YR6/4 10YR6/4 に よる濃赤褐色	10YR6/4 10YR6/4 に よる濃赤褐色	—	—	—	—	—	—	—	—
58	59	145	1-0	SQ01	IV D21-11.V 1 群	IV 1 群 物忌合部 (58)	縄文中期後葉/土器	縄文中期後葉/土器	下伊勢A タイプ	深鉢 胴部	10YR6/4 10YR6/4 に よる濃赤褐色	10YR6/4 10YR6/4 に よる濃赤褐色	—	—	—	—	—	—	—	—
58	60	141	1-0	SQ01	No. 33	IV 1 群 物忌合部 (58)	縄文中期後葉/土器	縄文中期後葉/土器	下伊勢A タイプ	深鉢 胴部	10YR6/4 10YR6/4 に よる濃赤褐色	10YR6/4 10YR6/4 に よる濃赤褐色	—	—	—	—	—	—	—	—
58	15	61	130	1-0	SQ01	No. 190	IV 1 群 物忌合部 (58)	縄文中期後葉/土器	下伊勢A タイプ	深鉢 胴部	10YR6/2 10YR6/2 系 に よる濃赤褐色	10YR6/2 10YR6/2 系 に よる濃赤褐色	—	—	—	—	—	—	—	—
58	62	155	1-0	SQ01	No. 263	IV 1 群 物忌合部 (58)	縄文中期後葉/土器	縄文中期後葉/土器	下伊勢A タイプ	深鉢 胴部以下	5YR5/4 に よる濃赤褐色	5YR5/4 に よる濃赤褐色	—	—	—	—	—	—	—	—
58	63	175	1-0	SQ01	No. 484	IV 1 群 物忌合部 (58)	縄文中期後葉/土器	縄文中期後葉/土器	下伊勢A タイプ	深鉢 胴部	10YR6/2 10YR6/2 系 に よる濃赤褐色	10YR6/2 10YR6/2 系 に よる濃赤褐色	—	—	—	—	—	—	—	—
58	64	174	1-0	SQ01	No. 380	IV 1 群 物忌合部 (58)	縄文中期後葉/土器	縄文中期後葉/土器	下伊勢A タイプ	深鉢 胴部	10YR6/2 10YR6/2 系 に よる濃赤褐色	10YR6/2 10YR6/2 系 に よる濃赤褐色	—	—	—	—	—	—	—	—
58	65	110	1-0	SQ01	No. 387	IV 1 群 物忌合部 (58)	縄文中期後葉/土器	縄文中期後葉/土器	下伊勢A タイプ	深鉢 胴部	10YR3/4 10YR6/4 に よる濃赤褐色	10YR3/4 10YR6/4 に よる濃赤褐色	—	—	—	—	—	—	—	—
58	15	66	109	1-0	SQ01	IV D21-11.V 1 群	IV 1 群 物忌合部 (58)	縄文中期後葉/土器	下伊勢B タイプ	深鉢 胴部	12期	10YR7/3 10YR7/3 に よる濃赤褐色	10YR7/3 10YR7/3 に よる濃赤褐色	—	—	—	—	—	—	—
58	15	67	188	1-0	SQ01	No. 346	IV 1 群 物忌合部 (58)	縄文中期後葉/土器	下伊勢B タイプ	深鉢 胴部	—	10YR3/1 10YR6/4 に よる濃赤褐色	10YR3/1 10YR6/4 に よる濃赤褐色	—	—	—	—	—	—	—
58	15	68	185	1-0	SQ01	IV D21-12.V 1 群	IV 1 群 物忌合部 (58)	縄文中期後葉/土器	下伊勢B タイプ	深鉢 胴部	—	10YR6/2 10YR6/2 系 に よる濃赤褐色	10YR6/2 10YR6/2 系 に よる濃赤褐色	—	—	—	—	—	—	—
58	15	69	186	1-0	SQ01	No. 348	IV 1 群 物忌合部 (58)	縄文中期後葉/土器	下伊勢B タイプ	深鉢 胴部	—	10YR7/2 2.5YR8-2 系 に よる濃赤褐色	10YR7/2 2.5YR8-2 系 に よる濃赤褐色	—	—	—	—	—	—	—
58	70	105	1-0	SQ01	No. 431	IV 1 群 物忌合部 (58)	縄文中期後葉/土器	縄文中期後葉/土器	白地黒點	深鉢 口縁部	—	10YR6/4 10YR7/3 に よる濃赤褐色	10YR6/4 10YR7/3 に よる濃赤褐色	—	—	—	—	—	—	—
58	71	156	1-0	SQ01	No. 536	IV 1 群 物忌合部 (58)	縄文中期後葉/土器	縄文中期後葉/土器	白地黒點	深鉢 口縁部	—	10YR6/4 10YR6/4 系 に よる濃赤褐色	10YR6/4 10YR6/4 系 に よる濃赤褐色	—	—	—	—	—	—	—
58	15	72	169	1-0	SQ01	No. 300・391/ No. 361・374	IV 1 群 物忌合部 (58)	縄文中期後葉/土器	白地黒點	深鉢 口縁部	—	10YR7/2 10YR7/2 に よる濃赤褐色	10YR7/2 10YR7/2 に よる濃赤褐色	—	—	—	—	—	—	—
58	15	73	168	1-0	SQ01	No. 63	IV 1 群 物忌合部 (58)	縄文中期後葉/土器	白地黒點	深鉢 口縁部	—	10YR4/1 10YR6/4 に よる濃赤褐色	10YR4/1 10YR6/4 に よる濃赤褐色	—	—	—	—	—	—	—
58	74	107	1-0	SQ01	IV D21-12.V 1 群	IV 1 群 物忌合部 (58)	縄文中期後葉/土器	縄文中期後葉/土器	下伊勢A タイプ	深鉢 口縁部	—	10YR6/4 10YR6/4 系 に よる濃赤褐色	10YR6/4 10YR6/4 系 に よる濃赤褐色	—	—	—	—	—	—	—
58	15	75	154	1-0	SQ01	No. 60・19・22・20	IV 1 群 物忌合部 (58)	縄文中期後葉/土器	下伊勢A タイプ	深鉢 口縁部	—	10YR7/4 10YR7/4 に よる濃赤褐色	10YR7/4 10YR7/4 に よる濃赤褐色	—	—	—	—	—	—	—

国名・ 番号	経度 番号	緯度 番号	管理 番号	地区	出土遺構 (遺構内の 位置・形状・ クワット)	出土遺物 (注1)同一遺構・土器 もしくは注2に示した名称 (注2)注1に 異なる)	注3記載 品名・数量 (注4)注3に 異なる)	原産地 (注5)注3に 異なる)	時期・種類	土器形式 (注6)注3に 異なる)	器種・部位	目録時期	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	重量 (g)	外面色調	内面色調	土器正装位置		土器正装位置			
																			赤釘・ 漆・ 麻・ 織物	城文 模写	赤釘・ 漆・ 麻・ 織物	城文 模写		
56	15	76	170	1-0	5001	3001 No. 547・ IV 105・4 IV 土器	IV 1 普通 物2点各1 (注)	—	縄文中期後葉/ 土器	包帯形土器	深鉢 (口縁部)	—	—	—	(5.0)	1280	7.5YR6/4・7.5YR6/4に よる	—	—	—	—	1期		
56	—	77	172	1-0	5001	5001 No. 424 No. 512	IV 1 普通 物2点各1 (注)	—	縄文中期後葉/ 土器	包帯形土器	深鉢 (口縁部)	—	—	—	(7.1)	1388	10YR7/2・2.5YR6/3に よる	—	—	—	—	—	1期	
56	15	78	171	1-0	5001	5001 No. 434	IV 1 普通 物2点各1 (注)	—	縄文中期後葉/ 土器	包帯形土器	深鉢 (口縁部)	—	—	—	(4.8)	400	10YR6/3・10YR6/4に よる	—	—	—	—	—	1期	
56	15	79	157	1-0	5001	5001 No. 288	IV 1 普通 物2点各1 (注)	—	縄文中期後葉/ 土器	—	深鉢 (口縁部)	—	—	—	(4.0)	31.2	10YR7/3・10YR6/3に よる	—	—	—	—	—	縄文 3期	
56	15	80	158	1-0	5001	5001 No. 548	IV 1 普通 物2点各1 (注)	—	縄文中期後葉/ 土器	—	深鉢 (口縁部)	—	—	—	(5.2)	75.5	10YR7/3・10YR6/3に よる	—	—	—	—	—	1期	
56	—	81	176	1-0	5001	5001 No. 414 No. 416	IV 1 普通 物2点各1 (注)	—	縄文中期後葉/ 土器	—	深鉢 (口縁部)	—	—	—	(3.3)	90.6	10YR6/4・10YR6/4に よる	—	—	—	—	—	1期	
56	—	82	177	1-0	5001	5001 No. 542・543	IV 1 普通 物2点各1 (注)	—	縄文中期後葉/ 土器	—	深鉢 (口縁部)	—	—	—	(7.0)	35.5	10YR6/2・10YR6/2に よる	—	—	—	—	—	縄文 1期	
59	16	83	85	1-0	5001	5001 No. 232・222 No. 219・ No. 206・208・250・ IV 1・ IV 1 普通 物2点各1 (注)	IV 1 普通 物2点各1 (注)	—	縄文中期後葉/ 土器	筒形土器	深鉢 胴部	11期	<330>	(0.5) (1.2)	929.7	10YR7/4・10YR2/2に よる	—	—	—	—	—	—	2期	
59	15	84	130	1-0	5001	5001 No. 544・556	IV 1 普通 物2点各1 (注)	—	縄文中期後葉/ 土器	筒形土器	深鉢 胴部	11期	—	(13.2)	279.1	10YR6/3 による	—	—	—	—	—	—	1期	
59	15	85	128	1-0	5001	5001 No. 591	IV 1 普通 物2点各1 (注)	—	縄文中期後葉/ 土器	筒形土器	深鉢 (口縁部)	11期	—	(4.5)	32.7	10YR6/3・10YR7/3に よる	—	—	—	—	—	—	3期	
59	15	86	134	1-0	5001	5001 No. 16	IV 1 普通 物2点各1 (注)	—	縄文中期後葉/ 土器	下腹部Aタイプ 土器	深鉢 突起	11~12期	—	(4.3)	37.5	10YR5/3・10YR4/3に よる	—	—	—	—	—	—	3期	
59	15	87	153	1-0	5001	5001 No. 30・103・No. 247・ No. 516・5005・835・5003・ IV 1005・ IV 1 部・5001 No. 572・ IV 1005 部・1 部	IV 1 普通 物2点各1 (注)	—	縄文中期後葉/ 土器	筒形土器	深鉢 胴部	10~11期	—	(11.4)	665.8	7.5YR5/4・7.5YR5/6明 による	—	—	—	—	—	—	—	1期
59	16	88	152	1-0	5001	5001 No. 591・562	IV 1 普通 物2点各1 (注)	—	縄文中期後葉/ 土器	筒形土器	深鉢 胴部	10~11期	—	(6.5)	124.7	7.5YR6/6・10YR6/4に よる	—	—	—	—	—	—	1期	
59	16	89	131	1-0	5001	5001 No. 518	IV 1 普通 物2点各1 (注)	—	縄文中期後葉/ 土器	筒形土器	深鉢 胴部	10~11期	—	(5.0)	45.2	2.5YR6/3・2.5YR6/4に よる	—	—	—	—	—	—	1期	
59	—	90	138	1-0	5001	5001 No. 325	IV 1 普通 物2点各1 (注)	—	縄文中期後葉/ 土器	筒形土器	深鉢 胴部	10~11期	—	(5.3)	63.8	2.5YR7/3・10YR6/3に よる	—	—	—	—	—	—	7期	
59	—	01	107	1-0	5001	5001 No. 1021・131・1 部	IV 1 普通 物2点各1 (注)	—	縄文中期後葉/ 土器	筒形土器	深鉢 胴部	11~12期	—	(3.0)	17.5	10YR7/4・10YR6/3に よる	—	—	—	—	—	—	1期	
59	16	92	149	1-0	5001	5001 No. 266	IV 1 普通 物2点各1 (注)	—	縄文中期後葉/ 土器	筒形土器	深鉢 胴部	11~12期	—	(4.0)	35.9	10YR7/3・2.5YR6/3に よる	—	—	—	—	—	—	1期	
59	—	03	100	1-0	5001	5001 No. 1021・12・1 部	IV 1 普通 物2点各1 (注)	—	縄文中期後葉/ 土器	筒形土器	深鉢 胴部	12期	—	(5.0)	37.5	10YR6/4・7.5YR6/4に よる	—	—	—	—	—	—	縄文 3期	

別表 鬼釜遺跡

国史 索引 番号	区域 番号	管理 番号	相区 番号	出土遺物 (遺物内の クワット)	土器調査 目録番号 (注)同一標本複数・土器 もしくは器に分類した名称 (クワット)	調査単位 (調査単位・協力 関係)	調査時期 (調査時期)	土器本文図				土器正装図				土器正装位置			
								器種・部位	器体時期	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	重量 (g)	外面色調	内面色調	赤釘・ 漆・ 磨・ 磨正 痕跡	胎土 (底土・ 外土)		
59	-	84	108	1-①-5001	S001 IV D21-14 IV 1層・IV D21-16 IV 1層 土器	縄文中期後葉 土器 N 1 群 物忌各器 (器)	-	-	深鉢 胴部	-	-	(4.4)	35.3	7.5YR6/4 10YR6/3に 比べ、磨	10YR6/3に 比べ、磨	-	赤文 3類		
59	-	95	129	1-①-5001	S001 No.628 土器	縄文中期後葉 土器 N 1 群 物忌各器 (器)	-	11期	深鉢 胴部	-	-	(3.6)	22.4	7.5YR6/4 10YR6/3に 比べ、磨	10YR6/3に 比べ、磨	-	-	1類	
59	-	96	136	1-①-5001	S001 No.333 土器	縄文中期後葉 土器 N 1 群 物忌各器 (器)	-	-	深鉢 胴部	-	-	(5.2)	26.8	10YR6/3 7.5YR6/3に 比べ、磨(赤・黒)	10YR6/3に 比べ、磨(赤・黒)	-	深鉢 1類		
59	-	97	135	1-①-5001	S001 IV 105-6 IV 1層 土器	縄文中期後葉 土器 N 1 群 物忌各器 (器)	-	-	深鉢 胴部	-	-	(5.1)	33.6	10YR6/4 10YR6/3に 比べ、磨	10YR6/3に 比べ、磨	-	-	1類	
59	16	98	122 (160 之棟 之)	1-①-5001	S001 No.491・IV D21-12 IV 1層・No.69 土器	縄文中期後葉 土器 N 1 群 物忌各器 (器)	-	10~11期	深鉢 口縁部	-	-	(4.3)	102.2	10YR6/4 10YR6/3に 比べ、磨(赤・黒)	10YR6/3に 比べ、磨(赤・黒)	-	口縁部、磨 肌層、い		
59	16	99	119	1-①-5001	S001 No.9 土器	縄文中期後葉 土器 N 1 群 物忌各器 (器)	-	-	深鉢 口縁部	-	-	(3.7)	44.2	10YR7/3 10YR6/3に 比べ、磨	10YR6/3に 比べ、磨	-	-	1類	
59	-	100	121	1-①-5001	S001 No.151 土器	縄文中期後葉 土器 N 1 群 物忌各器 (器)	-	-	深鉢 口縁部	-	-	(3.3)	15.7	10YR6/3 10YR6/3に 比べ、磨	10YR6/3に 比べ、磨	-	口縁部、磨		
59	16	101	125	1-①-5001	S001 No.152 土器	縄文中期後葉 土器 N 1 群 物忌各器 (器)	-	-	深鉢 口縁部	-	-	(4.1)	26.3	10YR7/3 10YR7/3に 比べ、磨	10YR7/3に 比べ、磨	-	-	1類	
59	-	102	123	1-①-5001	S001 No.526 土器	縄文中期後葉 土器 N 1 群 物忌各器 (器)	-	10~11期	深鉢 口縁部	-	-	(3.8)	23.9	10YR6/4 10YR7/3に 比べ、磨	10YR6/3に 比べ、磨	-	-	1類	
60	16	103	162	1-①-5001	S001 No.324 土器	縄文中期後葉 土器 N 1 群 物忌各器 (器)	-	10~11期	深鉢 口縁部	-	-	(3.4)	51.1	7.5YR6/3 7.5YR6/3に 比べ、磨	7.5YR6/3 7.5YR6/3に 比べ、磨	-	-	3類	
60	16	104	91	1-①-5001	S001 No.447・449・IV 1-13 IV 1層・446 IV D21-11 IV 1層・No.445 105-6 IV 1層 土器	縄文中期後葉 土器 N 1 群 物忌各器 (器)	-	10期	深鉢 口縁部	-	-	(6.0)	156.1	5YR6/6 磨 7.5YR6/6 磨 磨	磨子産 産磨2・4類	-	-		
60	16	105	118	1-①-5001	S001 No.608 No.575 S003 IV 105-6 IV 1層 土器	縄文中期後葉 土器 N 1 群 物忌各器 (器)	-	-	深鉢 口縁部	-	-	(6.7)	166.6	10YR7/2 10YR7/2に 比べ、磨(赤・黒)	10YR7/2に 比べ、磨(赤・黒)	-	口縁部、磨		
60	-	106	194	1-①-5001	S001 IV D21-11 IV 1層・IV D21-14 IV 1層 土器	縄文中期後葉 土器 N 1 群 物忌各器 (器)	-	10~11期	深鉢 口縁部	-	-	(3.0)	23.0	10YR7/3 10YR7/3に 比べ、磨	10YR7/3に 比べ、磨	-	赤文 2類 3類、磨 肌層、い		
60	-	107	195	1-①-5001	S001 IV D21-15 IV 1層 土器	縄文中期後葉 土器 N 1 群 物忌各器 (器)	-	11~12期	深鉢 口縁部	-	-	(3.1)	11.3	10YR6/3 10YR6/4に 比べ、磨	10YR6/3に 比べ、磨	-	-	1類	
60	-	108	159	1-①-5001	S001 IV D21-14 IV 1層 土器	縄文中期後葉 土器 N 1 群 物忌各器 (器)	-	-	深鉢 口縁部	-	-	(2.8)	14.3	7.5YR6/4 7.5YR6/4に 比べ、磨	7.5YR6/4 7.5YR6/4に 比べ、磨	-	-	1類	
60	-	109	120	1-①-5001	S001 No.555 土器	縄文中期後葉 土器 N 1 群 物忌各器 (器)	-	-	深鉢 口縁部	-	-	(3.2)	10.6	2.5YR6/3 2.5YR6/3に 比べ、磨	2.5YR6/3 2.5YR6/3に 比べ、磨	-	-	1類	
60	-	110	124	1-①-5001	S001 No.162 土器	縄文中期後葉 土器 N 1 群 物忌各器 (器)	-	-	深鉢 口縁部	-	-	(4.7)	33.8	10YR6/4 10YR6/4に 比べ、磨	10YR6/4に 比べ、磨	-	-	3類	
60	16	111	164	1-①-5001	S001 No.335・IV D21-14 IV 1層 土器	縄文中期後葉 土器 N 1 群 物忌各器 (器)	-	-	深鉢 胴部	-	-	(5.2)	66.0	10YR7/3 10YR6/4に 比べ、磨	10YR7/3 10YR6/4に 比べ、磨	-	-	1類	

国画 番号	式 番号	図 番号	管理 番号	相区	出土層階 (遺構内の クワット)	出土層階 番号	土器 番号	土器 種類	土器 型式	器種・部位	目録 時期	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	重量 (g)	土器基礎位置		土器埋藏位置		
																外周位置	底周位置	赤灯・ 影・ 線正 線付	粘土 (底文・ 外周位置 土器)	
60	-	112	253	1-0	5001	S001	N 1 群 No. 5001	縄文中期後葉/土器	—	深鉢 胴部	—	—	(5.0)	79.7	10YR7/4	10YR7/4	内周位置	赤灯・ 影・ 線正 線付	底文 (底文・ 外周位置 土器)	
60	-	113	94	1-0	5001	S001	N 1 群 No. 682	縄文中期後葉/土器	—	深鉢 胴部	9-10期	—	(3.5)	15.9	10YR6/4	10YR7/2	—	—	—	3 期上 赤黄色 粘土
60	-	114	102	1-0	5001	S001	N 1 群 No. 306	縄文中期後葉/土器	—	深鉢 胴部	—	—	(5.8)	62.7	10YR6/3	10YR6/3	—	—	—	縄文 1 期
60	-	115	187	1-0	5001	S001	N 1 群 No. 620	縄文中期	—	深鉢 胴部	—	—	(3.3)	27.8	10YR7/2	10YR6/3	—	—	—	1 期
60	16	116	104	1-0	5001	S001	N 1 群 No. 09・No. 603	縄文中期後葉/土器	—	深鉢 胴部	11-12期	—	(7.4)	137.5	10YR7/3	10YR7/3	—	—	—	7 期
60	16	117	150	1-0	5001	S001	N 1 群 No. 253・N 1 群 No. 1	縄文中期後葉/土器	—	深鉢 胴部	10期	—	(5.1)	185.7	7.5YR5/6	7.5YR6/6	—	—	—	1 期
60	16	118	127	1-0	5001	S001	N 1 群 No. 75・No. 76	縄文中期後葉/土器	加管口・大木	深鉢 胴部	12期	—	(8.4)	98.8	10YR7/3	10YR7/3	—	—	—	4 期
60	16	119	106	1-0	5001	S001	N 1 群 No. 1021・13 期 No. 1	縄文中期後葉/土器	下伊能Bタイプ (知母土式)	深鉢 胴部下	—	—	(7.6)	39.0	10YR7/4	10YR7/6	—	—	—	1 期
60	16	120	146	1-0	5001	S001	N 1 群 No. 1021・8・V 1 期 No. 1	縄文中期後葉/土器	—	深鉢 胴部	—	—	(8.4)	69.5	10YR7/3	10YR7/3	—	—	—	1 期
60	-	121	114	1-0	5001	S001	N 1 群 No. 104	縄文中期後葉/土器	—	深鉢 胴部	—	—	(4.2)	31.1	10YR7/4	10YR4/3	—	—	—	1 期
60	-	122	113	1-0	5001	S001	N 1 群 No. 23	縄文中期後葉/土器	—	深鉢 胴部	—	—	(4.6)	22.2	10YR7/3	10YR4/2	—	—	—	1 期
60	-	123	111	1-0	5001	S001	N 1 群 No. 600	縄文中期後葉/土器	—	深鉢 胴部	—	—	(5.0)	77.2	10YR6/3	10YR6/3	—	—	—	1 期
60	-	124	126	1-0	5001	S001	N 1 群 No. 670	縄文中期後葉/土器	—	深鉢 胴部	—	—	(3.4)	15.7	10YR6/4	10YR6/3	—	—	—	3 期
60	16	125	192	1-0	5001	S001	N 1 群 No. 627・N 1 群 No. 1	縄文中期後葉/土器	下伊能B土器	深鉢 胴部	9期	—	(3.4)	94.0	10YR6/3	10YR6/3	—	—	—	1 期
60	-	126	95	1-0	5001	S001	N 1 群 No. 322	縄文中期後葉/土器	—	深鉢 胴部	—	—	(5.6)	30.2	10YR7/3	2.5YR7/3	—	—	—	1 期
60	16	127	180	1-0	5001	S001	N 1 群 No. 388・N 1 群 No. 121・12・V 1 期 No. 1	縄文中期後葉/土器	—	深鉢 胴部	—	—	(5.5)	85.8	10YR6/4	10YR6/3	—	—	—	1 期
60	16	128	163	1-0	5001	S001	N 1 群 No. 210・N 1 群 No. 14・V 1 期 No. 1	縄文中期後葉/土器	—	深鉢 胴部	—	—	(3.7)	40.1	10YR6/4	10YR6/6	—	—	—	1 期
60	16	129	107	1-0	5001	S001	N 1 群 No. 145	縄文中期後葉/土器	—	深鉢 胴部	—	—	(3.9)	26.2	7.5YR6/4	7.5YR6/6	—	—	—	1 期

国名 番号	式 番号	管理 番号	地区	地上遺構		土上遺構		土質調査位置	土質調査結果		土質調査位置		赤灯・ 旗・ 標石 埋存	城文 埋存	粘土 (灰文・ 灰土)			
				遺構 番号	遺構 説明	土質調査 位置	土質調査 結果		土質調査 位置	土質調査 結果								
62	17	183	243	1-0	S003	S003 No.123・126	縄文中期後葉 土器	縄文中期後葉 土器	深鉢 1口部底	11期	口径 (mm)	底径 (mm)	重量 (g)	外径 (mm)	内径 (mm)	赤灯・ 旗・ 標石 埋存	城文 埋存	粘土 (灰文・ 灰土)
62	17	184	244	1-0	S003	S003 No.120・S001 N 001・15 N 1層	縄文中期後葉 土器	縄文中期後葉 土器	深鉢 1口部底	11期	口径 (mm)	底径 (mm)	重量 (g)	外径 (mm)	内径 (mm)	赤灯・ 旗・ 標石 埋存	城文 埋存	粘土 (灰文・ 灰土)
62	17	185	252	1-0	S003	S003 No.23・29	縄文中期後葉 土器	縄文中期後葉 土器	深鉢 1口部底	11期	口径 (mm)	底径 (mm)	重量 (g)	外径 (mm)	内径 (mm)	赤灯・ 旗・ 標石 埋存	城文 埋存	粘土 (灰文・ 灰土)
62	17	186	251	1-0	S003	S003 N105・2 N 1層	縄文中期後葉 土器	縄文中期後葉 土器	深鉢 1口部底	11期	口径 (mm)	底径 (mm)	重量 (g)	外径 (mm)	内径 (mm)	赤灯・ 旗・ 標石 埋存	城文 埋存	粘土 (灰文・ 灰土)
62	17	187	255	1-0	S003	S003 N C25・14 N 1層	縄文中期後葉 土器	縄文中期後葉 土器	深鉢 1口部底	11期	口径 (mm)	底径 (mm)	重量 (g)	外径 (mm)	内径 (mm)	赤灯・ 旗・ 標石 埋存	城文 埋存	粘土 (灰文・ 灰土)
63	17	188	373	1-0	N 023	N 023-15 N 1層	縄文中期後葉 土器	縄文中期後葉 土器	深鉢 1口部底	11期	口径 (mm)	底径 (mm)	重量 (g)	外径 (mm)	内径 (mm)	赤灯・ 旗・ 標石 埋存	城文 埋存	粘土 (灰文・ 灰土)
63	17	189	372	1-0	N 023	N 023-15 N 1層	縄文中期後葉 土器	縄文中期後葉 土器	深鉢 1口部底	11期	口径 (mm)	底径 (mm)	重量 (g)	外径 (mm)	内径 (mm)	赤灯・ 旗・ 標石 埋存	城文 埋存	粘土 (灰文・ 灰土)
63	17	190	142	1-0	N C23	N C23-12 N 1層	縄文中期後葉 土器	縄文中期後葉 土器	深鉢 1口部底	11期	口径 (mm)	底径 (mm)	重量 (g)	外径 (mm)	内径 (mm)	赤灯・ 旗・ 標石 埋存	城文 埋存	粘土 (灰文・ 灰土)
63	17	191	370	1-0	N 023	N 023-15 N 1層	縄文中期後葉 土器	縄文中期後葉 土器	深鉢 1口部底	11期	口径 (mm)	底径 (mm)	重量 (g)	外径 (mm)	内径 (mm)	赤灯・ 旗・ 標石 埋存	城文 埋存	粘土 (灰文・ 灰土)
63	17	192	355	1-0	V F12	V F12-5 N 1層	縄文中期後葉 土器	縄文中期後葉 土器	深鉢 1口部底	11期	口径 (mm)	底径 (mm)	重量 (g)	外径 (mm)	内径 (mm)	赤灯・ 旗・ 標石 埋存	城文 埋存	粘土 (灰文・ 灰土)
63	17	193	116	1-0	N 021	N 021-5 N 1層・N 01 N 1層/ S001 N 021・14 N 1層/S001 N 021-15 N 1層(N 01 N 1 層)	縄文中期後葉 土器	縄文中期後葉 土器	深鉢 1口部底	10期	口径 (mm)	底径 (mm)	重量 (g)	外径 (mm)	内径 (mm)	赤灯・ 旗・ 標石 埋存	城文 埋存	粘土 (灰文・ 灰土)
63	17	194	349	1-0	N 002	N 002-5 N 1層	縄文中期後葉 土器	縄文中期後葉 土器	深鉢 1口部底	11期	口径 (mm)	底径 (mm)	重量 (g)	外径 (mm)	内径 (mm)	赤灯・ 旗・ 標石 埋存	城文 埋存	粘土 (灰文・ 灰土)
63	17	195	147	1-0	N 005	N 005-4 N 1層	縄文中期後葉 土器	縄文中期後葉 土器	深鉢 1口部底	11期	口径 (mm)	底径 (mm)	重量 (g)	外径 (mm)	内径 (mm)	赤灯・ 旗・ 標石 埋存	城文 埋存	粘土 (灰文・ 灰土)
63	17	196	132	1-0	N 005	N 005-4 N 1層	縄文中期後葉 土器	縄文中期後葉 土器	深鉢 1口部底	11期	口径 (mm)	底径 (mm)	重量 (g)	外径 (mm)	内径 (mm)	赤灯・ 旗・ 標石 埋存	城文 埋存	粘土 (灰文・ 灰土)
63	17	197	226	1-0	N C23	N C23-15 N 1層	縄文中期後葉 土器	縄文中期後葉 土器	深鉢 1口部底	12期	口径 (mm)	底径 (mm)	重量 (g)	外径 (mm)	内径 (mm)	赤灯・ 旗・ 標石 埋存	城文 埋存	粘土 (灰文・ 灰土)
63	17	198	348	1-0	N 004	N 004-12 N 1層	縄文中期後葉 土器	縄文中期後葉 土器	深鉢 1口部底	10期	口径 (mm)	底径 (mm)	重量 (g)	外径 (mm)	内径 (mm)	赤灯・ 旗・ 標石 埋存	城文 埋存	粘土 (灰文・ 灰土)
63	17	199	352	1-0	V F06	V F06-5 N 1層・V F06-8 V 層	縄文中期後葉 土器	縄文中期後葉 土器	深鉢 1口部底	1-2期	口径 (mm)	底径 (mm)	重量 (g)	外径 (mm)	内径 (mm)	赤灯・ 旗・ 標石 埋存	城文 埋存	粘土 (灰文・ 灰土)
63	17	200	354	1-0	V F06	V F06-5 N 1層	縄文中期後葉 土器	縄文中期後葉 土器	深鉢 1口部底	1-2期	口径 (mm)	底径 (mm)	重量 (g)	外径 (mm)	内径 (mm)	赤灯・ 旗・ 標石 埋存	城文 埋存	粘土 (灰文・ 灰土)
63	17	201	417	1-0	N 002	1-0層 N 002-0 N 1層	縄文中期後葉 土器	縄文中期後葉 土器	深鉢 1口部底	11期	口径 (mm)	底径 (mm)	重量 (g)	外径 (mm)	内径 (mm)	赤灯・ 旗・ 標石 埋存	城文 埋存	粘土 (灰文・ 灰土)
63	17	202	331	1-0	S001	S001 17層 No.50	縄文中期後葉 土器	縄文中期後葉 土器	深鉢 1口部底	11期	口径 (mm)	底径 (mm)	重量 (g)	外径 (mm)	内径 (mm)	赤灯・ 旗・ 標石 埋存	城文 埋存	粘土 (灰文・ 灰土)
63	17	203	330	1-0	S001	S001 17層 No.12・33	縄文中期後葉 土器	縄文中期後葉 土器	深鉢 1口部底	11期	口径 (mm)	底径 (mm)	重量 (g)	外径 (mm)	内径 (mm)	赤灯・ 旗・ 標石 埋存	城文 埋存	粘土 (灰文・ 灰土)
63	17	204	410	1-0	S001	S001 17層	縄文中期後葉 土器	縄文中期後葉 土器	深鉢 1口部底	11期	口径 (mm)	底径 (mm)	重量 (g)	外径 (mm)	内径 (mm)	赤灯・ 旗・ 標石 埋存	城文 埋存	粘土 (灰文・ 灰土)

別表 鬼釜遺跡

基本情報		地上遺構調査				土器調査結果				土器正装結果				土器正装位置			
図面 番号	図式 番号	位置 番号	相区	出土層階 (遺構内の 位置関係 を示す クォータ)	土器調査 結果 (土器の 種類・数量・ 土器の 位置関係 を示す)	土器調査 結果 (土器の 種類・数量・ 土器の 位置関係 を示す)	土器調査 結果 (土器の 種類・数量・ 土器の 位置関係 を示す)	土器調査 結果 (土器の 種類・数量・ 土器の 位置関係 を示す)	土器調査 結果 (土器の 種類・数量・ 土器の 位置関係 を示す)	土器調査 結果 (土器の 種類・数量・ 土器の 位置関係 を示す)	土器調査 結果 (土器の 種類・数量・ 土器の 位置関係 を示す)	土器調査 結果 (土器の 種類・数量・ 土器の 位置関係 を示す)	土器調査 結果 (土器の 種類・数量・ 土器の 位置関係 を示す)	土器調査 結果 (土器の 種類・数量・ 土器の 位置関係 を示す)	土器調査 結果 (土器の 種類・数量・ 土器の 位置関係 を示す)	土器調査 結果 (土器の 種類・数量・ 土器の 位置関係 を示す)	
63	17	205	332	1-0	S401	S401	17層 No.21	-	有縁 No.21	有縁 No.21	有縁 No.21	有縁 No.21	有縁 No.21	有縁 No.21	有縁 No.21	有縁 No.21	有縁 No.21
63	17	206	333	1-0	S401	S401	17層 No.21	-	有縁 No.21	有縁 No.21	有縁 No.21	有縁 No.21	有縁 No.21	有縁 No.21	有縁 No.21	有縁 No.21	有縁 No.21
63	17	207	337	1-0	V F02	V F02	18層 No.1	-	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1
63	17	208	338	1-0	V F02	V F02	18層 No.1	-	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1
63	17	209	362	1-0	V F07	V F07	18層 No.1	-	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1
63	-	210	360	1-0	V F07	V F07	18層 No.1	-	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1
63	-	211	351	1-0	V F02	V F02	18層 No.1	-	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1
63	-	212	378	1-0	V F02	V F02	18層 No.1	-	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1
63	-	213	361	1-0	V F07	V F07	18層 No.1	-	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1
63	-	214	376	1-0	V F02	V F02	18層 No.1	-	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1
63	17	215	359	1-0	V F02	V F02	18層 No.1	-	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1
63	-	216	381	1-0	V F02	V F02	18層 No.1	-	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1
63	17	217	375	1-0	N F07	N F07	12層 No.1	-	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1
64	17	218	364	1-0	1616	1616	1616	-	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1
64	17	219	382	1-0	1014	1014	1014	-	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1
64	17	220	368	1-0	1017	1017	1017	-	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1
64	-	221	366	1-0	1011	1011	1011	-	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1
64	-	222	367	1-0	1011	1011	1011	-	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1
64	17	223	25	1-0	2トシチ	1-0	2トシチ	-	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1
64	-	224	363	1-0	1617	1617	1617	-	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1
64	-	225	369	1-0	917	917	917	-	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1
64	17	226	414	1-0	Z	1-0	Z	-	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1
64	17	227	57	1-0	S413 S41391	S413 S41391	S413 No.1	-	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1
64	-	228	65	1-0	S606	S606	S606 No.2・3・6・7・8、 S613 No.1	-	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1	有縁 No.1

図面 番号	式 番号	規模 番号	管理 番号	地区 番号	出土遺物 (遺物内の 位置関係 を示す クワット)	出土遺物 目録 (注)同一標本集合、本票 6、7、8は別表記載した名称)	位置関係 (記載がない場合は、 この位置関係に 関係なし)	附属物 (記載がない場合は、 この位置関係に 関係なし)	土器本文部				土器正装部				土器口縁部		胎土 (焼成 温度)				
									土器形式 (土器の種類)	時期/種類	土器式 (土器の種類)	器種・部位	器種・部位	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	重量 (g)	外面色		内面色	赤鉄 ・ 黒 ・ 緑 ・ 黄	底文 ・ 胎文 ・ 底面 ・ 胎文	
64	17	229	64	1-0	S806	S806 No.1/1 甕	-	-	古墳/土師器	古墳後部土師器	古墳後部土師器	小甕 口縁部- 底面	口縁部	-	<8.2>	(6.5)	44.7	7.5YR7/4 に23.0% 程度	3YR7/6 程度	-	1 類	-	胎土 (焼成 温度)
64	17	230	293	1-0	S801	S801 甕 No.3/S801・甕 No.3	-	-	古墳後部土師器	古墳後部土師器	古墳後部土師器	口縁部-底面	6世紀後半	<14.8>	<10.7>	4.8	131.6	10YR8/3 に10YR1/7 程度	10YR1/7 程度	内面	-	1 類 ・ 人形 ・ 人形 ・ 人形	-
64	17	231	292	1-0	S801	S801 甕 No.3・S801・甕 No.3/S801	-	-	古墳後部土師器	古墳後部土師器	古墳後部土師器	口縁部-底面	6世紀後半	13.8	(10.4)	4.5	182.9	7.5YR7/4 に23.0% 程度	7.5YR7/4 に23.0% 程度	内面	-	1 類 ・ 人形 ・ 人形 ・ 人形	-
64	17	232	270	1-0	S801	S801 甕 No.128	-	-	古墳後部土師器	古墳後部土師器	古墳後部土師器	口縁部-底面	6世紀後半	6.4	8.0	4.9	253.5	7.5YR8/4 に23.0% 程度	7.5YR8/4 に23.0% 程度	内面	-	9 類	-
64	17	233	209	1-0	S801	S801 甕 No.1	-	-	古墳後部土師器	古墳後部土師器	古墳後部土師器	口縁部-底面	6世紀後半	12.2	8.0	4.4	251.5	7.5YR8/4 に23.0% 程度	7.5YR8/4 に23.0% 程度	内面	-	9 類	-
64	18	234	274	1-0	S801	S801 甕 No.4・5	-	-	古墳後部土師器	古墳後部土師器	古墳後部土師器	口縁部-底面	6世紀後半	12.5	6.7	5.1	260	7.5YR8/4 に23.0% 程度	7.5YR8/4 に23.0% 程度	内面	-	9 類 ・ 人形 ・ 人形 ・ 人形	-
64	18	235	406	1-0	S801	甕 No.3/S801	-	-	古墳後部土師器	古墳後部土師器	古墳後部土師器	口縁部-底面	6世紀後半	<10.0>	<4.0>	5.2	37.3	10YR7/3 に23.0% 程度	10YR7/3 に23.0% 程度	-	-	11 類	-
64	-	236	298	1-0	S801	S801 甕 No.46	-	-	古墳後部土師器	古墳後部土師器	古墳後部土師器	口縁部-底面	6世紀後半	<16.0>	-	(4.0)	22.6	7.5YR8/4 に23.0% 程度	7.5YR8/4 に23.0% 程度	内面	-	1 類 ・ 人形 ・ 人形 ・ 人形	-
64	18	237	266	1-0	S801	S801 甕 No.2	-	-	古墳後部土師器	古墳後部土師器	古墳後部土師器	小甕 口縁部- 底面	6世紀後半	10.3	4.5	12.6	96.0	2.5YR6/6 程度	2.5YR6/6 程度	-	-	1 類	-
64	18	238	286	1-0	S801	S801 甕 No.7/S801・甕 No.7/S801・甕 No.7/S801	-	-	古墳後部土師器	古墳後部土師器	古墳後部土師器	7号文口縁部 底面	6世紀後半	-	4.4	(5.4)	154.7	86.1 底面	87.1 底面	底面正装部	-	10 類	-
64	18	239	271	1-0	S801	S801 甕 No.6	-	-	古墳後部土師器	古墳後部土師器	古墳後部土師器	口縁部-底面	6世紀後半	26.1	<5.9>	24.8	272.0	7.5YR8/4 に23.0% 程度	7.5YR8/4 に23.0% 程度	-	-	9 類	-
64	18	240	205	1-0	S801	S801 甕 No.122・ 127・甕 No.120/S801 甕 No.120/S801 甕 No.120/S801	-	-	古墳後部土師器	古墳後部土師器	古墳後部土師器	口縁部-底面	6世紀後半	<8.3>	-	(25.2)	98.0	5P87/1 底面	5P87/1 底面	自然釉	-	10 類	-
65	18	241	308	1-0	S801	S801 甕 No.7/S801	-	-	古墳後部土師器	古墳後部土師器	古墳後部土師器	口縁部-底面	7世紀	<12.0>	5.1	235.5	10YR8/4 に23.0% 程度	10YR8/4 に23.0% 程度	-	-	備考	-	
65	18	242	277	1-0	S801	S801 甕 No.43	-	-	古墳後部土師器	古墳後部土師器	古墳後部土師器	高坪 口縁部- 底面	6末-7世紀 前半	-	(8.3)	133	7.5YR8/3 に23.0% 程度	7.5YR8/3 に23.0% 程度	-	-	9 類	-	
65	18	243	296	1-0	S801	S801 甕 No.32	-	-	古墳後部土師器	古墳後部土師器	古墳後部土師器	高坪 口縁部	6末-7世紀 前半	(7.8)	100.3	7.5YR8/2 に23.0% 程度	7.5YR8/2 に23.0% 程度	-	-	9 類	-		
65	-	244	295	1-0	S801	S801 甕 No.131/甕 No.55	-	-	古墳後部土師器	古墳後部土師器	古墳後部土師器	小甕 口縁部- 底面	7世紀後半	<11.3>	(5.4)	48.4	10YR8/3 に23.0% 程度	10YR8/3 に23.0% 程度	-	-	9 類	-	
65	-	245	299	1-0	S801	S801 甕 No.120/甕 No.120/S801	-	-	古墳後部土師器	古墳後部土師器	古墳後部土師器	口縁部-底面	6末-7世紀 後半	<12.0>	(5.0)	138.8	10YR7/3 に23.0% 程度	10YR7/3 に23.0% 程度	-	-	9 類	-	
65	18	246	288	1-0	S801	S801 甕 No.6/S801・甕 No.6/S801	-	-	古墳後部土師器	古墳後部土師器	古墳後部土師器	口縁部-底面	6末-7世紀 後半	<10.8>	4.6	44	80.6	2.5Y7/1 に23.0% 程度	2.5Y7/1 に23.0% 程度	-	-	-	-
65	-	247	289	1-0	S801	S801 甕 No.2/S801・甕 No.2/S801	-	-	古墳後部土師器	古墳後部土師器	古墳後部土師器	口縁部-底面	6末-7世紀 後半	(3.0)	83.8	7.5Y6/1 底面	7.5Y6/1 底面	自然釉	-	-	10 類	-	
65	18	248	295	1-0	S801	S801 甕 No.4/S801	-	-	古墳後部土師器	古墳後部土師器	古墳後部土師器	口縁部-底面	6末-7世紀 後半	(2.7)	9.5	107.1	10Y7/1 底面	10Y7/1 底面	自然釉	-	10 類	-	
65	18	249	281	1-0	S801	S801 甕 No.6/S801	-	-	古墳後部土師器	古墳後部土師器	古墳後部土師器	口縁部-底面	6末-7世紀 後半	(3.0)	92.4	5Y7/1 底面	5Y7/1 底面	自然釉	-	10 類	-		

図面 番号	図式 番号	管理 番号	地区	出土位置		出土時期	土器型式 (系統・型式等)	器種・部位	目録時期	土器主要部				土器詳細部		船上・ 岸上 位置	
				東	西					口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	重量 (g)	外面色調	内面色調		赤彩・ 黒・ 緑彩 痕跡
68-20-299	11	1-0	S005	S005 No.1-S004・1-0・11	—	—	平文/灰陶器 土器	胴 口縁部-底部	11 世紀前半	16.6	7.3	6.1	25.06	2.577/灰 白	2.577/灰白	—	—
68-20-300	34	1-0	S010	—	—	—	平文/土器	口縁部突起	11~12 期	(5.2)	8.4	10.972/3	84.1	10.972/3 に赤彩(赤 土)	10.972/3 に赤彩(赤 土)	—	—
68-20-301	416	2-0	S008	2-13K S008No.1(1期)	—	—	平文/土器	胴 口縁部	9世紀末	<10.0>	<12.1>	4.2	2.578/2	2.578/2 灰白	2.578/2 灰白	9 期で 黒彩付 なし	—
68-20-302	60	1-0	S017	—	—	—	中形/土器	口縁部	—	<10.0>	<7.8>	1.5	16.4	7.578/2	7.578/2 灰白	9 期	—
68-20-303	62	1-0	S017	—	—	—	中形/土器	口縁部	13 世紀	<19.2>	<19.2>	7.0	7.0	7.578/2	7.578/2 灰白	9 期	—
68-20-304	413	1-0	S017	2 期	—	—	赤彩/土器	胴 口縁部	—	(2.3)	6.1	7.578/1	7.578/1 灰	7.578/1 灰	7.578/1 灰	9 期	—
68-20-305	67	1-0	S017	S017 1 期	—	—	赤彩/土器	胴 口縁部	—	(3.8)	9.5	7.578/4	7.578/4 に赤彩	7.578/4 に赤彩	7.578/4 に赤彩	9 期	—
68-20-306	66	1-0	S007	S007 IV 17	—	—	赤彩/土器	胴 口縁部	—	(3.1)	18.5	5786/6	5786/6 赤	5786/6 赤	5786/6 赤	3 期で 赤彩付 なし	—
68-20-307	12	2-0	S001	S001 1-2 期 (6山層)	—	—	近形/陶器	胴 底部	17 世紀	<6.4>	(0.8)	9.1	5787/1	5787/1 灰	2.578/1 灰白	—	—
68-20-308	13	2-0	S001	S001 1-2 期 (6山層)	—	—	近形/陶器	胴 口縁部	18 末~19 世紀	(4.0)	6.2	5787/2	5787/2 灰	5787/2 灰	2.578/2 灰白	—	—
68-20-309	14	2-0	S001	S001 1-2 期 (6山層)	—	—	中形/青磁	輪 口縁部	15 末~16 世紀	(1.4)	5.1	7.577/1	7.577/1 灰	7.577/1 灰	1078/1	—	—
68-20-310	15	2-0	S001	S001 1-4 期	—	—	平文/灰陶器	胴 口縁部	10 世紀後 半以降	<13.6>	(1.7)	6.4	2.577/1	2.577/1 灰	2.578/1 灰	—	—
68-20-311	16	2-0	S001	S001 4 期	—	—	赤彩/土器	胴 口縁部	—	(2.8)	16.2	5786/4	5786/4 に赤彩	5786/4 に赤彩	5786/4 に赤彩	11 期	—
68-20-312	20	2-0	S002	S002 4 期	—	—	近形/陶器	胴 底部	18 末~19 世紀	(5.1)	(1.6)	43.5	2.578/2	2.578/2 灰	2.578/2 灰	—	—
68-20-313	21	2-0	S002	S002 1 期	—	—	近形/陶器	胴 底部	—	<12.0>	(2.8)	69.7	7.578/2	7.578/2 灰	7.578/2 灰	—	—
68-20-314	19	2-0	S002	S002 4 期	—	—	中形/陶器	胴 口縁部	17 世紀 前半	(2.2)	3.7	5784/1	5784/1 灰	5784/1 灰	2.578/2 灰	—	—
68-20-315	49	1-0	S003	S003 No.1	—	—	中形/青磁	胴 底部	13 世紀 後半	<4.5>	(2.0)	25.9	7.576/1	7.576/1 灰	7.576/1 灰	灰陶器 に赤彩	—
68-20-316	51	1-0	S003	S003 2 期	—	—	中形/青磁	胴 底部	14 世紀	(4.0)	32.9	7.576/2	7.576/2 灰	7.576/2 灰	7.576/2 灰	8 期	—
68-20-317	52	1-0	S003	S003 2 期	—	—	中形/青磁	口縁部突起	10~11 期	(1.8)	4.0	10.976/4	10.976/4 に赤彩	10.976/4 に赤彩	10.976/4 に赤彩	1 期で 赤彩付 なし	—
68-20-318	50	1-0	S003	S003 2 期	—	—	中形/陶器	胴 口縁部	11 期	(11.6)	133.3	7.576/2	7.576/2 に赤彩	7.576/2 に赤彩	7.576/2 に赤彩	赤彩付	—
68-20-319	1	2-0	S001	S001	—	—	平文/陶器	胴 口縁部	10 世紀 前半	—	9.1	888/10	888/10 灰	7.577/1	7.577/1 灰	—	—
68-20-320	8	2-0	S003	S003 2 期, S001 Pw 2 期	—	—	平文/陶器	口縁部-胴 口縁部	11 世紀 前半	—	16.0	7.077/1	7.077/1 灰	7.077/1 灰	7.077/1 灰	—	—
68-20-321	9	2-0	S004	S004 (1部層中)	—	—	中形/陶器	口縁部-胴 口縁部	15 末~16 世紀	—	7.0	10.972/1	10.972/1 灰	10.972/1 灰	10.972/1 灰	—	—
68-20-322	10	2-0	S004	S004 (1部層中)	—	—	中形/陶器	口縁部-胴 口縁部	16 世紀	—	8.1	2.578/4	2.578/4 赤	2.578/4 赤	2.578/4 赤	—	—

第5表 鬼釜遺跡 石器観察表

図面番号	PL番号	図番番号	管理番号	地区	出土遺構 (遺構外の場合は はブロッコ)	注目部位 (石器もしくは器 に記録した名称)	部破遺構 (記録がない場合は 出土遺構に同じ)	記載部位 (記録がない場合 は注目部位に 同じ)	器種	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	
75	21	1	1100	2-①	S801	北東部 2層 (石)	-	-	石鏡	黒曜石	23.5	19.0	3.5	1.19	
75	21	2	1002	1-①	S808	② 4層	-	-	石鏡	チャート	23.8	18.0	4.0	1.13	
75	21	3	1003	1-①	S808	② 5層	-	-	石鏡	チャート	13.5	14.0	3.0	0.44	
75	21	4	1102	1-①	S809	No.1	-	-	石鏡	チャート	21.0	17.0	5.5	1.43	
75	21	5	1101	1-①	S809	覆土	-	-	石鏡	黒曜石	20.0	13.0	2.5	0.32	
75	21	6	1105	2-①	S001	② 14層 底部 から 2層目 SD02との切り合 い付近 黒曜石	-	-	石鏡	チャート	24.5	17.0	3.0	0.82	
75	21	7	1096	1-①	SM01	②区 5層	-	②区 ②層	石鏡	白岩	16.5	13.5	3.5	0.82	
75	21	8	1095	1-①	SM01	17層 No.38	-	IV層 No.38	石鏡	黒+緑泥岩 (下 内石)	18.0	12.0	3.0	0.63	
75	21	9	1107	1-①	SX01	3層	-	SM01 ②層	石鏡	チャート (赤)	15.5	14.5	3.0	0.40	
75	21	10	1117	1-①	V F02-14	黒	-	② 1層	石鏡	黒曜石	28.5	16.0	5.0	1.52	
75	21	11	1115	1-①	東 VE17	灰色シルト	-	② 1層	石鏡	チャート	19.5	13.0	3.0	0.48	
75	21	12	1116	1-①	IV H05	灰色シルト 石鏡	-	IV 1層	石鏡	黒曜石	17.0	17.5	4.5	0.90	
75	21	13	1104	1-①	東 SD03	-	-	-	石鏡	黒曜石	36.5	11.0	8.0	1.67	
75	21	14	1001	1-①	S808	② 4層	-	-	石鏡	黒曜石	24.2	15.0	7.0	2.02	
75	21	15	1046	1-①	SQ01	灰色シルト No.95	-	IV 1層遺物包含層 (赤)	-	緑泥岩	10.0	41.0	21.0	30.01	
75	21	16	1125	1-①	東 VE24-3	V層	-	V 1層	石鏡	黒泥岩	78.0	30.5	10.0	25.58	
75	21	17	1123	1-①	V F08	灰色シルト	-	N 1層	石鏡	砂岩	97.5	39.0	12.0	50.00	
76	21	18	1092	1-①	SM01	覆土 2層 黒色 土 4区	-	-	緑泥岩	黒曜石	27.0	17.5	9.5	3.46	
76	21	19	1094	1-①	SM01	17層 No.34	-	IV層 No.34	緑泥岩	黒曜石	27.5	15.5	8.0	2.24	
76	21	20	1110	1-①	SX01	2区 16層	-	2区 SM01 ③ 層	緑泥岩	黒曜石	24.0	16.0	7.0	1.79	
76	21	21	1114	1-①	グリッド	調査区境界 埋積 作土	-	調査区境界 1層	緑泥岩	黒曜石	18.5	15.0	8.0	2.14	
76	21	22	1113	1-①	グリッド	灰色シルト 1 No.3	-	N 1層	緑泥岩	黒泥質泥岩	41.0	30.5	9.0	9.22	
76	21	23	1099	1-①	SM01	No.10 石鏡	-	-	緑泥岩	チャート (赤)	4.0	29.0	11.0	13.14	
76	21	24	1108	1-①	SX02	10層	-	SM01 ②層	緑泥岩	黒曜石	17.5	20.0	9.0	3.37	
76	21	25	1033	1-①	SQ01	灰色シルト	-	IV 1層遺物包含層 (赤)	-	砂岩	30.5	28.0	10.5	8.37	
76	21	26	1093	1-①	SM01	1区 5層	-	1区 ②層	砂岩	黒曜石	40.0	19.0	8.5	5.70	
76	21	27	1130	1-①	V F02-7	灰色土	-	② 1層	砂岩	チャート (赤)	44.5	24.0	10.5	8.95	
76	21	28	1034	1-①	SQ01	灰色シルト	-	IV 1層遺物包含層 (赤)	-	褐色石鏡	黒曜石	20.0	17.5	8.0	2.40
76	21	29	1111	1-①	東 VE23	-	-	-	褐色石鏡	チャート	21.5	14.0	10.0	3.34	
76	21	30	1112	1-①	東 VE J03-16	③層	-	② 1層	褐色石鏡	黒曜石	19.5	18.0	11.5	4.21	
76	21	31	1129	1-①	SM01	5層 V F05・ 09・11グリッド 及びグリッドなし	-	②層 V F05・ 09・11グリッド 及びグリッドなし	砂岩	黒+緑泥岩 (下 内石)	47.0	46.5	9.0	15.07	
77	22	32	1004	1-①	S808	No.48	-	-	打製石斧	砂岩	134.0	52.5	22.0	153.16	
77	22	33	1039	1-①	SQ01	灰色シルト No.202	-	IV 1層遺物包含層 (赤)	-	打製石斧	砂岩	115.0	44.0	19.0	322.64
77	22	34	1037	1-①	SQ01	No.307	-	IV 1層遺物包含層 (赤)	-	打製石斧	砂岩	110.0	42.5	18.0	305.24
77	22	35	1041	1-①	SQ01	灰色シルト	-	IV 1層遺物包含層 (赤)	-	打製石斧	黒泥岩	103.0	36.0	10.0	47.25
77	-	36	1122	1-①	V F12-15	灰色シルト	-	N 1層	打製石斧	黒泥岩	114.0	40.0	18.0	113.48	
77	-	37	1119	1-①	V F02-6	灰色土	-	② 1層	打製石斧	黒泥岩	80.5	44.5	14.0	78.30	
77	-	38	1079	1-①	SQ02	灰色シルト No.100	-	IV 1層遺物包含層 (赤)	-	打製石斧	砂岩	130.0	46.0	19.0	104.10
78	22	39	1038	1-①	SQ01	灰色シルト	-	IV 1層遺物包含層 (赤)	-	打製石斧	砂岩	109.0	50.5	16.0	98.77
78	-	40	1036	1-①	SQ01	灰色シルト No.92	-	IV 1層遺物包含層 (赤)	-	打製石斧	黒泥岩	116.5	44.5	17.5	107.89
78	22	41	1128	1-①	IV D23-13	灰色シルト	-	N 1層	打製石斧	黒泥岩	91.0	41.5	13.0	68.49	
78	22	42	1120	1-①	V F06-2	灰色土	-	② 1層	打製石斧	砂岩	107.0	38.0	23.0	107.28	
78	-	43	1084	1-①	SQ03	灰色シルト No.154	-	IV 1層遺物包含層 (赤)	-	打製石斧	砂岩	110.0	43.0	16.0	93.97
78	22	44	1069	1-①	SQ02	灰色シルト No.93	-	IV 1層遺物包含層 (赤)	-	打製石斧	黒泥岩	117.0	45.0	16.0	105.30
78	-	45	1040	1-①	SQ01	灰色シルト	-	IV 1層遺物包含層 (赤)	-	打製石斧	黒泥質泥岩	110.5	42.5	12.0	84.70
79	22	46	1086	1-①	SQ03	灰色シルト No.11	-	IV 1層遺物包含層 (赤)	-	打製石斧	砂岩	134.0	74.0	30.0	343.66
79	22	47	1045	1-①	SQ01	灰色シルト No.504	-	IV 1層遺物包含層 (赤)	-	打製石斧	黒泥岩	91.5	37.5	10.5	42.66
79	-	48	1042	1-①	SQ01	IV層 灰色シルト	-	IV層 灰色シルト	-	打製石斧	黒泥質泥岩	84.0	49.5	18.0	76.24
79	22	49	1043	1-①	SQ01	灰色シルト	-	IV 1層遺物包含層 (赤)	-	打製石斧	砂岩	96.5	51.0	21.0	105.31
79	22	50	1106	2-①	S001	② 18層埋 積下層IV A14+ 60付近	-	-	打製石斧	緑色内岩	111.0	48.5	19.0	125.68	
79	-	51	1009	1-①	S808	No.29	-	-	褐色石鏡	黒泥質砂岩	8.5	5.9	13.5	58.76	

別表 鬼釜遺跡

図面番号	PL番号	掘削番号	管理番号	地区	出土遺構 (遺構内の場合は タワッド)	注記単位 (石器もしくは袋 に記された名称)	埋藏遺構 (記載がない場合は 出土遺構に同じ)	埋藏単位 (記載がない場合 は注記単位に 同じ)	器種	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)
79	23	52	1074	1-①	S808	No. 49	-	-	横刃形石器	砂岩	106.0	44.0	10.0	50.90
80	-	53	1029	1-① 中	SK192	2層 No. 4	-	-	横刃形石器	砂岩	88.5	47.0	13.5	59.94
80	23	54	1019	1-① 中	SK192	3層 No. 3	-	-	横刃形石器	砂岩	117.5	46.5	11.0	53.67
80	23	55	1011	1-①	S808	No. 47	-	-	横刃形石器	砂岩	95.4	49.0	13.5	74.93
80	-	56	1010	1-①	S808	No. 63	-	-	横刃形石器	砂岩	62.9	38.0	10.0	21.52
80	-	57	1020	1-①	SK192	1層	-	-	横刃形石器	風成岩	91.2	66.0	13.0	87.09
80	-	58	1024	1-①	SK192	SK192 No. 13 SM01 3区 東ト レンチ 17層	-	-	横刃形石器	砂岩	81.2	67.0	15.0	65.27
80	-	59	1030	1-①	SK192	No. 2	-	-	横刃形石器	風成頁砂岩	70.0	45.0	9.5	35.44
80	23	60	1008	1-①	S808	No. 50	-	-	横刃形石器	粗粒砂岩	108.0	77.5	16.5	115.45
81	-	61	1017	1-①	S814	PH7 No. 72 1層	-	-	横刃形石器	砂岩	83.0	55.0	11.0	76.70
81	-	62	1013	1-①	S808	1, 3層	-	-	横刃形石器	砂岩	70.0	49.0	11.5	29.83
81	-	63	1055	1-①	SQ01	灰色シルト No. 82	IV 1層遺物包含層 (中)	-	横刃形石器	粗粒砂岩	132.0	53.0	22.0	173.26
81	23	64	1075	1-①	SQ02	灰色シルト No. 20	IV 1層遺物包含層 (中)	-	横刃形石器	砂岩	105.0	74.5	20.5	137.08
81	-	65	1056	1-①	SQ01	灰色シルト No. 534	IV 1層遺物包含層 (中)	-	横刃形石器	不明	98.0	38.0	9.0	49.04
81	-	66	1062	1-①	SQ01	灰色シルト No. 129	IV 1層遺物包含層 (中)	-	横刃形石器	風成片 (緑色片)	81.0	44.0	9.0	48.75
82	23	67	1047	1-①	SQ01	灰色シルト No. 492	IV 1層遺物包含層 (中)	-	横刃形石器	砂岩	95.0	61.0	16.5	142.70
82	23	68	1058	1-①	SQ01	灰色シルト No. 212	IV 1層遺物包含層 (中)	-	横刃形石器	砂岩	118.0	65.0	15.0	76.18
82	-	69	1052	1-①	SQ01	灰色シルト	IV 1層遺物包含層 (中)	-	横刃形石器	砂岩	60.0	63.0	8.5	36.61
82	23	70	1090	1-①	SQ03	灰色シルト No. 153	IV 1層遺物包含層 (中央)	-	横刃形石器	砂岩	131.5	65.0	25.0	202.92
82	-	71	1076	1-①	SQ02	灰色シルト No. 13	IV 1層遺物包含層 (中)	-	横刃形石器	砂岩	77.5	47.5	11.0	39.96
82	-	72	1053	1-①	SQ01	灰色シルト No. 2	IV 1層遺物包含層 (中)	-	横刃形石器	砂岩	103.5	48.5	14.0	79.49
83	-	73	1077	1-①	SQ02	No. 57 灰色シルト	IV 1層遺物包含層 (中)	-	横刃形石器	砂岩	92.0	63.5	21.0	112.87
83	-	74	1078	1-①	SQ02	No. 47 灰色シルト	IV 1層遺物包含層 (中)	-	横刃形石器	砂岩	94.5	49.5	19.0	72.92
83	-	75	1081	1-①	SQ02	No. 124 灰色シルト	IV 1層遺物包含層 (中)	-	横刃形石器	粗粒砂岩	102.0	64.0	20.0	122.17
83	-	76	1087	1-①	SQ03	灰色シルト No. 13	IV 1層遺物包含層 (中央)	-	横刃形石器	粗粒砂岩	103.0	79.0	23.5	208.42
84	-	77	1089	1-①	SQ03	灰色シルト No. 26	IV 1層遺物包含層 (中央)	-	横刃形石器	砂岩	107.0	64.0	19.0	116.35
84	23	78	1048	1-①	SQ01	灰色シルト No. 244	IV 1層遺物包含層 (中)	-	横刃形石器	砂岩	80.5	73.0	13.0	97.92
84	-	79	1049	1-①	SQ01	灰色シルト No. 574	IV 1層遺物包含層 (中)	-	横刃形石器	砂岩	95.0	108.0	19.0	200.84
84	-	80	1050	1-①	SQ01	灰色シルト No. 350	IV 1層遺物包含層 (中)	-	横刃形石器	砂岩	109.0	68.0	18.0	128.08
85	23	81	1097	1-①	SM01	3区 5層	-	3区 II層	片人打製石丁	砂岩	70.0	48.5	13.0	49.89
85	-	82	1098	1-①	SM01	3区 5層	-	3区 II層	片人打製石丁	砂岩	80.0	55.0	13.0	52.34
85	23	83	1109	1-①	SM01	3層	-	SM01 II層	片人打製石丁	砂岩	79.5	47.0	9.0	35.42
85	23	84	1126	1-①	N C20-15	V層	-	V I層	片人打製石丁 土欠	不明	73.0	43.5	13.0	45.86
85	24	85	1021	1-①	SK192	SK192 No. 10 SM01 3層東ト レンチ 17層	-	-	片刃	砂岩	78.0	80.5	19.0	159.10
85	-	86	1059	1-①	SQ01	灰色シルト	IV 1層遺物包含層 (中)	-	片刃	砂岩	98.5	85.5	24.5	170.20
85	24	87	1072	1-①	SQ02	灰色シルト No. 49	IV 1層遺物包含層 (中)	-	片刃	風成頁砂岩	88.0	54.0	23.5	129.32
85	24	88	1071	1-①	SQ02	灰色シルト No. 19	IV 1層遺物包含層 (中)	-	片刃	砂岩	73.0	67.0	21.0	120.48
86	24	89	1005	1-①	S808	No. 27	-	-	磨製石斧	風成頁砂岩 (緑色片)	137.5	48.2	29.0	324.80
86	24	90	1060	1-①	SQ01	灰色シルト No. 477	IV 1層遺物包含層 (中)	-	磨製石斧	風成頁砂岩 (緑色片)	110.0	56.0	35.0	323.33
86	24	91	1063	1-①	SQ01	No. 182 灰色シルト	IV 1層遺物包含層 (中)	-	磨製石斧	風成片 (緑色片)	56.5	35.0	12.0	39.78
86	24	92	1006	1-①	S808	No. 51	-	-	磨製石斧	緑色片	111.0	77.5	45.0	661.28
86	-	93	1061	1-①	SQ01	灰色シルト No. 507	IV 1層遺物包含層 (中)	-	磨製石斧	風成頁砂岩 (緑色片)	90.0	42.0	25.0	151.47
86	24	94	1065	1-①	SQ01	灰色シルト 1 No. 669	IV 1層遺物包含層 (中)	-	磨製石斧	風成頁砂岩 (緑色片)	136.5	60.0	39.0	598.47
87	24	95	1124	1-①	IV 107-2	灰色シルト	-	IV I層	磨製石斧	風成頁砂岩	115.0	57.0	40.5	418.0
87	24	96	1067	1-①	SQ01	No. 669	IV 1層遺物包含層 (中)	-	磨石 (磨製石斧を転用)	風成頁砂岩 (緑色片)	159.0	53.0	32.0	453.86

図版 番号	PL 番号	掲載 番号	管理 番号	地区	出土遺構 (遺構外の場合は グリッド)	注記順位 (右欄もしくは袋 頭に記載した名称)	掲載遺構 (記載がない場合は 出土遺構に同じ)	掲載順位 (記載がない場合 は注記順位に 同じ)	器種	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	高さ (mm)	重量 (g)
87	24	97	1066	1-①	SQ01	灰色シルト No.567	N 1 層遺物包含層 (地)	—	磁石 (磨製石 片を配用)	緑灰質砂岩 (緑色 片岩)	82.5	60.0	41.0	234.82
87	24	98	1016	1-① 東	SB08	調査区外埋蔵サン プル ② 4 層	—	—	銅片	細粒砂岩	26.5	20.0	5.0	2.74
87	24	99	1018	1-① 東	SB14	F 10 下	—	—	銅片	加摩石	25.5	17.5	6.5	1.75
87	25	100	1012	1-① 東	SB08	② 4 層 (調査区 外埋蔵サブレン チ)	—	—	銅片	砂岩	140.0	48.5	13.0	67.28
87	—	101	1118	1-①	SM01	③区 表土	—	③区 1層	銅片	片状ホルンフェ ルス	64.5	30.5	6.0	14.25
87	25	102	1014	1-①	SB08	③ 3層	—	—	銅片	白雲母片岩	54.7	32.0	7.0	10.98
88	25	103	1022	1-①	SK192	SK192 No.11 SM01 ③区 東ト レンチ 17層	—	—	銅片	砂岩	81.5	64.0	15.0	60.91
88	25	104	1026	1-①	SK192	SK192 No.15 SM01 ③区 東ト レンチ 17層	—	—	銅片	砂岩	67.0	43.5	9.5	27.72
88	25	105	1027	1-① 中 地	SK192	2層 No.5	—	—	銅片	砂岩	55.0	70.5	13.0	45.76
88	25	106	1028	1-① 中 地	SK192	No.9 4層より 下の距離	—	—	銅片	砂岩	60.4	61.4	11.0	33.52
88	25	107	1031	1-① 中 地	SK192	2層	—	—	銅片	細粒砂岩	82.0	96.0	16.0	126.63
88	25	108	1064	1-①	SQ01	灰色シルト 1	N 1 層遺物包含層 (地)	—	磨石	効山岩	83.0	91.5	45.5	409.68
88	25	109	1121	1-①	N 401-10	無色土 2	—	② 2層	磨石	細粒黒雲母花崗岩	107.5	80.0	41.5	564.60
88	25	110	1131	1-①	SM01	5層 V F05・ 09・11 グリッド 及びグリッドなし	—	②層 V F05・ 09・11 グリッ ド及びグリッ ドなし	磨石	片状ホルンフェ ルス	121.0	73.0	58.0	843.8
89	25	111	1007	1-① 東	SB08	② 4層	—	—	磨石	緑灰岩 (緑色岩)	114.0	36.0	19.0	99.59
89	25	112	1103	1-① 東	SB11	北東部 1層	—	—	磨石	緑灰岩 (緑色岩)	87.0	24.5	1.9	67.65
89	25	113	1032	1-① 中 地	SK192	SK192 No.7 1 層	—	—	磨石	角閃石黒雲母片麻 岩	116.0	77.0	41.0	564.05
89	25	114	1068	1-①	SQ01	灰色シルト	N 1 層遺物包含層 (地)	—	磨石	緑灰質砂岩 (緑色 岩)	87.5	68.0	48.0	450.47
89	25	115	1083	1-①	SQ02	灰色シルト 1	N 1 層遺物包含層 (地)	—	磨石	花崗岩	97.5	93.0	48.0	563.89
89	25	116	1127	1-①	N D22-15	灰色シルト	—	N 1層	(行次) 石鏃	砂岩	75.5	59.5	24.0	160.22

第6表 鬼釜遺跡 石製品観察表

図版 番号	PL 番号	掲載 番号	管理 番号	地区	出土遺構 (遺構外の場合は グリッド)	注記順位 (右欄もしくは袋 頭に記載した名称)	掲載遺構 (記載がない場合は 出土遺構に同じ)	掲載順位 (記載がない場合 は注記順位に同じ)	器種	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	高さ (mm)	重量 (g)
90	25	1	1132	1-①区	SM01	17層 No.49	—	N層 No.49	鹿状垂飾 (玉斧)	透閃石岩	88.0	44.5	5.6	29.67

第7表 鬼釜遺跡 玉類観察表

図版 番号	PL 番号	図鑑 番号	管理 番号	地区	出土遺跡	注記部位 (玉類もしくは 注記に載した字跡)	記載遺跡 (記載がない場合は 出土遺跡に同じ)	記載部位 (記載がない場合は 注記部位に同じ)	種類	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	遺物 色調
90	26	2	6001	1-①	SMO1	SMO1 No. 1	-	-	碧玉	碧玉	20.0	10.0	7.0	2.0	-
90	26	3	6005	1-①	SMO1	SMO1 No. 22	-	-	碧玉	碧玉	30.0	10.0	10.0	5.4	-
90	26	4	6002	1-①	SMO1	SMO1 No. 2	-	-	碧玉	碧玉	28.0	10.5	10.5	6.0	-
90	26	5	6007	1-①	SMO1	SMO1 No. 30	-	-	碧玉	碧玉	26.5	9.5	9.5	4.5	-
90	26	6	6003	1-①	SMO1	SMO1 No. 3	-	-	碧玉	碧玉	21.0	7.5	7.5	2.2	-
90	26	7	6006	1-①	SMO1	SMO1 No. 27	-	-	碧玉	緑閃石もしくは 黒閃石	16.0	7.0	7.0	1.2	-
90	26	8	6041	1-①	SMO1	SMO1 ③区 5層	-	③区 ③層	ガラス小玉	-	4.0	4.0	2.0	0.1	緑
90	26	9	6042	1-①	SMO1	SMO1 ③区 5層	-	③区 ③層	ガラス小玉	-	4.0	4.0	2.0	0.1	緑
90	26	10	6045	1-①	SMO1	SMO1 ③区 5層	-	③区 ③層	ガラス小玉	-	4.0	4.0	2.0	0.1	緑
90	26	11	6039	1-①	SMO1	SMO1 ③区 5層	-	③区 ③層	ガラス小玉	-	3.0	3.0	1.5	0.1	緑
90	26	12	6043	1-①	SMO1	SMO1 ③区 5層	-	③区 ③層	ガラス小玉	-	3.8	3.0	3.0	0.1	緑
90	26	13	6046	1-①	SMO1	SMO1 2T 東側	-	-	ガラス小玉	-	4.0	4.0	2.0	0.1	緑
90	26	14	6044	1-①	SMO1	SMO1 2T 西側	-	-	ガラス小玉	-	5.3	5.3	2.5	0.1	緑
90	26	15	6040	1-①	SMO1	SMO1 ③区 5層	-	③区 ③層	ガラス小玉	-	5.2	5.2	4.0	0.2	緑
90	26	16	6050	1-①	SMO1	SMO1 ③区	-	-	ガラス小玉	-	4.2	3.5	3.0	0.1	黄色
90	26	17	6047	1-①	SMO1	SMO1 ③区 5層	-	③区 ③層	ガラス小玉	-	5.3	5.0	2.8	0.1	黄色
90	26	18	6048	1-①	SMO1	SMO1 ③区 5層	-	③区 ③層	ガラス小玉	-	4.5	4.5	2.5	0.1	黄色
90	16	19	6049	1-①	SMO1	SMO1 ③区 5層	-	③区 ③層	ガラス小玉	-	4.2	4.2	2.0	0.1	黄色
90	26	20	6051	1-①	SMO1	SMO1 ③区 5層	-	③区 ③層	ガラス小玉	-	5.2	4.5	2.5	0.1	黄色
90	26	21	6037	1-①	SMO1	SMO1 ③区 5層	-	③区 ③層	ガラス小玉	-	3.5	3.5	3.0	0.1	淡緑
90	26	22	6038	1-①	SMO1	SMO1 ③区	-	-	ガラス小玉	-	4.0	4.0	2.0	0.1	淡緑
90	26	23	6036	1-①	SMO1	SMO1 2T 東側	-	-	ガラス小玉	-	4.5	4.5	3.0	0.1	淡緑
90	26	24	6012	1-①	SMO1	SMO1 ③区 5層	-	③区 ③層	ガラス小玉	-	3.5	3.5	3.0	0.1	透明
90	26	25	6015	1-①	SMO1	SMO1 ③区 5層	-	③区 ③層	ガラス小玉	-	3.2	3.2	2.0	0.1	透明
90	26	26	6016	1-①	SMO1	SMO1 ③区 5層	-	③区 ③層	ガラス小玉	-	3.5	3.5	2.0	0.1	透明
90	26	27	6019	1-①	SMO1	SMO1 ③区 5層	-	③区 ③層	ガラス小玉	-	3.5	3.5	1.8	0.1	透明
90	26	28	6026	1-①	SMO1	SMO1 ③区 5層	-	③区 ③層	ガラス小玉	-	3.5	3.5	1.8	0.1	透明
90	26	29	6027	1-①	SMO1	SMO1 ③区 5層	-	③区 ③層	ガラス小玉	-	3.2	3.2	1.8	0.1	透明
90	26	30	6028	1-①	SMO1	SMO1 ③区 5層	-	③区 ③層	ガラス小玉	-	3.1	3.1	2.0	0.1	透明
90	26	31	6029	1-①	SMO1	SMO1 ③区 5層	-	③区 ③層	ガラス小玉	-	4.0	4.0	2.8	0.1	透明
90	26	32	6030	1-①	SMO1	SMO1 ③区 5層	-	③区 ③層	ガラス小玉	-	3.3	3.3	1.8	0.1	透明
90	26	33	6031	1-①	SMO1	SMO1 ③区 5層	-	③区 ③層	ガラス小玉	-	3.1	3.1	2.0	0.1	透明
90	26	34	6032	1-①	SMO1	SMO1 ③区 5層	-	③区 ③層	ガラス小玉	-	3.0	3.0	1.5	0.1	透明
90	26	35	6034	1-①	SMO1	SMO1 ③区 5層	-	③区 ③層	ガラス小玉	-	3.5	3.5	1.8	0.1	透明
90	26	36	6035	1-①	SMO1	SMO1 ③区 5層	-	③区 ③層	ガラス小玉	-	3.5	3.5	2.0	0.1	透明
90	26	37	6011	1-①	SMO1	SMO1 ③区	-	-	ガラス小玉	-	3.5	3.5	1.5	0.1	透明
90	26	38	6014	1-①	SMO1	SMO1 ③区	-	-	ガラス小玉	-	4.3	5.0	3.0	0.1	透明
90	26	39	6018	1-①	SMO1	SMO1 ③区	-	-	ガラス小玉	-	3.5	3.5	2.0	0.1	透明
90	26	40	6020	1-①	SMO1	SMO1 ③区	-	-	ガラス小玉	-	3.4	3.4	1.8	0.1	透明
90	26	41	6021	1-①	SMO1	SMO1 ③区	-	-	ガラス小玉	-	4.8	4.8	3.0	0.1	透明
90	26	42	6022	1-①	SMO1	SMO1 ③区	-	-	ガラス小玉	-	3.6	3.6	1.8	0.1	透明
90	26	43	6023	1-①	SMO1	SMO1 ③区	-	-	ガラス小玉	-	3.5	3.5	1.8	0.1	透明
90	26	44	6024	1-①	SMO1	SMO1 ③区	-	-	ガラス小玉	-	3.0	3.0	2.0	0.1	透明
90	26	45	6025	1-①	SMO1	SMO1 ③区	-	-	ガラス小玉	-	4.5	4.5	2.5	0.1	透明
90	26	46	6033	1-①	SMO1	SMO1 ③区	-	-	ガラス小玉	-	4.0	4.0	2.5	0.1	透明
90	26	47	6010	1-①	SMO1	SMO1 1T 南側	-	-	ガラス小玉	-	4.0	4.0	2.5	0.1	透明
90	26	48	6017	1-①	SMO1	SMO1 2T 西側黒色土	-	-	ガラス小玉	-	4.1	5.0	2.5	0.1	透明
90	26	49	6009	1-①	SMO1	SMO1 ③区 5層	-	③区 ③層	ガラス小玉	-	7.0	6.3	3.0	0.2	透明
90	26	50	6013	1-①	SMO1	SMO1 ③区	-	-	ガラス小玉	-	6.1	6.1	4.0	0.3	透明
90	26	51	6052	1-①	SMO1	SMO1 ③区 5層	-	③区 ③層	ガラス小玉	-	2.0	2.0	1.1	0.05	透明
90	26	52	6008	1-①	SMO1	SMO1 ③区	-	-	白玉	石斑片岩	-	7.0	4.0	0.4	-

*長さ・幅：ガラス小玉、白玉の場合は径を表す。

第8表 鬼釜遺跡 金属製品観察表

図版番号	PL番号	図録番号	管理番号	鬼釜遺跡台帳番号	地区	出土遺物(遺物別の場合はグリッド)	注記層位(全図製品もしくは図に記載した名称)	掲載遺物(記載がない場合は出土遺物に同じ)	掲載層位(記載がない場合は注記層位に同じ)	器種	材質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	応急処理
91	26	1-1 1-2 1-3	3001	5	1-①	SK174	No. 1	-	-	漆器	鉄	95	70	2	-	土中埋没状態でより上げ	○
91	27	2	3002	6	1-①	SK174	No. 2	-	-	鎌器具	鉄	5.8	48	6	75.5	土壌付着状態でより上げ	○
91	27	3	3003	7	1-①	SK174	No. 3	-	-	鎌器具	鉄	60	50	7	土中不明	土中埋没状態でより上げ	○
91	27	4	3006	11	1-①	SM01	No. 9	-	-	歯髷金具	鉄	32	13	10	3.2	-	○
91	27	5	3022	31	1-①	SM01	(SX04) 同溝(注記) 4層	-	-	鉄	鉄	38	17	12	7.7	-	○
91	27	6	3007	8	1-①	SM01	No. 5	-	-	鉄線	鉄	34	18	5	3.5	-	○
91	27	7	3018	20	1-①	SM01	No. 19	-	-	鉄線	鉄	40	16	7	3.5	-	○
91	27	8	3024	40	1-①	SM01	①区 表土	-	①区 1層	鉄線	鉄	36	14	6	3.4	-	-
91	27	9	3031	28	1-①	SM01	(SX03 8層) No. 31	-	(SM01 II層) No. 31	鉄線	鉄	25	21	6	3	-	-
91	27	10	3014	18	1-①	SM01	No. 17	-	-	鉄線	鉄	53	13	9	5.1	-	○
91	27	11	3010	29	1-①	SM01	(SX04 6層) No. 32	-	(SM01 II層) No. 32	鉄線	鉄	48	14	10	6.4	-	○
91	27	12	3008	23	1-①	SM01	No. 24	-	-	鉄線	鉄	56	13	11	7.8	-	○
91	27	13	3005	10	1-①	SM01	No. 8	-	-	鉄線	鉄	52	22	12	5.7	-	○
91	27	14	3009	25	1-①	SM01	No. 26	-	-	鉄線	鉄	84	15	11	10.9	-	○
91	27	15	3011	33	1-①	SM01	②区 9層	-	②区 II層	鉄線	鉄	49/30/ 35/41	10/14/ 15/10	8/8/ 11/7	3.2/3.4/ 4.3/3.2	-	-
91	27	16	3012	52	1-①	SM01	③区	-	-	鉄線	鉄	39	11	5	2.5	跡で検出	-
91	27	17	3017	15	1-①	SM01	No. 14	-	-	刀	鉄	40	22	16	16.2	-	○
91	27	18	3021	30	1-①	SM01	(SX04) No. 33	-	-	刀子	鉄	76	19	12	15.6	-	-
91	27	19	3013	21	1-①	SM01	No. 20	-	-	刀子	鉄	63	24	13	18	-	-
91	27	20	3004	53	1-①	SM01	-	-	-	刀子	鉄	53	16	9	8.6	跡で検出	○
91	27	21	3020	27	1-①	SM01	No. 29	-	-	刀子	鉄	42	14	11	5	-	-
92	27	22	3016	12	1-①	SM01	No. 11	-	-	刀子	鉄	36	20	12	6.6	-	○
92	27	23	3030	17	1-①	SM01	No. 16	-	-	刀子か	鉄	43	16	8	6.6	-	○
92	27	24	3019	26	1-①	SM01	No. 28	-	-	刀子	鉄	39	12	7	3.5	-	-
92	27	25	3026	61	1-①	SM01	②区	-	-	刀子	鉄	39	15	8	6.2	跡で検出	-
92	27	26	3040	58	1-①	SM01	②区	-	-	刀子	鉄	17	14	5	2.4	跡で検出	-
92	27	27	3034	36	1-①	SM01	③区 11層	-	③区 II層	刀子	鉄	19	16	4	1.6	-	-
92	27	28	3035	37	1-①	SM01	③区 11層	-	③区 II層	刀子	鉄	25	14	4	1.7	-	-
92	27	28	3041	59	1-①	SM01	②区	-	-	刀子	鉄	27	17	4	3.3	跡で検出	-
92	27	29	3032	54	1-①	SM01	③区	-	-	刀子か	鉄	28	9	3	1.4	跡で検出	-
92	27	30	3038	50	1-①	SM01	③区	-	-	刀子	鉄	51	12	10	7.3	跡で検出	-
92	27	31	3027	63	1-①	SM01	①区	-	-	刀子	鉄	40	18	4	2.7	跡で検出	-
92	27	32	3015	1	2-①	SB01	No. 1	-	-	刀子	鉄	47/20	21/14	19/10	13.8/2.4	-	○
92	27	33	3043	24	1-①	SM01	No. 25	-	-	耳環	金銅	32	30	11	9.5	-	○
92	27	34	3044	22	1-①	SM01	No. 23	-	-	耳環	青銅	19	16	1	0.6	-	○
92	27	35	3046	42	1-①	SM01	西側トレンチ出土	-	-	銭貨	青銅	24	9	1	1.6	「寛永通寶」	-
92	27	36	3045	65	1-①	復原作土	-	-	-	燗貫(4セセル)	銅	16	16	10	2.7	跡で検出	-

第9表 風張遺跡 竪穴建物跡一覧

図版番号	遺構記号	番号	時期	調査地区	大・中地区	平面形	主軸方向 (→は方向不明)	計測値()は推定値			推定床面積 (㎡) (下層で計測)	現土の 分類状況	特記事項 (遺物出土状況)
								長辺 (m)	短辺 (m)	深さ (m)			
115	SB	01	15~16世紀	4	Ⅲ D20, E16	方形	N-53°-W	2.87	2.40	0.43	3.305	7期	埋土より古瀬戸後中期の 平皿・すり鉢・瓦片・礎 多数出土。入口施設あり。

第10表 風張遺跡 掘立柱建物跡一覧

図版 番号	遺構 記号	番号	時 期	調 査 地 区	大・中地 区	主軸方向 (→は方向 不明)	矩 形							平面形	瓦当 ビツト 名	重 複 階 級	特記事項 (査遺物出土状況)
							長辺方向 (m)	短辺方向 (m)	柱間数	柱間間隔 (長辺方向)		庇	面積				
										長辺× 短辺	短辺× 短辺						
106	ST	01	中世 以降	2	Ⅱ V22, Ⅳ B01~ 03・07・ 08	N-45°-W	8.0	7.6	4×4	0.6~3.7	1.7~2.3	有	57.911	長方形	P1~31	ST1004P2と重複する ST1004F3, S02を切 る	縁あり・9・2つあり (SK128・S01)。P9 より陶磁器。P10・ P27より古瀬戸後IV (新) 白粉香粉。P29 より大甕1段階小皿。 P22より古瀬戸新器。 P11より燗甕
107	ST	02	中世 以降	2	Ⅳ B09・ 13・14	N-27°-E	5.7	3.8	2×1	2.4~3.3	3.7~4.0	—	22.448	長方形	P1~4・ 6~8	SK1001を切る SK110~112と重複す る	—
107	ST	04	中世 以降	3	Ⅳ B07・ 08・12・ 13	N-27°-W	6.0	2.0	3×1	1.9~2.2	2.0~2.0	—	11.669	長方形	P1~8	ST05, SK138・144・ 145と重複する	—
108	ST	05	中世	3	Ⅳ F07・ 12・13	N-29°-W	7.6	3.9	4×1	1.8~2.0	3.8~3.9	—	29.504	長方形	P1~10	ST01, SK145・146・ 150・151と重複する	焼土跡1つあり。P8 より古瀬戸新か陶。 P13より古瀬戸後IV (新) すり鉢はか
109	ST	06	中世 以降	2	Ⅳ A13・ 17・18・ 23	N-49°-E	7.5	7.5	3×4	1.3~3.8	1.6~2.2	—	56.789 (推定)	正方形	P1~18	SK96・256~258・ 262~264・269・ 270・272~279・ 1002と重複する	焼土跡1つあり
110	ST	07	中世 以降	3	Ⅳ F16・ 17・21・ 22	N-49°-E	8.0	4.2	4×2	1.6~2.2	1.9~4.2	—	33.584	長方形	P1~5・ 7・8・ 11~14	SK184・194~199・ 201・203・204・ 207・211・212・ 267・268・1009~ 1011と重複する	—
111	ST	08	中世	2	Ⅳ A22	N-48°-E	4.0	3.6	3×2	1.2~1.8	1.7~1.9	—	14.090	長方形	P1~12	SK253と重複する	P6よりかわらけ
112	ST	10	中世 以降	2	Ⅳ F04・ 09・10	N-47°-W	6.7	3.6	2×2	2.6~4.2	1.7~1.9	—	23.952	長方形	P1~9	ST11と重複する	—
112	ST	11	中世 以降	2	Ⅳ F04・ 05・09	N-41°-E	6.9	3.4	2×2	3.2~3.9	3.3~3.4	—	23.728	長方形	P1~6	ST10と重複する	—
110	ST	12	15 世紀	2	Ⅲ D25	N-49°-W	3.9	3.2	1×2	3.9~4.0	0.6~2.7	—	12.567	長方形	P1~6	SK387に切られる	P1より古瀬戸すり 鉢。P4より古瀬戸後 IV新(新) すり鉢
108	ST	13	中世 以降	3	Ⅳ F11・ 12・17	N-28°-W	3.6	3.7	2×1	1.7~1.9	3.6~3.6	—	12.986	正方形	P1~6	SK1031を切るSD09 と重複する	—
113	ST	1001	中世 以降	2	Ⅳ B13	N-47°-W	4.1	3.2	1×2	4.1~4.2	1.5~1.6	—	13.061 (推定)	長方形	P1~5	—	P4から陶磁器
113	ST	1002	中世 以降	4	Ⅲ D24・ 25・ 04・05	N-35°-E	5.7 (現 存)	4.5	2 (現 存)×3	3.7	0.9~1.8	—	26.192 (推定)	長方形 (推定)	P1~5	SK381を切る	—
113	ST	1003	中世 以降	3	Ⅳ F08・ 13	N-30°-W	4.0	3.8	2×2	2.0~2.1	1.7~2.2	—	15.424	長方形	P1~9	SD07と重複する	—
114	ST	1004	中世 以降	2	Ⅳ B01・ 02・06・ 07	N-39°-W	11.1	4.1	6×2	1.5~4.1	2.0~3.9	—	44.779	長方形	P1~14	ST01, SB84~88・90 ~93・109・1026, SP01・02と重複する	焼土跡3つあり。P1 よりかわらけ。P4よ り大甕のすり鉢。P5 より青磁・鉢・かわ らけ。P13より内耳 土器か

附表 風道遺跡

順位	区画番号(番地)	区画名称(番地)	市土遺跡等(遺跡番号)	市土遺跡等(遺跡名称)	取方寸(遺跡番号)	地区	往古記(遺跡番号)	時期(遺跡番号)	詳細説明(遺跡番号)	型式	規模	部位	用途	法量 (cm)		形状		色調		出土	調査	備考	
														口徑	深さ	口徑	深さ	内径	外径				内径
120	34	22	29	SK1028 ST03 PG・ST101 ST106 PF14	—	ST03 PG 1層	ST03 PG 1層	中世	15世紀後半～15世紀末(前 180)	瓦葺平葺(前 180)	天日茶屋(1層)	1層	—	<126>	3.80	15.3	—	—	輪 10783/4 硝子	白色胎子少	—	No.22 土層一層体の可能性有り	
120	34	23	30	SK1028 PG	—	ST03 PG 1層	ST03 PG 1層	中世	15世紀後半～15世紀末(前 180)	瓦葺平葺(前 180)	天日茶屋(1層)	1層	—	—	1.30	2.4	—	—	輪 10783/4 硝子	白色胎子濃	—	No.22 土層一層体の可能性有り	
120	—	24	11	SK098	1層	SK098 1層	SK098 1層	中世	15世紀後半～15世紀末(前 180)	瓦葺平葺(前 180)	堀廻(1層)	1層	—	—	1.30	2.4	—	—	輪 2536/3 硝子	—	—	—	
120	34	25	13	SK017	No.1	SK017 No.1	SK017 No.1	中世	15世紀後半～15世紀末(前 180)	瓦葺平葺(前 180)	堀廻(1層)	1層	—	<9.8>	0.28	23.5	—	—	硝子 10788/4	白色胎子少	—	—	
120	34	26	14	SK017	No.3	SK017 No.3	SK017 No.3	中世	15世紀後半～15世紀末(前 180)	瓦葺平葺(前 180)	堀廻(1層)	1層	—	—	2.00	6.5	—	—	硝子 10788/4	白色胎子少	—	—	
120	34	27	19	SK022	1層	SK022 1層	SK022 1層	中世	15世紀後半～15世紀末(前 180)	瓦葺平葺(前 180)	堀廻(1層)	1層	—	<10.8>	—	1.40	4.5	—	—	硝子 10788/4	白色胎子少	—	—
120	34	28	22	SK022	1層	SK022 1層	SK022 1層	中世	15世紀後半～15世紀末(前 180)	瓦葺平葺(前 180)	堀廻(1層)	1層	—	—	6.20	71.5	—	—	硝子 10788/4	白色胎子少	—	—	
120	34	29	17	SK019	—	SK019 1層	SK019 1層	中世	15世紀後半～15世紀末(前 180)	瓦葺平葺(前 180)	堀廻(1層)	1層	—	<6.2>	0.10	17.3	—	—	輪 5376/3 硝子	白色胎子濃	—	—	
120	35	30	59	SK023	—	SK023 1層	SK023 1層	中世	15世紀後半～15世紀末(前 180)	瓦葺平葺(前 180)	堀廻(1層)	1層	—	<10.2>	4.8	2.7	46.7	—	—	硝子 10788/4	白色胎子少	—	—
120	35	31	21	SK023	No.1	SK023 No.1	SK023 No.1	中世	15世紀後半～15世紀末(前 180)	瓦葺平葺(前 180)	堀廻(1層)	1層	—	<13.8>	—	3.31	30.7	—	—	硝子 10788/4	白色胎子少	—	—
120	35	32	63	SK023	—	SK023 1層	SK023 1層	中世	15世紀後半～15世紀末(前 180)	瓦葺平葺(前 180)	堀廻(1層)	1層	—	<13.8>	—	0.3	40.3	—	—	硝子 10788/4	白色胎子少	—	—
120	35	33	47	SK023	8層	SK023 8層	SK023 8層	中世	15世紀後半～15世紀末(前 180)	瓦葺平葺(前 180)	天日茶屋(1層)	1層	—	—	2.1	2.8	—	—	輪 10783/1 硝子	白色胎子少	—	—	
120	35	34	48	SK013	15	SK013 15	SK013 15	中世	15世紀後半～15世紀末(前 180)	瓦葺平葺(前 180)	堀廻(1層)	1層	—	<14.0>	1.50	28.6	—	—	—	白色胎子中少	—	—	—
120	35	35	62	SK023	—	SK023 1層	SK023 1層	中世	15世紀後半～15世紀末(前 180)	瓦葺平葺(前 180)	堀廻(1層)	1層	—	—	0.90	0.6	—	—	—	白色胎子少	—	—	
120	35	36	55	SK023	T6	SK023 T6	SK023 T6	中世	15世紀後半～15世紀末(前 180)	瓦葺平葺(前 180)	堀廻(1層)	1層	—	<18.1>	0.20	32.1	—	—	—	硝子 10788/4	白色胎子少	—	—
120	35	37	54	SK023	T8	SK023 T8	SK023 T8	中世	15世紀後半～15世紀末(前 180)	瓦葺平葺(前 180)	堀廻(1層)	1層	—	<12.3>	6.8	2.5	95.3	—	—	硝子 10788/4	白色胎子少	—	—
120	35	38	56	SK023	T11	SK023 T11	SK023 T11	中世	15世紀後半～15世紀末(前 180)	瓦葺平葺(前 180)	堀廻(1層)	1層	—	<11.0>	—	0.2	12.8	—	—	硝子 10788/4	白色胎子少	—	—
120	35	39	57	SK023	T11	SK023 T11	SK023 T11	中世	15世紀後半～15世紀末(前 180)	瓦葺平葺(前 180)	堀廻(1層)	1層	—	—	1.7	23.3	—	—	—	白色胎子中	—	—	
120	35	40	60	SK024	24T	SK024 24T	SK024 24T	中世	16世紀後半～16世紀末(前 180)	瓦葺平葺(前 180)	堀廻(1層)	1層	—	<6.0>	—	4.7	—	—	—	硝子 10788/4	白色胎子少	—	—
120	—	41	49	SK024	24T	SK024 24T	SK024 24T	中世	15世紀後半～15世紀末(前 180)	瓦葺平葺(前 180)	堀廻(1層)	1層	—	—	0.20	6.7	—	—	—	硝子 10788/4	白色胎子少	—	—
120	—	42	61	SK024	24T	SK024 24T	SK024 24T	中世	15世紀後半～15世紀末(前 180)	瓦葺平葺(前 180)	堀廻(1層)	1層	—	—	1.30	10.2	—	—	—	硝子 10788/4	白色胎子多	—	—

第12表 風張遺跡 土製品観察表

図版番号	PL番号	掲載番号	管理番号	地区	出土遺構(遺構別の場合がツリッド)	注記欄位(資料もしくは袋に記載した名称)	掲載遺構(記載がない場合は出土遺構に同じ)	掲載層位(記載がない場合は注記欄位に同じ)	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
121	35	1	2001	4区	SD22	—	—	—	土玉	46	38	32	52.5	—

第13表 風張遺跡 石器観察表

図版番号	PL番号	掲載番号	管理番号	地区	出土遺構(遺構別の場合がツリッド)	注記欄位(石器もしくは袋に記載した名称)	掲載遺構(記載がない場合は出土遺構に同じ)	掲載層位(記載がない場合は注記欄位に同じ)	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
122	35	1	1001	2	SD03	SD03 1層	—	—	石鏃	黒曜石	10	12	2.5	0.2	—
122	35	2	1003	2	SD05	SD05 1層	—	—	打製石斧	砂岩	125	40	20	120.4	—
122	35	3	1004	2	T5	T5	—	—	打製石斧	砂岩	74	45	19	54.0	—
122	35	4	1005	2	T6	T6 3層	—	—	打製石斧	砂岩	113.5	49	22	126.9	—
122	35	5	1006	3	表探	3区 Z	—	—	礫石器	砂岩	159	50	38.5	388.3	こも編み石か

第14表 風張遺跡 金属製品観察表

図版番号	PL番号	掲載番号	管理番号	出土遺構(遺構別の場合がツリッド)	注記欄位(金属製品もしくは袋に記載した名称)	掲載遺構(記載がない場合は出土遺構に同じ)	掲載層位(記載がない場合は注記欄位に同じ)	器種	材質	長さ(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考	注意		
123	35	1	3001	2	2	ST01 Pt11	Na.5	SK1020	—	鍍金(キセリ)	青銅	46	12	12	10.8	—	—
123	35	2	3003	4	3	—	—	—	鍍金	青銅	23	23	1	1.6	「形式通り」	—	
123	35	3	3004	5	3	表土	—	—	鍍金	青銅	23	24	1	2.3	「形式通り」	—	
123	35	4	3005	6	3	表探	—	—	鍍金	青銅	22	22	1	1.9	「形式通り」	—	
123	35	5	3002	7	4	表探	—	—	鍍金	青銅	26	25	7	9.1	鍍5枚が付着	○	

第15表 風張遺跡 木製品観察表

図版番号	PL番号	掲載番号	管理番号	地区	出土遺構(遺構別の場合がツリッド)	注記欄位(木製品もしくは袋に記載した名称)	掲載遺構(記載がない場合は出土遺構に同じ)	掲載層位(記載がない場合は注記欄位に同じ)	器種	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
124	36	1	3008	4区	SK388	No.なし 木①	—	—	板材(木枠か)	—	84.2	10.8	3.1	長テン水漬け
124	36	2	3007	4区	SK388	No.なし 木①	—	—	棒状品	—	54.6	2.8	1.7	長テン水漬け
124	36	3	3005	4区	SK392	No.2 木②	—	—	杭	モミ属	42.7	4.1	3.4	放射性炭素年代測定、長テン水漬け
124	36	4	3006	4区	SK392	No.3 木②	—	—	杭	—	43.6	3.8	3	長テン水漬け
124	36	5	3002	4区	SK392	No.5 木②	—	—	板材(木枠)	—	48.1	5.9	1	長テン水漬け
124	36	6	3004	4区	SK392	No.7 木②	—	—	板材(木枠)	—	51	13.2	1.6	放射性炭素年代測定、長テン水漬け
125	36	7	3003	4区	SK392	No.6 木②	—	—	板材(木枠)	サワラ	77.9	24.3	2.5	放射性炭素年代測定、長テン水漬け
125	36	8	3001	4区	SK392	No.4 木②	—	—	板材(木枠)	サワラ	76.6	23.7	2.5	放射性炭素年代測定、長テン水漬け

第16表 神之峯城跡 掘立柱建物跡・礎石建物跡一覧

区画番号	遺構 記号	番号	時期	調査 地区	大・中地 区	平地地	主軸方向 (-)は方 向不明	規模						該当 ピット 名	重複関係	特記事項 (含遺物出土状況)		
								長辺 方向	短辺 方向	柱間数	柱間距離 (短辺方 向)		底 面積					
											(m)	(m)	短小～ 短大 (m)				短小～ 短大 (m)	有 無
143	ST 01		近世以降	1-2	V K14・ 19	平地地 6	N-44°E	5.50	2.30	3×1	1.68～ 2.01	2.25～ 2.38	-	12.757	長方形	P1～8	SK09、竪跡に切られる SK33～35・45・ 46・71～73・75 と 重複する	-
140・ 141	ST 02		15世紀中 期～16世 紀後半	1-2	V L16・ 17・22	平地地 7	N-80°E	6.83 (原存)	5.16 (原存)	3×2 (原存)	2.0～ 2.54	1.70～ 1.96	-	-	長方形	P1～8	SK113・115を切る	-
143	ST 03		近世以降	1-1	V H21・ 22	平地地 27	N-61°W	3.22	1.42	2×1	1.53～ 1.63	1.30	-	4.645	長方形	P1～5	STD4と重複する	-
143	ST 04		近世以降	1-1	V H17・ 22	平地地 27	N-25°E	2.86	1.23	2×1	1.32～ 1.58	1.16	-	3.664	長方形	P1～5	STD3と重複する	-
143	ST 05		近世以降	1-1	V M01・ 06	平地地 27	N-52°E	3.67	1.33	2×1	1.62～ 2.00	1.25～ 1.40	-	4.853	長方形	P1～6	-	-
143	ST 06		中世以降	1-1	V L15・ 20	平地地 27	N-7°W	3.39	3.45	2×2	1.17～ 2.19	1.21～ 1.95	-	11.456	方形	P1～9	-	P1より築清原、 P5より内田
186	ST 301		中世以降	3-1	Ⅱ V25・ W21、Ⅱ B05・C01	平地地 301	N-2°E	6.08	5.81	3×3	1.75～ 2.16	1.74～ 2.42	-	35.403	方形	P1～16	SK481・484を切る SK1003に切られる SK38 基、STD305・ 304・306と重複する	1層より古瀬戸後 前期天目菩提、 P16より古瀬戸後 IV期遺
187	ST 302		中世以降	3-1	Ⅱ W21・ 22、Ⅱ C01・02	平地地 301	N-2°W	5.82	3.70	3×2	1.40～ 2.37	1.64～ 2.01	-	21.760	長方形	P1～12	SK1010、他 13 基、 STD307・312 と重 複する	-
186	ST 303		中世以降	3-1	Ⅱ V25・ ⅡB05	平地地 301	N-0°	3.64	2.46	2×1	1.74～ 1.86	2.27～ 2.50	-	8.773	長方形	P1～8	STD301、SK7 基と重 複する	-
187	ST 304		中世以降	3-1	Ⅱ W21	平地地 301	N-1°W	3.93	2.98	2×1	1.20～ 2.60	2.90～ 3.08	-	11.547	長方形	P1～6	SK443・481を切る STD301、SK17 基と重 複する	-
188	ST 305		中世以降	3-1	Ⅱ W21・ 22	平地地 301	N-88°E	3.95	2.55	2×1	1.87～ 2.06	2.33～ 2.71	-	9.840	長方形	P1～6	STD302・307、SK4 基 と重複する	-
188	ST 306		中世以降	3-1	Ⅱ W21・ ⅡC01	平地地 301	N-89°E	3.81	2.26	3×1	0.64～ 1.28	2.24～ 2.26	-	8.624	長方形	P1～8	SK443を切る SK508を切る STD301、SK13 基と重 複する	-
189	ST 307		中世以降	3-1	Ⅱ W17・ 21・22	平地地 301	N-00°W	5.36	4.38	3×2	1.60～ 1.88	1.95～ 2.50	-	23.488	長方形	P1～10	STD302・305、SK11 基と重複する	-
188	ST 310		中世以降	3-1	Ⅱ W16・ 17	平地地 301	N-88°W	4.38	2.94	3 (構 造) × 2	1.03～ 3.37	1.37～ 1.63	-	12.816	長方形	P1～8	SK6 基と重複する	-
189	ST 314		中世以降	3-1	Ⅱ V18・ 19・23・ 24	平地地 301	N-3°E	5.74	3.82	3×2	1.85～ 1.99	1.89～ 3.81	-	22.208	長方形	P1～9	SK346に切られる SK8 基と重複する	-

城跡 所在地(郡市町)	城跡 所在地(町村)	面積 (㎡)	出土遺物 (種類・数量)	土上層位 (深さ)	形状・ 構造	瓦記(方)	時期 (年代)	式様 (用途)	築造 部位	遺構 I様	位置 (Gm)		遺構 II様	遺構 III様	内面	外部	土上層位 (深さ)	備考		
											経度	緯度								
198 54 90 110	198 54 90 110	110	SI002	SI002	3-1	SI002	中世 15世紀前半	古瀬川後平 平礎	1様	<10.3>	(4.0)	15	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	遺構の埋没 状況不明	
198 54 100 113	198 54 100 113	113	SI002	SI002	3-1	SI002	中世 15世紀前半	古瀬川後平 平礎	1様	<12.8>	(4.0)	15.5	幅 0.2/瓦 高 0.2	幅 0.2/瓦 高 0.2	幅 0.2/瓦 高 0.2	幅 0.2/瓦 高 0.2	幅 0.2/瓦 高 0.2	幅 0.2/瓦 高 0.2	幅 0.2/瓦 高 0.2	遺構の埋没 状況不明
198 - 101 116	198 - 101 116	116	SI002	SI002	3-1	SI002	中世 15世紀前半	古瀬川後平 平礎	1様・2様	<15.0>	(6.0)	24.1	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	遺構の埋没 状況不明
198 54 102 114	198 54 102 114	114	SI002	SI002	3-1	SI002	中世 14世紀	古瀬川後平 平礎	1様	<13.7>	(3.0)	20.1	幅 50/71 瓦 高 1.0	幅 50/71 瓦 高 1.0	幅 50/71 瓦 高 1.0	幅 50/71 瓦 高 1.0	幅 50/71 瓦 高 1.0	幅 50/71 瓦 高 1.0	幅 50/71 瓦 高 1.0	遺構の埋没 状況不明
198 54 103 105	198 54 103 105	105	SI002	SI002	No.22	SI002	中世 15世紀前半	古瀬川後平 平礎	1様	<21.0>	(4.1)	23.8	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	遺構の埋没 状況不明
198 54 104 104	198 54 104 104	104	SI002	SI002	No.20	SI002	中世 15世紀前半	古瀬川後平 平礎	1様	<10.1>	(4.1)	48.5	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	遺構の埋没 状況不明
198 54 105 112	198 54 105 112	112	SI002	SI002	No.7	SI002	中世	古瀬川後平 平礎	1様	<34.0>	(5.0)	45.2	幅 10/83/1 瓦 高 1.0	幅 10/83/1 瓦 高 1.0	幅 10/83/1 瓦 高 1.0	幅 10/83/1 瓦 高 1.0	幅 10/83/1 瓦 高 1.0	幅 10/83/1 瓦 高 1.0	幅 10/83/1 瓦 高 1.0	遺構の埋没 状況不明
198 - 106 141	198 - 106 141	141	308T V 4層	308T V 4層	3-1	308T 17層	中世	古瀬川後平 平礎	1様	<16.4>	(5.2)	47.6	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	遺構の埋没 状況不明
198 55 107 140	198 55 107 140	140	308T N 3層	308T N 3層	3-1	308T 16層	中世	古瀬川後平 平礎	1様	<29.6>	(1.7)	10	幅 3X0.3 瓦 高 1.0	幅 3X0.3 瓦 高 1.0	幅 3X0.3 瓦 高 1.0	幅 3X0.3 瓦 高 1.0	幅 3X0.3 瓦 高 1.0	幅 3X0.3 瓦 高 1.0	幅 3X0.3 瓦 高 1.0	遺構の埋没 状況不明
198 55 108 193	198 55 108 193	193	308T N 3層	308T N 3層	3-1	308T 20層	中世	古瀬川後平 平礎	1様	10.7	3.0	26	幅 5X/2 瓦 高 1.0	幅 5X/2 瓦 高 1.0	幅 5X/2 瓦 高 1.0	幅 5X/2 瓦 高 1.0	幅 5X/2 瓦 高 1.0	幅 5X/2 瓦 高 1.0	幅 5X/2 瓦 高 1.0	遺構の埋没 状況不明
198 - 109 138	198 - 109 138	138	308T N 3層	308T N 3層	3-1	308T 15層	中世	古瀬川後平 平礎	1様	<13.0>	(3.2)	10.1	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	遺構の埋没 状況不明
198 - 110 139	198 - 110 139	139	308T N 3層	308T N 3層	3-1	308T 15層	中世	古瀬川後平 平礎	1様	<17.8>	(4.4)	18.8	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	遺構の埋没 状況不明
198 55 111 135	198 55 111 135	135	308T N 2層	308T N 2層	3-1	308T 14層	中世	古瀬川後平 平礎	1様	<8.0>	(8.0)	08.1	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	遺構の埋没 状況不明
198 55 112 132	198 55 112 132	132	308T N 1層	308T N 1層	3-1	308T 13層	中世	古瀬川後平 平礎	1様	<7.0>	(7.0)	57.9	幅 5X/3 瓦 高 1.0	幅 5X/3 瓦 高 1.0	幅 5X/3 瓦 高 1.0	幅 5X/3 瓦 高 1.0	幅 5X/3 瓦 高 1.0	幅 5X/3 瓦 高 1.0	幅 5X/3 瓦 高 1.0	遺構の埋没 状況不明
198 55 113 134	198 55 113 134	134	308T N 1層	308T N 1層	3-1	308T 13層	中世	古瀬川後平 平礎	1様	<5.6>	(2.5)	38.7	幅 50/71 瓦 高 1.0	幅 50/71 瓦 高 1.0	幅 50/71 瓦 高 1.0	幅 50/71 瓦 高 1.0	幅 50/71 瓦 高 1.0	幅 50/71 瓦 高 1.0	幅 50/71 瓦 高 1.0	遺構の埋没 状況不明
198 55 114 129	198 55 114 129	129	308T N 3層	308T N 3層	3-1	308T 12層	中世	古瀬川後平 平礎	1様	<10.4>	(2.5)	11.3	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	遺構の埋没 状況不明
198 55 115 144	198 55 115 144	144	311T N 3層	311T N 3層	3-1	311T 11層	中世	古瀬川後平 平礎	1様	<4.6>	(2.2)	17.6	幅 10/86/4 瓦 高 1.0	幅 10/86/4 瓦 高 1.0	幅 10/86/4 瓦 高 1.0	幅 10/86/4 瓦 高 1.0	幅 10/86/4 瓦 高 1.0	幅 10/86/4 瓦 高 1.0	幅 10/86/4 瓦 高 1.0	遺構の埋没 状況不明
198 - 116 130	198 - 116 130	130	308T N 3層	308T N 3層	3-1	308T 12層	中世	古瀬川後平 平礎	1様	<28.8>	(4.1)	30.7	幅 3X0.4 瓦 高 1.0	幅 3X0.4 瓦 高 1.0	幅 3X0.4 瓦 高 1.0	幅 3X0.4 瓦 高 1.0	幅 3X0.4 瓦 高 1.0	幅 3X0.4 瓦 高 1.0	幅 3X0.4 瓦 高 1.0	遺構の埋没 状況不明
198 - 117 131	198 - 117 131	131	308T N 3層	308T N 3層	3-1	308T 12層	中世	古瀬川後平 平礎	1様	<26.7>	(3.1)	32	幅 3X0.4 瓦 高 1.0	幅 3X0.4 瓦 高 1.0	幅 3X0.4 瓦 高 1.0	幅 3X0.4 瓦 高 1.0	幅 3X0.4 瓦 高 1.0	幅 3X0.4 瓦 高 1.0	幅 3X0.4 瓦 高 1.0	遺構の埋没 状況不明
198 - 118 143	198 - 118 143	143	311T N 3層	311T N 3層	3-1	311T 10層	中世	古瀬川後平 平礎	1様	<10.0>	(3.5)	7.6	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	遺構の埋没 状況不明
198 55 119 142	198 55 119 142	142	311T N 3層	311T N 3層	3-1	311T 10層	中世	古瀬川後平 平礎	1様	<10.2>	(4.4)	42.4	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	遺構の埋没 状況不明
198 55 120 128	198 55 120 128	128	308T N 2層	308T N 2層	308T	19層	中世	古瀬川後平 平礎	1様	<12.5>	(2.1)	286	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.5 瓦 高 1.0	遺構の埋没 状況不明
198 55 121 124	198 55 121 124	124	303T N 1層	303T N 1層	3-1	303T 12層	中世	古瀬川後平 平礎	1様	4.7	(2.3)	60.1	幅 2.5X0.3 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.3 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.3 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.3 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.3 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.3 瓦 高 1.0	幅 2.5X0.3 瓦 高 1.0	遺構の埋没 状況不明

地区 （国、道、市町村） 番号	平面位置 （図面）	出土遺物 （出土品等） （時代別）	出土品等 （出土品等） （時代別）	出土品等 （出土品等） （時代別）	出土品等 （出土品等） （時代別）	出土品等 （出土品等） （時代別）	出土品等 （出土品等） （時代別）	出土品等 （出土品等） （時代別）	出土品等 （出土品等） （時代別）	出土品等 （出土品等） （時代別）	出土品等 （出土品等） （時代別）	位置 (m)		出土 品等	出土 品等	備考	
												東	西				
— 56 —	301・302	Ⅱ 1・Ⅱ 2・Ⅲ 2・Ⅲ 3 No.10・No.33	Ⅱ 1層 No.10・No.33	3-1 2層 No.10・3層 No.33	中世 15世紀末	14世紀後半— 15世紀末	古瀬川後期 茶臼	茶臼	—	—	—	—	—	—	—	—	—
— 56 —	185・302	Ⅱ 2層 No.103	No.103	3-1 3層 No.103	中世 15世紀末	15世紀前半— 15世紀末	古瀬川後期 茶臼	茶臼	—	—	—	—	—	—	—	—	—
— 52 —	204・7	Ⅱ 2層 No.1	No.1	1 層 7層 No.1	中世	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

第18表 神之峯城跡 瓦製品観察表

図版 番号	PL 番号	図案 番号	管理 番号	地区	出土遺構 (遺構 外の場合はグリ ッド)	注記部位 (資料 もしくは袋に記 載した名称)	図案遺構 (記載 がない場合は出 土遺構に同じ)	図案部位 (記載 がない場合は注 記部位に同じ)	図種	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
200	57	1	2002	2区	平田地 206	平 206 No.13	—	—	瓦片加工用板	41	46	15	33.3	—
200	57	2	2003	2区	平田地 206	平 206 No.17	—	—	瓦片加工用板	39	48	15.5	32.6	—

第19表 神之峯城跡 石器観察表

図版 番号	PL 番号	図案 番号	管理 番号	地区	出土遺構 (遺構 外の場合はグリ ッド)	注記部位 (右部 もしくは袋に記 載した名称)	図案遺構 (記載 がない場合は出 土遺構に同じ)	図案部位 (記載 がない場合は注 記部位に同じ)	図種	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
201	57	1	1001	3-1	平田地 301	平 301 岩	—	—	石鏃	黒曜石	15	16	3	0.4	—
201	57	2	1002	3-1	—	Z	—	—	打製石斧	砂岩	87	36	17.5	56.1	—

第20表 神之峯城跡 石製品観察表

図版 番号	PL 番号	図案 番号	管理 番号	地区	出土遺構 (遺構 外の場合はグリ ッド)	注記部位 (右製 品もしくは袋に 記載した名称)	図案遺構 (記載 がない場合は出 土遺構に同じ)	図案部位 (記載 がない場合は注 記部位に同じ)	図種	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
202	57	1	4003	1-2	平田地 7	平 7 5 番 No. 50・平 7 6 番 No.125・平 7 6 番 No.130	—	—	磨	粘板岩	113	113	14	151.5	長方形で1/4程度が現存。下部縁部と縦面の段差は使用によって消失。
202	57	2	4002	1-2	平田地 7	平 7 5 番 No. 44・平 7 6 番 No.111/ 平 7 5 番 No. 44/平 7 5 番 No.76/平 7 6 番 No.118/ 平 7 6 番 No. 121/平 7 131No.172/ 平 7 6 番 No. 3/平 7 6 番 No.4/平 7 6 番	—	—	磨	粘板岩	64.5	43.5	11	88.7	長方形で1/4程度が現存。
202	57	3	4022	1-2	平田地 7	平 7 6 番 No. 222	—	—	磨	超灰質砂岩	33	30	8	10.9	—
202	57	4	4016	2	平田地 207	平 207 No.7 1 番	—	—	磨	粘板岩	110	65	14	68.7	長方形で1/4程度が現存。
202	57	5	4009	1-1	SK119	1-1区 SK119 2 番	—	—	砥石	熱水変質した流紋岩	83	32	21.5	63	磨ぶし状
202	57	6	4008	1-1	SK119	1-1区 SK119 2 番	—	—	砥石	熱水変質した流紋岩	70	48	22	112.6	磨ぶし状
202	57	7	4007	1-1	SK119	1-1区 SK119 2 番	—	—	砥石	熱水変質した流紋岩	103.5	27	21	75.1	磨ぶし状
202	57	8	4005	1-1	SK119	1-1区 SK119 1 番	—	—	砥石	熱水変質した流紋岩	116	36	24	137.2	磨ぶし状
202	57	9	4006	1-1	SK119	1-1区 SK119 1 番	—	—	砥石	熱水変質した流紋岩	118	23	22	76	磨ぶし状
202	57	10	4011	1-1	SK125	1-1区 SK125 No.8	—	—	砥石	熱水変質した流紋岩	72	42	24	75.9	磨ぶし状
202	57	11	4012	1-1	SK126	1-1区 SK126 1 番	—	—	砥石	熱水変質した流紋岩	65.5	51.5	21.5	113.8	断面長方形棒状
202	57	12	4013	1-1	SF10	1-1区 SF10 No.1	—	—	砥石	熱水変質した流紋岩	40	15	14.5	14.5	断面四角形棒状
202	57	13	4021	1-2	平田地 7	平 7	—	—	砥石	片状ホルンフェルス	76	20	14	37.9	断面四角形棒状
202	57	14	4001	1-2	平田地 7	平 7 1 番 No. 19	—	—	砥石	熱水変質した流紋岩	75	31	21	45.8	磨ぶし状
202	57	15	4019	3-1	平田地 301	平 301 1 番 M805-8	—	—	砥石	熱水変質した流紋岩	40	22	23	27.5	断面四角形棒状
202	57	16	4020	3-1	308トレンチ	308T 12 番	—	—	砥石	熱水変質した流紋岩	41	24	22.5	33.8	断面四角形棒状
202	57	17	4014	1-1	S1トレンチ	1-1区 S1T 1 番	—	—	砥石	熱水変質した流紋岩	97	29	19.5	70.8	磨ぶし状か
202	57	18	4017	3-1	平田地	3-1区 3 番 No.5	—	—	砥石	富山岩	40.5	20	13	14.6	断面長方形棒状
203	57	19	4018	3-1	平田地	3-1区 2 番 No.23	—	—	砥石	片状ホルンフェルス	43	12.5	12.5	11.2	断面四角形棒状
203	57	20	4015	1-1	—	1-1区 Z	—	—	砥石	熱水変質した流紋岩	53.5	28.5	17	37.5	磨ぶし状か
203	57	21	4004	1-1	SK118	1-1区 SK118No.2	—	—	こも礫石	砂岩	144	52.5	34	424	—
203	57	22	4010	1-1	SK119	1-1区 SK119 3 番	—	—	こも礫石	砂岩	136	47	38	339.8	—

第21表 神之峯城跡 金属製品観察表

図録 番号	PL 番号	相模 番号	野原 番号	前面 遺物 台帳 番号	地区	出土遺構 (遺構 別の場合はグリ ッド)	注目部位 (全国 製品もしくは関 心に記載した名 称)	掲載遺構 (記載 がない場合は前 土遺構と同じ)	掲載部位 (記載 がない場合は注 記部位と同じ)	基種	材質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重量 (g)	備考 (測線年)	応急 処置
204	57	1	3015	1030	3-1	SK307	No.1	—	—	釘	鉄	66	52	27	51.9	断面正方形、両 釘	—
204	57	2	3016	1032	3-1	SK351	No.1	—	—	釘	鉄	71	22	20	22.9	断面正方形、両 釘	—
204	57	3	3009	19	1-2	平田地7	No.80	—	—	釘	鉄	25	12	19	2.4	断面正方形、両 釘	—
204	57	4	3010	24	1-2	平田地7	No.226	—	—	釘	鉄	31	9	7	2.6	断面正方形、両 釘	—
204	57	5	3012	26	1-2	平田地7	No.238	—	—	釘	鉄	20	7	7	1.3	断面正方形、両 釘	—
204	57	6	3014	31	1-2	平田地7	—	—	—	釘	鉄	29/32	15/14	10/14	4.6/3.8	断面正方形、両 釘	—
204	57	7	3007	1045	3-1	平田地 301 II V19-8	—	—	—	釘	鉄	26/22/ 28/20/ 11	18/15/ 13/11/ 6	16/15/ 12/8/5	6.3/4.5/ 4.1/1.3/ 0.4	断面長方形、両 釘	—
204	57	8	3018	1047	3-1	平田地 301 II V20-3	—	—	—	釘	鉄	28	16	11	4.2	断面長方形、両 釘	—
204	57	9	3019	1084	3-1	平田地 301 II V20-5	—	—	—	釘	鉄	23	13	10	3.6	断面長方形、両 釘	—
204	58	10	3020	1085	3-1	平田地 301 VI B05-8	—	—	—	釘	鉄	29	19	15	8.0	断面正方形、両 釘	—
204	58	11	3026	1058	3-1	平田地	No.2	—	—	釘	鉄	28	9	10	2.4	断面正方形、両 釘	—
204	58	12	3028	1062	3-1	平田地	No.19	—	—	釘	鉄	20/33/ 28/25	17/14/ 15/13	13/12/ 11/10	4.1/5.2/ 3.5/2.6	断面正方形、両 釘	—
204	58	13	3029	1063	3-1	平田地	No.25	—	—	釘	鉄	48/22	20/18	17/7	13.2/1.7	断面正方形、両 釘	—
204	58	14	3030	1064	3-1	平田地	No.27	—	—	釘	鉄	34/35	17/17	15/14	7.6/6.7	断面正方形、両 釘	—
204	58	15	3032	1065	3-1	平田地	No.53	—	—	釘	鉄	47	17	15	10.7	断面正方形、両 釘	—
204	58	16	3033	1066	3-1	平田地	No.56	—	—	釘	鉄	20/26/ 34	12/10/ 21	11/10/ 18	2.4/2.5/ 7.6	断面正方形、両 釘	—
204	58	17	3034	1068	3-1	平田地	No.63	—	—	釘	鉄	39	14	10	5.1	断面正方形、両 釘	—
204	58	18	3024	1087	3-1	平田地 301 表 説	—	—	—	釘	鉄	26	16	12	5.0	断面正方形、両 釘	—
204	58	19	3025	1088	3-1	平田地 301 耕 作土	—	—	—	釘	鉄	36	16	15	5.0	断面正方形、両 釘	—
204	58	20	3021	1092	3-1	平田地 302 II V15-14	—	—	—	釘	鉄	24/14	12/8	12/7	3.6/0.6	断面正方形、両 釘	—
204	58	21	3035	1071	3-1	—	No.78	—	—	釘	鉄	35	12	11	3.8	断面正方形、両 釘	—
204	58	22	3036	1072	3-1	—	No.82	—	—	釘	鉄	22	15	12	2.5	断面正方形、両 釘	—
204	58	23	3037	1073	3-1	—	No.90	—	—	釘	鉄	27	13	12	3.2	断面正方形、両 釘	—
204	58	24	3038	1077	3-1	—	No.114	—	—	釘	鉄	40	16	16	10.6	断面正方形、両 釘	—
204	58	25	3039	1078	3-1	—	No.119	—	—	釘	鉄	25	11	12	3.3	断面正方形、両 釘	—
204	58	26	3041	1080	3-1	—	No.147	—	—	釘	鉄	35	22	18	11.2	断面正方形、両 釘	—
204	58	27	3022	1036	3-1	II V-20 303T	—	—	—	釘	鉄	25/39	14/14	14/13	4.9/8.3	断面正方形、両 釘	—
204	58	28	3005	1005	1-1	SK125	No.3	—	—	刀子	鉄	110	33	11	52.6	—	—
204	58	29	3004	1090	3-1	平田地 301	—	—	—	刀子	鉄	30/15	20/15	12/8	7.8/1.6	—	—
204	58	30	3006	1054	3-1	平田地 301 II W23-6	—	—	—	刀子・釘	鉄	68/28	35/14	13/9	20.9/3.4	—	—
204	58	31	3003	1069	3-1	—	No.69	—	—	刀子	鉄	30/24/ 10	18/11/ 9	17/7/7	7.9/1.7/ 0.6	—	—
204	58	32	3042	1008	1-1	SK125	No.6	—	—	引手金具	鉄	80/33	17/14	10/16	10.6/3.9	—	—
204	58	33	3043	1037	3-1	303T	No.1	—	—	不明形状 品	鉄	37	28	18	14.6	—	—
204	58	34	3044	20	1-2	平田地7	No.197	—	—	鏃	青銅	150	11	1	9.9	—	—
204	58	35	3045	16	1-2	平田地 6 SK14	—	—	—	鏃 棒首 (半 七分)	青銅	61	11	10	7.1/0.6/ 0.1	棒首部の凸	—
205	58	1	3048	3	1-2	SK01	No.3	—	—	鍔首	青銅	24	24	1	2.9	「太平記」(北 室 976 年)	—
205	58	2	3047	2	1-2	SK01	No.2	—	—	鍔首	青銅	24	25	1	2.7	「咸平元記」(北 室 998 年)	—
205	58	3	3054	9	1-2	SK01	No.9	—	—	鍔首	青銅	25	25	1	3.5	「今史記」(北 室 1038 年)	—
205	58	4	3046	1	1-2	SK01	No.1	—	—	鍔首	青銅	25	25	1	4.1	「皇宋記」(北 室 1038 年)	—
205	58	5	3050	5	1-2	SK01	No.5	—	—	鍔首	青銅	24	25	1	3.6	「元祐記」(北 室 1085)	—
205	58	6	3053	8	1-2	SK01	No.8	—	—	鍔首	青銅	25	25	1	2.5	「寛和記」(北 室 1111)	—
205	58	7	3049	4	1-2	SK01	No.4	—	—	鍔首	青銅	25	25	1	2.4	「永樂記」(明 1408)	—
205	58	8	3052	7	1-2	SK01	No.7	—	—	鍔首	青銅	25	25	1	2.7	「咸平元記」	—
205	58	9	3051	6	1-2	SK01	No.6	—	—	鍔首	青銅	26	26	1	3.6	—	—

別表 神之峯城跡

図版 番号	PL 番号	図載 番号	管理 番号	発掘 遺物 台帳 番号	地区	出土遺構（遺構 外の場合はク ラッド）	注記層位（全国 物品もしくは袋 に記載した名 称）	図載遺構（記載 がない場合は出 土遺構に同じ）	図載層位（記載 がない場合は注 記層位に同じ）	器種	材質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重量 (g)	備考（初出年）	応急 処埋
205	58	10	3056	11	1-2	SK37	図No.2	—	—	瓦片	青銅	25	25	1	2.2	「永楽通寶」（明 1408）	—
205	58	11	3057	12	1-2	SK37	図No.3	—	—	瓦片	青銅	24	24	3	2.8	「開元通寶」（唐 621）	—
205	58	12	3055	10	1-2	SK37	図No.1	—	—	瓦片	青銅	24	24	2	4.6	瓦片形状が片割 開元通寶	○
205	58	13	3062	1026	2-1	SK201	No.1	—	—	瓦片	青銅	23	23	1	2.3	—	—
205	58	14	3063	1027	2-1	SK201	No.2	—	—	瓦片	青銅	24	24	1	2.4	治平元寶（北 家1064）	—
205	58	15	3058	13	1-2	平田地6	—	—	—	瓦片	青銅	25	25	1	3.1	「寛永通寶」（寛 文8年以降）	—
205	58	16	3065	1052	3-1	平田地301Ⅱ W12-7	—	—	—	瓦片	青銅	28	27	1	3.2	「寛永通寶」（寛 文8年以降）	—
205	58	17	3064	1042	3-1	平田地301Ⅲ B05 視標作土 (309F)	—	—	—	瓦片	青銅	24	24	1	2.2	「寛永通寶」（寛 文8年以降）	—
205	58	18	3061	1025	1-1	平田地21（北 家御座土内）	No.2	—	—	瓦片	青銅	23	23	1	2.5	「寛永通寶」（寛 文8年以降）	—
205	58	19	3060	1024	1-1	扇溝（磁刀）	No.1	—	—	瓦片	青銅	24	24	1	2.6	「寛永通寶」か	—

写真図版



鬼釜遺跡 遠景 (北西から)



鬼釜遺跡 遠景 (北から)



調査前風景 (南西から)



SD08 完掘 (北西から)



SD08 遺物出土状況 (北西から)



SB08 炉 (北西から)



SB14 完掘 (南から)



SB14 土器敷付 遺物出土状況 (北から)



SB14 土器敷付 遺物出土状況 (北から)



SB14 土器敷付 遺物出土状況 (南東から)



SB14 土器敷付 遺物出土状況 (北から)



SB14 土器敷付 掘方 (写真上が南東)



SB14 埋戻 (西から)



SB14 埋甕2(20) セクション (北から)



SB16 完掘 (南から)



SB16 埋甕 (33) セクション (南西から)



SK175 完掘 (北から)



SK175 セクション (北西から)



SK175 坑底ビットセクション (東から)



SK186 完掘 (北から)



SK187 完掘 (北から)



SK192 遺物 (G6) 出土状況 (東から)



SK192 完相 (北から)



SM01 IV層出土鏡状垂飾 (1) 出土状況 (東から)



IV1層遺物包含層 (西) 遺物出土状況 (北から)



IV1層遺物包含層 (東) 遺物出土状況 (北から)



SB13 全景 (西から)



SB13 炉体土器 (227) 出土状況 (写真上が南東)



SB13 炉体土器 (227) セクション (南西から)



SM01 (鬼釜古墳) 全景 (写真上が北西)



SM01 調査前風景 (北東から)



SM01 周溝全景 (南から)



SM01 周溝セクション (K-K) (南から)



SM01 周溝セクション (K-M) (南西から)



SM01 周溝遺物 (第30図) 出土状況 (東から)



SM01 周溝遺物 (第30図) 出土状況 (西から)



SM01 周溝遺物 (第29図) 出土状況 (南から)



SM01 周溝遺物 (第29図) 出土状況 (東から)



SM01 周溝遺物 (第30図) 出土状況 (北西から)



SK174・186・187 実掘 (北から)



SK174 実掘 (北から)



SK174 セクション (北から)



SK174 馬具出土状況 (北から)



SK174 馬具 (1・2・3) 出土状況 (北から)



SM01 基本土層 (東から)



SM01 トレンチセクション (南から)



SM01 トレンチセクション (南東から)



SM01 トレンチ内 高環 (286) 出土状況 (南西から)



SM01 石室の石 (鬼壘)・礫出土状況 (北東から)



SM01 馬具 (2) 出土状況 (西から)



SM01 鉄片 (6) 出土状況 (南から)



SM01 耳環 (33) 出土状況 (北から)



SM01 管玉 (4) 出土状況 (北西から)



SM01 管玉 (6) 出土状況 (南西から)



SM01 鉄製品 (10・23) 出土状況 (西から)



SM03 セクション (東から)



SM01-04 完掘 (西から)



SM04 石室の石 (奥壁) 出土状況 (南から)



SB01 完掘 (南から)



SB02 完掘 (西から)



SB02 炭化物・炭化材出土状況 (北から)



SB02 カマド完掘 (北西から)



SB03 完掘 (南西から)



SB05 完掘 (西から)



SB09 完掘 (北から)



SB10 完掘 (西から)



SB04 セクション (南から)



SB04 完掘 (東から)



SB11 完掘 (東から)



SB17 掘方 (東から)



ST01 完掘 (東から)



ST03 完掘 (東から)



ST04 完掘 (南から)



ST07 完掘 (西から)



ST08・09 完掘（東から）



ST13・15 完掘（北から）



ST14 完掘（西から）



ST17 完掘（南から）



SD01 完掘（東から）



SD02 完掘（南東から）



自然堤防～低地（5・16トレンチ）セクション（北西から）



自然堤防～低地（5・16トレンチ）セクション（南西から）

縄文時代遺構出土土器

SB08



SB14



SB14



25



27



26



23



28



22



SB14



29



30



31

SB16



33

SK192

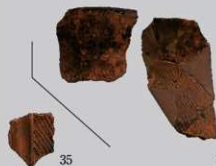


36



37

SK185



35

34

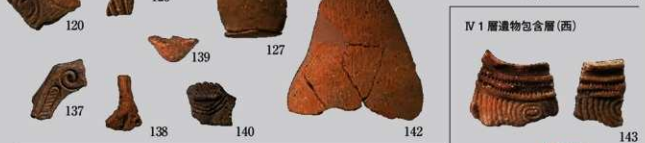
遺構外V層



IV 1層遺物包含層(東)



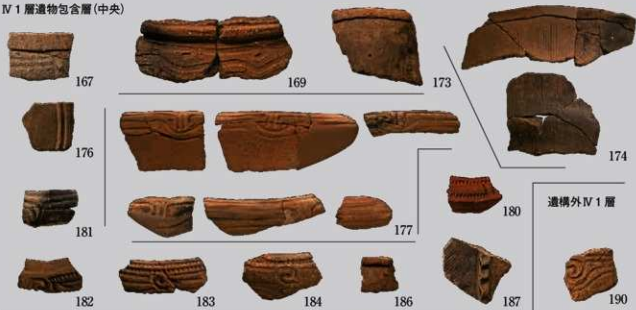
IV 1 層遺物包含層(東)



IV 1 層遺物包含層(中央)



IV 1 層遺物包含層(中央)



遺構外IV 1層



遺構外III 1層



遺構外I層



トレンチ出土縄文土器



1-①区



弥生時代遺構出土土器

SB13



SK96



古墳時代遺構出土土器

SK174



SM01 周溝



SM01 周溝



234



237



235



240



239



238



241



242



243



246



248



249



251



252



250



254

SM01 周溝



255



256

259

261

262

SM01 遺物包含層・近代以降盛土出土
土器・陶磁器

Ⅲ1層(16層(上))



265



266



管理番号 419



270



271



272



273

Ⅱ層



274



275



276



279



286



管理番号 384



管理番号 385



管理番号 386



管理番号 387



管理番号 388



管理番号 390



管理番号 391

Ⅲ2層(16層(下))



石器
石鏃

石錐



石匙

IV1層遺物包含層(東)

IVE24V層

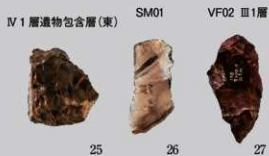
VF08 IV1層



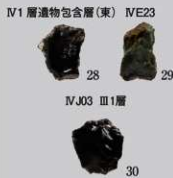
搔器



削器



楔形石器



剥片



打製石斧

SB08



32

IV1 層遺物包含層(東)



33

IV1 層遺物包含層(東)



34

IV1 層遺物包含層(東)



35

IV1 層遺物包含層(東)



39

IV23 IV1 層



41

VF06 III 1 層



42

IV1 層遺物包含層(西)



44

IV1 層遺物包含層(中央)



46

IV1 層遺物包含層(東)



47

IV1 層遺物包含層(東)



49

SD01



50

横刃形石器

SB08



52

SB08



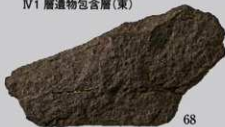
55

IV1層遺物包含層(西)



64

IV1層遺物包含層(東)



68

IV1層遺物包含層(東)



78

SK192



54

SB08



60

IV1層遺物包含層(東)



67

IV1層遺物包含層(中央)



70

挟入打製石包丁

SM01



81

SM01(SX01)



83

IVC20V層



84

刃器

SK192

IV1 層遺物包含層(西)

IV1 層遺物包含層(西)



85



87



88

磨製石斧

SB08

IV1 層遺物包含層(東)

IV1 層遺物包含層(東)



89



90



91



92



94

IV1 層遺物包含層(東)

IV107 IV1 層

IV1 層遺物包含層(東)



95



96



97

剥片

SB08



98

SB14



99

剥片



磨石



凹石



敲石



IV1 層遺物包含層(西)



石製品
篋狀垂飾



石製品

勾玉

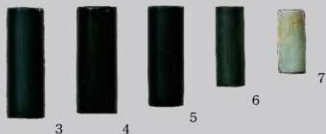
SM01



2

管玉

SM01



3

4

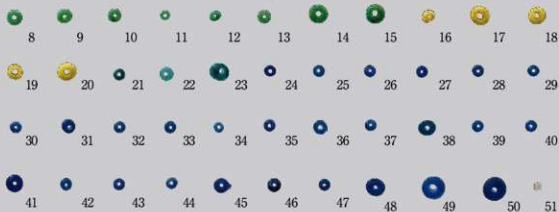
5

6

7

ガラス小玉

SM01



8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

26

27

28

29

30

31

32

33

34

35

36

37

38

39

40

41

42

43

44

45

46

47

48

49

50

51

滑石製白玉



52

金属製品

鉄製品

雲珠

SK174

X線透過撮影写真（土に埋まった状態）



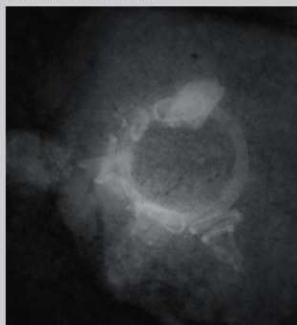
1-1



1-2



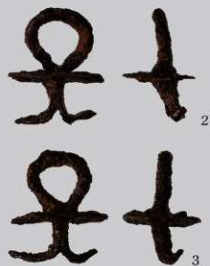
1-3



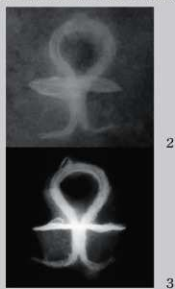
1-1

靱金具

SK174



X線透過撮影写真(土に埋まった状態)



面繫金具他

SM01



鉄鏃

SM01



鉄製品

SM01



刀子

SM01



青銅製品

耳環

SM01



錢貨

SM01



煙管(キセル)

I層



36



風張道跡 遠景（北西から）



2-4区 遠景（北西から）



2・3区 調査前風景（西から）



1区 トレンチ 全景（北西から）



SB01 完掘（南西から）



SB01 礫出土状況（南西から）



ST01 全景（写真上が北東）



SK128 (ST01) 炭化物出土状況 (南東から)



SK128 (ST01) 完掘 (南東から)



SK127 完掘 (東から)



ST02 完掘 (北東から)



ST04 完掘 (北西から)



ST05 完掘 (南東から)



SF07 (ST05) 確出土状況 (東から)



ST06 完掘 (南西から)



ST07 完掘 (南西から)



ST08 完掘 (南西から)



ST08 P6 土器 (10) 出土状況 (北西から)



ST08 P6 セクション (北西から)



ST10・11, SD10 完掘 (南東から)



ST12, SD21 完掘 (南東から)



ST13 完掘 (南東から)



SK177・265 完掘 (西から)



SK28 完掘 (南東から)



SK28 壁面 (拡大) (南東から)



SK180・187 完掘 (南西から)



SK183 完掘 (北西から)



SK184 完掘 (北西から)



SD05 完掘 (北東から)



SK46・49-53・56, SD02・06・11 完掘 (南東から)



SD22・23 完掘 (南西から)



SK388 屈曲部, SK388完堀 (北から)



SK388・392完堀 (南西から)



SK392 板材・木杭出土状況 (北西から)



SK392 板材・木杭出土状況 (北東から)



SK392 セクション (南東から)



SK388 木杭打設の痕跡 (北西から)



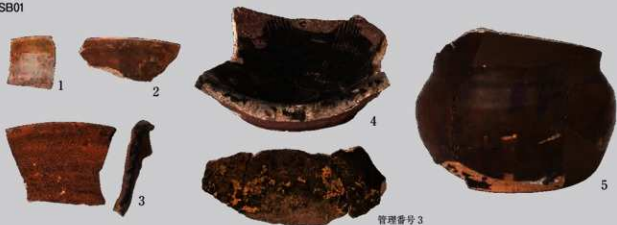
6トレンチ 北東壁セクション (南西から)



8トレンチ 北東壁セクション (西から)

中世以降遺構出土土器・陶磁器

SB01



ST01

ST05

ST11

ST12

ST1004



SK03

SK71

SK90



SK95

SK109

SK128

SK180

SK1020

SK1028



SD01

SD05

SD06

SD12



SD17

SD19

SD22



SD23



遺構外 2区



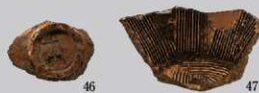
3区



4区



近世土器・陶磁器



石器
石鏃

SD03

1

打製石斧

SD05



2

5トレンチ



3

6トレンチ



4

礫石器

3区



5

金属製品
青銅製品
煙管(キセル) SK1020



1

錢貨

3区



2

3区排土



3

3区表探



4

4区表探



5

土製品
土玉

SD22



1

木製品

SK388



1



2

SK392



3



4



5



6



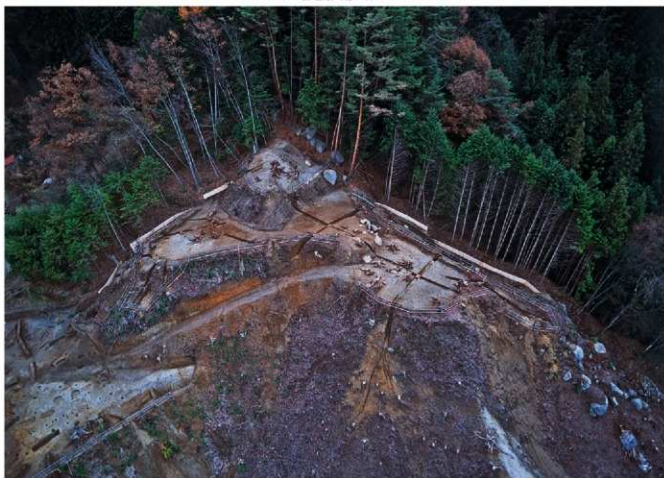
8



7



1区 全景（北から）



1-2区 全景（北から）



1-2区 中近世遺構全景（北から）



1-2区 調査前風景（北から）



1-2区 中世遺構全景 (写真上が南)



ST02 全景 (北から)



ST02 全景 (北から)



ST02 炭化物出土状況 (南から)



ST02 S2 (P6) 掘方 (西から)



ST02 ビット掘方たち割り (北西から)



ST02 ビット掘方完掘 (北から)



SK01 完掘 (南から)



SK01 セクション (南から)



SK01 人骨出土状況 (東から)



SK01 鉄貨出土状況 (南東から)



SK112 礫出土状況 (北から)



SK113 礫出土状況 (西から)



SK114 掘出土状況（南東から）



SD04・07 完掘（南から）



SD05 完掘（北から）



SD10 完掘（西から）



SD08・09 完掘（北から）



SD11 欄戸大窓の皿(2) 出土状況（東から）



SD08・11 セクション（第153図 C-C）（東から）



SF01 横出状況（西から）



M1層下層 トレンチセクション (50トレンチ) (南西から)



M1層下層 トレンチセクション (13・51トレンチ) (北西から)



1-2区 平地地6 近世遺構全景 (南から)



1-1区 平地地27 近世遺構全景 (南から)



ST01 完観 (南西から)



ST05 完観 (南西から)



SK05 完観 (南西から)



SK12 完観 (南西から)



SK12 礎出土状況 (南東から)



SK15 完掘 (北東から)



SD03 完掘 (北西から)



SH02 石積み (北東から)



SD06 完掘 (北西から)



平田地13 遺物 (58) 出土状況 (東から)



SA01 完掘 (北東から)



SH01 礎出土状況 (北から)



2区 SD201 遠景 (北西から)



SD201 調査前風景 (南西から)



SD201 調査前風景 (北から)



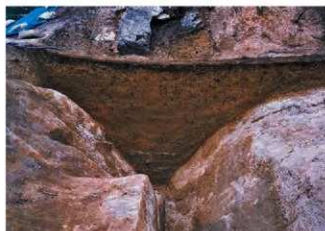
SD201 屈曲部全景 (南から)



SD201 東側全景 (北から)



SD201 セクション (第170図 A-A) (南西から)



SD201 セクション (第172図 C-C) (南東から)



SD201 セクション (第170図 B-B) (南西から)



SD201 セクション (第170図 B-B') (南西から)



SD201 セクション (213トレンチ) (東から)



SD201 セクション (第174図 G-G') (東から)



SD201 セクション (第174図 G-G) (南東から)



SD201 セクション (202トレンチ南東壁) (北から)



SI201 土台セクション (北西から)



SI201 露出土状況 (西から)



SI201 掘方セクション (北西から)



SI201 掘方 (南から)



SK201 炭化物分布状況 (北から)



SK201 完掘 (南東から)



SK201 露出土状況 (北西から)



SI201・SK201・SI201 セクション (2012トレンチ南東壁) (北東から)



3区 調査前風景（北西から）



3区 中近世遺構全景（北から）



「新薬寺」墓定地 調査前風景（北から）



SK351 完相（北から）



SK351 遺物出土状況（東から）



SK351 焼土・炭化物状況（北から）



SK351 遺物出土状況（北から）



SK540 完相（南から）



SK540 ビット・溝状の落込み検出状況（北から）



SK540 掘出土状況（南から）



SK544 礎出土状況（北東から）



SK581 完掘（北から）



SK581 セクション（東から）



SK002 礎出土状況（東から）



SK001 遺物・礎出土状況（東から）



ST301 完掘（西から）



ST302 完掘（南から）



ST303 完掘（南から）



ST304 完掘 (南から)



ST305 完掘 (南から)



ST305 P5 礎板石の設置状況 (南から)



ST306 完掘 (南から)



ST307 完掘 (東から)



ST310 完掘 (東から)



ST310 P5 礎板石の設置状況 (東から)



ST314 完掘 (南から)



SK500 完掘 (北東から)



3区 谷状地形全景 (北西から)



3区 谷状地形 (303トレンチ) セクション (北東から)



3区 谷状地形 (303トレンチ) セクション (南東から)



3区 谷状地形 (308トレンチ) セクション (北西から)



3区 谷状地形 (308トレンチ) セクション (南西から)



3区 谷状地形 (311トレンチ) セクション (北東から)



3区 谷状地形 (311トレンチ) セクション (北西から)

1区 中世遺構・中世堆積層 出土土器・陶磁器

SK87

SD11

平坦地7

VII層

VI層



1



2



管理番号204



3



4



6



8



10



9



11



12



13



13



15



18



19



14



15



16



17

V層



20



21



21



22



22



23



25



26



27



28



29



29



30



31



32



33



34



管理番号25



35



36

管理番号45

V-VI層



41



42



41



37



40



43



44



46

平坦地7

平坦地1



49

1区 近世遺構・近世堆積層 出土土器・陶磁器

SK08



50

SK119



51



52



管理番号 84



53

ST06



管理番号 80



管理番号 86



管理番号 89

SK125



管理番号 88



55



54

SD06(平坦地 13)

SD02



57



58

SK192



56

平坦地 7

Ⅲ層上面



59

Ⅲ層



60

Ⅲ層 (1調査面)



63



65



67

平坦地 4



72

Ⅲ層下



68

I 2層



70



66

管理番号 30

平坦地 13



71

6 トレンチ

2層



73

3層



74



75

11 トレンチ

2層



76

17 トレンチ



77



78

21 トレンチ



79

2区 出土 近世土器・陶磁器

SD201 埋土上層



82

平坦地 206



83

23 トレンチ 5層



80

51 トレンチ 4層



81

3区 中世遺構 出土土器・陶磁器

SK351



SH301



SH302



3区 中世堆積層 出土土器・陶磁器



3区 近世遺構・近世堆積層 出土土器・陶磁器



3区 近世堆積層 出土土器・陶磁器

II 2層 SD11



II 1層



II層



I層



土製品
瓦加工円板

平坦地 206



石製品
硯

平坦地 7



砥石

SK119



SF10 平坦地 7



平坦地 301



308 トレンチ



51 トレンチ



3-1区Ⅲ層



3-1区Ⅱ層



1-1区



こも礪石

SK118



SK119



石器
石鏃

平坦地 301



打製石斧

3-1区



金属製品
鉄製品
釘

SK307



SK351



平坦地 7

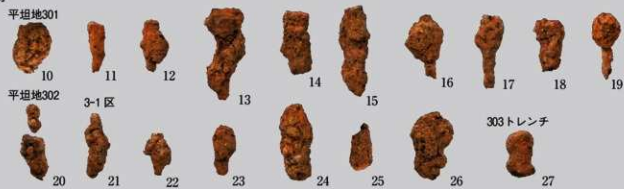


平坦地 301

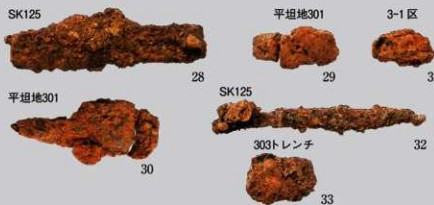


鉄製品

釘



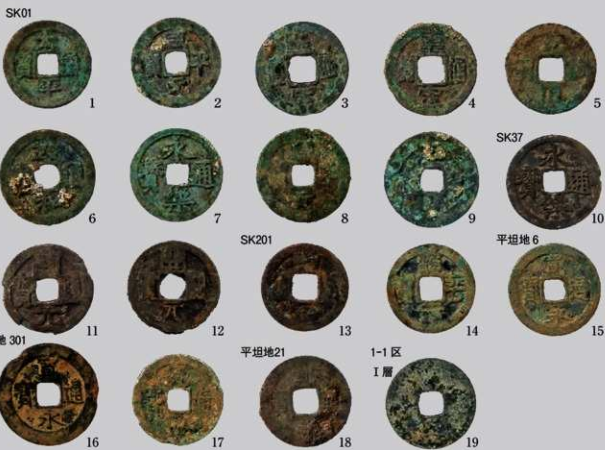
刀子



青銅製品



銭貨



報告書抄録

ふりがな	おにがまいせき かざはりいせき かのみねじょうせき							
書名	鬼釜遺跡 風張遺跡 神之峯城跡							
副書名	一般国道474号飯倉高道路埋蔵文化財発掘調査報告書 6-飯田市内6-							
シリーズ名	長野県埋蔵文化センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	102							
著作者名	河西克造 永澤敦子 茂原信生							
編集機関	(一財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター							
所在地	〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田9963-4 TEL:026-293-5926 FAX:026-293-8157							
発行年月日	2016年3月28日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
鬼釜遺跡	長野県飯田市 上久堅	20205	465	35°46'42" (世界測地) 35°46'09" (日本測地)	137°88'08" (世界測地) 137°88'39" (日本測地)	2009.9.10～ 2010.1.15 2011.4.23～ 12.19	35,300㎡	国道474号飯倉高道路 建設に伴う記録保存 調査
風張遺跡	長野県飯田市 上久堅	20205	466	35°46'22" (世界測地) 35°45'89" (日本測地)	137°87'93" (世界測地) 137°88'23" (日本測地)	2011.9.27～ 12.19 2012.4.10～ 8.17	15,300㎡	国道474号飯倉高道路 建設に伴う記録保存 調査
神之峯城跡	長野県飯田市 上久堅	20205	上久25	35°46'17" (世界測地) 35°45'85" (日本測地)	137°87'18" (世界測地) 137°87'48" (日本測地)	2012.8.17～ 12.20 2013.3.4～ 12.16	29,243㎡	国道474号飯倉高道路 建設に伴う記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
鬼釜遺跡	集落跡	縄文時代 弥生時代 古墳時代 平安時代 平安時代 以降 中世 近世	縄文時代(竪穴建物跡3軒、土坑23基)、弥生時代(竪穴建物跡1軒)、古墳時代(古墳1基、「馬の埋葬土坑」1基)、平安時代(竪穴建物跡5軒)、平安時代以降(竪穴建物跡2軒、掘立柱建物跡2棟)、中世(竪穴建物跡2棟)、近世(溝跡)		縄文土器、弥生土器、土師器、陶磁器(青磁・白磁・中世陶器)、鉄製品(馬具・鉄鏃・刀子)、青銅製品(耳環、指輪、銭貨)、石器、ガラス製品(ガラス玉)		遺跡内から古墳(鬼釜古墳)を発見。鬼釜古墳は6世紀前半に初葬。6世紀末～7世紀初頭に追葬。周溝内から検出された馬の埋葬土坑から、雲珠と靱金具が出土。	
風張遺跡	集落	中世以降 近世	掘立柱建物跡1軒、掘立柱建物跡15棟、溝跡23基		陶磁器(中世陶磁器、近世陶磁器)、土玉、銭貨(寛永通宝)、木製品(木杵・木杭)		緩やかに傾斜する尾根を造成して掘立柱建物跡等の遺構を構築。	
神之峯城跡	城跡	中世 中世以降 近世 近世以降	中世(礎石建物跡1棟、焼土跡1基、土坑1基、溝跡)、中世以降(土坑1基、掘立柱建物跡、土坑)、近世(掘立柱建物跡、土坑、櫓列、溝跡)		陶磁器(中世陶磁器、近世陶磁器)、銭貨(咸平元寶・皇宋通寶・元祐通寶・政和通寶・永樂通寶・寛永通宝)、石製品(礎・礎石)、鉄製品(釘・刀子)		中世は、谷状地形を埋めて平地を形成し、礎石建物跡等を構築。近世には掘立柱建物跡を中心とした屋敷地が展開。	
要約	<p>本書で報告した3遺跡は、伊那谷の天竜川左岸(竜東)にある山間地に所在する。神之峯城跡は天竜川支流の玉川左岸の独立丘陵、風張遺跡はその北東側の畑田川を挟んだ対岸の尾根、鬼釜遺跡は風張遺跡の北側に広がる段丘に立地する。</p> <p>鬼釜遺跡は傾斜・河岸段丘に集落が展開。縄文時代では、土器を複数埋設したかや、多系統の縄文中期後半の土器、横刃形石器など、付近の北田遺跡を補充する貴重な成果を得られた。また、位置が不確定であった「鬼釜古墳」を発見。墳丘は遺存しなかったが、周溝内等の出土遺物から、6世紀前半に初葬。6世紀末～7世紀初頭の追葬といった変遷がわかった。周溝内からは馬具(雲珠・靱金具)を含む「馬の埋葬土坑」が発見され、6世紀前半に竜東に馬匹文化が拡大したことがわかった。</p> <p>神之峯城跡は天竜川左岸を治めた国人領主である知久氏の本城であり、今回、城が立地する独立丘陵の中腹を調査した結果、15世紀～16世紀の礎石建物跡が検出され、建物の構造等から寺院(堂宇)と推測した。</p> <p>風張遺跡では、掘立柱建物跡で構成された中世以降の屋敷地が発見された。出土陶磁器の器種はすり鉢が多いことから、日常的な居住空間と理解できる。鬼釜遺跡では中世の掘立柱建物跡が検出されており、風張遺跡との関連も考えられる。</p>							

平成 28 (2016) 年 3 月 28 日 発行

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 102

鬼釜遺跡 風張遺跡 神之峯城跡

一般国道 474 号飯喬道路
埋蔵文化財発掘調査報告書 6

— 飯田市内その 6 —

発行者 国土交通省中部地方整備局
(一財)長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
〒 388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田 963-4
Tel : 026-293-5926 Fax : 026-293-8157
E-Mail info@naganomaibun.or.jp

印刷者 鬼灯書籍株式会社
〒 381-0012 長野県長野市柳原 2133-5
Tel : 026-244-0235 Fax : 026-244-0210